
願いの空へ

久住祐治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いの空へ

【Nコード】

N1252S

【作者名】

久住祐治

【あらすじ】

何の因果かIS学園に入ることになった主人公（男）。ただ、その入学のためには女装する必要があった。しかも、おえつらえ向きに女子にしか見えない容貌だった少年は、自分の性を隠してIS学園に入学することに。さてさて、どうなることやら。

この作品には男の娘成分、のほんさん成分が多分に含まれています。

また、原作キャラのオリ主ハーレムもありますので、そう言ったものが嫌いな方はお戻りくださいませ。

ISって作品名に入ってるじゃん。ということで、小説タイトルから「IS」を取り除きました。今後ともよろしく！
注：不定期更新です。

現在オリジナル展開中&かなりグロい、または不気味なシーンが多く入っております。苦手な方はご注意ください。

オリジナル設定集 ネタバレありに付き、未読の方注意（前書き）

ということ、とりあえず機体とオリジナル用語だけ出しておきます。

書けるくらい話が進んだら、キャラも追加していくつもりです。
ちなみに、まだ中盤かどうかすら怪しいです。

11 / 4 追記

オリジナル設定集 ネットバレありに付き、未読の方注意

梟 《ふくろう》

東が作成した、名目上は第三世代型IS。補助用AI『イヴ』を搭載している。

コアに呼ばれた香織に共鳴し、エラーを出しながらも起動する。そのエラーのせいで絶対防御が消失、エネルギーバリアも脆弱なものになっていたが、福音に落とされてからようやく香織との共鳴率とも呼べるものが一定水準に達し、内部の構造を書き換えたことで香織専用のISとしてようやく一次移行する。

香織との絆は深く、一次移行の時にはコア内部の電子空間に香織とイヴを招きいれるほどに繋がっている。

武装一覧

《夜雀》 《よじゃく》

中距離戦用射撃型武装。マシンガンタイプ、装弾数五〇発、射程距離は約五〇〇メートル、それ以上では集弾性が著しく低下する。取り回しやすくなるように小型化されていて、単発、三点射撃、フルオートの三つの機能が備わっている。

特筆すべき特徴は無いが、癖が無く扱いやすい武装である。

武装特性は不明。

《夜鷹》 《よたか》

近距離戦用刀剣型武装。二メートル程度の黒い刀身を持ち、鍔の部分に羽の模様をあしらっている。

一次移行したことで双刀となり、攻撃範囲が広がった。

武装特性は《ナイトホーク》、ステルス機になぞらえて命名された。

効果は、使用者のISと使用者自身の全てを見えなくする。ただし、日光に晒されていると若干違和感が生まれることがある。この透過処理はレーザー類にも適用されるため、完全なステルス状態となる。

《啄木鳥》 《きつつき》

超近距離戦用突杭型兵装。俗に言うパイルバンカーである。シャルロットの『グレースケール』に近い構造だが、一撃の爆發力はこちらの方が遥かに高い。しかし、その分恐ろしく当てにくくなっているトリッキーな装備。

武装特性は不明。

《夜羽》 《よばね》

防御・遊撃用翼型装甲兵装。

一次移行したことで耐物理装甲の羽が二枚で一对、耐エネルギー装甲の羽が二枚で一对、計四枚に進化した。

ただし、物理はエネルギーに、エネルギーは物理に対して耐性がなくなっているため、咄嗟の判断が勝負を分けることもある。

展開すると背中にXの字を描くように出現する。上部の二枚が物理、下部の二枚がエネルギーである。

また、下部の二枚の耐エネルギー装甲翼の先端はビットになっており、一つの羽につき五枚、系一〇枚のビットが使用できる。《ナイトホーク》のステルス能力は分離したビットにも適用される。

ワンオフ・アビリティードエイク

単一技能《とりのさえずり》

梟のワンオフ。

夜羽の装甲をすべて擦り合わせることで鳥の声のように聞こえる周波数の音を発生させ、あらゆるエネルギーをその場で消滅させる。出力を上げれば理論上は運動エネルギーや、ISを動かすのに必要なエネルギーすら消滅させられるほどになるが、現在はBTエネ

ルギーを消滅させることが限界。無理をすれば他のエネルギー類も消滅させられるが、あまり持続はしない。

イヴ

束が梟に組み込んだ補助用AI。

公私に渡って香織をサポートし、まるで人間のように話す。

香織のことは娘や息子のように思ってもいて、度々無茶を繰り返すためにそろそろ自重してくれないんだろうかとも思っていたりいなかったり。

ちなみに人格は女性である。念のため。

真打・鉄 《しんうち・くろがね》

束が創った月のコロニー『アルカディア・？』^{ワシ}で初めて作られた第三世代型IS。

束が簪のために用意した資材、データをふんだんに使用して、簪がその努力の成果として作り上げたものである。

ちなみにそのつくっていた時の簪曰く「なんていうか……、頭の中、凄くなっていた」らしい。

超高機動型でありながら頑丈な第二世代を遙かに凌駕する装甲とエネルギーを持っている。簪がそのときの完成によって作り上げたため、ところどころに簪独特の癖のようなものが入っている。そのせいで、簪以外はまともに扱うことすら難しい。

武装一覧

《朱鉄》 《あかがね》

近距離戦用刀剣型兵装。

大きな一枚の板のような形の剣で、展開時点で恐ろしい熱量を持ち、鉄板程度ならば容易に融解するほどだが、その熱量は時間の経過と共に更に肥大化して行く。

武装特性は《紅蓮朱鉄》グレン・アカガネ。

膨大な熱量を物質化させ、熱を発する巨大な刀身へと変化させていく。時間をおいて一度しか使えないものの、直撃すれば普通のISは一瞬でシールドエネルギーが尽きるほどの威力を誇る。

《蒼鉄》 《あおがね》

近・中距離戦用銃剣型兵装。

銀色の刀身の峰の部分に、青い銃身を横たわらせたような形を持つ。

銃部分からはBTエネルギーの銃弾を発射することが出来るほか、チャージすることで刃にBTエネルギーを纏わせ、エネルギーと物質の同時攻撃を行える。

武装特性は不明。

ブレイブ・ティアーズ

セシリアの『ブルー・ティアーズ』が二次移行した機体。

スペックが全体的に向上しているほか、セシリア自身が偏光制御^{フレキン}射撃を会得し、武装も大幅に増加している。

父が死の間際に設計したISであり、その発展系だけあってセシリアとの相性は非常に良い。

武装一覧

《ブルー・ティアーズ》

中・遠距離専用遠隔操作射撃型兵装。

『ブルー・ティアーズ』であつた頃から使用されていたものだが、その数は二次移行に伴つて三倍の一二基、ミサイルビットも同じく三倍の六基となっている。

その名に込められた意味は、「涙を流す者たちの、その思いを背負う力となること。悲しみも、苦しみも、全てを打ち払う雫となること」。

武装特性は《そのなみだを^{Blow off Tears}はらいましょう》。

八基のBTビットで立方四角形状にケージを作り、その中に残された四基のビットとともにBTエネルギーを一斉掃射、飽和状態となつたそれを爆発させて追い討ちを掛ける。

ミストラル・リヴァイヴ

シャルロットへ、父アルフォンスと義母クラリス、そしてデュノア社が総力を挙げて作り上げた、『デュノア最後のIS』。直訳すると『暴風の再誕』となる。

デュノア社初の第三世代機であり、その第三世代型兵装のデータ処理のためにその膨大な拡張領域の半分を使用しているが、それでも残りの半分で最低三〇個の武装が格納できる。

カラーはオレンジと白のツートン、待機状態は右手小指の指輪。

武装一覧

《デュノア・オルグイユ》

『デュノアの誇り』と名づけられたその武装は、ミストラル・リヴァイヴの左腕部、メカアーム状になっている。

手のひらで相手を拘束し、強引に相手のシールドエネルギー回路にバイパス、デュノア・オルグイユの専用エネルギータンクにエネルギーを流入させた後、タンクが満タンになつたらそれを一気に攻

性エネルギーへと変換し、ゼロ距離からのエネルギー砲撃を行う。
このときのエネルギーは特殊なものとなっており、相手のシールドバリアをある程度中和できる。

チヘイラワル 《空海断絶》

篠ノ之箒の持つ『紅椿』が搭載している《空裂》^{からわれ}の武装特性。
一度刃を鞘に収め、それからエネルギーを充填して居合いの要領で一気に抜き放つことで、数百メートル先までを一気に切り裂く。
その威力は尋常ではなく、アリーナの壁とシールドバリアが一瞬で破壊されたほど。

武装特性

ISの武装を操縦者が完全に理解することで発現させることができるもの。

ワンオフの武装版とも呼べる。

現在は香織と簪、セシリアと箒が使用可能。

オリジナル設定集 ネットバレありに付き、未読の方注意（後書き）

以上です。

プロローグ（前書き）

ちて、やるぞー

ブローグ

「がっがっがっ……」

「ええっと……、美味しいですか？」

目の前で盛大に僕の作った料理を平らげていく女性に、恐る恐るそう聞いてみる。カチューシャにくっついていているウサギ耳が、ひよこひよこと揺れてとても可愛い。

しかしなぜ「がっがっ」を口で言いながら食べているんだろう。と言うかよくそれで食べられるね。

「うん、グッドだよ最良だよ！ いやあー、お腹ぺこぺこでぶっ倒れたときはどうしようかと思ったけど、君のおかげで助かった！ 君、結構面白いしね」

「は、はあ……」

妙にハイテンションだなあ。

「おっと、自己紹介がまだだった。私は篠ノ之束^{しののの たはね}って言うの。君は？」

「篠ノ之束って、あのIS開発者の！？」

アイエス

インフイニット

ストラトス

IS、正式名称をInfinite・Stratos。元々は宇宙空間での活動を想定して研究、開発されたマルチフォーム・スー

ツだが、宇宙開発が遅々として進まなかったことと、一〇年前に起こったとある事件がきっかけで、ISは飛行ユニット、兵器として注目を浴びる形になった。

従来の戦闘機、戦車、あらゆる兵器が鉄屑へと変わるほど圧倒的な戦闘力。しかし、それを求めて再度戦争を起こそうとするほど国

の頭は愚かではなく、ISはスポーツとして、そして有事の際の即戦力として求められることになった。

尤も、開発者である篠ノ之博士が四六七個のISコアを作成したのを最後に一切の製造を止め、そのコア製造技術も公開していないのだから、全てのコアを日本が所有していた当初に戦争を仕掛けようとする国もなかっただけの話だけど。

しかし、このISには重大すぎる欠陥があった。それは、女性しか起動できないこと。

もちろん、ISの性能とその事実を知った各国は、我先にと女性を優遇し、有能なIS操縦者を引き込もうとした。その結果、たった一〇年でこの世界は女尊男卑へと早変わりしてしまったのだ。

確かに、ISを使える女性が優位に立つというのはまだ分からないでもない。けれど、ISへの適性もなく、何を為したわけでもない女性が我が物顔で威張っているのを見るのは、なんと言うか、哀れだった。

「そ。その束ちゃんだよ！　らぶりい束ちゃんと覚えてくれたまえ！」

「いや、普通に束さんと呼ばせていただきます」

「む、ノリが悪いなあ……。まあいいや、ご飯ご馳走様。美味しかったよ」

「あ、いえいえ」

で、なぜこの束さんが我が家でご飯を食べているのかと言うと、まあ要するに、我が家の前で行き倒れていたのだ。

学校から帰ってきてみれば、僅かに身じろぎするだけのウサ耳が玄関前に突っ伏していると言う珍事態に、思わず僕の頭はショート寸前まで駆け抜けた。もちろんきちんと戻ってきたが。

「うーん、じゃあお礼として……、私の秘密の隠れ家パート二三五

四号に招待してあげよう！」

「隠れ家って……、ああ、そういえば東さんって政府から探し人指定されてるんですね」

「まー、私を見つけるのは無理だろうけどねー」

僕は簡単に見つけましたけどね。というか、なんとなくこの人と話すのは楽しいかもしれない。

「って、やばいバイトが！」

「ん、君、バイトしてるの？」

「色々事情がありまして、まあ」

時計を見ると、六時半。がつつり遅刻だ。店長は優しいから笑って許してくれるんだろうけど、僕自身がそういうのだめなんだよなあ……。一応連絡だけいれておこう。というか今日は休ませてもらう、なんか疲れた。

「ちょっと待っててもらえますか？ バイト先からお休みもらってきます」

「了解了解。あ、お茶飲んでていいかな？」

「あはは……、ご自由にどうぞ」

なんだかもう、この人自由人だな……。

それから一時間後、僕と束さんは揃って山道を歩いていた。
……何故こうなった。あ、隠れ家とやらに行くのか。

「着いたよー。ここが私の隠れ家パート二三四号」

「随分と隠れ家が多いことには突っ込まなくていいですか？」

「別にいいよ？」

さいですか。

「ささ、中に入ってー」

言われるがまま、僕は束さんに背中を押される形でボロッボロの
山小屋の中へと押し込められる。腰まで伸びた僕の髪を引っ張らな
いように気を使ってくれてるのが、ちよつと嬉しかった。

あ、この髪はお姉ちゃんが切るのもつたいないって言うて切らせ
てくれないんだよね。長いと邪魔なんだけど、もう慣れちゃったな。

「それで、ここが？」

「違う違う、もーっと下だよ。それと、束ちゃんって呼んでね！」

「え、いや」

「ねー！」

「……はい」

奇妙すぎる気迫によって押し切られた僕は、渋々頷いてから束さ
ん、じゃなかった、束ちゃんの先導で暗闇を歩いていく。

ギシギシと音を立てていた床は、いつの間にか金属質な音を返す
ようになっっていく。……あれ、小屋がこんなに長いわけないよね！？

「ちよ、ちよつと束ちゃん！？　ここ何処なんですか！？」

「だから言っただじゃん、隠れ家だって」

「なぜ語尾が弾んでるんですか！ この小屋の構造自体謎なんですけどー！」

「天才に不可能はないんだよ！ ってことで、此处だよここ」

よく分らないまままたもや押し切られ、束ちゃんの後について金属質な扉を潜る。

僕が足を踏み入れた途端、真っ暗だった部屋の中に光が灯され、そこにあるモノが露になる。

「これ、って……！？」

「んっふっふー、これぞ、私が暇つぶしで開発中のISだよ！ 名前はまだないけど、なかなか面白いチューンなんだよねー。残念ながら公表してないせいで、だーれも候補者がいないからこの子も飛べないんだ」

束さんの声が、とても遠くに聞こえる。

気づけば、僕はふらふらとそのISへと歩み寄っていた。

両肩に取り付けられた、折り重なった無数の装甲。脚部は細く、まるで鳥の足のよう。両の手は鋭く、それでいて温かみのある滑らかな曲線を描いて形作っている。

「……飛びたいの？」

触れず、問う。

答えるわけがないと知っていて？ 否。

答えてくれると、思ったから。

操縦者のいない空の座席に、思わず手を伸ばし、

じゃあ、飛ばうよ。

「……ッ!？」

キンッ、と僕の頭の中に金属質な甲高い音が鳴り響く。ただ高いだけではない。祝福の音色とも取れる、温かなそれはきっと、この子の産声だった。

ISの名称は未登録。特性などまだ見抜くことすら出来ない。ただひたすら黒いデータの塊が僕の中に流れ込んでくる。その中の一つ一つに、混ざっているのだ。この子の『飛びたい』という思いが、知りえるはずのないものが、スキンバリアー皮膜装甲展開、完了。
フォーマント初期化、完了。

次々と、僕の中に バススロット拡張領域、確認。
流れ込んでくる ハイパーセンサー最適化、完了。

「わああ……!」

「こ、これって……!」

気づけば、僕はそこに立っていた。

人の背丈を優に越したその場所、ISを身に纏い、僕は立っていた。

手足は動く。三六〇度、あらゆる角度を見通せる。部屋中の埃の数だって数えられるくらいだ。

でも。そう、でも、だ。

なぜ、自分がISを動かせるのだ。男の自分が、何故？

そう考えて、僕は反射的に自分の体を抱くようにして身震いする。正確にはISごとだが。

男でISを動かせる。それは、きっと世界にとって未曾有の事態だ。女尊男卑をたった十年で推し進めたこの世界は、歪みに歪んでいる。

普通の検査だけならまだいいのかもしれない。だけど、それ以上

のことをされないとは限らない。仮に誘拐でもされてみる、人体実験のいい材料じゃないか。

一瞬でそこまで考えてしまい、思わず顔を青ざめさせる。

「おーうい、大丈夫？」

「っは……！？ あ、はい……」

「とりあえず降りてきて！。ちょっとばかしお話があるからさー！」

その声に引つ張られ、笑う膝で何とか床に下りる。

そこにいた束ちゃんは、それはもう楽しそうな顔で笑っていらっしやって、

「とりあえず、IS学園いっところか！」

久しぶりに、人をぶん殴りたい衝動に駆られた。

「あれ？ ISが動いたよ？」事件から一夜明け、僕の家には織^{あり}斑^{むら}千冬^{ちふゆ}さんと束ちゃんの二人が集まっていた。

織斑さんはなんとというか、バリキヤリ？ 古いかな、とりあえずすごい綺麗な人だった。

さすがに一晚経てば僕も心が落ち着いていて、割とまともに応対できた。

「おっはー、香織ちゃん！」

「な、なんで僕の名前を！？　っていうかちゃん付け！？」

「このらぶりい束ちゃんの手に掛ければ、プライバシーなんてあつてないようなものなんだよ？」

「ええー……」

「おい束、少しは紹介したらどうだ？　向こうも困っているだろうが」

てへっ、とか言い出しそうな顔の束ちゃんに、呆れ顔の織斑さんが突っ込む。仲がいいのかな。

にしても、織斑さんってどこかで聞いた名前なんだけど……。

「仕方ないな……。私は織斑千冬、IS学園で教師をしている」

「あ、ああー！　お姉ちゃんが言ってた人！」

「姉がいるのか？」

「あ、はい！　一之瀬葵いちのせ あおいって言うんですけど」

僕の姉である一之瀬葵は、現在IS学園に通う高校一年生。と言っても、今年で二年生だけど。

そっか、前にちよつと零してたのってこの人のことだったんだ……。確かにカッコいいし、綺麗な人だよね。

「ああ、一之瀬か。なるほど、妹がいたのか」

「……へ？」

いや、あの？

「そっだよなー、可愛いよね！　ちーちゃんもそう思うよね？」

「それは置いておいて、私が呼ばれた理由が全く分からないんだが。」

丁度休日だったからと言って出てきたが、まさか用もなく呼び出したわけじゃないだろう?」

今妹って言った? いや、そりゃ僕は顔がよく女っぽいって言われるけどさ……、そんなに見えるのかな?

「じゃ、まずは誤解から解いておこっか。この子、男の子だよ?」

「……何?」

「で、この子がIS起動させましたって言ったら、どうする?」

「……なんだと?」

あ、あれ、いつの間にかお二方とも真面目モードに!?! どうしよう、付いていけないよ!

織斑さんは僕を睨むような目つきで見てるし、束ちゃんはやにやとこつちを見ている。なんだかすごく、気分が悪い。

「それは本当なのか?」

「うん。目の前で起動させたんだから間違いないよ。それで、この子の意見も聞いてこれからどうするか考えようと思って、ちーちゃんのこと呼んだんだ」

「なるほどな……。まさかお前が別の人間とまともに話すところを見るとは思わなかった。まさか他人に気を使うと言っ高等技術を身に付けているなんてな?」

「ふふん、行き倒れてた私を助けてくれた恩人なんだよ? これぐらいやるって」

うふふあははしてないで、ちょっと助けてくれませんかでしょうか。

「あ、あのー……」

「っと、すまないな。それで、間違いなく君は男なんだな?」

「はい、間違いなく男です。男ですよ？」

「あ、ああ、わかった。さっきはすまなかった。しかし、君はどうするつもりだ？」

「どうする、と聞かれても……。」

「ISが起動できる男なんて、いい実験体だ。まして今の世の中、男の地位はとも低いんだから何されたっておかしくない。それに、私には後ろ盾もないのだから。」

「そのことを伝えると、織斑さんは難しい顔で考え込む。」

「そうか……。実はな、他にも男で起動できた者がいるんだが」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ。私の弟だ」

「それで、弟さんはどうすると?」

「強制的にIS学園行きだよ。尤も、あそこではいかなる公的権力も介入できず、国とのしがらみの一切が断ち切られるから、安全と言えば安全なんだがな」

それを聞いて、思わず考え込んでしまう。確かに、IS学園なら身を守るし都合のいいこともいろいろある。だけど、ただだよ? 三年後には研究者たちが手ぐすね引いて待ってるんだ。それを避けるためにはどうすれば……。

「行ってみるか? IS学園に」

「え?」

「私個人としては行ってもらいたいんだがな。もちろん、モルモットになれと言うわけじゃない。そこでISの扱いを学べば、立場を手に入れることだって出来るようになる。一線を退いた私が言えることじゃあないがな」

なんというか、先生だった。

カッコいいけど怖い先生って、お姉ちゃんは言っていたけど。この人は、すごい人なんだと身を持って知らしめられた感じがした。いや、具体的に言い表せと言われると困っちゃうけど、なんとなくそう感じたから。

「でも、香織ちゃんとしては男だつてばれるのは嫌なんでしょう？」

「そりゃ嫌ですよ！ お姉ちゃんにも、迷惑かかるし……」

「なら、女装していけばいいじゃん！」

その一言が、僕の人生を根本的に変えることになるなんて、そのときは思いもしなかったんだ。

普通気づくんだけどね？ うん。

プロローグ（後書き）

うん、今日のことを思ってほしい。

四月一日、エイプリルフルなんだ。すまない。

どうしてこんな遅くに投稿したのかっていうと、朝から考えて、カラオケに行っている間も考えていたからなんだ。このサプライズを。ただ、僕個人としては香織ちゃん（誤字にあらず）の行く末を生暖かく見守ってあげてほしいと思う。恐ろしいほどの不定期更新になると思っけど、一人でも続き見たいと言う人がいたら続けていこうと思う。

誰もいなかったら、これはこのまま放置して、現在更新中のものが一つ終わったら連載しようと思う。

何が言いたいかって言うと、ISで誰もやっていないことをやりたかっただけなんだ。

誰かISの男の娘もの書いてる人がいたら、僕のリサーチ不足だ。すまない。

第1話 今日から

「ここが、今日から通う学校かぁ……」

目の前にあるでかい校舎を見上げて、思わず溜め息を吐きそうになる。

結局来てしまった。IS学園に。

あの後、千冬さん（プライベートではこう呼んでいいと言われたので）のコネを使って戸籍をちよつと変更して、実技試験と筆記試験を受けさせてもらった。

実技の時には学校所有のIS『打鉄^{うちがね}』を使わせてもらって、何とか教官に勝てた。こっちの動きは凄いい拙かったけど、人並み以上には動かせるみたいでお褒めの言葉もいただいていた。

筆記は結構簡単だったかな。こう見えても勉強はきちんとしているし、お姉ちゃんの話に追いつくためにISの勉強も少ししていたから。

「うう、周り女の人だらけだよ……」

別に苦手ってわけじゃないし、ちよつとやさつとじゃ動じないのも自負できるんだけど……、こうも多いと威圧感があるからね。

僕、いや、私はその中を歩いていくと、昇降口で靴を履き替えて教室へ向かう。確か一組だったかな。

そうそう、千冬さんの弟さんも一組らしいから、まだマシだろうと言っていた。マシ、だといいなぁ……。

「そう言えば、口調も変えないといけないんだよね……。はぁ……。ガンバだ、私」

一人称から変えていかないと、絶対どこかではるが出るからね。出たらまずいんだけど。

まあでも、頭切り替えていこう。

ちなみに今の服装は普通に女子の制服。栗色の伸ばした髪とこの顔のせいではつちり女性として認識されているみたいです。声だつて男とは思えないほどだし。

でも、ここで強くなればお姉ちゃんに負担を掛けることもない。がんばらなきゃ。

「えっと、席は此処かな」

場所は窓際一番後ろ。日当たり良好、しかもほとんどの人の視界から外れている。名前順じゃなくて適当なのかな。

S H R開始まではまだ少しあるから、今のうちにクラスメイトの顔を覚えられるだけ覚えて、無理か。やっぱり喋らないと無理だね。例の弟さんはまだ来てないみたい。あとうちのクラスにいるのでチェックしておくべきは、セシリア・オルコットさんかな。イギリスの代表候補生。事前に調べた限り、懐に入りさえすれば落とすのはたやすいかな。問題はそこまでどうやって入るかだけ……。

「……さん、一之瀬^{いちのせ}香織^{かおり}さん！」

「あ、は、はい?!」

うわあ……、思いつきり裏返っちゃったよ……。変に思われてないかな？

それとなく周りを見渡してみたけど、うん、大丈夫そうだ。

「えっと、次一之瀬さんの番なんですけど、自己紹介、してもらえるかな？ 最初『あ』から始まって、『い』の一之瀬さんは三番目だから」

「あ、はい、すみせんつ。えっと、一之瀬香織です。特に無いんですけど、一年間仲良く出来たらなと思ってます。よろしく、お願いします！」

がばつ、と頭を下げる。パラパラと拍手があつて、無事次の人にバトンが回った。

頭を上げて椅子に座った私に向けられているのは、好意と観察の視線。少なくとも悪感情は入っていないようで安心した。

にしても、考えに没頭していたせいでSHR始まったのに気づかなかつた……。開始早々躓いちゃったよ……。

ちなみに、香織と付けられたのは、両親が私を産んだときに娘の方の名前しか考えてなくて、息子の名前がなかったからこれでいいかと付けられた名前。まあ、両親からもらったものだから大事にしているんだけど。

なんて考えていると、今度は例の弟さん、織斑一夏いちかの番だった。まあ、千冬さんに頭叩かれてたけど。

「どうなっちゃうんだろうなあ、私」

小さく呟いた言葉は、結局誰にも答えられることなんてあるわけなくて。

私の前途多難な女装生活は、こうして幕を開けるのであった。

時間は過ぎて、二時間目の休み時間。教室内ではちょっとしたゴタゴタが起きていた。

なんでも、教官を倒したとか倒してないとかの話らしい。それって、あれだよな？ 入学試験の。私が受けたのはちよつと特例だったけど、それでも勝てたよ？ ちよつとしんどかったけど。

けど、セシリアさんは確か専用機持ちだよな？ ただ起動できただけの人が相手するには無茶だと思っただけだな。

まあ、そのときは丁度チャームが鳴ったから大きなイザコザにはならなかったんだけど……、どうやらその後の方が大変だったみたいです。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

千冬さんが壇上に立つて言う。少しでも情報があれば、それだけで戦闘は変わってくる。相対したときにISで手に入る情報だけではとてもじゃないが十分とはいえない。実弾兵器なら反動リコイルやら射程距離やら、その全ての情報を有効に活用できれば確実とは言えずとも何%も回避確立は上がり、武器自体を破壊することも可能になってくる。エネルギー兵器だってそれは同じことだ。

だからこそ、こう言った授業はワクワクして仕方ない。学校でも世界史の授業とかは楽しかったな。先生が面白かったのもあるけど。ちなみに、朝のSHRで千冬さんが出てきたとき、私は思わず耳を塞いでしまった。それぐらい盛大に黄色い声が上がったのだ。

……早くも『私』に慣れている自分がいるから嫌になるなあ。気をつけないと戻れなくなるかも。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

思い出したように千冬さんが言って、ちらりと悟られぬようにこちらと弟さん、一夏君を見た。タメだから一夏でいつか。

代表者、クラス代表ってことだよな？　ってことは、まずはそれがクラス内最強ってことなのかな。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を図るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

うんうん、やっぱり思った通りだ。クラス対抗戦が何度かあるのかは分からないけど、それでも出てみたいな……。

きつと皆強いんだろうな。……ここに来た以上、一番を目指したい。越えたい壁はまだ無いけど、壁が出来たときにもっと強くなりたいと思うようになりたい。

いや、この状況がある意味壁なんだろうけどね。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

おおう、一夏が凄い推薦されてるよ？

……なんだか、セシリアさんの顔が凄いことになってるんだけど。大丈夫かな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

突然立ち上がってまさかといった様子で言う一夏。そもそもこの

クラスに織斑は君と千冬さんしかないんじゃないかな。

そんな私の心の呟きをスルーして（当たり前か）千冬さんが進行する。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待つ」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも」

「……私が立候補しても、良いでしょうか」

織斑姉弟（きりしま）の話の間をぶった切るが如く、私の声が響く。少し作っ
てはいるけど、ほぼ地声だ。それで女性の声と遜色ないのは自慢し
ていいのやら判断に困る。

ピタリと止まったクラス内。そしてその中の空気。あれ、私やつ
ちまった感じですか？

「ふむ。織斑と一之瀬、他にいないか？」

「待つてください！　わたくしも立候補致しますわ！　一之瀬さん
ならばまだしも、男がクラス代表になるだなんて恥さらしもいい所
ですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈
辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……あれ、私完全に女として見られてるね。喜びたくないぞ。

それはともかく、セシリアさんは完全にスイッチ入ったみたいで
す。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍し
いからと言つ理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこ

のような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございせんわ!」

うわあ、凄いなセシリアさん。千冬さんって隠れブラコンみたいなものなのにな。

東ちゃんに教えてもらったけど、相当凄いらしいね。それを目の前にしてこれか。ちょっと背筋ゾクツとしたな。

「いいですか!? クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれはわたくしですわ!」

む、なんだかちよつとカチンときたな。そりゃ、私も一夏もISは初心者だけど、それなりにやっていこうと頑張っているのに。それを無碍に扱うのはいただけない。いや、一夏は知らないけどさ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……!?!」

一夏が言った途端、セシリアさんは言葉を失った様に声を詰まらせ、小刻みに震える。

そして、その直後。

「あつ、あつ、あなたねえ! 私の祖国を侮辱しますの!?!」

甚だ心外だとばかりに声を荒げ、そう喚き立てる。なんだか、心の奥のほうで冷える感じがした。

「決闘ですわ！」

盛大な音を立てて机を叩き、セシリアさんは一夏へ人差し指を向けて言い放つ。あの、私は何処にいるんでしょうかね。まあ、いいか。

正直ちよつと、私も腹立ったから。

「セシリアさん、ご高説のところ申し訳ありませんが……、少し日本人を舐めきっていらっしゃるようですね」

「……なんですって？」

ちよつと挑発気味に、そして事実イラツとしている自分の気持ちを含めて言ってみたら、物の見事に引つかかってくれる。グッド。

敵意剥き出し、といった感じでこちらに視線を投げ飛ばしてくるセシリアさんを直視して、私も負けぬように視線をぶつけながら口を開いた。

「確かに、日本は島国です。外の方から見れば田舎にもほどがあるでしょう。ですが、あなたが祖国を侮辱されて怒るのと同じように、私にも日本への愛着があるのです。今の宣言、私にも有効と見てよろしいですか？」

「そ、それは……」

言い淀むセシリアさん。だけど、プライドの高い人は煽ればすぐに食いついてくる。

「専用機持ちが量産型二人を相手に艇子摺るのですね。それでは、とても代表候補生などとは名乗れませんね」

「なっ……！？ い、いいでしょう、二対一で相手をして差し上げますわ！」

かかった。女性口調で挑発するのはやったことなかったけど、成功したみたいだ。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と一之瀬、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

千冬さんが手を打ち鳴らし、それで話は終わりになった。さて、啖呵切っちゃったけどどうしようかな。頑張るしかないよね。

皆が授業に集中し始めたのを見て、私も教科書を開いて授業に専念することにした。

放課後。寮へと向かった私は、そこではたと気づく。

「部屋、何処？」

そう。私は部屋を聞いていないのだ。例外的に後から入試を行ったせいで、寮の編成が分からない。くっ、どうすればいいのか……。

「あ、一之瀬さん」

突然名を呼ばれ、思わず振り向く。そこには、きぐるみチックな

ダバダボの服を着た少女が立っていた。

えっと、うん、思い出せない。クラスで見た顔だってことは覚えてるけど。

「えっと、お名前は何でしたでしょうか？」

「相部屋の布のほとけ仏本音だよ、よろしくねー」

「一之瀬香織です。って、もう知っているんですけどよね。よろしくお願いします」

うん、やっぱり個室なんてもらえませんでした。仕方ない、ばれないように生活するしかないか……。常時ブラ着用だな。偽パイモか。

しかし、なんともほんわかした人だなあ……。のほほんさん？
今頭の中にポンツと浮かんただけだ。

「部屋を忘れてしまったのですが、何号室でしたか？」

「一〇三〇室だよ。はい、合鍵。失くすと織斑先生に大目玉食らうらしいから気をつけてねえ？」

「それは大変ですね。気をつけないと」

「うんうん。じゃあ、お部屋に行こうよ」

そのまま布仏さんに連れられて、コツコツと廊下を進んでいく。
すれ違うのは女子、女子、女子。女子だけだ。中学校がとても懐かしいよ……。

廊下の途中の一〇三〇室の鍵を開けた布仏さんと一緒に、部屋の中へ。

中はホテルの一室のように綺麗で、というかこれはまんまホテルじゃないですか。いいなあ、ベッドもふかふかみたいだし。

「ねえねえかおりん。かおりんは奥と手前どっちのベッドがいい？」

「かお、りん？」

「あ、あだ名駄目だったかなあ？」

「あ、ううん、ありがとう。かおりんでいいですよ。それと、私はどちらでも大丈夫ですけど」

若干違和感を感じないでもないんだけど、目をうるうるさせる布仏さんを見たら言い出せるわけないです。

「じゃあ、私は手前のベッドにするね」

言うが早いか、ベッドにダイブする布仏さん。もしかして、戻ってきてすぐにベッドに入れるから手前にしたのかな。

「でも、凄いなかおりんは」

「何がですか？」

「クラス長決めるときの啖呵、カッコよかったよー」

「あ、ありがとうございます……」

ほめてくれるのは嬉しいんだけど、今思い出したら結構凄いこと言ってるよね。ド素人の打鉄二機である『ブルー・ティアーズ』を破らなきゃいけないってのは凄い難題だと思う。せめてどっちかが専用機だったらよかったんだけど。

……そう言えば。あの子はどうしたんだろう。明日にでも千冬さんに聞いておいてもらおうかな。

第1話 今日から（後書き）

はい、香織ちゃんの偽装学園記、始まり始まり。
皆様どうぞ、生暖かい目で見守ってやってくださいましな。

第2話 鬼神降臨！？（前書き）

ストックだけでも投下しておこう。

第2話 鬼神降臨！？

「ふわぁ……、んくっ、朝か……」

ガラス戸から差し込む朝日に起こされる形で目を覚ました僕は、寝返りを打って時計を確認する。

皆おはよう、一之瀬香織です。

時刻はまだ五時半。学生の行動時間範囲としてはかなり早い時間だろう。緊張して眠れなかったせいもあるのかもしれない。目覚ましのスイッチを押して鳴らないようにすると、布仏さんのベッドを見る。

「んにゅ〜……すぴー……」

「気持ちよさそうに寝てるなあ……」

見ていると癒されそうな寝顔を一瞥して、それから……うん、シヤワーを浴びよう。

あがったら着替えて、よし。朝の行動プランはとりあえず決定かな。

そうと決まれば、早速制服を持って脱衣室へ。知っての通り僕は男だし、大浴場には入れない。だから、一夏のことがかうらやましかったりする。だって、入らない言い訳を考えなくてもいいじゃないか。

一夏は世界初の男性IS操縦者だ。そしてあの初代にして今尚最強のIS操縦者、織斑千冬さんの弟でもある。立場的にも能力的にも好待遇なのは間違いないだろう。

対して僕は一般人。それも割りと貧乏人だ。これと言って特技もなく、立場もない。むしろ束ちゃんを知り合いつてことで、危ないことに巻き込まれるかもしれない。同じ男性IS操縦者でも、後ろ

盾の厚さでは一夏の方が上なんだから。

それに、僕のせいでお姉ちゃんに迷惑をかけたくない。今だって迷惑をかけてるんだから。……近いうちに、会って話さなきゃなあ。

「……うん、ネガティブおしまい！」

自分に言い聞かせるように、もしくは吐き出すようにして僕はシャワー室へと入った。

熱いお湯がパシャパシャと体の上を跳ねる。憎らしいほどにすりとした自分の体の上で。美しいレベルで肌が白いし、確かに自分も気に入っではいる。だけど、まさかこんなことになるとは思ってもよらなかった。

あの時ISを起動できたことを秘密にしてしまえばよかったと、そうは思わない。あのISは、鳴いていたから。

飛びたいと。空を飛ばせてほしいと、ずっと叫んでいたから。僕はそれに応えてあげたいんだ。

今の願いは、あの子と一緒に空を飛んで、家族を全ての災いから守れるくらい強くなること。だから、僕はここにいる。

じつと目を閉じて考えを纏めた僕は、軽く寝汗を流してシャワーを止め、体を拭いてからきっちりパッドを当ててその上からISスーツを着る。もちろんパンツは男物だけど、最悪女物を買に行かなきゃいけないかも知れないというのが辛い所だ。

まあ、これなら着替えのとき下着姿になることもないし、大丈夫だからね。……あれ、ISスーツならブラしなくてもいいんじゃないかな。でも、パッドはそんなに大きくないし、急に変わったら変か。それに、束ちゃんの所で試しに使ったときにも違和感なかったからいいや。なんだか思考が投げやりになってきてるなあ。

制服をその上にきちんと着て、準備完了。今日もがんばれ、『私』。

「あ、おはよ〜かおりん。シャワー浴びてたんだ」

脱衣室から出ると、黄色いダボダボのフード付きパジャマを着た布仏さんがベッドに腰掛けていた。寝ても覚めても微笑ましいお姿で私とつても癒されます。

「初めての場所だと緊張してしまって。寝汗を流していたんです。起こしてしまいましたか？」

「んーん、大丈夫だよ。ゴロゴロするのは好きだけど、起きるのは早いんだ〜」

それは羨ましい。夜更かしすればした分だけ起きるのが遅くなる私にもそれを少し分けてくれないだろうか。無理ですよね。

ともかく、だ。私は一週間後の決闘に望まなければならなくなつた。怒らせちゃったよね、セシリアさん。

あの時は私もあ言っちゃったけど、セシリアさんだってああ言えるほど厳しい道を歩いてきたはずだ。そのことは、決闘が終わつたらちゃんと謝ろう。

「私も着替えちゃおうかなー」

言つて、もぞもぞと服を脱ぎだす布仏さん。私は女子の着替えをまじまじ見つめる趣味はないので、自分のベッドに退散する。一応私男ですから。

あー、新聞とか読みたいな。

着替えが終わった布仏さんと、図らずも一緒に時計を見上げる。まだ六時だった。

「そろそろ食堂開くかな？」

「早い人はもう食べる人もいるでしょうけど……。お腹空きました」

か？」

「うっん、もう少しご飯は後の方が良いよね」

「早く食べれば良いというものでもありませんからね。テレビでもあればいいんですけど」

生憎と、この部屋にはテレビは取り付けられていなかった。というか、全ての部屋にテレビは取り付けられていないだろう。ポータブルタイプのもを持ち込んでいる人がいないとは限らないけれど、昨日は大浴場に行かない言い訳が「疲れているからシャワーで済ませる」で済んだけど、これからどうしよう。まあ、何とか考えとかなきゃ。

「授業開始が八時二〇分だから、のんびりできるよー」

「え、ええ、まああのんびりはできるんですけどね」

なんというか、修学旅行でホテルに泊まったときの、騒ぎづらい感覚。朝早くに起きるとがやがやしづらい、周囲に遠慮してしまうあれを思い出してしまふ。隣の部屋の連中は徹夜してカードとかボードゲームやってたけど。

ちなみに、私は普通に女子の部屋に引つ張り込まれたりしてました。いや、いじめとかじゃなくてほんとに良くしてくれるんだよ？その方向が「香織ちゃんって可愛いよねー」だったりするんだけどね。あ、クラスメイトからの呼ばれ方は苗字か（主に男子）名前のちゃん付け（主に女子）のどちらかだった。

まさか私がIS学園に入っているなんて知るわけないだろうけど、女子の皆は嫌な納得の仕方しそうだな……。

「でも、来週どうするの？ 相手は代表候補生だよ？」

「あはは……。つい言ってしまったので、今から頑張るしかありません。頑張るしか……」

頑張るしか、ないのだ。

這ってでも上に上がる。強くなるなら、このぐらいの壁はどうと
いうことはない。超えてみせる。

「放課後にアリーナと練習機の申請したらどうか？　少しでも動
かせば変わるかもしれないし」

「そうですね、言ってみます」

ありがとうございます、と付け足して軽く会釈。布仏さんは「い
えいえー」と片手を振り返してくれた。

ん、ちよつと気分転換してこようかな。

「ちよつと外を歩いてきますね。四〇分ごろには戻ります」

「はい」

鍵をポケットに入れて外に出る。廊下はひんやりとしていて、ま
だ人の気配はほとんどなかった。

テクテクと歩いてロビーに着くと、一人スーツ姿でコーヒーを飲
んでいる千冬さんがいた。意外と早起きなのかな。

「千冬さん、おはようございます」

「ああ、一之瀬か。ん、これだどごつちやになるな。今は香織でい
いか」

「あ、はい。千冬さんは何を？」

「織斑先生だ。まあ、今はいいか。朝の一服だよ、仕事前のな」

「お前も飲むか？」と言ってわざわざコーヒーを淹れてくれた千
冬さんにお礼を言つて、ミルクとガムシロップを注ぐ。コーヒーは
出来合いのものだけだね。学校では厳しいけど、意外と優しい人な

んだね。

「それで、どうだ。一日通ってみて」

「周りが女性だらけって言うのは、意外ときますね。お風呂も使えませんか」

「そうか、お前はそういう弊害もあつたな……。男だとばれていれば、近々男湯の時間が作られるからそこにいれるんだがな」

「まあ、シャワーでも事足りますし。それに、これからは全力で取り組まないと。一方的にやられるのだけは嫌ですし、セシリアさんにも失礼ですから」

言つと、千冬さんは面白そうにくつつと笑う。

「なるほどな、そういう考え方が、お前は」

「悔いは残したくありませんから。あ、束ちゃんにちょっと聞いておいてほしいことがあるんですけど、連絡取れますか？」

「束の連絡先なら、これだ。携帯はあるか？」

聞かれて、ポケットから柄のない黒い携帯を取り出す。前にお姉ちゃんが連絡用にと持たせてくれたものだ。

携帯を千冬さんに手渡すと、千冬さんは慣れた手つきで電話番号を登録する。私より操作早いんじゃないかな。私はいまだに両手でず。

「これでよし、と。あとで時間が空いたときにでも掛けてやれ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「さて、と。それじゃあ私は部屋に戻るかな。お前も授業には遅れるなよ」

「はい！」

ひらひらと片手を動かして自室へ去っていく千冬さんは、なんだからこよかったです。

「だから、怒っていないと言っている」

千冬さんと別れてちよつと外をお散歩してきた後、布仏さんと一緒に食堂に行くと、そんな声が聞こえてきた。

私が持っているトレーに載っているのは、和の心を体现したような『THE・日本食』と呼べるもの。白米、味噌汁、お漬物に焼き鮭。いいよね、こういうの。

布仏さんはパンとスープだけだ。お腹空かないのかな……。

「だから第」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……………」

見てみれば、一夏と篠ノ之さんが言い争っていた。いや、アレは言い争っているって言うより篠ノ之さんが距離感を掴めてないだけなのかな。

んー、よし。

「織斑君、お隣いいですか？」

「へ？」

「うお、すごいねかおりん。速攻だ」

いえ、そういうわけじゃないんですけどね。ただ色々話さないとならんこともあるわけでした。主に来週のこととか来週のこととか来週のこととか。

「ああ、別にいいけど」

「ありがとうございます。布仏さんも」

「うん。って、二人ともよく食べるんだ……」

のほほんさん、今更ですね。ん、心の中ではのほほんさんと呼ぼう。……うん、そうしよう。

「俺は夜少なめ取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「バランスの取れた食生活は大切ですよ？」

「いや、わかってんだけどさ。なんか力がでないっつーか」

んー、夜はそんなにカロリーを消費しないのかな。確かに、朝沢山食えると脳もきちんと動くようになるとか聞いたことがあるけど……。私は三食きちんととってもこの体型です。

「織斑君、名前を呼び捨てにしてもいいですか？ せっかく同じクラスなのに、苗字で呼ぶのはアレですから」

「んー、それもそうだな。いいぜ別に。じゃあ、俺も名前で呼んだ方がいいのか？」

「どちらでも構いませんけど、姉がいるので名前の方が分かりやすいかもしれませんね。香織と言います」

「おう、わかった。香織だな」

「はい。よろしくお願いします、一夏」

よし、コンタクト成功！ ま、一々戦闘のときにさん付けで呼んでたらアレだし、先に確定させとかないと。一応タッグなんだし。なんて思っていると、突然のほんさんが私の袖を引いてきた。

「むー、織斑君だけずるい！ かおりんかおりん、私は？」

「え、えっとー……、ひいつー！？」

な、なな、なんか凄まじく殺気の籠った視線が……！？

はっ、篠ノ之さん！？ 篠ノ之さんが割り箸を指の力だけでへし折らんとしていらっしやる！？ 違っよ、私はあなたの恋路を邪魔するようなことは、傍目から見ればこれしてるじゃんどうしよう関係が悪化させてしまうっう！？

「ねーねーかおりんってば」

「おい、どうしたんだ香織？」

両サイドからちゅんちゅんと私を突つつくのほんさんと一夏。しかし一夏、気づいて。君の後ろに鬼神が降臨なさっておられます。

「わかりました、布仏さんはあとで何か考えますから。一夏、後で決闘の時の作戦を考えたいのでお時間をいただけますか！？」

「わかったー」

「おう、いいぞ」

はあ……。何とかなった……。篠ノ之さん、怖いよう……。

結局、その朝食を私はろくに食べられなかった。後で篠ノ之さんともお話しておかないと死ぬるかもしれせん、私。

それから時間は経って一時間目の休み時間。よし、頑張れ私。

「あ、あの、篠ノ之さん。ちょっといいですか？」

「ん、ああ。何だ？」

うわあ、この時点で怖い。いや、ただ無愛想なだけなんだろうけど……。

「朝食のときのことなんですけど……。もしかして、一夏が好きだからか」

「っ！？ な、なにを馬鹿なことをっ」

言った途端、顔を真っ赤にして反論してくる篠ノ之さん。ああ、ビンゴです。

「安心してください、そのことを本人に言っつもりはありませんし、私が彼を好きになることもありません。ですから、この一週間だけは彼と会話をしてはこちらに殺気を向けたりとかは、やめていただきたいんですけど……」

「あ、ああ、いや、それは済まなかった。私もやりたくてやったわけではなくて、だな、ついと言うか」

好きになることはないと断言すると、篠ノ之さんは目に見えて態度が軟化した。ああ、やっぱりただ嫉妬していただけなのかな。

「うん、私のことは筈でいい。君のことも呼び捨てでいいか？」

「あ、はい！ よろしく願いますね」

「ああ、よろしく頼む」

結局、ぐっと握手を交わして仲直りできた。よかった、おそらく

もうあの鬼神降臨はないだろう。ない、よね？

……あれ、作戦会議は！？

第2話 鬼神降臨！？（後書き）

うーん、早くヒロイン出したいな。いや、ヒロインはのほほんさん
なんだけど。

せっかくのハーレムだし、ね？

あ、月村待ってくださいっている方、もう少しお待ちを。口内炎が痛
くて執筆できません。ほんと口内炎創った奴氏ねばいいのに。

第3話 作戦会議

「一夏、今良いですか？」

「お、おう。作戦会議、だっけか？」

放課後、私は一夏の席に寄ると肩を叩く。もちろん、一週間後に向けての作戦会議だ。

篤さんは声を掛けたのが私だと知ると、睨みつける目をふっと緩めた。よかった……。

「んで、何をどう話し合えば……」

「……とりあえず、相手のISを知ることから始めましょうか。イギリスのサイトに飛んで、公表されているブルーティアーズの最低限のデータを持ってきました」

「ブルーティアーズ？」

「セシリアさんのISの名前です。また、彼女の武装の一つであるビット兵器の名でもあります」

「なるほど……」

コクコクと頷いてデータを眺める一夏。というか、代表候補生を相手取るんですから、このぐらいは知っておきましょうよ……。

「このビットはビーム兵装が四機、ミサイル兵装が二機の合計六機で構成されていて、直接ISと接続すればスラスターにもなる優れたものです」

「ビットか……。射撃特化なのか？」

「そうみたいです。一応申し訳程度に近接専用のブレードも積まれているみたいですが、この兵装の構成から言えば使用されることはないと考えて良いでしょう。どう懐に入り込むかが鍵になります

ね」

言いながら、ビットを拡大表示して映す。青い板のようなデザインのそれを眺めながら、私は思考の海に沈む。シミュレーションゲームなんかをやっているときには、いつもこういう状態になる癖みたいなのがあると、昔友達が言っていたっけ。

まず、戦闘の状況から整理してみよう。セシリアさんと私達二人の戦力差は歴然。二対一でも明らかにセシリアさんの方が強い。むしろ、一対多を想定されているブルーティアーズならばより有利に働くだらう。どう足掻いてもそれは覆せない。ならどうする？

こちらは二人。なら、二人でしか出来ないことをすればいい。相手がビットと本体の二人なら、こちらはタッグの二人だ。

「他に積まれているのは、《スターライトmk?》というレーザーライフルです。おそらく、ビットで攪乱してこの主力兵装で隙を突いてくる戦法でしょう。と言っても、他の戦法を警戒しておくのも忘れてはいけません」

「そうだな……。一番手っ取り早いのは、ビットを先に全部潰すことか？」

「そうですね。しかし、その場合はビットに注意を向け過ぎない方が良いでしょう。狙いを悟られれば簡単に回避されてしまいますから」「でも、ほかにはどうするんだ？ 俺達二人とも初心者だろ？」

そう、問題はそこだ。相手は代表候補生、専用機への搭乗時間は軽く三〇〇時間は越えている。そして、ISは乗れば乗るほど相性が上がっていく珍兵器だ。となれば、初めて量産型を操縦する私達は圧倒的に不利。

だけど、だからこそ戦う価値があるのだ。

「後は、どれだけIS同士で連携が組めるかですが……。一週間は

連携の練習をせずにお互いISやその他の練習に当てませんか？

素人の浅知恵で連携など考えても、うまく行きっこないですし」

「まあ、そりゃそうだよな。よし、それじゃあそうするか。よろしく頼むな、香織」

「ええ、こちらこそ。よろしく願います、一夏」

軽く微笑み、一夏と握手を交わす。一通り情報のおさらいは出来たかな。

どうやら彼は、相手のことを調べると言うことをしないらしい。なら、その辺は私の仕事ですね。

情報交換を済ませると、一夏は箒さんに連れられて教室を出て行った。向こうは向こうで特訓ですか、頑張ってくださいね、箒さん。

「さて、私はつと」

バッグ片手に教室を出ると、生徒用のISの使用申請をするために窓口へ。申請自体はいつでも出来るけど、アリーナの確保とかの事情もあつて使用許可が下りるまでにはちょっと時間が掛かる。

それでも、二回くらいは動かせるはずだからそれで慣れないと。

「すみません、って山田先生？」

「あ、一之瀬さん！ どうしたんですか？」

窓口にいたのは、書類と睨めっこしていた山田先生だった。

こんなこともしてたんですね……。

「うちがね打鉄の使用申請をしたいんですけど、良いでしょうか？」

「わかりました。じゃあこっちの用紙に必要事項を記入して提出してください。早ければ明日にでもアリーナの許可が下りると思いますから」

用紙を受け取り、ボールペンでさらさらと必要事項を記入していく。気をつけなければいけないのは、性別に関係してくる要項は偽装後の戸籍情報でいれないといけないところだけか。

数十秒で用紙を埋めると、こちらを温かな目で見ていた山田先生にそれを渡す。綺麗なアーチ状に削り整えられた爪は、きちんと磨かれて光沢を放っていた。

「はい、記入漏れはありませんね。それじゃあ許可が下りたらお知らせしますね」

「ありがとうございます。それじゃあ、私はこれで」
「気をつけて帰ってくださいね」

そう言つて見送ってくれる山田先生に小さく会釈すると、校門から出て寮へと歩いていく。と言つても、寮までは大した距離があるわけでもないからすぐについてしまうわけだけど。

いやあ、寮のロビーも相変わらず^{かしま}姦しい。女子だけだから仕方ないと言えば仕方ないけどな。

「ただいま帰りました、ってまだ帰ってないんですね」

自室に戻つても、部屋の中には誰もいなかった。のほほんさんはまだ学校かあ。

丁度いいし、走りに出ようかな。体力作りも大切なんです。で、寮の外周を体力の限り全力疾走してきた私は、ふと寮のロビーに掛かっている時計を見る。走り始めてから丁度一時間が過ぎていた。

これ以上やれば立っていられなくなるという位まで頑張ったし、今日はそろそろ終わりにしようと思いい室へ向かう。少しの間走ってなかったから、ちよつと疲れたな。

ちなみに、今はISスーツ。体操着代わりだけどすぐに乾くし汗も外に逃がしてくれるから運動するには最適なのだ。中学校ではこれよりもワンランク下の素材で作られた体操服を使ってたっけ。あれも着やすかった。

「あ、かおりんだー」

「布仏さん。いつお帰りに？」

部屋に戻ると、のほほんさんがベッドの上でゴロゴロと転がっていた。それも心底嬉しそうに。やあ、癒されるね。

「ついさっきだよ。そういえば、今朝言ったこと覚えてない？」

「ええっと、何のことですか？」

「織斑君だけ名前はずるいから、私もあだ名とかで呼んでー」

「ええー……。本音、さん？」

「さん付けなの？」

「……のほほんさんはどうでしょうか」

「あ、それならいいよー」

いいんですか。そしてのほほんさんの気迫がなんだかおかしかった。

「これで、友達度アップだねー」

「あ、はあ……」

意味が分からないけど、とりあえず頷いておこう。

昨日と色違いの緑色（昨日は黄色）の部屋着を着たのほほんさんから、平時ものほほんさんでいいとお許しが出たのはいいけど、なんでこたわるんだろうか。別に名前でもいいだろうけど。

「私はお姉ちゃんが三年生にいるから、布仏さんだとこっちゃんになっちゃうんだよー」

「ああ、そう言えばそうでしたね。では、のほほんさんと」

「うんうん、ところで今まで何してたの？」

「寮の外を走り込んでいたんです。体力作りで」

「じゃあ、シャワー浴びちゃえば？ 汗びっしょりでしょー？」

「はい、そうさせてもらいます。ご飯はどうしますか？」

「もうちよつとしたら行くつもりだよー」

わかりました、と言葉を返し、パジャマと共に脱衣所へ入る。
さて、頑張らなきゃね、今週一杯。

「もしもし、束ちゃん？」

皆が寝静まった後。『僕』はこっそり寮を抜け出して外の茂みの陰に隠れて電話をかけていた。

電話の相手は、篠ノ之束。

『あ、もしもし香織ちゃん？ やーん、連絡待ってたよ！ 番号は調べてあったんだけど、ここはそっちから掛けてくるのを待った方が風情があるなー』と思って待ってたんだよー！』

「あはは……。ところで、あの子はどうなったんですか？」

相変わらず凄いマシンガン Took だった。

『ふっふっふ、まだまだ調整どころが一杯だから、もうちょっとかかりそうだけど安心してね！ 必ず一緒に飛べるようになるよ！』

「ほ、本当ですか！？」

『もちろん！ 送るときはちーちゃんに連絡するから、楽しみに待っててね！』

ぶつ、と携帯が切れる。 まあ聞きたいことは聞けたから良しとしようかな。

あの子、やっと飛べるんだね……。

それから、六日後。

「……えーと、織斑先生？」

「なんだ？」

「一夏は何故専用機なんでしょうか」

一切詳細を聞かされていなかった『私』は、思わずそう言った。 てつきり、私は今まで訓練機二機で相手取るものだと思ってただけど……。

「数日前に用意できてな。 クラスでも言ったんだが、聞いてなかったか？」

「えっ……。すみません、聞いてませんでした……。まあでも、これで少しでも食い下がれば……」

「何とかなるさ！ 向こうも知ってるし」

うう、多分イメージトレーニングと復習してたせいだ……。

まあ、とりあえず今は置いておこう。専用機となれば少なくとも戦力の向上は見込める。より細かく言えば、火力の向上は見込める。それが戦力になるかどうかは、一夏の腕次第だ。

「仕方ない……。先に出ています！」

IS『打鉄』で先に飛び出すと、独特の浮遊感と共に空へ浮かぶ。打鉄の基本装備は近接戦闘用のブレードとハンドガンのみ。つまり、火力で言えば一番下だ。ここをどうカバーするか……。

「テストス、聞こえてますか？ セシリアさん」

「ええ、聞こえてますわよ」

頭の中で声が聞こえた。これがIS同士の通信みたいなものか。意外とあっさり出来たな。

「良かった。あの、一つ条件を加えさせていたくださいのです。一夏が専用機持ちになっていたようなので、私が一夏、どちらかのシールドエネルギー残量がゼロになった時点でこちらの負けというのはどうでしょうか」

「しかし、それでは一之瀬さんが不利ではありませんの？」

高圧的な、けれど優しさの含まれた声に、思わず頬が緩む。けどね。

「そうならないよう、全力を尽くすだけです」

「……わかりましたわ。織斑先生、よろしいでしょうか？」

『まあ、いいだろう。全員、全力を尽くせ』

放送機材から吐き出された千冬さんのその声と共に、一夏がピットから飛び出してくる。よし、役者は揃った。

「よろしくね、打鉄」

腕を動かしながら、一人そうこちる。

飛ぶのは、これが三度目だ。前の二回は訓練で少し飛んだだけ。

ほとんど操縦練習だったけど。警戒、敵IS操縦者の左目が

射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

オープンチャネル

開放回線で話している一夏とセシリアさんを眺めながら、集中し

てブレードを呼び出し、それとなく構える。刃は手元よりも下に、後ろに流すように。

独特の緊張感が体を蝕む 否、支配する。それは決して不快な

ものではなかった。むしろ、高揚感と共に体を動かす燃料にすらなりそうなのだ。

警告！

敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわねっ！」

エネルギー弾の掻き立てる独特の音が、開放回線から流れ出たセシリアさんの声と共に耳に届き、三六〇度を見渡せる中で一夏のいる元へと飛んでいく。

『一夏、無事？』

『あ、ああ。にしても気持ち悪いぜ、こりゃ』

『それでもやらないといけません。交代スイッチ噛ませながら叩きましょう。

バック
後衛は陽動で』

『わかった。じゃ、まずは俺から行くっ』

プライベートチャネル
個人間秘匿通信で軽く作戦案を交わしてから、互いに空を飛ぶ。
心地よい浮遊感だった。

一夏が刀身長めのブレードを呼び出し、器用に狙撃を避けながら
空を進んでいく。それをサポートするように、私もブレードを収納
ハンドガンを展開して狙いを定める。と言っても、正確に狙うわけ
ではなく気を散らすための威嚇射撃だ。当たれば御の字。

「くっ、この！」

「香織、そっちだ！」

「了解、交代します！」

単語を交わし、素早くハンドガンを収納しブレードを展開する。
さあ、行こう。

グイッ、と引っ張られるような強烈な加速感と共に、私と打鉄は
弾丸のようにその場から飛ぶ。応戦しようと掲げたライフルにも臆
せず、一直線に。

大丈夫、当たらない。

直後、銃口を青い光が満たしていった。

第3話 作戦会議（後書き）

ということで、戦闘開始。戦闘の様様は大分カットされるでしょう。
ああちくせう、口内炎が治らない。小さくなって来てる気はするけどなあ……。

第4話 戦いの恐怖

バリアー貫通、ダメージ57。シールドエネルギー残量、86。実体ダメージ、レベル中。

「わかってるんだよ、そんなことっ！」

吐き出すように呟いて、ビットから撃ち出される特殊^Bエネルギーを回避していく。二機ならまだしも、四機もいるんじゃ回避だけで手一杯だ。

模擬戦開始から約三〇分。ブルーティーズには一撃も与えられないまま、私たちはじりじりとシールドエネルギーを削られていた。まだ辛うじて避けてはいるものの、正直厳しい。

一夏のIS「^{ひやくしき}白式」に装備されているのは、近接戦闘用のブレードが一本だけ。後付^{イコライザ}装備も出来ない特殊なISらしいけど、この状態では最悪の武装だ。

そしてこの「^{うちがね}打鉄」に備わっているのは、近接用のブレードと短距離射撃用の拳銃^{ハンドガン}のみ。そして相手とこちらの搭乗時間差は優に二八〇時間以上。無論向こうが上である。

「一夏、無事ですか!？」

「な、なんとかな……。そっちは？」

「大分まずいです。ですが、ある程度相手の特性は分かりました。エネルギー残量は？」

「67、実体ダメージは中破。そっちはどうだ？」

「57、大破一步手前です。仕掛けるのは、これでラストでしょう」

お互い随分とぼろぼろだ。けれど、おかげでこのビットの攻略法も分かってきた。

『あのビットは、操縦者の意思で動いています。そして、それには多大な集中力が必要になってくる。その証拠に、ビットの相手をしている間はライフルは撃ち込まれませんでした』

『ああ、それは俺も思ってた。いけそうか？』

『行くしかありませんよ。私がビットを陽動します。隙を突いて、斬ってください』

『分かったっ』

大分曲芸飛行染みた動きでビットの攻撃を回避しながら、私はビットの動きを見ていく。

常に私の周囲を囲むようにして飛び回る四機のビット。だけど、人の操るものなら必ずズレが生じる。そこを突けば……！

左手に収まっているブレードをきつく握り、じつとビットだけに集中する。一夏の方は、向こうでうまくやってもらうしかない。

周囲三六〇度、それこそ真下や真上、自分の後ろといった場所は、普段見ないだけあってやや反応が遅れてしまう。今までも、そこは優先的に狙われてきた。だけど、気づいてしまえば簡単なことだ。それとなく隠しながら撃つては来ていたけど、それでもっ！

「……ここ、だッ！」

「そんなっ！？」

ギユウツ、と急な加速と共に左向きに振り向いた私は、その勢いのままブレードで斬り払い、発射寸前だったビットの一機を破壊する。よし、続けて！

「これと、これっ！」

真逆の場所を同時に見ることは出来ない。その思考の穴を突くよ

うに上下に飛んできていたビットを、展開したハンドガンと振り払ったままのブレードの逆袈裟で同時に破壊する。後一機は。

「でえりゃあああ!!」

真後ろになった其処にいたビットを、上空から突っ込んできた一夏がすれ違い様に叩つ斬る。そのままの勢いで、一夏は呆然としているセシリアへと加速して飛んでいく。

が、次の瞬間。

「掛かりましたわ」

(まずっ　!?)

「一夏、逃げてッ!」

「おあいにく様、ブルーティアーズは六機あつてよ!」

腰部分を守るスカートのようなアーマーが動き、無骨な砲身が顕わになる。

ビットとは明らかに違うフォルムのそれは。

「んな、ミサイルッ!？」

直後、白と赤の光が視界を刺し貫き、黒煙がそこを満たしていく。円形のそこから吐き出されたミサイルは、回避する暇もなく白式を纏う一夏へと命中した。

「一夏あああああ!」

『一夏あああああ！』

香織の悲鳴が、モニターから鳴り響く。あまりに悲痛なその叫びに、真耶まやは思わず耳を塞ぎそうになってしまった。

モニターは黒煙で満たされ、その向こうを見ることは出来ない。思わず一夏の名を呟きそうになった筈はずは、すぐそこまで出掛かった名をぐっと飲み込んでモニターを見つめた。

「ふん」

モニターを見つめたまま、千冬ちふゆは鼻を鳴らす。それは、溜め息にも似た何か。

モニターを遮っていた黒煙が晴れていくにつれ、筈と真耶は思わず胸を撫で下ろした。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

完全に黒煙が晴れたそこには、白式が立っていた。ただし、その形状は大きく変わっていたが。

味方IS健在。今の攻撃によるダメージは無し。

「え……？」

思わず呟いた瞬間、私の視界には白銀のISが浮かんでいた。白式が、変わっていた。先ほどの無骨なデザインは消え、代わりに現れたのは、御伽噺の中に出て来るような騎士の鎧めいたそれ。残念ながら兜はなかったが。

「いち、か……？」

「なんだかよくわかんないけど、おう。ようやくこいつは俺専用つてことらしいぜ」

曖昧な笑みを浮かべながら、涙の滲む声で問った私に答える。よかった、無事だった……。

人にミサイルが当たる瞬間なんて、見ていて気持ちのいいものじゃない。それも目の前で、だ。爆発の威力は、死の危険が無いことを簡単に忘れさせてくれるほど恐ろしかった。

ISは、兵器だ。そのことを、私はようやく思い出した。

どこか浮かれていたんだ。自分が男で二人目のIS操縦者だと聞いて、やはり浮かれてしまっていた。でも、考えてみればそれは、世界で二人目の『搭乗者を選ぶ殺戮兵器』のテストパイロットということだ。

こうして接してみて分かる。この子達は戦うために生み出されたことが。だけど、だけど私は……、それを否定してあげたいと思っていたんだ。

うつん、『私』じゃなくて、『僕』が。

「ま、まさか……、ファースト・シフト一次移行！？ あ、あなた、今まで初期設定だ

けの機体で戦っていたって言うの!？」

「どうやらそうらしいぜ。香織、やれるか？」

「……うん、大丈夫です。やりましようっ！」

刹那、風を裂いて突き進む純白の機体。私の役目は、その突撃をサポートすること。

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

聞こえてくるのは、一夏の独白。きっと、オープンチャネル開放通信で流れていることにも気づいていないんだろう。

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？ あなた、何を言っ」

「とりあえずは、千冬ちふゆねえ姉の名前を守るさ！」

それは、独白と言うにはあまりに力強いもので。思わず私も、頬が吊り上ってしまいそうになっていた。

全く、男子と言うのは度し難い。『僕』も含めて。

「ああもう、面倒ですわ！」

突っ込んでくる私と一夏を迎撃せんと、残されたミサイルビットから大量のミサイルが吐き出される。一発でも当たれば即アウト、ハイリスクハイリターンの大きな賭け。

その賭けを、一夏は真っ向からぶった切っていく。動きで回避しきれないものは私がハンドガンで撃ち落とし、突き進む道を作り出す。

「行け……っ、行けええええええええ！ 一夏あああああ！」

「おおおおっ！」

純白の騎士は、空を斬り裂いて突き進む。
その剣から解き放たれた青い光が、一際強く光り輝き。

『試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

ブザーと共に、その放送が鳴り響いた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合終了後、ピットに戻った私と一夏を待っていたのは千冬さんのお叱りだった。

まあ、負けてしまったのだからきちんとお叱りは受けよう。打鉄も、あまり飛ばせなくてごめんね。

「武器の特性を考えずに使うからあなる。身をもって分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

「それと、一之瀬。よく戦った」

「……へ？」

えっと、何で褒められたの？ よく分からない。というか怒られ

るんじゃないの？

「なんで、私は褒められてるんでしょうか？」

「訓練機で、しかもサポートもこなしながら生き残る。相手が注目していなかったとはいえ、ISをまともに動かして五回に満たないお前がそこまでできれば十分優等生だろう」

「あ、ああ、ありがとうございますっ！」

うわ、うわわわっ、千冬さんが褒めたよ！？ お姉ちゃんも「あの人を掛け値なしに褒めるところを見たことがない」って言うていたあの千冬さんが！？

「……おい、なんだその形容し難い表情は。幽霊でも見るような目だな」

「あ、す、すいませんっ。その、織斑先生はあまり人を褒めないと聞いていたので……」

「……はあ。まあいい、とりあえず今日はおしまいだ。帰って休め」

「は、はい！」

「おう」

バシンッ！ と千冬さんが盛大な音を立てて一夏の頭を叩く。電話帳レベルの厚みがあるそれで。

千冬さん、それはさすがにひどいと思います。そう思っても口にはしない。それが我が家の処世術。

「いつてええっ！」

「返事は「はい」だろうが。お前はこれを読んでおけ。ISを所持、使用するための規則だ。一文字も余すことなく読むんだぞ」

「げっ、なんですかこの『あなたの街の電話帳』みたいな厚さは！

「？」

「いいから読んでおけ。それがISを使う責任の重さだ」

千冬さんの言葉には、いつの間にか真面目な重みが加わっていた。その迫力に、一夏も言葉を発することなく頷く。

一夏は箒に連れられて、例の本を抱え帰っていった。山田先生は管制室に戻ってアリーナの点検をするらしい。

私が今残っているのは、千冬さんに口パクで「ここに残れ」と言われたからだ。

「さて、と。今は戻してもいいぞ。音声は流れないからな」

「あ、はい」

息を抜き、近くの出っ張りに腰掛ける。正直、身体的疲労はマックスに近い。それ以上に精神的疲労は上限突破しているが。

千冬さんは軽く微笑むと、ぼんつと僕の頭に手を載せる。じんわりと、千冬さんの温もりが伝わってくる。

「とりあえず、よくやった。さつきも言ったが、訓練機であそこまで立ち回ったのは早々ないだろう。誇っていい」

「あ、ありがとうございます……」

「……何かあったか」

「え……」

千冬さんは突然言って、僕の隣へ腰掛ける。学校では絶対に見られない柔らかい一面が、少しだけ顔を覗かせていた。

千冬さんが僕を見る目は、決して厳しいものじゃなかった。慈しみ、のようなものが混じった、優しい瞳。

「……怖かったです。一夏にミサイルがぶつかったとき、思い出

しちゃったんです。自分たちが乗っているものが兵器だったこと。皆ISが危険の無い機械みたいに見えているけど、これは人殺しの道具で、実戦だったらあれは死んでいたのかもしれないって考えると……！」

言外に促され、僕はぽつぽつと言葉を零す。

次第にそれは涙声へと変わっていき、とうとう僕は言葉を発することも出来なくなった。

「うつ……、ぐすつ……」

「そう自覚できているなら、お前は何も心配ないさ。最近の連中には、それを思い知らせることが最も難しい。天狗になっているのならばちのめせばいいし、落ち込んでいるだけなら励ましてやればいい。だが、ISが恐ろしいと感じさせることはそうできることじゃない。直接味合わせるためには技量が足りない者が多いのさ」

「で、でも……！　僕、あの子に触れたときに感じたんです……！　飛びたいって、飛ばせてほしいって鳴いているのを聞いたんです！　そんなの聞いちゃったら、飛ばせてあげたいと思っちゃうじゃないですか……」

「あの子、というのは束たばねのときのISか」

尋ねるといふよりは確認するように言ったその言葉に頷く。

「ISは、確かに恐ろしい兵器だ。だが、同時に頼もしい翼でもある。お前がISを恐ろしいと感じたのなら、次はその恐ろしさを頼もしさに変えてくれる相棒ISを見つけることだ」

「それ、って……」

「束から話は聞いている。一週間以内に到着するらしい」

「恐れることを恐れるなよ」と、千冬さんはそう言って去ってい

った。

残されたのは、俯いて地面を見つめる僕だけ。
小さく溜め息を零すと、力なく立ち上がって寮へと足を向けた。

「ただいま帰りました」

「あ、かおりんかおりん！　すごかったよ今日の試合！」
「ありがとうございます、のほほんさん」

部屋に帰った『私』を出迎えてくれたのは、また黄色に戻っていたのほほんさんだった。またかわいらしいものを着てますね、なんて言っただけになるが、正直今はそういう気分じゃない。というかちよつと頭が痛い。

「……大丈夫？　ちよつと顔色悪いよ」

「え、ええ……。今日は、シャワー浴びて寝ます。ご飯はいらないので……」

「そっかー。何かあったら言ってね。友達なんだから」

「はい、ありがとうございます」

ゆつくりと礼をしたあと、覚束ない足取りでベッドへと倒れこむ。
ふかふかの布団の感触が、不思議と暖かった。

第4話 戦いの恐怖（後書き）

まだストックは尽きないぜ。まだ、な。

ちなみに、原作より若干一夏がハイスペックになっています。

戦闘中にプライベートチャネル使える所とか。最初はまともに使えませんでしたからね。

第5話 決まりました

翌朝のS H R。朝食を食べる気にもなれずに昨晚の夕食と今日の朝食を抜いた私は、精一杯の虚勢で背筋を正しながら先生の話聞いていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでない感じですねー」

嬉々として喋る山田先生は、ずっと暗く沈んでいる一夏には気づいていないらしい。もちろん、周囲の女子也大いに盛り上がっている。

「先生、質問です」

一夏が挙手。

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

その言葉と共に立ち上がったセシリアさんは、腰に手をやって機嫌良さそうに次の言葉を放つ。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

一夏が負けたんじゃない、一夏と私が負けたんだけどね。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

「いや、ちょっと待ってくれよ！ 香織はどうなるんだ！？」

「えっと、すみません。私も体調上の理由で辞退させていただきました。それに、せっかく専用機持ちがいるのに訓練機が代表になったらあれですし」

体調上の理由って言うのは本当だ。正直言っただけ今のままじゃ一対一のプレッシャーに勝てる気がしない。もっと強くなってからじゃないと、私は足手まといにしかない。

一夏は大きく溜め息を吐くと、沈み込むように机に突っ伏す。本当にやりたくなかったんだろうな。

「そ、それでですね」

咳払いを一つして、一夏の方をスッと見直すセシリアさん。

「私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもう見る見るうちに成長を遂げ」

言葉を遮るように、大きな音と共に机が叩かれ、箒さんが立ち上がった。

あれ、修羅場？

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！ 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」

「え、第ッてランクCなのか……？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

途中で口を挟んできた一夏を怒鳴りつける第さん。周りの子が怯えてますよ、と言いたくても言えない。

と言うか、これはもう修羅場ですね？

なんて考えていると千冬さんが、立ち上がって口論を始めている第さんとセシリアさんの元まで歩いていき、出席簿で両者の頭を引っ叩く。うわ、凄い音したよ今。

「座れ、馬鹿ども」

冷徹そのものといった声で二人に告げる千冬さん。さすがに千冬さんには逆らえないのか、二人はおとなしく席に着いた。

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

いい音を立てて出席簿で叩かれた一夏は、なんとも言えない顔で頭部を抑えていた。何か下らないことでも考えていたんだろうか。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

うわぁ、手厳しい。でも確かに、世界最強から見ればどんぐりの

背比べもいいとこだよね。

「代表候補生でも一から勉強してもらうつと前に言っただろう。下らん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

はい。

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシンッ！

片眉と共にギリギリと吊り上げられた出席簿が、小気味いい音を立てて一夏の頭を殴打する。それも二回。脳細胞が瞬く間に死んでいくなあ、うちのクラスの特定の人は。

「すみませんでした」

「わかればいい。クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

クラス全員（数名除く）からの「はい！」の大合唱で、めでたく一夏がこのクラスのクラス代表に決定されましたとさ。

うん、後で一夏に何か作ってあげようか。あんまりに不憫すぎた。

「箒さん」

「ん、香織か。どうしたんだ？」

「いえ、お姿をお見かけしたので、ご一緒にどうかと思って」

翌日。放課後に寮への帰り道で箒さんの後姿を見つけた私は、パタパタと駆け寄って声を掛けた。

大して驚いた様子もない箒さんは、くるっと振り向くところらの顔を確認して小さく表情を崩す。

「ああ、いいぞ」

崩した表情、敢えて言えば微笑みだろう。それを私に向けながら、箒さんは先導するように先に立って歩いていく。

む、歩幅が広い。私の歩幅は少し狭いから、少し小走りを挟む気持じゃないと追いつけないな。

「一夏とはどうですか？ 仲は」

「な、い、いきなり何を言い出すんだっ」

「いえ、少しは進展したのかな、と」

「……まだだ。それどころか、私の気持ちに感じてすらいない」

うわぁ。それはまた、なんというか。箒さんは典型的なツンデレだと思うのに。ちょっと過激だけど。

一夏も一夏だけど、まあ箒さんも真正面からのアプローチしてないのかな。

「で、でも、同室なんですよね？ それ相応のハプニングは」

「相部屋になったことを馬鹿なことと言い切り、下着を見れば懐か

しむ馬鹿だぞ」

「……えっと……、ご愁傷様です」

それはいくらなんでもない。本当にない。男として謝らせてほしいけど、ばれるのでやりません。

下着は、千冬さんで慣れちゃってるのかな。相部屋は自分に魅力がないと考えているだけか？ どちらにしても、このままじゃあね。

「じゃあ……、手料理を作つてあげるとか？」

「……私は、料理は苦手なんだ」

「なら、コーチしてあげましょうか？」

「い、いいのか?!」

噛みつかんばかりの勢いで私の手を取る篤さん。怖いです。

「ま、まあ、暇つぶしにもなりますし」

「是非頼む。どうもセシリアの様子が妙でな、一夏に惚れた可能性がある」

「……まあ、戦いを超えて育まれる愛と言つのもありますし、ね」

しかし私に限つてはその枠には当てはまりませんけどね。男ですから。

とりあえず、練習場所は私の部屋でいいかな。

「それじゃあ、いつから始めましょうか。お時間はありますか？」

「そうだな……、空いている時間に部屋を訪ねるから、大丈夫だったら頼む」

「わかりました。準備して待ってますね」

まあ、少なくとも化学薬品を持ち出すようなトンでもさんではな

いことを祈ろう。さすがに、酸味が足りないからって塩酸やらを入れる人じゃないよね？

とりあえずそれだけはないことを祈る。

「それにしても、セシリアとの戦いは凄かったな」

「ええ。一夏が土壇場であんなことになるとは思いませんでした」

「いや、一夏もそうなんだが、お前もな。訓練機の扱いづらは一応人づてに聞いたことがあるから、あそこまで動かせるものかと思っただけな」

「え？ ま、まあ、一応練習しましたから」

突然私の話になって、ちょっと挙動不審になりながら言葉を返す。褒められるのには慣れていないんです。顔真っ赤になってないだろうが、心配だ。

「一夏が言っていたぞ。お前の支援がなかったら、とっくに墜ちていたと」

「そ、そうですね……。それは、なんとも」

嬉しいんだけどなあ……。まあ、私もタッグじゃなければ墜ちてる自信があるし。結局どっちもどっちなんだよね。

今のところは一夏が上かな。最適化の終わってない専用機であそこまで持たせたんだし。フィッティング

とりあえず篤さんに料理の練習をするという約束を交わし、その日は終わったんだけども。

まさか、あそこまで酷いとは誰も思わないのです。それはまた、後のお話。

「……のほほんさん、どうですか？」

「美味しいよかおりん！」

「よかった……。自宅にいた頃は姉の分も作っていたので、こう見えても腕には自信があるんですよ」

その日の夜、私は自室でのほほんさんに料理を振舞っていた。

メニューは白米、塩味強めの野菜炒め、椎茸^{しいたけ}のお吸い物。お吸い物は薄めに作ってあるから、野菜炒めの塩味を丁度柔らかくしてくれる。但し、塩分の取りすぎには注意しよう。

それにしてものほほんさん、とっても美味しそうに食べてくれる。私がお腹が減ったから作ったんですけど、のほほんさんが「私も食べたいーい」と言ったので、二人分作ったのです。

「それでも、食堂のものには負けるんですよ……。もっと美味しくできる気がするんですけど」

「いや、まあ向こうはプロだしー。むしろ勝っちゃったらあそこのご飯食べられないよ」

ああ、まあ確かに。主に申し訳なさとか、その辺で。

まあでも、大雑把に作った割には小奇麗に出来たのでよしとしますか。美味しかったし、お腹も膨れたし。

「それじゃあ、シャワー浴びてきます」

「はい」

まだご飯を食べているのはほんさんに断って、着替えと共に脱衣室へ。たまには湯船に浸かりたいけど、それには家に帰らないといけない。残念ながら、家は長期休暇じゃないとゆっくり出来ない距離にあるんだよね。

まあ、自分で決めたことだから弱音は吐きたくないけど。そんなの、冗談じゃない。

服を脱ぐと、念入りに隠すようにしてブラとパッドを服の下へ。こっつて制服は色彩こそ同じだけど、改造OKだしプリセットの制服のレパトリーもたくさんあるからとても助かる。トランクス履いててもズボンがあるから助かったね。

と言つても、普段はISスーツを直で着ているから関係ないんだけど。さすがに胸はふんわりとだけ盛つてある。あんまりペツタンコでもあれだし。

とりあえず、これでよしと。

シャワー室の扉を開け、中へ入る。ちなみに扉はパタパタと扇状に畳まるあれだ。む、言葉で言い表せない……。まあいいや。

キュツ、とシャワーの栓を捻ると、頭上から熱いお湯が降り注いでくる。熱いと言つても熱過ぎる訳ではなく、むしろ心地いいぐらい。

「ふーっ……。今日の『私』、これにて終了。かな」

呟いて、その場に膝を抱えて座り込む。お湯はそれでもきちん当当たってくれていて、寒さを感じることはなかった。

ここに来て、一週間と少し。とりあえずここまでは順調だ。順調かどうかは疑問符がつきそうだけど、とりあえずはまあ。

「あの子、いつ来るんだろ」

呟いたのは、産まれて始めて起動させ、生まれて始めて起動させ

られたあの子のこと。

ISは、兵器だ。だけど、あの子のことをそう思いたくない。言葉で具体的に言ってみせろと言われれば、迷わず無理だと返せる自信のある気持ちで、心の中を占拠していた。

僕は、あの子を飛ばしてみたい。ここに入っただけの意味の一つは、それなのだから。

「とりあえず、待ってみるかな」

立ち上がって栓を止めると、脱衣室からバスタオルを取って全身をくまなく拭く。よし、と。

後はTシャツと短パンでよし。さすがに寝てる最中に脱がされたりしない限りはこれでバレない。エアコン止まらなければ、だけでももし真夏の熱帯夜にエアコンが止まったら、僕は死ぬね。断言できる。

「ありがとうございましたよー」

「あ、食器片付けておいたから、私大浴場行って来るねー」

「すいません、ありがとうございます」

「いえいえー」

そう言っただけ、洗面道具と着替えを持ったのはほんさんが出て行く。食器類は全て綺麗に洗われていて、棚の中に収められていた。うむ、やりおる。

「……さて、と」

それじゃあ、とくにやることもないし、寝ようかな。

ベッドに体を埋め、ふかふかの感触を堪能しながら、僕はこの日を終わることにした。

それでは、お休みなさい。

「ただいまー」

香織が眠ってからしばらくして、本音は一人で部屋に戻ってきた。すぐそこまでは友人と一緒にだったが、友人の部屋は本音の部屋よりも手前だったためだ。

普段なら返事が返ってくる筈だったが、香織が眠っているのに気づくと、音を立てないように荷物を自分の棚に納める。

「幸せそうに寝てるなあ」

寝る前にと香織の寝顔を覗き込んだ本音は、幸せそのものと言った香織の寝顔を見て思わず破顔する。

「そう言えば、かおりんの寝顔見たのって初めてかもー？」

小声で呟いて、確かにそうだと得心する。思えば、香織は本音が起きるよりも早いときは一時間以上、どれだけ遅くても五分前には起きていた。しかも、寝るのは必ず本音の後。

「うん、レア顔だあ」

そのことに気づき、本音は何故か嬉しくなってしまった。

普通の友人で寝顔まで知っているものはあまりいないだろう。それも、ここまで無防備な寝顔など、そう見せられるものではない。

香織の秘密を知ったような気がして、本音はなんとなく得した気分になった。

「それじゃあ、お休み。かおりん」

軽く香織の頭を撫ぜると、本音は自分のベッドに入る。

後には、二人分の寝息だけが残された。

第5話 決まりました（後書き）

のほほんさんが可愛い件について。

第6話 『あの子』（前書き）

長いです。普段の1・7倍。

第6話 『あの子』

篤さんとの約束から数日が経った四月下旬。私は朝のSHR後に千冬さんに呼び出されていた。

「おはようございます、織斑先生」

「ああ。喜べ、束の奴から例のやつが届いたぞ」

「ほ、本当ですか!？」

思わず叫んでしまうが、幸い他の生徒たちは授業の準備や友人とのお喋りに忙しらしく、私の声が気に止まることはなかった。

「丁度いい、午後の実習で乗ってみる。訓練機で急加速急停止はできるな?」

「は、はい!」

「なら問題はないか。急下降と完全停止は?」

「一応できます。あの子で出来るかどうかはわかりませんけど……」

「まあ大丈夫だろう。後はぶつつけてやってみせろ。それじゃあな」

千冬さんは軽く笑って最初の自分の担当教科を持っている教室へ歩いていく。そっか、来たのかあ……!

でも、最初に最適化しないと携帯できないから、フィッティング早めに行かないと。幸い、実習授業は午後からだからお昼休みに最適化すれば間に合うだろう。フィッティング

で、そんなこんなでお昼休み。ご飯なんて食べていられないとばかりに、お昼を誘ってくれたクラスメイトに平謝りしつつISガレージへ。服をロッカーにしまってISスーツになってから中へ入ると、既に千冬さんが待っていた。

「来たか」

「あの、あの子は……？」

「ここだ。今開ける」

言って手元の端末を弄ると、重苦しい音と共にIS格納庫の扉が開かれる。

そこに納められていたのは、私が最初に見たときよりも幾分装備が美しく磨かれ、艶やかさすら感じさせる黒い機体だった。

「こいつが、梟だ」
ふくろう

「梟……」

いてもたってもいられなくなり、私は三角跳びの要領でISの脚部と腕部を駆け上ると、梟へと乗り込んだ。

直後、機械的な音と共に体がISと一体化する。視界は三六〇度開けて、様々な情報が目の前と脳内を錯綜していく。その中で、一つの声が頭の中に響き渡った。

『おはようございます、カオリ』

「へっ！？　だ、誰！？」

『落ち着いてください。梟の補助AI、イヴと言います』
サポート

思わず声に出して言ってしまった私を落ち着かせるように、イヴと名乗る声が言う。その声は今まで私が聞いたどんな声とも違っていた。サンプリングは誰のを使ったのか、非常に気になるところだ。

「つて、AI？　ISに？」

『私にインプットされているのは、マスターであるカオリのサポートです。戦闘、日常生活どちらもです』

「そ、そうですか……。初期化と最適化はできる？」
フォーマット　フィッティング

『問題ありません。すぐに開始しますか？』

「お願い」

『了解しました』

そう答えて、イヴはすぐに作業を始める。

……速いな。三分もあれば終わってしまいそうな勢いだ。さすが束ちゃん。

「……ねえ、イヴ」

『なんでしよう？』

「あなたは、私のことを覚えている？」

『はい、はっきりと』

作業を行っている間、私はイヴに話しかけてみた。

声は外には聞こえていないのか、千冬さんが不思議そうな顔でこちらを見ているけど。

『眠っているとき、私の元にあなたの温もりが伝わってきました。』

それに気づいて、私は飛びたいと願いました』

「そっか。それじゃあ、やっぱりあればあなただったんだ」

『はい。あなたともう一度会えて、とても、とても……』

「……イヴ？　どうかした？」

突然言葉を詰まらせたイヴを不思議に思っ、私はそう尋ねる。

『……現在の状況を的確に言い表す言葉が見つかりません』

「ん、どういうこと？」

『おそらく、私の中には感情を表す言葉わらわでしか言い表せないものがあります。しかし、私はその何かを感情を表す言葉で言い表せません。どう言った表現をすればいいのか、分かりません』

「そっか……。私は、あなたともう一度こうして会えて嬉しいよ。やっと一緒に飛べるんだ、って」

『嬉しい……。ですか。私の中にあるものも、『嬉しい』というものかもしれません』

「本当に？ だったら、嬉しいな」

機械に感情があるなんておかしい話だけど、ISには意識にも似た何かがあると言うのは公然の事実だ。だったら、人間臭いAIだつてあっていい。

もつとも、今はまだまだ機械めいているけど。

フォーマット フィッティング

そんなことを思ったときに、初期化と最適化の終了を知らせるアラームが鳴った。予想よりも少しばかり早いかな？

「よし、大丈夫そう？」

『はい、現状に問題はありません。現時点を持って、名称『一之瀬香織』をマスターとして認識します。今後ともよろしくお願いします、カオリ』

「よろしく、イヴ」

そう言つて、ついつい頭を下げてしまう。下げてから、意味がないことに気づいたけど。

「織斑先生、最適化まで終わりました！ ちょっと、飛んでみていいですか！」

「ああ、構わない！ 慣らして来い」

「だって、イヴ。行こう！」

『はい、カオリ』

答えたイヴの声には、どこか嬉しさが混じっていた気がした。ゆっくりと一步を踏み出し、私は格納庫から体を出す。元からこ

の大きさだったような一体感が、私を包んでいる。

『シールドエネルギー残量確認。システムチェック。全システム、オールグリーン』

「よし、出ます！」

レールの上を滑るように、一気に体を前へ撃ちだす。大気と重力の壁を振り切って、空へ　！

一瞬、音が無くなった。

それを確認したときには、既に私は空の上にいる。

「……ようやく飛べたんだね、イヴ」

『……はい。夢が二つも叶いました』

どこかぼんやりとした声音で、イヴが言った。

機械が夢だなんて、きつと他の人なら笑うだろう。だけど、私は笑いたくないし、絶対笑わない。それを言ったら、男がISを動かしているのだって、本当なら有り得ないんだから。多分。

「夢、か。それってどんなの？」

『一つ目は、こうして空を飛ぶこと。二つ目は　』

あなたと、空を飛ぶことです。

いまだぼんやりとした声のままで、彼女はそう言った。

それから少し時間が経って、生徒たちが入ってくる前に私はガレ
ージに戻った。千冬さんから開放通信で声掛けられちゃったし。

戻ってきた私を迎えてくれたのは、ジャージ姿に変わっていた千
冬さんだった。まあ、結構な時間飛んでいたし着替える時間ぐら
いはあるよね。

「イヴ、楽しめた？」

『はい。楽しい、という感情で言い表せばいいのかは分かりませ
んが、きつとカオリと同じ思いです』

「そっか」

「なかなかいい機動だったぞ。ところで、出る前から独り言を言っ
ているようだったが……」

「あ、私のってAIがあるみたいなんです。イヴ、開放通信で話で
きる？」

『可能です』

「じゃあ今はそうしてくれる？」

「わかりました。『織斑 千冬』ですね、マイスター製作者のデータでは知っ
ています。私はイヴ、イヴとお呼びください。そちらのことはチフ
ユとお呼びしても？」

「……あ、ああ。なんというか、AIとは思えないな。アイツが製
作者なら何があってももう驚かないが」

流暢に話すイヴに驚いたのか、それとも呆れているのか、千冬さ
んは苦笑いしながらそう言う。うん、私もそう思います。束ちゃん
のやることは一々滅茶苦茶だから。短い付き合いでもそれは分かる。

「この後の実習で専用機持ちにはデモンストレーションで飛んでも

らう。出来るか？」

「はい、大丈夫です。イヴのことは……」

「秘匿しておくべきだな。ただでさえお前はややこしくなってきた。当面は出来る限り情報は隠匿すべきだろう」

「わかりました。イヴ、プライベートチャネル個人間秘匿通信に戻していいよ」

「はい。それとカオリ、私との会話はプライベートチャネル個人間秘匿通信で可能です」

「……こう？」

「はい」

頭の中で、人影が頷くのが見えた気がした。あれがイヴなのかな。とりあえずISを解除すると、梟は小さな鳥のペンダントに変わる。カッコいい、かな。うん。私に似合うかどうかは分からないけど。

「よし。ちなみに、梟とお前に専属の整備チームはいない。一から十までおまえ自身でやることになる」

「はい！」

「まあ、わからないことがあれば聞け。表向きは架空の会社のテストパイロットと言うことになっているから、専用機持ちということだけは広めても問題ない」

「ちなみに、その架空の会社って……」

「束がついこの前作り上げたらしい。社員と社長をあいつが兼任している。しかも、政府には疑問を抱かれないよう巧妙に情報を隠匿してあるようだ」

「うわあ、束ちゃんやりすぎじゃないですか……？ いや、確かに守ってもらえるのはありがたいけど……」

束ちゃん、相変わらずやるのが派手ですね……。この数十分でこんなに痛感するとは思わなかった。

「凄いですね、束ちゃん……」

「今更だがな。世界が電子機器に頼っている限り、あいつの敵じゃない。ISが世界の敵になろうとな」

「……させません、私が。この子を兵器になんて」

少し沈んだ面持ちの千冬さんに、私ははっきりとそう告げる。

「……ふふ。言うな、ひよっこ。なら、私はその言葉を信じさせてもらっさ」

「あはは……。ありがとうございます」

世界中で、男では一夏と私だけが今のところISを起動させられる。尤も、私は非公開だけど。

一夏の場合はもう止められない所まで来てしまっていたらしいけど、私は表に出ないよう入念に線を張り巡らせてからここに来た。その違いはあるはずだ。

「よし、グラウンドで待っている。じきに生徒が来る」

「はい！」

そう言われ、グラウンドで待つこと一〇分あまり。

全員が揃ったそこに、さっきと同じジャージ姿の千冬さんが現れる。あ、隣には山田先生もいるよ。

「ではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、一之瀬。試しに飛んでみせろ」

言われて、私は胸元の（若干膨らんでいるのはパッドをいれているからだ）梟のアクセサリに触れる。

この状態からの起動は初めてだから、ちょっとばかり緊張するな。

『行こうか、イヴ』
『はい』

直後、私の体が光に包まれ、そしてすぐにそれが晴れる。その後には、黒い装甲を肩に浮かべた黒いISがあつた。

攻撃用武装は刀剣型近距離武装の《夜鷹^{よたか}》、パイルバンカー型近距離武装の《啄木鳥^{きつじき}》、そしてサブマシンガン型の中、遠距離武装《夜雀^{よじやく}》。

防御用武装は両肩の黒い装甲《夜羽^{よばね}》。展開すると全身を黒い装甲版が無数の羽となつて、翼のように覆う防御装甲になる。

これはある程度自由が利いて、打撃武装にも転用できるとか。これはイヴから聞いたことだけど。

一応ビームコーティングされてるから特殊兵器^{BT}をある程度反射でき、直接打撃にも強いらしい。結構やりすぎだと思つのは私だけでしょうか。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

前を見ると、一夏がそう急かされていた。まだうまくイメージが定着できていないのか、なかなかISは起動しようとしなない。というかそのそぶりすら見せない。あの白いガントレットが《白式》なんでしょうか。

「集中しろ」

千冬さんに言われ、一夏は突き出した右腕に装着されているガントレットを、左手で包むように掴む。そして数秒。

一秒掛からずに、それこそあつという間に一夏の全身は《白式》に包まれていた。

「よし、飛べ」
「よっと」

千冬さんの指示に従い、後背部にある二基の推進装置スラスターを噴かせて急加速。先に空に行ったセシリアさんを追うようにして飛んでいく。頬を撫でる春先の温かな風が、とても心地良かった。

「香織さん、それは……？」

「専用機、『梟』です。ついさつき届いて少し飛ばしただけなんですけどね」

「そ、そうでしたの……。どこかの企業の所属なのですか？」

「え、ええ、まあ。一夏のような特例とは違うと思いますよ」

嘘です、がつつり特例です。それも飛び切りの。だけと言えない。言ったら私の命がマッハでヤバイ。

って、そう言えばセシリアさんの私の呼び方が変わってる？

「あの、セシリアさん、香織さんって……？」

「あ、お嫌でしたか？ お友達になれたら、と思ったんですけど……」

「いえ、いいですよ。これからもよろしく願いしますね、セシリアさん」

「ええ、よろしく願いしますわ」

空中で器用に姿勢を制御して、お互いにお辞儀。なんだか新鮮っていうか、むしろシニール……。

「あ、そう言えば、立候補のときに失礼なことを言っていたら申し訳ありません。謝ります」

「い、いえ、わたくしも随分失礼なことを言ってしまったし、お相子ですね。それにしても、一夏さんはなにを……？」

朗らかに笑ったセシリアさんの視線を追って、私も下を見る。ここでは、一夏がやつとISを展開したところだった。

いや、もうちょっと早く展開できるようにならうよ。せつかくの専用機なんだし。

『手にして少ししか経っていないのですから、仕方ありません。むしろこうして早くも使いこなせているマスターの方が稀有ではないでしょうか』

『えっ、そうなの？』

『はい。といつても、男性のIS操縦者のサンプルはマスターと『織斑 一夏』の二名しかありませんので、確定したことは言えませんが』

まあ、確かにそうだよな。ただでさえISはブラックボックスが多いから、かなり疑問だ。

「あ、上がってきた」

「では香織さん、先に行きますわね」

「はい」

気の抜けた返事を気に留めることもなく、セシリアさんは上へと上がっていく。とりあえず待ってみようか。

「は、はや……」

「セシリアさんと戦ったときのあの機動を思い出してください。もっと動けるはずですよ！」

「って、んなこと言われても……！」

空を舞うように一夏の周りを遊覧飛行しながら、私はもつと高く飛んでいく。いつの間にか、セシリアと同じ高さにまで到達していた。

それにしても風が気持ちいい。このままずっと飛んでいたけれど、さすがにそれも行かないか。こりゃ、いくら自分が風を感じられないと言っても、パイロットが空に夢中になるのは良く分かるなあ。

「結構、飛ぶのって難しいのな。自分の前方に角錐を展開させるイメージって、そもそもそんなことすることなんて、普通は無いつての」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」

それは多分、参考書を読んでおけば理解できる範囲の話だと思うんだけどね。私も大まかな理屈はおぼえてるけど説明はしない。と言つかめんどくさいし。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

断固として断ると言った感じでセシリアさんの申し出を断る一夏。確かに難しいけど、今のうちに覚えた方が楽だと思っただけだな。

「そう、残念ですわ。ふふっ」

えらく楽しそうに笑うセシリアさん。さすがと言うべきか、笑み

には嫌味にならない上品さが滲み出ていた。あの戦いの後からずつと印象が良くなった気がするんだよねあ……。

それに、篝さんも「あの女は要注意だ」なんてばやいてるときがあるし。ああなっているときの篝さんには不用意に近づいたらダメです。

「って、いつまで飛んでいたらいいんでしょうか。私はいつまでもいいんですけど」

「そろそろ指示が来ると思いますけど……」

「一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りてこい！」

指示じゃなくて怒号が飛んできました。それも篝さんの。思わず首をすくめてしまうほどの音量だった。くっ、もうちょっと開放通^{ネル}信の音量下げとくべきだった。

『下げてください』

『うん、お願いイヴ』

イヴはイイ子だなあ……。なんて感想を抱きつつ、とりあえず一時停止。山田先生がわたわたしてるぞ、篝さん。

「織斑、オルコット、一之瀬、急下降と完全停止をやって見せろ。

目標は地表から十センチだ」

「了解」

「了解です。では一夏さん、お先に」

言うのが早いか、セシリアさんはすぐに方向転換を済ませると地上へと飛んでいく。瞬く間に小さくなっていくセシリアさんが地表で完全に停止したのを見ると、こちらも下りる準備へと入る。

「それじゃあ一夏、下で待っています」

そう言い残し、私も下へ飛ぶ。スピードはみるみる上がっていき、まるで墜ちていつている様な気分だった。

しかしまあ、そんな感覚にいつまでも浸ってはられないわけで、地表スレスレのところで急減速を掛けると、慣性を無理やり抑え込んで完全停止してみせる。

んおおおっ！？ 結構掛かる……！

「……よし。うまく行った」

『誤動作無し。全て規定範囲内です』

「ありがと、イヴ」

直後、私の背後で凄まじい轟音と共に土煙が巻き起こった。

え、なに？ 驚いて後ろに注目すると、そこには巨大なクレーターが出来上がっていた。え、隕石でも落ちてきたの？

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すいません」

千冬さんの声で、ようやく事態を把握する。

要するに、一夏が空から急下降して完全停止も急減速も出来ずに地面と接吻したらしい。その証拠に、煙が晴れたところからは白い機体が姿勢制御しながら空中に浮かんできていた。

それから少しの間ゴタゴタがあったけど（主に箒さんとセシリアさんの一夏争奪で）、結局千冬さんの一喝でそれも収まった。さすが鬼教か

「一之瀬」

「すみませんでしたッ！」

バシンッ！ と私の頭に叩きつけられた出席簿が凄まじい音を立てる。叩きつけられた瞬間には既に土下座していました。いや、威圧感が半端じゃない。

っていつか絶対防御が発動しなかった？

『絶対防御の発動よりも早く、生身に攻撃が到達しました』

『……それ、人間として有り得る？』

『普通ならば有り得ません』

うわあい。さすがブリュンヒルデ、そんな限界お構いなしですか。ゾンビじやあるまいし。

「まあいい。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始める」

そう言われて横を向いた一夏が、再度右腕を突き出し、左手でがつしりと握り込む。

そうして数秒経つと、右手の平にはしっかりと《雪片式型》が握りられていた。便利だけど、実戦だと命取りだよね……。私ももっと精進しないと。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

そう言われ、一夏はうぐう、とでも言いたげな表情を見せる。ま

あ、一夏も頑張っているみたいだから、ちょっと不服なんだろう。まあ、ISも根源的には兵器なわけで、安全に扱うためには優しくしてられないんだろうな。

まあ、私は兵器にしたいくないんだけど。

『カオリはよくやっています。少なくとも、私を扱う技術はマイスターよりも上でしょう』

『そ、そうなの？』

『マイスターは母ですが、カオリは主です。その違いです』

『は、はあ……』

一応褒めてくれているらしい。まだまだこの子の考えていることはわからないことが一杯だ。

そんなことを考えていたら、既に話はセシリアさんの方に移動していた。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

そう言うと、腕を片と水平になるように上げたあと、ピシッと真横へ。目も眩むような閃光が一瞬だけ放たれ、そこには《スターライトmk?》が現れていた。おお、早業。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏める為に必要な」

「直せ。いいな」

「、……はい」

千冬さんに噛み付かんとも見えたセシリアさんだったが、口を開こうとした途端に千冬さんに睨まれて止まった。うん、その判断は正しいと思う。

けれど、千冬さんの言葉は正しい。特に、殺し殺されるの意味を知っている千冬さんの言葉は、重い。その重さが、私にとっては頼もしく、ありがたかった。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

なにやら慌てた様子で《スターライトmk?》を^{クロース}収納し、言われたとおりに近接用武装を展開する。

しかし、《スターライトmk?》のときとは対照的に光はただ零れるように収束せず、像すら見えてこない。ああ、やっぱり苦手なのか。

この量子変換は、操縦者自身のイメージによる。射撃特化のブルーティアーズに慣れているセシリアは近接用武装を滅多に使わないせいで、出すのに手間取っているんだろう。

そして、それは一夏にも当て嵌まる。日常で馬鹿でかい刀を手にするなんてまずない。だから、量子変換で武器を取り出すのに手間取ってしまうんだ。

……でも、私訓練機を使ったとき、結構簡単に収納も展開もこなせたんだよなあ。その辺どうなんだろう。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。 ああ、もうっ！ 《インターセプター》！」

とうとう武器の名を叫び、ようやく近接用のブレードが形となる。セシリアさんは屈辱だと言わんばかりの顔だったけど、個人的に

は武器の名前を言って呼び出すのはカッコいいんだよね……。

まあ、実戦でそんなことやってたら死んじゃうけど。

『そもそも、カオリの腕ならイメージだけで量子の固着化は可能で
す』

『あ、ありがとうイヴ』

『……？ どういたしまして』

なぜ礼を言われたのか分からないと言った様子だったけど、イヴ
はそう言った。

それが思いのほか可愛くて、思わず頬が緩んだのが誰にも見られ
ていなくて良かったと思う。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうの
か？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから、問題あ
りませんわ！」

「ほう。織斑、一之瀬との対戦で、二対一とは言え初心者に簡単に
懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

「ま、まあまあ織斑先生！ セシリアさんも人間ですし、まだ若い
んですから、それはこれから直していけばいいじゃないですか！
ね、セシリアさん？」

あんまりにセシリアさんが縮こまってしまっていたので、思わず
そう声をあげてしまった。

意外そうにこちらを見たセシリアさんと千冬さんに見つめられ、
こっちこそ息が詰まりそうになる。いや、セシリアさんはまだしも、
千冬さんまでそのリアクションって……。

「……まあいいだろう。一之瀬の言うことも一理ある。が、近接武器の展開ぐらい即座に出来るようにしておけ。それと、射撃武器を展開するときの癖も直しておくこと。いいな？」

「は、はい！」

「一之瀬、次はお前だ。近接用武装を展開してみろ」

「はい」

とうとう私の番が回ってくる。いい練習だと思ってやらせてもらおう。

頭の中で即座にイラストを引っ張り出してくる。試運転をしているときに何度か呼び出し^{コール}しているから頭の中に図案は入っている。

思い描くのは、一振りの刀。自分の背丈と同じほどの長さ、薄く鋭く、そして堅牢にしてすべてが黒に染められたもの。鰐は片翼を模し、柄は日本刀と同じ物。

考えた直後、左手の中にはそれが納まっていた。

近距離武装、《夜鷹》。梟に搭載された武器の一つだ。

「○・八秒、まあまあだな。次は――」

千冬さんがそこまで言った所でチャイムが鳴り響く。どうやら、今日の授業はこれで終わりらしい。

「時間だな、今日はここまでだ。織斑、グラウンドは片付けておけよ」

やれやれと言った様子で言う千冬さん。あ、あのクレーターを一人でやるんですか……。

ちよつと可哀想だとは思いつけど、ごめん。私は少しでも長くイヴと会話してみたいんだ。

後で埋め合わせしようかと考えつつ、今日の授業は終わりを告げ

た。とりあえず、変な挙動しなくてよかったあ……。

第6話 『あの子』（後書き）

大事なお知らせ。これでストックが尽きました。

以降は月村の魔女>ネギま>ISの優先順位で更新していく予定です。

ですが、一応不定期更新ですのでのんびりとお待ちいただければ幸いです。

それでは。

第7話 幼馴染と言う存在

「というわけでっ！ 織斑君クラス代表決定おめでとっ！」
「おめでとっ！」

現在時刻、夕食後の自由時間。ここからお休みまでは大分時間があるため、大体皆ここで好き勝手に行動しては怒られるものが出てくる。尤も、最近はそんなバカもいなくなってきた、ある意味つまらないと以前千冬さんが言っていたけど。

「……………」

この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の主賓である一夏は、文字通り固まっていた。

いや、時々溜め息をつくから完全に沈黙してはいないようだけど、こうなった原因の一人としては、ちょっと心苦しい気がしないでもないかな。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

相槌の人、さっきから同じ答えしか返してない気がするんですが。

「カオリ、大丈夫ですか？」

「え、なにが？」

「心拍数の増大が確認されます。若干緊張状態にあるかと」

そう言ったイヴの言葉には、AIのはずなのに奇妙な温かみがあった。

確かに、今私は結構緊張していたりする。だって、これだけ多くの同年代の女性との触れ合いは早々ないから。

教室では一応距離感が保てていたからいいけど、今日はなんだか皆が近い。女の子特有のフワツとしたい匂いが鼻腔を突いて、くらくらしそうだ。

『うん、大丈夫。多分ね。体調悪かったら戻って休むから、心配しないで』

『そうですか。わかりました』

そう言ってまた黙り込むイヴ。

うん、でも出会って時間は経ってないけど、イヴと私の相性は悪くないと思う。機体も割りと思うように動くし、飛ぶ時だって、イヴの補助があっただけど、ちゃんと飛べる。

だけど、いつかは。私の力だけで、イヴを空に行かせてあげたい。そう願っている。

チビチビとジュースとお菓子（夜食してもあんまり太らない体質だけど、昔からお姉ちゃんに肌が荒れるからやめなさいと言われてきたから、あんまり食べない）をつまみつつ時間が流れるのを待っている。

「それじゃあ、香織ちゃんも何かコメントくれない？」

「はいっ!？」

くっ、まさか私にまでコメントが振られるとは思わなんだ。恐るべし、なんとか先輩。

「って、どんなコメントすれば……」

「とりあえず、なんでクラス代表辞退したのかだけ教えてくれないかな？ セシリアちゃんが辞退したときには、まだチャンスはあったでしょ？」

「あ、ああ、そのときはあまり体調が良くありませんでしたし、話題性を考えると専用機持ちで且つ男性である一夏に譲った方が、何かとうまく行くかと思ひまして」

「おお、つてことはクラスのことを考えての行動だったんだね！ いい子じゃない！」

いえ、そういうつもりは全くございませんのですが。そんな私の言葉は多分届いてないだろう。

で、その後はなんか私と一夏、セシリアの三人で手を重ね合わせた状態でスリーショットを撮られた。正確にはシャッター押すまでの数瞬でかなりの生徒が乱入したけど。

「で、のほほんさん、どうして私に抱きついてるんですか？」

「かおりんが一番好きだからだよ？」

「あ、はあ……」

なんだかとても素直な言葉に、ちよつとたじつとしてしまった。いや、好きって言葉がライクの方だって分かってても、ぐらつて来ますよ。のほほんさん、美人さんだもの。

「そろそろ夜も遅くなってきましたし、私はこの辺で引っ込みますね」

「えー？ もう少しいなよー」

「夜更かしは美肌の大敵ですよ。それと、主賓が随分お疲れのようですから」

九時半を回ったところで、そろそろ助け舟を出そうかとそう言葉

を掛けてみる。

一夏は目に見えてぐったりしているが、それに気づいているのは誰もいない。皆、夜のテンションで通してるから疲れ知らずなんだろう。

だがしかし、そうやって油断しているとお肌は荒れ放題になるのです。なので私は引ッ込みます。いつかあった時に「あああああああ！ か、香織のお肌がああああ！」なんてことにならないように。

あの時はマジで困った。夜更かしせず、お肌をきちんと守ると言うことで開放してもらえたけど、そうじゃなかったら一日中引ッ付かれたかもしれない。まあ、弟可愛さみたいなもんなんだろうけどさ。もうアレはごめんだ。

で、私の言葉に反応した十数名は、乾いた笑いを発しながら自室へと引ッ込んでいった。お肌は大切だもんげ。

「一夏、大丈夫ですか？」

「うお、おう。なんとかな」

「あまり無理はしないでくださいね、明日に響きますよ」

「おう、ありがとな」

「いえいえ。纂さん、頑張って」

「へ！？ あ、ああ！」

「セシリアさんも、ですかね？」

「え？」

最後に我が友人達へと別々にエールを送り、ついでにセシリアさんの頭をぽんぽんとあやすように撫でてみた。あ、髪の毛サラサラだ。特に行動に理由はないけど、なんだか恋する乙女って可愛いなあと思っただけで。

とりあえず、その場で自分が何をしたのかに気づき、思わず顔を真っ赤にする。

「あ、ご、ごめんなさい！ つい！」

「え？ あ、いえ、大丈夫ですわよ？」

「すいません、ほんとにすいません！ それじゃあ、今日はこの辺で！」

何度か平謝りして、そそくさと自室へ戻る私。うわあ、なに自爆してんだ。っていうかなにやってんだ。

セシリアさんはなんとも思ってたみたいだけど、女性の頭を軽々しく撫でるなんて……！

ボタン、と音高く自室のドアを閉めると、ベッドに腰掛けて一息つく。のほほんさんはまだパーティーで弾けるらしい。若いつて凄いなあ。いや、私もそうなんだけどさ。

「……お風呂入る」

着替えを持って脱衣所へ入ると、梟だけを肌身につけてシャワー室へ入る。

梟は防水加工も完璧だから、この程度では壊れるなんて事はない。というか大体のISはそうだろうけど。

宇宙空間での使用が念頭において作られているはずのISが水に浸かった程度で壊れるようじゃ、とても使えた物じゃない。

『疲れましたか、カオリ？』

「うん、少しね」

シャワーを浴びながら、『僕』はそう答える。

ふう……、さすが女子のパワー、ちょっとやさつとじゃ終わりそうに無いなあ。

とりあえずシャワーを手早く浴びて寝巻きに着替え、梟を首にか

けて部屋に戻る。このシャワー生活も慣れたものだ。

ん、でもちよつとはお風呂に入ったりとかもしたかったり。

「まあ、贅沢は言えないよねー」

ねー。……うわ、寂しい。

のほほんさんはまだパーティーだし……、寝ようかな。

「よし、寝よう。寝よ寝よ」

……べ、別に寂しいわけじゃないんだからね！

……ぐすん。

朝。

もはや恒例となった五時半に起床し、歯磨きしてシャワーを浴びて、女装して準備完了した『私』は、のほほんさんと一緒に教室へ。……えー、と、ですね。何ですかこの騒々しさ。なんでこんなに皆テンション高いの？

「あの、箒さん？ これ何があつたんですか？」

「ん、香織か。いや、クラス対抗戦のために、一夏に発破を掛けていたところだ」

「あんまりプレッシャーを掛けてもしょうがありませんよ。過ぎた

るは猶及ばざるが如し、です」

『やりすぎることは、足らないことと同じように良くないということですね』

さらりとフォローするイヴ、グッジョブ。

こっちは防御が紙だけであんまり狙われず、一夏はかなりガードが固い分ガンガン攻撃される。どちらにしても面倒なことこの上ない。

「そ、そう言えば香織！ 今日転入生が来るらしいぞ！？」

「露骨な方向転換ありがとう、一夏。けど、この時期に転入？ 時期遅れの入学じゃなくて？」

「ああ。しかも、中国の代表候補生らしいぜ」

それはそれは……、一夏危うし？

クラス代表なんて、ちょっと小細工すればいくらでも変えられるし、代表候補生だったら尚更だ。

もし一夏とその代表が当たれば、多分今のままなら一夏は負ける。

「まーでも、今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ！」

クラスの女子が、一夏を励ますようにそう言う。

と、その直後。

「その情報、古いよ」

クラスの入り口から聞こえてくる声に、思わず顔をそちらへ向ける。

小さな体躯、ツインテールの髪。とても昔に、出会ったことの会

った子が、そこにいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「ふー、ちゃん？」

ポツリと、私の呟いた言葉で鳳鈴音と名乗った少女が目を見開く。ギョロ、とこちらに視線を向けると、ポカンと口を開けてふるふると震え始めた。

「か、かお、り……？」

「ふーちゃん、ふーちゃんなの！？ ど、どうしてふーちゃんがここに……？」

「ちょ、それはこっちの台詞よ！？ あんた、おと」

続く言葉は、しかし続かなかった。痛烈な打撃音によって遮られたから。

少女がずいっと後ろを向き、そしてそれ以上の勢いで仰け反る。

「入り口でギヤーギヤー騒ぐな。もうSHRの時間だ、教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません……」

若干イイ笑顔を浮かべながら言った千冬さんに、猛烈にビビりながら言う鳳鈴音、もといふーちゃん。

なんだかゴタゴタがあったけれど、ふーちゃんはあっという間に

二組に戻り、私はその日の午前中を悶々とした様子で過ごすことになった。

「……ふー、ちゃん」

ふーちゃん、凰鈴音は、私の幼馴染だ。

なんでふーちゃんかって言うと、小さいときに凰の字を風と間違えてふうちゃんって呼んだからなんだけど。

小学校のときにたまたま一緒に遊んでいて、それが縁で仲良くなった。

中二の時にふーちゃんが中国に引っ越してしまっただけからは、疎遠になっていたけど……。まさかふーちゃんが転校生だなんて。

……いや、待て。今目下の問題はそこじゃない。

『凰鈴音が、カオリのことを男だと知っている、ということですね』

『うん……。どうしよう……。』

『抹殺しますか？』

『その物騒な考えをしまつて。とりあえず、お昼休みに事情を説明して、黙っててもらうしかないかな……。休み時間だと短すぎるから』

まさか、こんなところから私が崩される危険性が出てくるなんて……。

……でも、ふーちゃんに会えたのは、嬉しかったかな。

第7話 幼馴染と言う存在（後書き）

はい、鈴音登場です。

早く代表戦まで行きたい……。しかし、急いてはことを仕損じるのだ。
それでは。

第8話 一段落？

「で」

「……はう」

「なんであんたがここにいるの？ 香織」

「……それは、その」

「女子の制服着て、一人称を『私』に変えて」

「えう……」

時間は流れてお昼休み。

食堂の端っこに陣取った『私』とふーちゃんは、とっても重たい雰囲気周囲に撒き散らしていた。周りの人たち、すいません。頑張って食事してね。

で、物凄く怒っているようなふーちゃん。何か赤い闘気のようなものが立ち昇っているのは気のせいでしょうか。

「……ねえ、香織。怒ってるわけじゃないの、本当に何があったの？」

「えっと……、初めからだと随分前になるんだけど……」

「いいわよ、全部話して。ご飯食べながらでいいから」

ゆつくりと、まるで赤ん坊に聞かせるように柔らかい声で言ってきたふーちゃんに何とかそう答えると、ふーちゃんはこくりと頷いて、喋るように促してきた。

怒って、ないのかなあ……。

「中学卒業前んだけど、家の前に篠ノ之束ちゃんが倒れてて、ご飯を作ったお返しにつて、ISに触らせてもらったら動いちゃって……。それで、自分の身を守るくらい強くなろうと思って、

ここに」

「ががつと端折った中に大分突っ込みたいところがあつたけど、この際それはスルーするわ。とりあえず」

スツと立つてこちらへやってきたふーちゃんを見て、思わず腰が引けてしまう。

そんな私に構うことなく、ふーちゃんは私の目の前までやってくると、私の頭へと自然に手を伸ばし、くしゃつと撫で回した。

「ただいま、香織」

「あ……、うん、お帰り。ふーちゃん」

一年ぶりの再会は、意外と涙腺を緩めてくれやがるらしいことだけは、判明した。

「落ち着いた？」

「うん……。ごめんなさい、泣いちゃって」

「くつ、違和感あるわね……。もっと男らしくなっているかと思つてたけど」

「ちょ、ふーちゃん！？ そついうことは……！」

「あ、ごめんごめん。オフレコだったわよね」

しっかりと再会したことを確認し、涙を零しながらも現状を伝えた私に、ふーちゃんは前と全く変わらない笑みを向けてくれる。

まあ、イヴのことまでは話せないんだけど……。それでも、こうして私を『僕』として扱ってくれるのは凄く嬉しいのだ。

「にしても、そこまでしてIS学園にねえ……。声が聞こえたつても、なんだかあんたらしいわよね」

「ほ、ほんとに聞こえたの！」

「ふふっ、はいはい。あんならほんとにそうなのかもね。それにしても、一年でまた一段と、綺麗になっ」

……へへん、私だって綺麗になりたくなっただけじゃないよ。もう諦めてるから美容も大切にしてるけどさあ……。

「それで、アンタはいま何処に住んでるの？ まさか……、寮？」

「うん。のほほんさん、って分からないか。うちのクラスの袖ぶらぶらさせてる子と相部屋」

「……へー、ふーん。そう。決めたわ」

「え？」

「その子と、部屋変わってもらっ」

「え、ええっ!？」

うわあ、凄いこと言い出したよふーちゃんが！

「その方がアンタも安心でしょ？」

「そ、それはそうだけど……。でも、他の人に迷惑だから……」

「……はあ。わかったわ、アンタがそういうならやめとく。けど、時々遊びに来なさいよ」

「う、うん。それはもちろん」

あれ、なんだか簡単に引き下がったなあ……。いや、食い下がられたらそれはそれで厳しいんだけど。

「それじゃあ、私は一夏の方に顔出すから、この辺で。ボロ出すんじゃないわよ？」

「ふーちゃんの方こそ、私のこと言わないでね」

「はいはい。それじゃ」

「うん、バイバイ」

軽く手を振り、駆けていくふーちゃんを見送る。……なんだか、小動物チックで可愛いな、なんて思ったのは内緒だ。言ったら多分ぶん殴られるだろう。

その日の夜、私は一人ベッドに沈んでいた。

今日は、色々と起こり過ぎている。幼馴染が二人揃ってIS学園に入学していることが、そもそもおかしいのだが。

一人目の幼馴染はまあわかっていたからいい。そもそも、その幼馴染に会うためにわざわざこの日本にまで戻ってきたのだから。

しかし、休日にも会えたらいいな、程度に思っていた二人目の幼馴染まで学園にいることには驚いた。

確かに昔から少女然としていたし、自分よりも数段可愛かったことも理解できる。だが、男だ。男なのだ。ということはつまり、二人目のISが使える男ということになる。

それを公表していないのは、一重に彼に後盾がないせいだ。

いかに世界を自分に合わせた天才とブリュンヒルデがバックにいても、所詮は個人。国一つが腰を上げればとても平穏な生活など送れないだろう。

「……守りたいな」

ポツリと、願望が口から零れる。

香織の周りは敵だらけだ。だからこそ、この身で何かが出来るかもしれない。

「にしても、なーんであんなに可愛くなつてんのよ！」

相変わらずの可愛らしさに、私はさすがに頭を抱えなくなる。なぜ女子の自分より男子のあいつの方が可愛いのか、ちょっと神様とやらをぶん殴ってみたくなってしまう。

しかも、勘の鋭い年頃の少女達を悉く欺いて既に一月以上が経過しているはずだ。……まさか、実は女の子でした、なんて展開はないわよね？

そう思いをめぐらせていると、突然ドアがノックされた。食事に行っていた同室の人がもう帰ってきたのだろうか。

「えっと、ふーちゃん。いますか？」

「香織？ まって、今開けるわ」

直ぐにベッドから降りると、扉の鍵を開けて中へ招き入れる。香織はTシャツ姿のラフな格好だったが、一応ブラジャーはつけているらしい。だって胸があるもの。……詰め物、よね？

それと、香織のほかにもう一人。あ、この人がのほほんさんね。

「えへへ、早速来てしまいました」

「お邪魔しまーす」

「……あーもう、ほんとに負けた気がする」

にこにこ笑って頬をポリポリと掻く香織を見て、思わずそうぼやく。ほんと、反則級に可愛いんだけどこの子。

「初めまして、凰鈴音よ。あなたがのほほんさん？」

「うん、布仏本音です。よろしくねえ、鈴ちゃん」
「え、ええ、よろしく」

この黄色い電気ネズミチックな服を着ている人がのほほんさん……。なんとというか、香織も心休まる人と相部屋になったのね。ところで、その耳や尻尾が言葉に合わせてひよこひよこ動いているのはなぜなのかしら。本物じゃないわよね？

「何か飲む？ ポリと爽健 茶があるけど」

「じゃあ、爽健 茶で」

「のほほんさんは？」

「私も同じでいいよあ」

「じゃ、ちよつと待ってて」

冷蔵庫から爽健 茶のボトルを取り出すと、三人分のプラスチックのコップに注いでいく。

ベッドに零さないように机の上に自分のコップを置くと、香織とのほほんさんにコップを渡した。何故か知らないけど、のほほんさんはさん付けしなきゃいけない気がするのよね。尊敬とかじゃないんだけど。

「なんだか、他の人の部屋って新鮮だあー」

「なーんか力が抜けるわね……」

「まあ、のほほんさんだから……」

その一言で片付いてしまうのは、どうなんだろうか。

「そう言えばふーちゃん、対抗戦に出るんだよね？」

「ええ、そうよ。一夏が代表だし、やる気も出るってもんよ」

「アハハ……。あんまりやりすぎないでね？」

苦笑いしながら言わないでくれると嬉しいんだけどなあ。

ともかく、こうして私の久しぶりの幼馴染との談笑は、友人を一人増やして続いたのだった。

翌日の放課後、『私』は自己練習のためにアリーナへと足を運んでいた。

『調整完了です、カオリ』

「ん、ありがと。管制システム、クレー射出！」

言った直後、上空へ右から左へと射出される黒色のクレーに狙いを定めて、『夜雀』の引き金を引く。本来なら弾幕を晴れるこれも今は単発射撃に変更しているから大きなハンドガンと大差ない。

設定した数は五〇個。そのうちの四二個を撃ち落した私は、軽く息を吐き出した。

やっぱり、射撃武器の精度はまだまだ甘い。四九、四八くらいまでは詰めたかったんだけど、やはり個人の技術では今はこれが限界か。

「管制システム、ターゲットを」

私の言葉に反応し、かなり遠い距離に人型のターゲットが三つ出

現する。

それをズーム機能を使わずに射撃し、撃った場所をズームして確認する。……中心から数ミリから一センチ強ずれてる。高機動戦じやまだまだ使い物にならないかな。

「精が出ますわね、香織さん」

「あ、セシリアさん。どうしてここに？」

「いえ、帰り際に丁度アリーナで訓練しているのを見かけまして。はい、スपोर्टリンク」

「あ、ありがとうございます」

梟をネックレスに戻すと、近くまで歩いてきたセシリアさんからペットボトルを受け取って一口煽る。汗をかいた体に、冷えたスपोर्टリンクが染み渡るようだった。

「それにしても、中々の腕ですわね。クレー射撃の方はズームは？」

「いえ、ズームせずにです。逆に反応が遅れますから。それに、ほぼ五分の一を撃ち漏らしてますから、あまりいい成果とは……」

「それでもすわ」

「あ、そう言えば、一夏はどうしたんですか？」

「一夏さんなら、今頃箒さんにしごかれてますわ。今日は箒さんの日ですから」

「へえー」

つまり、代わる代わる一夏に稽古をつけていると。一夏も大変だなあ。頑張れ男の子。私は傍観しておく。

「あ、そうですね。香織さん、回避訓練をなさってみる気はございませんこと？」

「回避訓練、ですか？」

「ええ。私のブルー・ティアーズのエネルギー弾を、一〇分間ひたすら避け続けること。一発でも被弾すれば即やり直しと言っのはどうでしょう？」

……つまり、全方位からの無差別攻撃を完全に回避する特訓か。有用かどうかは別として、機動性は確実に上がるかも。

「分かりました。それじゃあ、それが終わったら、次はセシリアさんの接近戦用武装の展開練習ですね！」

「うっ！？」 ま、まあ確かにそれも、必要と言えば必要ですね……」

接近されたときに咄嗟にガードできれば、それだけでも有用ですし……、なんてボヤキながら、一瞬で青い装甲に身を包むセシリアさん。

「それじゃあ、行きますわよ」

「はい！」

次の瞬間、私の周囲を囲む四機のビットから青い光が吐き出された。

第8話 一段落？（後書き）

次回辺りで対抗戦かも。

セシリアとの絡みはなんとなくです。セシリアさんちよろ可愛い。

第9話 戦う刻

クラス対抗戦。クラス内で決められたクラス代表同士が戦い、その腕を競う。

その戦いが、今始まるうとしていた。

第二アリーナにて始まるうとしているその戦いは、一年二組と一年一組の代表候補生、つまりふーちゃんと一夏の戦いである。

……どっちを応援すればいいかわからないので、とりあえず両方応援することにした。

ちなみに、私はアリーナの観客席にいる。丁度入り口付近だ。

『イヴ、どっちが勝つと思う？』

『スペックだけを見れば白式でしょう。ただ、凰鈴音シエンロンと甲龍コウリウの相性次第ではわかりません』

『そっか……』

イヴとそんなことを話しつつ、アリーナの中を見つめる。

その直後、試合開始の合図と共に甲龍が飛び出した。

刃を振るい白式の《雪片式型》を跳ね上げるが、即座に三次元躍動ツド・ターン回旋で甲龍を正面に捉えた白式を見据えて姿勢を正す。

「まだぎこちないけど、巧いね」

呟きは周囲の熱気によって掻き消される。

一拍を置いて再度攻勢に出た甲龍の攻撃は、まさに猛攻。自由自在に両の手で繰る刃が四方八方から繰り出されるのを、白式は悉く受け流す。この辺りは篤さんとの訓練の賜物なんだろうか。

幾度となく剣戟が振るわれこのままでは千日手かと思われた瞬間、甲龍の肩付近に浮遊する非固定浮遊部位アンロック・ユニットの装甲がスライドし、中心

に存在する球体が発光する。その直後、白式は何かに殴り飛ばされたように吹き飛ばされた。

「何が……？」

『衝撃砲でしょう。空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ちだす武装です』

『なるほど……。つまり、見えない大砲ってことだね』

『はい。しかも、角度の制限がほぼありません。真後ろまで視野があつたとしても、人間の腕は二本、真後ろに攻撃は届きません。そう言つた点でかなり強力な武装です』

バカス力と撃ちだされる不可視の弾丸を器用にも避け続ける白式を眺めつつ、イヴの解説を聞く。

しかし、一夏もよく避けるなあ……。辛うじて空間の歪みが見えるけど、これはなんとも。

そんなことを考えていると、両者が距離を離す。それとともに二人の間に流れる空気が変わった。白式の姿勢が加速体勢へと変わったのと、甲龍がその手に携えた刃を構え直したのは同時。

一瞬の静寂の後、一気に加速した白式の刃が甲龍へと届きそうになり。そして、けたたましい轟音と共に凄まじい衝撃がアリーナ全体を襲つた。

「なにっ!？」

『探知を掛けます』

すぐさまイヴが鼻を通してネットワークにアクセスし、何が起きているのかを調べ始める。

数秒後、イヴは直ぐにこちらへと戻ってきた。

『ネットワークへのアクセスがブロックされています。分かつた範

囲では、遮断シールドがレベル4に設定され、全ての扉がロックされているようです』

『ここから出ることは！？』

『正規の方法では不可能です。ハッキングも危険性が高く、余り推奨できません。それと、アリーナの中心に熱源反応を確認しました。ISのようですが、所属は不明』

所属不明のISに、遮断された扉……。状況から見て、そのISがハッキングしておかしくしたと見て間違いないか。

なんてことを考えているうちに、全身装甲フル・スキンのISらしき影と二人の攻防が始まっていた。

全身装甲なんて、いや確かに精神的にはそっちの方が楽だろうし、それなら顔も見えないだろうけど……。一体何のつもりで……？

思っているも、何も行動は出来ない。私には遮断シールドを解除する術はないし、扉も開かない。ハッキングはさすがにまずい。…

…結局、人頼みか。
最悪だ。

介入してきた謎の全身装甲フル・スキンと二人の戦闘が始まってから既に十分。

私は、貧乏ゆすりしつつも三人をじっと見続けていた。

「……イヴ」

『なんでしょう』

「このシールド、破る武装は」

『あります。《啄木鳥^{きつぎ}》を使用すれば、破壊できる可能性は十二分に』

その言葉を聞き、私は無言でISを起動させる。これ以上、職員
の到着を待つてられない。

私が行っても何も出来ないかもしれない。ただ殺されるだけかもしれない。だけど、これ以上二人が傷つくところなんて見ていられなかった。

確かに、一夏はだんだんと強くなってきているし、ふーちゃんも強い。それでも、私にだって何か出来ることはあるはずだ。

「かおりん」

「っ、のほほんさん……」

いつの間にか、のほほんさんが隣に立っていた。他の生徒達は入り口周辺でドアが開くのを待っているのに。

「行くつもりなの？」

「……はい」

「待っていれば、先生達が收拾してくれる。それでも？」

「待っているだけで解決することは、本当に一握りです。私は、自分に嘘をつきたくない」

「死ぬかもしれないよ？」

普段と全く違う鋭く切りつけるような言葉に、私は思わず足を竦ませる。

顔は見えていないが、声に感情が見えない。それが、どこか空恐ろしく感じる。

「……死ぬつもりはないよ」
「……ん」

途端に、のほほんさんの雰囲気に戻る。詰まりそうだった息が途端に喉から流れ出した。

「じゃあ、行つてらっしゃい」

「え？」

「死ぬつもりはないんだよね。だつたらいいよ」

普段と同じ雰囲気で、それでもはつきりとした口調で、のほほんさんが言う。

パシッ、と可愛らしいその小さな手で梟の装甲を軽く叩き、そつと微笑む。

「頑張つて」

「うん！」

大きく頷き、《啄木鳥》を展開。左手の下に巨大な杭打ち機バイルパンカーが形成される。杭から火薬の入っているシリンダーから、すべてが黒塗りだ。

既に周囲のざわめきは相当のものになっている。早くしないと。シールドの前で《啄木鳥》を構え、思い切り前へ突き出すと同時に一撃目を打ち出す。ガギンッ！　と言う音が鳴り響くも、シールドにはひびが入っただけだった。

「よし、いける！」

ガギンッ、ガギッ、バリンッ！

総計四本目の杭によってシールドが破られ、そこにIS一機分程度は通れる穴が開く。

「行ってきます！」

「うん、行つてらっしゃい」

最後に一度だけのほんさんの方を見て、それから勢いよく穴の開いたシールドを通り抜ける。

直ぐに《夜雀^{よじゃく}》を呼び出^{コール}した。マガジンに入る弾丸は五〇発、量子化しているマガジンは後五本。弾丸は日本の打鉄で使われているハンドガンのもと同じだから弾丸は確保できるけど、現状ではやや心もとない。

『イヴ、弾丸をホローポイントへ』

『了解』

マガジン内の弾丸がフルメタルジャケット弾からホローポイント弾へと変更される。攻撃性の高さを第一に選んで、三種類ある弾丸のうちこれを選んだ。ちなみに残りの一つは信号弾ね。束ちゃんの趣味だつて。

《夜雀》をフルオートへと変更し、即座に全身装甲へと照準を合わせて引き金を引く。

『ふーちゃん、一夏！ 無事！？』

『香織！？ あんた何してるの！？』

『説明はあと！ 怪我してない？』

『だ、大丈夫よ。一夏もね！』

『おう！』

ひたすら銃撃を行い、こちらへの行動を封じていく。ダメージは

入らなくても、それなりの足止めにはなる！

ガンガンと音高く全身装甲へと弾丸が当たっていき、だんだんと粉塵で視界が遮られ始めていく。

『香織、あいつ多分無人だ！』

『えっ！？』

『つまり、容赦しなくていいってこと！』

『イヴ、対象の生体反応は！？』

最後だけはイヴにだけ言う。返答は、No life。生体反応なし。

「香織っ！」

どちらが叫んだのか、気づくと私の真横から太いビームが私を狙っていた。

咄嗟に《夜羽》を展開し、なんとかそのビームを防ぐ。けど、これじゃあそう何度も防いでいられないか……。

『凄い、シールドをぶち破るほどのビームを！？』

『二人とも、残りのシールドエネルギーは！？』

『私は一八〇よ。一夏、あんたは？』

『八三だぜ』

『……一夏、策は？』

念のために聞いておく。

まずいな、マガジンがもう三本持っていかれた。もう半分しか残っていない……。

『鈴の《龍砲》を思いっきり撃ってもらって、それをエネルギーに

して『瞬時加速』で一氣に接近して、零落白夜で落とす!』

『……それじゃだめ。外れたときのリスクが大きすぎる。それに、万が一避けられたら落とされる』

『けど、これ以外に方法はっ!』

『ふーちゃん、攪乱用の龍砲、後何発撃てそう?』

『頑張っても一〇発が限度ね。どうするつもり?』

『……よし、私の銃弾が切れるのを合図に、ひたすらアイツの両腕を狙って龍砲を撃って。動きが止まっているときに私が近づいて斬りつけるから、一夏は後ろに回りこんでそこから零落白夜で斬って!』

つまり、ふーちゃんの援護射撃と共に私と一夏で挟撃する。少なくとも全員回避するだけのエネルギーは残せるし、そもそも様子を見られるほどのエネルギーは残されていない。

マガジンは残り二本。

『……わかった、それでいこう。ダメでもととだ!』

『無理しちゃダメよ! 二人とも、ヤバイと思ったたら引くこと!』

『了解!』

全員が全員の目を見て頷く。

直後、弾丸が切れる。

「一夏あっ!」

キイー……ン、という音と共に、その声が飛び込んできたのとは同時だった。

「箒さん!？」

『敵IS、篠ノ之箒をロック確認! 射撃体勢に入ります!』

「男なら……男なら、そのぐらいの敵に勝てなくてなんとする！」

イヴの声が聞こえる。全身装甲は、腕を篝さんの方へと向けた。先ほどまで私が乱射していた弾丸の残した粉塵のせいで、隣の二人にはその姿が見えていない。

キュイン、と全身装甲の腕にエネルギーが溜められ、撃ち出される。だめだ、エネルギーのチャージが速過ぎる！？

「っんのおっ！」

未完成な瞬間加速を発動させ、一瞬で敵ISの射線上へ。未完成だったからなのか、全身に恐ろしい激痛が走るが、そんなことは無視だ。

《夜羽》を展開、自分を覆うようにして相手の射撃を防ぐ。激痛のせいで一瞬意識が飛ぶかと思ったが、割と何とかなった。が、射撃が止まない！？

『ふ、うちゃん！ やって！』

『くっ、それを止めるってのよッ！ 一夏、行つて！』

意識が朦朧とする中、必死で個人間秘匿通信でふーちゃんへと言葉を送る。
プライベートチャネル

直後、独特の発射音と共に射線が大きく揺らいだ。どうやら衝撃砲が命中したらしい。

「うおおおおっ！」

粉塵の影で、黄金ともつかない単一技能の色に包まれた白式が突っ込んでいく。
ワンオフ・アビリティ

金属同士がぶつかり合った音とはとても思えないほど流麗な音を

立て、全身装甲の右腕が斬り飛ばされる。私の方に両腕を向けていたからか、反撃はない。

その直後、四機の蒼いビットから放たれたビームが敵ISを貫き、全身装甲が地面へと落ちていく。これは……！？

『お待たせしましたわ。大丈夫ですか、皆さん！』

『セシリア、さん……！』

『タイミングばっちりだぜ。さすがセシリアだ』

『あ、当たり前ですわ！ 私はイギリス代表候補生なんですから！』

わあ、可愛い照れ隠しだ。なんて思っていたら、視界の端に見えた。

残った左腕が、自分の右腕を斬り飛ばした一夏へと照準を合わせているのを。

「まずつ　！」

『カオリ！？　危険です！　カオリッ！』

軋みに軋む体に鞭打ち、危険だと声を上げるイヴすらも無視して、再度瞬時加速を使用する。

全身が、バラバラになりそうだ。頭が痛い。

「んぎつ、ああああああああ！！」

「香織、無茶しちゃ　！」

一瞬だけふーちゃんの声が聞こえた。

ガッンッ！　という例えようもない恐ろしいほどの衝撃と共に、防御のために再度広げた《夜羽》をビームの衝撃が襲う。

足が、腕が、千切れそうなほどに痛む。涙が出る。止まらない。ぐらぐらと、目の前が揺らいでいく。けど。

一夏がもう一度動き、斬り崩すまで。この守備は破られてはいけない。

「香織ッ！？ テメエエエエッ！」

「その手を、除けるオ！」

その言葉と共に、刃を振り下ろす一夏とふーちゃん。
ふっ、とビームが途切れ、私は意識を闇へと沈。

「……………篠ノ之さん」

既に夕暮れが近くなった廊下で、布仏のほとけ ほんね本音は声をあげた。
その目には憎悪とも取れる感情すら灯っており、身長差を感じさせないその威圧感に、篠ノ之しのだの ほうすけ箒は思わずたじろいだ。

「なぜ、あの場であのようなことをしたんですか」

「布仏……………？ 一体、何を」

「昼間の騒動のとき、なぜわざわざ自分の身を危険に晒したのですか。あの瞬間、あなたは何も出来なかった。なのにあんなことをしたせいで、香織は全身がズタズタに壊されたっ！」

「っ！？ そ、そんなに酷いのか……………！？」

まるで親の敵を見るような目をして叫んだ本音がつめより、ぐい

つと箒の襟首を掴み上げる。

普段と全く違う口調の本音に、箒はどこか薄ら寒い恐怖すら感じていた。

「力がないことを悪いとは言わない。ないことを悔やむことも、悲しむことも、持っている者に対して嫉妬することだって悪いだなんて言えない。だけど、それで誰かの足を引っ張るな！」

「わ、私だって何かしたくて！」

「あなたは、この学園に何をしにきているの？ 力を持つ者はそれ相応の責務を負わなければいけない、そのことを理解している？

あなたの身勝手な行動で、一人の人間が死に掛けたことを、本当に分かっているの？」

「あ、わ、私、は……！」

「……こないで。しばらく、私の前に姿を見せないで。こんなこと言いたくないけど、あなたを見ていると際限なく敵意が沸いてくるから」

奥歯をぎしりと軋ませて言い放った本音に、箒はとうとう何も言えなくなる。今まで、このおっとりしたクラスメイトが見せたことのない一面を見たことも、それによって突きつけられた事実も、彼女にとっては重すぎた。

箒は、ただ一夏のことを叱咤激励してやりたかっただけだった。それだけの思いで動いたから、この結果を生んだということには気づいていないが。

目を伏せ、箒はそっとその場を離れる。

一人になった本音は、ふと窓の外へと視線を向け、自嘲するように笑みを零した。

「……何やってるんだろうね、私」

それから少し後、ようやく面会が出来るようになった香織の元へやってきたのは、他でもない凰鈴音^{ファンリンイン}だった。

しかし、今一番話をしたい少年は、昏々と眠り続けている。

「香織」

呟く。

だが、それに応えてくれた少年は、いまだ眠ったまま。その事実

に、鈴音は拳を握り締めて涙を流す。
力があれば。自分が、一夏と香織を纏めて守れるほど強ければ、こんなことにはならなかった。

あの後、無事全身装甲を倒した一夏だったが、ダメージが蓄積していた香織は意識を失っていた。

バイタルにも影響が出るレベルでダメージを負っていたため、直ぐに精密検査を行われた結果、香織の体は無茶な瞬時加速の連続使用に、耐久度以上の《夜羽》の使用などによって相当なダメージを被っていたことが判明した。

「筋肉断裂に複雑骨折……。アンタ、これわかっててやったの……？」

患者の怪我の状態を記したデータを見て、鈴音は涙声になりながらもそう零す。

悔やんでも、悔やんでも悔やみきれない。もっと別の方法があったかもしれないのに。

『……凰鈴音。声が聞こえますか？』

「だ、だれ！？」

突然聞こえた声に、鈴音は咄嗟に周囲を見渡す。が、当然だれも

いなかった。

眠っている香織以外には。

『私はイヴ。梟に搭載されている人工知能、AIです』

『梟って、香織のIS！？ まさか、ほんとに！？』

『はい。梟に個人間秘匿通信プライベートチャネルで繋いでくだされば、こちらから特殊パスを繋ぎます』

『わ、わかったわ』

言外に「表沙汰には出来ないこと」を話すことを語ったイヴは、直ぐに回線を開いた鈴音へ向けて特殊回線を繋いだ。

『改めまして、凰鈴音。あなたには、私の存在を知っておいて貰いたいと思い、こうして話しています』

『どうということ？』

『現実での協力者が少ないのです。現在私の存在を知っているのは、マスターであるカオリとチフユ、そして製作者のタバネだけです。あなたには、現実でのカオリの支えになると共に、今日のように不測の事態でカオリが墜ちた場合に、カオリが周囲に男だと呼ばれる危険性を少しでも減らす手伝いをして欲しいのです。無論、これ以上カオリを傷つけさせるわけはありませんが』

何処か悔しげな色を浮かべ、イヴはそう語る。

現実で、彼女は無力だった。どれほど言葉を並べても、それが形を成すわけではない。結局、自由に出来るのは電子の世界までだった。

だが、この少女は違う。現実には肉体を持ち、香織と共にいられるならば、協力関係を結んでおくべきだと考えた。

『カオリは、心が徐々に軋み始めています。自分の事を隠して生活

することが、想像以上の負担になっているのでしょうか。あなたには、それを和らげてあげて欲しいのです』

『……いいわよ。私が何か出来るなら、何だってする。あなたも、そうでしょ？』

『当たり前です。カオリは私の主ですから。尽くすのは当然です』

はつきりと、無機質な音声でそう断じたイヴに、鈴音は思わず小さな笑みを零す。

一番つらいのは鈴音ではない、眠っているこの少年なのだから。

「いつまでも、くよくよしてらんないわね。私が、香織を守ってみせる」

決意を口に、鈴音はそつと香織の頬を撫でた。

本当ならば眠り姫に口づけの一つでもしてやろうかと思ったが、自分はそこまでロマンチストではないし、やるのだったらもったいい場所の方が雰囲気があると思いやめたのだ。

ファーストキスは消毒液の味、なんてことはあまり経験したくないものだから。

第9話 戦う刻（後書き）

へへ、シリアスだって。

おかしいな、本当ならのほほんさんがこんなにブラックじゃないはずだったのに。

のほほんさんは、自分でもどうしてこうなったかわからない。けど、
第の原作でのあの行動はお咎めされてしかるべきだと思います。あれはまずいでしょう、いくらなんでも。

なので、ちよつと大事にしてみました。

あ、感想なんかいただけるとすっごい喜びます。なのはの方も空白期に入ったからか、めっきり感想が減ってちよつとしおしおになつております。よかつたら書いていってくださいませー！。

次回は、香織の姉が登場……？ かも！

第10話 穏やか医務室

「……んっ」

目が覚めた。

いつから眠っていたのか、記憶がない。確か、代表戦に横槍入れて無人の全身装甲と戦って、それで……。

「……そっか、それで倒れたんだ」

ようやく思い出せた。それと同時に、消毒液の臭いがツンと鼻腔を刺激する。……なんだか嫌な気分になった。

ふと、ベッドの左右に重みを感じた。そこにいたのは、ツインテールの少女と茶色の髪をショートカットにした……。

「……あれ、お姉ちゃん!？」

つとと、なんとか声を抑えながら叫ぶ。なんでお姉ちゃんがここにいるんだろうか。もしかして、もう僕のことばれてる？

でも、なんでふーちゃんとお姉ちゃんが一緒になって寝てるんだろう。ずっと傍にいてくれたのかな……。

「痛っ……!」

ふーちゃんの頭に右手を伸ばそうとした瞬間、右腕を思い切り壊されるような痛みが走る。あまりの激痛に、私はその場で顔を顰めて背を丸めるしかできない。

『目が覚めましたか、カオリ』

『イヴ、ごめん。無茶して』

『構いません、とは言えませんか。これからは出来る限り無茶は避けてください』

『うん、善処します』

まるで理解しているように思えませんが、とイヴに溜め息交じりに言われながら、あの後自分がどうなって、何日経っているのかを聞いてみる。

『あの戦闘の後、カオリはすぐに緊急処置室へと運び込まれました。チフユの手助けもありカオリが男性だとばれることはありませんでしたが、傷の具合はあまりよくありません。双腕部の筋肉はしばらく動かすどころか触れるだけでも激痛が走るはずです。さらに、超急加速と急停止、そして相手からのエネルギーの余波の影響で内臓器官もひどいダメージを負っていました。梟の機能をフル活用したおかげで内臓器官へのダメージはほとんど回復していますが、それでもしばらくは苦勞することを覚悟してください』

マシンガントークとはまさにこのことが、一気に怪我の状況を解説された。

それによれば、僕の体は割とスタボロになっているらしい。立つて歩く程度なら問題ないが、ISでの戦闘はしばらく無理だそうだ。

『それと、あの戦闘からはすでに三日が経っています』

『えっ、そんなに!?!』

『はい。ただ、三日間寝たきりだったおかげで体力と内臓器官のダメージはほとんど回復しています』

『……でも、なんで梟に回復機能なんて付いてるの?』

『タバネの配慮では?』
『ともかく、あと一週間もすれば腕の方もまともに動かせるはずですよ』

一週間……、その間食事はどうしようかな。まさか食べさせてもらって訳にも行かないし。

というか、どうしようかこの両サイドの二人。とりあえず起こすべきかな……。心配掛けちゃったみたいだし。

「えっと、二人とも！ 起きて！」

「……ん、んんっ……？」

「あれ、今何時……」

おほう、寝ぼけていらっしやる。いや、可愛いけど今って何曜日だっけ？ 日の昇り具合から言って普通の時間帯だと思うけど……。二人とも大丈夫なんだろうか。

「お姉ちゃん、ふーちゃん！」

「あ、れ、か、香織！？ 目が覚めたのね！？」

「香織……！ 良かった、良かったよお……！」

……えっと、ちょっとまって。痛い、痛いんですけどふーちゃん！？

あとお姉ちゃん手を持たないでめっちゃ痛いから！ 泣くよ！？ 年甲斐もなくみつともなく、どうしようもなく泣くよ！？
と言いたいのに、悶絶して体を震わせることしか出来ない。

「……あれ、香織？ 香織！？」

「ふ、ふー、ちゃん、痛い……！」

「あつ、そっか怪我！ 葵義姉さん、怪我！」

「え？ あ、ああ！ ごめんね香織！ 痛かった？！」

痛かったです、物凄く。

だけど、それ以上に二人が僕を心配してくれていたのが凄く嬉しくて、とりあえず今は笑っておくことにした。

それから数分は僕の目が覚めたことを喜ぶ二人をずっと笑っていた。

二人とも僕が寝ている間に仲良くなったらしくて、お姉ちゃんを「義姉さん」と呼ぶほどに仲がよく……、あれ？ おかしい？

「それで、腕以外にはもうほとんど治ってるのね？」

「うん、そうみたい」

「つたく、無茶するんだから……。のほほんさんに一夏にセシリア、それに千冬さんも心配してたから、お見舞いに来たらちゃんと御礼して謝んなさいよ？」

「わかってるよ。助けに行ったのに、助けられちゃったしなあ……」

二人の言葉が耳に痛い……。

でも、あの無人ISは一体なんだったんだろう。何の目的があつて……。

「……痛っ」

「ほら、難しい顔してるわよ。アンタは今は休めばいいの。それだけのことをしたんだから」

「お姉ちゃん……」

ペシッ、と僕の頭を平手で軽く叩いたお姉ちゃんが、二カッと笑ってそう言ってくれる。

こういうところは、本当にいいお姉ちゃんなんだよなあ。

「そうそう、義姉さんの言う通りよ。まずは体を治して、後はそれから考えましょう」

「……ねえ、ふーちゃん？ なんでお姉ちゃんのこと義姉さんって

呼んでるのかな」

「え」

ほっほっほ、濁点付きの濁った「えっ」が入りましたぞ。……キ
ヤラおかしいな、疲れてるのかな。

いや、ほんとになんでお姉ちゃんのこと義姉さんって呼んでるん
だろう。別に僕と夫婦だとか恋人だとかってわけじゃないのに。

「ふふふ、鈴ちゃんったらね、お姉ちゃんに」

「わー！ わーわー！ 義姉さん、それは言わないって！？」

「あれ、そうだったかしらー？」

「お願いします勘弁してください！」

「ふーちゃんが敬語！？」

……うん、どうやらふーちゃんの中でお姉ちゃんの脅威度は千冬
さん並になったらしい。ふーちゃんって、千冬さんの前だと敬語に
なるんだよね。

結局、なんでふーちゃんがお姉ちゃんのことを義姉さんと呼んで
いるのかは分からなかった。言おうとする度にお姉ちゃんのことを
ふーちゃんが阻止するからなんだけど。

「ところで、今日って何曜日？」

「月曜日だけど？」

「授業は？」

「公欠を貰って来てるわ。鈴ちゃんもね？」

……もらえたのか、公欠。というかそれってもらえるものなの？

「織斑先生が協力してくれたのよ」

「へえー……」

具体的にどう協力してくれたのかは聞かないことにしよう。なんか怖そうだし。

「って、僕の単位は……？」

「アンタも公欠だから、後で補習だって」

「うええ……」

勉強が嫌いって訳じゃないけど、やっぱり補習と聞くと嫌になる。うんざりしていると、突然お姉ちゃんが顔をぐいつと近づけてきた。真顔で。

「……ねえ、香織。大体の事情は鈴ちゃんから聞いたわ。どうして私に秘密にしていたの？」

「えっと、心配掛けたくなかったし……。ちゃんと言おうとは思ってたんだけど、何組かとか知らないし、変に聞いて身元がばれれば大変だし……」

「……そっか。うん、じゃあこれからは存分にお姉ちゃんを頼りなさい！ いい！？」

「あ、うん……、ありがとう……」

嬉しいけど、うん。あんまりお姉ちゃんに負担かけたくないんだよね……。

……あ、ご飯どうしよう。一週間ご飯抜きはさすがに死んじゃうと思うんですが私？

「ま、落ち込むことないわよ！ 補習は合同らしいから、一緒にやりましょ」

「そうなの？」

「……私は一緒じゃないんだけどな……」

「お、お姉ちゃん……」

学年違うんだからそりゃあそうだと思うよ。
けど、ふーちゃんと一緒なら少しは気が楽かな……。

「そろそろお昼だし、ご飯貰ってくるわね」

「それじゃあ私は、織斑先生に香織が目覚めたことの報告に行
つて来るわ。大人しくしてるのよ？」

「さすがにこの状況で動こうとは思えないよ……」
「よろしい。じゃあ行つて来るわね」

そう言つて、ふーちゃんとお姉ちゃんは病室から出て行つた。
ふう……。とりあえず、休もう。色々考えたいし。

『……イヴ』

『はい』

『僕は、弱いね』

『……はい』

『強くないと。もっと、今よりもっと強く』

『……はい。一緒に、進んでいきましよう。私はあなたをサポート
するために生み出されたのですから』

まったく、イヴって本当に機械らしくない。それがまたいいんだ
けど。

ぼんやりと考えていると、突然医務室のドアが開く。

ちなみに、今医務室には僕以外の患者はいない。医務室に数日に
渡ってかかりつきりになるような人はそうそう出やしないからだ。

「かおりーん、目が覚めたの？」

「のほほんさん？ ごめんなさい、心配掛けて」

すぐに僕を『私』に切り替え、入って来た少女に対応する。
相変わらず袖を伸ばした制服を着ているのほほんさんは、私を見るとあからさまにほっとしたような顔で傍へ寄ってきた。

「今、お昼休み？」

「うん。途中で鈴ちゃんとすれ違ったよお？　なんだかすごい嬉しそうな顔してた」

「そうですか」

「かおりん」

「はい？」

「ていつ」

短い言葉の応酬の後にやってきたのは、軽い衝撃。

肩から腕にまでは衝撃を伝えないようにゆっくりと、けど少しだけ痛みを感じるように鋭く繰り出されたチョップ。

なぜ突然こんなことをするのかと抗議の視線を相部屋の友人に投げかけてみれば、彼女はちよっとだけむくれるように頬を膨らませ、腰に手をやっていた。

「危なくなつた罰だよ」

「え、理不尽」

だよ、と続けようとした口を、のほほんさんの人差し指が塞ぐ。
まるで映画のワンシーンのように軽やかに、それでいて普段ののんびりとした雰囲気も一緒にあつて。

むくれていた顔がいつの間にか笑顔に変わっていることに気づいて、私も思わず笑みを浮かべた。

何を言うでもなく私とのほほんさんがただ笑い続けていた時、まともやドアが開かれた。今度はやや乱暴に、だが。

「香織、ご飯持ってきたわよ。お腹空いてるでしょ」

「ありがとう、ふーちゃん」

「あ、鈴ちゃんだー。さっきぶりー」

「さっきぶり、のほほんさん」

扉を開けて入って来たのは、その手に二人分の食事を携えたふーちゃんだった。

っていうか、出て行ってから一〇分経ってないんだけど。

「鳥のから揚げに白いご飯、お吸い物に沢庵。好きでしょ？」

「うん！」

「……アンタ、なんか子供みたいよ？」

「失礼な、そんなことないよ！」

「んーん、かわいいよー？」

のほほんさん、それはフォローになってないです。

まあでも、とりあえず今日が平和だからいいかなあ、なんて考えてみて。

後のことは、後になってから考えることにした。

「いただきます！」

「はい、いただきます」

第10話 穂やか医務室（後書き）

お姉ちゃん登場。イメージ映像的には「とあ禁」の「御坂美琴」が成長した姿、的な。今目に付いた御坂がイメージに似ていたのを見た目そんな感じです。

さて、ここから物語がどう動くのか……、私も若干不安でございますが、お付き合いくださいませ。

第11話 嵐の前

僕が起きて、そして『私』として再び復歸したのは、怪我が少し治り始めた四日目からだった。

「はい、あーん」

「あ、あーん……」

え、今何してるのかつて？

……のほほんさんにご飯を食べさせていただいております。昼食を。

腕の痛みは大分引いたけど、腕が恐ろしく重いせいでまともに茶碗一つ持てやしない。そのせいでご飯も「はいあーん」が続いている。正直言うとかかなり恥ずかしい。

ふーちゃんとのほほんさんが替わりばんこで私にご飯を食べさせることになっているらしいのです。誰か助ける。他の人ならいいって訳じゃないけど、かといってこれは公開処刑に等しいと思うんだ。

でも、女子通しで食べさせあいとかつて普通なのかな？ 皆割りとスルーしてるけど。

あ、ちなみに医務室にいたときに他の皆もお見舞いに来てくれたんだけど、何故か箒さんだけ居心地悪そうにしていたのを覚えている。なんでだったんだろうか。

「美味しい？」

「う、うん」

「よかったー、お料理は久しぶりだったんだあ」

嬉しそうに微笑んで、自分も食事を続けるのほほんさん。……あ

の、その箸って私の口に入っただけじゃ……。いや、今私は女性として通ってるから、別に気にしないってのは分かるんだけどね……。

「今日の実習も見学するの？」

「まだ、まともに動かせませんから。皆が頑張る姿をのんびり見学させていただきます」

本当は私も参加したいけど、今出れば体を更に痛めるだけで終わってしまうだろうから、ここは我慢だ。

イグニッション・ブースト
まずは瞬時加速を完璧に使いこなせるようにしよう。なぜあんなに過負荷が掛かったのかも調べないと。

「そう言えばのほほんさん、クラス対抗戦って結局どうなったんですか？」

「そのうち再試合だってー。あんなことがあったあとだから、慎重になってるんだと思うよあ？」

「それもそうですよね。一夏も不憫だなあ……」

そんな話をしている最中に、私の携帯が鳴る。

そのディスプレイに映し出されていたのは、「束ちゃん」の四文字だった。

「うええっ!？」

「どったのー？」

「あ、いえ、ちょっと電話するので、外行ってきますね!」

「え? あ、うんー」

慌ててのほほんさんに断りを入れると、人氣が少ない廊下の隅に行って携帯を開く。

「もしもし？」

『もすもす終日ー！^{ひねもす} 皆のアイドル束ちゃんだよー！』

「いきなり電話掛けてこないでくださいよ！ びっくりしたんですから！」

『あははー、ごめんごめん！ ところで、この前の襲撃事件をモニターしてた時、梟が変な挙動をしてたんだけど』

束さんにかかればISの情報封鎖も紙同然か……。
つて、変な挙動？

なんて考えているとあつという間に腕が重くなってきたため、とりあえず窓枠に腕を預けて楽な体勢を取る。

「それってどういうことですか？」

『うーんとねえ、絶対防御が発動してないんだよ。より正確には、生命維持機能が完全に死んでた』

「じゃあ、この大怪我もそのせい？」

『多分そうだと思うよ。ちよつと見ておいてくれないかな？ 怪我が治った頃にお呼びたてするからさ』

「わ、わかりました。イヴに言えばいいんですか？」

『そゆことだねー。あ、そうそう！ 本社はちよつと面白いところに作ってあるから、呼んだときには一旦家に戻っててね？』

「あ、はい」

思わず頭を下げつつそう返事をする、束ちゃんは満足そうな声と共に電話を切る。

……絶対防御が発動してないって、どういうことだろう。まともに動けるようになったら見てみることにしよう。

「……さて、と。コーヒーでよかったか？」

「あ、は、はい！」

「そう固くなるな。楽にしろ」

時は流れて夜。

『僕』は何故だか千冬さんに呼び出されて寮監室にいた。それにしても、あんまり片付いてな

スパアン！

「……Why？」

「ふむ、妙なことを考えていただろう」

「なぜわかるんです！？」

「フィーリングだ。何か入れるか？」

「あ、ミルクとガムシロップお願いします」

わかった、と小さく頷いて、千冬さんは片方のコーヒーにミルクとガムシロップを入れる。

先の方に小さく掬う部分がついた細いスプーンが入ったマグカップを受け取ると、掻き混ぜつつ一口飲む。

「美味しい……」

「私だってコーヒーくらい淹れられるさ。で、本題に入るが、いいか？」

「あ、はい」

「先日の無人IS襲撃事件、私達はあの無人ISをゴーレムと呼称しているが、あのゴーレムには未登録のISコアが使われていた」
「え!？」

思わず声を漏らしてしまった。

未登録の、ということはつまり、どこかの国や企業がISコアの製造に成功したか、もしくは……。

「束ちゃんが、関わってる……?」

「というより、あれは全て本人の仕業だと自分で白状したぞ。ただ、行った本人が言うのも気まずいし、ちょっと気がかりなことがあるから私から伝えておいて欲しいと言われてな」

「……束ちゃんは、何を目的に?」

「さあな。だが、あいつを信じてやってくれないか。友人としての頼みだ」

「……はい。僕も束ちゃんの友達ですから」

千冬さん自身も齒がゆい思いなんだろう、自分の飲み物に視線を落として溜め息をついている。

かと思いきや、おもむろに立ち上がると冷蔵庫から缶ビールを取り出してプルタブを、

「つて、いいんですか!？」

「ん、ああ。気にするな。口外禁止だぞ。さっきの束の件も合わせてな」

「おまけのように言わないでください!？　まあ、わかりましたけど」

生徒の前でがつつりビール飲む先生ってどうなんだろう。うち

はお酒飲む人いないしなあ……。

「ん、飲むか？」

「飲みません」

「そうか」

素気無く断ると、千冬さんは言葉少なくまた一口呷る。

しばらく無言で飲んでいた千冬さんと僕だったけれども、やがて千冬さんが口を開いた。

「一之瀬、学校生活はどうだ？」

「え？」

「一夏の奴はそれなりに馴染んで、友人もキチンとできている。そう心配することはないんだが。お前の方がどうかわからなかったかな」

えっと、これは僕のことを心配してくれてるんだろうか。

「今のところは、大丈夫です。ばれてはいないみたいですし。お姉ちゃんにも打ち明けて、ふーちゃんとも再会できて」

「……どうやら、本当に大丈夫らしいな。ほぼ女子校のようなこの場所がストレスになっていないかと心配していたが、杞憂だったらいい」

「ありがとうございます、心配してくれて」

気にするな、と千冬さんは薄い笑みを浮かべ、缶の中に残っていたビールを一気に飲み干す。その様子が妙に色っぽかったのが印象的だった。

「さて、そろそろ時間も時間だ。呼びつけて悪かったな」

「いえ、ちょっと楽になりましたから。今度束ちゃんに会ったら、一言くらい言っておきます。束ちゃん自身も危なくなっちゃったってありますから」

「存分に言ってやれ。就寝時間は守れよ」

「はい。それでは、失礼しました」

一礼し、扉を閉める。と、自分の部屋の方からがやがやと声が聞こえてきた。ふーちゃんとお姉ちゃんが部屋に来ているのだろうか。そう考えて、僕は自室へと戻る足を少しだけ速めていた。

香織が出て行ったあと、千冬は大きく溜息を吐きだすとノートパソコンを開き、一つのウィンドウを呼び出す。

「これでいいのか、束？」

『うん、ありがとねえ！　ちーちゃん大好き！』

「それで、調べ物は終わったのか？」

『……うん。終わったっていうか、終わらされたっていうか』

「……どういうことだ？」

ハイテンションから一転、世界を変えた科学者はしんみりとした口調に切り替わる。

その背後では、数多くのディスプレイの中でウィンドウが開いたり閉じたりとせわしなく動いていた。

『香織ちゃんの戸籍をもう一回調べてみたんだけどね。おかしいんだよ、肉親のデータ』

「なに？」

『戸籍では生まれて間もない頃に死んでいることになってる』

「だが、あいつは物心ついてすぐに死んだと言っていたはずじゃなかったか？」

『そう。それをとっかかりにしているいろ探ってみただけだね？世界中に繋がったよ、データが』

「なっ……！？」

ウィンドウの向こう側で、珍しくしんみりとした顔の彼女に思わず喉に言葉を詰まらせて目線を返す。

「一之瀬の両親は普通のサラリーマンと専業主婦だったはずだ！？一之瀬姉の時にはそれは確認した！」

『じゃあ、それが間違ってるんだらうね。多分生きてるよ、両親両方とも』

「……はあ、しかも本人はそれを知らない、と。どうなってるんだ全く」

『もしかしたら香織ちゃんのIS適正とも何か関係があるかもしれないし、色々調べてみるねえ』

その言葉と共にウィンドウが消え、室内に静寂が訪れる。

その中で、千冬は一人天井を見上げた。

とてつもなく大きな嵐が迫りつつあることを感じながら。

第11話 嵐の前（後書き）

次回から2巻の内容に突入。

香織を取り巻く事象の系は収束を始めていく。

第12話 Bind Company

腕が完全に回復した後の日曜日、僕は一人で自宅へ戻っていた。というのも、以前束さんから言われた『メンテナンス』を受けるために、束さんの迎えを待っているわけで。

「一〇時……、そろそろかな？」

「……りちゃん！」

「ん……？」

家の前で待っていると、どこから声が聞こえてくる。右でも左でもないし、前でも、もちろん後でもない。……まさか！？

「上！？」

「だーいせーいかーい！ ドーンっ！」

「うわぁっ！？」

突然の轟音とともに降ってきたのは、何やらよくわからない機械に乗った束ちゃんだった。相変わらず突飛な行動しかないということかなんというか、とにかくすごい人だ。

束ちゃんは面白そうに機械から飛び降りると、ひよこひよこことこちらへ近づいてくる。小動物チックだ。

「ひっさしぶりだねー香織ちゃん！ どう、その後いいことあった？」

「まあ、幼馴染にも再会できましたし、そういった意味では」

「そっかそっかー、じゃあ今度はその幼馴染ともお話しよっか！」

ひうつ！？ な、なんかお話って言った瞬間に背筋を怖気が走っ

たのですが!?

「ん、どうしたの香織ちゃん?」

「えっ!? あ、ううん、な、何でもないよ!?」

「むむう、まあいいや。とりあえず乗ってよ!」

そう言って束ちゃんが、自分の乗ってきた妙な機械を起こすとペシペシ叩く。

よくSFとかでありそうな、宙に浮くバイクのようなもの。結構大きいけど、駆動音が全くない。それどころかどんな燃料を使っているのかすらわからない。

「おやおや、これが気になるのかな?」

「これ、なんですか?」

「暇つぶしに作ったマツハバイクだよ! ま、IS使った方が速いんだけどね」

ちなみに絶対防御付きです、なんて面白そうに言った彼女の規格外さを、改めて痛感させられる。

ISコアは積んでないんだろうけど、むしろそれ抜きで絶対防御機能を使えるようにするというのはなんとも信じがたいことだ。必要な事態にはなってほしくないけど。

さあさあさあ! と束ちゃんに急かされてバイクの後ろに乗り込む。意外とシートはゆったりしていて、跨っても大して違和感なく座れた。無駄に座り心地抜群である。

「さあ! 束ちゃんお手製の本社まで、レッツゴー!」

「え? ひっ、わああああああ!」

お花畑が見えました。

『制限速度？なにそれ美味しいの？』ばりに街道を突っ走ったバイクは、いつの間にか海上を走行していた。いや、え？ バイクって陸上を走るものであって、海の上を滑走するものじゃないはずなんだけど。

そんな疑問を提示することすらできず、僕は束ちゃんの後に続いてなんとか小さな島へと降り立った。

しかし、なんだ。日本にこんなジャングルチックな島が存在していたのかと思わず目を疑うほど、鬱蒼と生い茂る木々が見える。

「えつと、ここは？」

「へーん、私の立ち上げた『バインド・カンパニー』の本社だよ！ ちなみにジャングルは束ちゃんお手製のホログラフィックでござーい」

「……もう突っ込みきれません」

「んー、まだまだあるよ？ 島の中を巡回してる交戦可能なアニメルロボットとか、この島にあるラボとかね？」

歌うように続ける束ちゃんの後に続いて、ホログラムらしいジャングルの中を歩いていく。しかし、なんでホログラムに質感があるんでせうか。

しばらくホログラムジャングルの中を歩いて行くと、突然開けた場所に出た。森の中の広場のようになっているその中央には、と

んでもない大きさの大樹が聳え立っている。

束ちゃんはその樹に近づくと、おもむろに手の平を大樹の表面に押し付ける。すると、ロックが解除されたことを知らせるブザー音とともにエアロックも解除され、手の平を中心として大きな扉のよう
うに表面が開く。

「うわっ……」

「ふーん、ここがバインドカンパニー地球本社の入口だよ！ ちなみに、今のところ社員は私と香織ちゃんのみだけどね！ はい、これ社員証」

「あれ、意外と普通」

「防刃防弾耐レーザー加工などなど、あらゆる攻撃や衝撃に耐えられる加工済みだけどね！」

「じゃなかったー」

恐ろしいほど技術が無駄遣いされた、名刺サイズのメタリックカードを受け取る。重いような軽いような、奇妙な重量感。

開いた扉の中は、鋼鉄によって作られたエレベータ。束ちゃんは躊躇いもせずにそこへ乗り込むと、早く入るように僕を手招き、乗り込んだところで社員証を、普通はボタンがある場所に設置された何かの機械に翳した。

すると扉が自動的に閉まり、あのエレベータ独特の浮遊感とともに下降していく。

「さて、と。イヴ、オープンチャネル開放通信で話して大丈夫だよ」

「わかりました、マイスタータバネ」

「イヴ、どうして黙ってたの？」

「周囲を警戒していました。それと、盗聴などのデータを削除し、こちらのことを勘づかれないように」

どうやら、今までイヴが全然喋らなかったのは僕たちの情報を漏らさないように警戒してくれていたからだだったらしい。そりゃ、僕も束ちゃんも機密の塊なんだし、見つかったらまずいよね。

束ちゃんはその辺もわかってたみたいで、どうやら僕も少しばかり浮かれていたようだ。注意しないかね。

「それにしても、凄いなここ」

「そりゃあ天才の束さんにかかればこのぐらい夜食前だよ！」

「朝じゃないんだ」

「肥りますよ」

「大丈夫だもん！ 乙女は太らないの！ うん だってしないもん！」

「束ちゃん、それは無理があるよ。というか女の子がそんなこと言わないの、はしたない」

……いや、僕だって男だし今の発言はちょっとばかり恥ずかしかったけれども。そういうところはびしっとしないとね。

そんなアホなことをしているうちに、音のないエレベータは本社内部に着いたらしい。

エレベータから降りた僕を待っていたのは、白銀によって彩られたＩＳラボ、休憩所、研究室、事務室などなど、昨今ＩＳに手を出している会社なら大体が持っているようなものの中でも最上級に位置する設備だった。

「電子機器関連はぜーんぶ私が作ったし、他のものも束さんのパートナーが提案して作ってくれたんだー」

「パートナー？」

「そ。ハル！」

『おかえりなさい、お母様。そして香織、イヴお姉様。ようこそバインド・カンパニーへ』

突然、各所に設置されたスピーカーから音声 flowed。イヴとはまた違う合成音声ながら、同じように全く不自然さを感じない。

「ただいまー。コーヒー淹れといてねー。それと、香織ちゃんに案内お願い。イヴにはマップデータ渡しておいて」

『わかりました』

「香織ちゃん、案内が終わったらご飯にしようねー！ 私は先にラボにいつて調整してるから！」

「あ、うん！」

あはは、あははー、なんて言いつつ束ちゃんは物凄い勢いで走り去っていく。で、結局パートナーについての説明はなし？

『私は『HAL-3000』。お母様、つまりマイスター束により作り出された人工知能、AIです。ハルとお呼びください。イヴお姉様よりも後に開発されましたので、妹ということになります』

「えっと、ハル。あなたと束ちゃん、私達以外にこの人員は？」

『いません。細かい制御や外部との一切は私に任されています。お母様はあまり他者との接触を好みませんので』

「そっか。ええっと、それじゃあ案内してくれるかな？」

『わかりました。ではまずは』

「ご馳走様でした！」

「あー美味しかったあー！ やっぱり食は世界の生み出した最高の文化だねえ！」

「ハル、ご飯ありがとうございます。とっても美味しかったよ」

『ありがとうございます、香織。といっても、プログラミングされた手順どおりに作っただけです』

案内が終わった後の昼食を終え、僕たちは満足げに吐息を漏らした。

とにかくご飯が美味しかったし、それを作ったのがAIによって統制された最新調理機器達だというのもなんと胸躍らせる話だ。

僕がこんなこと言うのはアレかもしれないけども、やっぱりSFというのは憧れる。まあ、少しは自分で動かなきゃ人間ダメになるとも言っけど。

「さて、と。それじゃあ梟みたいから、香織ちゃん。ちょっとラボまで来てー」

「あ、はい」

束ちゃんの後に続き、ISラボへ。世界中で使われている最新設備を更に五世代ほど飛び越えた最新機器が揃っているため、僕は全く手が出せません。どうやって使うんだろうか。

腕輪になっている梟を外して束ちゃんに手渡すと、即座に解析を始めた。

「ふむふむ、んー、なるほどにゃー、そういうことか。とするとここをこう弄って、あ、でもそうするとこうだからここでこうのこうこうこうのこうのこうにゃにゃにゃにゃにゃと！ はい出来た！」

「途中からなんだかおかしかったよ？」

「マイブームはウサ耳猫語に今決定したよ！ もうやめたけど」

「飽きっぽいんですね」

「んもう、イヴちゃん辛口だね！　ところで、なんだか梟の絶対防御がプログラム自体すっぱ抜かれてたから、とりあえずもう一回組み込んでみたけど、やっぱり消されちゃうみたいだね。とりあえず最低限の生体保護プログラムは強化しておいたから、出来るだけ生身へのダメージは避けてね？　大きいダメージを受ければ防御が簡単に割られちゃうからね」

矢継ぎ早に繰り出される説明を頑張つて理解してみると、それはつまり、ISの売りの一つである『絶対に搭乗者を死亡させない』機能が働いていないそうさ。以前のあの怪我もともにプログラムが動いていなかったかららしい。

「あ、それと。梟はまだ一次移行してないね？」
ファースト・シフト

「はい。まだ一次移行に足るデータが足りません」

「そっかー。でも、香織ちゃんは絶対守ること。いいね？」

「もちろん」

……えーっと、今また物凄い事実が発覚したのに僕は蚊帳の外なんです。誰か助けてください。

つまり、僕は今まで一次移行も済んでいない、最適化しただけのISで頑張つてたつてことかー。そりゃ死に掛けるね。

「あの、束ちゃん。じゃあ一次移行っていつごろだと思う？」

「わからないよ。いくら天才の束さんでも、ISコアの進化は未知数、予測は出来ないんだよん。だからこそ面白いって言うのもあるんだけどねー」

むう、束ちゃんでも分からないか……。

とにかくひたすら乗ってみるしかないのかな、これは。

「まあとにかく、これからもガンガン、イヴと一緒に鼻を使ってあげてね。じゃなきゃいつまで経っても一次移行にだって辿りつけないからさ」

「うん、頑張ってみる。ね、イヴ？」

「ええ、頑張りましょうカオリ。何をどう頑張るかまでは決まりませんが」

最後の最後でしまらないけど、とりあえず今日の会社訪問はこれにてお開きとなった。

また色々と問題を抱えてしまったけど、頑張らないと。

第12話 Bind Company（後書き）

結局第二巻までいかなかった、申し訳ない。
次回から二巻ですね。

重大な欠陥ともいえるものが発見され、またお話が面倒な方向へ。
新たに現れる彼女達との出会いで、何が変わるのか。

第13話 金銀キャンペーン

翌朝、疲れからかのほほんさんよりも少しばかり遅く目を覚ました僕は、すぐに服を着替えると頭を切り替える。

昨日もらった社員証は胸ポケットに入れてあるけど、落としてもきちんと私のもとへ戻ってくるようになってる。性別のところが女性になってるからね。

『カオリ、ハルから新規開発武装のテストプランが送られています
が』

『えっと、どういうこと？』

『どうやらタバネがあれやこれやと開発に走っているようです。だからお母様を止めてください、と愚痴のメールも届きました』

がんばれハル。私は手助けできないから。というか私だと束ちゃん
は止められません。

のほほんさんは既に食堂に向かっていたみたいで、とりあえず部屋の鍵を閉めると一人で廊下を歩いていく。と、長い黒髪を後ろで縛った姿が見えた。

「篝さん、おはようございます」

「ん？ か、香織……」

「あの、私の顔に何か付いてます？」

食堂に向かうつもりだったのだろう篝さんに挨拶すると、振り向いた彼女はまずいものを見たかのように固まってしまう。

「あ、あ、い、いや、そ、そうじゃない。その、少し気分が悪くな
な……」

「大丈夫ですか？ 医務室行きます？」

「い、いや、大丈夫だ！ 心配ない、すぐに治る！」

「え、で、でも……」

「大丈夫だ！」

半ば無理やり、怒鳴るようにして会話を終わらせた篤さんは、とんでもないことをしたかのように少し顔を青ざめさせて一、二歩下がった。

「あ、す、すまない……」

「いえ、いいですよ。すいません、私こそ」

「いや、私が悪いのだ。……お前のことも、考えずに……」
「え？」

何故か、篤さんが立ち止まる。静かに肩を震わせているかと思うと、急にこちらへ振り向いてきた。その目には、玉のように涙が浮かんでいる。

「……ごめん、なさい……っ……！ 私の、私のせいつ、でっ……！」

「ほ、篤さん！？」

「ごめっ……、なさいっ……！」

蹲るようにして涙を流し、ひたすらそう繰り返す篤さん。その姿を見て、私はとにかく彼女を泣き止ませることを優先させることにした。

彼女の肩を、包むようにしてそつと抱くと、そのまま背中をさすり続ける。

しばらくして涙が嗚咽に変わった頃、篤さんは赤く泣き腫らしたその目をこちらに向けた。

「落ち着きましたか？」

「あ、ああ……。あの、その……、以前のクラス代表戦のときのことだが……」

「え？」

「私のせいで、お前に大怪我をさせてしまった……。謝って済むことではないと分かってはいるが、謝らせて欲しい……。！ 済まなかった……。！」

まだ少し涙声のまま、彼女はそう漏らす。

私の中ではとくに片付いたと思っていたことが、彼女の中ではまだ終わっていなかった。そのことに気付いて、私はそっと彼女の頭を撫でる。

「じゃあ、これでおしまいです。ごめんなさい、気づいてあげられなくて。あなたがこんなに苦しんでいたのに……」

「え……」

「私はあなたを許します。気に病まないで」

「だ、だが、それでは……。！ それでは私の気が済まない！」

悲痛ともとれるような声で叫び、篤さんは唇を噛む。

「お願いだ……。！ 私を許さないでくれ……。！」

「いいえ、許します。篤さんは今まで苦しんだんでしょう？ 苦しむことの意味がわかってるのなら、もう苦しむ必要はないんです。だから、私はあなたを許します」

「ああつ……。あ……。！」

次の瞬間、彼女はもう一度その瞳から大粒の涙を零し泣き出した。その肩を、私はそっと抱く。せめて、少しでも苦しまないように。

翌日。

昨晚箒さんが一夏に何かしらの約束をしたらしいという噂を聞いて、箒さんも少しは吹っ切れたのかと少しばかり気が楽になった私だった。

まあ、その後すぐにこんなことが起きるとは予想していなかったわけだけでも。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「へっ？」

「え……」

「「ええええっ！？」」

教室中が爆発したような大声で包まれる。

いや、転校生ってだけでもこのIS学園じゃ珍しいのに、その上それが更に二名か……。ふーちゃんに続いて二人目と三人目だ。

あれか、世界初の男性IS操縦者がいるからなのだろうか。

けれども、なんで二人同時にこのクラスなのか。もうちょっとバラけてもいいはずなのに。

「失礼します」

「……………」

二人が入って来た途端、クラスが静まり返った。
銀色の髪を持って背の低い眼帯を付けた少女と、長く伸びた金髪を後ろで束ねた女顔の『少年』。うん、おかしいね。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
」

眩しく輝く笑顔と共に言うシャルル君。……んー、なんか引つかる。違う気がするんだけど。

『イヴ、あれ本当に男？』

『いえ、女です。骨格が完全に女性型です。体組織があれば、本社の方にデータを送って解析できますが？』

『ん、手に入りそうだったならやろうか。正直言って、こんなタイミングの編入は危険すぎる。何か変だよ』

つい先日アリーナの壁ぶち破ってISが降ってきたばかりなのに、自国の大事なIS操縦者をそんな安全性の不安な場所に送ってくるかな、普通。

それに、一夏と同じ境遇ってちよつと無理がある。それならなんでもマスコミが嗅ぎ付けてないのか。どれだけ強固な情報封鎖でも、それだけのネタなら必ず綻びが生じるはずだ。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃああああああ

っ！」

おほう、耳が凄いですよ？　ぐわんぐわんする。

「男子！　二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かったーっ！」

あははは、耳がぐわんぐわんしております。すごいねえ女子の
ばうわは。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

至極めんどくさそうな声で諫める千冬さんと、おどおどしながら
声を上げる山田先生。頑張っ

て。そんなことを考えながら皆を眺めていると、ふと銀色の髪の転入
生と目が合った。ちよつと笑いかけてみる。

「……フン」

鼻で笑われて目を逸らされた。少しショックです。

すると、千冬さんの方に視線を向けていた彼女に向けて、千冬さ
んが口を開く。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

突然姿勢を正し、流れるような動作で敬礼するラウラと呼ばれた
少女。

それを見て、千冬さんは疲れたようなめんどくさそうな顔で口を開く。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」

教官と呼ぶことは、軍隊か何処かで千冬さんが教えていた少女だったことかな。……軍隊で教えてられてたんなら、何でここに来たんだろうか。あの子も要注意かな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

おほう、山田先生泣きそうじゃないか、もうちょっと加減してあげて。

なんてのんきなことを考えていると。

「っ！ 貴様が」

突然一夏を睨みつけたかと思えば、彼女は一夏の頬を音高く叩いた。

「……………」

「っ？」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

その言葉には、嫌悪なんてちやちなものじゃない、憎悪とすら言えるどす黒い色が塗りたくられている様に感じた。

「っ、いきなり何しやがる！」

「ふん……」

一夏の言葉に答えることなく、その列の一番後ろへと歩いていくラウラさん。

一夏と彼女の間に何かあったのだろうか……。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩いて無理やり事態を終結に持っていく千冬さん。まあ、ここで喧嘩するよりはマシかな。

っと、私もそんなゆっくりしてられないや。すぐに服を脱ぎ、中に着込んでいたISスーツを露出させる。

ちなみに、このISスーツは絶対防御が発動しない私のためにと、昨日束ちゃんが作ってくれた特注品。急所の部分には集中的に防御性能の高いIS装甲を繊維化したものを使っているらしい。束ちゃん、やりすぎじゃないでしょうか。

色は梟と同じ黒で、胸部にはパッドがずれない様にきちんと加工が施されていて、その、股間のモノも目立たないようにその部分が加工されている。スーツのサイズはぴったりなのが驚きです。

「それじゃあのほほんさん、先行ってるね」

「はい」

ほにゃほにゃと笑って手を振るのほほんさんに笑みを送りながら、

廊下を走らない程度に駆けていく。

とりあえず今分かることは、またとびつきりの厄介ごとが二つばかり増えたということだけだった。

第13話 金銀キャンペーン（後書き）

シャルとラウラの登場でござい。しかし香織はシャルの正体には気づいている様子。

次回はこの後すぐの授業風景から！

あ、題名はその場のノリです。

第14話 死闘 模擬戦！

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

「くうつ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

開始早々騒いでしまい、千冬さんにフルスロットルで叩かれたセシリアさんとふーちゃんの嘆きと怨嗟の声でした。

千冬さんの言ったとおり、今は実戦訓練の時間。金髪さんは一夏と一緒に出てきたけども、私の隣にいる子がまあ恐ろしい目で一夏を睨んでいるんです。

確か、ラウラさんだったっけ。何かあったのかな？

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 ファン 鳳！ 一之瀬！」

「は、はいっ！」

おおう、私が呼ばれた。これが幼馴染補正ですか？ 違いますか、さいですか。

「むう、一夏のせいなのになんでアタシが……」

「ま、まあまあ。いい訓練だと思えば、ね？」

「そうだけど、さ」

ふーちゃんは納得しきれずにいたけど、やがて諦めたように息を吐き出した。

どんまいどんまい。

「それで、お相手はどなたが？ 私とふーちゃんですか？」

「慌てるな一之瀬。対戦相手は」

声に被さるようになり、飛行機が飛ぶときに出すあの甲高い音が聞こえてきた。

何事かと周囲を見渡せば、そこには。

「あああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

「っ！ イヴ！」

『はい』

思わず鼻を展開、防御装甲と素手で突っ込んできた落下物を受け止めると、それに押しつぶされないように後ろへ加速、そして徐々に減衰していく。

なんとか被害を出さずにそれを不時着させてみれば、それは山田先生+ISだった。何してるんだろつか、この人は。

「だ、大丈夫ですか？ 山田先生」

「は、はいー……。すいません一之瀬さん、助かりました」

「わあー、かおりんかっこいー」

遠くから聞こえてきたのは、ハイパーセンサーによって拾われたのほほんさんの声。ちよつと照れるね、これ。

ともあれ、山田先生と共に元の場所に戻った私を待っていたのは、軽く頷いていた千冬さんだった。

「ISには本来救助は必要ないが……、まあいいだろう。模擬戦時などに相手のISが故障し飛行が持続でなくなった場合、ああいった方法での救助は有用だ。落下の際の恐怖で空に上がれなくなる人間は、いつだっているからな」

「は、はい！」

おお、千冬さんに褒めてもらえた。なんだか嬉しいぞ。

「さて、と。では山田先生、スタンバイを」

「はい」

「凰、一之瀬。ツーマンセルで山田先生との実戦訓練だ」

「え、ええ！？　ちょ、それは幾らなんでも……？」

「安心しろ。そう言っているうちには刃一つ突き立てられん」

驚いたように聞いたふーちゃんのその言葉を、鼻で笑ってそう言い放った千冬さん。ああ、それマジなんですね。

ということはつまり、千冬さんが認める程度には山田先生は強い、と。うわぁ……。

『まあ、頑張ろう。ふーちゃん、油断はしないで』

『わかってるわよ。千冬さんがあそこまで言うからには、それ相応の実力があるはずだし』

『うん。それとイヴ、データ取りよろしくね』

『了解です』

緊張を四肢に漲らせ、軽く息を吐き出す。ぶるり、と武者震いがした。

「では、両者位置に着け。……始めいっ！」

空に上がった私たち三人が闘志を滾らせたことを感じ取った千冬さんの一言で、その空気は一変した。

ズドンッ！　という正確な射撃と共に一瞬前まで私がいたところを実弾が通り過ぎる。そこにいれば、穴が空いていた。

『ふーちゃん、交代なし！スイッチ 上下攪乱挟撃で叩く！』
『オッケー！ 位置取りは龍砲でサポートするわ！』

瞬く間に音速の世界へと突入した私は、あらかじめ呼び出しコールていた《夜雀よじやく》で弾幕を張り、直角に上昇していく。

「逃しませんよ」
「ッ!？」

ぞくり、と背筋が怖気立った。
冷徹と呼べるほどに冷たく研ぎ澄まされたその声を、私は訓練機に乗ったときに知っている。

この学園の入学試験のとき、私の試験を担当した先生と同じ感覚、同じ声だった。
できるかぎり冷静に振り返ると、振り向き様《夜鷹よたか》を呼び出しコール、横に一閃。

案の定それは避けられたけど、それでいい。

「逃さないのは、こつちも同じよ!」

独特の音と共に、ふーちゃんの肩付近に浮遊する非固定浮遊部位アンロック・ユニットから放たれた不可視の砲弾は、しかし幾発もの銃声によって掻き消された。

「なっ、撃ち落した!？」
「発生場所と自分との距離を計算すれば、着弾地点も斜線も弾き出せますよ」

この人は……、つくづく私達の想像の上を行っている。

認められる程度には強い、なんてものじゃない。化け物に近いレベルだ。

至極冷静に相手を見定め、適した距離に持ち込んで寸分狂わず銃弾を叩き込む。全く持って、私達はこの人を軽く見ていたようだ。

『ふーちゃん、作戦練り直し。これは無理だよ』

『みたいね。全く、化け物ってレベルじゃないわよ！』

辛うじて弾丸の雨をかわしつつも、やはり数発の被弾は避けられない。

けれど、それも《夜羽^{よはね}》を展開している今の状態であれば大したダメージにはならない。

『私ができるだけ被弾を防ぐ！ ふーちゃんはなんとか隙をみつけて一撃入れて！』

『了解！』

ふーちゃんに指示を飛ばすと、反撃とばかりに《夜雀》の引き金を引く。マガジンを交換する手間も惜しいため、弾が切れれば即座に放り投げて《夜鷹》へと持ち替える。

その合間合間に撃ち出される龍砲の砲弾を悉く回避しながら、次々に弾幕を張り、更にグレネード弾まで混ぜてくるその綿密さには、ほとほと呆れてしまう。主に現実逃避的な意味で。

「捉えましたよ」

「こちらですっ」

こちらへ突き進む銃弾の音に混じり、龍砲の発射音が爆ぜる。

それを既に音だけで避けた山田先生のIS、ラファール・リヴァイヴへと数多の銃弾が突き刺さった。

「他の銃撃!？」

驚きながらも冷静に銃口を銃声のする方へ向け、寸分狂わず甲龍の駆動部分を狙い撃ちにかかる。けど、それが誤りだ。

「イヴ!」

「エネルギー充填完了です」

ガチンツ、と頭の中で何かが噛み合う。

その直後、音速の壁を一瞬で超え、山田先生へと肉薄する。

イクニッション・フースト
瞬時加速!？

ハイパーセンサーに飛び込んできた誰かの声を聞き流し、左腕に取り付けられた最後の装備を打ち放つ。

《啄木鳥^{きつつき}》、とつつきとも呼ばれるそのパイルバンカーの一打が入った直後、《夜羽》の合間を撃ちぬかれた。

全身を襲う衝撃と同時に、散々削られたISのエネルギーがとうとうゼロの表示を示す。

「くうつ……!」

「香織! このっ!」

私が墜ちたことに焦ったのか、さっきまでの距離を一気に詰めて《双天牙月》を振りかざすふーちゃん。

だめだ、それは悪手すぎる!

「ふーちゃん、だめ!」

「冷静さを失うのはアウトですよ」

「え、きゃあ！」

真っ直ぐ突っ込んできたふーちゃんへ向けて、グレネードを撃ち放つ山田先生。

……終わっちゃったか。

「そこまで！ 山田先生、ご苦労だった」

地上に降り立った私達は、ISを解除すると一息吐いてお互い笑いかける。

少しだけ、指が震えていた。

「強いなあ……。二対一でもだめかあ」

「行けそうだったんだけどなーっ！ あそこで突っ込まなければ……！」

「い、いえ、強かったですよ二人とも。冷や冷やしちゃいました」

「ちなみに、山田先生は元日本代表候補生であり、とある事情がなければ私に相對できただろう逸材だ」

えー……、そりゃ勝てませんよ。というかそんなに強かったんですね、山田先生。

あの目つきとか雰囲気とか、確かに普通とは違ってたし、スイッチのオンオフでもあるのかな。

「その、とある事情ってなんですか？」

「あがり症だ」

「……え？」

「そこまで酷いわけではないが、公式戦となればガチガチに緊張してまともな成果が出ない。代表になった者との模擬戦は全勝してい

るのに、公式戦ではボロ負けしている」

ああ、そういうことが。

あれだけの威圧感と実力でどうして候補生止まりだったのか疑問だったんだけど……。

時間があれば、もう一度お相手して欲しいなあ……。あれだけ強いなら、きつともっと強くなれる。

「あはは……。けど、本当に二人とも強かったですよ。半分以上削られてしまいましたし」

「墜とした本人が言う台詞じゃないわね……」

「まあ、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意をもって接するように」

パンパン、と千冬さんが手を叩いて、全員の注意をそちらに向ける。

「専用機持ちは織斑、一之瀬、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では九人ずつ、一つだけ八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループにいれて！」

おおー、カオスカオス。すごいことになってるなあ。

まあそれはそうなるよね。一夏とデュノアさんのところにぞろぞろと人が集まっている。まるで甘い物に集まるアリのように。……、これは良くない例えだね。女の子をありんこ呼ばわりはよくありま

せん。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

そんな千冬さんの声に、二人に群がっていた人たちはそろそろと自分のグループへ集まっていく。

「最初からそうしろ、馬鹿どもが」

「よろしくねえ、かおりんー」

「さっきの凄かったよ！ あんなに強かったんだあー」

「え、えーっと、うーんとっ！」

のほほんさんが一緒でした。そして最後の人、必死に言葉をひねり出そうとしなくていいよ。

ともかく、これでグループ分けも終わり、ようやく実戦訓練へと入っていけることになった。

なんだかどつと疲れたよ……。

第14話 死闘 模擬戦！（後書き）

ということで山田先生超強化しました。めっさ強いです。

内容がちよっと薄いですが、次回は原作では入っていなかった、午後の整備授業になるかと。

香織も一応整備できるようになってますしね。

第15話 専用機

時間は少し流れて午後の授業。

私達専用機持ちは専用機と訓練機の整備、一般生徒は訓練機の整備実習の時間である。

「とりあえず、梟の方からやつちやおうかな」

工具箱を片手に引っさげ、髪をポニーテールに結んでからよしつ、と気合を入れると、既に起動済みの梟を力チャ力チャと弄くりだす。内部処理のバグ確認や外部装甲の手入れ、各駆動部位の泥の掻き出しなどメンテナンスは始めればきりが無いけど、それをきちんとやっておけば、機体はちゃんとそれに応えてくれる。

ちなみに、専用機持ち以外は順番に訓練機の整備方法を実践しているから、私たちに回ってくるのは一番最後だろう。

「えーっと、確かフラグメントマップの確認をしておいてって言うてたよね」

「情報をロードすれば、こちらでハルへ送っておきます」

「ん、わかった」

イヴの言うとおりにフラグメントマップのデータをロードすると、その情報が秘匿回線を通じてハルの元へと送られていく。

細かな作業も多いけど、これは若干本職のメンテナンスに食い込んでいたりする。だって、普段のメンテナンスは私以外には行える人はいないんだし、仕方ない。

一夏はデュノアさんに基本的な部分を教えてもらいながらこなしているけど、あれは簡易メンテナンスの基礎部分だから、機密漏れってことにはならない、はずだ。

セシリアさんとふーちゃんは慣れているのか、普段どおりと言った感じでメンテナンスを終えている。ラウラさんも同様だった。

んー、まだ時間余りそうだし、もう少しやろうかな。

装甲をはずしてシステムの補助を受け持っている基盤部分を露出させると、出力パラメータ表を表示してから細部を弄る。弄るたびに变化するパラメータを逐一チェックしつつ、最適な形へと作り変えていく。

「わっ、かおりんすごい」

「のほほんさん、訓練機の整備実習はどうしたんですか？」

「待ち時間中だよー。それより、そんなところまでメンテナンスするのぉ？」

後ろから掛けられた声に振り向かず答えると、小さく頷く。

「ちょっと事情がありまして。っと、これでよし」

念のため、一部にエネルギーを通して反応をチェック後、装甲を元の位置に固定し直す。やっぱり、さつき戦ったときに少しだけパラメータが違う数値に変更されていたらしく、ラボで調整したときよりもほんの少しだけ性能が上がっていた。

「ふーっ、と。終わっちゃったけど……、まだ整備終わってないみたいですね」

「いやあ、かおりんが速いのが原因だと思うよあ？」

「そ、そうですかね？」

「そうだよあ」

むう、そんなに速くやっている覚えはないんですが。

「おつとう、もうすぐ私の番だからいくねえ？」
「あ、はい」

トテトテと歩き去っていくのほほんさんを見送った後、しばし思案する。困ったな、やる事がなくなってしまった。

というか、整備はいつもしているからいつもの要領でやってすぐ終わったし。

じっとしているのもあれなので、機密に関わらない程度に皆の整備状況を見て回ることにした。

「一夏、どんな感じですか？」

「あれ、香織。もう終わったのか？」

「普段からやってますから。それでも速いみたいですけどね」

「さすがだなー」

「一之瀬さんは企業代表なんだっけ？」

「そうですよ。と言っても、まだ新参ですけど」

代表が最古参というか、生みの親であることは黙っておくべき。そうするべき。

けど、一夏も大分いいペースで整備を進めているようだから、あんまり心配ないかな。……あれ、何で私が同じ新参さんの面倒を見ようとか考えているんだろうか。

確かに、私も束ちゃんと一緒にいたときにそれなりにISのことを叩き込まれたけどさ。

「って、デユノアさんは調整しなくてもいいの？」

「僕のはもともと細部の調整は必要ないんだ。第二世代は頑丈さが売りの面が強いから」

「なるほど」

確かに、第二世代は研究時間がたつぷりあった分完成度が高い。下手な第三世代よりも強いと言われるのもそのあたりの事情が絡んでいるんだろう。

そういうこともあって、第二世代のISの耐久性には目を見張るものがある。

第三世代は精密部品の塊だって面もあるからことあるごとに簡易メンテナンスなんかは欠かせないんだけど、第二世代は既に各パーツなんかは各国で量産も可能な機体だ。メンテナンスだって簡単に済む。

デュノアさんの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』は第二世代型IS『ラファール・リヴァイヴ』のカスタム機らしいから、そういうのもあるんだろう。

「それじゃ、他の人のところ見てきますね」

「おう」

「それじゃあね」

会釈してからその場を離れ、ふーちゃんの元へ。
って、あんまり進んでないのかな。

「ふーちゃん、どんな調子？」

「まあ、いつもの簡易メンテと変わんないわ。細かい部分はメンテナンスチームに任せてるし」

「あ、普通の専用機持ちってそういうのいるんだっけ」

「そうよ。って、アンタはいないんだっけ？」

「うん。まあ、それでも大丈夫なようにメンテは一通り覚えまし」

これがまた結構大変なんですよ。

基盤の中の埃取りとかもやらないといけないし、ほんとに細かい作業が一杯。もう嫌になるってくらい。

でも、自分の羽の毛づくろいだと考えてたら、ちよつと楽しくなつたのも事実でして。現金なものだ。

ちなみに主観だけど、『甲龍』は第三世代の中で一番メンテが楽だと思う。

『白式』は言わずもがなの特化性能だし、『ブルーティアーズ』もBT兵器とかの関係でちよつと面倒そう、ラウラさんのに至つてはトリアル段階とかつて話だから、結構面倒だろう。

それに比べれば、『甲龍』は燃費重視型。内部でもあまり変動が出ないようにしているんじゃないかな。多分。

それでも外装とかのメンテは欠かせないだろうけど。

「ふーん。やっぱり香織は凄いわねー。よっし、メンテ終わり！」

「訓練機はまだ空いてないみたい。他の人のトコ見て回る？」

「そうねー。どうせ暇だし」

パチンツ、と手を打って立ち上がったふーちゃんと共に、今度はセシリアさんのところへ。

セシリアさんは、真剣な顔でディスプレイと向き合いキーボードを打っていた。

「セシリアさん、どんな調子ですか？」

「あら、香織さん。鈴さんも。まあ、いつもと変わりませんわね」

「へー、アンタって細部メンテまでやるの？」

「ええ、ある程度は把握しておかないと嫌な性分なのですよ」

あはは、ふーちゃんとは大違いだね。

「つて痛っ！？ な、なにするのふーちゃん！？」

「今、アタシがずばらとか思わなかった？」

「えっ、何で分かったの」

「ほほう？」

「あつ」

しまった、言ってしまった。

いや、ふーちゃんって結構ずばらなところとか大雑把なところとかあるし、確かESも半分以上感覚で動かしてるって聞いたし……。私も結構感覚で動かしてるけど、だんだん理性で統率できるようになってきている。これが学習の成果という奴なのかもしれない。

「うりゃ」

「あ、やめ、ひやめへ、ふーひゃん！ いひゃい、おえんあひゃい、おえんあひゃい！」

「おおー、伸びる伸びる！」

などと言う私の思案を一切無視し、ふーちゃんがおしおきだとはかりに私の頬を引き伸ばす。

当然抗議するも、思った以上に私の頬が伸びたのが楽しいのか、ふーちゃんは一向に手を離そうとしない。しかもその手つきがぜんぜん痛くないのだから困ったものだ。

なんだかんだ言っ、私もふーちゃんも怒ったり怒られたりを本当にやっているわけじゃない。ただのポーズだ。じゃれあいとも言いかもしれない。

そんな私たちを見て、セシリアさんはクスクスと笑っていた。何か彼女の笑いを誘うようなことをしただろうか。

「なに笑ってるのよ？」

「うふふ、いえ、とっても仲がよろしいですね」

困ったように笑いながらも問いかけたふーちゃんに、セシリアさんは上機嫌そうに笑って言う。

それにしても、見れば見るほど皆のメンテナンス方法は面白く違っている。

『白式』と『甲龍』は同じ戦闘方法、要するに接近戦主体のIS。その簡易メンテナンス方法は自分の手を使って直接弄っている。それによって自分とISの感覚を近づけ、コンマ何秒の世界でズレが生じないようにしているんだろう。

一夏の場合はそれしか知らないから、と言うこともありうるけども。

一方の『ブルーティアーズ』はディスプレイとキーボードを使用した、いわゆるプログラミング的な方法。これによってBT兵器などの発射タイミングのラグの調整を行い、正確な射撃を行えるようにしているんだろう。

ラウラさんは、例によって分からない。調べてもらうことも出来るけど、それは必要な時でいい。今はまだ、危機じゃない。

デュノアさんは、どうなんだろう。多分プログラミング方式のメンテナンスと手動メンテナンス、両方やってるんじゃないかな。

ちなみに、私のは簡易ではなく通常のメンテナンスの域だからその辺はあんまり関わらない。話しているのはIS操縦者が行う簡易メンテナンスのことだし。

なんてことを考えていたところで、千冬さんから専用機持ちにお声が掛かった。ラウラさんには話しかけられなかったな。

で、打鉄のメンテナンスは対して時間がかからなかった。だって、やれるし。わかっていなかったのは一夏だけじゃないかな。

「あれ、あなたは……」
「……こんにちは」

放課後、もう少し念入りなメンテナンスをしておこうかと格納庫に行った所で、特徴的な水色の髪を見つけた。

彼女、更識簪^{さらしきかんざし}さんは小さく会釈しながら挨拶すると、またすぐにディスプレイへ視線を戻した。

更識簪、日本代表候補生で四組のクラス代表でもある。不可解なのは、そんな位置にいる彼女に専用機が与えられていないこと。

トリアルシリーズであっても、代表候補生には専用機が与えられているはずだ。だって、貴重なデータ源なんだから。でも、本当に何故なんだろうか。

「何してるんですか？ 簪さん」
「……別に。私用」

突き放すような言葉。その途中で見えた画面には、ISのプロゲラミングが隙間なく浮かんでいた。

これって、もしかして。

ふと思い立ち、彼女の前にあるISを見る。それは、ISと言うにはところどころが欠けている代物だった。

「もしかして、これ作ってるんですか!？」

「……まあ」

「凄い……! これ、どれくらいで出来るんですか？」

「まだ、ぜんぜん。データが足らなすぎるから」

そう言った彼女の顔が、悲痛に歪む。

何かあったのかと尋ねれば、眼鏡の奥の瞳が潤み、憎憎しげに、

吐き出すように喋りだす。その内容は、驚くべき、と言つには少しばかり予想の出来た話だった。

なんでも、一夏が出てきたせいで白式の開発に人員が取られてしまい、今ではこの『打鉄式式』は見向きもされなくなってしまったんだとか。

いや、それっておかしくないかな。

「えっ？」

「だって、『白式』は束ちや、篠ノ之博士が凍結されていたものを引き取って仕上げたって言っていましたよ？ 人員なんて余ってるほどだと思つてたのに」

「……それ、どういうこと」

「いえ、だから、『打鉄式式』の開発に人員が回せないなんて、ありえないってことです。幾ら世界初の男性IS操縦者が出て、それで量産できそうな機体の開発を中止してそつちに全て回すなんておかしいんですよ。まして企業なら尚更です」

企業であれば、一定の業績を示さなければならない。だが、『白

ワソフ・アビリティ

式』は量産できるわけでもなければあの単一技能を再現できるわけでもないのだから、データ収集に多くても半分裂けばいいぐらいのはずだ。それで足りなければ政府を使えばいい。

しかし、『打鉄式式』は別だ。アレは量産機としての可能性だつてあるのだから、容易に切るのはおかしい。

「じゃあ、なんで……」

「その辺は分かりませんけど……。あ、そうだ　っ！」

「なに？　きやう！？」

思いついた瞬間、彼女の肩をがっしりと掴む。後から考えると、これは相当まずいことをしていたんじゃないかな。

残念ながらそのときの私はそれに気づくこともなく、真っ直ぐ彼女の目を見据えるのにやりと笑いながら言い放っていた。

「私も一緒に作らせてもらえませんか、純日本製最強のISを！」

思えば、私はこの頃からISバカとして極まってきたのかもしれなかった、と言う話である。

第15話 専用機（後書き）

はい、簪ちゃんと邂逅。

えー、なぜこれが更新されているかってーと、活動報告のほう見ていただけると分かりますが。

なのはが書けない……っ！

なので、しばらくなのはは低速更新となります。代わりにそれ以外の三作品、これとネギま、ネタ帳の更新が活発になるかと。まあ、わたしは結構な周期でこう言うのがクルので、「またか」といった感じでスルーしていただけるとありがたいです。

追伸。

感想いただけるとありがたいです。

モチベーション上がります。ガチで。

第16話 BOUSO Uが止まらない(前書き)

7 / 30 話数が間違っていたので修正しました。

第16話 B O U S O U が止まらない

「バランスはこのぐらいでいいかな？」

「うん……、あ、ちよつとまって。そのまま……、よし」

簪ちゃんとの邂逅から数日が過ぎ、私たちは今日も格納庫内でISと向き合っていた。

最初は遠慮していたんだけど、しばらくしたらお互い敬語とかは一切なしになっていた。というか、千冬さんに怒られるまで熱中していたなんて久しぶりだったから、その頃には疲労であまり頭が回らなかったというか。

ともあれ、こうして私は簪ちゃんとISを作っているわけで御座います。中々進まないけどね。

「やっぱり、実際の稼動データが圧倒的に足りない……。打鉄の稼動データはもらえないし……」

「……よし。簪ちゃん、ちよつと待っててくれる？」

「え？ うん……」

データが足りないなら持って来ればいいじゃないの精神で、ピポ、パ、つと。

『おっはーハロハロー！ 皆のアイドル束ちゃんだよー！』

「今日も元気ですね、束ちゃん。それで、あの、お願いがあるんですけど……」

『うんうん、わかってるよわかってるよーっ！ ISの稼動データが欲しいんだよね？ でも、それにはまずそっちの子と話さないかね？』

「……え、話せるんですか？」

『なんだいその「あなたコミュニケーション能力ゼロなのに何言ってるの？」みたいなニュアンスはー！？ 束ちゃんは天才なんだぞ、そのくらいできるやい！』

いや、だって事実そうじゃないですか。

興味がない人間はとことん冷遇して、拳句無視する。それがこの人の常套手段であつて。やはり少し不安だ。

「じゃあ、絶対冷たくしちゃダメですよ？ ちゃんと話してくださいね？」

『オツケーオツケー、任せといてー！』

「はあ……。簪ちゃん、うちのバカ社長が簪ちゃんと話したいって」「え、私に……？」

携帯を簪ちゃんに渡して、溜め息。大丈夫、だよな？

『ハロハロー、皆のアイドル束ちゃんだよ！ 君は更識簪ちゃんだね？』

「は、はい……。あの、束って……」

『そう！ 私こそがISを作り上げた天才なのです！ ところでところで、簪ちゃんは香織ちゃんのことをどう思ってるのかな？』

「え、どうって……。優しい、人……？」

『ほっほっ、なるほどなるほど。まあいいや、それじゃあかんちゃん』

「か、かんちゃん……？」

『簪ちゃんだからかんちゃん！ 君は今日からバインドカンパニーの社員です！』

「え、ええ！？ ま、まって、まってください、どういう」

『ISの稼働データの一つや二つ、この束さんが持っていないとでも思っているのかなー？ それに、話してみて分かったよ！ 君は

束さんの下に来るべき、そうするべき!」

……今束ちゃんが無茶な勧誘をしていそうだ。

というか、普段は大人しめな簪ちゃんがあんなに焦るなんて珍しいなあ。

「で、でも、私は日本の代表候補生で……」

「んー、ああ! 白式一つ完成させられない無能なんて頼ってたらいつまで経っても作れないよ? 大体、白式だって束さんが作ったんだから、あそこの連中は手が空いてるはずなのに!。あんな連中なんかより私のトコにきなよ! ね!」

「ちよつと待つてください……。今香織ちゃんに代わりますから……」

お、とうとう簪ちゃんが相手するのを放棄したぞ。

簪ちゃんから電話を受け取り、耳元へ。

「それで、どうなったんですか?」

「バインドカンパニーにお誘いしたら、ちよつと待つてって言われちった。てへっ」

「てへっ、じゃないですよ。まあ、入ってくれば嬉しいですけど……、そもそもこういう事業を念頭においてるんですか? この前言ったとき聞きませんでしたけど」

そうだそうだ、忘れていた。そもそもバインドカンパニーって何する会社なんだろうか。私も社員ではあるけど、その辺分らない。

「ん、宇宙開発だよ? 宇宙はいいよー、わからないことが沢山あるんだから! 今のところは月にコロニー作ってるから、出来たら一度見に行こうねー!」

「……はいい！？　ちょ、ええっ！？　え、ええつと、あれ、これ
どいう反応すればいいの！？」

『あはは、香織ちゃんってばおもしろいね。まあそれはともかくと
して、かんちゃんにはISとか宇宙で使ったときに便利な道具とか
色んなアドバイザーも兼ねて欲しいのだよ！　日本なんてちっちゃ
い所に留まってるのはつまらないでしょ？』

うわぁ、これはなんとも……。

でも、なんだか聞いていたらわくわくしてきてしまう。

だって宇宙だよ？　まだ前人未踏の世界に手を出そうって言っ
た、わくわくして当たり前だ。

「ということなんだけど。簪ちゃん、どうかな？　お給料は出ると
思うけど」

『もちろん、バシバシ出るよ！　人件費とか考えなくていいぐらい
だしね！』

うん、まあハルもいるしね。

「……私の、お姉ちゃん。知ってる？」

「簪ちゃんのお姉ちゃん？　……ごめん、出てこないや」

「更識楯無って言う、二年生。生徒会長で、織斑先生を除けば学園
最強って呼ばれてる」

「そんな凄い人がお姉ちゃんなんだ……」

「でも、皆私をお姉ちゃんのおまけとしか見てくれない……。私を
私としてみてくれた人は、香織ちゃんと束さんだけ……」

どんよりと曇った目を伏せ、少し涙声になりながらそう呟く。

聞けば、更識家は裏の世界で動く暗部に對抗するために作られた、
『対暗部用暗部』なのだという。そのせいで昔から彼女は姉のスペ

アとして考えられ、常に姉よりも劣る者として見られてきた。

ISがこの世に生まれてからは、それが加速した。自由国籍をもち、自分で第三世代ISを作りあげ、ロシアの国家代表にまでなった姉と常に比べられ、いつしか彼女のことを本当の意味で見てくれる人はいなくなったのだという。

「……そっか。辛かったんだね、簪ちゃん」

「お姉ちゃんが悪くないのは、分かってる……。だけど、だけどこんなの……！」

『なら、尚更うちにおいでよ！ ISを作りたいなら、束さんと香織ちゃんが手を貸しましょー！ どう？』

「……お話、お受けします」

その返事を受けて束ちゃんが喜ぶのを聞きながら、僕はきゅっと簪ちゃんを抱きしめる。

「私は、きつとお姉ちゃんの前には胸を張って立てるようになる……」
「応援するよ。手助けする。一緒に頑張ろう？」

それからしばらくして、私と簪ちゃんは頬を紅くしてお互いを見つめていた。

……うん、冷静に考えれば普通に抱き合っていましたね。いや、なんとなく気恥ずかしくなっちゃって。

「……とりあえず、今日は切り上げようか？」
「……うん」

微妙な、雰囲気。

香織ちゃんと別れて、自室へ入る。幸い、ルームメイトはまだ戻ってきてはいないようだった。

良かったと思う。泣きはらしたこの赤い目は、あまり人には見られなくなかったから。

ベッドに身を投げると、ぼふりと音がした。ベッドの空気が吐き出される音だった。

「……なんでだろう」

本当に何故だろう。出会って間もないあの少女と一緒にいると、酷く落ち着いた。

焦りと不安でぐらついて、自分でもどうしようもないとささくれ立っていた心が、穏やかに静まっていくのが自分で分かる。

おかしい話だとは思っけど、今日は自分で考えているよりも気分がいいようだ。普段なら考えることも億劫だと、直ぐに机に向かって一心不乱にペンを動かしているのに。

普通なら言っではいけないような暗部のことに、私自身の事情。それを全部話して、それでもなんでもないように笑っていた。笑ってくれた。

「……惚れてる？」

私が彼女に惚れている、というのも……、あながち間違いではないかもしれない。だって、私のことを認めてくれた人だから。

そう言った意味では、東博士にも感謝しないといけない。私が高みへ上がるための階段を作ってくれる人になりそうだから。私は、私の力でお姉ちゃんを超えてみせる。そのために国にこだわっていたら、きつと超えられない。

誰かに遠慮なんてするもんか。

それに、東博士の会社は宇宙を目指すと言っていた。香織ちゃんの話では、既につきにコロニーを建設中とか。

……正直、心が躍る。

私はアニメが好きだ。勧善懲悪系のヒーロー系は特に。そして、次に好きなのが、ロボットアニメ。……よく「女なのに変だ」といわれたけど、これは見るのをやめる気はしない。だって、カッコいいから。

ロボットアニメは大体宇宙が関係してくる。だから、うん。ワクワクしている。

ISが発表されたときにもドキドキした。やっと人類が宇宙に行くんだって、幼心にワクワクしたけど、結局世間の偉い人たちは自分達の利益しか頭にないようで、私のドキドキワクワクも、いつしか消えかかっていた。

全部がうまくいっていなかったその矢先にこの話が来て、その心に火が付いたのも正直な所だ。

だって、宇宙だ。未知の領域だ。そこにあの人が、世界を変えた東博士が先陣切って入っていく、その傍に居られるのだ。こんなにワクワクする話はない。

「……楽しみだな」

クスリと、思わず笑みが零れる。

ああ、本当に。楽しみだ。

いつしか、私は東博士のもたらす様々な規格外を思い浮かべては恍惚の笑みを浮かべ、結局ルームメイトに心配され、あまつさえ若

干痛い子という認定を頂いてしまった。

うん、自重しよう。

それと、本音にも謝らなきゃ。今まで避けててごめんなさいって。

『それでそれで、あの子との関係はどうなの香織ちゃん!?!』

「別に、普通のお友達ですけど?」

簪ちゃんと別れて部屋に入るやいなや鳴り出した携帯に出ると、案の定束ちゃんだった。

「というか貴女は私のお母さんですか? そんな私の関係に首突っ込まんでも……。あ、ちなみに今のほほんさんはどこに出かけています。」

ぼすつとベッドに腰掛け、楽な姿勢へ。

「それより、あの月面コロニーってマジですか?」

『もちろん! 本社はあつちに移転予定だから!』

「というか、どうやって月に……」

『ISがどうやって武装を出し入れしているか、知っているでしょ?』

……えっと、確かISは武装を量子変換して出し入れしてるんだよね。

……え?

「ま、まさか……」

『そうっ！ 私篠ノ之束は、世界初っ！ 量子変換転送装置を開発したのです！ しかも生物転送可能！』

「え、ええーっ！？」

うわ、やったよこの人。とうとうやり遂げたよ……。というか早くない？ どうして会う度に、もしくは連絡取るたびに色んな発明が増えていくのかな！？

「……うん、そろそろ束ちゃんのぶっ飛び具合に慣れてきたと思っただけとまだまだだったよ」

『あはははは、束ちゃんの小宇宙が叫ぶのさ、世界を変えろっ！』

「いや、これ以上引つ掻き回すと色々まずいので自重してください。

……それで、簪ちゃんのは真面目なんですな？」

『当たり前だよ。それに、聞いただけでこの束さんに直感させるほどの努力の才を秘めているのは久しぶりなのだぜ！』

……まあ、とりあえずどうしようもない事態にはなっってきたのかな？

はは、目の前が霞むや。

『カオリ、ハルからメールです』

『え？』

『お母様の暴走が止まりません。止められません、ごめんなさい』
だそうです』

……とりあえず、当面の目標は束ちゃんの暴走にブレーキをかけることかな。

『あれあれ、おい、どつたのー？』

……大丈夫かなあ。本当に。

第16話 BOU SOUが止まらない（後書き）

なんか知らんけど一日で書けた。何故だろう。

香織ちゃん頑張って束さんを止めることを目標にしたようです。

そして軽々と宇宙進出フラグ成立。簪魔改造計画開始。さて、どうなることやら。

あ、それとできれば感想お願いします。

一度感想が途絶えると、なんともいえない気分になるものですね…。

第17話 鈴さんが告白したようです。

今日は土曜日、午後は自由時間となっている。

午前中は理論学習だったから、体を動かすのには丁度いい。

という事で、とりあえず手始めに人気のないグラウンドを三週ほど走ることにした。

グラウンドの円周は一周五キロ、三週だから十五キロだ。フル馬拉ソンの三分の一ぐらいかな。

それでも鍛えてますから、このぐらいなら少しの息切れぐらいで走りきれぬ。最近はずっと体力もついてきたし、もう少しタイムを縮められるかな。

それが終わったら今度はアリーナへ。第三アリーナでふーちゃん達が一夏の特訓してるって言うてたし。ちなみに、一五キロは一時間二〇分で走りきった。もっとタイム縮まったぜ、いいい。

アリーナでは、一夏が射撃武器を手に弾を的へ撃ち込んでいた。あれ、白式って刀一本じゃなかったっけ？

『どうやら、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？のライフルを借りているようですね』

『あ、そういうことか』

ISの武装は基本的に他人への譲渡は行えないが、使用許諾するアンロックことで登録している者全員が使えるようになる。

あのライフルもデュノアさんが貸し出しているんだろう。

しかし、一夏って射撃兵装向いてないよね。自分で撃つよりひたすら模擬戦して射撃兵装の癖を掴んだ方が早くないかな。

「ふーちゃん」

「あ、香織。馬拉ソン終わったのね」

「一五キロくらいならこんなものだよ。最近は体力も増えてきたし」
「じゃ、何かあったら守ってよね？」
「あはは、その時によるね」

さすがにそこに居ないのに守れてのは無理だしね。まあ、代表戦みたいな失敗はしないように頑張るけどさ。

「それで、今は一夏の特訓だっけ？」

「そ。私は感覚的なことしか教えられないけどね。簪さんの方はいいの？」

「大体目処は立ったからね。あ、そうだ。明日って空いてる？」

そうだそうだ、これを言っておかないと。

前に本社に出たときに「幼馴染のことも話しないとね！」って言ってたのを思い出した。今日連絡しておこう。

「明日？ 特にすることないけど、何？ デート？」

「いやいや、そうじゃなくて。束ちゃんがふーちゃんと話したいんだって。まあコミュニケーション能力皆無なんだけど」

「ん、わかったわ。つまりデートね！」

「あの、ふーちゃん？ そういう発言するとふーちゃんはそう言った人に見られるし噂されるよ？」

「別にいいわよ、香織となら」

あっけらかんと言わんでください、かっこいいなあもう。

……って、え？ えっと、それ僕となら付き合っていていいってこと？ え？

「ぷっ、あっははははは！ どうしたのよ香織ってば、ぽかーんとしちゃって！ 本気に決まってるじゃない！」

「え、あ、そうだね、本気に……、え？」

へええええええええええ！？

「へ、あれ、え？」

「ちょ、ちよつと香織？！ 顔真つ赤じゃない、体調悪いならそう言いなさいよ！」

「ふえ、あ？」

「ああほら、こんなに真つ赤になって。どうしたのよ、風邪？」

「あら、どうしたのですか？ 香織さん」

「ああ、セシリア。香織、ちよつと風邪引いてるみたいなの。付き添いで出るから、一夏に言つといて」

「わかりましたわ。香織さん、お大事に」

「え、あふ、ふひゅん……」

あ、なんかもう、頭回んなくなつて……。

「ちょ、香織！？ 香織、香織いー！」

場所は変わつて鈴の部屋。というかアタシの部屋ね。

意識を失つた上に熱まで出ている様子の香織だけど、さすがに医務室に担ぎ込むと性別ばれちゃうかもしれないから、自室で看病することにした。

でも、風邪って様子じゃないのよね。咳も鼻水もないみたいだし。

「んっ、んんー……」

「ん、どうしたの香織」

「んー……」

……寝言かしら。無意識？

ともかく服はそのままベッドに寝かせておく。服といってもISスーツだけど。服は量子変換してしまっただけ。便利ねー、ISって。

それにしても、こうやって寝てる姿はほんとに女の子よね。というか普段の立ち振る舞いを意識して女の子にしているせいで、男ってことを時々忘れるわ。

「つと、お水汲まない」と

さすがにこれだけつてのはまずいし、濡れた手ぬぐいを額に当てるぐらいはしといたほうがいいわよね。

下手に手を出すより、このぐらいの方がいいだろうし。アタシだって専門じゃないもの。

シャワールームで使っているプラスチック製の桶に水を張り、そこにタオルを浸してからぎゅっと絞る。それでも力はあるほうだから、これで十分かな。

その後タオルを額に乗せられるように折り畳むと、香織のおでこへ。これでよし、と。

「……なんだか、こうしているとアタシがお姉ちゃんになったみたいよねー」

香織が、弟か。えへへ、なんかいいかも。

ほら、毎朝部屋に起こしに行つて、なんだかんだ言いながら素直に従う香織とか？

あ、もしくは寝ぼけた癖でベッドに引きずり込まれちゃつて、起きるまで動けなくてそのまま二人で……。

それとも、アタシが起こしてもらつ側？ 香織がアタシのことをお姉ちゃんと呼んで、漫画でよくある光景を再現したり……。

えへ、えへへ……。

やだもう、アタシ変態みたいじゃない？ いや、でも本当にそれはアリじゃないの？ どうなの凰鈴音、これはあり？

『ダメダメ、ダメよ鈴！ それ以上足を踏み入れちゃいけないわ！ 男女交際は清く正しく、こんなところで道を踏み外したら、お義姉さんが泣いちゃうわよ！』

おや、頭の片隅から天使鈴ちゃんが。

よく絵画とかでありそうな天使が着ている、あの白い布のような服と、天使のワツカをつけている。

『はん、何言つてるのよ！ 世の中は弱肉強食、強い者が勝つものよ！ 欲しければ奪う、そうでしょうが！』

今度は悪魔鈴ちゃん？ やだ、こういうコスプレいいかも。可愛いじゃない。

頭からはにょいんとふよふよの悪魔の角のようなものが伸びているけど、よく見ればそれはカチューシャのようだった。

『ダメだつたら！ いい？ 鈴は香織とどんな関係になりたいの？』

「そ、それは、こ、ここ、恋人とか、ふーふ、とか、えへへ……」

『だつたら！ まずはゆっくり、焦らず慎重にいくべきよ！』

『はあ！？ あんたバツカじゃないの！？ 香織はこんなに可愛い

のよ！？ 他の狼に食われる前に、鈴が食べてあげべきでしょうが！」

「やん、うふふ、食べるだなんてそんなあ」

脳内で激しくぶつかり合う白と黒のアタシ。

あ、でも、うん。今なら……。

「しまった、そうこうしている間に何を血迷ったのか鈴が口付けを！？」

「よし、いけ、ぶちゅつとやってしまえー！ ついでに既成事実を！」

「だ、だめだったら！ そ、そんなえっち、なことは許さないんだからー！」

「い、いただきます……」

「わーわー、鈴ー！ ダメだったら、こらーっ！」

ふよん、と唇に柔らかな感触。

（うわ、やわらかい……）

蕩けそうなほどの幸福感が体を駆け上る。というか顔を赤らめた香織がエロいんだけど。何この生き物、食べていい？ いい？

「あ、ああつ、ふ、不潔っ！ 不純異性交遊はんたーいつ！」

「いよしっ、よくやったわ凰鈴音！ そのまま頂いちゃいなさいっ！ って、ちよつとちよつと、何添い寝してるのよ！？」

「ふあ、暖かい……」

えへへ、香織暖かい……。

おやふみい……。

「はっ!？」

がばっ！ と起きようとして隣にいる誰かに阻まれた。

「って、ふーちゃん？ なんで腕組んで寝てるの、というか僕は何でここにいるの……？」

『カオリが顔を真つ赤にして倒れた後、鈴が香織を背負って自分の部屋まで運びました。そして今に至ります』

凄くがつつり端折られたイヴの説明を何とか理解して、それから部屋に備え付けられている時計を見る。

七時半。食堂がしまるまで、残り三〇分である。

そして、とっても空腹感が押し寄せている僕の胃袋は、明日の朝までもちそうにありません。

「仕方ない、起こそう。ふーちゃん、起きて」

「んん、香織い……?」

「そうだよ、ほら起きて」

「やあだあー、んう」

ひしつ。

普段のふーちゃんからは考えられないような猫撫で声と共に、僕

の首元へと抱きついた。

え、ええ、なにこれ、何がどうなってるの？

「ちょ、ちよつとふーちゃん！？ 寝ぼけてる！？」

「んー？ あらひの弟なんらから、あらひの言うこほをきひなひやい！」

「あー、寝ぼけてるや。ふーちゃん、僕だよ。香織だよ！ 弟って何のこと！？」

「……ふえ、え？ かおり？」

あ、やつとぱつちり目が覚めたようだ。ん、なんだかぎりぎり見える耳が真っ赤？

「あ、や、こ、これは、その、違うのっ！ 既成事実とか子作りしようとかそんなことじゃないやくひえ！？」

「き、既成、事実？」

「ちが、違うのーっ！ うわああああん！」

なんか凄いいこと言ってると思ったら泣き出したーっ！？
うつつ、どうしようとするべき！？ と、とりあえず背中をぽんぽんと叩いて、うん、あやす感じて……。

「大丈夫、大丈夫だよー……」

僕は保母さんじゃないんだけどなあ……。

というか、なんで急に泣き出したの？ うーん、ここからじゃ顔が見えないなあ。一回離れたけど、もう一回抱きしめちゃったし。それから、十数分後。

「うつつ、ごめん香織……。ふがいないお姉ちゃんで……」

「いや、まだ寝ぼけてる？」

「う、ごめん。それより香織、熱は？」

「熱？ いや、ないけど……」

「そう、よかったーっ！ あんた、顔真っ赤にして倒れたからどうしたのかと思っただのよ？」

「それで看病してくれてたの？ ありがとう、ふーちゃん」

「別にいいわよ、そ、それに、キ、キキ、キスも、したし」

……うん、今なんて言っただの子？ キス？ KISS？

魚のアレじゃなくて、口付け？ 接吻？ マウストウマウス？

「は、はええ！？」

「何変な声出してるのよ？ あ、そ、それともまさか、い、嫌、だったの……？」

「ええっと、あの、嫌じゃ、ない、けど……。その、突然だったし……、大体、倒れたのもふーちゃんが僕と付き合っのが本気とか言っってからかうから……」

「か、からかってなんかないっ！ あ、アタシは香織のことが、その、好き……、だから……」

顔を真っ赤にしてそう反論するふーちゃん。

えっと、好き？ 今度はキスの反対で？ え、僕のことを、ふーちゃん？

……まで、一旦落ち着こう。K O O Lになるんだー瀬香織。

「へ、返事はまだいい、から。うん。アタシも、その、まだ落ち着いて、ちゃんと告白したわけじゃないし……」

な、なれないよ！ クールになんてなれないよ！

ああもう、なんか真っ赤になったふーちゃんは普段の快活さが嘘

みたいに女の子らしいというかしおらしいというか、物凄いい恥ずかしいんですが!?

「うー……、ああもう！　とりあえずこれで話終わり！　ご飯食べましょ！」

「え、ええーっ!？」

「いいじゃない、アタシは香織分充填したし」

「え、なに香織分って」

「カオリニウムとも言っわ。葵義姉さんは一度の充填で一ヶ月は生き延びられるって言ってたけど、アタシは二週間が限度ね……」

いや、そんなことを聞きたいのではなく。

そもそもその摩訶不思議な成分そのものについてご教授願いたいです。

「アタシは香織と普段から一緒にいるからこれで済んでるけど、葵義姉さん、家に帰ったときってすぐに抱きついてなかった？」

「……あ、言われてみれば」

「カオリニウムが切れる前に、そうやって補充してたのよ。アタシもこうやってるとありがたさが分かるわぁー」

「って、いやいやそうじゃなくてさ」

「いつけない、もう食堂閉まっちゃう!？　ええい仕方ない！　香織、自分の部屋から財布持ってきたさい！　購買行くわよ！　夜食を確保しなきゃ！」

あ、もう食堂諦めたなこの子。

でも、もう七時五〇分だし、今から食堂に行ってもご飯は食べられないかな。

「ん、わかった。じゃあロビーでね」

「オツケー、急いでね！」

ふーちゃんと別れると、歩きながら量子変換されていた制服を元に戻す。あ、このやり方便利かも。

部屋に戻っても人気はない。のほほんさんはお風呂か食事のどちらかだろう。毎晩一〇時には寝ているし。

自分の机から財布を取り出すと、ロビーへ。そこには、既にふーちゃんが待っていた。さすがもともと自室にいただけあって早い。

「ふーちゃんごめん、待った？」

「そんな時間でもないでしょうに。何食べる？」

「んー、お肉？」

「太るわよ」

「あんまり太らない体質なんだよねえ。増えても筋肉だし」

その言葉に、ふーちゃんはなにやら目を見開いている。ん、何かおかしいことを……、あれ？ これ中学時代にあったな。

あの時は確か後ろから胸を鷲掴みされたりお腹に抱きつかれたりしたわけですが。

「この、なんてうらやましい体質なのよーっ！」

「ひゃあっ！？ な、なにするのふーちゃん！？」

「ぬあーっ！ アタシなんて、幾ら食べても身長伸びないのにー！ あんたは苦労知らずでその体系維持してるわけっ！？」

「そ、そんなこと言われても、ひゃんっ！」

ちょ、ふーちゃん、お腹はダメだって！？

「あ、ちょ、あは、あはははは！ ふ、ふーひゃ、やめっ、あははははっ！」

「このこのこのこのこのーっ！ 全国の体系維持に悩む女子学生の恨みよーッ！ ったあっ!？」

もうダメかと思われた矢先、後ろからスパァン！ と聞きなれた音が。

し、死ぬかと思った……。

「何をしている。全く、ロビーでいちゃつくな馬鹿者が」

「い、いちゃつくだなんてそんな、えへへ……」

「何を嬉しがっている……。まさかお前、マゾか？」

「ち、違いますっ!？ って、織斑先生は何でここに……?」

「一之瀬が倒れたと聞いたが……、ふむ。どうやら間違いは起こっていないようだな」

……あの、千冬さん。間違いつてーのはつまり、ナニをあれしてつてことですよな？

「まあそついうことだが、何もないようだからまあいい。一之瀬、体は大丈夫か？」

「あ、はい。ふーちゃんから告白されて、パニックで倒れただけです」

うーん、これってヘタレなのかな。それに、ふーちゃんのこと前はちゃんと真っ直ぐ見たのに、今は目が見れないし……。

なんて考えていると、千冬さんはぜはぁー、と溜め息をつく。幸せ逃げますよ？

「まあ、青春しているようで何よりだが、間違っても間違いだけは起こしてくれるなよ。で、今から購買か？」

「な、何故分かったんですか？」

「財布持って出て行こうとしていれば大体分かる。購買は九時までだから、そう焦らなくてもいいだろうが……、丁度いい。ちょっとお使いを頼むか」

おや珍しい、千冬さんがお使いを頼むなんて。

となりのふーちゃんもUFOを見たかのような表情をして、叩かれた。

「ひたい……」

「大丈夫？ ふーちゃん」

「ううー、撫でて撫でてー……」

「ああ、はいはい。痛かったねー」

「で、お使いだな。スルメと枝豆のパックを買ってきてくれ。釣りはやるう」

なんて言いながら、千冬さんはどこから取り出した財布から千円札を一枚抜き取って僕に渡した。

ふーちゃんの頭を撫でながらそれを受け取ると、片手で器用に二つ折りにしてポケットへ押し込んだ。というか、こう言つのはいいんだろうか。

「なに、気にするな。ただし、あまり遅くまで騒いでいるんじゃないぞ」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

「さて、では私は部屋に戻る。スルメと枝豆、頼んだぞ」

「はい、おやすみなさい織斑先生」

会釈よりも少しだけ深く礼をすると、千冬さんは軽く笑って部屋へと戻っていった。

うわ、かっこいい……。僕もあんな風に爽やかに出来ればいい

けど、まあ無理だろうなあ。

「って、ふーちゃん。いつまでこうしてるの？ はやく購買に行こう？」

「そうだったわね。うう、もったいない……」

「もう、あれくらいなら言ってくればいつでもしてあげるのに……」

「ほんとに!？」

「うわあ、凄い食いつき方だ。そんなに頭撫でられるの好きなのかな？」

「……それとも、僕だから、かな。そうだったら嬉しいけど、やはり何か気恥ずかしくもある。」

「ほんと。ほら、早く行こ」

「何してるのよ香織、早く早く!」

「うって言った矢先にこれか。わかってるよふーちゃん!」

「気恥ずかしさを隠すように、笑みを作って先に行っているふーちゃんへそう返す。」

「よし、頑張れ『私』。もう一息だぞ。」

「……でも、本当にどうしようか。ふーちゃんのこと。」

第17話 鈴さんが告白したようです。（後書き）

盛大なネタバレとともにお送りしました、今回。

やけに更新が早いって？ あはは、お昼過ぎから書き出して、気づいたら六ページ目に突入してたよ！

いくら場面転換が二回あったからといって、これは……。

あ、でも更新は不定期ですので、こういった感じに早くなることもあれば極端に遅くなることもあります。ご了承ください。

鈴に告白されてしまった香織は、その悩みとともに鈴、簪の両名を連れて自宅へと戻った。

そこに待っていたのは……？

次回、乞うご期待！

作者の書く鈴ちゃんは男勝りで姉後肌、だけど気づけば乙女チック。そんな彼女を目指しています。ほら、流れてキスして嫌われたときのこと考えて泣いちゃう辺りとか。

そんな鈴ちゃんが可愛いと思った人は感想をどうぞ。

……あれ、のほほんさんは？

夜のパート、はさむ？

閑話 パジャマパーティーをしましょう

「ただいまー」

「あ、おかえりいかりん。倒れたって聞いたけど、大丈夫？」

夜食（半分くらいお菓子類）を買って部屋に戻ると、既にのほほんさんが戻ってきていた。

相変わらずあの黄色いきぐるみのようなパジャマだった。袖だぼだぼですね。

「はい、ふーちゃんのところで休ませて貰ってました。心配掛けてすみません……」

「んーん、いいんだよ。学生のうちは心配掛けるのが仕事だってお母さんが言ってたしい」

私はよくお姉ちゃんに「あんたはもつと甘えなさい！」と言われてたなあ。でもお姉ちゃんに悪いし、あんまり甘えるのって得意じゃないんだよね……。

と、のほほんさんが私の持つ袋に興味を示したようで、そちらに視線を向けていた。

「あ、これですか。休んでいたうちに食堂が閉まってしまったのでふーちゃんと一緒に夜食を買ってきたんです。その合間に今日はパジャマパーティーでもしないかって」

「え、でも織斑先生に怒られるんじゃない？」

「枝豆とスルメのお使いを頼まりましたので、少しくらいなら見逃してくれるそうですよ？」

「わあ、織斑先生太っ腹だねえ」

ちなみに、枝豆とスルメはきちんと先生に渡してきた。お釣りもちゃんと返そうとしたんだけど、それはやると言って聞かなかったので、致し方なくふーちゃんと二人で分けたのです。

さて、どうやらのほほんさんも乗り気なようなので、ちゃちゃつとパーティーの準備を。

お菓子類はある程度陳列して、飲み物はもう冷えてるけど一応冷蔵庫へIN。

「それじゃあのほほんさん、私少し汗を流してしまいますね。ふーちゃん達が来たら入れてあげてください」

「わかったよおー」

のぼーんと笑ったのほほんさんに笑みで返し、パジャマを持って脱衣室へ。もちろん偽パイとブラは寝るときも使います。じゃないとばれるからね！ちなみにこのブラ、背中部分が蒸れたり擦れて肌を痛めたりしないようになっている。便利だ。すっごい便利。

シャワールームに入ると、お湯で汗を流した後に髪を丁寧に洗う。これは雑にやると色々ダメなんだよね。というか、やったらお姉ちゃんにはばれてお風呂に引きずり込まれたことがある。ほんと、お姉ちゃんって自分のことには無頓着だけど、私のことはやたらと構うんだから。

「つと、あんまり浴びててもあれかな」

気づくと、一〇分以上シャワーを浴びていた。

慌ててお湯を止めると、脱衣室で体を拭いてから偽パイ&ブラジャー装着。パンツは見られないし、トランクスでオッケー。どうせ朝になったらISスーツに着替えるし。

その上にパジャマを着たら完成かな。

「のほほんさん、あがりましたよー」

「あ、香織。お邪魔してるわよ」

「お邪魔してます、一之瀬さん！」

部屋へ戻ると、既にパジャマ姿のふーちゃんともう一人の方がいた。

「というか、髪下ろしたふーちゃんは新鮮だなあ。」

えっと、それでこっちの方がルームメイトの人かな。

「あ、いらつしゃい二人とも。えっと、ふーちゃん、こちらの方がルームメイトの方？」

「鈴のルームメイトの谷津坂楓です！やつさか かえて どうぞよろしく！」

「あ、はい、よろしくお願いしますね。一之瀬香織です」

「ほほう、お胸様もそこそこお有りのごようしでゆっ！？」

ズゴンッ！ と恐ろしい音を立てて谷津坂さんが地面に叩き落とされる。え、っと、大丈夫？ 死んでないよね？

「楓？ アタシ言っただよね？ アタシの幼馴染にセクハラすんなって？」

「り、りりり鈴さんっ、待った、ごめん、嘘、嘘だって！ 冗談だよ冗談！ そんな、マジに怒んなくなつて！？」

「あーら、別に怒ってるわけじゃないのよ？ ただ丁度いいサンドバックがあるなあと目を輝かせてみたりしてるだけだから」

「た、たしけて香織ちゃん！？」

「あ、のほほんさんこれ美味しいですよ」

「あ、食べたーい」

「はいどうぞ。あーん」

「あーん、んんー、おいひいねえ」

「いちやいちやしてるうー！？ ちょ、助け、ぎゃああああ！！！」

なんだか後ろで鈍い音が聞こえるけど、気にしちゃいけないよね。別に今のふーちゃんが怖すぎて目を向けられないとかじゃないし、体で向こう側を見えないようにしてのほほんさんの視界からあの惨劇をカバーしようとしてるわけじゃない。断じてない。

数分後、そこには人であった何かと、血糊を頬に飛び散らせて壮絶な笑みを浮かべているふーちゃんがいた。

「ふーちゃん、終わった？」

「ええ、終わったわよ。アタシの幼馴染にセクハラかまそうとした愚かなクラスメートへの天誅はね……」

「楓さん、安らかにお眠りください……」
「し、死んでない、しい……」

あ、生きてた。

まあそんな感じでパジャマパーティースタートです。

ちなみに、楓さんの容姿は黒髪ロングの眼鏡さん。眼鏡はレンズのフレームがないタイプだそう。ちなみにふーちゃんの前の二組代表でもあったらしい。

さて、この辺で皆のパジャマ姿をお披露目していこう。

まず私から。私は水玉模様のパジャマで、汗とかでも透けない素材で作られているから、ひん剥かれない限りは男だとバレる心配はない。

のほほんさんはさっきも言った通り、昔の大人気ゲーム&それを原作としたアニメのマスコットキャラクターのようなパジャマ。きぐるみって言った方が早いかもしれない。ちなみに袖はダボダボ。

ふーちゃんは暗めの水色のＴシャツに黄土色の短パン。一言で言えばラフな格好だ。

で、楓さんは色鮮やかな紫色の甚平。なんで、紫……？

ちなみに全員髪は結わいてません。痛んじやうからね。

「よし、それじゃあパジャマパーティー始めましょうか!」

「私とふーちゃんは、先にご飯だね」

「そうね。楓、のほほんさん、先にお菓子つまんでいいわよ?」

「おー、ありがたやー」

「ありがたやありがたやあー」

ちなみに、のほほんさんはもう楓さんとお互いに自己紹介したらしいから割愛です。

さて、それじゃあ、と。先に飲み物出しておこうかな。

「はいどうぞ、ウーロン茶」

「ありがと、香織」

「ありがとねえ、かおりん」

「あ、ありがとう香織ちゃん」

全員に行き渡った所で食事スタート。

購買のお弁当って、意外と美味しいんだよね。ちなみに、私の今日のお弁当はハンバーグ弁当です。ふーちゃんは鮭弁とサラダ。私は夜でもがつつり食べます。

「いいなあ香織ってば」

「ん、ナニが?」

「だって、食べても太らないんでしょ?」

「まあ、運動もしてるしね」

さすがにきちんと運動して、三色栄養バランス考えて食べてるのに太ったら嫌だし。

ん、ハンバーグ美味しいなあ。今度はレシピ変えて作ってみようかな。

「あ」

「ん？」

「ほい、っと」

ふーちゃんのほつぺたにご飯粒がついていたのでとりあえず取ったけど、捨てるのはな。

食べちゃえ。えいつ。

「あ、ああ、あえ、ええっ！？」

「ん、どったのふーちゃん？」

「あ、あんた、それ、あたしのほつぺの……！？」

「うん。……うん？」

うん、そうだね。これふーちゃんのほつぺたについてたお米様だよ？

で、それを私が食べた、と。

……よし、とりあえず布巾で口を拭って、これでよし。

「んぐぬんんんーっ！！　んーっ！」

「ちょ、ちよつと香織！？　ちよつとー！？」

ベッドに顔を押し付けて絶叫しておいた。

いや、何してるのさ私！？　さっきあんなことがあったばかりだ
というのにまたこんな……！？

「若い者は元気ですなあー」

「ほんとに、羨ましい限りで」

「こらそこ二人い！　茶化さないっ！」

あ、ふーちゃんが怒っている。
ふむ、しかしこれは私の失態でもあるし……。
そうだ、こういうときには。

「ふーちゃん」

「え？」

「ん」

「……え？」

「ん」

現在、わざとほつぺたに米粒をつけて待機中。お互い取ればそれでお相子だよね！

「……えつと、あむっ」

わたしの頬に付いていた米粒を手で取ると、ふーちゃんはそれを口へ入れる。

うん、これでお相子だ。ああい、こ？ いや、いやいやいや、待て待て私、まずお相子って時点でおかしいぞ？ どうしたんだ今日の私！？ なんか調子狂いっぱなしなんですけど！？

「あ、かおりんずるーい、私もやるー！ とつてー」

「なぬ、ならば私もだ！ 鈴、とつて！」

そんな私たちの様子を見て、のほほんさんと楓さんも私たちの弁当から米粒を掠め取ると、わざとらしく頬につけた。いや、いやいや。

「……どうすれば」

「とりあえず、とつてあげれば？」

うん、まあ放置って訳には行かないし、とってそのまま捨てるのはお米を作ってくださった農家の方々にあれなので、食べますけども。

「あむっ」

「ひょいっと」

「おおー、なんだか楽しいよお」

「あ、これ快感かも……」

これ、意外と恥ずかしいんですが？　というかのほんさん、もう一回やろうとしないの。私のご飯減っていくから。

とりあえずその場はそれで落ち着き、まあ私の心中が大荒れの中、食事を済ませると、本格的にパーティー開始である。

「さて、と。それで三人とも、今気になる人はいる？」

「突然何よ、藪から棒に」

「いやー、やっぱり狙いは織斑君かなーと思って。一番遠いんは私な訳だしさ？」

「別に、一夏は友達だけどそういう感じじゃないわよ。どっちかっていうと昔馴染みの男友達ね」

あ、一夏とふーちゃんも幼馴染だったんだよね、確か。
不思議な縁もあったものだ。

「じゃあ、香織ちゃんは？」

「え、私ですか？　そうですね……、まあ一夏はないとして、今気になっている人は、特にはいないですね」

「その割には、鈴のご飯粒取ったときにやけに反応してなかったー？」

「え、ええつと、あれはその、ですね！」

「はいはい、わかったわかった。ここじゃ日常茶飯事だし、別に変な目で見たりはしないよ。お幸せにねー？」

ああ、こんにやる勘違いしてるぅー！

でも好きというか気になる人としてはそうだし……、あーもう、どうすればいいのさ！

しかもふーちゃんが顔真つ赤にしてるし！？ ほら、そういう反応するからそういう系の人だって思われるんだぞ！？ あ、でも私とだったら勘違いされてもいいって言ってたっけ……。

「あ、顔真つ赤だー」

「で、のほほんさんはどう？」

「うーん、おりむーはカツコいいけど朴念仁だし、かおりんの方が好きー」

「その好きはどっちの好き？」

「友達の方かなー？ 今は」

今は！？ じゃあもしかするとそれな感じになりかねないんですか！？

「よかったわね香織、愛されてるじゃない」

「あれ、ふーちゃん意外と余裕そうだ……」

「もうカオリニウム補給してるし、心に余裕が出来てるわ」

「だからそのカオリニウムって何！？」

「香織と接することで補給できる成分よ。私の心の安定に欠かせない」

うん、全く分かん。

というかこれってパジャマパーティーなのか？ ただのガールズ

トクな気がしてならないんですけど。

「なるほど、じゃあさっき抱き付いて寝てたときに補給したのだね！」

「見られてた！？」

「うんうん、私は理解ある若者だから！ 存分におやりなさい！」

「ちくしょう、味方がいませんっ！？」

「こら香織、ちくしょうなんて使っちゃダメでしょ？」

「諸悪の根源が何を言うか！？」

味方が、味方がいない！ もうどうすればいいの！？
いや、楽しいけど！ 楽しいけどどうするのこれ！？

で、結局これは日付が変わるまで続きましたとさ。
本当に、女子のパワーって凄い。

今日の教訓：不用意な発言、行動は身を滅ぼす。

閑話 パジャマパーティーをしましょう（後書き）

はい、数時間も経たずに更に投稿。異例の投稿ペースである。これからはこういった閑話もたまに書いたら投下していくので、その時点でヒロインポジションにある人と香織とのいちゃいちゃ、または日常が見たいという場合は要望を出してくれば、書ければ書かせていただきます。

香織に「ぎゃおおおん!？」て言わせようか迷った。

男の娘繋がりだけど、作者はそっちの本編はやってません。アイマス難しす。

あ、楓さんはオリキャラです。作者は二巻までしか原作を所持していません。その上三巻は一度読んだだけです。それ以上は、読んでいないのです。

出てないよね、鈴のルームメイト？ あれ、出てたっけ？ 出てたらこっちはパラレルということで一っ。

第18話 Bind Company Second !!

夜は明けて日曜日、僕は一人で寮のロビーにいた。

「んー、まだ一〇分前だし、もうちょっとかかるかな」

朝八時五〇分からなぜこんなところにいるかというと、今日は本社までお出かけだから。

ちなみに束ちゃんにはさっき連絡したので問題なし。

それにしても、朝のロビーって静かだなあ……。ちよっと落ち着くかも。

「香織、おはよ」

「あ、ふーちゃん。おはよう」

「更識さんは？」

「まだみたいだね」

やってきたふーちゃんと一緒にロビーの椅子に腰掛け、一息つく。

「香織、はい」

「え？ あ、ありがとう」

ふーちゃんがぐいっと差し出してきたのは、ちよっと不恰好なサンドイッチだった。

「時間がなくてそれぐらいしか作れなかったけど、朝食だしこれで我慢してね。向こうで何か食べましょ」

「ありがとう、ふーちゃん。コーヒー淹れてくるね」

「あ、私ガムシロップだけでいいわ」

「わかった」

ロビーは休憩所も兼ねていて、簡単な食事くらいならここで取れるようになってる。食堂以外で寮の中ではこと屋上が憩いの場として人気が高いのだ。

備え付けのコーヒーマーカーでコーヒを淹れると、コップに注いでお盆に乗せ、ガムシロップを二つ、ミルクを一つ持って戻る。

「はい、コーヒとガムシロ」

「さんきゅ」

コーヒーマーカー以外にコップに入れるタイプの自販機や普通の缶やペットボトルも売ってはいるけど、そっちはやはりコーヒーマーカーと比べて味が落ちる。寮監の先生はもっぱらこっちらしい。二人で軽いブレックファストを楽しんでいると、廊下の向こうからゆっくりとこちらへ歩いてくる人影が見えた。

「あ、おはよう簪ちゃん」

「おはよう……。えっと、鳳さん、初めまして。おはようございませ……」

「ん、初めましてでおはよう更識さん。私のことは鈴でいいわよ」「えっと、じゃあ私のことも、簪で、いいです……」

おずおずと言った様子で声を出す簪ちゃん。やっぱり、ふーちゃんとは初対面だから喋りづらいのかな。

「りょーかい。何か食べてきた？」

「いいえ、何も……？」

「それじゃ、はい。私の作ったサンドイッチ。形は不恰好だけど、味は保証するわ」

「あ、ありがとう……」

「それ食べたら行こうか。飲み物いる？」

「うん、大丈夫……。ありがとう……」

「いいえ、どう致しまして」

うわあ、なんかサンドイッチ両手で食べてる簪ちゃんって、小動物みたいで可愛い……。

なんというか、こう、抱きしめたくなくなるような、撫で回したくなるような、そんな衝動に駆られる。

もきゅもきゅとサンドイッチを頬張る簪ちゃんをふーちゃんと二人でゆったりと眺めた後、食べ終わった簪ちゃんと共に学園を出る。

「ところでさ。篠ノ之博士とは私話してないんだけど、大丈夫？」

「大丈夫。というか大丈夫にさせるから。東ちゃんって普通にコミュニケーション能力皆無だから」

「うん……。それは話してて私も思った……。でも、なんだか楽しい人」

「それなら、まあ大丈夫そうね。変なことされてないわよね？」

「いや、それはさすがにないよ」

道中こんな感じで話しながら我が家に着き、とりあえず迎えを待っていようと家に上がると。

「あ、お帰り香織ー」

「お帰り香織ちゃん！ 待ってたよー！」

ボタン。

「……おかしいな、ウサ耳が二人いたように見えたんだけど」

「香織、戦わなきゃ、現実と」

「……ふぁいと」

うつ、二人が今は恨めしい……。
よし、気を取り直してもう一度、扉を開ける。

「あ、お帰り香織ー」

「お帰り香織ちゃん！ 待ってたよー！」

「リテイクのつもりでしょうけど慌てて座りなおしたせいで衣服乱れまくってますよ」

うん、やっぱりお姉ちゃんと束ちゃんでした。

お姉ちゃんがなんで朝一に出てきた僕より早くうちにいるのかとか、どうして束ちゃんがうちに上がりこんでるのかとか、まあ色々聞きたいことはあるけども。

「まずこのでっかい筒状の物体は何！？」

「量子変換転送装置、俗に言うワープマシンだね！」

「だと思っただよこんちくしょうっ！ 束ちゃん、少し自重して！

ハルからこの前お母さんが止められない助けて的なメールが来たんだからね！？」

「えー、ハルがそんなこと言ってたの？ んもう、言ってくれれば構ったのにいっ」

「いや、止まれよ。で、これで本社まで行くんですか？」

「そうだよん。ちなみにあーちゃんもうちの社員の仲間入りだから！」

おおっ、突っ込みどころが。

あーちゃんっていうのは、多分うちのお姉ちゃんのことだな。で、お姉ちゃんもバインドカンパニー所属、と。まあこれはいいや、束ちゃんの暴走は今に始まったことじゃない。

それで、とりあえず簪ちゃんも確定してて、じゃあ……。

「とりあえず、ふーちゃんとお話してください。自分でお話したいって言ったんですから、ちゃんと話して下さいね？」

「はい！ で、君がふーちゃん？」

「鳳鈴音、鈴でいいです」

「じゃ、りんちゃんだー！ 平仮名なのがポイント！」

「は、はあ……」

「それで、りんちゃんは中国の代表候補生なんだよね？ まあ束さんにはそんなことどーでもいいんだけど、中国でこのまokusぶつてるのと、香織ちゃんと一緒に宇宙を目指すの、どっちがいい？」

「後者よ、即決で。ただしうちの母親の身の安全と生活レベルは保証して」

「オツケーオツケー、その辺は中国に適当な技術投げてやれば勝手に食いつくだろうから、全然無問題だね！ よーし、引き抜き成功だね、さっすが私い！」

めまぐるしい。

えーっと、あれ、中国代表候補生が候補生やめてうちの企業に就職したよ？ ヘッドハンティングってやつかな？

でも、その場合ってりんちゃんのISは没収されちゃうんじゃない？

「その辺はねー、うちのISコア一個とこれの今までのデータ全部やるから寄越せって言っとけばいいよ。国動かしてる連中は大体目先のことしか頭にないからねー？ うへへ、可愛い女の子が一気に三人増えたよ！」

「その笑い方親父臭いんで止めてください。で、本社行くんですよ」

「そうだねー。一応皆の体とか調べてこれからの専用IS製作の参考にしておきたいし。かんちゃんは、自分でIS組みたいんだった

よね？　ならうちの機材とデータ全部自由に使っていいよ！　私は社員には優しい社長さんなのです！」

「丸投げとも言いますけどね」

凄いなあ、普通の企業だったらこんなことしないよねえ。

なんて思っていると、突然束ちゃんが手元のハンドヘルドコンピュータへ向けてカタカタと何かを打ち込んでいる。

「……何してるの？」

「んー？　IS学園のコンピュータにこっそり忍び込んで、三人分のデータをちょこつと拝借しているのですー。また写真撮影とかだるいでしょ？　だから、ここでちゃちゃっとデータ造って本社に送って、ハルに社員証頼んでおこうと思ってさー」

「ああ、なるほど。千冬さんにばれないように、は無理ですね。今度あつた時はご愁傷様です」

「酷い！？　少しは上司を助けようという気概はないの！？」

「あははー、残念ながら」

うん、束ちゃんはどういう扱いでも問題ないみたい。

というか問題ないね。絶対。本人もあんまり気にしてないし。

そんなこんなで粒子変換転送装置、これめんどくさいな……。ワープ装置へと乗り込んだ私達。

「で、ほほいのほいっと。気づいたら向こうについてるし、事故で融合しちゃったりとかもないから気楽にしててねー」

「最後の最後で怖いこと言うわねこの人！？」

「でも……、たぶん大丈夫……」

「簪、その根拠はなに……？」

「……勘？」

「当てにならないっ！？」

「よし、いくだべー　あ、ポチツとな」

そんなグダグダな雰囲気と共に私たちの意識が一瞬消し飛び、そして気づいたときには……。

そこは本社でした。え、何これ早い。

「とーちゃーくっ！　ただいまーハル！」

『お帰りなさい、お母様、香織、イヴお姉様。そして更識簪様、凰鈴音様、一之瀬葵様、ようこそ、バインドカンパニーへ』

「……人工知能？」

『はい。私はHAL-30000。お気軽にハルと呼び下さい』

「たっちゃんが言ってたのってこれかー。よろしくね、ハル！」

「にひひー、凄いでしょあーちゃん！」

「凄い凄い、アニメみたい！　さっすがたっちゃんだ！」

「わっはっはっは、もつと褒めたまへー！」

……なんで束ちゃんとお姉ちゃんが意気投合しているんだ。

ああ、あれか。シスコンとブラコンで被ったのか。そういうことにしておこう。良くないけどそういうことにしておこう。なんか束ちゃんに関しては突っ込んだら負けな気がしてきた。

そんな私を尻目に、簪ちゃんは周囲の機材や雰囲気に目を輝かせて大興奮、ふーちゃんも表には出さないけど結構テンション上がってるみたい。

「束社長、貴女凄い……。ロマン、分かってる」

「おおっ！？　もしかしてかんちゃんはそういうの大好きかな！？」

「うん……。特に内部に銀形の色を使っている辺り、近未来のこだわり」

「そうなんだよ！　香織ちゃんは突っ込んでくれなくてねー。ほら見て見て、中央のこういうでっかいディスプレイってイカしてない

「!？」

「……ひしっ」

「ひしっ！」

あ、簪ちゃんと束ちゃんが抱き合った。特撮とかロボット好きだ
って言ってたからね、簪ちゃん。通じ合ったんだろっねえ。

いや、というか私の周囲にはふーちゃんしか救いがないんだろっ
か。っとう!？

「お、お姉ちゃん!？　なんで突然抱きついてるの!？」

「カオリニウムが不足してるのよおー……。学校じゃ学園違っから
中々会えないし、寮でも織斑先生が目を光らせてるしいー!　んは
あー、やっぱり生はいいわねえー」

「なんか親父臭いつ!？　もう、お姉ちゃんってば……。補給した
ら離れてよ?」

「んー、りょーかーい」

……やばい、疲れてきた。

『ふぁいと』

『うん、がんばる』

イヴも応援してくれてるから、頑張ろう。

というか誰もイヴに関しては突っ込まないんだね。

「ふああ……」

「ふいー……」

東社長と一緒に、食堂の机にべたりと突っ伏す。ひんやりとして気持ちいい。

やっぱり、ここに来て正解だった。こんなにいい環境で仕事が出るなんて、まるで天国だ。

なんというか、この会社全体が秘密基地染みっていてとてもいい。大好き。

話しの途中でワープ装置のことや月への移設計画のことも聞いたけど、やっぱりこの人は凄い。私の冷め切っていた好奇心と夢を、あつという間に溶かしてくれた。

「あ、そう言えば社長……？」

「ん、なーに？」

「さっきハルが言っていたイヴお姉様って、誰ですか？」

「私が梟につけた、香織ちゃんのサポートAI。香織ちゃんってほら、男の娘じゃん？ 色々フォロー必要なんだよね。おもに電子方面で」

「……ん？ 男、の子？」

待て、今そう言った？ 香織ちゃん、が？

「……香織ちゃんは男の子？」

「あれ、言ってなかったっけ。そう、香織ちゃんは男の子だよ。そしてそれを隠して学園に通ってるの。今国の連中に見つかる色々であれだからねえー」

……まあ、確かにその通りだ。今でこそ香織ちゃんは社長の後ろ盾があるとはいえ、この会社も悪く言えばダミー、影響力はあまりない。とすれば、誘拐されモルモットにされてもおかしくはないわけだ。

「このメンバーは全員知ってることだけど、きちんと秘密は守ってね？ 学校でこの事知ってるのは、このメンバーとちーちゃんだけだから。あ、ちーちゃんは千冬ちゃんのことね？」

「はい……。秘密は守る。私たちだけの秘密」

「おお、いい響きだね……」

そうしたら、あれかな。

惚れちゃっても、いいかな。

女同士だから最後の一線をためらっていたけど、今なら、いいかな？

「頑張れ少女、私は皆の恋を応援しているぞー！」

「……うん」

……頑張ろう。うん。

「そんなかんちゃんにプレゼントだよん！」

「え？」

すつと顔を上げると、そこには満面の笑みの社長がいた。

「着いてきて！」

ぐいっと私の手を引き、社長に連れられやってきたそこには、一台のISのようなものが。

けれど武装も何もなく、二つの球体とISの外装がそこにあるだけ。

「これは……？」

「ISだけどISじゃない、かんちゃん専用移動式ラボラトリー！これをかんちゃんに差し上げます！」

「えっと……？」

「これはね、既存のISラボのテクを全て詰め込んだ、移動式のISラボなのだよ！これ一つあればいつでもどこでもISの調整が行えます！しかも改造から新規建造まで何でもござれ！ちなみに東さんも一つ持つてるよん」

それは、とても凄い代物ではないのだろうか。

だってピットが必要なくなるし、重い工具を持ち運ぶ必要も無い。それに、本音に樂をさせてあげられる。

「……ありがとう？」

「うんうん、気にしなさるなー！名前はまだないから、かんちゃんが付けてあげてね！はい、乗って乗ってー！」

「あ、うん」

ISに乗るのと同じ感覚で、けれど装着されるのは上半身のみ、下半身へは座り込めるように椅子状になった装甲が伸びている。

背を預ける感覚で乗り込むと、なんというか、マッサージチェアのような座り心地だった。AICも聞いているらしく、宙に浮く。

「……名前。じゃあ……『モータータイプ』。お前は、モータータイプ」

『モータータイプ、新規名称を確認。所有者『更識簪』と特定。初期化

フィッティング

パーソナライズ

及び最適化を行います。この作業には数十秒かかる可能性があります』

その音声 flowed 直後、目の前にコンプリートの表示。
指の腹でそれを押すと、小さなビーブ音と共に全身の軽くなる感
覚。

「うん、これでこの子は正真正銘君専用だよ！　よかったね、モー
タイプ！」

「……よろしく、モータイプ」

応える代わり、キーボードがそれぞれに光る。

モータイプは、『本音』という意味。もう一度あの子と話し、仲
直りして、一緒にまたラボに立つ。

そして願わくば、共にここで働きたい。そんな誓いと願いを込め
た名前だった。

第18話 Bind Company Second !!(後書き)

原作三巻で束さんが使っていた『吾輩は猫である』の同タイプのラボを簪がゲット。次回はのほほんさんと簪の回か、それともラウラ回か……。

そしてロマンの三文字で束さん、葵、簪の三名が意気投合。鈴空気。本人はパジャマパーティーで一回気持ちリセットして、できるだけ普通に接しようと頑張ってます。

あ、これ2時間くらいで書きました。
めっちゃ筆が載る。ほとんど詰まらずに。

第19話 鈴の音と眼帯さん、知り合う

時は巡って月曜の放課後。

アタシは第三アリーナへとやってきていた。

あ、バインド・カンパニー所属の凰鈴音です。……うん、なんか中国代表候補生って言うよりもこっちの方がカッコいい！ ほら、所属と候補生の違いよね。所属って言うてた方がカッコいいじゃない？

コホン、それはともかく。

「珍しいわね、アンタ一人とかち合うなんて」

「鈴さんこそ、香織さん達と一緒ではありませんの？」

「香織達はグラウンドで自主トレしてから来るってさ。アタシはそれまで学年別トーナメントに向けて自主トレよ」

「そうなのですか。では、一緒にどうですか？」

「別にいいけど、当てないでよね？」

「そうそう下手ではありませんことよ？」

こんな感じで、かち合ったセシリアと歓談。

ちなみに、甲龍はとくに何も弄られていない。まだ束さんが中国に渡す情報とコアを用意していないから、来週までには用意して交渉終わらせる、だそうだ。……ほんと滅茶苦茶だけど、身内に甘いなあ……。まあ助かるからいいけど。

「んじゃまあ」

「始めましょう」

直後、お互いのハイパーセンサーに反応。

咄嗟に退避すると、その場に超音速の砲弾が飛来した。

何事かと砲弾の来た方向を見てみれば、そこには合同実習の時に姿を見た『シュヴァルツェア・レーゲン』がたたずんでいた。

「どういふつもり、転校生？ いきなり攻撃なんて、ちょっと無粋じゃない？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……！」

ちらりと視線を横にやれば、そこにあるセシリアの顔はひどく強張っていた。

なんかやられたのかしらね、こいつに。まあいいわ、喧嘩売るなら買うのがアタシの主義だし。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見たときのほうがまだ強そうではあったな」

「言葉でいびるのは三流の証よ。文句があるなら」

《そうてんがけつ双天牙月》を展開、両手に構えて臨戦態勢をとる。

「腕っ節で示しなさい」

「くっ、くはははは！ いいだろう。まずは貴様からだ、凰鈴音！」

「いいわね、嫌いじゃないわよアンタ。さあて」

エネルギーは問題なし、戦闘は、出来る。

相手はガチで遣り合える相手だ。それにドイツの新型にも興味がある。手合わせするには絶好の機会。

テンションも上がってきたし、やらない手はないわよねえ！

「始めましょうかア！」

アタシの雄叫びと同時に《龍砲》を発射するも、あっさりと回避

される。全く、さすがにそう奇襲は通じないか。

なら正攻法で行くまでよ。

《龍砲》を軽く狙いをつけて乱射しつつ、相手の懐へと飛び込むべく疾走する。

向こうもズドンズドンとこちら目掛けてレールガンを撃ち出しているものの、お互い全く当たらない。まあ、あちらも制度は期待していないだろう。レールガンが向こうの主力兵装ではないのだし。

「うるアッ！」

「ふん、遅いぞ」

「まだまだア！」

ラウラの隙を突いてガシガシと殴りに行くものの、やはり相手は軍人。こういったときの対処もお手の物だ。

と、突然こちらへ向けてラウラが右手を突き出す。ガクンツ、とこちらの動きが停止した。あー、やば。嵌ったか。

「こちらの停止結界のことを分かっているって突っ込んでくるとは、やはり獣か」

「チィ、やつぱしこれせこいわねー。アタシのISだと相性悪すぎってやつよね」

「ふん。墜ちろッ！」

肩から射出された二本のワイヤーブレードとレールガンの砲弾が、アタシ目掛けて一直線に降り注ぐ。

けどまあ、このぐらいでへこたれてたらダメよね。うん、ぜんぜんダメよ、アタシらしくないじゃない？

「猪突猛進大変結構、止めれるもんなら止めてみるッ！」

「な、バカなっ！？ A I Cを振りきるだっ！？」

「アタシの愛を舐めんなっ！」

超恥ずかしいこと口走ってるけどまあいいや！

これの理屈は単純、AICで止めきれる動きのベクトルを上回るベクトルで動いただけ。まあ無理させすぎてエネルギーはすっからかんだし、装甲もボロボロだけど。やっぱり負荷掛かりまくってるわね……。もうこの手はつかえそうにないか。

「ふざけた事をつ！　だが、もう一度は出来まい！　大人しく墜ちろ！」

「危ない、鈴さん！」

再度こちらへ向かってくるラウラへ向けて、こちらも真つ直ぐ突っ込んでいく。

喧嘩を買ったんなら、全力で叩きのめすのが礼儀ってもんでしょ？　それで負けるならアタシが弱いってだけ。もっと強くなればいいだけの話よ。

「セシリア、手エ出さないでよ！？　これはアタシの、喧嘩なんだからあああ！」

こちらを翻弄しようと撃ちだされたワイヤーブレードを、二対の《双天牙月》で叩き落とし、レールガンの弾をひたすら避けながら《龍砲》を撃ち込んでいく。

既に戦闘は高速に達し、更にスピードを上げていた。
やっば、楽しつ。癖になりそうね……！

そんなことを思った直後、ワイヤーブレードが今度は六対に増え、更に両手の装甲からプラズマ刃が展開される。うわ、まだ増えるのね。いいじゃない、燃えてきたわよ。

「停止結界を使うまでもない、今の貴様などこれで十分！」

「あつははは、いいじゃない、燃えてきたわ！ やっぱ、超楽しい！ ねえラウラ、そう思わない！？」

「くっ、窮地に追い込まれて笑うなど、異常者が貴様は！？」

「そうかもね！？ でもしょうがないじゃない、楽しいんだからさあ！」

やばい、これほんとにやばい。楽しくてしょうがない。

なんというか、香織とただらしているのも楽しいけど、これは別の楽しさだ。血が滾るといっかなんというか、こういうガチの戦いつてあんまりなかったし、色んな手を使ってくる相手とあんまりやったことなかったからね。それに、なんか殺気みたいなのが伝わってくるのが楽しいっというか、もうとにかく楽しいのよ！

うーん、アタシも若干おかしいのかもしれない。けど、香織を守るために強くなれるって考えたら、もっと楽しくなった。ほら、相手は本物の軍人だし、こんな機会なんてそうそうないじゃない？

「り、鈴さん……？」

「邪魔したら怒るわよ、セシリア！ エネルギー切れまで戦いたいんだから、さあッ！」

ワイヤーブレードのうちの二本を《双天牙月》で斬り落とすと、ついでに装甲を一部叩き割る。これで武器は減った、まだいける。けど、さすがにシールドエネルギーが二〇〇を切るとやや不安だ。そろそろファイナレにするか。

「そっちもシールドエネルギーもあんまりないでしょ、そろそろ終わりにしない？」

「終わるのは、貴様だけだッ！」

「やっぱそう来るかッ！」

再度打ち合い、音高く金属音を響かせる。

びりびりと手に走る振動も無視して更に振るうと、その曲線状に位置していたワイヤーを断ち切る。

螺旋状に繰り出していく刃を悉く相殺しながら、ラウラもこちらの衝撃砲を吹き飛ばした。さすが。

「ふふふ、あはははは！ やっぱり最高、喧嘩なんて最近なかったから尚更よ！」

「……ああ、この高揚感、なんとなく貴様の言う『最高』に通じるものがあるのか？ まあ、いい。少なくとも貴様を打ち倒すのは私だ！」

「それはこっちの、セリフよッ！」

「おおおおおおおおっ！！」

「はあああああああっ！！」

強者との戦いは身を高め、自分の力量を更に上げてくれる。それはすなわち、香織を守るのに必要なだけの力を得るのに役立つくれる。

ラウラはまさしく強者であり、戦うには事足りる、満ち満ちた敵意を持っていた。だからこそ、アタシもその喧嘩を買ったのだ。

まあ、ここまでテンションが上がってしまったのは予想外だったけども。

「……私の勝ちだ、凰鈴音」

「ええ、アタシの負けね。ラウラ・ボーデヴィット」

「……お前は、ただ乗っているだけの下らない人間ではない。先の無礼は謝ろう」

「別にいいわよ、ラウラ。アタシのことは鈴でいいわ」

活動限界に達して量子変換されたISが待機状態に戻ると、アタシとラウラはそんなことを口にした。

がくがくと膝が震えて立っていられず、思わずその場にへたり込む。

「これが、思いが伝わるということか？」

「さあね。でも、アタシは誰かを守るために甲龍と一緒にいる。アタシはなんのためにそれと一緒にいるの？」

「……教官の名誉を守り、汚点を注ぐ。それだけだ」

「織斑先生のことね。汚点ってどういうこと？」

「……織斑一夏。アイツさえいなければ、教官はモンド・グロツソ二連覇を達成できていた！ 私は、教官の汚点となったアイツを排除するために、ここに来た」

ふーん……。なるほどね。

しかし一夏の奴、面白いように厄介ごとを引き込んでくるのね。さすがというかなんというか。

「まあ、そういうことをするなら、まずは守る人の立場に立つてみることもね。やってから後悔した方が重いつてもあるから」

「その格好で言っても説得力がないな？ ……ほら」

「……ありがと。アタツてやつぱり根はいい奴なのね」

「か、からかうなっ！？」

なにこの子、楽しい。というか可愛い？

香織とはまた違った可愛さというか、並べて愛でたいわ。

ともかく、差し伸べられた手を取ると、ぐっと引き上げられた。さすが、鍛えてるだけあるわね。

「体は大丈夫か？」

「問題ないわ。このぐらい。なに、心配してくれてるの？」

「そ、そういうわけではない！」

「り、鈴さん、無事ですよ？」

「別になんともないわよ。ちよつと力抜けてるけどね」

「……」

「なんだ、何か文句でもあるのか、イギリス代表候補生？」

おお、なんだか綺麗に変わったわねえ。でも、もうちよつと愛想良くてもいいんじゃないかしら。

それにしても香織達遅いわねえ。何してるのかしら。

「ふーちゃーん！」

「香織、遅いわよー！」

「ごめーん！　ちよつと手間取ったー！」

「はいはい、今そつち行くわ！　ほらラウラ、行きましよ。セシリアも」

「あ、おい！」

「ちよ、ちよつと鈴さん！？」

ピットから手を振ってきた香織達に応え、アタシは二人の手を引いて走り出す。一度走り出してしまえば足の力はすんなりと入り、二人をぐいっと引っ張って走る。

うん、ラウラって意外といい奴みたいだ。

「鈴、なぜそいつと一緒にいる!？」
「は?」

ラウラさんとセシリアさんを連れたふーちゃんがこっちに着くと、
箒さんがいの一番にそう叫ぶ。

いや、突然なんですか？

「なぜラウラ・ボーデヴィツヒと一緒にいるのかと聞いている!？」
「はあ? 友達のいない転校生に手を差し伸べるのが悪いことだとも?」

「いや、それはフォローになってないからね。あ、ラウラさん。私は一之瀬香織、よろしくね」

「……鈴、こいつがお前の守りたい人か?」

「え、なんでわかったの?」

「……なんというか、線のようなものが見えた、気がした。赤い奴だ」

んっ!？ それは、つまり、赤い糸で結ばれてるんだね（きゃぴきゃぴ）みたいなことですか!？

いやいや、それはない。というかラウラさんって確か軍人さんだったよね。……あれ、意外と軍人さんってロマンチストな人多い気がする。

というかふーちゃん、真っ赤になってくねくねしないでっ!？

「おほん、それはともかく。箒、それに何か文句でもあるの?」

「大有りだ! そいつは一夏を襲ったんだぞ!？」

「それで目の敵にしてるってこと? それと、アタシとラウラが仲良くしてるのと、どういう関係があるのよ?」

「そ、それは……」

あー、ふーちゃん怒ってるね。ラウラさんのこと悪く言われたかなかな。

「うん、箒さん。今のは箒さんが悪いですよ？ 価値観や見方なんて人それぞれなんですから、自分の見方を人に押し付けるのは良くありません」

「し、しかしだな……！」

「そうだよー瀬さん、あの子は一夏を！」

「それを言うなら、箒さんは一夏のことを何度も殴ってますよね？ 時には竹刀や木刀で襲い掛かったときもありませんでした？」

ちなみに、この情報は女子ネットワークからの情報です。

噂好きの女子は何でもかんでもネタにして楽しんでしまうものなのです。女って怖いね。いや、この年代の子だけかもしれないけどさ。

しかし箒さんや、幾らなんでも木刀はまずいですよ。人殺せるかなね、木刀って。

「うつつ……」

「前科で言うなら箒さんのほうがよっぽど酷いですよ？ 幾ら照れ隠しや恥ずかしさからだとはいえ、一歩間違えれば一夏が死んでいたこともあったでしょうに。今後は慎んでくださいね」

「……わ、わかった。すまん」

「謝るのは私じゃなくてラウラさんです」

「……ラウラ、ボーデヴィツヒ。その……、すまない」

綺麗に頭を下げながら謝罪した箒さんに、ラウラさんは呆気にとられるようにしてぽかんと口を開いていた。

虫、入りますよ？

「……ふ、ふん」

「ラウラさん、その態度はいけません。わかった、位は言ってあげるべきですよ」

「何故私が」

「それが礼儀だからです。相手が誰であろうと、礼を失すればそれは自分の品位を下げることになります。わかりましたか？」

「……謝罪は、受け取った。これでいいか？　一之瀬香織」

目を逸らしながらも、そうぼつりと零すように言ったラウラさん。まあ、全く会話がなかったことに比べればマシかな。これから改善していけばいいか。

「はい、これで今回のことについては恨みつこなし、言いつこなしですよ。ラウラさんも、もう少し人と関わってみたらどうですか？」

「……関わらずとも任務に支障はない」

「じゃ、関わっても問題ないわけね。じゃあとりあえずアタシと関わってるんだし、香織とも関わってみるということだ」

「なっ、待て鈴！　何を突然！？」

「少しは自分のクラスの人とも交流持ちなさい。香織、クラス内ではよろしくね？」

慌てたラウラさんを尻目に、ふーちゃんが軽く笑ってそう告げた。ラウラさん、あんまり人を近寄らせないし……、確かにこっちら歩み寄った方がすぐに打ち解けられるかもしれない。

それに、もう一週間は経ってるのにぜんぜん友達いないのは寂しいもんね。

「わかった、ふーちゃん。よろしくね、ラウラさん」

「……よろしく頼む、一之瀬香織」

「はい、握手」

おずおずと差し出してきたラウラさんの手をそつと握り、握手。
最初はどんな怖い子かとも思ったけど、思ったより優しくうな子
でよかった。

それにしても、やっぱり軍人さんの手ってごつごつしてるなあ。
どっちかって言うと大人っぽい手って感じかな。

「よし、じゃあ訓練しようか！」
「おー！」

皆仲良ぐが、一番だよ。

第19話 鈴の音と眼帯さん、知り合う（後書き）

鈴が好戦的なのは、強い相手と戦うことで自分が強くなれることと
テンションが上がったこと、フラストレーション溜まってた
ことの三つの理由からです。

普段は普通に戦ってます。

他の作者皆がシャルロットとラウラ両方を抱き込む中、冷静にラウ
ラのみを囲んでみる。シャルロットは、可愛いけど絡めづらい。

というか、箒とラウラ比較したら、圧倒的に箒の方が危険だね。
真剣まで持つてるし、躊躇いなく抜くし。木刀や竹刀だって殴り続
ければ人殺せちゃうからね。

ラウラは許さないとか言っておきながらISでの戦闘にこだわって、
あくまで物理的に殺ろうとはしなかっただけマシ？

第20話 学年別トーナメント（前書き）

みよ、一時間クオリティ！。

第20話 学年別トーナメント

翌日のSHR。

私たちに配られたのは、学年別トーナメントをタッグマッチで行うという旨が記されたプリントだった。

「さて、プリントを読んでもらえば分かるとおり、今年の学年別トーナメントは二人一組のタッグ戦で行うことになった。各自パートナーを見つけ、タッグを組んでおくこと。ちなみに、当日までにパートナーを見つけれなかった場合はランダムでの組み合わせとなるので覚えておくこと。朝の連絡事項は以上だ」

千冬さんの言葉でSHRが締めくくられ、一時静まり返っていた教室は、まあ予想通りに爆発した。

「織斑君！」

「デュノア君！」

ん、あれ？ おかしいな、二人に殺到しているのが明らかにクラス的女子より多いぞ？

というかドア開いてるし。中入って来てるし。具体的には他クラス全員が押し掛けてるし。

「「「「「私と組んで！」「」「」「」」」」

「まあ、こうなるよね」

「ふん、種馬に群がる雌ガキどもが……、下らん」

「こらラウラさん、そういうことを言ったらいけませんよ」

「いや、しかしだな」

「ラウラさん？」

「……す、すまん」

あれ、どうしてちょっと涙目になっているんだろうか。かるく凄んだけなのに。

まあそれはともかく、人多すぎる。どういうことなの……。

「大変だねえー、あの二人は」

「まあ、世界でたった二人の男性IS操縦者ですからね」

「ところで香織、アタシと組まない？」

「何でナチュラルに絡んでるの、ふーちゃん」

「……香織、私と組もう？」

「あれーうちのクラスが更に多国籍になったよー」

いつの間にか私の膝の上に座っていたふーちゃんと、隣に立っていた簪ちゃん。

特にふーちゃんはとてもナチュラルに、違和感なく私の膝の上に座っていたんだけど。何故でしょうか。

なんて思いながら騒動を眺めていたら、一夏はデュノアさんと組むことにしたようだ。まあ混乱を避けるためってことで順当だね。あの子女の子だけ。

ふっ、変装するなら私ぐらい完璧にやるがいい！ 行動の端々に女の子っぽさが出ているのだよ。もうちょっとか弱い系の男子を指摘したほうが良かったな。

……あー、自分で何言っただろうって思った。私は何をしているんだろうねえ。

「というかさ、香織は誰と組むわけ？」

「うーん……、どうしようかな。ランダムでいいか」

「えー？ もうちょっと欲張んなさいよ！」

「いや、なにさそれ。別に私は誰と組んだって問題ないけど……」

「ぶーぶー。アタシと組みたいとかないわけ？」

頬を膨らませて不満たらたといった顔で文句を言ってくるふーちゃんだけど、あんまり専用機持ちがかたまるとまずいんじゃないかなあ？

だってほら、これは各々の腕試しでもあるわけだし、専用機持ちのほうが圧倒的に有利だって点は変わらない。だったら、出来るだけそれをバラけさせて、戦闘時間や回数を効率的にしたほうがいいんじゃないかな。

「ん、そりゃそうだろうけどさ……」

「まあ、そういうわけだから。私はランダムにするよ。ふーちゃん達は？」

「……香織がそうするなら、アタシもそうする！」

「私も……」

「私はー、元々専用機持ちじゃないからねえー。ランダムでいいよおー」

ふむ、皆ランダムか。とすると、気をつけないといけないのはー夏よりもデュノアさんだ。あの武装の多さに器用さは厄介になる。

……まあ、頑張ろうか。

「ところで、ラウラさんはどうするんですか？」

「私は、組まない。お前達と同じだ」

「そうですかー。もし一緒になったときは、頑張りましょうね」

「期待はしない、邪魔だけはしてくれるなよ」

むう、少しは打ち解けられたと思ったけど、やっぱりまだだね。まあでも、軍人さんと私達一般生徒の感覚の違いは如何ともし難いだろうし、仕方ないか。

時は流れて六月下旬。

私たちはアリーナの更衣室にて出番を待っていた。

『イヴ、調整は?』

『問題ありません。ただし、無茶はしないように』
『はい』

イヴは相変わらず心配性だ。まあ、そうさせてしまったのも私なわけだけど。

アリーナは学年ごとに使用されているから、試合を同時進行で行うことは出来ない。つまり、トーナメント表が発表された時点で自分の戦いがいつ始まるのかが分かるわけだ。

まあ、こっちとしてはやる気充填に十分な効力を齎してくれるわけだけど。

「……織斑一夏。必ずこの手で……!」

「ラウラさん、あまり感情で動かない方がいいよ。まあ、私がいえたことじゃないけど。感情のぶつかり合いになると、一夏は強い。出来る限り自分の土俵に持ち込んで叩いた方がいい」

「わかっている。ここで頭をカッ力させるほど、私は幼くない」

うははー、その体系で言われてもなあ。

あ、ちょっとこつち睨んだ。すいません、へんなこと考えました。ちなみに、トーナメント表は普通なら一日前までには出ているらしいんだけど、タッグに変えてからうまくいっていなかったみたいで、私たちも昨日くじ引きさせられました。

というか、一日でトーナメント表組んだんだよね？ お疲れ様です……。

けどこのタッグって、どう考えてもクラス代表戦の時の無人IS襲撃事件に絡んでるよね……。

東ちゃん、こんなところで弊害出さなくたっていいのに。

まあでも、実際何がくるか分かったものじゃないし、2on1で対処できれば御の字って所なのかな。

「香織、準備できてる？」

「もちろん。そっちは？」

「いつでもオーケーよ。のほほんさんと簪は今着替えてるって」

隣に座ったふーちゃんとそんな風に言葉を交わしていると、トーナメント表の対戦相手が決定した音が鳴った。

ちなみに私は一回戦、ラウラとのタッグ。

「……おおう、まじスか」

「これまた、面白い組み合わせになったわね」

一回戦の相手が表示される欄に表示されていたのは、一夏とデュノアさんの名前。

つまり、ラウラさんは因縁の相手といきなりぶつかることになったわけだ。

「ちょっと行ってくる」

「はいはい」

ふーちゃんに断りをいれ、ラウラさんの元へ。

ラウラさんはトーナメント表を食い入るように見つめながら握り拳を作っていた。

「ラウラさん、行ける？」

「愚問だ。こちらの邪魔になるなよ」

「おっけ。私はデュノアさんを抑えるよ」

「……ああ、頼む」

ラウラさんの事情はふーちゃんから聞いた。

まあ、多分ラウラさんは決定的な矛盾も分かっている、それでもそれしか方法がないから、やり方を知らないから、こうしてここに来ているんだろうけど。

だから、私はその手助けをする。ラウラさんが満面の笑みで日の元を満喫できるように。

「ということで、行ってきます」

「おう、行つてらっしゃい」

「頑張つてねえー」

「頑張つて……」

三人の声援と共に、私とラウラさんはアリーナへと向かう。

ISを起動させ外に出た私達を待っていたのは、大衆の熱気とその向こうにある闘気だった。

「織斑一夏。貴様に勝ち、教官の汚名を雪ぐ！」そそ

「勝手なこと言いやがって。いいぜ、相手になってやる！」

「というわけだから、デュノアさん。貴女は私が抑えさせてもらいます」

「やれるものならどうぞ」

両者がにらみ合い、そして。

「叩きのめすっ」

「上等！」

開始と同時に発動した瞬間加速が、イグニッション・ブースト『白式』を纏った一夏を一気に加速させる。

それを止めようとラウラさんがAICを発動させ、一夏の動きを止める。

更に追撃のためにシュヴァルツェア・レーゲンの砲塔を一夏へと向け、弾丸を装填。その時点でデュノアさんが動いていた。

「逃すか」

《夜雀》でデュノアさんへ牽制射撃、更に距離を縮める。

一応弾をばら撒きはしたものの、やはりこの程度は回避された。

ラウラさんは弾丸を撃ちだすことなくその場から退避し、そこへデュノアさんの銃弾が突き刺さる。

「ごめん、取り逃がした」

「次に行くぞ」

ラウラさんの声にはぶれがない。それは、戦いを知っているからだろうか。

私も負けてはいられない。

『イヴ、弾道予測。表示して』

『はい』

デュノアさんの使っている武装の大半は射撃兵装。といっても、弾道さえ予測できれば避けられない量じゃない。

相手はこの乱戦でビットを使えるほど器用ではないはずだし、まずあのISにビットデータはなかったはず。ちなみに本社でデータチェックしておきました。

バレルロールのように横回転で弾丸を避けつつ、銃弾をばら撒いていく。

一夏の方はラウラさんが抑えているだろうから、まずはこっちを落とすべし。

「ふんっ！」

「くっ、僕狙いかなっ！」

「もちろん！ ハアッ！」

《夜鷹》で斬り付けるも、生憎相手の展開したブレードによって受け止められてしまった。空中ならではの回転という動きでデュノアさん押し切ると、更に追撃するべく加速する。

「この距離なら！」

「ショットガン ツ！」

こちらに構えられた銃口を見て、咄嗟に全身を《夜羽》で覆う。あんなものを生身に食らえば一瞬でミンチだ。冗談ではない。

過剰な反応に疑問を抱いたらしいデュノアさんだったが、変わらずガンガンと銃弾が吐き出される。まずい、幾ら防御性能に優れているとはいえこのままではジリ貧だ。

なにより、私が落ちればラウラさんが二対一で相手をする事になってしまふ。それはまずい。

「つ、突っ込んでっ!？」

咄嗟に行った行動は相手の意表をつけたのか、デュノアさんが間の抜けた声を出していた。

私が行ったのは、単純に《夜羽》を展開したまま突っ込むということだけだ。まあ、これでなんとかしたのはなんとも物悲しいけども。

なんとかショットガンの射程から抜けると、そのまま《夜羽》でデュノアさんを殴りつけ、ショットガンを叩き落とす。更に一撃を加えて粉碎した。

「まず一個」

武装は破壊できないわけじゃない。叩き潰せばそれで終わりだ。さて、次に行こう。

至近距離で《夜鷹》を振るうのと同じ、動き回る相手へ向けて《夜雀》を撃ち放つ。

《夜鷹》の攻撃が軽くなってしまうものの、牽制には十分だ。ようはラウラが一夏とけりをつけるまでの時間稼ぎが出来ればそれでいい。そしてあわよくば勝てば十分。

「どんどん行きますよ、デュノアさん」

「くっ……」

取っておきは、まだまだ出さない。

決戦兵器は一番美味しいときに出すものだ。

第20話 学年別トーナメント（後書き）

ということ、大会開始。
次回辺りで終了？

第21話 真実はいずこ

「くうっ！」

『カオリ、無理しないでください。一撃でも良いのをもらえばアウトなんですよ？』

『わかってるけど、そうも言ってられないんだよね、これが！』

デュノアさんのマシンガンを器用に《夜羽》で叩き落とし、更に追撃してへし折る。これで破壊した装備は五つ目だ。確か、アサルトカノンと最初に壊したショットガン、重機関銃にグレネードランチャーだったかな。それが今まで壊した武装。

そこまでやってもまだぼんぼん重火器が出てくるのはいかなものか。

『ラウラさん、そっちはどうですか？』

『もう少しで終わる！ 耐えろ！』

『了解』

向こうも頑張っているらしい。といっても、あちらに意識を向けるのは到底無理な話な訳だけど。

何とか相手の武装を破壊しながら戦ってはいるものの、やはり恐怖心は強い。向こうはこちらも絶対防御が効いていると思って戦っているから、尚のことだ。まあ、かといって明かせないんだけどね。明かせば色々面倒だし、鼻に乗るなどか言われそうだし。

「さすがに強いですね」

「そっちこそ。これだけ武装を破壊されたのは初めてだよ」

「では、そろそろケリをつけましょう。あまり長引いてお客様を屈させてもいけません」

「ショーのつもり？」

「この学年は大体そうでしょう？　という事で、行きますよ？」

《夜羽》を前面に展開した瞬間加速で急接近し、《夜羽》を前へと開く形で打撃を加える。

衝撃に耐え切れず、展開したばかりの両手のハンドガンが上方へと弾き飛ばされた。

「しまっ……！」

「ここ、だっ！」

すかさず、上段から大きく振りかぶった《夜鷹》を振り下ろし、ハンドガンを叩ききると共にデュノアさんへ叩きつける。装甲を叩き割り尚も止まらず、絶対防御を発生させた。

「あれ、強くない！？」

「タバネから送られてきた強化プログラムを適応してあります。相手の絶対防御との接触時、より多くダメージを発生させるようになっていきます」

「え、初耳なんだけど」

「適応はついさっき完了しましたので」

それなら仕方ない。

というかそれぐらいなら別に怒りもしないし、独断で動いてくれても構わないけど。

「一応、報告だけはしてね」

「以後注意します」

「うん。じゃ、行くよー！」

「はい」

今の攻撃でどれくらい削れたか分からないけど、途中でちまちま弾ばら撒いて削ってたし、それなりに持っていけたかな。
なら、間髪いれずに叩き込む！

「ハアアアー！」

「くううつ……！」

ガギンガギンガギン！ と連続して装甲を叩き割り、幾度か絶対防御を発生させてシールドエネルギーを削っていく。

その猛攻の中で、デュノアさんは何とか攻撃範囲から身を退け、こちらへ銃口を向けてきた。
けど、それを待ってたんだ。

「その一点、打ち貫くツ！」

銃を構え終わる前に急加速、懷に潜りこめば銃は発射できない。
ならば、ここはこちらの間合いになる。

《啄木鳥》を確実に当てるため、腕を密着させ、穿つ。

火薬の炸裂音と、杭の発射される爆音が辺りに響き渡り、デュノアさんは大きく吹き飛んだ。

「かはっ……！」

「まだ墜ちないか！」

「悪いね……、こっちに行かせてもらおうよ！」

まずった、今ので墜とすつもりだったのに。読み違えたか。
距離をとったデュノアさんは、一直線にラウラさんの真後ろへと向かっていった。

一夏との接戦で気を回しているラウラさんは、それに気づいても

「だめだ、だめだよ！　ラウラ、目を覚まして！　起きてよラウラ！」

『操縦者の意識はあのシステムに取り込まれています。ダメージを与えてシステムを解除しなければ』

気づけば、呼び捨てにして呼びかけていた。

あの姿が誰かは知らない。だけど、あれは違う。たとえラウラがあれを望んだとしても、触れた時点で気づいただろう。あんなもの、欲しかった強さじゃないと。千冬さんの強さとは程遠いと。

だめだ。止めなければ。あの力を振るえば、ラウラはきっと戻れなくなる。今なら、まだ間に合う。

『また無茶をするつもりですか』

『……ごめん』

『カオリはいつもそうです。皆が心配しているのに』

『……ごめん』

『言っても無駄、なんですね』

『……ごめん』

『わかりました。では最高のサポートを期待しててください』

どこか嬉しそうなイヴの声。

まるで、私が迷惑を掛けるのを楽しんでいるかのように。

『カオリはもう少し、他人に甘えた方がいいですよ』

『AIにまで言われると、なんだかへこむなあ……』

『では、準備はいいですね』

『うん。必ず助けよう』

一夏とデュノアさんが騒いでいるけど、正直そっちまで気が回ら

ない。今はこっちで手一杯だ。

武装が全て問題ないことを確認すると、静かにラウラの方へ目を向ける。そこには、一切拳動を見せずこちらを眺める一体の巨大なISの姿があった。

『どうやればいい？』

『あのISを覆っている黒い物体を切り裂いて、中から操縦者を回収してください。IS自体は剥がれていますから、それでシステムは停止します』

『オーケー』

近づいて斬れば、それでいい。なんてシンプルな答えだ。滅茶苦茶難しいけど。

まあでも、頑張ってみるか。クラスに馴染めない、可愛い友人のために。

「ラウラ、今助けるよ」

宣言し、《夜鷹》を両手に構える。後は《夜羽》の防御性能頼りだ、頼んだよ。

ちなみに、ついさつき非常事態宣言が発令されている。わたし達もとっとと撤収しなくちゃいけない、訳だけど。

まあ、友達のピンチには、友達が立ち上がるもんだよね。

「すうー……、よしっ」

ドンッ！ と地を蹴り、肉薄。そのままジャンプして一回転して一太刀目の横薙ぎを避ける。

『上から来ます！』

『オーライ!』

着地と同時に身を捻り、真横に斬撃を落とす。その回転に合わせて刃を振るい、一太刀目を横一文字に刻み込む。

ラウラ、早く出ておいで。暗い場所にばかり籠っていたら、大きくなれないぞ。

「はやく、帰っておいで。ラウラ」

構えなおし、更に斬撃が降り注ぐ前に上段から一太刀を浴びせ、十文字に傷を入れた。さて、と。

《夜鷹》を収納する^{クロス}ると、両手をその十文字の傷に突っ込んで開く。若干抵抗はあったけど、ともかく開いた。

と、丁度空いた私の胸のところ目掛け、ラウラの小さな体が降ってくる。支えるものを失って倒れこんできたような形になったラウラをそっと受け止めると、それと共に降ってきた眼帯をキャッチした。

「っ!?! カオリ、離れてください! エネルギーマンが急速に上昇しています!」

「なぬうっ!?!」

「くっ、こ、のおおおお!?!」

ラウラを抱えている状態ではあまり高速は出せない。

出せる限界で離脱した直後、ISの周りを覆っていた黒い何かは派手に爆発し、影も残さず吹き飛んだ。

……最悪だ、自爆前提のシステムなんて。

でも、弱弱しくはあれどISコアの鼓動が戻ってきた。それを聞いて、何とか二人とも助けられたかと、ようやく安堵する。

「香織、無事か!？」

「あ、一夏。大丈夫、この通り。ごめんね、出番奪っちゃって」

近づいてきた一夏にそう微笑み、そして絶句した。

腹部に、強烈な熱。

「かお、り？」

後ろを向くと、黒いあの塊が、小さな子供の形になって私の腹部を貫いていた。これは、腹部に大穴開いたかな。

警戒、し損ねたな。

「かおりイイイイ!!」

崩壊していく黒い子供状の塊を見ながら、一夏の絶叫をBGMに私は意識を失うのだった。

ごめんラウラ、おとしちゃうかも。

私は、結局勝てなかった。

眩きが波となって、私の心に広がる。

戦ってみて、なんとなく教官の言ったことが理解できたような気はする。だが、それでは強さとはなんだ。

私は、兵器として生み出された。戦うための道具だ。その唯一の存在理由を否定されたら、私はどうすればいい。

『生きてみなよ』

私は、生きているぞ。

『うーんと、そういうんじゃない。何かに一直線って言うのもいいけど、やっぱり人間って、やりたいことが色々目移りしちゃうんだよ。あれもやりたい、これもやりたい。あれが欲しい、これも欲しい、って。でも、それを経験して、だんだん自分の進みたい一本が見えてくるんじゃないかな』

それが、生きるということか？

『私は、そう考えてる』

では、強さとはなんだ？

『……わかんない。そんなもの、きっと誰にも分からないよ』

では、織斑一夏の、教官の言っていたことは嘘なのか？

『うっん、あれも本当のこと。でも、ラウラにとっては本当じゃない』

どういうことだ？

『つまり、強さの意味はその人それぞれにしかないものなんだよ。千冬さんや一夏の言っていたことは、あの人たちだけの強さ。ラウ

ラの強さは、きつとまだ見つかってないだけで、必ずどこにあるんだよ』

強さは、力ではないのか。

『力が強さだって言う人も、確かにいる。それを否定はしないけど、ラウラの強さって違うんじゃないかな。誰かの強さを借りてるだけなんだよ』

では、どうすれば見つかる？ 私の強さは見つかるのか？

『探すしかないんじゃないかな。私だって、自分の強さがどこにあるのか、どんなものなのかは分からない。だけど、いつか見つかると思ってる。人生って、意外と何とかなるものだしね』

……私は、兵器だ。

『ラウラは人だよ。可愛い女の子。意地っ張りでちょっと傲慢で、恥ずかしがりでちょっと常識外れで、そしてISがとっても強い、僕らの友達』

私は、人として生きていいのか？

『もちろん。だって、ああして人として、誰かを憎むってことが出来たんだから。だったら今度は、誰かを好きになったりすることも出来ると思うよ』

そうか。

呟きに返ってくる香織の言葉は、それを最後に聞こえなくなった。

私は、人として生きられるんだろうか。

……生きて、みるか。私として。

そう考えていたとき、突然頭の中に映像が流れ込んでくる。

どこかの研究施設。

香織を幼くしたような幼児が、大きなポッドの中に入っている。

これは、人を作っているのか？

「香織、あなたは香織。私が貴方にあげられる、数少ないものだから、どうか受け取って。私が消してしまった命の灯火に、名づけられるはずだった名前を」

香織。

それは、なぜそれに付けられている？

あいつは人だ。試験管ベビーですらないこんなものが、アイツだというのか？

「あなたは、いずれ世界に君臨する兵器を、きつともとの道へ正してくれる……。貴方は、私達の希望なのだから」

音声が消えた。優しい、女性の声だった。

香織と呼ばれていた幼児の入れられていたポッドの、ネームプレートが見える。

そこに記されていたのは、menの三文字。

これが事実ならば、香織は。

「……うっ、ここは……」

「目が覚めたか」

その声は、私を救ってくれた恩師の声だった。
痛む体を無視して、周囲を見渡す。どうやら医務室に運び込まれていたらしい。

「私は……、一体……」

「全身に無理な負荷が掛かったことで筋肉疲労と打撲がある。暫くは動けんだろう、無理をするな」

「何が、起きたのですか……？」

聞かなければ。何が起きたのか。
そして、教官に、彼のことを。

「これは、重要案件である上に機密事項だ。いいな」

「はい」

「VTシステムは知っているな」

「はい……」

VTシステム、正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。
過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムだが、あれはIS条約によってありとあらゆる研究、開発、使用のすべてが禁止されているはずだ。

教官の話では、それが私のIS、シユヴァルツェア・レーゲンに搭載されていたらしい。……私の愛機に、勝手なことをしてくれる。

「現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

「……私が、望んだからなんですな」

強く。貴女になることを。

望みはした。だが、あのときの私は、本当にどうかしていたのだ。勝ちたいあまり、全てを捨てようとした。きっとあのまま戦っていたら、私は私でなくなっていただろう。

……助けてくれた、彼がいなければ。

「教官」

「なんだ」

「私を助けたのは、一之瀬香織で間違いありませんか」

「ああ。現在は腹部に大きく風穴を開けられ、集中治療室で生命維持中だ。予断を許さない状況だが、驚異的なスピードで回復しているらしい」

「ど、どういことですか！？ 風穴！？」

なぜだ、私の記憶でもそんなものはなかった。レールガンでも使わない限り、風穴など……。

「VTシステムの残骸がなぜ再起動した。お前の姿をとって腹部をずぶり、だ」

「そんな……。香織は助かるのですよね！？」

「助かる、だろうな。むしろあれは……」

確か、さつき教官は驚異的なスピードで回復しているといっていた。

あのとき起こった現象、おそらくは相互意識干渉クロッシング・アクセスの一種だろう。

であれば、あれは香織の過去である可能性がある。いや、十中八九そうだろう。だが、一体あれは……。

「……教官。香織の過去を知っていますか」

「過去？ いや、両親は物心つく前に死亡、後は姉と二人で、だっ

たはずだが」

「……あのとき、助けられたときに、私は香織の過去を見たかもしれませんが。幼児の頃の香織が培養ポッドのようなものに入れられているところと、優しそうな女性に抱かれて、名づけられているところを見ました」

「それは……、本当か？」

「はい。香織の性別は、男なのですか？」

「……どうやら本当らしいな。これは色々聞く必要がありそうだ」

香織、アイツは誰にでも優しくかった。ほんの数週間傍から見ただけでもそれが分かる。

そんな香織が、人造人間？ そんな、バカな。

そもそも人造人間など、ありえるのか？ 試験管ベビーですらようやく使われているレベルだというのに、あれほどの完成度を誇るバイオノイドなど……。

いや、ちがう。そうじゃない。あれは、人間だ。私も人間だ。それ以外に何がある？

あれほど優しく、私が傍にいても何の気後れもせずに接してくれた彼が、人間でないなど、私が認めるものか。

香織は人間だ。誰がなんと言おうと。

……そうだろう、香織。

『よかったね、マスター』

……なにか、聞こえた気がした。
凄く遠くから、何かが。

第21話 真実はいずこ（後書き）

さて、きな臭くなってまいりました。

そしてまた怪我をした香織ちゃん。一体どうなるのか。
次回はまた病室だよ！ …… 病室率高くないですか？

第22話 休息

腹部を襲う強烈な鈍痛で、目が覚めた。

僕はどれくらいそうしていたんだろう。頭が酷く痛んだ。

「……香織？ おきたのね、目が覚めたのね！？」

「ふー、ちゃん……？僕は、一体……」

見慣れた景色、そこは医務室の中だった。

白を基調にした落ち着いた雰囲気の中、ふーちゃんの赤い目は特に目立っていた。

「よかった、よかったよお……！このまま起きないんじゃないかって、怖かったあ……っ！」

「ふ、ふーちゃ、ちよっと、落ち着いて！……どういこと、何が起きたの？」

大声を出すと腹部が酷く痛んだが、僕は先に彼女を落ち着かせることにした。

手を握ってわんわんと泣き出した彼女は、僕の声に何とか泣き止むと何が起きたのかを説明してくれた。

「香織がぶっ倒れてから、学校のコンピュータ全てにハルがハッキングを仕掛けたの。学校のコンピュータを乗っ取ったハルは、香織のお腹に開いた穴を縫合していったわ。確か、治癒促進剤だったかしら、そんな名前のスプレーで傷を塞いで、細胞の増殖を促進させるっていう注射を打ったの。でも、今香織のお腹は空洞。自分でも分かるでしょ？」

「この鈍痛は、そういことか……」

「でも、ハルは香織が目覚めてから一日もすれば傷は完全に修復されるはずだって言ってたわ。何でも、治癒能力が通常の人間の数百倍から数千倍、胃袋や他の臓器なんかを丸々持っていていかれてるのに、寝ていればすぐに元通りになるって……」

……確かに、僕は傷が早く治るような体質だ。だけど、なくなった臓器が復活するなんて、聞いたことがない。

でもとりあえず、まずはふーちゃんを安心させないと。

「ごめんね、ふーちゃん。心配掛けて」

「いい、いいのよ……！ アタシこそごめん……、守るって、言ったのにつ……！」

「……うん、大丈夫だから。僕は大丈夫だから」

『大丈夫だから、ではありません！ カオリ、貴方はもう少し自分の体を大切にしてください！』

「ご、ごめんイヴ……」

ふーちゃんに謝って、そしてイヴに謝って、それからそっと、包帯の巻かれたお腹を撫でてみる。……鈍痛の代わりに激痛が走って、思わず顔を顰めた。

「か、香織！？ 傷に触ったらダメよ！ ほら、凄い汗……」

「ごめんごめん……。でも、本当にべこって感じだったなあ、お腹に穴が空くとああなるのか……」

「感心してないで、ほら。汗拭いたげる」

傍にあつたタオルで、ふーちゃんが僕の顔から吹き出た汗を残らず拭い去る。

それにしても、今はいつなんだろうか。あれからどれくらい経ったのか……。

「あれから、一週間よ。一週間眠ってたの。アタシ、もう死んじやったかと思って……」

「一週間も……？ ごめんね、心配させちゃって」

「ううん、いいの。けど、お腹は大丈夫？」

『……簡易検査を行いました、臓器は半分以上再生、明日の朝までには完全に回復します』

「ほんとにっ!？」

「……ねえ、ふーちゃん。今の言葉はまるで僕が妊娠してるみたいじゃない？」

そういうと、ふーちゃんはこちらをぼかんとみて、それからゆっくりと頬を高潮させて、え、なんでくねくねしだすの？

「ね、ねえ香織、その……、旦那様って、言ってみてくれない？」

「……あの、それ中学の時に」

「いいから！ あのセリフ、ねっ!」

あー、僕はまあ、こういう成りだから、中学校の時にちよつと演劇をやったことがあるのですよ。

で、そのときの僕の役目が、非業の死を遂げる貴婦人、要するに女役です。この成りにこの声だからなあ……。

「……一回だけだよ？」

「うんっ!」

「……コホンッ。『旦那様、今この子がお腹を蹴りましたよ。旦那様と私の、愛の結晶です』」

ふーちゃん、鼻から血が出てるよー。なんかこれやったときの女子と男子の反応一纏めにしたような状態になってるよー？

「『はっはっは、ようやく授かった子宝だ。お前もこの子も、頑張るんだぞ』」

それは続きのセリフじゃありませんか？　ねえ、それもしかして僕がまた続けると？

ほら期待して目をキラキラさせてる。怪我人に何させてるの貴女は。

「……『わかってますよ、旦那様。ふふっ、ほら、この子も喜んでます』」

「……ねえ香織」

「なに」

「抱かせて」

「ダメです」

というか突然何を口走ってるんだこの子は。滅茶苦茶危ないというか身を乗り出すな涎垂れてる目の焦点があってない！？

「ふーちゃん、ストップ」

「むう、いけず」

「いや、僕怪我人だから。だめですよー」

「……よかった、香織、いつもの香織よね」

「いつもの僕じゃなかったら誰だと思ったのさ。そうだ、ラウラさんは無事？」

「ええ、ぴんぴんしてるわ。アンタのこと心配してたわよ」

そっか、無事だったかあ……。よかった……。

でもふーちゃん？　いい笑顔を浮かべるのは構わないけど、せめてその口元についた涎を拭ってからにしてくれないかな。ちょっと

ぬらぬらてらてら光ってて、ちょっぴりえっちいですよ。

「それにしても、お腹減ったなあ」

「胃袋はまだ元に戻ってないんでしょ？ ご飯は明日まで無しよ」

「ええー……」

「消化できないんだから、変なところに落ちてもしようないでしょ。我慢なさい」

「はい……」

うう、やっぱりこの空腹感は堪えるなあ……。

でも、誰にも被害がなくてよかった。

「そうだ、束さんから連絡あったわよ。『今回学校側が得た香織ちゃん関連のデータ全部抹消したからねー』だって」

「そつか。助かったあー……」

「ハルがハッキングしてなかったら、男バレした上に穴開いたまんまで生活する羽目になってたものね」

ほんと、お腹に穴が開くなんてもうしたくない体験だなあ……。でも、骨はもう再生して、筋肉も元通り。後は臓器の再生を待つだけなんだとか。僕の体って意外とチートボディなんだねえ。いや、自分で言うのもなんだけど。

「というか、今何時？」

『午後一時半です』

「あれ、ふーちゃん？」

「抜け出てきたわ」

全く、この子は。僕のことを心配してくれるのは嬉しいけど、授業には出ないとダメじゃないか。

他の人たちはちゃんと受けてるだろうに……。

「受けてないわよ、っていうか無理に決まってるじゃない。簪は格納庫、葵義姉さんは部屋にそれぞれ閉じこもってるし、ラウラも上の空みたいだし。一夏たちもあんまり授業に身が入らないみたいよ」
「……、ごめんね」

「あんたが謝る必要なんて無いわよ」

皆、僕のことを心配してくれてるんだ……。

本当に申し訳ない気持ちで一杯だ。僕一人のために、皆が辛い思いをしてるなんて。

「まあ、もうしばらくすれば皆来るわ。……それで、一つ聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「梟、絶対防御がないわよね」

「……うん」

「なんで？ 束さんに言わなかったの？」

「ううん、組み込んだけど消されちゃうんだって。ほかにもしールドバリアーが随分弱体化してるみたい」

「それって、つまり体に喰らえば大怪我するじゃない!？」

まあ、そうんだけど。

でも、僕はこの子の鳴き声に応えたわけで。

「僕としては、この子で宇宙に行きたいんだよね。ほら、最低限全環境での生命維持はあるみたいだし」

「……わかった、アンタはアタシが必ず守る。絶対守るから」
「……うん」

泣き腫らした真っ赤な目で、ふーちゃんはそう宣言するように言った。

守りたいのは、僕も同じなんだけどな。

「香織ッ！ 目が覚めたというのは本当か！」

「香織、起きたのね！」

「目、覚めた……？」

どたどたとたつ、と医務室に雪崩れ込んでくる三名。

「医務室はお静かに。それと、ただいま」

「よかった、よかった……っ！ すまない、私のせいで……っ！」

「いいよ、油断した僕が悪いんだし」

「傷の具合は！？ 大丈夫なの！？」

「明日の朝までは動けないけど、他は大丈夫だから」

「死んじやったかと、思った……」

「あはは、ごめんね。この通り、もう大丈夫」

ラウラさん、お姉ちゃん、簪ちゃんが口々に僕の身を心配してくれた。

本当に、ありがたい限りです。でも医務室の中ではお静かにね？

「それにしても一週間かー、体ガチガチだ」

「復帰したらリハビリね。トレーニング兼ねて」

「じゃあ皆でやりましょうか！　ねえ、簪ちゃん、ラウラちゃん」

「うん……」

「は、はい！」

あれ、ラウラさんやたらとお姉ちゃんにキリッとした返事をするね？

「その、なんだ。お前は私の嫁にする！」

「……はい？」

「嫁じゃなくて婿じゃない？」

「日本には、気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする。義姉上からも許可は頂いているからな」

「とりあえずその間違った知識を植えたバカをぶん殴らせなさい。それとお姉ちゃん間違ってるって分かってるんだから直してあげて！？」　　というか何勝手に許可出してるの！？　　ふーちゃんはどうなったあ！？」

「面白そうだったし、ほら。一夫多妻制って、素敵だと思わない？」
「僕の回りは敵だらけだあー！？」

ちくしょう、満面の笑みで何が「素敵だと思わない？」だあー！
思わないよ、ぜんぜん思わないからね！？　　全面敵色の風景が恐ろしいよ！

　　というかふーちゃん、頼むから反論して！？

「安心しろ。鈴と私は友人だ。そしてお前ならば私と鈴の二人に等しく愛情を注いでくれると分かっているからな」

「香織だからねー。大丈夫よね」

「もうだめだこの人たち！？　　か、簪ちゃん！　　お願い、助けてへ

ルプ！」

「……とりあえず、宇宙に行くまではダメ。その後は、私も参加する」

「ふへっ！？」

あ、変な声でた。というかなに、自分も参加？ 何が？

「よかったわねー、許婚が三人出来たわよー？」

「よくないからね！？ とりあえず日本では重婚禁止だから！」

「宇宙に国境なんてないわ！ 無問題よ！」

「ちくしょうこの人おかしいよ！？」

……懐かしいな、この空気。

突込み通しで僕が疲れるだけだけど、皆笑ってて。今まであんまりなかった、空気だ。

「と、とりあえず落ち着いて香織。大丈夫、とりあえず今までおりでいいから。あとラウラも香りが男だってこと分かってるし秘匿もしてくれるらしいから大丈夫。オーケー？」

「……オーケー。はあ……、とにかく、ここ医務室、騒がない。オーケー？」

「はい」

「う、うむ。すまない」

「うん……」

よし、全員落ち着いたかな。というかね、人が多い。医務室ってそんなに人が入れるスペースないんだよ。

ほんと、医務室の先生申し訳ないです。毎度お騒がせして。

「馬鹿どもが揃いも揃って何をやっている」

「織斑先生……！？」

「きよ、きょうかいたあつ！？」

「織斑先生と呼べと、何度言ったらわかる、ばか者め。一之瀬弟、大丈夫なようだな」

「あ、はい。ご心配をおかけして申し訳ありません」

「それを監督するのが教師の役目だ。まあ、補習は追加されたがな。鳳鈴音、一之瀬姉、更識簪、後で補習だ。一週間分」

皆、ともに授業出てなかったのか……。

でも、これも僕の責任だよね……。僕が危険な目にあわなければ、何とかなったかもしれないだし。

「それと」

「いつつ！？」

「これは今自分のせいだなどと考えたお前への罰だ。こいつらは自分で選択しそういう行動を取ったのであって、お前のせいではない。お前はもう少し、自分に甘くなれ」

「え、でも……」

「今回の事件の顛末は復帰してから伝える。今は体を休めろ、いいな」

……これも千冬さんの優しさ、なのかな。

「……はい」

「よろしい。では馬鹿ども、回れ右して寮へ戻れ」
「で、でもっ」

「言い訳は聞かん、ラウラ以外の三人は説教だ。正座四時間耐久だ」

「お、織斑先生、お助けを……」

「だめだ」

「……ごめんなさい」

「謝るなら授業に出ることだな。ああ、一之瀬弟。明日の授業は全
て免除だ、戻る許可が下りたら、部屋でゆっくりしておけ」

その言葉を最後に、千冬さんは全員を引き連れて医務室を出て行
った。

疲れた、けどよかった。生きてて。
助けられたんだね。

『カオリの助けたかったものは、全て助けられましたよ』
『そっか』

なら、まあ、いいかな。
そんなことを、思う僕なのですた。

あー、お腹減ったなあ……。。

第22話 休息（後書き）

大切なことが何も明らかにならないまま、医務室パート終了。

…… 本当に医務室パート、できそうだな。このままだと。

ラウラの嫁宣言は医務室で行われました。その心理はまた後ほど。

第23話 動き出した歯車（前書き）

後半微工口注意です！

第23話 動き出した歯車

「……それで、何が聞きたいんですか」

香織が目を覚ます数日前、私は織斑先生に呼び出されていた。

生徒指導室の扉にしっかりと鍵を掛けると、開いている場所や隙間がないか確認したあとで、目の前の椅子に腰を下ろす。

「……一之瀬弟のことだ。あれは血の繋がった弟か？」

「当たり前です。それが何か」

「……ラウラが助け出されたとき、奇妙な光景を見たそうだ。一之瀬弟から流れ込んでくる映像をな。研究室のような部屋の中、培養ポッドの中に入っている香織によく似た子供、男性の研究者とそれに付き添うような形の女性。それに抱き上げられ、香織と名づけられたその子供……」

「……映画でも見たんじゃないですか？　きっと、それとこっちゃんになってるだけです」

嘘を吐く。だが、これは知られるわけには行かない。

私は一之瀬葵、香織の姉だ。どんなことをしても、私はあの子を守る義務がある。

その私を見て、織斑先生はすつと目を細めた。

「……嘘が下手だな、お前は。事実だろう」

「……それで、どうするつもりですか？」

「どうする、とは？」

「もしあの子に手を出すようなら殺す。生まれてきたことを後悔するような苦しみを味あわせてやる」

拳を握り、知られぬ程度に腰を浮かせる。

私だつて無為に日々を過ごしていたわけじゃない。日々鍛錬を続けてきた、一人の人間に負けるほど、私は弱くない。

全ては、あの子を守るために。

「なにもしないさ。ただ確認を取っておきたかったただだ、何故男がISを使えるのか、もしくはそう作られたのか」

「……織斑千冬、あまり妙なことを口走れば殺す」

「冗談だ、殺気を収める。お前は何を抱えている？」

「知れば逃げられない。だから聞くな」

「私はあいつの担任だ。生徒を守るのが、教師の役目だ」

「それが世界中の全てを敵に回すことだとしても？」

「無論だ。まあ、一夏とどちらを優先するかは決まっているが」

……その目は本気だった。

面倒な人間に捕まった、この手合いは満足するまで開放しないだろう。社長とは随分違うタイプだが、それゆえに成り立っていると言うことが。

ともかく、このタイプは情報を小出しにしてだまくらかした方が楽だ。とつとと終わらせるか。

「……わかった、話す。私たちの両親は死んでいない、今も世界のどこかで兵器を研究し、自分の目的のために命を消しているだろう。母もその犠牲になった」

「一之瀬弟は人間か？」

「あの子はバイオノイド、いわゆる人造人間だ。母が良心の呵責に耐え切れず、こっそりと育てていた唯一の成功策。今にして思えば、これもアイツの計画のうちなのかもしれない」

香織は、バイオノイド。忌むべき父親の研究によって生み出され

た人工生命体だが、その体は人間と変わらない。

変わっているとすれば、尋常でない自己再生能力と情報処理能力だ。どちらも生み出されるときに調整された。

小さい頃から、父はどこか変わっていた。

初めの頃はちよつと変わった機械を作っていた程度だったのに、日が経つにつれてそれは動物、そして人間のものへと変わっていった。

それからは、悪夢のような日々だった。私は出来るだけ家に帰ろうとせず、母は人道を解さぬ父の研究を止めようと必死だったが、それも無駄だった。

母は最後の砦とばかりに、そのときの完成作だった人工生命体を自分の息子として育てていた。その様子を、私は遠目から見ていただけだった。

母が人工生命体を、香織を育てていると知った父は、殊更激昂した。既にデータを取り終え、廃棄処分したと思っていた香織が生きていた、しかも他ならぬ母の手によって育てられていたと知った父は、母を連れて家を出た。

放っておけば私たちのような子供は勝手に死ぬと思っていたのか、それとも単純に興味がなかったのか。わからないけれど、父はそうして消えた。母も、生きているかどうかすら分らない。

それから私達は、必死になって生きた。あどけない笑顔を見せて「おねえちゃん、おねえちゃん」と呼んでくれるあの子が、愛おしくてたまらなかった。

その笑顔を守るために、私は必死に知恵と力をつけた。幸いうちには母の残したヘソクリと、祖父母の残した遺産が残っていたため、バイトが出来る歳まではそれで食い繋いでいた。本当に、よくあそこまでやれたものだと感心する。

香織には、両親は物心つく前に死んだと言いつけていた。……そうしなければ、あの子は壊れてしまう。

もしくは、許してしまう。優しすぎるから。

香織がISに乗れるのも、おそらく奴が何かしたんだろう。香織が生み出されたのは今から一〇年前、丁度ISが世に知られた頃だったから。

「……そうか。それで、お前はどつする？」

「決まってる。どんな手を使ってもあの子を守る、それ以外になにがある？」

「ふっ、愚問だったな。すまん。このことは絶対に口外しないと誓おう、一之瀬葵」

「……それでは、二者面談はこれで終わりですか？」

「ああ、ご苦労だった。帰ってもいいぞ」

結局、織斑千冬にはほとんどの部分を秘匿した。

私は守らなければならない。それが、私の義務だ。

目を覚ました翌日の夕方、私はすっかり治った体と共に自室へ戻ってきていた。

ちなみに、補習は夏休みに纏めてやるらしい。僕の場合は一週間以上補習か……。ガンバろ。

「ただいま帰りましたー」

ドアを開けて中に入ると、のほほんさんは私のベッドにすがりつ

くようにして眠っていた。

寢言で「やだ、いけないで」と呟いている彼女を見て、すぐに彼女の手を握る。こうすると、悪夢は意外に収まってくれるものだから。

しばらくすると、のほほんさんはスヤスヤと穏やかな寢息を立て始めた。……心配させちゃったかな。泣いた跡、あるし。

とりあえず起きるまでそうしていようかと彼女の傍に座り込んだ直後、もぞもぞとのほほんさんが身じろぎした。

「んあ……」

「起こしてしまいましたか」

「かお、りん？」

「はい、香織です。ご心配をおかけしました」

「ほんとに、どこも痛くない？ 大丈夫？」

「はい。泣いていらしたのですか？」

寝起きで目を腫らせているのほほんさんの頭をゆっくりと撫でながら、そう問いかける。

「……いなくなっちゃう夢見たんだ。かおりん、いなくならないよね？」

「いなくなりません、大丈夫ですから」

なんだか、最近ずっと泣いている人を見ている気がするよ。まあ原因私なわけなんだけど。

とにかく、そう言いながら軽く抱きしめると、ようやくのほほんさんは落ち着いてくれた。……私は男なんですけどねえ。

「えっと、じゃあ。ただいま、のほほんさん」

「うん、おかえりなさい。かおりん」

ペコリ、と頭を下げて、彼女が言った。その様子が妙に小動物染みていて、思わず笑みが零れてしまう。

「あ、そうだ。休んでいた分のノート、貸していただけませんか？」

「いいよあ。はい、どうぞ」

「助かります。あとで何かの形でお返ししますね」

「わははー、楽しみにしてるねえ」

ノートを受け取ると、とりあえず机に向かおう、としてそのまま引き倒される。どさつ、とノートが手から零れ落ち、床に散らばった。

のほほんさんは仰向けになった私の上に乗ると、押し倒したような形でこちらを見る。

「の、のほほんさん？」

「じつとしてて」

「あ、あの」

時が止まった。そんな気がした。

唇に伝わる柔らかな感触と、間近に迫った瞳、淡い桃色の髪。ふわりと香る、女性特有の甘い香りが、脳の奥をぴりぴりと痺れさせる。

何秒間そうしていただろう、私は気づくと目を見開いたまま、荒く息を立てていた。

「の、のほほんさん、なにを……？」

「あーんむっ」

「んんうっ！？ んーん、んーんーっ！」

何がなんだか分からないまま、更に唇を奪われる。
荒い息が私の顔にかかり、なんだか奇妙な気分になせられてしま
う。

「んー……、ぷはっ。はい、ご馳走様」

「な、ななな、なにをしてるんですか!？」

「ん、キスだよ？」

「キスだよ？　って、そんなあっけらかんと言われても……」

「恥ずかしかったでしょ」

「そりゃ、まあ……」

いきなりベッドに押し倒されて、あまつさえ唇を奪われたんだか
ら、そりゃあ恥ずかしいと言うか、頬が火照ると言うか。

って、私は一応男なんですけど!？　女性に押し倒されて唇奪わ
れて息荒げてってどうなの!？

なんか体が妙にけだるくて、頭あんまり回らないし……。

「心配させた罰だから。今日は一緒に寝よ？」

「へえっ!？」

「ダメ？」

ぬう、ダメ、じゃないけど……。

「というか、キスは私を恥ずかしがらせるためだけにしたの!？」

「最初はそうだったけど、はあはあ言って涙目でこっち見てるかお
りんみてたら、つい」

「ついじゃないですよー!？」

……まあでも、心配させちゃったし。
少しくらいなら、いいかな。

「こんばんわ、スコール」

「あら、こんばんわキティ。どうしたの？」

「ふふ、あなたの素敵な体が忘れられなくて……、疼いて仕方ないのよ。慰めてくだらない？」

「あらあら、年頃の乙女がそんなこと言っているのかしら？ それに、私にはオータムがいるのだけど」

暗がりの中、裸体を隠そうともせず寝転がる女性の豊かな金色の髪を撫で付け、少女、キティが笑った。

いるはずのない、二人目の男性IS操縦者、それと瓜二つの顔をもつてして、美しいという言葉すら生温い色気を漂わせて、キティが笑った。

「私はね、スコール。貴女のように誰かから愛されている人を横から奪い取るのが大好きなの。私に夢中にすれば、いつか私はお兄様ですらも手に入れられる。そんな気がするわ」

「つまり、私は貴女に奪い去られるお姫様なのかしら？」

「違うわ。あなたを、私に蹂躪され、傳き、私から与えられるものはいかなるものであろうと感涙してその身に授かる奴隷にするの。そそるでしょう？」

「あら、私はそんなに安い女ではないわよ？」

スコールと呼ばれた女性は、少女を引き倒すようにしてベッドの中心まで転がると、まるで王女のような白いドレス姿の少女の首筋に、犬歯を突き立てる。

それほど尖ってはいいないものの、その行為だけで少女は息を荒げ、スコールを情欲に潤んだ瞳で見つめていた。

「はあ、はあ……。ねえ、スコール？ 私を壊してくれないかしら？」

「貴女を？ でも、私を手に入れるんじゃないの？」

「ふふっ、たまには翻弄されるか弱い雌を演じたいの。ねえ、スコール。来て……」

「あなたにそんなことを言われたら、我慢できないわね。いいわ、滅茶苦茶にしてあげる……」

そういうと、スコールは先ほどまでのように壊れ物を扱うような仕草をやめ、荒々しくキティの美しい栗色の毛を掴みあげた。

本来ならば痛みしか感じないような行為でも、今の彼女、役に入り込んだキティには快樂の元にすらなり得るものだった。

「ほら、痛い？」

「ああ、ええ、痛いわ……。凄く痛い……。でも、いいわ、もっと乱暴にして……」

「もちろん。こんなもので終わらせるほど、私は優しくないわ」

言った直後、キティに覆いかぶさるようにしてスコールが動く。それからしばらくの間、誰もいない暗がりには媚声が響き渡っていた。

第23話 動き出した歯車（後書き）

はい、やっと本筋はいりました。

のほほんさん、一回書き直したんですね。なんか違う気がしたので。

うちののほほんさんは意外とアグレッシブ。

つつか、スコールとかは半オリキャラ化しそうです。勘弁してください。

さて、キティとは一体誰なのか。もう半分以上ネタバレしてるけどね！

次回は、ショッピング？

第24話 香織ちゃん！ 海ですよ、海！（前書き）

更新再開！。ちよつと駆け足ですよ！。

第24話 香織ちゃん！ 海ですよ、海！

「んー、ひっさしぶりねー、ここにくるのも！」

「最近忙しかったからねえ」

「ここがショッピングモールか……」

「ううー、お姉ちゃんも行きたかったよおー……」

「お姉ちゃんは去年行ったでしょう……」

レゾナンス。そこは市の地下街と複合された、駅前の巨大ショッピングモールである。

とりあえずここに来れば大体のものは揃うし、意外とコアな部類のものまで取り揃えているお店もあるので評判もいい。あとは、うん。友達が言っていたけど、ナンパスポットとしても有名だ。男女共に。

こんにちは、香織です。今日は私服でショッピングモールまでやってきました。ちなみに、ふーちゃんはIS学園の制服。

もしかしたら中学の友達に会うかもしれないし、事前にそう言ったときの設定は考えておいた。ラウラともきちんとして打ち合わせはしたし。

あ、ちなみにラウラって呼び捨てにしているのは、本人からそうしてほしいと言われたから。……僕の正体、ドイツに伝わっているとかないよね？

まあそれはとにかく、今日何をしに来たかということですな、ラウラの水着を買いに来たのです。

ついでに色々物色しようと言うことで、ね。お姉ちゃんのコ―ディネート欲に火が付いちゃったらしいから。

「それにしても、いつ来ても広いわねー」

「まあ、ショッピングモールだからね。仕方ないね」

「……なあ、香織。お前、その服は」

「どう！？　可愛いでしょ、可愛いわよねラウラちゃん！」

「は、はあ……」

「……まあ、こういうことです」

「なるほど……。だが、それもアリだな」

うはは、ラウラが敵になった！？

いや、そうじゃなくて。ラウラが私の服について疑問を抱くことをやめたようです。まあいいけど。慣れたし、可愛い好きだし。いいけど。お姉ちゃんが結構買ってくるから、この私服はお姉ちゃんコーディネートです。

さて、では早速。

「お姉ちゃん、ラウラをよろしく」

「ふふふ、まっかせなさい！　さあラウラちゃん、行きましょうか！」

「え、あの、義姉上？　その、か、香織い！」

「行ってきましたっ！」

「はい、行つてらっしゃーい」

ラウラをつれて爆走するお姉ちゃん。……まあ、これで暫くは帰ってこないだろうなあ。

「さて、それじゃあアタシ達はどうしましょうかね？」

「適当に見て回るにしても、どこから行こうか？」

「……あれ、香織に鈴！？」

悩んでいた僕たちに突然声が掛かる。おや、この声は？

「ああ、栄介、夢子ちゃん！」

「ひつさしぶりだなーっ！ 元気にしてたか？」

「やあん、香織ったらまた可愛くなってるじゃない！ 写メ撮っていいー？」

「あ、うん、どうぞ？」

携帯で即座にあらゆる角度から僕を撮り出したのは、中学の友達、かみみち ゆめこ上道夢子。で、その向こうで呆れた顔で笑っているのが陣内栄介。じんない えいすけ

ふーちゃんの昔のクラスメイトでもあり、懐かしい顔だ。

ちなみに、夢子ちゃんは赤と黄色のシャツに臍だしファッション。髪はサイドテールにしている。それはいいけど、風邪引くよ？ ……そう言えば、あの格好今結構人気のアイドルを真似してるんだとか。一度街中ではったり会って、黙ってる代わりに握手とサインしてもらったんだって。それからゾッコンらしい。まあ、夢中になれることがあるのはいいことだね。

しかもなんだっけか、確か名前が一緒の文字なんだっけ。まあ、テンション上がったちゃってるのも分からんでもないけども。

で、栄介はといえば、やや茶色のツンツン頭に無地の黒いＴシャツ、チエーンのついた普通のジーンズ。

袖から伸びるのはそれなりに鍛えられた筋肉がついた腕である。

原因は姉。

うちのお姉ちゃんは、まあ昔ちよつとぶいぶい言わせてた時期がありました。その頃の舎弟でもあるんだな、これが。

その縁もあつて栄介とも仲良くなった。幼馴染、とはまた違うけど、まあ大切な友人である。

栄介は結構不良っぽく見えるんだけど、実は恐ろしいほどのお人よしでもある。幼稚園からの付き合いである夢子ちゃんが引っ張っていないと、人助けで休日が潰れるレベルの。

小学と中学での遅刻の原因が全て人助けって言う学生も、そうそういないんじゃないだろうか。

「つてか鈴、お前戻ってるなら連絡くれよ!」

「そうよ鈴! 水臭いわね!」

「ごめんごめん、今IS学園にいるから、ちょっとごたごたしてたからさ」

「つてことはお前、IS持ってるのか!」

「そつ、中国の代表候補生よ。つつてもまあ、そのうち企業所属に変わるけど」

「……まじか。で、香織はこの高校行っただっけ? 結局言わずに行っちまったよな?」

おおつ、よく喋りますな。

「あー、えつとね、結構遠いところなんだ。うちから通ってるんだけどね」

「そうなのか」

「で、香織に連絡入れた私が、一緒にこうして買い物にきてるってわけ。二人は何か買いにきたの?」

「夢子が水着見たいって言うからさ。俺も暇だし、こうして来てるわけよ」

「あんた、放つといたら人助けで一日終わるでしょうが!」

それもまた凄い理由でございますね。

「というか、二人って付き合って」

「つつつ付き合ってたんじゃないわよ! こいつはただのお、おお、幼馴染なんだからねっ!」

「そうだぜ、俺がこいつとはないうって」

……ああ、うん。大体分かったからいいか。

それにしても、なんか凄い昔の知り合いって感じがする。学園で

色々ありすぎたからなあ……。

「よし、とりあえず写メは一通り撮ったし……、行きましようか！」

「あいよ。それじゃあな香織、鈴」

「うん、それじゃあね二人とも」

「またそのうちにでも、ね。ばいばい」

ヒラヒラと手を振って、栄介は夢子ちゃんに連れられていった。

頑張ってね、夢子ちゃん。

さて、と。どうしようか。

「……しまった、あの二人にくつついていけば栄介を弄り倒して暇を潰せた!？」

「それはやめてあげよう」

「で、学校では暇だからこつちでIS作りに没頭することにしたと」「うん……。束社長、迷惑?」「んーんー、ぜーんぜん! ぶっちゃけ作るもの全部作ったし、次は何しようかと迷ってたんだよねえー」

香織達が買い物に出かけている頃、私は一人で本社へと赴いていた。

今日は一人でこちらへ向かうと話したところ、香織から自宅の鍵

を預けられ、香織の自宅からワープ装置でこちらに飛んだ。……もうこれが普通になっている辺り、感覚おかしくなってるね。

「そう言えば、束社長」

「ん、なに？」

「月のコロニーは、どうなったの……？」

「もう出来てるよー」

「そっか、そんなすぐには……、え？」

もう、出来てる？

月だよ？ 宇宙だよ？ コロニーだよ？

「見たい？」

「み、見たい！ お願い、見せて、お願いします束社長！」

「ぬっふっふー、オーケーオーケー！ じゃあワープ装置に乗ってねん！ ハル、管制よろしくっ！」

『はい、お母様。良い宇宙そらの旅を』

束社長に連れられ、ワープ装置に乗り込む。

あれ、そう言えば宇宙服とかはいらないのかな……。

そんなことを思っている間に突然視界が光に包まれ。

「ふう。到着！」

「……あれ、もう？」

目を開くと、そこにはまるで今までの光景が嘘のような、夢の景色。

空は漆黒の宇宙が広がり、見渡すコロニー内部は様々な建造物がそびえ立っている。

まさに宇宙コロニーそのものといった景色が、私の目の前に広が

っていた。

「ワープには距離なんて大して関係ないんだよん！ ほらほら、やってきたよ私たちの専用コロニー！ その名も……！」

東社長はとたたつ、と銀色の床で足踏みするかのようにな歩を進めると、くるりとこちらを振り向く。

「アルカディア・^{ワシ}・I！」

「アルカディア・？……」

一歩進むと、その一歩はとてつもなく軽かった。月の重力はここでも同じなんだろうか。

そっか、きたんだ。

来たんだ……！ 宇宙に！

「東社長！ ここでIS作ってもいい！？」

「おう！ ばんばんやりんしゃい！」

「ありがとう！ 起きて、『モーター』！」

了承を得るとすぐにモーターを展開、以前東社長から受け取ったあらゆるデータを次々に読み込んでいく。その中にはお姉ちゃんのISのものもあつたみたいだけど、それは自動で弾くようにした。私は、私だけのISを作る。今のテンションなら、この環境なら、なんだってできる気がした。

次々に表示されるデータを、表示されるのとはほぼ同時に捌き続けていく。脳内にあるデータバンクから必要なデータだけを抜き取ると、構築用のデータベースに書き込み、ISの建造に必要な材料、作りたい武装、最高スペックなどを次々に記述。……よし。

「データ完成、後は建造だけ」

「材料なら倉庫にあるよん。マップデータ転送しとくねー」

「ありがとうございます、束社長！ 行ってきます！」

「飛び切りいい子に仕上げて上げてくれたまえよ！」

頷き、駆け出す。目的の倉庫はすぐに見つかった。

すぐにモータータイプの全システムを稼働させると、倉庫の中で必要な材料をピックアップして量子変換していく。

作業が終わると、次はIS本体の製作。

ISコアから繋がる重要箇所を重点的に、コンセプトは最高速の力。

名は、打鉄式式ではない。あれでは不満だ、まだ先にいけるはず。この宇宙で生まれる、一番新しいISなんだ。それを、私が作るんだ。

もつともつと、もつと凄いものを。

今ならば分かる。束社長が空に、宇宙に行きたいと、その手段としてISを考えたのかを。

最初はきつと、手段として作ったんだ。だけど、いつの間にかIS^{の子}たちが自分で『宇宙^{そら}に行きたい』と声を上げて、それに束社長^{はなや}が応えたんだ。

なら、私はそれを叶えたい。

空を飛びたいというこの子の希望を、私が叶えてあげたい。

「……待ってて。今、できるからね」

初めて宇宙で生まれる、IS。

「海！ 見えたあつ！」

ずだーっと時間が流れて、臨海学校当日。

私達はバスに乗り込んでいました。海へ向かうバスの中でございます。

「香織、どうした？」

「んー、ふーちゃんも簪ちゃんも自分のクラスのバスだなあ、思つて。あ、他の皆といるのが嫌なわけじゃないけど」

ところで、性別バレしたシャルロットさんはどうしてあんなに上機嫌なんでせうか。誰か教えて。

ともかく、大して動きもなく旅館へ到着。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

元気がありすぎるのも問題なのですよ、女将さん。

で、ここでは私はのほほんさん、ラウラの二人、後うちのクラスの人一人と相部屋でございます。ラウラにも協力してもらつて、何とかばれるの防がなければ。

ちなみに、個室にしてもらわなかった理由は単純、したら間違はなく何かあるとされてばれるから。めんどくさいね、こういつ時つて。

お風呂は皆が大浴場に行っているときに自室のお風呂で済ませます。……温泉、入りたかったなあ。

で、何のかんのがあって社員全員集合。

「それで、香織は泳がないんでしょう？」

「というより泳げるわけないからね。お姉ちゃんがこれ着て写真だけは撮って来いってくれた服はあるけど……」

「葵義姉さんの見立てなら間違いないわね、楽しみにしてるわ」

「……あの、一つお話が」

「なによ簪、かしこまって」

「……この前、宇宙、行ってきた」

……えっと、今の流れで切り出すことかな。あと周りに人はいませんよ、もちろんね。

「で、IS、完成した……」

「本当に！？ おめでとう簪ちゃん！」

「う、あ、ありがと……」

もしかして、それってつまり簪ちゃんがそのレベルまで達してるってことだよね……。

私、超えられたなあ……。

「それで、名前は？」

「それは秘密……。明日の調整時間に見せる」

「楽しみにしてるわよ？ なんにしても、これで葵義姉さん以外全員が専用機持ちって訳かー」

なんだかまあ、凄いことになってきたなあ。

専用機が三機、設備が全て最新鋭の企業とか、どんなチートです

か。

でも、うん。臨海学校終わったらコロニーに連れて行ってもらう。今から楽しみだ。

「それじゃ、海行きますか！」

「おーっ！」

「お、おー……」

第24話 香織ちゃん！ 海ですよ、海！（後書き）

ということで、アイマス成分がちょっと混ぜられました。

そして舞台は宇宙まで！ さて、次回は……、自由時間ですよ！

第25話 最初の日（前書き）

ISの方が更新しやすかったなので、先に更新。
以後もIS中心で更新予定です。

第25話 最初の日

さて、海である。浜辺である。

暑いのである！

もう、どうして日本の夏はこんなに暑いのかな。外国には行ったことないけど。パラソルとか持ってきておいて正解だね……。

とりあえずパラソルを差して、其処にレジャーシートを敷いて、と。ちなみに、このレジャーシートは夏の浜辺用らしく、地面から伝わる熱をカットして、下の涼しさを保ってくれるらしい。この前レゾナンス行ったときに買ってきました。便利なものがあるねえ。

「これでよし、と」

「わっ、一之瀬さん綺麗……」

「白ワンピースに麦藁帽子って、そうそう似合う人いないのに……！ 着こなしてる！」

あははー、これお姉ちゃんが着なさいとチョイスしたものですけどね。ちなみにノースリーブである。

紺色のスパッツ履いてるから、捲られても問題なし。さすが私。で、帽子は典型的な麦藁帽子である。似合ってるのかな。

「香織！」

「ふーちゃん、もう来たんだ」

「あんまり待たせたらダメでしょ？ って、綺麗なカッコしてるわね……。撮影でもするの？」

「綺麗、かな？」

「其処になんで疑問を持つちゃうかなこの子は……。綺麗よ、大丈夫」

「そっか、よかった」

……いや、いいのか？　だんだん最近思考回路おかしくなり始めてない？

ともかく、まあそれはともかくだ。

ふーちゃんの水着はこう、なんていうのかな。上下が分かれてるタイプのセパレートで、上は装飾で紐が付けられてる。下は紐で結ぶタイプだね。黒と橙が多く配色されてるみたい。

活発なふーちゃんのイメージに良く似合ってる、うん。

「それで、他の三人は？」

「簪とのほんさんがラウラを引っ張ってきてるわ。あんたに見せるのが恥ずかしいって言って聞かないのよ」

「あ、あんまり無理にさせたらダメだよ？」

「大丈夫、あれは恥ずかしいだけで嫌がってはいないから」

それもまずいと思うんだけどなあ。

そんなことを話しながら、私はとりあえずふーちゃんとパラソルの下へ座り込む。おお、ほんとに冷たかった。

「香織」

「何？」

「辛くない？」

「え？」

「今までずっとシャワーだし、この三日間も大浴場には入れないんでしょ？」

突然、真剣な声音が耳を打つ。

思いやりの想いで満ちたその言葉は、自然と私の中に染み渡る。

「大丈夫。お姉ちゃんはこれより辛いことしてきたんだと思うし、

「ごたごたしてる一夏よりはましだよ」

「……目に見える脅威から身を守るために、公に力を手に入れられる地位と、いつ誰が敵になるか分からない上に、味方がとんでもなく少ない地位じゃ、違いすぎるわよ。一夏だって大変だろうけど、さ」

比べられない。ふーちゃんはそう言っで、そつと私の手を握った。

「守るから。アタシが香織を」

「……うん。じゃあ、私がふーちゃんを守るよ」

ふーちゃんを。そして、私の大切な人たちを守る。

私のせいで降り注ぐ火の粉ぐらい、自分の手で払えなければ。あの姉の弟なんだから。

しばらくそうしていた私達の耳に、突然声が飛び込んできた。

「かおりーん！」

「お待たせ、香織……」

「……あの、そのミイラは一体」

「ラウラ、恥ずかしいって」

えええー……。

やってきたのほほんさん、簪ちゃんに両サイドから挟まれた、バスタオルを巻いた人らしき物体はもぞもぞと動きながら何とか後ずさりしようと……、怖いです。

「や、やはり無理だ……！」

「かんちゃんーん！」

「うん……。えいつ」

そういうと、のほほんさんと簪ちゃんは二人で一斉にラウラの身を包むバスタオルを剥がす。

すると、其処には両サイドの髪をアップテールにして、少しレースのついたセパレートタイプの黒い水着を着たラウラが姿を現す。これは、ふーちゃんよりも大胆ですよ？

「どうー？ 可愛いでしょー」

「うん、すっごく似合ってる。可愛いよ、ラウラ」

「へうっ！？ か、かか、かわいい、のか？」

「うん！ そう思うよね、ふーちゃん」

「ええ、よく似合ってるわよ」

一言ごとに赤くなっていくラウラを眺めながら、私はそつと笑いかける。

のほほんさんは、なんかパジャマと似たような服ですね？

「防水加工済みい」

え、そうなの。

で、簪ちゃんは、水色を基調にした涼しげな色彩の、これまたセパレートタイプの水着だった。皆普通に似合ってるなあ。そしてそれに羞恥心を覚えていない私も私だ。

「新しく……買った……」

「よく似合ってるよ、可愛い」

「あ、ありがと……」

よし、じゃあまず早速、一枚目撮ろうか。

皆を撮りやすい所まで移動させると、タイマーをセットしてプロツクの上に置く。

急いで皆のところに戻って並ぶと、思い思いにそれぞれがポーズや表情を作って、パシャッという音と共にフラッシュ。あ、ちなみにデジカメです。

「よし、うまく撮れてる。じゃあ次は、皆一人ひとり撮ってみていいかな？」

「いいわよー。皆もいい？」

「うむ」

「うん」

「いいよー」

おお、ありがたい。

と言うことでふーちゃんから撮影開始。ま、全員撮っても五分経ってないけどね！

「これでよし、と。皆ありがと」

「いいっていいって。じゃあ、私達は泳いでくるわね」

「うん。あ、ちゃんと準備体操していつてね」

「分かってるわよ。ほら皆、行きましょ！」

ふーちゃんが先導し、皆は私に遠慮しながらも海へと走っていく。

……楽しんでね、皆。

さて、私はじゃんじゃん撮るとしようかな。その前にお茶飲もつと。

午後七時半、現時刻である。

昼食を挟んだ自由時間を満喫した私達は、夕食をいただくために大広間三つをぶん抜いて繋げた大宴会場で正座していた。

ちなみに、全員浴衣。この宿の決まりで、食事をするときには浴衣を着ていないといけないらしい。このときにもちゃんとブラとスパッツは履いています。死角はないよ！

「ん、おいしっ」

「なるほど、魚を生でと言うのはこういうことか」

「どうだと思っただの……」

「いや、サバイバルで食べたああいうものだとばかり」

それは明らかに間違えているよ！

それにしても、高校生に出すような食事じゃないね。本わさに力ヲハギってどうなのよ。最近めっちゃ高いのに。

「それにしても、一夏の周りは相変わらずだねえ」

「一夏ですから」

「おりむーだからねえ」

あ、ちなみに私の両サイドはラウラとのほほんさんです。ラウラ、意外と箸使えるんだね。

しばらくのんびりと食事していると、一夏のほうがなんだか騒がし、あ、千冬さんが。

「お前達は静かに食事することができんのか」

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力が有り余っているようだな。よかるう。それでは

今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五〇キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！ とんでもないです！ 大人しく食事をします！」

砂浜五〇キロか……。普通の道ならいけるけど、砂浜だと砂に足をとられるからなあ……。かなり時間掛かりそう。というか、あの砂浜ってどのくらい長いんだろ？

「あーかおりん、走ってみたいって顔してるー」

「えっ！？ ち、違いますよ！？ 砂浜がどんな感触なのかなーとか、普段のタイムだけ走ったらどれだけ遅くなるのかなーとか、思ってませんよ！？」

「香織、トレーニングマニアか？」

「あはは、……若干」

最近トレーニングメニューが増えていたりするのもそのせいです。体力大分ついたしなあ。

で、食事が終わった後は皆大浴場に行ったので、すぐに部屋のお風呂に入る。

でもこれでも、普段よりよっぽど広いし、しかも浴槽に浸かれるという、ね！ これだけで満足。

「うはあ……、癒される……」

『浴槽とシャワーでは違うのですか？』

『うん、ぜんぜん違うよ。こう、浸ってる感じが、じわーっと体をほぐしてくみたいな』

『じわーっ、ですか』

んー、イヴには分かりづらかなあ……。

っと、あんまり長風呂してばれてもまずいし、もう少ししたら上

がろう。

それにしても、随分遠くまできたなあ……。最初の頃はこんなになんていうか、大事って言うのかな。そういう風になるなんて考えでも見なかった。

でも、悪くない。

ぼんやりとした頭でそんなことを考えながら、お風呂から上がるいつものように服装を整える。ブラジャーつけて、その上に浴衣着て、と。

「これでよしっ」

さて、それじゃあ用事を済ませよう。

今日撮った写真の中で、千冬さんに渡しておく写真だけを別のメディアに保存して、そのチップを抜いてから部屋を後にする。

多分今の時間ならまだ千冬さんは部屋にいるだろうし、早めに渡そう。

部屋から出て、小走りに廊下を進んでいくと、向かいから洗面道具を桶に入れた一夏がやってくるのが見えた。

「お風呂ですか？」

「ん、ああ。香織はどこいくんだ？」

「ちよっと千冬さんに渡すものがあって。部屋にいますか？」

「ああ、多分いると思うぜ」

「わかりました。それじゃあ、楽しんできてください」

おう、と返事を返した一夏は楽しそうに温泉へと歩いていった。あれは本当に楽しみにしてる顔だなあ。温泉、入ってみたいなあ……。

よし、夏休みに旅行に行こう。それでたっぷり温泉に使って、海で遊んで。お姉ちゃん達と一緒に。

考えながら廊下を進み、千冬さんのいる教員室の襖、その横の壁をトントンとノックする。

「織斑先生、一之瀬です。お時間よろしいですか？」

「ん、ああ。開いているぞ」

しゃつと襖を開けて中へ。まあ、鍵のかかる襖なんてないからね。普通に考えれば。

部屋の奥では、浴衣姿の千冬さんが片膝を立てて座っていた。なんか、膝の上に腕乗せて、ビール掴んだりしたら様になりそうな格好です。

「で、どうした。何か用事か？」

「昼間に撮った写真のデータをお渡ししようと思って。何か、保存できるものはありますか？」

「ああ、ならこれに入れてくれ。すまん」

「いえ、海に入れない分楽しませてもらいましたから。入れるの、ここでいいんですか？」

「ああ。しかし難儀なものだな、お前も」

「好きでやっていることです。それに、少しずつ前に進んでます」

ようやく宇宙へいける道が出来たんだから。

千冬さんもその意味に気づいたらしく、にやつと笑みを浮かべると、私の頭をわしゃわしゃと乱暴に撫でてくる。

「ひゃっ!？」

「……無理だけはするなよ。お前を慕っている奴らはたくさんいる」
「……はい」

いつもと違う、千冬さんの温かな言葉に、思わず笑みを浮かべながら手元で作業を進める。

ビーチバレーをやっている写真や、一夏と千冬さんのツーショット、クラス全員が納まった写真。どれも、二度と取れない一品物だ。全ての画像を保存し終わると、メモリーを抜いて端末を千冬さんへと返す。

「はい、どうぞ」

「ん、すまん」

「せっかくですし、マッサージでも如何ですか？」

「出来るのか？」

「お姉ちゃんにやってましたし、心得くらいは。どうぞ、横になってください」

「なら、甘えさせてもらおう」

そう言って、千冬さんはごろんとうつ伏せに寝転がる。

よし、久しぶりに張り切ろうかな。

以後は音声のみでお楽しみください。

「固いですね……。お疲れ様です」

「ふ、いつもお前達に手を焼かされているからな……。んっ」

「ふふ、こちらはとうですか？」

「あ、ああ、いいぞ……。んうっ、っはあ……。！」

「んっ、しょっ」

「ふ、つくう……。！ い、いたっ！」

「大丈夫です、今ほぐしてますから」

「も、もうちょっと、加減を……」

「すぐよくなりますから、大丈夫ですよ。ほら、気持ちよくなってきましたでしょ？」

「ふああ……！ あ、ああ……」

「……」

「……」

……おや、千冬さんが黙ってしまった。

どうしたんだろ、痛かったかな。

「そこで盗み聞きしている連中、入って来い」

「ひゃっ！？」

「きゃあああああ！！」

「うわっ」

どさどさと襖を倒して雪崩れ込んだ数名。えっと、箒さんにふーちゃん、セシリアさん、簪ちゃん、と。……何をしてるのかな。この子達は。

「えっと、皆、何を？」

「……盗み、聞き？」

「た、たまたま通りがかつたら織斑先生の色っぽい声が聞こえてつい興味をそそられたとか、もしかして香織と織斑先生が……よつといけないことしてるんじゃないかかと思ってたわけじゃないんだからね！？」

「見事な自爆ありがとう、ふーちゃん。ただマッサージしてただけだよ？」

「一之瀬、そろそろいいぞ。ああ篠ノ之、デュノアとボーデヴィツヒも呼んで来い」

「はい」

「は、はいい！」

箒さん、そんなに千冬さんが苦手ですか……。なぜか脱兎の如く

駆け出していったんですが。

しかし、お話でもあるのかな？

「あ、あの、織斑先生。一夏さんは……」

「あいつなら風呂だ。しばらく待っていれば来るだろうから、その間に話を済ませるか」

「話、ですか」

「と言っても、関わってくるのは篠ノ之、オルコット、デュノアの三人だけだな。他の連中の分もあるし、丁度いい」

そんなことを言っている間に、篝さんがシャルロットさんとラウラをつれて戻ってきた。一夏は不在である。

「おお、香織もいたのか」

「こんにちは、ラウラ。シャルロットさんも」

「うん、こんにちは。というか、こんばんは？」

ああ、確かにこんばんはですね。ええ。もう夜だし。

「それで、話というのは？」

「まあその前に、全員座れ。飲み物でも奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

「わ、私ですか？！ えっと、その……」

そして固まる。ラウラは若干緊張しているみたいだけど、こっちのメンバーは立場上千冬さんとよく話すこともあるから、そんなに緊張することもない。

けど、篝さん達はやっぱり異常に緊張しているのか、ガッチガチのまま声を出せそうにない。

「通夜にでも来てるのかお前らは……。そら、欲しい奴があれば取り替えてもらえ」

そう言つて、千冬さんはわたし達全員に別々のジュースを手渡ししていく。

「ありがとうございます……」

「ありがとうございます。いただきます」

簪ちゃんがこくりと頭を下げ、私もそれに倣つて会釈程度に頭を下げると、手渡されたウーロン茶を開けて一口。

それが皮切りになったのか、他の皆も口々に礼を言つと一口呷つて息をついた。

「飲んだな？」

「飲みました、けど」

「なな、何か入っていますの！？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちよつとした口封じだ」

そう言つて、千冬さんは新しく冷蔵庫から一本の缶ビールを取り出すと、ゴクゴクと喉を鳴らして飲み込んでいく。

……。あの、汗が首筋に見えて、ちよつとえっちいというか。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……。それは我慢するか」

上機嫌に言う千冬さんをぽかんと見ているのは、篝さん達の一夏グループ（仮）とラウラの四人。まあ、普段の千冬さん見てたらありえないと思うよね。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ、酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は、仕事なんじゃ……？」

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

その言葉に、一夏グループがさっと手元を見る。そのジュースが口止め料なんですね。

うーん、やっぱり少しおつまみが欲しいなあ……。でも材料ないから何も作れない……。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか。お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

と、千冬さんが一夏グループへ向けて言葉を投げた。

ああ、つまりそういう意味でのお話ですか。頑張れ女の子。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

と言うのは箒さん。

頬を染めて恥ずかしそうに言っているのがなんとも。一夏もよくこれで落ちないな。あ、普段は手を上げてばかりだから……。恥ずかしさゆえに。不憫な。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

セシリアさん、そんなこと言っても本心隠せてませんよ。

「僕　あの、私は……やさしいところ、です……」

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

そういうのはシャルロットさん。多分一夏が一番マシと言うか、
まともに接している人じゃないだろうか。

他の人は、照れ隠しに手を出してしまったりするからなあ……。
逆に言えば、一夏はあまり女性としてみていないと言うことにも
なるんだけど。ほら、好きだけど恋愛対称にならないって言う、あ
れ。

「ふむ……、まあなんにしてもだ。あいつは役に立つぞ。家事も料
理も中々だし、マツサージだってうまい。付き合える女は得だな。
どうだ、欲しいか？」

「……く、くれるんですか!?!?!」

「やるかバカ」

残念そうに頂垂れる三名。うん、まあ頑張れ。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨
けよ、ガキども」

「で、なぜ私達はここに留められてるんでしょうか？」

「ん、ああ。鈴音、簪。お前達は先日付けでバインドカンパニーの
正式所属となった。明日いきなり伝えられるより言いかと思ってな、
今伝えることにした」

……おう、いきなりですね。

ふーちゃんと簪ちゃんはポカーンとした顔で私と千冬さんの顔を
チラリチラリと。なにさ。

「で、それに伴ってお前達二人の国籍が不明になった。国籍不明の企業所属になっっているから、これから面倒だぞ？」

「……大丈夫です！」

「……はい」

あの、ですね。お話が急すぎてよく分からないと言つか千冬さんなんで知ってるんですか？

「私はあのバカの友人だ、そのぐらいは聞きだせる。そっちの四人も、このことは他言無用、もし漏らせば社会的に死ぬと思え」

「あ、あの、話が飲み込めないのですが……」

「それは明日わかる。今はとりあえず「言ったら死ぬ」とだけおぼえておけがいい」

ビールのついでだ、と千冬さんは軽く笑いながら言っただけだ。けど、その、いいのかな？ これで。

だからこの混乱の中で聞き逃していた。千冬さんが「明日分かる」と言っただけの意味を。

第25話 最初の日（後書き）

はい、ということで正式に鈴と簪の国籍と所属がバインドカンパニ
ーに移りました。

次回からは怒涛の展開、お楽しみに！

第26話 荒れだす空（前書き）

この辺は一気に書けそうなので、更新ペースは速めです。

第26話 荒れだす空

合宿二日目。

今日は丸一日、ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われることになる。まあ、私達バインド・カンパニー所属は関係ないんだけど。

「ようやく全員集まったか。 おい、遅刻者」

「は、はいっ」

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアは 」

以後割愛。ちなみに喋っているのは千冬さんとラウラである。

世にも珍しくラウラが寝坊して朝の集合に遅刻してしまったのです。ほんと、珍しいこともあるもんだ。

で、ラウラがコア・ネットワークについてを説明し終えたところで、千冬さんの号令がかかる。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

全員が一齐に返事をして、バラバラに散っていく。

ちなみにここはドーム状になっている上に四方を切り立った崖に囲まれている。どう考えても自然の物でない辺り、結構無茶したんだろうと想像がつく。

ここに来るには一度水面下に潜り、水中のトンネルに入らなければ行けない。無論外に出るときも同様である。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

がしゃんがしゃんと打鉄用の装備の一部を運んでいた箒さんが、千冬さんに呼ばれてそっちへと歩を進める。

「お前には今日から専用」

「ちーちゃああああああん!!」

砂煙を上げながら走ってくる人影。私の知りうる限りこのような漫画チックなばかげたことができるのは、あの人しかいるまい。

「……束」

「束ちゃん、何してるんだこんなトコで……」

まさかこんな堂々と乱入してくるとは……。さすがの私も予想外です。あれ、ふーちゃんと簪ちゃんが驚いてないぞ？

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ　ぐふうっ!？」

「はい、織斑先生に迷惑掛けちゃいけませんよー」

「ぐるぢい、ぐるぢいよ香織ちゃん……?!」

「反省しました？」

「じだじだ、じだがらああああ」

「ならよし」

後ろから束ちゃんの襟首をがしつと掴んで止めていたのだけど、反省したようだから手を離す。

全く、あのスピードで突っ込んできたら危ないでしょうに。

「よくやった、一之瀬」

「いえいえ、即座にアイアンクローの構えに入った先生ほどでは」
「慣れているからな」

「……心中お察します」

今だからまだしも、昔からこれをやられていたらそりゃあ慣れもする。と言うか、この人の人間離れた身体能力は束ちゃんにつき合わされたからじゃないのだろうか。疑ってしまうよ。

で、その束ちゃんはどういうと。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！ 篝ちゃんひどい！」

うーん、束ちゃんってば、寂しいのを無理やり隠してるね。不器用さんだ。

そして篝さん、それは痛いです。間違いなく痛いです。

「え、えつと、この合宿では関係者以外」

「ん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えつ、あつ、はいつ。そ、そうですね……」

山田先生が沈められました、救援を。

などとふざけていたら場がさらに混乱するので、この辺で収めよう。

「束ちゃん、自己紹介」

「えー？ めんどくさー」

「たばねちゃん」

「はいっ！ 篠ノ之束だよ、よろしくね！」

「……やるな、一之瀬」

え、何ですか。ちょっと凄んでみただけなんです。

それにしても、ちゃんと挨拶したようで良かった良かった。人間関係って大事ですよ。

「まあいい、そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続ける」

「こいつはひどいなあ。らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

おお、さすが旧知の親友。あしらいと罵倒に躊躇いがないですね。勉強になります。

「え、えつと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさつきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじらしい。このおっぱい魔神め、たぶらかしたなー！」

「はいやめなさい。簪ちゃん、ふーちゃん」

「うん……」

「はいはい」

二人にも協力を要請して、山田先生へ向かっていこうとする束ちゃんを確保。私と簪ちゃん、ふーちゃんが襟首をが

しつと。

「ぬお？　こらー、三人とも放せーい！」

「だめです、放したら山田先生襲うでしょ」

「いいじゃんいいじゃん！　セクハラは青春の花だぞー！」

「そんな花なら枯れてしまえ」

「か、香織ちゃんの突込みがきついっ！？」

「とにかく、襲っちゃダメです。いいですね？」

「はい。ぶーぶー、つまないよー」

「というか、他に用事があつたんじゃないんですか」

「おお、そうだそうだ！　ありがとね香織ちゃん！」

一通りコントを終わらせると、大人しくなった束ちゃんを解放する。まったく、エネルギー満ち溢れてるなあ。

「あ、あの、それで、頼んでおいたものは……？」

「うっふっふっ、それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ

！」

ズビシャッ！　と言う具合に直情を指差す束さん。

「……ラストシューティング」

「懐かしいですね」

まさかここでガンムとは。どっちかって言うとガイナックス風味じゃないですか？

「……トップをねえ？」

「ああ、ありますね」

まあそんなことはどうでもいいか。

しばらくすると、ゴオオオオオオオなんて音と共に上空から何か
が……、ゴオオオオオオオ？

「月からの直送便でございまーす！」

「やめええええい！？ イヴ！」

『はい！』

即座にISを展開、周囲全体を守るように《夜羽》を広げる。

若干漏れはするけど、全員を守る分にはこれで十分！

直後、轟音と共に大量の砂が巻き上げられ、その何かが地面に突き刺さった。

「……生きてる？」

「おー、結構な迫力だなー！」

「東ちゃん！ 今の禁止！」

「えー？ かつこよかったでしょ？」

「それで人が死んだら意味がないからね！？ とにかく、緩和装置でもつけない限り禁止！ いいね！」

全く……。

とにかく、怪我人はいないみたいだしまあいいか。今は。

しかし、まさか月のコロニーから落としてきたの？ 東ちゃんのことだから感知されるへまはしてないとしても、また随分と……。

なんてことを考えていたら、墜ちて来た金属塊の前面がぱたりと開いた。

「じゃじゃーん！ これぞ篤ちゃん専用機こと『あかつばき紅椿』！ 全スペックが現行ISを上回る東さんお手製ISだよ！」

その言葉と共に、中に格納されていた真紅の装甲が動作アームによつて外に出される。

「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！ かんちゃん、データ送るから一緒によろしくー！」

「ん……」

「……それでは、頼みます」

「堅いよー。実の姉妹なんだし、こうもつとキャッチーな呼び方で」

「はやく、始めましょう」

むう、なんだか箒さん、頑だなあ……。

そりゃあ束ちゃんのあの態度にも問題はあるだろうけど、察してあげられないかな。……無理か、多感な時期だもんね。いや、私もだけど。

とにかく、簪ちゃんと束ちゃんが並んで移動式ラボを起動させると、束ちゃんがリモコンのボタンを押した。すると、紅椿の装甲が割れて操縦者を受け入れる体勢に。しかも膝を落として乗り込みやすい姿勢に変わった。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ」

束ちゃん、ぴぽばなんて速度じゃないです。簪ちゃんも視線をあちらこちらに移しながら五枚の投影型ディスプレイにデータを映し出しながらキーボードを叩き続けている。速い。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！ お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

もくもくと作業を続ける簪ちゃんと対照的に、束ちゃんはべらべらとお喋りしながら作業を続けている。それでも簪ちゃんの作業速度が追いつけない辺り、さすが天才か。

「んー、ふ、ふ、ふふー 簪ちゃん、また剣の腕前が上がったねえ。筋肉のつき方を見れば分かるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなあ」

「……」

「えへへ、無視されちった。 はい、フィッティング終了ー。超早いね、さすが私」

「こっちも終わった……」

「うん、お疲れ様かんちゃん！ モータイプにも慣れてきたねー」

そういうと、束ちゃんは自分の移動式ISラボの末端でモータイプを撫でる。まるで自分の手足のように動かしているのを見つつ、再度紅椿を眺めてみる。

コアは作りたて、生まれたてだ。弱弱しくも力強い、矛盾しているものの正常な鼓動を感じられる。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？ 身内っただけで」
「だよねえ。なんかずるいよねえ」

むっ、コネは最大限活用するためのものですよ？
大体、姉が妹に贈り物をするのどこがおかしいんだい？

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？ 有史以来、世界が平等であつたことなど一度もないよ」

にやりと笑みを浮かべ、声がしたほうを向かずに束ちゃんはそう言っただけ。まあ、それ言ったら世の男性は「どうして俺たちにはISが使えないんだ」と声を荒げるだろうし。そういう次元のお話なんだよ。

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いつくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

束ちゃんに言われ、一夏が白式を呼び出す。

その白式の背部へとコードを突き刺すと、ディスプレイを呼び出してふむふむと唸る。

「んー……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？ 見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がISを使えるんですか？」

「ん？ んー……どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すれば分かる気がするんだけど、していい？」

「いい訳ないでしょ……」

「にやはは、そう言うと思ったよん。んー、まあ、わかんないならわかんないでいいけど。そもそもISって自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ。あつはつはっ」

……独自の、フラグメントマップ。確か、フラグメントマップは人間で言う遺伝子のようなもの。

とすれば、その配列を参考にすれば……？

「束ちゃん！」

「ん、なんだい香織ちゃん？」

「白式のフラグメントマップをサンプリングしてISを作れば、男性でも起動できるISを作れませんか？」

「……ふむ、フラグメントマップ自体を設計図にしちゃうってこと？　とすると、成長の仕方まで白式に似ちゃうかもね……。でも面白いアイデアだねん、やってみる価値はありそうだよ？　まあ、いつやるかはわからないけどー」

「じゃあ、そのうちに」

「おーけーおーけー！　任せんしゃい！」

うん、これがうまくいけば、まあそんなにうまくいくわけではないけど、一歩前進できそうだ。でも、なあ。

それが出来たとして、そしたら今度は戦争になりそう。それは嫌だ。暫くは、安定目指すしかないんじゃないかな。

で、そのままうんにやかうんにやか喋っていると、突然束ちゃんが思い出したように耳を立てた。文字通り。

「そうだよそうそう思い出した！　りんちゃん、かんちゃん！　二人は既にうちの企業所属になってるので、国籍も違いますー！」

「……あー、そうか、昨日の話ってそれかー」

「それで、どこになってるの？」

「月面コロニー『アルカディア・？』だよ。だから二人は、アルカディア・？代表ってことになるかな？　まあ、それ言ったらうちのは皆そうんだけどねー」

ふむ、と言うことは私もそうなるわけか。あれ、お姉ちゃんも？

「うん、あーちゃんもそうだぜい！　うはははは、束さんの科学力は宇宙ーイイイイ！」

「シュトロハイム少佐やめてください」

しっかしまあ、一度も行ったことない場所の代表つても変な感じだなあ……。

まあ、これが終わったら行くんだけどね？

「えっと……。これからよろしく、東社長……」

「よろしく、東社長」

「うむ、よろしくねん！」

はい、ということでもとりあえずこれにて一件落着かな？

で、篤さんが紅椿を軽く飛ばした後、突然山田先生が駆け寄ってきた。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

「どうした？」

「こ、こっ、これをつ！」

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動をしていた」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ぜ、全員揃ってます」

そこから先は、なぜか手話で会話をする千冬さんと山田先生。あの慌て方からして、相当やばいことらしい。

「束ちゃん」

「はいはい。今仕掛けてるからチョイ待ちー……、出たよん、データ送るねー」

束ちゃんの高速ハッキングによって手に入ったデータが、社員のISへと送られる。

其処に乗っていたのは、ハワイ沖で試験稼動をしていたアメリカとイスラエル共同開発の軍用第三代ISが暴走したと言う事実だった。しかも、今だ事態は沈静化されておらず、あちらの監視空域を離脱しているらしい。

「……最悪の展開ね」

「束ちゃん、向こうのほかの軍用ISが動いてるって情報は？」

「ないね。というか、出す気もないらしいよ？」

……最悪だ。本当に最悪だ。

このまま放置していれば、間違いなく一般への被害が出る。

「全員、注目！ 現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？ なんで？ 特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

にわかに騒然とし始める女子。それを、千冬さんの怒号が鎮めた。

「とつと戻れ！ 以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！ いいな！」

「はっ、はいっ！」「」

その言葉に、全員がすぐさまISを片付け始めた。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、デュノア、ボ―デヴィツヒ、凰、更識、一之瀬！ それと、篠ノ之も来い」「はい！」

篝さんは妙に張り切ったような声でそう返事をする。

十中八九あの軍用ISについてのことだろう。そして、それで千冬さんがあそこまで焦ると言うことは……。

どうやら、本当に命を賭けなければいけないことが起きているらしい。くそったね。

第26話 荒れだす空（後書き）

とうとう始まった福音事件。香織たちはどういう判断を下すのか。
次回、乞うご期待！

第27話 止められぬ道（前書き）

連続投稿！。

このまま戦闘まで書こうかな……。

第27話 止められぬ道

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥、宴会用の大座敷『風花の間』では、私達専用機持ち全員と教師陣が集められていた。

照明を落とし、全員が見える位置に大型の空中投影ディスプレイが表示されている。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリオ・ゴスヘル銀の福音』が制御下を離れて暴走監視空域より離脱したとの連絡があつた」

その言葉に、一夏が周囲をさりげなく見渡す。もともと、緊張によつてそれはぎこちないものになっていたが。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五〇分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

「……先生、発言の許可を願います」

「許可する、一之瀬」

「まずその上層部の判断ですが……、それは強制権がありますか？」

「ない。参加は任意だ」

「では次に、アメリカとイスラエルの他の軍用ISについて、福音を追跡しているISはいますか？ また、この上層部の判断はアメリカとイスラエルに要請されてのものですか？」

「現状、福音の速度に追いつけるISが存在していないため、追跡は衛星でのみ行われている。上層部からは要請があつたとは聞いていないな」

……まずい展開だ。

話からすると、福音は私たちが止められるレベルじゃない。うまく行けば何とかなるだろうけど、被害は大きくなるだろう。

しかもこの状況からして、上層部はどこからかその情報を手し、独断で動いていることになる。となれば、私たちが死んでも状況は隠蔽されるだろう。

そしてなによりも、許せない。暴走するということは、福音は何かの干渉を受けたか、許しがたい行為をされたかのどちらかだ。そうでなければ暴走なんて有り得ない。……兵器だと、思っているのだろう。酷い話だ。

「つまり、我々がこの作戦に参加し、万が一誰かが死亡しても、公表されることはないということですね」

「なっ!？」

「か、香織さん!？」

「……そういうことになる」

「……わかりました、私からの発言は、今は以上です」

一礼して、着席。心中穏やかではなかった。

これは要するに、上層部が利権を得たいがために先走った結果だろう。普通ならばまだ実戦経験のない、しかもスポーツ用のISで暴走した軍用ISを止めるなどとは言わないはずだ。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらっ」

ほら、その通りになった。

「それでは作戦会議をはじめ。意見がある者は挙手するように」

「はい」

セシリアさんが手を上げた。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

勝手な話だね。止めると言っておいて。

大人って、これだから嫌だ。千冬さんだって、内心穏やかなはずがない。

そう考えている間にも、皆が相談をはじめていた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。丁度本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

その山田先生の言葉に、全員が一斉に一夏の方を向く。
だからさ、なんで皆自分のことも考えずに戦おうとするのかな。
それっておかしいじゃん。

なら、私が代わりにそれをやろう。

「ところで！」

「なんだ、一之瀬」

「この件、報酬はどうなるんでしょうか？」

「報酬？」

何を言っているのか、といった感じで千冬さんがこちらを見る。
そう、報酬だ。まさか上層部も、何の出費もなしにこれを片付けられるなんて、甘いことを考えているわけではあるまい。そんなもの、私が許すものか。

「はい。たださえ専用機持ち、つまり国家代表候補や企業代表は貴重な人材です。しかも私たちは皆一五歳の子供だ、報酬の一つや二つ、なければ逆に不誠実でしょう」

「……そう言った話は聞いていないが」

「簪ちゃん、ディスプレイ出して」

「ん」

私の意図を悟った簪ちゃんが、投影ディスプレイとキーボードのセットを出すと、私のほうへ移した。

軽く頭を下げてから、ディスプレイを指し示した。

「まず、参加者全員への報酬、合計二億。この程度は出せるでしょう」

がしゃん、とお金が鳴る音と共にディスプレイに表示された各々

の名前の脇に、金額が表示される。

「加えてアメリカ、イスラエル両国への、福音がもたらす災厄による風評被害を未然に防げることを鑑みた上で、各国から筆り取れる分を加えれば、と」

そうしてはじき出された金額は、各員五億程度。ただし、七人揃えば三〇億を軽く越える上に、最前線に立たされるであろう一夏には更に報酬が上乘せされている。

「この程度、さらりと払ってもらわなければ動く気にはなれませんね」

「一之瀬、お前……」

「香織さん、本気で言ってますの!？」

「何がですか？」

意外にも、突っかかってきたのはセシリアさんだった。一夏か簞さん辺りが突っかかってくるかと思ったのに。

「お金が払えなければ戦わない、そういうつもりですの!？」

「私だって止めてあげたいです。でも、現実問題私達は命を失う危険性のある相手と戦わなければいけない、しかもこれは半強制だ。」

私は上層部の小間使いになるつもりはないんです」

そう、これが無償で受けてしまえば、上層部は味を占めて次々に厄介ごとを抱え込む可能性だってある。いわば、この程度をさらりと払うくらいの度胸がないなら、自分達で頭を捻れと言っこと。

「それに、私たち自身の問題でもあるんですよ。もしセシリアさんがこの戦いで大破して、万が一死んでしまったとします。その場合

イギリスはアメリカとイスラエルに猛抗議、最悪戦争になる可能性だってある。生き残って事件が解決した後、彼らが抗議を受けないために、お金を出して口を噤んでいてもらう。これは交渉として当たり前のことです」

「しかし！ 戦わなければたくさんの方が犠牲になるかもしれないですよ！？」

「私は他人を守るために皆を失いたくないんです！」

ドンツ、と机を叩いて叫ぶ。

この世の中で最も分かりやすい誠意の形の一つが、金だ。それを支払うと言うことは、一定の誠意を見せると言うことでもある。

上層部に「お金を払いますから何とかして、我々の対面を保ってください」と言わせなければ、私達はただの小間使いだ。

「……私は、賛成。そもそも、私はもう日本の代表候補じゃない……。学園のために戦ってやる必要性も無い」

「まあ、冷静に考えればそうなんだけどね。私は金が支払われるなら動くわ。まあ、そうじゃなくても胸糞悪いから動いちゃうかもしれないけど」

簪ちゃんとふーちゃんが続いて言う。

けれど、まだセシリアさんは納得していないらしい。そこに加えて、簪さんが立ち上がった。

「香織、何を恐れている？ 死ぬことはないだろう、絶対防御があるのだから。そして、私たちの手には止められるだけの力がある、やらない意味がどこにある？」

「シヨック死ということも有り得ます！ これは実戦、何が起きるか分からないんです！ もしISが何かの拍子に動かなくなったら、それはイコール死に結ばれるんですよ！？」

その感覚を、私は知っている。何度も何度も気を失い、死の淵に触れそうになってきた。我ながら、よく生きているものだと感じしてしまうが。

梟は絶対防御がないばかりか、シールドバリアすらかなり脆い。銃弾一発で砕け散るレベルだ。

まあ、知っているのはふーちゃんと束ちゃんだけなんだけど。あとイヴとハル。

「織斑先生、最低一人頭五億。この報酬と十分な情報管制、今回の件で起こり得るすべてについての我々のサポート。このすべてを取り付けられますか？」

「……わかった。確かに、学生だからといってお前達の人権がなくなるわけではない。それに、お前の半強制という言葉も頷けるからな」

どれだけこのIS学園がしっかりしているといっても、所詮は人の動かすものだ。私情など幾らでも入ってくる。ここで参加しないものが出れば、その人は気まずいまま三年を過ごさなければならなくなるかもしれない。人の命を救えるのに救わなかったクズだとか、そう言った汚名がついて回る。あまり女尊男卑な教師はいないといっても、やはり傾向はある。女の面汚しだとか言い出すものもいるだろう。

それを避けるためには、やはり参加するしかない。考えれば考えるほど泥沼に嵌る嫌な仕様だ。

「では、私は参加します」

「……なら、私もいい」

「決まりね。一夏、話は決まったわ。あんたは参加するの？」

「……俺は……、行くよ。金がどうとかってのじゃなしに、助けら

れるものを助けないでいるのは性に合わないんだ」

「オーケー、ならアンタの零落白夜で落としなさい。一撃ですべて持っていける攻撃はそれしかないわ」

「ですわね。ですが、問題は――」

「どうやって一夏を其処まで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

話が纏まり、皆が意欲的に話を進めていく。

さて、それじゃあこっちも支度をしよう。死なない支度を、ね。

『イヴ、最高速つてどれくらい出せる？』

『《夜羽》展開状態でしたら時速三〇〇〇キロ程度かと』

『その状態での戦闘は難しいか……。分かった、ありがと』

『いえ、無茶をサポートするのが私ですから』

うーん、イヴの中での私の評価ってどうなってるんだろうね？

……自殺志願者、とか？ いや、ないない。あつて溜まるかって。

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、私のブルー・ティアーズが。丁度イギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「ふむ……。それならば適任――」

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよー！」

突然、天井から声が降ってくる。

その底抜けに明るい声は、束ちゃんだった。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ!? は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ!」

空中で一回転、その後着地。この上下が狭い部屋の中でよくそんなことが……。

もうこの人についてはあんまり何かを気にしたら負けなんだろうようにしよう。うん。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンテイング!」

「……出て行け」

「聞いて聞いて! ここは断・然! 紅椿の出番なんだよっ!」

「なに?」

「紅椿のスペックデータ見てみて! パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ!」

そう言って表示されたのは、紅椿の速度データ。其処には、福音の最高速度を優に越した数値が表記されていた。

でも、なあ。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいほいと。ホラ! これでスピードはバッチリ!」

その言葉の後、不思議そうに首を捻っていた一夏へと説明をするべくこちらへ向く。

と、その直後。

『聞こえるかな、香織ちゃん』

『束ちゃん！？』

フライベート・チャネル

『今個人間秘匿通信でそっちと話してる。簡潔に状況だけ説明するね。私は、紅椿が活躍できる舞台を用意しようとして、福音のコアにお願いしたの。ちょっと暴走してもらえないかって言って、向こうはすぐ了承してくれた。けど、その後が問題だったの』

『後……？』

『うん。あの子が飛び去ったすぐ後に、福音は強制的にウイルスによってデータを書き換えられた。しかもすべてのISを敵だと思い込ませられてしまって、最後の最後で何とかそのデータが流出しないようにコア・ネットワークとの通信を切断したの』

『つまり、これは束ちゃんの予想外のことってこと？』

『うん。だから、お願い。あの子を、苦しんでるあの子を助けてあげて。篝ちゃんは、もしかすると浮かれちゃっているかもしれないから。そんなにやわな子じゃないって、信じてるけど』

……全く、この人は馬鹿だ。大バカだよ、天才なのに。

けど、この事態になっているのは束ちゃんのせいじゃない。遅かれ早かれやられていただろうから。

ウイルスやこの悪質な暴走の原因は、他にあるってことが分かっただけでも十分だ。……助けよう。

『分かった、やってみる』

『……ありがとう。ごめんね、ダメな社長さんで』

『今後は気をつけるように』

最後はわざと明るくそう注意してから、意識を切り替える。

どうやら束ちゃんはこうして話している間に口頭でISの説明を

終えていたらしく、どうやら箒さんが紅椿で一夏と白式を運び、一撃で叩ききることにしたらしい。

「織斑先生」

「なんだ、一之瀬」

「私の梟なら、単身ですが最高三〇〇〇キロは出せます。サポートとして付けていただけませんか」

「……わかった。万が一の時にはサポートしつつ戦闘空域を離脱、すぐに戻って来い」

「了解」

言って一礼。あとは、二人が巧くやってくれれば私の出番は無く済む。

だけど、嫌な予感が私の頭の中でひしめいていた。

「香織！」

「ふーちゃん、簪ちゃん……。それに、ラウラも」

「どういふつもり……？」

「アンタのISがやばいってことはわかってるでしょ！？　もし喰らったら……！」

「そもそも、これは実戦だ。第四世代二機が矢面に立つと言っただから、何も香織が行かなくても！」

「でも、あの子を助けたいんだよ。それに、あの二人だけじゃ、なんだか怪我しそудし」

そういうと、ふーちゃんと簪ちゃんは揃って溜め息を吐いた。

「……まあ、アンタはそういう奴だったわよね。なら、怪我しないで帰ってきなさい」

「約束……」

「香織、冷静さを失うな。いいな、実戦の空気は今までとは比べ物にならない重圧だ。それに負けるな」

「……ん、わかった。ラウラ、アドバイスありがとう」

三人をぎゅっと抱きしめてから、出発地点へ向かう。

さて、生きるために戦おうか。私は、ISを兵器のままでいさせない。そのために、梟と共に、イヴと共にいるんだから。

第27話 止められぬ道（後書き）

次回、福音戦。

二人のサポート役として同行することになった香織が其処で見たものとは？

乞うご期待です！

第28話 銀と黒 白と紅（前書き）

連投。ようやくここまできたぜ……。

第28話 銀と黒 白と紅

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「飛ぶよ、梟」

それぞれの声と共にISが展開され、白、紅、黒と色とりどりの装甲が展開される。

時刻は午前一時半、空は広く晴れ渡っていたが、どこかそれが不気味に感じた。

「じゃあ、箒。よろしく頼む。香織も、よろしくな」

「ええ、お互い頑張りましょう」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

不機嫌そうに聞こえるその声にも、どこか喜色が滲み出ている。これは、気をつけていたほうがいいかもしれない。

「それにしても、たまたま私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」

「ああ、そうだな。ちなみに香織もいるぞ。それにな箒、先生達も言っていたけどこれは訓練じゃないんだ。実践では何が起きるか分からない。十分に注意をして」

「無論、分かっているさ。ふふ、どうした？ 怖いのか？」

「そうじゃねえって。あな、箒」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「箒さん、浮かれすぎです。もう少し真面目に」

「大丈夫だ、私は真面目だぞ？　香織こそ、あまり緊張しすぎるなよ？」

……これは、だめだ。まずい。こつも浮かれていたら、咄嗟の時に状況判断にミスが生じる。というかなんとというか、久しぶりだな、イラッときたのは。

「一夏、箒さんに注意しててください。大ポ力をやらかす危険性があります」

「ああ、わかつてる」

「織斑、篠ノ之、一之瀬。聞こえるか？」

オープンチャネル
ISの開放通信を通じて、千冬さんの声が聞こえてくる。

「今回の作戦の要は一撃必殺だ。ワンアフローチ・ワンダウン短時間での決着を心がける。また一之瀬は、相手からの攻撃を出来る限り防御し、動きを止められるようフォローしろ」

「了解」

「了解です、可能な限りフォローに回ります」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

「そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」

「わかりました。出来る範囲で支援をします」

そう答えた箒さんだったが、やはり不安は拭えない。冷静さを装っていても、その返事は喜色交じりの嫌なものだった。

フライベート・チャネル
心中にもやを抱えているとき、突然個人秘匿通信で千冬さんから声が掛かった。

『 織斑、一之瀬』

「は、はい」

「はい、なんでしょうか」

『どうも篠ノ之は浮かれていますな。あんな状態では何かを仕損じる
かも知れん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

「了解です」

『頼むぞ』

プライベート・チャネル

オープンチャネル

個人間秘匿通信から開放通信へと切り替わり、同時に私たちの意
識も切り替わる。

いよいよだった。

『では、はじめ！』

直後、篝さんの後を追うように加速、徐々に高速の紅椿との距離
を縮めていく。

さすが束ちゃんお手製、加速性能が尋常じゃない。だけど、こっ
ちだって伊達に鳥の名を名乗っているわけじゃない。

『《夜羽》展開』

『《夜羽》、展開します。展開終了後に加速開始』

前方に円錐状になるように《夜羽》を展開、大気を裂くように加
速して行く。

抵抗はあるものの、予想よりもずっとスムーズに進んでいる。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。

一夏、香織、一気に行くぞ！」

「お、おう！」
「はい！」

篤さんが一気に紅椿を加速させ、私も梟でそれに追従する。

くつ、さすがに速いか……、抵抗がきつくなってきた。しかし、あの展開装甲付きのISについていけるって、結構凄いことなんじゃない？

「見えたぞ、二人とも！」

声に意識が引き戻され、超遠距離からの視覚情報がハイパーセンサーを通して自分の脳内に投影される。

福音は、まさにその名の通り銀色に染め上げられていた。しかも、あれの頭部からは巨大な一对の翼のような武装が生えている。たしか、大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システム、だったか。

「加速するぞ！ 目標に接触するのは一〇秒後だ。一夏、集中しろ！」
「ああ！」

更に加速が始まり、こちらも対衝撃を備えながら更に加速する。

「くつ、うつ……！」
「カオリ、大丈夫ですか？」
「なん、とか……っ！」

正直かなり辛いけど、音を上げている暇はない。

視界を何とか確保すると、一夏が雄叫びを上げながら零落白夜で福音へと切りかかるところだった。

普通ならば一撃で沈むはずのその攻撃を、なんと福音は速度を維持したまま体を一回転させ、数ミリの精度で刃を避けた。

数センチならまだ分らないでもないに、数ミリと言う尋常ではない精密さを見せ付けた福音は、加速を保ったまま一夏の攻撃を更に避け続ける。

「大丈夫ですか、一夏!？」

「こいつ、速い……ッ!」

そう呟いた直後、一夏は最後とばかりに大降りの一撃を繰り出そうとした。

だが、それは悪手。大きく隙を作ってしまう一手。

頭部から生えている翼の装甲の一部が開き、中から砲口が覗き込む。あのままではまずい。

「一夏、下がって!」

「香織っ!？」

すかさず加速して一夏の目の前に躍り出ると、降り注ぐ弾丸を夜羽と装甲で防ぐ。爆風だけで、シールドが破られた。だが、損傷は装甲だけに留まり、夜羽は今だ健在である。まだ、動ける。

「香織、無事か!？」

「ええ、大丈夫です! 反撃を!」

「わかった!」

痛みはあるけど、動けないほどじゃない。体が吹き飛んだわけでもないし、まだ大丈夫。

一夏と篝さんが一気に加速して、両側から追撃を始める。

「一夏、私が動きを止める！」

「わかった！」

「サポートします！」

篤さんの攻撃の合間に、隙を突いたように《夜雀》を撃ち放つ。

これ以上の射撃兵装がないのが、今は惜しい。

しかも、私の弾丸は気にすることでもないのか、福音はそれを無視して篤さんだけに集中している。

やがて、徐々に篤さんの猛攻に耐えられなくなってきたのか、防御を交え始める福音。それを見て、一夏が身構えた。

「はあああつ！」

「La……………」

歌っているかのようなその声の直後、ウィングスラスターの砲門がすべて開かれ、三六機の砲口が全方位へと火を吹く。

「やるなっ……！　だが、押し切る！」

その雨の中を篤さんが紙一重で弾丸を避けながら、接近して行く。ぎりぎりのところまだ近づいたところで、見逃すことのできない致命的な隙が、福音に作られる。

しかし、一夏は真逆の方向、海へと一直線に降りていった。

「一夏！？」

「うおおおっ！！」

ギリギリのところで一発の光弾を掻き消す。その先には、一隻の船があった。

「何をしている！？　せつかくのチャンスに　」

「船がいるんだ！　海上は先生達が封鎖したはずなのに　　ああくそっ、密漁船か！」

「このタイミングとは……、最悪です」

けれど、だからといって見殺しには出来なかったのだろう。まずい展開が目白押しだった。

一夏の零落白夜はエネルギー切れでたった今使えなくなった。その上、これから私たちはこの船が沈められないよう確保しつつ、三人とも逃げ延びなければならぬ。

この状態では福音の討伐は絶望的だった。

「馬鹿者！　犯罪者などをかばって……。そんなやつらは　」

「箒！」

「ッ　！？」

「箒、そんな、　そんな寂しいことは言っな。言っなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて……。どうしたんだよ、箒。らしくない、全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

そう言って、問い詰められた箒さんは動揺した顔を隠そうと手の平で顔を覆った。

そのときに落ちた刀が、光の粒子となって消え去っていく。
ミッド・タウン
具現維持限界が訪れていた。

ISだって、エネルギーがなければ防御機能は絶対防御だけしか働かない。そして、その絶対防御用のエネルギーが切れるまで攻撃されれば、後はお陀仏だ。

それに気づいて福音へと注意を向けると、既に福音は一斉射撃モードへと入っていた。ロックは、箒さんへと固められている。すべての砲門が箒さんのほうへと向けられていた。

「まずいッ！」

全速力で加速し、全身にかかるGのせいで体が悲鳴を上げるのを無視して篤さんの前へ。

そのまま《夜羽》を展開すると、福音から撃ち出された光の弾丸のうち、篤さんにあたる部分だけを纏めて防御する。

「ぐ、くうっ……！！」

『《夜羽》損傷率、九五％を超過！ カオリ、危険です！』

『大丈夫、だから ！』

言った直後、《夜羽》が崩壊した。

その残骸ごと光の波が押し寄せ、私の体目掛け殺到してくる。

肉を抉られ、骨を砕かれ、体が焼かれる痛みによって意識を失い、そしてまた痛みで意識が引き戻される。その繰り返しが続くうち、自然と頬が吊りあがっていた。

「は、ひ、ひ」

『カオリ！？』

「い、いた、い、ひ、ひひ、ははは」

『カオリ、しっかりしてください！ カオ 、ザーッ』

痛みに耐え切れず、喉が勝手に笑いを漏らす。

目の前が真っ暗になり、

そして、私は海の藻屑と消えた。

「一之瀬さんの生体反応、ロスト……」

「……織斑と篠ノ之に帰還命令を。作戦を立て直す」

「織斑、先生……」

「……早く」

大広間で指揮に当たっていた教員達と専用機持ちの間に、暗い空気が流れる。

山田先生のその言葉をようやく理解したらしい鈴は、突然涙を溢れさせると千冬へと掴みかかった。

「嘘、嘘よねっ！？ そんな、冗談やめてよ！ ねえっ！？」

「凰……」

「そんなこと、そんなのって……！」

「落ち着け、凰」

千冬は鈴の肩を掴むと、自分の前まで引き剥がす。
それでも鈴は頭を振って声を荒げる。

「ねえ、嘘でしょ？！ 香織が、香織が……！」

「落ち着け！ まだ死んだと決まったわけではない！」

千冬も、本当にそう思っているわけではない。だが、そう言わなければ鈴は壊れてしまう。そう見えるほどに今の鈴は危うかった。
涙で頬を濡らし、顔が酷いことになっているのも気にせずにその場に崩れ落ちる鈴。

「嘘、だあ……」

「……大丈夫」

鈴の泣き声意外に音が聞こえず、静まり返った大広間の中心から、
そんな声が上がった。

声の主は、更識簪。

「香織は、大丈夫」

根拠も何もない、そんな言葉が、なぜかとてつもなく心強く聞こえた。

第28話 銀と黒 白と紅（後書き）

次回、香織を失った彼女達の選択は？

乞うご期待！

第29話 戦いへ向けて

「……よし、セット完了」

「簪……？」

香織の生死不明の一報からしばらくして、私は自分のISを整備していた。

というよりは、対決戦用の装備へと換装していた、と言った方がいいだろう。今の私は、少しばかり怒っているから。

そんなときに、後ろから声が掛けられた。振り返るまでもない、涙声で尋ねてきたのは鈴だった。

「どうしたの……」

「アンタこそ、なにやってるの……？ ISの、整備なんか」

「私は、戦いに行く。勝って、香織を助ける」

あの後、織斑先生は専用機持ち全員に旅館での待機を命じていた。士気の低下もあるだろうけど、やはり生死不明者を出してしまったという状況自体が、ゴーサインに待ったを掛けているんだろう。

でも、関係ない。

「……鈴は、どうする？」

「え……？」

「このままめそめそ引きこもるか、飛んでいって香織を助けるか。どっちがいい……？」

「……」

鈴に、私の言葉はいらないだろうと思いつつ、声をかける。きつと、もう鈴の中で答えは出てる。私が見てきた中でも、鈴は

これで立ち止まれる人じゃないから。

そして、予想通りに、彼女は立ち上がった。

「……いやよ。私も行く。シグナルがなくても、生きていることなんて結構あるものね」

「ん」

「でも、どうやって見つけるの？」

「それならば私がやっておいた。ドイツの軍事衛星でな。ここから三〇キロ離れた沖合上空に福音を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で見えた」

「さすが……。鈴、支度して来て」

「分かったわ。あの天使様に泥塗ってやる」

闘気と怒気を漲らせて頷いた鈴は、そのままどこかへと消えた。おそらく、調整へ向かったんだろう。

ちなみに、織斑一夏と篠ノ之箒は部屋にいるらしい。まあどうでもいいか。篠ノ之箒には、少しばかり言いたいこともあるけど、それはこれが終わってからでいい。あれと香織の優先度は著しく違う。

「東社長、全員分のブースターキット、作れた？」

「もちろんだよ。インストールは一分で終わるように作ってあるけど、使い捨てだから気をつけるようにね」

「ん」

こくりと頷き、人数分のデータチップを受け取る。この中には束ちゃんによって作成されたブースターキットの座標が登録されているから、これを使えば遠隔操作でブースターキットをインストールできる。便利なものだ。

そのうちの一つをラウラに渡すと、モーティブとESを元に戻

す。

「よし、行こうか。くろがね鉄」

小さく囁いて、ISを撫でる。

さあ、勝ちにいこう。私たちのヒーローを助けに。

一方その頃、簪と別れた鈴は黙々と出発の準備を進めていた。

「鈴、何をしている？」

「戦支度よ、見て分からない？」

さも当然のように答えた鈴に、簪は不思議そうに首をかしげる。

「出撃命令が出たのか？」

「独断よ、決まってるじゃない。それに、このまま黙ってるなんて冗談じゃないわ」

さっきまで落ち込んでいたことには触れず、鈴はそう言ってから準備を再開する。

その様子を見て、簪は何かを決意したように鈴を見て、口を開いた。

「……私も行く。一夏を呼んでくる」

「第……」

「このままやらねばなしなど、冗談ではない。それに、香織に庇われて倒せませんでした、では、あいつに会わせる顔がない。浮かれていた私が、バカだったのに」

「……なら、すぐに呼んできて。そう時間はないわよ」
「わかった！」

あいつに言いたいことは幾らだつてある。だけど、今そんなことをしている暇はない。

もくもくと調整が続けていると、いつの間にか傍に束社長が来ていた。

「りんちゃん」

「……束社長。どうしたの？」

「りんちゃんに渡すものがあつて。はい、これ」

そう言つて手渡されたのは、一枚のチップ。

「これは……？」

「甲龍用の攻撃特化パッケージ、束さんのお手製だよ。……香織ちゃんと福音を、助けてあげて」

その言葉と共に束さんが語つたのは、福音が苦しんでいるということだった。

香織は、それを助けるために自分から志願したのだという。……まったく、どこまで優しくなれば気が済むのかしらね、あの子は。

「安心して、束社長。必ず助けるわ。香織も、福音も、まとめて」
「……うん」

どこか泣き腫らしたような目と共に、彼女が頷く。
まあ、頼まれたら嫌とは言えないわよね。

「行くわよ、甲龍」

ここは、どこだろうか。

気がつくと、僕は見知らぬ場所に倒れていた。

周囲は真っ暗、足元すらもはっきりとした存在感を感じられない
其処で、僕は目覚めた。

「誰かいませんか？」

無音。

けれど、不思議と寂しさや怖さはなかった。なんだか、懐かしさ
のある場所。

いつまでも立ち止まっているわけにも行かない、とにかく先へ進
んでみることにした。もっとも、どこが『先』なのかは全く持って
不明なわけだけど。

一步を踏み出すと、其処には確かに地面がある。見えないけれど、
確かに踏みしめることが出来た。

ゆっくりと一歩ずつ進んでいくと、周囲の暗闇は徐々に一点だけ
を照らし出すように明るくなってくる。

「あれ……、端末？」

其処に落ちていたのは、携帯端末だった。

暗い闇のなか、ぽつんと其処で光を放っている。

なくなってしまった光がそこにあることに、僕は無性に嬉しくな
って、思わず走り出していた。

「これ、もしかして僕の端末……？」

「カオリ！？ 無事だったんですね！？」

「い、イヴ！」

突然端末から聞こえた声は、イヴだった。

自分以外の声が聞こえたことにほっとして、思わず胸を撫で下ろ
す。

そこで、自分がIS学園の制服を着ていることに気づく。何故だ
ろう。

「イヴ、どうしてこれに？」

「わかりません。再起動が終わったときには、ここに……」

「そっか……。とにかく進んでみよう」

「はい」

イヴの入った端末を片手に、僕は再度歩き出した。

周囲の闇は道を形作るように濃淡を浮き上がらせ、周囲の濃い闇
が取り囲む中を、唯一淡く薄くなった闇の道が真っ直ぐ貫いていた。
一歩、また一歩と歩いていくにつれて、徐々に体に痛みが戻って
くる。

肩、胸、あばら、太もも、脛、^{すね}ほかにも色々な場所がずきずきと
痛む。まるで、何かで挟られたように。

けれど耐え切れない痛みというわけでもなく、何とか僕は歩を進めて行く。

「カオリ、大丈夫ですか？」

「なんとかね……」

実際は歩くたびに激痛が走り、気を抜けばその場に座り込んでしまいそうなほどだったが、それを口にすれば今度こそ歩けなくなると思い、空気を張ってそう答える。

痛みに耐えながら進むことしばらくして、ふと気づけば周囲がやや明るくなっていた。

明るくなっていたというよりも、濃い闇が淡くなって来ていると言った方がいいだろう。

そして、その闇の中にいて一際暗い光を放つ少女が、そこにいた。

「あの、貴女は……？」

「……ようやく来たか、主」

僕の声に反応したのか、少女が言う。刹那、周囲の闇すべてが何かに掻き消されるようにして消滅し、周囲は白一色で埋められる。

髪は黒く肩くらいまでの短い長さで、黒い浴衣を身に纏った少女は、ゆったりとこちらを振り向いた。

「随分とまた、無茶をしたな。こんなにボロボロになって……」

「えっと……？」

「ふふつ、この姿ではまだ幼子ゆえ、仕方ないか」

僕の頬に手をやり、そつと撫でながら慈しむようにいう少女。その手つきが妙に優しく、僕は思わず目を細めて身を預けてしまいそうになる。

「ようやく次の段階へ進む刻が来たのだ。何度も何度も死の恐怖と戦い、死に抗ってきた。その主の魂が、私と共鳴している」

「な、何を言っているのか、よく……」

「分からずとも良い、いずれ解る。さあ、今しばし体を休めよ。目を閉じ、私にその身を預けて」

ぎゅっと僕の体を抱きしめ、髪を撫でる少女。

まるで母親のようなその仕草に、僕はそっと目を瞑った。

「小さな体……、この身に、一体どれほどのものを背負って……」

「……いやじゃ、ありませんから」

「そうか……」

抱きしめられていると、まるでぬるま湯に使っているような心地良さが全身に行き渡ってくる。

それと共に、ゆっくりと全員を襲っていた痛みが癒えていく。

「今は眠るが良い……」

「ん……」

母親に抱かれているような暖かさを感じながら、僕はそのまま意識を落とした。

シルバリオ・ゴスベル
「銀の福音？」

「ええ、そのデータのデータを探って来て欲しいの。ついでに貴女のお兄様とやらにも、ちょっかいを出して来ても構わないわ」

「素敵なお話ね……。いいわ、受けてあげる」

ホテルの最上階の部屋、そのベッドの上で、素肌を晒しているキティが言った。

その言葉を聞いて、同じように素肌を晒しベッドに腰掛けているスコールは小さく笑う。

キティはスコールを後ろから抱きしめるように首に手を回すと、手首をスコールの前まで持ってきた。

「ほら、見て。貴女に付けられた傷跡^{しゐし}、まだ残ってるわ」

「あれ程気持ちよさそうに悲鳴を上げていたじゃない？」

「ええ、嬉しいの。ありがとうスコール、帰ってきたら、今度は私が貴女に傷跡^{しゐし}を付けてあげるわ……。そうしたら、貴女も私のもの……」

ぎゅっ、といつの間にかスコールの前に回りこんでいたキティは、不意に彼女の首を絞める。

両手を使い、力いっぱい。けれど、スコールは動じることなくキティを抱え上げるとベッドへと押し倒した。

そして、お返しだとばかりに彼女もキティの首を絞める。ぎちぎちと、一切の情け容赦なく。

「あ、が」

「ああ、貴女とこうしているの、とても楽しいわ……。！ 互いの首を絞めあって、快樂を楽しんで、もうぐちょぐちょになっているの……。！」

「は、はは、良かった、わ、スコール……」

キティが笑い、スコールが笑う。

「ねえ、ねえ！ もっと、もっと強く締めて……！ 死に際を味わせて……！」

「いいわよ、もっと強く……！ ふふ、絞めるのも、絞められるのもいいなんて、欲張りな子ね……！」

スコールは自分の息が苦しくなりだしているのも気にせず、更に強く彼女の首を絞める。

ゆっくり、ゆっくり、キティの意識に闇がかかりだす。それに伴って、彼女の笑みが深くなっていく。

「ああ、ああ……！ は、ひ、ひひっ、はははははは」

それからしばらく、彼女達はそうして互いを愛し続けた。

キティ
子猫はその魔物染みた魅力によって、捕らえた獲物を逃さない。

第29話 戦いへ向けて（後書き）

キティさん順調にぶっ壊れ中。

この子、別の意味で書いてて楽しい。その、アレ的な意味で。

異常の中の快楽を求めるというのが、どうにもツボです。歪んでるねえ。

いや、リアルで危ない人ではないので。書いとかないと勘違いされそうだからね！

次回、決戦。

彼女達の、そして香織の行く先は？

乞うご期待！

第30話 再誕する翼

海上上空二〇〇メートルのところで、胎児のように眠っているかのごとく自らを抱いていた福音は、微かな違和感と共にそちらへと首を動かす。

その直後、爆音と共に広がった粉煙が福音の頭部へ弾丸が命中したことをラウラに告げる。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！ さあ踊れ、その羽を蜂の巣にされたくなければなっ！」

吼え、福音が反撃のために起き上がるよりも早く次弾を装填、発射する。

大気に風穴を開け突き進む弾丸が、福音目掛け駆けてゆく。

ラウラの今の姿は砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備しているため、両肩に八〇口径レールカノン《ブリッツ》が、そして左右と正面に四枚の物理シールドがとりつけられていた。

そのラウラへ向けて福音が向かう。

進行を阻害する形で砲撃を行ってはいるものの、やはり相手は最新型の軍用IS。半数以上の弾丸は翼から放たれるエネルギー弾によつて撃ち落されてしまう。

目前にまで捉えたラウラへと福音が手を伸ばし

「セシリアー！」

しかし、その手は弾かれる。

突如としてその身を露わにしたブルー・ティアーズの強襲により、福音は更にダメージを負いながら一時的に後退する。

そのセシリアの姿もまた、ラウラと同じようにパッケージを装備

していた。

四機のエネルギービットと二機のミサイルビットは揃ってスカート状に腰部に接続され、スラスタの役割を果たしている。

その分の失った火力を補うのは、セシリアの手にしている大型Bトレーザーライフル《スターダスト・シューター》である。全長二メートル越えというとにかく火力を突き詰めた仕様ではあったが、この状況ではその火力が頼もしい。

それが、強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を身につけたブルー・ティアーズの姿であった。

「私たちの友人を助けるために、貴女には墜ちていただきますわ！」

高機動状態から反転、正確に福音に照準すると引き金を引き、次々に光弾を浴びせていく。

『敵機Bを認識。排除行動へと移る』

それにいらだったのか、福音はようやくセシリアを認識すると機械的にそう言い放つ。

しかし、福音の前に立つのは二人だけではない。

「遅いよ」

セシリアよりも更に上に行く高機動を駆使して次々と二人の射撃を避けていく福音を、真後ろから声の主が襲う。

それは、ステルスモード解除の際にセシリアから離れ、距離をとり隙を窺っていたシャルロットだった。

後方からのショットガン二丁の接射の嵐を浴び、福音は一瞬だけ姿勢を崩した。しかし、それも一瞬^{シルバ・ベル}。

すぐさま三機目に対し《銀の鐘》を使用した反撃を繰り返す。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの二重の盾によって、福音の猛攻を防いで行く。

息つく暇のない防御の、針の穴のような小さな隙間を狙い、シャルロットは自身の技能である『高速切替^{スキル}』によってアサルトカノンを呼び出し、撃ち抜いてゆく。

「香織とはそんなに親しい仲じゃないけど、それでも友達なんだよ。悪いけど、墜ちてもらうよ！」

それに加え高速機動射撃のセシリア、遠距離砲撃のラウラ。三方からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始めて行く。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放つと、福音は次の瞬間に全スラストを用いての強行突破を計った。

しかし、そんなものを彼女が許すわけがない。

「させるかあっ！！」

「逃さない……っ！」

海面が膨れ上がり、二つの影がそれを切り裂き躍り出る。

飛び出してきたのは鈍い銀色の輝きを持った、打鉄に似た機体、^{しんうち}『真打・鉄』と、^{くろがね}『甲龍』であった。

「あんたも苦しいのよね。今ぶっ飛ばして、引きずり出してやるか

らまっ てなさい！」

「斬り裂き、進むっ！」

それぞれの目に希望の光を灯した二人は、一瞬で肉薄すると同時に左右から斬撃を繰り出す。

鈴の《双天牙月》は赤い炎を帯び、接触するエネルギー弾を飲み込み更に大きくなる。

束によつて作成された火力特化パッケージ『きえんばんじょう気焰万丈』に収められていたのは、《双天牙月》に装着する特殊武装《えんげつ焰月》、追加の衝撃砲に衝撃砲に読み込ませる威力強化プログラム。

それを手にした今の甲龍は、あらゆる壁を粉碎する。

「ずおらア！」

甲高い金属音と共に二人の攻撃を防いだ福音は、離脱を諦めたのか上空へと飛ぶ。

しかし、それを許すほど、もう一人の同行者は甘くなかった。

「逃さないと、言った……ッ！」

福音の認識速度すらも上回るスピードで福音の進路を妨害した簪は、その手に持った一振りの大剣を振りかざす。

どす黒いほどの朱に染まった、長方形の板のようなそれは、しかし剣であつた。

「はあああああっ！」

膨大な熱量を伴つて振り下ろされる刃を紙一重で避けた福音の装甲が、まるで何かに殴られたかのように大きく凹む。

近距離用刀剣武装《あかがね朱鉄》が、その武器の名である。

真打・鉄に収められた武装の一つであり、その主だった武装。その最大の特徴は、刃自身が周囲から熱を取り込み、増幅し、周囲に拡散させ、更にそれを取り込み増幅させるという、半永久機関のプロセスを踏んでいるところである。

この部分は束も一枚噛んでおり、この最大の難点であった永久機関を完成させたのも束であった。

「おらア！」

一瞬動きが止まった福音へ向けて、紅蓮に染まった見えざる弾丸が豪雨のように降り注ぐ。

それは重力に逆らい上空の福音へと吸い込まれて行き、次々に爆裂する。

「やりましたの！？」

「まだ！　っつーかセシリアそれ以後禁止っ！」

「ご丁寧にフラグを立てたセシリアへ鈴は刺すようにそう口を出すと、龍砲の照準を再度合わせる。」

『《銀の鐘》シルバー・ベル 最大稼動　開始』

「やらせんッ！」

「止めてやるッ！」

両腕と翼を大きく広げた福音のはるか上空から、その声とともに降り注ぐは、世界でたった二機の大四世代型IS。

『紅椿』と『白式』だった。

紅椿は《空裂》からわれを、白式は《雪片式型》ゆきひらにがたをそれぞれ展開し、一斉に羽目掛け刃を振り下ろす。

「うおおおおっ！」

「せやああああ！」

完全な不意打ち。

いかなるシステムであっても、行動と行動、拍子と拍子の間を突かれた攻撃には対処できない。

二人の刃は真っ直ぐにその羽を断ち斬り、海へと叩き落して見せた。

それきり、福音は動く素振りも見せず海中へと沈んでいく。

「……終わったな」

「ああ」

静寂は一瞬。

それを切り裂くようにして、甲高い悲鳴のようなものが辺り一帯に響き渡る。

そして、それとともに広がる強烈な光。

「なんだっ！？」

誰が言ったかも分からないその言葉の響きが消える前に、光は球状へと変化し、そしてその中に青い雷を纏った『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が、ここに留まっていたときと同じように自らを抱き蹲っているのを見た。

「これは……！？」

「！？ まずい！ これは 『セカンド・シフト第二形態移行』だ！」

ラウラの声が響き渡る前に、その音が届いたかのように福音がそちらへ顔を向ける。

そこにあっただのは、感情が消え表情の見えないバイザー。それを

見た瞬間、簪と鈴、そしてラウラが弾けるように叫んだ。

「逃げる　！」

『キアアアアアア……！！』

低い、しかし甲高い、相反した雄叫びを産声として、福音は『第二形態移行』を終えてしまった。

そして福音は、その眼で獲物を見定めると、知覚の範囲外の手度を持ってしてラウラへと接近、その足を掴んだ。

「しまっ！？」

予想外に速い速度を見せ付けられ、ラウラは即座に全ての砲塔をそちらへ向けると砲撃を始める。

しかし、それは切断された頭部から這い出すようにして生えた『エネルギーの翼』によって全て無効化されてしまっ。

「ラウラを放せえっ！」

「よせ！　逃げる、こいつは　！」

近接ブレードで接近し、きりつけようとしたシャルロットの言葉を遮り、ラウラが言うも、その言葉は更に福音によって遮られた。

次の瞬間、ラウラを包み込むエネルギーの翼。

荘厳な美しさと輝きを放つその翼に包まれ、その中でラウラはエネルギー弾の嵐に晒され、一瞬で装甲は打ち剥がされ、エネルギーが底をつき、海へと落とされた。

「ラウラ！　よくもっ……！」

激昂したシャルロットがショットガンコールを呼び出し、福音の顔面目

掛け至近距離で撃ち放つ。

ドンッ！ という音と共に弾丸が射出され、しかしその音はショットガンの発射音ではなかった。

「きゃっ!？」

福音の全身の装甲が卵の殻のようにひび割れ、そのひびの間から小型のエネルギー翼が生み出される。

それが一斉に羽ばたくことによって生み出されたエネルギー弾がシャルロットをショットガンごと吹き飛ばした。

「な、何ですの!？ この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な!」

「しまった、エネルギーが……!？」

セシリアの言葉に続くように、一夏の声が響く。

それは、対抗できる刃の一つが失われたことの報告に他ならなかった。

そして、福音はまるでそれを喜ぶかのように叫ぶと、セシリアの眼前へ『イグニッション・ブースト瞬時加速』を用いて急接近、両翼の一斉射撃によって一瞬でエネルギーが消し飛ばされ、眼前の海へと叩き落される。

「セシリアッ!」

「ここまでやって、まだ足りないのか! 貴様はああああ!」

「バカッ、箒!？」

セシリアが落とされたことに激昂し、箒が急加速で接近、連続した斬撃で福音を攻め立てていく。

怒ってはいても、箒の技にキレが消えることなく、むしろそれは増していた。

「うおおおっ!!」

互い違いに回避と攻撃を繰り返しながら、紅椿は徐々に出力を上げていく。それにより、福音との差は徐々に紅椿の方に向き始めた。今度こそ、という意味を持って放とうとした一撃。しかし、それはエネルギー切れを知らせるブザー音によって阻まれる。

「なっ! また、エネルギー切れだと!? ぐあっ!」

にやり、と。悪意ある笑みが彼女を捕らえた。

その直後、彼女の首までもを福音の右腕が捕らえてしまう。

「箒イイイ!!」

響いたのは、一夏の悲鳴だった。

「……主、主。そろそろ起きよ」
「ん……、んんう……」

眠っていた意識が揺り起こされ、僕の前に眠る前まで見ていた彼女の顔が映る。

後頭部に柔らかい感触があった。

「ふむ、目が覚めたか？」

「は、はい……。あの、僕は……」

「ふふ、よく眠っていた。傷も癒えただろう？」

「え、あ、そう言えば……」

嬉しそうに笑う彼女の言葉で、体の痛みがなくなっていることに気づいた。

と、突然彼女の顔が真剣になる。

「さて、このまま主を膝枕しているのもいいが、それよりもやるべきことがあるな」

「え？ あ、ご、ごめんなさいっ！？」

「構わぬよ。私が好きでやった事ゆえな。それよりも主、立つがよい。次の段階へ進む準備は、整った」

そういうと、彼女は僕が起き上がるのを待ってから立ち上がる。

そして、両手をこちらへと突き出してきた。

「手を重ねよ」

「こ、こう、っ！」

重ねた瞬間、たくさんの映像が流れ込んできた。

ふーちゃんの涙、戦っている皆、色んなものが流れ込んできて、

最後に僕の中に入って来たのは、彼女の存在。

気がつくといつの間にか僕は目を瞑っていて、それを開いたとき、目の前の少女は少女ではなく、黒髪を長く伸ばした美しい女性へと変わっていた。

「貴女は、梟、だったんですね……」

「さよう。主が応えてくれた時、私は嬉しかった……。主と共に空を飛ぶのが、楽しくて仕方なかった」

「でも、完全ではなかった」

「主を乗せている限り、私の身を守る力は失われていた。しかし、主の痛みによってその守る力は新たに作り出された。もう、主を苦しめる心配はない」

ありがとう。

涙を流しながら、梟はそう告げた。

僕はイレギュラーだ。しかしそのイレギュラーと共に無理やりにも飛ばうとした結果、エラーが出た。そのエラーが絶対防御の消失、シールドバリアの弱体化に反映されてしまったんだ。

だけど、それももう終わり。

ファースト・シフト

『第一形態移行』が終われば、それも消える。より強く生まれ変われる。

ばさつと、彼女の背中から黒い二対の羽が生えた。

「共に、飛んでくれるか？ 主よ」

「……もちろん。行こう、梟。イヴも一緒に」

「うむ。ゆくぞ、二人とも」

「私が随分と置いてけぼりでしたね。埋め合わせはしてもらいますから」

イヴの怒った口調の中身が喜色に飛んでいることがなぜかわかって、思わず笑みを漏らす。

次の瞬間には、彼女とイヴと僕は一つに溶け合い、そして黒い光を放ちその世界は消え去った。

悲鳴が響く。

しかし、そのさきが続くべき声は、箒の悲鳴は、エネルギー弾の射出音はなかった。

その代わりに聞こえたのは、鋭く何かを切り裂く音。

「　　かお、り？」

「うん。ごめんなさい、箒さん。遅れました」

まるで待ち合わせか何かに遅れたように、軽く言い放つ。

「香織、香織なの！？　無事なのね！？」

「よかった……！」

「香織、生きてたんだ……！」

「すまねえ香織……！　あの時、おれがちゃんとしていれば……！」

口々に言つみんなの言葉を、彼は目を閉じて聞く。

そして、そつと口を開いた。

「とりあえず、詳しいことは後で話すよ。まずは、ただいま、皆。そして」

心底嬉しそうに笑い、二対の漆黒の翼を生やし、その手に巨大な剣を持ち、彼は降り立つ。

「そろそろお開きだよ、福音。君の悪夢は、梟の羽の音が持ち去る

う

完全となった梟を纏った香織が、そこにいた。

第30話 再誕する翼（後書き）

やっと、やっとここまでできた……！

次回、進化した梟と香織、イヴの三人が福音と激突！
乞うご期待！

第31話 黒の攻防

「行くよ、梟、イヴ」

『はい、カオリ』

香織は四枚となった《夜羽^{よばね}》を背中に展開し、一対となった《夜^よ鷹^{たか}》を両手に備える。

双眸は決して彼女から離さず、常にその動きを見続ける。

直後、急加速で眼前へと接近、そのまま夜鷹を振るい福音のエネルギーを破壊していく。

一撃一撃がまるで必殺の意思を込めているかのように鋭く、そして鮮やかに翼を刈り取っていった。

「は、速い……！」

「まって、梟ってあんなに速く動けたの!？」

梟が褒められているような気がして、箒と鈴の声に思わず笑みを零す。

そのとき、なす術もなく攻撃を受けていた福音が動いた。

頭部の巨大なエネルギー翼を動かしたかと思うと、一瞬で香織を飲み込む。

「まずい、あれはっ！」

刹那、発射音が響くと同時、

鳥の囀りが辺りを包んだ。

「これは、なんだ？」

「鳥の声……」

「……綺麗」

「すげえ……」

場違いな感想かもしれないが、彼ら彼女らは思わずそう呟いていた。

様々な種類の鳥の囀りが聞こえてきたかと思うと、エネルギー翼が徐々に消えていく。

まるで、囀りによって打ち消されるかのように。

「その攻撃は通用しないよ。その程度のエネルギーなら打ち消せる」
ワンオフ・アヒルンディー バードエイク
『単一技能、《とりのさえずり》の発現を確認。成功です』
「うん、ありがとうイヴ」

梟の単一技能、《とりのさえずり》。

その能力は、鳥の囀りに聞こえる特殊な周波数の音波を発生させることで、あらゆるエネルギーを打ち消す能力。

それはつまり、相手の運動エネルギー、BTエネルギー、あらゆるそれを封じる力に他ならず、力以外での戦いの終結を体現する力だった。

尤も、現在の《とりのさえずり》では稼働率が低く、BTエネルギーを打ち消すので手一杯だが、今はそれで十二分。

「悪夢はおしまい、そろそろ幸せな夢に帰る時間だ」

『《夜羽》正常稼働。ウィングビット起動。《夜鷹》正常稼働、武装特性、《ナイトホーク》発動』

鳥の囀りが辺りを包み込む中、福音の目の前で夜羽の一部が外れていく。その数一〇個。四枚の羽のうちの二枚から、五枚ずつ羽が外れ、ビットとなる。

そして、それを覆い隠すのは《夜鷹》の特性。かつてステルス戦闘機に用いられたその名称の通り、その刃は使い手を夜の闇に隠す力を持つ。

それらは全て、梟と香織が互いを知り、理解し合い、その上で互いを翼としたゆえの力である。

ビットと本体、全ての姿が掻き消え、福音は目に見えて混乱した。

『目標消滅。シールドエネルギーの減衰は確認できず。状況変化、最大攻撃力を使用する』

その音声が響き渡った直後、三本の光の矢が福音を貫いた。それを皮切りに次々と撃ち出される光の矢に混じり、時たま襲ってくる斬撃。それは寸分狂わず装甲を叩き切り、シールドエネルギーだけを減らし操縦者に負担を掛けないよう計算されていた。

『継続してBTエネルギーの消滅を確認。最大攻撃力、使用不能』

エネルギーが消されれば、エネルギー翼を使用した攻撃は行えない。

福音はすぐさま戦闘行動を接近戦へ切り替えると、あらゆるレーダーを駆使して梟の居場所を探し始める。

しかしそれもむなしく、光の矢はいまや一度に多方向から六、七本が撃ち出されるほどとなっていた。

そして、その戦いは呆気なく終わりを告げる。

「これで」

『終わりです』

全ての装甲を破壊され、エネルギーが其処を尽きた福音は操縦者

から離れ、待機状態へと戻る。

《とりのさえずり》と《ナイトホーク》を解除し、危うく海に落ちかけた操縦者を両手の平でキャッチし、香織はようやく一息ついた。

「そうだ、ラウラとシャルロットさん、セシリアさんは!？」

「皆無事よ。浮かぶくらいのエネルギーは残ってるわ。おかえり、香織」

「……うん、ただいま、ふーちゃん」

「おかえりなさい……、香織……」

「ただいま、簪ちゃん。ちゃんと見てたよ、簪ちゃんが自分のISで戦ってるそこ」

香織の言葉に、簪は頬を染めて微笑んだ。

簪と一夏はなんとなく自分達がここにいるのかと一瞬疑問に思ったが、それよりもまず謝らなければと考えて香織の傍に寄る。

「その、香織。……すまなかった。私が驕っていたせいで、あんなことに……!」

「それを言うなら俺もだ。簪のことばかり考えてて、お前のこと見ててやれなかった」

「二人とも、謝罪は受け取りました。それに、一夏は自分の役目をやっただけです、気にしないでください。簪さんは……、まあ旅館に戻ってから話しましょうか」

「あ、ああ……」

実際は別になんとも思っていないが、今ここで話すことではないと考えてそう答える。

手の内にある福音の操縦者を見て、それから微笑む。

「さあ、帰ろうか」

「そうは行きませんわ、お兄様」

ぞくり、と。

背筋に悪寒が走った。

「初めまして、ですわね。香織お兄様？」

「……誰だ」

「そんな怖い声をお出しにならないでくださいませ。私はキティ、貴方の妹ですわ」

くすくすと笑いながら、キティと名乗った少女は裂けるような笑みを浮かべて香織を見る。

「残念だけど、人違いだ。僕に妹はいないよ」

「ふふつ、今は構いませんわ、分らずとも……」

じゃきん、と自らの身の丈ほどもある純白の刃を構え、灰色のI Sに身を預けた彼女は嗤う。

その顔は、香織と瓜二つな、しかし全く異質なものだった。

「さあ、踊りましょう？」

急接近し、一撃。

上段から振り下ろされた刃を辛うじて《夜鷹》で防ぐと、二枚の羽で福音の操縦者を保護しながら、もう片方の刃で真横から斬撃を放つ。

しかし、それはいとも容易く装甲によって阻まれた。

「なっ!？」

「ステップを進んでも、所詮一次移行しただけのISではこの《灰^{グレイ}狼^{ウルフ}》は打ち破れませんわ」

『イヴ、ウィングビット!』

『はい!』

不敵に笑みを浮かべるキティと名乗った少女へ向け、ビットを展開し一斉に撃ち放つ。

しかし、それはその手に持った剣の一振りで容易くかき消されてしまう。

「無駄ですわ、尤も、私もお兄様と今争う気はありませんの。今日は顔見せ、また今度お会いしましょう?」

そう言つと、キティはからからと嗤いながらその姿を消した。まるで、最初から其処にはいなかったように。

香織は、それをまるで夢か何かのように見送っていた。

「香織、大丈夫!?」

「う、うん……。あれは、一体……」

「一度戻ろう……。これ以上ここに留まっている理由はない……」

「そ、そうだね……」

簪に促され、一同は旅館に戻ることにする。

尤も、その表情はあまり優れなかったが。

帰った私たちを待っていたのは、鬼でした。

「作戦完了　と言いたところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」
「……はい」

うつ、千冬さんが怖いです。
そんなことを考えていたら、突然ばふっ、と私の頭に手が乗せられ、そのままわしゃわしゃと撫でられる。

「一之瀬……、よく無事に戻った」

「先生……」

「一之瀬以外は説教だ、全員正座！　一之瀬は先に診断を受けておけ」

「は、はい！」

千冬さん……。

あれ、でも私は普通に診断を受けるとまずいのでは？

「安心しろ、そっちは束がやる」

「……別の意味で安心できないのですが」
「諦めろ」

死刑宣告！？

でも、あれだな。帰ってきたって実感するね。
ちなみに、福音の操縦者さんはまだ気を失っているから、私が背負っています。背は高いけど結構軽いから背負いやすい。

『ちなみに、検査するまでもなく力オリの体調は万全ですが』
『書類作りとかあるんだよ、きつと』

イヴとそんな会話をしてから、私は操縦者さんと共に座敷へと通された。

そこで突然、耳に息が吹きかけられた。

「ひゃうつ！？」

「ふふっ、ほんとに女の子みたいな反応するのね」

「お、起きてらしたんですか！？」

「ええ。ありがとう、あの子を止めてくれて……」

誰もいない座敷で、彼女は私の背中からすとんと降りると、そのまま私を背中から抱きしめる。

……震えていた。寒いわけじゃないだろう、ただ震えて、ぎゅつと私を抱きしめている。

「……あなた、男の子なのよね」

「……福音が知らせてくれたんですか？」

「ええ。あの子は、私を守るために自分から戦いの場へ赴いた……。そのせいで、あの子は……」

後ろから涙で潤んだ声が聞こえ、そっと私の前にある手を握り締めた。

「……束ちゃん、いるでしょ？」

「うん。お帰り、香織ちゃん……」

「ねえ、福音のことを直してあげられる？ このままなんて……」

いつの間にか暗がりから現れた束ちゃんにそう尋ねる。
束ちゃんの目は赤く腫れていて、随分泣いたんだろうつてことが
良く分かった。

「……ナターシャ・ファイルス、アメリカのテストパイロットだね」
「……ええ。初めまして、篠ノ之博士」

「貴女には今二つの道がある。福音と共に私の元に来て、福音を助
けるか、それともアメリカに戻って福音が初期化、凍結処理される
のを黙ってみているか」

ナターシャさんの前に立ち、束ちゃんがそう言った。
これって、つまり、ナターシャさんをヘッドハンティングしてる
ってこと？

「……貴女なら、あの子を助けられる？」
「あの子がこうなった責任の一端は私にある。私が暴走の振りなん
て頼まなければ、こうならなかったかもしれない。だから、必ず助け
るよ」

「……分かったわ。色々言いたいことはあるけど、それはあとで言
わせてもらうことにする。あの子を苦しめた直接の原因を探れる？」
「もちろん。そろそろ目に余る行為が多くなってきたからね」
「なら、よろしくお願いするわ。あの子共々お世話になります。で
も、どうやって引き抜くつもり？」

その言葉に、束ちゃんは不敵に笑ってみせる。
ああ、まあまたやるんだろうなあ。ISOコアの制限とかどこにい
ったんだろうか。
えーっと。

どうやらうちの社員がもう一人増えるようです。

「それじゃあ、よろしくね。せ・ん・ぱ・い」

「え、ええっ!? ちょ、僕がですか!？」

「そうだねえ、そうなるね？」

あと、後輩になるようです。

「詳しい話はこの後また纏めようか。香織ちゃんたちへの纏まったお話は、また今度機会を設けるから、そのつもりでね？」

「はい」

もう、置いてけぼりですねー。

あ、イヴの気持ちが分かったかもしれない。

夕食を食べ終えた後、僕はそつと旅館を抜け出して海へやってきていた。

ざあん、ざあん、と波の打ちつける音が心を落ち着かせてくれる。

「……あの子は一体、誰なんだろう」

『わかりません。しかし、これから私たちの前に現れることだけは確かでしょう』

キティと名乗ったあの少女は、僕に瓜二つだった。

……一体、彼女は。

「いい男が一人で黄昏てるの？」

「ナターシャさん……。そっちこそどうしたんですか、こんなところで？」

「こそこそーつと宿を抜け出さない子を追いかけてたら、ここに着いたのよ。どうしたの？」

いつの間にか隣に立っていたナターシャさんは、僕の横に座るとこちらへ身を傾ける。

こてん、と顔を僕の肩に乗せてきた。

「……色んなことを、考えていたんです。世界のこととか、自分のこととか」

「彼女のこととか？」

「違います。というか彼女はいないんですけど」

「アプローチは一杯掛けられてるみたいだけどね。りんちゃんとかんちゃん、だっけ？ 束から聞いたわよ」

あのウサギめ、話しおつたな……。
まったくもう……。

「……まだ、僕は決められません。誰か一人を選ぶと、他を斬り捨てるような気がして」

「それでも、決めないといけないときが来るわ。……まあ、全員愛するってのも、アリかもしれないけど？」

「な、何を言ってるんですか！？」

「そうそう、ラウラちゃんだっけ。あの子も貴方のこと好きみたいね？ ちよくちよく見てたわよ」

妙な観察眼を持つてるなこの人……。

今はまだ、恋とか、そういうの分らないんだよな。

「まあ、ゆっくり考えなさい。時間はたっぷりあるわ。それに、もしあれならお姉さんが相談に乗ってあげるから」

……なんというか、こういうまともな人は久しぶりかもしれない。ええ。

東ちゃんはあんなだし、同級生は皆ちょっと外れてるし。いや、いい人たちなんだけど。

千冬さんは……、なんか相談しづらい。どっちかって言うところときて何かを学び取るような感じ。

お姉ちゃんは……、うん、ないな。頼りになるけどならない人だから。

「それで、処遇はどうなったんですか？」

「東が直々にアメリカのトップと交渉してるわ。多分、新品のISCコア渡すから福音と私を寄越せて言ってるんじゃないかしら。アメリカも今回の事件は公にはしたくないようだから、それで手打つと思うわ」

「……まあ、こっちにお金も入るし、いいか」

「あら、何の話？」

疑問を浮かべた表情でこちらを見ていたので、出発前に僕が千冬さんをお願いした条件を話してみた。

最初は驚いていたけど、徐々に悪い笑みに変わっていくナターシヤさん。……うん、そういう顔も綺麗。大人の女性って感じた。

「中々がめつく持っていくじゃない？」

「命を張るんですから、当然ですよ。ともかく、これではらくお金には困りませんし」

「ふふっ、私好きよ？　そういう強い男の子って」

「茶化さないでくださいよ」

「はいはい」

楽しそうに笑いながら彼女は海を眺める。

……潮の香りが、心地よかった。

第31話 黒の攻防（後書き）

はい、なぜかナターシャが社員になりました。しかしヒロインにはなりません。

この束さんだったら、コアを助けるためにこれくらいはするかな、ということ。

香織が男だということがコア・ネットワーク経由で福音とリンクしたナターシャにも流れ込んで知られている、ということなんです。だんだんIS原作と離れてきた拙作ですが、どうぞよろしく。

次回はバスの中から開始です。

第32話 帰還 そして夏休みの始まり！（前書き）

今回、香織がちょっと人間離れします。

第32話 帰還 そして夏休みの始まり！

「篤さん」

翌朝、私は朝食をとった後に篤さん呼び止めた。

名を呼ばれた彼女はびっくりと肩をすくめると、そっところらへ向く。

「……香織」

「昨日言っていた、お説教。ちょっと簡単にですけど、ここで済ませますね」

「……ああ」

どんよりと暗くなった篤さんの顔を見て、ちょっと気の毒になる。私自身はもう気にしていないけど、でもここできつちり言い聞かせた方が彼女のためになるし、彼女もそう望むだろう。

そう信じて、私は口を開く。

「貴女は『紅椿』を受け取ってから最初の作戦失敗まで、ずっと心が浮ついていましたね。命を掛けた戦いだということにも関わらず。それは許しがたいことですし、そのような心構えでは紅椿は力を貸してくれません。貴女が強くならなければ意味がないことは、貴女が一番わかっているでしょう？」

「……ああ」

「ですから、強くなりなさい。私だって強いとは言えませんが、それでも前に進むために努力なさい。それがいつか、貴女自身を助けることに繋がります」

……なんだか説教というより説法染みてきたなあ。

よし、とつとと終わらせよう。武力行使で。

「なので。ふんっ！」

「っ！？ つうう……！？」

「手っ取り早く言えばごちゃごちゃ考えるより歩け、走れってことです。失敗したなら倍働きなさい、納得いかないならいくまで行いなさい、それでも駄目ならその倍やってみなさい。駄目だ駄目だと言うのはそれが終わった後にすることです。って、これお姉ちゃんの受け売りなんですけど、そういうことです」

全力で拳骨を落としてから押し切る形で説教終了。浴衣姿の箒さんが頭を押さえて涙目で「痛い痛い」とアピールしているのが妙に印象的だった。しかし自重はしませんよ？

で、食事を終えた私たちはISと専用装備の撤収作業に入ったわけなんです。

「……あの、お三方」

「ん？」

「なにー？」

「……なに？」

「動けないんですけど」

現在、私はふーちゃん、のほほんさん、簪ちゃんの三名にそれぞれ首、右腕、左腕をホルドされています。

さすがに三人を引きずってまでは動けませんのことよ。

「ちゃんと言つてなかったなあ、って。おかえり、かおりん」

「のほほんさん……」

「詳しいことは言えないんだろうけどー、でも、ちゃんと帰ってきてくれたからいいのですー」

「……うん、ただいま」

右腕をがっちりホールドしたまま、むしろホールドをきつくしながらのほほんさんは私の腕に頼ずりを始めた。……少し恥ずかしい。

なんて考えていると、ふーちゃんが私の顔の横に自分の顔をむぎゅっと押し出してきた。ちゃんと鎖骨辺りで腕を止めて、息苦しくならないようにしてる辺りすごいね。腕力ある。

「アタシも、あんまり言ってなかったわよね。お帰り、お疲れ様、ありがとう、香織」

「はは、どう致しまして、ただいま、ふーちゃん」

「……私も。お帰り、お疲れ様」

「うん、ただいま、ありがとう、簪ちゃん」

なんだろうね、この感謝&挨拶ラッシュ。

とりあえずそれが終わったところで私から三人が離れた。どうやらあれがやりたかっただけらしい。

「って、のほほんさんISの撤収作業は？」

「もう終わったよー？ 後はバスに乗るだけー」

「わかりました。それじゃあふーちゃん、簪ちゃん、また学校で」

「うん、また」

「ばいばい……」

各々自分のバスへと乗り込んでいく二人を見送った後、私とのほほんさんも揃ってバスへ乗り込み、そしてバスはIS学園へと動き出した。

……動き出した、んだけど。

『おつかしいなー、ラウラ、この空気は何？』

『一夏が、セシリア、シャルロットの二人に昨日の夜、ISを使用して追い掛け回されていたらしいです』

『また色恋沙汰か……。一夏も懲りないねえ。それで、今なんであんなに干からびてるの？』

『さあ？』

以上、ラウラと私のプライベート・チャネル個人間秘匿通信での会話でした。

ふむ、仕方がないな。

「一夏」

「ん、あ、なんだ？」

「喉渴いてるの？」

「干乾びそうだよ……」

本当に干乾びそうな声を出すね、一夏。あ、知ってる？ ミイラ
つて、木乃伊って書くんだよ。

出展は中学校の図書室にあった本。ミイラの歴史とか作り方とか
書いてあった。

「……お茶いります？ ありますけど」

「くれるのか！？」

「う、うん。零さないようにしてくださいね？」

「ありがとう！ お前は命の恩人だ……！」

私が渡したお茶のペットボトルをありがたそうに受けとると、な
ぜか一度拝んでから一気に中身を飲み干した。

そんなに喉が渴いていたのか……。もう夏も近いし、熱中症にな
るといかなよね。脱水症状は危険だ。

「た、助かった……！」

「大袈裟、じゃないか。暑くなって来てるし、水分補給は小まめにしないと」

「ああ、ありがとな香織」

「どういたしまして」

女子の声で騒がしいバスの中で、小さくお辞儀をしあう私と一夏。なんだけどなんだか三方から嫌な気配が……。

そんなバス移動も、まあ悪くはないかなと思った今日でした。

そして日にちはやや飛んで、八月入りしまして。

「疲れたあ……」

「涼しい……」

「……たれかおりん、たれりんいん」

簪ちゃん、人をたれパンダみたいに言わないでくださいーい。

まあ、今そんな感じになってるんだけど。

八月に入り、ES学園は遅めの夏休みへと突入した。そんな中、私達は今日ようやく三日間にわたる補習授業が終わり、少し遅く夏休みへと開放されたのである。

で、今は私の部屋で涼んでいます。のほほんさんは現在帰省中だそうで、暫くは一人部屋。

と言っても、夏休みの間は寮の規則も若干緩むらしく、寮長に申し出てさえいればお泊りなんかもオッケーだそうです。

……お姉ちゃんが入り浸る未来が見えるよ。

「それで、夏休みどうする？」

「とりあえず……、家の掃除かなあ。後は……梟の整備？」

「ほかにすることはないの！？ 前から思ってたけど、趣味とかないわけ！？」

「趣味？ ……おしゃれ、は違うな。主に楽しんでるのはお姉ちゃんだし」

趣味、趣味……。料理とか読書とか、機械弄りに二度寝？

「……なんか、辛うじて読書が引かかってるレベルよね。女の子より女の子してるじゃない……」

「……機械弄りは、いい」

「ああ、そうね、あんたはそういうんだっけ……」

「……お泊り？」

ん、なんだかお話が妙な方向になってきたぞー？

「香織の家に、お泊り……」

「それはいいわね。ラウラも誘いましょうか」

「あれ、ちよつとまって、なにこの流れ」

「お泊りと聞いて」

「お姉ちゃん天井裏から降りて来るのやめて」

すとなつ、と天井の一部を外して降りてきたお姉ちゃん。このぐらいでは驚かないですよ、ええ。
簪ちゃんは驚いてるけど。

「で、お泊りだね！？ いいとも、ぜひとも！ とすると寝る場所は香織の部屋か、オツケー任せなさい！ ただしやるのはいいいけどひに」

「お姉ちゃん、ぶつよ」

「すいませんでした」

「……力関係、分かってきたかも」

「奇遇ね、私もよ」

全く、お姉ちゃんは暴走するとこれだから……。普段はいいお姉ちゃんんだけどねえ……。

それはともかくとしてだ、何をしようか。

「夏休み……、海はもう行ったって言うか、当分行きたくないって言うか？」

「……毎回思うけど、そのお話は私に流れていいものだったの？」

「知らなかったのか……？ 束社長からは逃げられない……」

「大魔王ポジションなら仕方ないわね」

嫌な納得のされ方だけど、まあ魔王的なポジションだし。世の中引つ掻き回してるのは本当だし。

あ、ちなみに福音の話は束ちゃん経由でお姉ちゃんも知ってます。秘匿はどうしたって？ 束ちゃんもお姉ちゃんも機密云々は言われていないので、という屁理屈捏ねて相手に投げつけるらしい。酷い話だ。

そう言えば、銀行口座にはごそつと数億入ってるんだよねえ……。欲しかった本がたくさん買えるじゃないか、素晴らしいね。

「そう言えば、バインド・カンパニーのお給料ってどうなってるんだろう」

「あ、それは気になるわね」

「この前、ちよつと口座確かめたら……、なんか数字の桁がいくつか違つてた……」

「……え」

「泣くかと思つた」

「なにそれこわい」

「お姉ちゃんちよつと口座見てくるね！」

簪ちゃんの言葉に、お姉ちゃんが目を輝かせて天井から出て行つた。だから入り口から入つて入り口から出て行きなさいつて。まあ天井はちゃんと直して行つたようだけど。……まあ大概出鱈目なんだよね、お姉ちゃんつて。

ご近所さんで火事があつた時には単身炎の中に突つ込んで、火傷一つ、かすり傷一つ負わずに取り残されてた大人三人を救出したり。ビルで立てこもり事件があつた時にはショットガンやらマシンガンやらの弾丸を片っ端から回避、時にはそれを『素手で鷲掴み』ながら立てこもり犯全員をぶちのめしたりと。ちなみに、素手で掴む方法は『同じ速度に同じベクトルで同じ回転数に合わせて、円錐状に力を収めるだけ』と言つていた。意味分らん。

千冬さんも大概人間やめてる感じするけど、お姉ちゃんも大概だよな。同ランクと言うか、同じ匂いがするというか。

「で、どうするの？」

「とりあえず」

「メイド、喫茶？」

「@クルーズって言うんだけど、お姉ちゃん知り合いが経営してるんだ。どうせお金があるんだしさ」

「久しぶりに来たわね」。さて、食べましょうか！

「食べ過ぎると太るけどね」

「分かってるわよ」

「うん……」

はい、@クルーズでござい。ちなみに、今は私服に着替えているのです。万が一、ないと思うけど中学時代の友達に見つかってもいいように。

「あれ、お嬢様！？ どうしてここに！？」

「あ、店長さん。お久しぶりです」

「……お嬢様、ねえ」

「香織って……実は凄いやつが出たり……？」

「違う違う、お姉ちゃんの関係でさ。僕のこと知ってるのはあんまりないけど」

この店の店長さん、昔お姉ちゃんをつるんでいた人なのである。

しかも結構ぶいぶい言わせてたみたいなんだけど、お姉ちゃんに絡んで見事にぶちのめされてからお姉ちゃんに惚れ込んだらよかったらしい。……一時期、うちに住み込んでハウスキーパーみたいなことしてたなあ。

まさかあの頃は、店長さんやってたとは思わなかったけどさ。

「今日は一人の客としてきているので、お気遣いなく。あ、期間限定パフェ三つと……、あとアイスコーヒー、ミルクとガムシロで」

「私は……、紅茶を……」

「んー、サンドイッチセット、ドリンクはウーロン茶で」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

まさかの店長さん自らの接客の後、出てきたそれを三人揃ってパクつく。ふーちゃんは朝を抜いていたらしく、サンドイッチを平らげてからだった。

……それにしてもね？ 時折見える金髪銀髪と時たま聞こえるあの声は、どう考えても……。

「ラウラとシャルがいるわね」

「……バレないように」

「まあ、バレてもいいんだけどさ」

シャルを巧く丸め込めればいいわけだし。

それにしても、なんだってここでアルバイトなんか……？ まあいいけど。

向こうも忙しいせいがかこっちを向くことはない。そりゃあそうだ、ふーちゃんも簪ちゃんも私服なんだから。

ちなみに、ふーちゃんは普通のＴシャツにジーンズという動きやすさを追求したような格好。……少しはおしゃれしたらどうか。

簪ちゃんは、ちょっとはおしゃれしてるのかな。ワンピースにスカート。まあ暑いからね。仕方ない。

なんてことを考えつつ（ちなみに僕は決して変態じゃあないと言うことだけ言っておこう）、二〇分ほどが経過した頃。

「全員、動くんじゃないえ！」

ドタドタと店内に雪崩れ込んできた男達が、肩を怒らせ大声で喚いた。その手にあるのは、複数の火器。

直後、店内に響き渡る銃声に呼応するように甲高い悲鳴が上がる。

「きゃあああつ!?!」

「騒ぐんじゃねえ! 静かにしろ!」

などと喚きたて、ジャンパージーンズ覆面装備の典型的な強盗犯は更に銃を構え威嚇する。背中のバッグから紙幣が飛び出している辺り、何処かから強盗して逃げてきた末の立てこもりなのだろう。

ただなあ……。この人たち、分かっているのかな。ここでそういうことをすることのリスク。

考えながら強盗を眺めていると、外から拡声器によって音量を上げられた声が飛び込んできた。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちは既に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す」

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

うわあ、警察の方々、今の言葉聞いたら泣くぞ? 僕は知らないけど。

それにしても、迷惑だなあ。銀行強盗なんて、どうやったって捕まるってことぐらい分らないかな。分からないぐらいに追い詰められてるのが、それとも血迷ったのか。

まあどうでもいいけどさ。可哀想だけど、そう選択したのは彼らなんだし。

「ど、どうしましょう兄貴! このままじゃ、俺たち全員」

「うるたえるんじゃねえっ! 焦ることはねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

「う、うろたえるんじゃないッ！ ドイツ軍人はうろたえないッ」

いやあ、どうでしょうね。少なくとも僕はその『お約束^{セオリ}』をぶん殴って蹴飛ばして、煮て焼いて食い散らかす人を一人知ってます。身内で。

そして簪ちゃん、小さくぼそぼそと「」 ネタを入れないで。ただでさえゆるい空気が筋弛緩剤飲んだみたいになるよ。

「へ、へへ、そうですね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

そう言つて、一人の男がショットガンを無駄にリロードしてぶっ放す。バカだなあ、弾丸が減るのに。

そして割れる蛍光灯、上がる悲鳴。

「大人しくしてな！ 俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。分かったか？」

リーダー格らしき男の言葉に、コクコクとうなづく女性。ああ、可哀想に。

でもなあ、この三人は死亡フラグのお花畑を全力疾走してるような気がするんだよなあ。

「おい、聞こえるか警官ども！ 人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！ もちろん、追跡者や発信機なんかつけるんじゃないやねえぞ！」

声を張り上げ、自慢げに一発を外へ撃つ。幸い被害はないようだけど……、ちょっとむかつく。

というか、ISに乗るようになってから、ああいうものは更に脅

威に感じなくなっちゃった。ISの武器は怖いけど。

……それにね、争いは嫌いなんだよ。

「へへ、やつら大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」

「まっただ」

下卑た笑みを浮かべてそう言ってるけど、ごめんね。ここは違うんだ。

犯罪がないから平和なんじゃなくて、犯罪が出来ないから平和なんだ。この街に限っては。

と、店内でただ一人立っていたラウラにそこで注目が集まる。まあ、なんかあるんだろうけど……。

「なんだ、お前。おとなしくしてろって言うのが聞こえなかったのか？」

いらだたしげにそう喚くが、ラウラは一瞬銃へと視線を向けただけで済ませる。あれは、銃の種類なんかを確認したのかな。

「おい、聞こえないのか！？ それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないッスか！ 時間はたっぷりあるんスから、この子に接客してもらいましょうよ！」

「ああ？ なに言ってるんだ、お前」

ええ、僕も思います。強盗して逃亡する最中とは思えないね。

「だって、ホラ！ すっげー可愛いッスよ！」

「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」

……いや、それは貴方がヘタレなだけです。残念ながら。中学ではこの地域一帯のメイド喫茶全て制覇してた人もいたんだよね。よくやるよ、ほんと。

というかさ、これって物凄い油断してない？……やるか。このままでも大丈夫だろうけど、とっとと片付けた方がいい。

かさかさつと移動開始。決して隠密をしているだけで黒く光るあのおぞましい物体のようにではない。

ゆっくりと彼らの背後まで回る……、着いてしまった。警戒心無ツ！？いや、僕も大分こういう場慣れしてるんだけど、それ以上に油断しすぎだよ……。

じゃあとりあえず、身を捻るように、腰を入れて、全身を使うように、平手打ちっ！

「ぎいつ！？」

凄まじい音とともにその一撃がしっかりと入り、男の手から拳銃が零れ落ちる。

耳は外したけど、首と顎の接点辺りを狙ったかから首とあご外れたかな。

手早く落ちた拳銃と懐のもう一丁、弾丸一しきりを掠め取るように回収すると、呆然としている他の男二人のうち、ショットガンをもっている方の男の腕を後ろへ回して極め、銃口をそいつのこめかみへと突きつけた。

「動くな。動けばこいつの脳漿が窓の飾りになるぞ。ついでにお前の目玉のデコレーション付でな」

「ひ、ひいつ！？」

出来る限り冷たい声で言い放ってやると、ものの見事に情けない声を上げる人質。うわぁ。

ちなみに、さっきの平手打ちはお姉ちゃんの知り合いがよく使う技らしいんだけど……、お姉ちゃんに教えてもらった。凄い威力出るよね。その知り合いの人はコンクリートもやろつとすれば砕けるって。凄いね。

「そこのお前、銃を地面に置いて三步下がって腕を頭の上へ、うつ伏せになって地面へ伏せろ」

「テ、テメエ……！？」

「言う通りにしなければこいつの頭を吹き飛ばす」

「……ちくしょう……！」

銃を無造作に放り投げ、そのまま三步下がって言う通りに伏せた。よし。

同じように人質にしていた男も伏せると、サブマシンガンとショットガンを回収する。さて、これでお仕事終了、っと。演技も終了、意外と疲れるなあ……。

ちなみにこれ、おねえちゃんならもつと滅茶苦茶で、横暴で、最高に最短な始末を着ける筈だ。具体的に言つと、一秒で全員ノックアウトとか。そのぐらいなら一瞬で行える人だし。……ほんと、マジで死ぬんじゃないかなあ、なんて思ったときがあったけど。

お姉ちゃんのことに関しては『お姉ちゃんだから』で片付けることにした。精神衛生的な意味で。ああ、だから束ちゃんと通じ合えたのかなあ……。

「ふう……。さて、逃げようか」

『……今日初めてのセリフでなんですけど、カオリは相変わらずバカですね』

ぐさつと来る一言を聞きながら、私は屋根裏へ逃げることにした。……後で店長さんにお詫び言つとこつ。

後日このお話はお姉ちゃんに伝わり、お説教を喰らいました。そしてふーちゃんと簪ちゃんからは「今度また埋め合わせ」だそうです。

んー、でも意外だなあ。お姉ちゃんがあそこに出張ってこなかったなんて。

お姉ちゃん、出てきそうだったのに。

「香織、にしてもあんた凄いわね……。なんか、また動きに磨きがかかってなかった？」

「お姉ちゃんに振り回されれば強くなれるよ」

「遠慮するわ」

「……でも、危ない」

「うん、ごめん。でも、誰も傷つけないように、発砲させないようにするにはラウラがひきつけていたあの瞬間が一番だったんだ。ごめん」

それに、あそこで誰かが傷つくのは嫌だし、あのくらいの強盗なら僕も何度か片付けたことがある。お姉ちゃんの巻き添えで。

でもねえ、さすがに特殊部隊相手とかは無理だよ？ ああいうのは素人相手だから出来ることであって、特殊部隊とか、そういうちゃんとした訓練を受けている人には勝てません。無理だから。

「まあ、お姉ちゃんはやってるんだけどねえ……」

「香織？」

「ん、なんでもない」

……軍隊バーサスお姉ちゃんやって、勝ってるもんなあ……。揉み消されたけど。

そんな夏休みの日でした。ちゃんちゃん。……ヴァイオレンスだね、意外と。

第32話 帰還 そして夏休みの始まり！（後書き）

お姉ちゃん、おねーちゃん。

そういう回。お姉ちゃんやべえな、っていう回だったのに、香織が解決してしまった。

でも香織も体力とか腕力は普通の人間です、まだ発展途上ですから。まあ技術が卓越してるだけで。

お姉ちゃんのチーとつぷりはまた後で出てきます。……のんびりした回書きたいなあ。

ちなみに、今回出た香織の平手打ちは戯言シリーズから『匂宮出夢』の使う『一喰い』^{イーディングワン}をモデルにしています。本人は……、出しても深く関わらないんだよね。出さないけど。出してもしゃーなし。

うーん、戯言系でネタ帳に詰めとくかな……。

第33話 夏休みのとある日 不器用な黒（前書き）

今回は短いので注意。

第33話 夏休みのとある日 不器用な黒

夏休みが始まり、あの「@クルーズ事件」から少しして、私は屋上にて自主練に励んでいた。

屋上の端から端までを全力疾走、つまりペースを無視したシャトルランだったり、逆立ちしての腕立て伏せだったりと色々だ。

体を鍛えると言うことは、要するに体を虐めると言うことに他ならない。なら、こういう無茶な特訓の方が個人的には性に合ってる。普通の練習じゃあんまり効果なくなってるし。

「……香織、自主トレか？」

「ああ、ラウラ。おはよう、じゃないか、こんにちは」

屋上にやってきたのは、銀髪の綺麗な女の子。ラウラだった。そう言えば、ラウラとはあの@クルーズの一件以来話してなかったな。

「ああ。昼は食べたのか？」

「んー、あんまりお腹空いてないからいいかって」

「そうか。なら買ってこよう。何がいい？　ここまで持ってくるとなると、購買になるが」

「え？　い、いいよ別に！　私、あんまり疲れてないし、お腹空いてないし！」

「む、そうか……」

しょぼん、と俯いたラウラは、残念そうにぺたりと座り込む。

夏真っ盛りのこの時期、一〇分も全力で動けばジャージは汗でびしょびしょだ。

「……しかし暑いな。日本の夏と言つのは恐ろしいものだ」

「ドイツって夏はどうなの？」

「暑いときもあれば寒いときもある。午前中は暑くても、午後になつてから急に冷えだすと言うこともあるな」

「……日本のほうが楽そうだね」

間違いなく体調を崩すね、その気候だと。

体は頑丈な方だけど、内臓鍛えてるわけじゃないし。というか内臓って鍛えられるのかな。

「あまり根を詰めるなよ、倒れては元も子もない」

「わかつてる。そろそろ休もうと思ってたし」

「そうか。……それなら、私の部屋で休まないか？ 丁度シャルロットも出払っている」

「そう？ ならお邪魔するね」

疲れてだるくなっている体に力を込め、ぺたつと座っていたそこから腰を上げる。

この時間だと寮には余り人がいないし、ジャージ姿ならばれる心配もないだろうということで、この格好のままラウラの部屋へお邪魔することになった。

「お邪魔しまーす」

「先にシャワーを浴びたらどうだ？ 着るものは……、確かバスロブが中に入っていたから、それを着ておけ」

「……ホテル？」

「？ なぜ宿泊施設の名前が出る？」

「……あ、うつん、なんでもないよ」

決していやらしい想像をしたわけではありませんよ、ええ。

ついでに言うと、私が「される」側なんじゃないかな、なんて想像したりもしてません。Mじゃないし。

……あ、ちが、顔真っ赤になってない？ 大丈夫？ うう、自分で何言ってるんだ私……。

「ど、どうした香織!？」

「へっ!？ な、なんでもないよ!？ うん!？」

がしっ、とラウラの肩を掴み、ああ顔が赤くなってるんだろっなあ、などと思いいながらそう言い聞かせる。

私は変態じゃない、私は変態じゃない、私は変態じゃない……！
絶対、違っっ！

「……ね？」

「ひいいっ!？」

ラウラの情けない声を聞いてから三〇分ほどして、私はISSスーツの上にバスローブを羽織って、クーラーで風邪をひかないようにしてからラウラのベッドへと腰掛ける。前に尋ねたときにこっちのベッドだと言ってたから、場所は知ってる。

……ふう。うん、落ち着いた。

ラウラは私がシャワーを浴びている間に少し外に出ているらしく、テーブルに綺麗な形の日本語で「購買へ行ってくる。すぐ戻る」と書かれたメモが置かれていた。

購買、ね。気を使わなくてもよかったのに。

思案していると、ガチャリとドアが開いて、ビニール袋を片手に持ったラウラが入って来た。

「すまんな、遅くなった……、あ……」

「ん、おかえりなさいラウラ。どうしたの、ボーっとし、て……?」

ドサッ。

ビニール袋がラウラの手から落ち、持っていた彼女はぼんやりとした様子でこちらへふらふらと歩いてくる。

そのまま私の顔へと手を伸ばし、その指がゆっくりと私の頬を撫で上げ。

「ひゃっ！？　ちょ、ラウラ、何を　！」

「香織、好きだ……」

「え……」

嘘、ちょ、まってまってストップ、だめだって！？

なんて私の心の声は知る由もなく、ラウラは私の両手首をぐつと掴むと、お腹の辺りに片膝を乗せてこっちの動きを封じてくる。

どうしよう、力任せには動けないし、って言うかちょっと苦しいし。

しかもラウラの私を見る目がなんだか怪しい、って言うか熱に浮かされたような目をしてる。

「ラウラ、痛い……っ！　手、痛いよ……！」

「香織……」

「ら、ラウラ、ねえ聞こえてる？！　ラウラ！？」

駄目だ、まるで聞こえてない。

まるで当たり前のように私の首筋へと顔を埋めると、スンスンとその匂いを嗅ぎだす、って何してるの！？

ちよっと、ラウラってばあ！？

「あっ……！」

「ん、甘い……」

「な、なな、なんで、な、舐めっ!？」

「聞いたとおりだ……、甘い……」

「……ん？」

今、なんと言いましたかねこの子は。

聞いたとおり？ 誰に？

……よし。

「ふあっ……、ね、ねえっ、誰に聞いた、のっ？」

「ん、義姉上だが？ 香織は押しに弱いから、少し乱暴に押ししていた方がいいと」

おお、律儀に答えてくれてありがとう。おかげでなんでもこうなっているのか、大体の犯人がわかったよ。

というか、ラウラに何を教えてるんだあのバカ姉……！

とりあえずあのおばかなお姉ちゃんを叱るために、ラウラを押し戻す。

「そっか、ふーん……。ラウラ？」

「……は、はい？」

「お姉ちゃん、どこに行くって言ってた？」

「へ、部屋に戻る、と……」

「そっかあ……。ラウラ、戻ってきたらお仕置きね」

びくびくとしているラウラをベッドに押し付けて、こめかみをヒクヒクさせながらジャージを持って自分の部屋へ。

汗まみれのジャージを洗濯機へ放り込んで制服に着替えると、そのまま二年生のお姉ちゃんの部屋を訪ねる。

「はい？」

「お姉ちゃん、ちょーつとお話しよつか？」

「……あれ、香織？」

「ん、そうだよ？」

焦ったような声音ながらも、お姉ちゃんは扉の鍵を開ける。

私が扉を開けると、お姉ちゃんは大分後退した所でこちらを見ていた。

「さて、お姉ちゃん？ ラウラに変なこと教えたよね？」

「え、えーつと、な、なんのことかなー？」

「あはは、ごまかせると思ってる？」

「……思っていないで痛い痛い痛いっ！？ 香織、いたっ、痛い？！
アイアンクローは、駄目、痛いからっ！？」

「純真無垢な女の子に下世話なことを教え込むんじゃありま、っせん！」

大股数歩で近づくと、顔面を右手で掴みこんでアイアンクロー。
さすがにあればやりすぎというか、そもそもなんであんなったのか、全く検討もつかないんだけど。

お姉ちゃんは涙目になりながらもなんとか弁解を始めていた。アイアンクロー中に。

「だ、だって、ラウラちゃんがなんだか、不安そうだったんだよー！？」

「だからって、限度ってモノがあるでしょう！ あんなことを教えて、ラウラが変な勘違いしたらどうするつもり！？」

「ごめんなさーったい痛いっ！？」

「反省しなさいっ！」

一通りのお仕置きを済ませた私は、大きなタンコブを頭部に三つほど作っているお姉ちゃんをその場に捨て置き、ラウラのところへと戻ることにした。

それにしても、廊下は暑い。とつとと部屋に入ることになろう。

「戻ったよ、ラウラ」

「あ、ああ……」

「……もう怒ってないよ、ごめんね。私も大人気ないことして」

部屋に戻った私は、暗い表情でこちらを見るラウラにそう声を掛けた。

まあ、大人気ないことって言うか、突き飛ばしたことなんだけど。いや、押しのけたことなのか。

それはともかく、私はラウラの隣に座ると、彼女の頭を左腕で抱きかかえる。私の手が触れたとき、ビクリと彼女の体が震えた。

「ごめんね」

「……私の方こそ、すまなかった。幾ら義姉上の言ったことだからと言って、やっていいことと悪いことがある……」

「まあ、その、一回失敗したただだし、さ。あんまり思い詰めないで」

ぎゅ、っと彼女の体を抱くと、ラウラは甘えるようにこちらへ寄りかかってくる。

「……ねえ、ラウラ」

「なんだ？」

「今日、一緒に寝よっか」

「あ、いや、だが……」

「いいから。そうだ、ふーちゃんと簪ちゃんも呼んで、パーティーしよっか。きっと楽しいよ」

突発的な出来事ではあったけど、でもまあ、切っ掛けできてよかったかな。

そんな、夏のある日の出来事。ちょっと危険だったかもしれない、一日でした。

「……ああ」

第33話 夏休みのとある日 不器用な黒（後書き）

香織もちゃんと男の子してます、少しだけ。

ラウラのことは、今のところ妹とかそんな感じの感覚。背が小さいのも影響しています。

不器用なのです、二人とも。

第34話 夏休みのとある日 鉄の力

ラウラたちとのパジャマパーティーから数日が経ち、私達は全員揃ってアリーナへとやってきていた。

自主錬も兼ねた模擬戦である。ファーストシフトした梟の感触にもなれないとだし。

一夏、箒さん、セシリアさん、シャルロットさん、ふーちゃん、簪ちゃん、ラウラ、そして私。以上が今ここに集まっているメンバーです。

「それで、誰とやるの？」

「簪ちゃんかなあ？ ほら、『真打・鉄』しんうち くるがねも細かく見てないし」「ん……、わかった……」

そう言うと、簪ちゃんはピットでISを起動させる。一瞬の光と共に、簪ちゃんはその体をISで包み込んでいた。

「先行つてる……」

「はい」

その場から姿を消したかと思いきや、既にアリーナの中央に陣取って仁王立ちしている簪ちゃん。随分カッコいい待ち方ですね。

簪ちゃん、ISに乗ったら性格変わる人とかじゃないよね？

『ま、とにかく。行こうかイヴ、梟』

『はい』

頭の中で梟の鳴き声が木霊した直後、私の体もISに包み込まれる。

装備にかかる時間は0.3秒以下、相当時間の短縮が行えている。これもファーストシフトの恩恵なのだろうか。

「それじゃ、一番手行ってきます」

「ええ、行つてらっしゃい」

「負けるなよ」

負けたくはないけど、どうだろうなあ。頑張ろう。

ピットから飛び出して空中で姿勢を整える。空気が、一瞬で張り詰めたものへと変わった。

簪ちゃんは無言でこちらを見据えると、一瞬で右斜め下へと構えた手の内へ《朱鉄》あかがねを作り出す。

「試合、開始ッ！」

お互いの個人間秘密匿通信に流れたのはふーちゃんプライベート・チャネルの声。

それを合図に、私はあらかじめ展開されていた《夜鷹》よたかを広げ、
《夜鷹》よたかを振りかざし一気に加速する。

まだワンオフや武器特性を使うような状態じゃない。あれは奥の手、序盤に使うものではない。

一瞬すらも間に合わぬその一撃が互いの腕に衝撃を伝え、アリーナ内に盛大な金属音を響かせる。

互いの一撃の速度は同じであっても、その重量分《朱鉄》の方が衝撃は重い。その一撃の響きを受け流すように剣を引くと、もう片方の《夜鷹》で真横から切りつける。

それを反射的に《朱鉄》を盾にすることで防いで見せた簪ちゃんが、更にそれを回すようにして振りかざし、こちらへ切り込む。

ガギンッ！ 盛大な音と共に弾き返され、短時間で膨大となった熱量を伴って返しの刃が私へ迫る。

しかし、簡単に斬られはしない。

《夜羽》の耐物理装甲を重ねて防御、少々削られはしたがその程度ならば問題はない。

《夜羽》の羽は、ファーストシフトを終えたことで二枚から四枚に増え、その性能は二極化されている。つまり、背中から斜め上に浮いているのが耐物理、斜め下に浮いているのが耐エネルギー。両方が展開されているときには上と下で丁度『X』の形になっている。そしてその耐エネルギー装甲はビットにも転用できる。それが《夜羽》の力なのだから。

「飛べ　　ッ！」

指示よりも早く、私の思念を感じ取り《夜羽》がビットへとその身を変える。一瞬で簪ちゃんを取り囲むと、その鋭い先端から親指よりも少し太い程度のレーザーを撃ち出して行く。

このまま押し切れれば何よりも楽だ。だけど、簪ちゃんはビットを見てほくそ笑んでいた。何かやらかすつもりだ。

「鉄の武装が一つだと、私は一度も言っていない……！」

「……ってことは、まだ何かあるってことね」

「そついう……、ことっ……！　来て、《蒼鉄》！」

手に持った《朱鉄》を量子変換して収納せず、そのまま地面へ放り投げて突き刺すと、その名を呼ぶと共にその手に一振りの剣を呼び出した。

鮮烈に視界に張り付くその蒼が彩っているのは、一本の刀。しかし、その背部には横たわるように銃口が取り付けられていて、さながら剣を主体とした特殊な銃剣のような、むしろガンブレードとも呼ぶべき代物だった。

その刀、《蒼鉄》を一度振るった簪ちゃんの顔つきが変わる。海に行く前は、あれ程楽しそうな顔はあまり見れなかった。

楽しいんだ。ISと、自分の子供と一緒に戦えるのが。

「まだまだ、戦いは始まったばかり……！」

「その通りだよ。さあ、行くよ！」

「うん……！」

互いに継戦の意思を確認し合い、それからニツと笑みを浮かべてから切迫。

こちらのビットと一対の刃の猛攻を、簪ちゃんは片手に握ったその刃だけで凌いでいた。

振るい、切り払い、その刹那に幾度も引き金を引き、銃口から青い光を撃ち出してこちらのビットレーザーをことごとく撃ち落していく。

たった一本の刀でこれだ、なんと器用なんだろう。

刀の扱いは学んでいる人には及ばないかもしれないけど、簪ちゃんにはそれを補って余りある多様性がある。それをフルに生かした戦い方。

一つ一つを確認するのではなく、その感覚で感じ取る。言葉だけならまるで天才のようだけど、簪ちゃんはそれを努力で勝ち取り、宇宙で花開かせたのだ。

素直に凄いと思う。だから、答えなければならない。その努力に、その力に。

切り込んできた簪ちゃんの刃を耐物理装甲の羽で受け止めると、その背後へ向けてエネルギーを撃ち放つ。

それを簪ちゃんは上空へ飛ぶことで回避すると、更に回転して上空から切り落としてくる。

咄嗟に耐物理装甲で受け止めようとした直後、刀身が青く発光したのを見て真横に回避を試みる。無理な体勢からのそれを行ったせいで若干衝撃を受けたものの、辛うじて刃を避けることが出来た。

あの光……、違う。あれは物理装甲で受け止めてはいけない。

「よく避けたね……」

「光ったの見たからね。それ、BTエネルギーでしょ？」

「刃に纏わせてる……。装甲だけじゃ防げない……」

うわあ、私の装甲が進化したのが仇になってるなあ。

……仕方ない、こつちも使おう。出し惜しみとかしてられなさそうだ。

「じゃあ、こつちも本気で行くよ」

「……うん！」

「梟、イヴ、《バードエイクとりのさえずり》起動。平行起動、《夜鷹》武装特性、《ナイトホーク》」

ワンオフと《夜鷹》の武器特性を起動させ、姿を消す。同時にこちらの発生させる余剰エネルギーと相手のBTエネルギーをワンオフによって消滅させ、完全なステルスを得る。

「……来た」

『行くよ』

場所を悟られぬように音声はプライベート・チャネル個人間秘匿通信で伝え、一拍置く。

直後、無音で動き出した私は、最高速で簪ちゃんを切りつけた。

それと同時に全てのビットからレーザーを発射、装甲を削っていく。しかし、それでも撃たれたレーザーのうち、三分の一は斬られたり撃ち落とされたりしてしまった。

簪ちゃん、ドンドン強くなるね。うかうかしてられないや。

さあ、行くよ。

「すげえ……」

私、鈴の隣で、アホ面晒して口をぽかんと開けている一夏が言った。

まあ、確かに。簪の自作IS『真打・鉄』も、香織のファーストシフトした『梟』も、どちらも凄い。

でも、強いのはISだけじゃない。あの二人自身の技量も尋常じゃなく高くなっている。それも、今まで以上にだ。

簪は今まで溜めていたものを全て出し切れているような感じで、いわばようやく咲いたところ、といった所か。これほどまでに生き生きと戦えるほどに力を蓄えていたとは、全く背筋が寒くなる。

こんな逸材を、日本は候補生に留めていたのか？……なんとも、今更な話だ。私ももうあの国の候補生ではないのだし、別にどうでもいいか。

香織も、全く持って滅茶苦茶だ。

あの子は戦いが嫌いだ。争うのも、人を傷つけるのも。その香織がああして戦っているということには、ISが兵器じゃないことを証明することにも繋がる。

香織は、ISの声を聞いたと言っていた。最初は夢か何かだろうと思っていたけど、今の香織を見れば分かる。

あの子はきつと、ダンスをしているようなものなんだ。戦いではなく、互いを尊重し合い全力を出し切れるもの。世の中の大人たち、バカな女達が強欲丸出しで追い求めているISは、戦いの道具にしてはいけない。

だって、こんなにも楽しそうに、踊れる役者がいるのだから。それをISは楽しんでいる。だからああして動けるんだ。

……ほんと、凄いわよ。あんたたち。

「一夏、口閉じなさいよ」

「あ、ああ。わりい。けどほんとにすげえな……、東さんの会社の代表なんだろ、お前ら？」

「ええ。母さんの保護もしてくれるらしいし、断る理由なかったしね。大体、あの国も別に愛着あったわけじゃないのよ」

「そつか。しつかし、更識さんってすげえな。代表候補生ってやっぱり強いんだな」

感嘆してそう声をあげる一夏。

けどね、一夏。本当に凄いのは技量じゃなくて、簪のたった一つの才能なのよ。

そこになら、一から育ててしまえ。どれほど無能でも、突き詰めれば頂点へいける。その理論で繰り返された努力の結晶は、ただの天才では手に入らない最高の強さなんだから。

それに、簪よりも香織の方が凄い。別にえこひいきする訳じゃないわよ？ あの子、ここに入るまでまとにもISに触ったことなんてなかったっていうんだから。

東社長にISの講習を受けていたみたいだけど、知識だけではISは動かせない。長い時間を掛けて体に馴染ませないと、ISはちゃんと言うことを聞いてくれない。

けど、香織は違う。一夏もそうだけど、初めてISに触れてから半年足らずで私たちの領域まで辿り着いてしまった。あ、一夏はまだちょっと足りないみたいだけど。

「……悔しいな」

「何がよ？」

「どれだけいい機体をもたらたとしても、今の香織達に勝てる気がしない」

「……まあ、それがわかってるなら大丈夫よ。あんたはもっと強くなれる」

一夏の隣で落ち込んでいた箒にそう声をかける。

箒の第四世代型IS、『紅椿』は確かに強い。だけど、その使い手によってその性能は大きく左右される。

まだ箒は『紅椿』に触れて一月も経っていないのだから、そう思うのも仕方のないことなんだろう。私も、あんまり勝てる気がしないのは内緒だ。

「……私よりも、ビットの扱いに慣れているようすわ」

「それは、まあ。お疲れ？」

「優しさはないのですか？」

「次回の入荷をお待ちください」

セシリアに突っ込みとボケをかましてみると、セシリアは大きく溜め息を吐いて額に手をやった。

もう、せっかく私の優しさのパーセントくらいを見せてあげようかと思ったのに。品切れだけど。

でも確かに、香織のビットの扱いは圧倒的にセシリアよりうまい。まあ、多分香織のことだからビットの扱いとか考えてないんだろうなあ。使えるからそれでいいや、みたいな思考パターン時々あるし。

……まあとりあえず、もうちょっと観戦していきましょうか。

「……そこっ」

「っ！」

的確な射撃と斬撃によって二機のビットが落とされる。無論、あらゆるレーダーにも、視覚にも映らない状態だというのに。

あれかな、気配で斬ってるのかな。ビットにエネルギー向けられると、まだ出力の弱い《とりのさえずり》ではBTエネルギーの銃弾は掻き消せないし。

「そろそろ決める……」

ぼそりと呟いた直後、簪ちゃんは真つ逆さまに下へ、つまり急降下してから進行方向を上空へと引き上げる。

その手には、アリーナの地面に突き刺さっていた《朱鉄》がしっかりと握られていた。ああ、そういうことか。

「《朱鉄》、武装特性発動……。《紅蓮朱鉄》……！」

グレンノアカガネ

そう呟くように宣言した瞬間。

《朱鉄》の纏っていた熱気は瞬く間に深紅の刀身へと変化していく。熱気自体が、質量を持って刃へと変わっていた。

全ての熱が質量へと変換されて尚も続く熱量の増大に伴って、刀身が蜃気楼のように揺らいでいる。その大きさは、『真打・鉄』自身を軽く凌駕するほどのものだった。

「……それって、アリですか？」

「うん……。大剣はロマンで、この子は私の娘だから……」

そういうことではないと思うけどあれ喰らったら死ぬんじゃないかな。一応簪ちゃんもこっちの絶対防御とシールドバリアが復活したことは知っているから、あれ使ってるわけで。

ああ、無かったら死ぬ威力なんだ。あってもやばい気がするんだけど。

「振りかぶって……」

「っ！？ 梟、ワンオフ最大！ 《夜羽》武装特性、《ウィングカーテン》起動！」

咄嗟に出力を二極端に回す。

あれは回避できない。というか回避した瞬間に横殴りに斬られて終わる気がするから。

今の《とりのさえずり》では精々熱量を半減させるのが精一杯だけど、やらないよりはましだ。というか質量化する熱量を無限発生させるって、それどういう原理になってるのかな？ この辺溶けるって言うか消滅しない？ まさか、また束ちゃん新技術開発した？

……もう驚かないよ、私は。驚かないって決めたんだ。

《ウィングカーテン》は完全な防御型武装特性になっていて、《夜羽》四枚を共鳴させることで音の壁を作り出す。

ビットがない分やや厚さは落ちるけど、それでもやらないよりましだ。……ああ、また修復作業かなあ。

ごめんね、梟。これどうしようもないかも。

「叩き斬るっ！」

直後、私の眼前へ真っ赤な剣が迫ってきていた。

で、その後。

「香織、梟大丈夫？」

「あ、うん。そこまで被害は無いよ」

戦いを終えた私たちは、少々息を切らせながらそんな会話を交わしていた。

あの一撃で私のシールドエネルギーは全て持っていかれてしまい、私の負け。音の壁があっても衝撃でエネルギーが持っていかれてしまった。

ただ、あの一撃は戦闘が始まってから相当時間が経たないと使えない上に、一度使うと全ての熱を排熱してしまうため、もう一度溜めなおさないといけないらしい。そりゃあ、あんなの何回も打たれたら溜まったもんじゃないよね。

今回は《啄木鳥》使ってあげられなかったなあ。もうちょっと、高機動戦で当てる練習しないと。

「次は一夏とふーちゃんだっけ？」

「うん……。多分、鈴の勝ち」

『白式』は燃費悪いからなあ……。

それにしても、今回の敗因は時間のかけすぎだったのかな。他にも色々原因ありそうだし、もっともつとがんばろう。

もっとたくさん梟と飛びたいし、もっともつと強くなりたい。そうすれば私は、僕として生きられる。

「……はい」

突然、簪ちゃんが正座した自分の太ももをぺちぺちと叩いて言った。

……膝枕？

「……うん」

「……いいの？」

「うん……」

で、では、お言葉に甘えて。

簪ちゃんが痛くならないようにきちんと場所を動かして、そこに頭を置く。

……暖かい。なんというか、ぽかぽかするね。夏だけど。

「……香織、難しい顔してた」

「え？」

「さっき。あんまり、考え込んじゃ駄目」

そう言って、簪ちゃんは儚げな笑みを浮かべる。

……ん、よし。ありがとう、簪ちゃん。

そんな、ロマンを追い求める一人の少女との、とある日の夏の思い出でした。

第34話 夏休みのとある日 鉄の力（後書き）

ナチュラルに膝枕、香織ちゃんでした。

海の回でも出てきた『武装特性』ですが、完全なオリジナルです。簡単に言えば、武装専用のワンオフアビリティ的なもの。ワンオフと平行使用できるものもあつたりします。

発動条件はその武装を操縦者が完全に理解していること。なので、簪は『真打・鉄』の武装の武装特性は全て使えます。そろそろオリジナル機体の一覧作ろうかな。

夏休みも終わってしまい、これからは普通の投稿ペースに戻ります。というか進学のうんぬんがあるので、時間が取れないときもしばしばあるかもしれません。ご了承ください。

……簪がワンオフに目覚めず、一夏はセカンドシフトせず。まあ戦力的には五分五分かちょい弱いくらいですが、大丈夫なんだろうかな。今回は……、お泊り会かな？

第35話 夏休みのとある日 お泊り会！ 前編（前書き）

エロではなく萌えを。

最近エロ投入しすぎだなあ、と言っ心の声にしたがつて。

第35話 夏休みのある日 お泊り会！ 前編

またまた夏休みのある日のこと。

随分前に誰かさんが言った通りに、僕の家でお泊り会が開かれることとなった。

「食材は後で買出しするとして、ゴミは……大丈夫かな。寝る場所も確保したし」

現在、僕は自宅にてワンピースとスカートを身につけてせっせと皆を迎え入れる準備をしていた。

ちなみに、ワープ装置は小型化機能がつけられているらしく、小さなインテリア程度の大きさに縮んで部屋の隅っこに片付けられている。

この状態だと向こう側のワープ装置からこちらへ飛ぶことが出来ない。そりゃそうだ、危険だし。

さて、現在午前一時過ぎ、誰が最初に来るのかな？

ちなみに、来るメンバーはふうちゃん、簪ちゃん、ラウラの三人。他の人も呼びたいけど、正体知ってる人しか呼べないからね。

『ご機嫌ですね、カオリ』

「ん、まあね。ほら、お泊りってあんまり無かったし」

『……なんだか釈然としません』

「なにが？」

『別に、何も』

なんだか、イヴがむすつとしてるんだけど。……何か嫌なことでもあったのかな。

梟の一次移行が終わってからは、イヴはネットワークを辿って他

の場所へ移ったり、赤外線やらのデータ回線を通じて別の端末に移ったりできるようになった。普段は梟の中にいるけど。

そんなことを考えていると、ドアのチャイムが鳴らされた。

「はい、今行きますー」

玄関の鍵を開け、扉を開くとそこには、ラフな格好をしたふーちゃん。腰に手をやって立っていた。

荷物はスポーツバッグ一個と、お手軽装備。

「ああ、ふーちゃん。いらっしやい」

「お世話になるわよ、香織」

「わっ、突然どうしたのさっ!？」

「いいじゃないいいじゃない、ほら、婚約者のハグよ、はぐーっ」

突然僕に飛びついてきたかと思うと、ぎゅーっ。と僕を抱きしめる。な、なな、なにをしてるのかなこの子は!？

ふーちゃんはにひひ、と笑うと、振り子のように体を振って、器用に家の中へと飛び込んだ。しかも空中で靴を脱ぐと言う大道芸を見せ付けて。

「も、もう、ふーちゃんってば……。女の子なんだから、もうちょっと謹みをね?」

「いいじゃない、別に! それにさ、しおれたアタシはアタシじゃないでしょ」

「……確かに」

そう言われてしまうと、確かに頷くしかなかった。

しょぼくれたふーちゃんはふーちゃんとは言えないだろうし、みたくもない。ふーちゃんは元気の塊みたいな子なんだし、そういう

風に居てくれた方が、僕も嬉しい。

「ひゃー、涼しいわねえ。やっぱり日本の夏にはクーラーね」

「最近は気温も上がってるからね。麦茶入れるから、ソファア座つてていいよ」

「はい」

ぼふつ、とソファアに身を投げたふーちゃんを眺めながら、冷蔵庫で冷やしておいた麦茶をコップに注ぐ。ちなみに今朝作って冷やしておいたものだから、結構冷えてるのですよ。

「ん、ありがと。ん……」

コップを口につけて大きく煽るふーちゃん。汗の流れる喉が艶めかしくコクコクと動き、思わず僕はその仕草をじーっと眺めていた。……これじゃまるで変態じゃないか。まったく、なっていないぞ僕。

「つぶはーっ！ やっぱり夏は冷たい飲み物に限るわね！」

「一応寝る場所は皆で一部屋にしておいたからね。寝る順番は応相談で」

「りょーかい。それにしても、あのワープ装置一つ無いだけで大分見た目が変わるわね。転校してから初めてよね、香織の家に来たのって」

ふむ、確かにそのとおりだ。

というか、それ以来人をまともに上げていなかったりする。だからちよつと緊張していたりもするわけだ。

「お昼は食べちゃったし、日が高いうちは中でだらだらする？」
「皆がそれでいいならね。二人が来たら相談しようか」

「おっけー」

そんなことを話している間に、またもや玄関のチャイムが鳴る。はいはい、と返事を返しながらドアを開けてみると。そこには可愛らしい服装の簪ちゃんが立っていた。ちよっとオシャレしてきたのね……。

「いらつしゃい、簪ちゃん。どうぞ、入って」

「お、お邪魔します……」

「……キャリーケース……」

ガラガラと黒いキャリーケースを引いて上がってくる簪ちゃん。さっきのふーちゃんを見てる分、荷物が多いと感じてしまう。

「あ、来たわね。暑かったでしょ」

「すつごく……」

「今麦茶入れるね」

また棚からコップを一つ取りだして、麦茶を注ぐ。

それにしても簪ちゃん、出会ったころとはずいぶん印象が変わったなあ。最初のころは、こういうとあれだけど、ちよっと暗めの子だったのに、今はそれが大人しい、清楚という印象に変わっている。

「あとはラウラだけか」

「ねえ簪、今日は家の中でだらしない？ せつかく香織の家に来たんだし、出かけるだけならいつでも行けるでしょ？」

「ん……、それがいいと思う」

おおう、これはラウラが来ても数で押されるフラグが立っていませんか？ まあいいや、僕も外に出るのは面倒だし。

でも、家の中で何するのかな。ゲームはあんまりないし、テレビ
ぼーっと見るっていうのもなあ……。

「……あの、簪ちゃん？」

「なに？」

「なんで僕に抱きついてるんでしょうかね」

「なんとなく」

「あ、ずるい。私もー」

ああー、前からふーちゃん、後ろから簪ちゃんが僕をぎゅーっと。
普通なら嬉しいとか感じるんだろっけど暑いです。クーラーの恩恵
があっても暑くなってくる。

「あの、二人とも、暑いから」

「……むう」

「仕方ないわねー……」

名残惜しそうに離れた二人だったけど、なんで突然抱きついてき
たのか。というか簪ちゃんはそういうキャラじゃないんじゃないか
な。宇宙に行ってからなんか壊れ始めたのか？ ……宇宙恐るべし。
そういえば、まだ月面コロニーには行ってないな。あとで連れて
行ってもらおう。

なんて考えていると、またもやピンポーン。

「はーい」

ガチャ。

「はあい」

ボタン。

……おかしいな、なんであの人がここにいるんだろう。ほんとなんでなんだろう。なんで？

「ちょ、香織君！？ 見た途端に閉めるなんてひどいと思うんだけど！？」

「いきなり人の家に押し掛けてこないでくださいっ？！」

「えーっ？ 束ちゃんがオツケーって言ってたわよ！」

またあの人か。

というか、束ちゃんって呼んでるんだ。他の人はさん付けとか社長とかなんだけどね。

ということでナターシャさんでした。いきなり人の家に押し掛けてくるのはどうかと思うんですが？

「まあまあ、いいじゃない。ほら、お泊りの道具も持ってきたし」

「あ、泊るんですか」

「もちろんよ。先輩の家にお邪魔するのは後輩の務めなんだから」

「そんな話聞いたことないんですが」

「じゃあ今知ったわね、また一つ賢くなれたわよ」

ああ言えばこういうというのはなんとも、なあ。いや、楽しいしいい人なんだけど。

……まあ、仕方ないか。これで「ダメー」と追い出すのは簡単だけど、なんか嫌だし。

「まあ、いいですよ。どうぞ」

「わーいつ」

その言葉はあなたが発する言葉ではないのではないか。けど言ったら怒られそうだから言わないことにする。うん。で、再びリビング。行き来多いな。

「……え、っと、なんでいるの？ 福音の操縦者さん」

「え？ なんでって、押し掛けたから？」

「いやいや、そうじゃなくて！ アンタアメリカのテストパイロットでしょ！？」

「ん、ああ！ そういうことね。私、アメリカ抜けてBCに入っただけ。だから今は無国籍、アルカディア・？ 所属ってわけ。よろしくね、先輩方」

「……へ？」

ああ、束ちゃん。また連絡忘れてたね？ だからこういうことになるっていうのにもう……。

困惑している二人に、ナターシャさんがBC所属になった経緯を話すと、なるほどという風にうなづく。

「そういうことね。なら、これからよろしくね、ナターシャ」

「よろ、しく……」

「ええ、よろしく。それと今日はお世話になるわね、香織君？」

「はいはい、布団用意しておきますね……」

お姉ちゃんの部屋でいいかな、あそこ広いし。

ということで、さらに布団を引っ張りだすために、とりあえずリビングを出ることにした。

「で」

にたり、と笑う。きょとんこちらを見る鈴ちゃんと簪ちゃん。呼び方が以前と違うのは、束ちゃんとの差別化を図るためである。個性って大事よ？

「二人は香織君が好きなのよね？」

「そうだけど？」

「うん……」

「……むう、弄れそうにないか」

ここで少しでも恥ずかしそうに返してくれれば、全力で弄ったのに。でも仕方ないわね、うん。

しかし、香織君も幸せ者ねえ。こんなに可愛い子たちに慕われて。まあ、本人も好かれていることはわかってるみたいだし、というか婚約者らしいし。

「それで、何か進展させるつもり？」

「なにが？」

「だから、香織君との仲よ。さすがにヤツちやうのはまずいけど、ちよつとえつちするくらいならいいと思わない？」

「え、えつち……」

あら、簪ちゃんは初心なのね？ それに比べて鈴ちゃんはあっけらかんと、……あ、赤くなつた。二人とも初心、ってわけじゃなさそうね。鈴ちゃんはそういった類の思い出アリなのかしら？

「って、今日泊まるのはもう一人いるのよ？」

「なら四人で」

「やらないわよ!？」

「ジョークよジョーク、顔真っ赤にしちゃって可愛いわね」

まあ、半分くらい本気ではあったけど。ジョークが混じってるからジョークよ、ええ。

なんて話をしている間に、布団を出し終わったのであろう香織がリビングに入ってきた。銀髪の少女、ラウラと言ったか。その子と一緒に。

「もう来ていたのか。それと……、なぜ貴様がここにいる？」

「……ねえねえ香織君。ラウラちゃんはB Cに入ってないの？」

「東さんにそれ言ったら、嬉々として引き抜くと思うんですけど。」

中国、日本、アメリカときて次はドイツですか？」

「もう半分ゲーム感覚よねえ。ラウラちゃん、私は香織君の知り合いに聞いて泊りに来ただけよ、他意はないわ。アメリカも関係ないし、あなたたちの恋路を邪魔する気もないから、安心して」

ぼふんっ、とラウラちゃんの顔が赤くなる。あら、もっと初々しい子がいたわね。

ふふっ、楽しくなりそうだわ。

第35話 夏休みのとある日 お泊り会！ 前編（後書き）

誰が予想しただろうか、この段階でのナターシャおねーさんの登場を。

私は予想していなかった。

後編は皆でだらだらする様子や夕暮れ以降の皆の様子なんかを書くつもりです。

イベント……、起きるかな？

第36話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の前編！（前書き）

終わらなかった。

第36話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の前編！

お昼過ぎ。

皆揃ったところで、じゃあ何をするかと問われれば、何をしようかと返すほかないのです。

「なににする？」

「王様ゲームを」

「却下です」

ナターシャさんが提案するとなんか危ない気がする。こっ、アル
コール分的な意味で。

「じゃあ……、何する？」

「外には出たくないし……、あ、そうだ」

なんていいだして、ナターシャさんがISの格納領域から何かを
量子変換して取り出す。

……え、マット？ これはどこかで見たとあるんですが。

「ツイスターゲーム！」

「ぶふう！？」

「それは……、ちょっと」

「香織君と絡めるわよ」

「やる」

「あれ、簪ちゃん！？」

「よし、ラウラ。テーブル片すわよ」

「お、おう」

ふーちゃんとラウラが、立ち上がってテーブルを片していく。あれ、皆やる気満々なのかな？

あー、これ押し切られそうな気がするんだけど。

見る間にあれよあれよとマットが広げられ、なんということでしょう。そこにはあつという間にツイスターゲーム会場に。

「え、ほんとにやるんですか？」

「もちのろんよ！　ちなみに、お姉さんはやってもおいしいところがないので、ルーレットを回しまーす」

「ちよっ！？」

「狭いし、二人ずつで行きましょうか。簀、ラウラ、じゃんけんして勝った人が最初に香織とやるってことで」

「ん……」

「いいぞ」

じゃんけんけんぽーん、ということでは最初は鈴ちゃんに決定しました。どうやら、僕は三連続らしいです。

なんでこんなことに……。

「はい、じゃあ行くわよー。二人でじゃんけんして、負けた方から入ってね」

「……じゃんけん」

「「ぽん！」」

グーで負けました。うわっ、ふーちゃんものっすごい勝ち誇った顔してる。うわあ、可愛いけど憎たらしい。

あとナターシャさんが満面の笑みでルーレット回してるんだけど。

「はい、じゃあ香織君は……、左足を緑に置いてねー」

「は、はあ……」

とりあえず最初の一回なのでぼすつ、と。

「次、鈴ちゃんね。えーっと、右手を黄色に置いて」

「はい」

「香織君、左手を赤に」

「よっ……、と」

既に体が引き伸ばされているんですが。赤と緑って端と端なんですけど。

「鈴ちゃん、左手青ね」

「ほっ」

「香織君、右足赤」

「なっ！？ くぐっ……！」

ぐおおおっ、き、きつい……！ 予想外にきつい……！

「鈴ちゃん、右足緑」

「まだ、大丈夫ね……！」

「香織君、右手緑」

「なああっ！？ っと、お、ぬっ！？」

で、三〇分後。

「はあ、はあ……」

「き、きつかった……っ！」

「んー、中々エロ、じゃなかった。良かったわよ、二人とも」

エロって言いかけてますよ。

とりあえずふーちゃんとのツイスターゲームは終わったけど、もう汗だくだく。最後のほうはくんずぼぐれずだったし、なんかふーちゃん幸せそうに笑ってるし。

あ、ちなみに勝ちました。ほんと、これ結構しんどいんだけど。

「じゃあ次、ラウラちゃんと香織君ねー」

「……マジですか」

「……」

「おーい、生きてるか少年」

「……ご飯、作る体力がありません」

「あははー、ごめんごめん。ちょーっと調子に乗りすぎちゃった、かな？」

三人分のツイスターゲームを終え、僕はその場でうつぶせにぶっ倒れていた。

三人ぶっ続けって、これ無茶苦茶だと思うんですけど。汗凄いし……。

「っていつか、三時間ぶっ続けでやらされた僕の身にも、なつてく
ださいよ……」

「だからごめんって。そうだ、今日は私が作るわ、材料はあるんで
しょ？」

「あります、けど」

「じゃあ任せて。これでも基地では料理の上手いお姉さんとして知られてたのよ？」

本当かどうかは知らないが、そういうことなら任せてもいいかな。こうなってるのはナターシャさんのせいでもあるし。ほんと、もう動くの辛いです。

念のために、頭を動かして横に倒れている三人に尋ねる。

「……皆、それでいい？」

「あー、アタシらは文句言える立場じゃないので」

「同意……」

「ああ、それでいい」

「よし、決定ね」

ダルそうに答えた三人の言葉を聞いて、ナターシャさんは嬉しそうに答える。

まあ、食べられないものじゃなければ食べるし、今は贅沢言っていられない状態だからいいんだけど。

……あー、お風呂洗わなきゃ。

「ちょ、大丈夫なの香織？」

「お風呂洗ってくる……」

「ああもつ、それならアタシがやるわ。香織は休んでて」

「でも……」

「倒れたりしたらまずいでしょうが。いいから休んでなさい、アタシたちのせいでもあるんだし」

いや、でも家主が家のことをお客さんにやらせるのはまずいと思うんだけども。

ただなあ、体が恐ろしくだるいのも事実なんだよなあ……。

「……じゃあ、お願いできる？」

「もちろん。それじゃあ行ってくるわね」

「香織は、任せて……」

「ちゃんと見ているから、心配するな」

簪ちゃんとラウラに見送られ、ふーちゃんは家のお風呂を洗いリビングから出て行った。

あー、もう動く気力も体力もないです。

「ところで香織君、今日のメニューは何にするつもりだったの？」
「肉じゃがでも作ろうかと思ってたんですけど……、作れます？」
「もちろん。日本でいうお袋の味なのよね、肉じゃがって。よく練習したわ」

ナターシャさんって意外と料理好きなのかな。

エプロンが普通に似合ってるし、って言うかそのエプロン僕の人ですが。

「いいじゃない、減るもんじゃなし」

「ナターシャさんって、結構明け透けって言うか、大雑把ですよね」
「余裕のある大人の女性と違ってちようだいな。そうだ、簪ちゃんちよっと一緒に手伝ってくれない？」

「私……？ いいけど……」

「ありがとねー。じゃ、ちよっと作ってくるわね」

そう言っ、ナターシャさんは簪ちゃんを伴ってリビングを出て行った。

と、不意に背中がぐいっと押された。

「ふむ、随分凝っているな。どれ、マッサージでもしてやろう」
「あ、ありがとラウラ……」

うわっ、物凄い気持ちいい。そういえば、あんまり他人からマッサージされたりってなかったな。
……なんか、眠くなってきた。ちやった。

「ふわあっ……」

「眠いのか？ 晩御飯が出来たら起こすから、眠いのなら寝ていてもいいぞ」

「でも、ほら、家主がお客放置っていうのは……」

「普段頑張っている報酬とでも思っておけ」

「……じゃ、じゃあ、ちよっとだけ……」

「ああ、お休み香織」

はい、お休みなさいラウラ。

む、どうやら香織君は眠ったみたいね。
手ごろな大きさに野菜を切り分けながら、隣で野菜の皮むきを手伝ってもらっている簪ちゃんに声を掛ける。

「ねえ、簪ちゃん」

「なんですか……？」

「香織君のどこが好きなの？」

ぼふんっ、と簪ちゃんの顔が真っ赤に染まった。どっちかって言うど茹で上がった感じかな？

「え、えっと……、優しいところとか、カッコいいところとか」

「つまり全部、と」

「……はい」

ほっほー、愛されてるわねえ香織君。もうベタばめじゃない。鈴ちゃんに簪ちゃんにラウラちゃん、お姉さんもべったりみたいだし？ まあ、私は可愛い先輩みたいな感じかしらね。それにあの子の恩人でもあるわけだし。

「そうかそうか、なるほどねえ」

「あ、あの、ナターシャさん……は」

「ん、なに？」

「東社長のところについて、良かったと思ってます、か？」

おや、意外にまじめな質問ね。

……元々束ちゃんがちょっとかい出さなくても危険だったってことだし、それを学生に止めさせようとしたうちの連中にもちよつと愛想尽きちゃったしね。言いだしっぺはIS学園の方だって話だけど、それだって普通止めるでしょ？

「まあ、良かったと思ってるわ。それに、私は元々アメリカって国自体に執着はないのよ。新しい職場は可愛い女の子が一杯いるし、社長は楽しいし、おまけに宇宙よ宇宙！」

「宇宙は……いい……」

ISは元々宇宙で使用するパワードスーツ的な意味合いが強かったみたいだからね。束ちゃんも元々はそういう風に関わったみたいだし。

「それに、あの子も助けられたから。簪ちゃんのISは宇宙で作ったんだっけ？」

「うん……。でも、まだまだ試作品の段階、完成ではあるけどまだ改良できる……」

「そう。なら、もっともつと頑張らないとね」
「……うん」

ん、本当にいい子だね、この子は。
香織君は幸せ者だ。

「さて、それじゃあパパッと作っちゃいましょうか！」
「うん……！」

頷いて、ぱあっと笑った簪ちゃんは、なんとも可愛らしかったことだけは確かだ。

こんな可愛い子に慕ってもらえるとは、全く香織君は幸せ者だ。全く。

「ごちそうさまでした」

合掌して、それから息を漏らす。
ナターシャさんの作った肉じゃがは、予想以上の出来だった。

「ふふん、どう？」

「ええ、とても美味しかったです」

「でしょう？ 私だってふざけてるだけじゃないもの」

「お風呂はもうできてるから、順番に入っちゃいませよ」

お風呂かあ……。湯船に浸かったのは臨海学校以来だな。ゆっくり浸かるうつと。

「香織、先に入ったらどうだ？ 疲れているだろう」

「いいの？」

「たまのお風呂なんだから、一番風呂はいんなさいよ」

「……ん、わかった。ありがとね」

みんなの気遣いに感謝しつつ、パジャマとトランクスを持ってお風呂へ行くことにした。

いやあ、ブラジャーつけなくてもいいって久しぶりだ。

リビングを出て一度自室へ入ると、寝巻きを持ってお風呂へ。おお、綺麗に洗われている。というか、僕はどれくらい眠っていたんだろうか。

「イヴ、僕どれくらい寝てた？」

『ざっと三時間です』

「えっ、あの肉じゃが仕込みに三時間も掛けたんだ……。だからあんなに美味しかったんだ」

って、そうじゃないそうじゃない。

僕三時間も寝てたのか。どれだけ疲れてたんだ……。

「と、とにかく、先にお湯頂いちゃおっと」

服を脱いで湯船へ。

おおー、久しぶりの我が家のお風呂……！ 一時帰宅の時は時間がなくて入れなかったからなあ……。

「うあー……、気持ちいいー……」

『そんなに気持ちいいものですか？』

「んー、まあねえー……」

『快樂ですか』

「どっちかって言うとか心地良いの方ね」

なーんかイヴは突然変なこと言い出すなあ。いや、快樂って聞いてそういうこと思い浮かべちゃう僕も僕んだけど、ホラ、最近立て続けに色々起こって疲れてるんだよ。うん。

……あー、気持ちいいねえ……。

思えば、随分遠くまで来たもんだ。

束ちゃんと出会ってから、色んな人と友達になって、幼馴染にも再会して、許婚が三人も出来て。

しかもとうとう宇宙進出、どたばただけど楽しい日々だ。

もちろん、楽しいことだけじゃないことは分かってるけど、それでも。今このときを大切にしたいと思うのはいけないことじゃあないはずだ。

……うん、大丈夫。まだまだ頑張れるぞ、僕は。

「イヴ」

『なんですか？』

「もう少しだけ、僕についてきくれる？」

『……もう少しだなんて、今更ですね。何処までもついていきますよ。それが私なんですから』

「……ありがとう、イヴ」

なんだか、しんみりしてしまった。
まったく。

第36話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の前編！（後書き）

場面転換がごろごろ来てますが、次回で夏休み編が終わりです。
お風呂回、香織だとしんみりしてしまう……。。

第37話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の後編！（前書き）

遅れました、後編でございます。

まあ、大した事件はございませんが。

第37話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の後編！

夜である。

全員お風呂にも入り終わり、僕らはリビングに布団を敷いて雑魚寝することになった。

ちなみに、ナターシャさんは「若い皆のお邪魔になるといけないから、葵ちゃんの部屋で寝るわね」なんて言って、お姉ちゃんの部屋に引っ込んでいった。

……何を期待しているのやら。

「じゃ、電気消すよー」

パチンツ、と電気を消してから皆を踏まないようにして布団へ戻る。

……どうしよう、ねむれないな。昼間に結構眠ってしまったから、まだ眠気がこない……。

「むう、どうしようか」

さすがに眠れないと困る。夜更かしというのも悪くないけど、一人だけ夜更かしするのもなんだか寂しいし。

「どうしたのよ、香織」

小さくぼそぼそとふーちゃんが話しかけてきた。ちなみに、寝方は僕とふーちゃんが隣同士、僕の頭の上に簪ちゃんの頭があつて、その横、ふーちゃんの上にラウラが寝ている。

どうやら簪ちゃんはすでに寝入ってしまったらしいく、すやすやという寝息が聞こえてきていた。

「ん、ほら。お昼にちよつと寝ちゃったから、そのせいで」

「眠れないの？」

「お恥ずかしながら」

「まったくもう……。ん、しょ、と」

小さく溜め息を吐いたふーちゃんは、もぞもぞと布団の中で動いたかと思うと、僕の布団の中へと入ってくる。

…… って、ええっ!？

「ちょ、ふーちゃん!？」

「ん、暖かい。ほら、あんまりさわいじゃ駄目よ、簪ちゃんが起きちゃう」

「え、あ、う、うん……？ って、そうじゃなくっ んぐっ!？」

たしなめられても尚声を上げようとしてしまった僕が、不意に口を噤む。

正確には、口を開いた途端にそれを止められた。

ぬるりと、口内に生暖かく、柔らかい感触が進入してくる。何をされているのか、分からなくなった。

「ん、ちゅ、んあ」

「?!」

耳を打つふーちゃんの声に、今自分が何をされているのか気づく。気づきはすれど、どうすればいいか、まるでわからなかった。

ぴちゃぴちゃと、口の端から漏れる液体が音を立てて気泡を作る。潤んだ瞳でこちらを見るふーちゃんの顔は少し赤らんでいて、それが妙に艶めかしい。

「……ぷはっ」

「……え、と」

「驚いた？」

ふふつと笑うふーちゃんが、妙に大人っぽく見える。

……えーつと、今僕はキスをされたのかな？ え？

「ほら、早く寝ましょ」

もう一度笑い、ふーちゃんはそう言ってから目を瞑った。

そんなことを言われても、その、ドキドキして眠れないんですが
！？

「……そう、ありがとうたちん」

『んーん、いいよ別に。葵ちゃんの頼みだしね』

電気もついていない、暗い部屋の中で私はモニターの向こうの束
社長に頭を下げていた。

用件は、束社長も掴んでいた情報。私の父に関することだ。

「このこと、香織には……」

『わかってるよ。まだしばらくは言わない。けど、いつかは知らなければならぬときが来る、それはわかるよね』

「……ええ」

『ん。それじゃあ、私は戻るからね』

「手間取らせて御免なさいね」

こちらを気遣うような笑みを浮かべるたっちゃんは、小さく頷いてディスプレイから姿を消す。

本当に、あの人には頭が上がらない。

私には力がある。だけど、情報操作うんぬんになると、私の力は途端に弱くなる。だから、あの人の力がどうしても必要になる。

ドアの近くまで行って部屋の電気をつけると、ベッドに腰掛けてから大きく息を吐き出す。同室の子は祖国へと帰省していて、今の部屋には私一人だ。がらんどうな部屋に私の視線が満たされて、私はどこか遠くへ行ってしまうような錯覚を覚える。

その錯覚のような感覚に吐き気すら覚え、いつから自分はロマンチストになったかと己を嘲笑するように口の端を吊り上げた。

ベッドの脇に立て掛けられている日本刀を鞘から抜くと、切っ先を腕に当ててずっと滑らせる。痺れるような感覚とともに皮膚が切り裂かれ、切れた血管から溢れ零れた赤い血液が腕を伝っていく。

しかし、それはほんの数秒。強い酸性で焼けるような音とともに皮膚についた傷が元に戻っていき、血液はあつという間に蒸発する。いつからか人間という種から離れ始めた私の体の、証明だった。

けれど、これを恨んだことはない。この体があってくれたから、私はここまで香りを守ってこれたのだ。世界は優しくない、だから力が必要なのだ。

刃を鞘に収めると、不意打ち気味に再度抜き放って天井を切りつける。無音とともに放たれた斬撃が天井に大きな傷跡を残し、上の階の床とこの天井の隙間にあつた何かを、その熱量で持って蒸発させる。

誰かに見られていた。あんな狭いところにわざわざ忍び込ませられるのは、私の知りうる限りあいつしかない。

現生徒会長、更識楯無。さらしきたてなし

暗部に対抗するための暗部、更識家の現当主であり、学園最強と謳われる少女。自由国籍権を持ち、ロシアの国家代表を務めている。……だが、それだけだ。

IS名は『ミステリアス・レイディ』、ナノマシンで構成された水を自在に操るといふ。さっき切り伏せた感覚はまさしく水だった。

「私のことを調べている、か」

くだらない。高々暗部の小娘程度が私を調べたところで、目ぼしい情報など出てくるわけもない。

だが。もしあの子たちに手を出そうというのなら、私は貴様を殺そう。一切の油断なく、一欠けらの慢心なく、全力をもって。

それだけの力が私にはあり、それだけの覚悟も私にはあるのだから。

カチン、と音を立てて刃を鞘へ再び戻すと、そばに立てかけ直してから息を吐き出す。どれ、少し私に目を向けておくか。

制服のままで部屋から出ると、三階へと上がる。向かうのは更識楯無の従者の元。

三階にいる二年生が珍しいのか、寮にいた三年生たちは揃ってこちらを見る。それを無視して彼女の部屋の前までやってくると、軽く扉をノックする。

「どちらさまでしょうか」

「えっと、二年の一之瀬と言います。のほけ布仏先輩に折り入ってご相談があるんですけど……」

「……どうぞ、入ってください」

気弱な少女が思い切って話しているような、やや震えた声を部屋の中へと投げかけると、件の先輩は静かにそう告げて扉を開けてくれた。

ポニーテールで眼鏡をかけた、一つ上の女性。布仏虚^{うつほ}、三年整備科のトップであり、香織の友達である本音ちゃんのお姉さん。そして、更識楯無の従者。

中に入ると、きれいに整頓された小物や掃除の行き届いた台所が目に入る。綺麗好きか。

「ルームメイトは帰省中ですから、今は私だけです。今紅茶を淹れますから、手前のベッドに座って待っていてください」

「あ、はい。すみません、突然押し掛けて……」

「熱心な後輩の相談をにべもなく断るほど、私は冷血ではありませんから」

にこりと微笑んでから、台所で紅茶を淹れ始める虚先輩。一応は警戒しているらしいが、それでも気を緩めている。どうやら、偵察用の水が消去されたことはまだ伝わっていないらしいかった。

紅茶のいい香りが、すでに部屋中に流れている。そんな中で、虚先輩は両手に自分と私の分のカップを持ってベッドの傍の寝台に近づいてきた。

「それで、どんな相談？」

「えっと、その……」

「言いづらいこと、なのかしら？」

気遣わしげにそう言った虚先輩が、カップを寝台に置いたのを確認すると、虚先輩の喉元を片手で思い切り圧迫、気を失う寸前まで追い込みながら脱力した体を私の座っていたベッドへと押し倒した。

「な、にを」

「喋るな、動くな、奇妙な動作をすれば殺す。わかったか」

殺気を進らせ、目を細めて彼女の両手を頭の上で抑えながらそう伝える。

こちらが本気だと分かったのか、虚先輩は体の力を抜いてこちらを睨みつけた。

「私の言ったことを、一字一句違わず更識楯無に伝える。『一之瀬香織とその周囲の人間に手を出すようなら、容赦しない』と」

「……あなたは」

「確かに伝えたぞ」

「ぐう　　っ!？」

一気に首を締め上げて意識を落とすと、掛け布団を掛けて衣服の乱れを直しておく。

あまり、こういうことはしたくないんだけどね。向こうがその気なら、それ相応のやり方つてものがあるのだから、それをわかってもらわないと。

「……まあ、ごめんなさいね。先輩」

小さく謝ってから、部屋を出た。

……まったく、嫌な女だな。私は。

「ん、ふわぁー……」

目を覚まし、大きく欠伸をかましてもぞもぞと布団から顔を出す。隣に見えているのは、ぐっすりと眠り込んでいる香織の顔だった。昨晩の自分の所業を思い出し、少しばかり頬を赤く染めながらもニヤニヤとした笑みを止められない。

「……えへへ」

ぐにゃあ、と蕩けた笑いを浮かべ、それからぱつと手で口を押さえた。

私は朝のこの静寂が好きだ。まだ時刻は五時を少し回ったところだから、誰も起きてきてはいない。

普段の香織ならこの時間には起き出しているらしいけど、昨日は寝るのが随分遅かったからなのか、香織はまだ夢の中だ。

少しだけ眠っている香織に擦り寄って、それからぎくりと体を止める。何か、視線が私の頭に突き刺さっている。

「……簪」

「……おはよう、鈴。なに、してるの？」

『えっと……、くつついてる？』

にこつと笑って、寝ぼけ眼ながら鋭い視線を向ける簪に笑みを向けてみる。

ジト目。我撃沈セリ。

『ずるい』

『あ、う、ごめん』

『ちなみに、昨日は香織とキスをしていたぞ』

『ら、ら、ラウラ！？ あんた起きてたの！？』

『無論だ。寝たふりをしていた』

ドヤ顔で言い放つラウラに、軽く殺意を覚えた。

ちなみに、香織を起こさないように全員個人間秘匿通信プライベート・チャネルで会話しているのは当たり前だね。

と、簪がぶくーっと頬を膨らませている。なにこれかわいい。

『私もしたい』

『だめー。私だけ香織にアピールしてないんだから、それぐらいいいじゃない』

『ふむ、まあ簪は料理でアピールしたし、私もやることはやったかな。仕方あるまい』

『……わかった。仕方ない』

分かってくれたみたい。

本当は香織がお風呂に入っているときに乱入しようかとも思ったけど、それは幾らなんでも可哀想だからやめたんだし。

「んう……」

隣から聞こえた可愛らしい声に、思わず目じりを緩めてにやにやとした笑いを零してしまう。

ああもう、可愛いなあ……。

お泊り会はその朝で終わり、ナターシャはワープ装置で会社へ、私達は揃ってIS学園へと戻っていった。

ちなみに、その間香織の顔がやや赤かったのは、きっと私たちしか知らない秘密である。

第37話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の後編！（後書き）

今回で夏休み編が終了し、次回からは五巻の内容に入っていきます。
お楽しみに！

第38話 二学期開始 ゲームスタート（前書き）

今回はちょっと短め。

その分早くあげりましたが。

第38話 二学期開始 ゲームスタート

二学期である。

暑さも和らいできた九月三日、私たち一組と二組は合同授業を行っていた。

「でやあああああっ!!」

上空高く、一夏とふーちゃんが互いのISを纏って対峙する。互いに闘気は十全だが、シールドエネルギーは一夏の方が削られていた。

「くっ……!!」

「逃さないわよ、一夏! 最初にシールドを使いすぎたわね!」

「まだまだあっ!」

一夏の振るう刃にも既に輝きは無く、戦況はふーちゃんに有利に傾いていた。

「ムダっ!」

《雪片式型》の刃を《双天牙月》で受け止めると、押し返し様に《龍砲》を撃ちこんでいく。

そして、少し離れたところで《双天牙月》を投擲、追撃すべく加速して上空を縦横無尽に飛んでいく。

「どっせええええいいい!!」

「ぐふおあああ!??」

空高くに上がったふーちゃんは、太陽を背に一夏目掛け飛んで行き、途中でPICをカットして重力も加算した蹴りが炸裂した。決りこむようなその飛び蹴りがうまく決まり、更に後方へと吹っ飛んだ一夏目がけて、ふーちゃんが止めとばかりに龍砲を乱射。残り少なかった『白式』のシールドエネルギーを完全に削りきっていた。

そして、その後。

「夏が終わったといっても、まだまだ暑いですわね」

「今年は残暑もきついつて言っていましたからね」

「でも、校内はクーラー付いてるから座学のときは楽よねー」

更衣室で着替え終えた私とふーちゃん、そしてセシリアさんは連絡通路のところで皆が出てくるのを待っていた。

連絡通路にはなぜかクーラーが入っていないんだけど、かといって更衣室にいと六〇人近くいる皆の邪魔になるから出てきたのです。

「それで、セシリアはなんか一夏と進展あったの？」

「へっ!？ あ、や、べ、べっになにも、ありませんわっ!？」

「……あつたのなかったのか、判別が難しい」

「いや、これはあつたわね。夏休みに何したのよ？」

「その……、一夏さんに手料理を振舞う機会がありました。まあ、箒さんやシャルロットさんも一緒だったのですが、美味しいと言ってくださって!」

……まって、セシリアさんって相当料理下手じゃなかった? 一夏……、どんまい。

とっても嬉しそうなセシリアさんの名誉のために、口には出さな

いことにしよう。うん。

「そ、そうなの、ヨカッタワネー……、アハ、アハハハー……」

ふーちゃんの固まった苦笑いが、むなしく響く。

『セシリア・オルコットの料理はそれほどなのですか？』

『……典型的な料理下手だと思う』
『それはそれは』

「ご愁傷様です、と後に続けそんな雰囲気のイヴでした。

少し三人で話していると、皆に混じって着替え終わった篤さんとラウラ、のほほんさんが更衣室から出てきた。

「あ、皆さんお疲れ様です」

「ああ、お疲れ様。そう言えば、今日の午後から新しい先生が赴任するらしいが……、何か聞いてないか？」

「いえ、私は特に。皆は？」

反応、なし。ふむ、一体誰だろうか。二学期頭って、確かにキリがいいところだけど。

それにしても……、一体誰なんだろう。本当に。

「ま、いつか。皆さん、ご飯行きましょうか」

「さんせーい」

一夏も誘ってね。

香織達が昼食を楽しんでいる頃、簪は一人四組でISの簡易調整に勤しんでいた。

（エネルギーバイパスの数が三倍になってる……。休暇中にコロニーで訓練したのが影響してるのかな。建設地の環境にも影響されたりするかもしれない、色々調査する必要があるかも。《朱鉄》と《蒼鉄》以外にも開発中の武装はあるし、エネルギーの割り振りを考えておこう。装甲の数は現状維持、必要に応じて展開装甲に変更するとして、射撃兵装に回すエネルギーは別種に確保しておいた方がいいかも。とすると、別途のエネルギーパックなんかもありかな）

時間が惜しいため食事は一〇秒チャージで済ませ、『モータータイプ』を簡易起動モードで起動すると、周囲の迷惑にならない程度に広げて六枚のキーボードとディスプレイで次々にデータを整理していく。それでも絶好調の時に比べれば、五分の一程度の速度しか出ていないというのだから恐ろしい。

一通りデータの整理を終えた簪は、軽く息を吐き出してから『モータータイプ』を待機状態に戻す。と、突然肩を軽く叩かれた。

「ん……、なに……？」

「あの、生徒会長が……」

「……ありがとう」

「ううん、どう致しまして」

クラスメイトの子に礼を言ってから、教室を出る。そこには、簪

と同じ色の髪を持った女性が立っていた。

彼女の名は、更識楯無。このIS学園の生徒会長である。

楯無を見た簪は、特に何か動揺するようなことも無く、するすると近寄って声を掛けた。

「お姉ちゃん……なに……？」

「え、えっとね、簪ちゃん。お姉ちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど」

「……？」

一之瀬香織とは、もう関わらないで。

その言葉を聞いた瞬間、簪の普段の無表情の中にあつた感情の灯火が消えた。

そんな簪に気づかず、楯無は焦るように捲くし立てる。

「一之瀬香織は異常よ」

やめろ。

「経歴不明、今までISに触れた事だつてろくに無いのにあれほどの才能を誇っている」

やめろ……！

「それに、治癒能力だつて尋常じゃない。はっきり言って人間の域じゃないわ」

やめろ！

「それに、彼女の姉の葵は虚を通じて私を脅迫してきた。明らかに何かあるの。お願い簪ちゃん、あの子は危険なのよ、もう関わっちゃ駄目！」

「……お姉ちゃんに」

「え……？」

「お姉ちゃんに何が分かるの！？」

今まで楯無が聞いたこともないような大きな声で怒鳴った簪は、明らかに怒気を発していた。

突然の簪の変貌に目を白黒させている間に、簪はさらに言葉を続ける。

「香織は私の恩人なの！ 助けてくれたのは、何もしてくれなかったお姉ちゃんじゃなくて香織なの！ 香織のこと、何にも知らないくせに、わかったようなこと言わないで！」

「なっ……、簪ちゃん、私は簪ちゃんのためを思って言ってるのよ！？」

それは本心からの言葉なのだろう。楯無は簪のことを妹として大切に思っているのだから、彼女からすれば当たり前のことだった。しかし、簪にとっては好きな人をありったけ侮辱されたのと同じことだったことに、楯無は気づけなかった。

「私は香織という、離れないから」

「お姉ちゃんの言うことが聞けないの！？ あの子は危険なの！ あんな子と関わったらいけないわ！」

「ッ！」

直後、廊下に甲高く頬を打つ音が響き渡った。

熱を持った頬を押さえ、楯無は信じられないようなものを見るよ

うな目で簪を見る。明らかに動揺しているその姿を見て、簪のかつと熱くなった頭は思いのほかすんなりと冷めていく。

「……私の国籍が変わってることは知ってるよね」

「え……？」

「私、更識と縁を切るから。もうお姉ちゃんの妹やめるよ」

「か、簪、ちゃん……？ 何、言ってるの……？」

「真正正銘、私は日本と何の関わりも無くなる。そうしたら、私が誰と関わろうと私の勝手だよね」

今までおどおどとしか喋れなかった簪が、はつきりと強い口調で話していることに驚き、そしてその内容に驚愕し、意味を理解した楯無は困惑した表情で簪の目を見る。

その目は、まるで人を見る目をしていなかった。

「私ね、お姉ちゃんのこと、尊敬してたんだよ。カッコいいって。でも、もうそんな感情なくなっちゃった」

ばいばい、と。

そう言い残して、簪は楯無の横をすり抜けていく。

簪にとって、既に姉はコンプレックスの対象にも、尊敬できる存在にもなりえなかった。

そして後には、呆然とした表情で立ち尽くす楯無の姿だけがあった。

「……ねえ。ふーちゃん」

「なに、香織」

「目の前にいるあの人は、まさか」

「まさか、でしょうね」

午後の実習が始まり、私達は再びグラウンドへと出てきていた。しかし、しかしだ。千冬さんの隣にいるあの人は……。

「今回から、外での実習に講師として参加してくれる、ナターシャ・ファイルス先生だ。ナターシャ先生、自己紹介を」

「はい。えー、皆さん初めまして、ナターシャ・ファイルスです。二学期の間だけという事で、本日正午よりこのIS学園での一年生の実習授業を総合して見させてもらうことになりました。以前はアメリカのテストパイロットを務めていましたから、実力は心配しなくてもいいですよ。それじゃあ今学期ですが、皆よろしく！」

につこりと笑う彼女に、思わず私たちは口の端をヒクヒクと痙攣させてしまう。

ナターシャ・ファイルス、元アメリカテストパイロットにして、現バインド・カンパニーテストパイロット、アルカディア・？の代
表操縦者の一人。

一体、何がどうなってるのさ！？

第38話 二学期開始 ゲームスタート（後書き）

空回ってしまった楯無。これから色々と原作乖離が始まります。

ナターシャ、びっくりした？ びっくりした？
ちなみに、詳細は次回。

第39話 裏のお話（前書き）

ということで、活動報告でもある通り、まずはこの作品を完結させるべく書き進めることにしました。

更新はちよつとばらつきますが、進むときはガンガン進むのでよろしく。

第39話 裏のお話

「却下」

乙女達の ソニックブーム ！！

一夏は 耳を塞いだ ！！

なんてあほなことをしてみました。香織です。

今日は二つのイベントが生徒たちを活気付かせていた。

一つ目は、ナターシャさんが来訪した翌日、つまり今日の午前中の全校集会で生徒会長が発表した、『各部対抗織斑一夏争奪戦』。簡単に言くと、今月の学園祭で一番多く投票があつた部活に、一夏を強制入部させるというもの。

話を聞けば一夏には全く話を通っていなかったようで、生徒会長権限とやらで推し進めていたらしい。……それは、まずいでしょ。で、二つ目がナターシャさん。その全校集会の終わりの方で紹介された彼女は、あつという間に生徒のハートを鷲掴みにし、固定ファンを獲得していた。アイドルみたいな人である。

「あ、アホか！ 誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思つて！」

「メシア気取りで！」

で、ですよ。現在その学園祭を勝ち抜くために、色々と案が出ているのですが。

以下箇条書き。

- ・織斑一夏のホストクラブ
- ・織斑一夏とツイスター
- ・織斑一夏とポツキー遊び
- ・織斑一夏と王様ゲーム

と、軽くこれだけ出ました。いやいや、まずいでしょこれは。

「えーっと、皆さん？ 一応一夏もこのクラスの一員であって、これは一夏一人に負担が掛かりすぎると思うんです。皆さんの気持ちも、分からないわけではありませんが……」
「か、香織……！ お前って奴あ……！」

一夏、涙ぐんでないで自分で解決しよう……、無理か。女子のパワーは凄いもんね。

まあ、クラスの一押しを推して行きたいってのは分からないでもないけど、これはまずいでしょ。一夏死ぬよ？ 特にツイスターゲームとか。

「確かにいー、かおりんの意見も一理ありー、だよねえー」

「むむむ、言われてみれば織斑君の負担が大きすぎるわね……。稼がたいけど、負担が大きすぎて稼ぎ頭が倒れたら本末転倒だし……」

ふう、とりあえず方向修正は出来たかな。
のほほんさんとちよつとアイコンタクト。

『ありがとうございます、のほほんさん』
『お気になさらずうー』

うーん、アイコンタクトで会話って普通かな？　どうなんだろう。
しかし軌道修正できたはいいけど、それじゃあどうするかってこ
となんだけども。

意外な人物が、名乗りを上げた。

「メイド喫茶はどうだ」

そう言ったのは、なんとラウラだった。ああ、@クルーズでバイ
トしてたからか。

しかしそれを知らない皆は、きょとんというかぼかんとというか、
間の抜けた顔でラウラを見ている。まあ、普段はあの堅物だもんね。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確
か、招待券制で外部からも入れるのだろう？　それなら、休憩場と
しての需要も少なからずあるはずだ」

「うちのクラスは素材がいいですからね。ちょっと手を加えれば化
けに化けますよ。メイド服の伝なら私がありますから、どうですか
？　一夏の負担もそれほど大きくありませんし」

「え、えーと……みんなはどう思う？」

ラウラを援護するように続けた私の言葉を聞いて、一夏はラウラ
がこんなことを言ったことに衝撃を受けつつも皆に決を採る。

結果、全員一致で採用。一夏には執事を担当してもらったことにな
った。

「それじゃあ、俺はこれを織斑先生に伝えてくるよ」

「はい、お願いします。一夏」

「おう」

というところで。

メイド喫茶をやることになりました。

香織のそれから更に数日。

「それで、何の用かな。生徒会長さん」

「あら、気づいていたのね」

殺気を滾らせてこちらを睨みつけていれば、どんなド素人だって尾行くらい気づけるだろうに。

確か少し前に、簪ちゃんに香織から離れるように言って、すげなく拒絶されたって話は聞いたけど……。私が言うのもなんだけど、シスコンだわね。

物陰から出てきた更識楯無は、私、一之瀬葵へ向けてこう言い放った。

「単刀直入に言うわ。一之瀬香織は人間ではないわね？　そして、貴女は間違いなくそれを知っている」

「……そうだとしたら、貴女はどうする？」

「……貴女がどれほどの自信を持っているのか知らないけど、この日本で更識を敵にして無事で済むと思っているの？」

「ええ、思っているわ。その程度の組織ならね」

まったく、何を言うかと思えばそんなことか。

暗部の一つくらい、敵に回せなくて何が姉か。こいつは姉だといふのにそこが分かっていない。

執着するだけで相手を知ろうとしない限り、それは愛ではないといふのに。

「そう。なら、勝負しない？ 貴女が勝てば私は貴女に手を出さないし、一之瀬香織達にも手は出さない。ただし、私が勝ったら洗わざらい情報を吐いてもらうわ」

「……まあ、いいわよ。貴女程度に負けるほど、私は弱くないのだから」

これ見よがしに挑発してやると、ひくりとこめかみを動かした。まだまだ青いな。

しかしこの条件はまず守られないだろう。生憎とこちらには情報統制にかけては宇宙一と呼ばれるかもしれないたつちんがいるのだから、情報を取られる危険性はゼロだけど、香織たちに近づかれると対処がしづらい。今のうちに始末も考えたが、後が面倒なのでやめておこう。

とりあえず、この戦いをおさめて伸すということだ。

更識楯無の案内で無人の置道場へ到着。向こうは胴着に着替えるらしいが、こちらはそんなもの unnecessary。大体、これは勝負という体の私闘なのだから。

「準備はいいかしら、生徒会長さん」

「ええ。では三秒後に開始よ」

一方的に宣言し、三秒後には私の目の前まで接近してきた。

ちなみに、勝敗は「どちらかが戦闘不能」になることで決定する。楯無はこちらに肘、肩、腹と軽く掌打を浴びせると、流れるような動作で両方の肺を真っ直ぐに掌底を放ってきた。

ドンッ！ と強い音がして、肺から空気が吐き出される。通常ならば。

「それが、どうかしたか？」

「っ！？」

「その程度か。では次は」

一切ダメージを負っていない私に動じたのか、楯無は一瞬型を崩す。

そこを見逃さず、一瞬で楯無の手の平を上へ飛ぶように蹴り上げた。直後、張り手をしたような高い音と共に楯無の体が宙へ浮く。

「あ」

「こちらから行こう」

浮いた状態から攻撃に転じることなどではしない。

割と強く、浮いた状態の楯無の背中を真横から蹴り上げる。バキッ、と骨から嫌な音がした。感触からして折れてはいないが、それでも相当なダメージだろう。体もまた浮き上がっている。

今度は叩き落すように楯無の腹の上から拳を放ち、彼女の体を畳へと沈める。何処かの内臓を傷つけたのか、楯無は口から血を吐いていた。

「ガハッ！？」

「もろいな」

体は鍛えているのだろうが、いいのをもらえば簡単に壊れる。

「まだやる？」

「ふ、な、舐めないでもらいたいわね……」

根性というか、意地だけで立ち上がってきているような気がする
のは気のせいではないだろう。

しかしそれは私への対抗心から来ているのか。そこまでは推量の
及ぶところではない。

向かってくるならば叩き潰すだけだ。

「はっ！」

まっすぐ向かってきた、と見せかけての足払いを回避さず、真下
に来た足を踏みぬく。ああ、折れたな。

「ぐう！？」

「拳動の一つ一つが遅い。蠅が止まるぞ」

「かふっ　！」

顎を蹴り上げ、折れた脚を鷲掴んで引き戻す。そして、そのまま
腹部のさつきと同じ位置に三度拳を叩き込んだ。ぴったり骨の隙間、
内臓器官へ衝撃を通しながら、地面に体をたたき落とす。

人体を壊さないよう、最小限の怪我で収めようと頑張ってはいる
けれど……、彼女は死を垣間見たことがない。戦っていてよくわか
る。

彼女の戦い方は制圧だ。出来る限り迅速に、かつ周囲に被害を出
さないような戦い方。けれど、それがうまくいきすぎてその先へ進
めていない。彼女の戦いは「殺しあい」ではあっても「壊しあい」
ではないのだから。

人体は殺すのではなく壊す。指を逆に曲げればそれだけで壊れる
ほど、人間の体はもろい。溢れんばかりの間接がその証拠だ。

「そろそろ我慢が効かなくなる。これ以上やるなら、死を覚悟して

もらっ」

「くっ……」

折れた脚を乱雑に扱ったせいで右足はズタズタだ。それでも必死に立とうとしているのは称賛に値する。するわけないが。

「参りました、と言言ってくれば、私はそれでいいんだが？」

「……いやよ」

「そうか」

まったく、往生際の悪い小娘だ。

脚を振り上げると、踵落としの要領で顔面へと足を、

「そこまでだ」

下ろしたギリギリのところで、その脚が受け止められる。

「……織斑先生」

「喧嘩するのは勝手だが、殺させるわけにはいかん。手を引け、

一之瀬姉」

「……はい」

いつの間にかやってきていた織斑先生が私の足を掴んでいた。気配がなかった。隠密は私と同レベルか。さすがは最強。

「一之瀬姉、部屋に戻れ。今回のことは目を瞑っておいてやる」

「……失礼します」

頭を下げ、そこから出ていくことにした。

後は織斑先生が何とかしてくれるだろう。さて、こっちも仕込み

を始めるか。

「さて」

一之瀬が行ったあと、倒れて息を荒くしている更識をぐっと抱え上げる。早めに医務室へ連れて行ったほうがいいだろうな。

脚の骨はひどいことになっているが、ほかはせいぜい打ち身程度だ。内臓器官へのダメージもそれほどではない。あいつめ、これでもまるで本気を出していないということか。

未恐ろしい奴め。

「今回の件、申し開きはあるか？」

「……すいません、織斑先生。すべて、私の独断です」

「今後、あまりあいつにちょっかいを出さん方がいいぞ。あいつは守るべきもののためなら何だってやってのける。更識家当主のお前がここまで一方的に、それもほとんど本気を出さずに叩き潰されたのだからな」

「……同い年でここまで差ができるなんて、ちょっとショックですね」

更識は当主として、あらゆる訓練を受け、あらゆる鍛錬に励んできただろう。しかし、それをあいつはやすやすと上回って見せた。それだけの覚悟と力があるということが、それでわかる。

だがな、更識。お前の抱いた感想は、当主としてのものではなく、ごくごく普通の高校生の言葉だということに、気付いているか？

「……私、ダメな子だなあ」

「更識……？」

「簪ちゃんには拒絶されちゃうし、必要な時に戦えないし、おまけにこんなズタボロにされちゃって……。どうして私、こんなことしてるんだろう」

俗に言うお姫様抱っこという形で抱き上げている更識が、鬱屈とした表情を見せていた。

今まで更識家当主として、そして学園最強の称号の持ち主として常に明るく、一本芯の通った姿を見せてきた更識楯無が、まるで年頃の少女のように塞ぎ込んでしまっていた。

そのことに、私は少なからず驚きを感じる。あいつの行動がこいつの殻とも呼べるものを壊したのか。

更識は確かに頼れる大人の女性としての雰囲気があった。学生たちには特にそう感じられただろう。それが本当のものであったなら、私も感じていた。

しかし、それはこいつにとって重りや殻にもなっていたのだろう。その『強者の殻』を、一之瀬姉は壊して見せたのだ。まあ、あいつがそこまで考えていたわけではないのだろうが。

「……ねえ、先生」

「なんだ」

「私……、会長辞めていいかなあ……？」

涙を浮かべ、更識は私の胸に顔を埋めて言った。

……殻を壊したのはこいつのためになったのだろう。が、それと一緒に心にヒビが入ってしまったらしい……。

とにかく、早々に医務室へ連れて行くことにした。どうせこの状況を見たらキヤーキヤーと騒がれるのは目に見えているからな。

第39話 裏のお話（後書き）

どうしてこうなった！

なんだか書いてるうちに楯無が弱気になったらいいんじゃないかな、なんて思ってしまったってこうなってしまったのです。なぜなんだ。

ということ楯無の心が折れました。妹に拒絶された上に、焦って行動起こしたらぼこぼこにされてしまったたっちゃん、これからどうなるのか！

第40話 学園最強の引き篋もり（前書き）

タイトルまんま。

後半はちょいエロ&原作ブレイク。まあ今サラですけどね。

第40話 学園最強の引き篋もり

「お嬢様……」

扉の前で、虚はただ立ち尽くしていた。

たった一枚の壁を隔てた先では、折れた足を庇いながらも小さく蹲って、涙を流して眠る楯無がいる。

今まで、彼女の主がこれほどに痛めつけられたことはなかった。肉体的にも、そして精神的にも。

治療用のナノマシンを投与されているため、足の骨は数日で完治するだろうが、心はそうはいかない。

「私は……」

拳を握りこみ、涙を流す。食い込んだ爪が皮膚を破り、赤々とした血を流していた。

葵と楯無の戦いから一日、夜を迎えた今になっても、楯無は恐怖と苦痛の溢れる悪夢に苛まれていることだろう。

拷問に対抗するための訓練も受けているし、痛みで涙を流したことは一度や二度ではないはずだった。しかし、それはあくまで訓練、葵にこれでもかとやられたことは、楯無の柱を確かにへし折ってしまっていた。

けれど、虚の頭の中の理性はこれが自業自得だと理解していた。忠告されたにも拘らず請求に動いた結果であり、彼女を恨むのはお門違いであると。

しかしながら、虚も大人びているとは言ってもまだ一八である。理性のはじき出した結論を、感情がはいそうですかと受け止められるかといえ、その答えは否であった。

「……一之瀬、葵」

更識という名を持ってしても素性すら探れない謎の存在。そして、その庇護下にある一之瀬香織。今は手を出せずとも、いずれ必ずその正体を暴き立てる。

血を流しながら、虚は静かにそう決意した。

その一方で、楯無はというと。

「……あ」

ぼそぼそと何かを呟きながら、何もない場所をずっと見続けていた。

その瞳は濁りきっていて、何かを映すことはないだろうと思ってしまふほど。

「もう……やだあ……、なんで、私ばかりこんなことしないといけないのぉ……！」

その言葉を虚が聞けば、十中八九自分がおかしくなったのだと思うであろう言葉。それを、楯無は心の底から発していた。

最愛の妹には愛想をつかされ、焦って行動した結果、足の骨を無残にへし折られた。心の柱も、それと共に。

楯無は生来、気が強いという性質ではなかった。

双子の妹である簪を守る姉として、そして更識楯無の名を告ぐ少女としてそう育てられたというだけであって、彼女自身はどちらかといえば気弱な気質であった。

そんな彼女が暗部に対するための暗部の当主として、このIS学園の中の最強としての顔を保つためには、人を食ったような、おちよくなるような顔を持っていなければならなかった。

ならばこそ、彼女の今の状況は仕方がないこととも言えるだろう。

「なんで、なんでなの簪ちゃん……、私頑張ったよ、お姉ちゃん、頑張ったんだよ……？」

ここにいるはずのない妹の名を呼びながら、楯無はただベッドの中で蹲る。

壊れてしまいそうな自分を必死で守るために、ただ身じろぎもせず。暗闇の中。

「生徒会長が引きこもったあ！？」

「傷心で出てこないって、お姉ちゃんが言ってたあー」

出し物が決まってから二日目。

私達が集まったところでのほほんさんから齎された情報は、頬を引きつらせてしまうようなものだった。

「……それ、ほんと？」

「うんー、なんか、一昨日の放課後に誰かと決闘して、ぼこぼこにやられたってー」

「生徒会長って、IS学園で最強なんじゃないの？ 相手って千冬さん？」

「んーんー、同学年の生徒らしいんだけどおー、詳細はありませー

ん」

簪ちゃんとふーちゃんの質問に答えるのはほんさん。

……私は、その条件に当てはまる人を一人知っているんですが、これってもしかして……？

「ちょっと、電話してくるね」

「あ、うん……」

今はお昼時、食事をしながらお話中でした。

皆から離れて、携帯端末からお姉ちゃんの番号を呼び出すと、通話ボタンを押す。

二、三度の呼び出し音の後に繋がる音になった。

「もしもし、お姉ちゃん？」

『なに、香織？ なにかあった？』

「あのさ。一昨日会長と戦った？」

『戦ったけど、それがどうかした？』

はい、お姉ちゃんでした。

だよねえ、学園最強って言われてる人をぼこぼこに出来る候補つて言ったら、千冬さんかこっちしかいないもんねえ。いや、学校にいる人のことはよく知らないんだけどさ。

「会長、引きこもってるんだって」

『はあ？ 一回ボコボコにされたくらいで？ アホらし……』

「ちなみに、どれぐらいやったの？」

『精々足折ったくらいよ？ 重症にすると面倒なもの』

「足の骨折は十分重傷ですが」

本当に、我が姉ながら常識の欠如が著しいなあ……。
けど、仮にも生徒会長が一度負けたくらいで引き籠もるまでいかなあ？　ちよっと疑問が残るんだけど。

「まあ、いいや。ありがとね、お姉ちゃん」

『気にしないでいいわよ。それじゃ、私戻るわね』
「うん。ばいばい」

通話を切って皆の元へ戻る。食事はもう皆終わらせているから、ドリンクを飲みながら世間話に興じていた。

「おかえり、香織」

「やっぱりお姉ちゃんだった。ボツボツにしたって」

「……凄い。更識先輩は強いのに」

「ん、簪ちゃん。前はお姉ちゃんって言ってなかったっけ？」

「妹、やめたから。もう更識じゃない」

清々しいくらいの笑顔で言ってくれた簪ちゃん。

あ、もしかしたらこっちも関係しているかもしれないね！

「簪ちゃん、ちよっと詳しくいい？」

「……？　いいけど……」

とりあえず状況を掴みたいので簪ちゃんからも「更識と妹やめた」発言を内容を確認してみると、それはそれは不思議なものだった。

なんでも、私の周囲にいと危険だから早く離れるように言われた簪ちゃんが、「そんなこと言うなら妹やめる。更識もやめる」と言ったらしい。結構私のことばる糞に言ってたから、それでやめたんだとか。

うん、多分じゃなくてもそれだろうね。それとお姉ちゃんのフル

ボツコが重なって、ちょっとブルーになったのかな。そういう簡単な話じゃないかもしれないけど。

「でも、もう私には関係ないし、どうとも思わない……。少しは、出来ない人の苦しみてものも知るといい……。」

小さな頃から何かと姉に負けてきた簪ちゃんから言わせればそうなんだろうなあ……。

確かに、姉が偉大って言うか、何でもできると色々複雑だよな。私もお姉ちゃんのこと羨ましいって言うか、凄いつて思ったことは何度もあるし。今は感謝してるけど。

しかし、あれだ。会長が死んでなくて良かった。お姉ちゃんは平気で致死レベルの攻撃繰り出すからなあ。

そんなことを考えていると、ぽんぽんと肩を叩かれる。

「やつ。ここいいかな?」

「あ、ナターシャ先生。どうぞどうぞ」

「今は先生じゃなくていいわよ」

ナターシャさんはそう言うと、自分の分の昼食を机においてから私の隣に座り込んだ。

突然教師としてやってきたナターシャさんには驚いたけど、案外うまくやっているらしい。大人の女性の余裕と言う奴かな。

「葵ちゃん、派手にやったみたいじゃない?」

「教師が笑って喧嘩を黙認するべきではないと思うんですが?」

「いいのよ、私臨時だから」

ひどい教師を見た。

「ん、おいしつ　IS学園っていいわねえ、こんなに美味しいのが食べられるんだもの」

「軍だと違ったんですか？」

「味は二の次、まずいわけじゃないけど、まずは腹が膨れること最優先ね」

「あー、私のいたところそんな感じね。なんで軍って飯の味にこだわらないのかしら」

元軍人のナターシャさんと、軍で訓練を受けていたふーちゃんがいうならそうなんだろうな。

でもあれだつてね、レーションとかって最近は美味しいんだつて。昔は酷い味だったみたいだけど。

「午後の実践訓練は私も出るから、ちゃんと食べておきなさいよー？」

「一組と四組合同だったわよね」

「うん……。私が一緒……」

「私も一緒なのだよおー」

にこにこしている簪ちゃんと、ふにやつと垂れているのほほんさん。

うん、まあとにかくにも、平和だ。多分。

「こんにちは、エム。いいえ、マドカと言った方がいいかしら」

「……キティか。なんの用だ」

「作戦行動前に集中している子に、ちょっかい出そうと思って」

悪びれる様子なく、キティが笑う。その様子を、マドカと呼ばれた少女は冷めた眼で眺めていた。

マンシヨンの最上階に位置するここは彼女達の拠点のひとつとして使われているが、それが何処にあるのかは不明である。

「ねえマドカ、貴女の目的は復讐なのよね？」

「ああ」

「なら、それが終わったときには私のものにならない？」

「なに？」

すると、気づけばキティはマドカを絡め取る様に後ろから抱き着いていた。

その艶めかしく撫でるような感触に、マドカは身を竦めるとキティから視線を外す。

今までもスコールとオータムがそのように絡み合う様を目の前で見せつけられたことはあったが、自分が標的にされたときのことは考えていなかった。

いや、考えないようにしていた、と言った方が正しいか。生理的嫌悪すら覚えていたのだから。

「離れろ」

「い・や・よ」

「貴様　ッ！」

力づくで体を離そうとしたマドカの首筋へ向けて、キティは犬歯を突き立てた。つぷりと、マドカの柔らかな白い肌をキティの鋭い

歯が突き破り、血を溢れ出させる。

一瞬の痛みと、その後に来た壮絶な快楽にマド力は目を白黒させながらも何とか拘束から逃れようともがく。

しかし、緩く抱きしめているだけのはずのキティの両腕から、なぜかマド力は抜け出すことが出来なかった。

「は、なせ……！」

「力が抜けるでしょう？　気持ちいい？　気持ちいいわよね、そういう風にしてるもの」

「ひああっ！？」

ズルズルと血を嚼りながら喋るキティの言葉を聞きながら、マド力は全身の力が抜けていくのを感じた。

それと共に、自分の中に何かが入ってくるのも感じていた。

「何を、している……！」

「ただのナノマシンよ。私に好意を持つように脳を弄くる、ね？」

「なんだと……！？」

「ふふっ、かわいいっ……。食べちゃうわよ？」

「あ、あ……！」

何を言っているのか、何をされているのかが分からなくなってくる。

気味が悪いと嫌悪していたことが何故だか異様に愛おしくなり、力の抜けた体がゆっくりとキティの体を求め始める。

それに気づいたマド力は、うなじ辺りに口を寄せていたキティの顔を殴りつけると、ベッドから立ち上がって何とか距離をとった。

「はあっ……、はあっ……！　なんだ、なんなんだ貴女は……！？」

それからとはたと手を口元へやる。

先ほどまで貴様と呼んでいた自分の口が、喉が、勝手に「貴女」と呼び変えていた。まるでそれが当たり前のように。

気づいて愕然としたマド力は、自分の身を守るように抱いた。

「いやだ、違う……！ 私は貴女のことなど……！」

「ふふ、そうやって葛藤し続けてね。葛藤すればするほど、こちらに堕ちた時は甘いのだから」

「ひいっ……！ さ、触るなあ！」

口から血を垂らしながら妖艶に笑っていたキティの手を払い、その場にへたり込む。

「あ、や、違う、ごめんなさい……！ 違うの、私……！ あ、あ

あ、なんだ、なんなんだ私は！ ああああああああ……！」

「ふ、ふふ、ふふふふ、あはははははははははは……！」

キティに触れようと、キティに嫌われまいと擦り寄ろうとする自分を必死に抑え、マド力は慟哭する。

その声を掻き消すように、キティはただ笑っていた。

第40話 学園最強の引き籠もり（後書き）

会長フルボッコの後遺症でござるの巻。

そして織斑マドカ、陥落までカウントダウン。

キティは順調に我が道を行っています。

第41話 天才は天災へ（前書き）

復活イベント。一日かからずに書き終わりました。

第41話 天才は天災へ

部屋に鍵を掛けて、光を締め切ってから、どれくらい経っただろう。

気づくと、私はぼんやりと鈍く光ることすらやめた果物ナイフの刃を眺めていた。

これを手首に押し付けて思い切り引けば、死ねるだろうか。考えるから、即座に蓄えられた知識が否と答えを弾き出す。

今の状態で出血多量のショック症状で死ぬことなんて、厳しいだろう。なら心臓にでも突き刺してやった方がよほど有用だ。

考えても、実行に移せなかった。

ナイフを放り投げると、それは絨毯の上に落ちて鈍い音を立てる。

「……」

それを見ても、まるで何も感じない。無感動にも程があった。

死にたいと願っても、死の間際にある痛みが邪魔をして自分を遠ざける。楯無は、生きて死んでいる状態にあった。

何も出来ず、何かをしようとする気概すら起こらない無気力状態の彼女の耳に、突然ノックの音が飛び込んできた。

「楯無、いるな？」

「……織斑、センセ？」

「そっだ。開けるぞ」

「あ……」

止める間もなく、千冬は合鍵を使って鍵を開けると扉を開き、中へ入ってくる。

ベッドの中で蹲る楯無は、足を自分の下へ引き寄せて体育座りの

ように身を固めると、目線だけをそちらへ向けた。

「どうだ楯無、具合は」

「……」

「それにしても酷い顔だな。髪もぼさぼさで、シャワーも浴びてないだろう」

「……」

反応を見せない楯無を見て、千冬はあからさまに溜め息をつくと腕を掴んだ。

反射的に跳ね除けようとした楯無を抑えると、千冬はそのまま彼女をベッドから引きずり出す。

「や、やだ、やめてっ！ やだぁ！」

「来い」

「センセ、やめてよ！ いやぁ！」

「いいから来い」

他人に触れられることすら恐れ怖がっている彼女をそのまま部屋から出すと、千冬は一直線に寮の大浴場へと歩いていく。

楯無はその間泣き喚いていたが、生憎今は真昼間であり、しかも学園祭の二日前。全生徒が校内で学園祭の準備にかかりきりになっているため、その声を聞く人間は千冬以外にいなかった。

「ほら、服を脱げ」

「ぐすっ……、センセ、脱がせて……？」

「……まったく」

幼児退行の状態も現れているのか、楯無は涙を指で払いながら千冬にそう言った。

ここで拒絶すれば、また泣き出してしまつかもしれないと考えた千冬は、仕方なしにそれを了承する。

少しして一糸纏わぬ姿になった楯無は、同じく裸になった千冬によって浴場の椅子に座らせられると、熱いシャワーを頭に浴びせられた。

「きゃっ！」

「じつとしていろ、洗ってやる」

ごわごわとした髪をシャワーで濡らした千冬は、手にシャンプーを二度、三度出すと髪を洗い始める。

目を閉じた楯無はそれを心地良さそうに受け入れながらも、終始疑問が尽きなかった。

「……センセ、なんで私のこと氣にするの？」

それは、今の彼女にとって当然の疑問。

何かを行うことを諦めていた彼女は、何かを行ってきたことを諦めることの対価にしようとした。そんな自分を俯瞰的に見つめ、なんと愚かなのだらうとあざ笑い、その価値をゼロ以下に見出したのだから。

そんなゼロ以下の自分を気にかける人間など、奇特にも程があった。天才ゆえに天災には近づけず、天災に接してきた天才の意図は掴めない。

「生徒の心のケアも教師の役目だ。気になったしな」

「……変な人だ」

「変人と付き合っているからな。影響も受けるさ」

楯無はそんな千冬の言葉を、心地良さそうに聞いていた。まるで、

今までの様が嘘であるかのように落ち着き、優雅さすら感じられるその姿の内側で、楯無は考える。

織斑千冬、彼女の傍に居るととても落ち着く。先ほどこら、ぐしやぐしやになつていた心がゆっくり整理されているのが感じられていたから。

彼女にはあるのだろう、天才や天災を落ち着かせ、懷かせ、そして世界に適合させられるだけの資質と言うものが。

では何故天災は社会に適合できず、社会を適合させたのか。簡単だった、彼女はそれ以上に天才であり異常だっただけの話だ。気が付くと、楯無は千冬の手を取っていた。

「どうした、楯無？」

「……んっ」

ぺろりと、お湯で洗い流されて清潔になった千冬の指を舐める。甘かった、まるで味わってはいけないもののように。

一度舐め始めると、止まらなかった。

二度三度、それ以上幾度も舌を這わせ、味を確かめる。その様子を、千冬は戸惑いながらもじっと眺めていた。

「……思い出すな」

「ふえ？」

「やられたんだよ、昔。あのバカウサギにも同じことをな」

言われてから、楯無は自分が何をしていたのかを思い出す。けれど、不思議と罪悪感や忌避感、羞恥心を感じることはなかった。

あのバカウサギ、というのが誰を指すのか、楯無にはなんとなく分かった。篠ノ之東、世界を変えた天災。

「……先生」

「なんだ」

「抱きしめて、いいですか？」

「……ああ」

許可が出た途端に、楯無は千冬の体を真正面から抱きしめる。暖かく、生きていた。

愛しいと思う。思っ、それから自分がどれほど酷いことを簪に言ってしまったのかということに気づいた。

（ああ、これは無理だ。離れることなんて出来やしない）

気づいてしまえば、楯無の傷は瞬く間に塞がった。

なんてことはない、自分も人間だったのだ。完璧を求めて仮面を被り続けるあまり見失っていた本質、あまりにも自分を過大評価しすぎていただけのこと。

まだやれる、まだ大丈夫、もう少し。そんな言葉で進んできたような道は脆く、簡単に崩れ去る。そして、その道を進んできた楯無の虚像もまた、脆く崩れ去っていた。

後に残ったのは、臆病な白兔。かくして。

天才は天災へと昇華する。まるで、蛹が蝶になるように。更識楯無という幼虫を内側から喰らい尽くして。

「……センチ、お風呂入りましょ？」

自分で彼女の手を引き、楯無は浴槽に身を浸ける。

その隣には、千冬もいた。そのことに、楯無は無性に歓喜を覚えた。なぜかという疑問は野暮なものだろう。

「私ね、センチ。何にも価値がないと思うんだ」

「楯無、お前……」

「だから、変わってみました。今、織斑先生がいてくれたから」
「……そうか」

たった今変わった彼女に対しても、千冬は揺らぐことはない。

まだまだ序の口である彼女に、それ以上に接してきた千冬が揺らぐ要素はなく、そのことが楯無には悔しかった。

だから。

「センス」

「ん？ んっ……！？」

口付けた。

唇同士がしっかりとくつついたそれは、まるで恋人同士のように情熱的に、貪るように続けられた。

「ぷはっ。えへへ、どうでした？ 巧いでしょ？」

「……お前は」

「ファーストキスもセカンドキスも犠牲にして学んだんですから。

えっへん！」

「楯無……」

「やあん、それで呼ばないでください！ 私の本当の名前、教えますから。千冬さんはそっちで呼んで？」

豹変した楯無は今までとまるで別人のように生き生きと話し出した。あるいは、病的なほどに明るく。そんな彼女を、千冬は受け入れた。

そうするのが当然だといわんばかりの姿勢で、当たり前のように。だからこそ、楯無は口を開く。

「私のホントの名前は」

そしてその日、更識^{れんげ}恋華は、織斑千冬に恋をした。

「か、ん、ざ、し、ちゃああああああんっ!!」

学園祭の準備も一息つき、さて帰ろうかと帰路に着いたとき、寮の方からそんな叫び声を上げながら走ってくる人影が見えた。

この感覚、束ちゃんに近いけど違う!?

なんて考えてると、瞬く間に接近してきたその人は、大きく踏み切ると空中で三回転半を決めながらジャンピング土下座を見せた。

「ごめんね、ごめんね簪ちゃん! 私、簪ちゃんのこと考えずにあんなこと言って!」

「……何しに来たんですか、生徒会長」

「あうつ、その、謝ろうと思って……。私、好きな人が出来た! それで、酷いこといったんだなってわかって……。本当にごめんなさい!」

「……え、はあ? 好きな人?」

信じられないと言った様子の簪ちゃん。ちなみに、目の前で土下座しているのは生徒会長さんです。ほんと、すごいシニールな光景なんです。

「うん！ 千冬さん！」

「ぶふうっ！？」

「……お姉ちゃん、同性愛は非生産的だよ。私は否定できないけど……」

「愛に障害などないのよ、簪ちゃん！」

あまりのインパクトにお姉ちゃん呼びに戻ってしまっている簪ちゃんである。

いや、千冬さんは手ごわいと思うなあ……。私も同性愛は否定しないけど。

「で、一之瀬香織さん、だったよね？」

「え、あ、はい。先日は姉がご迷惑をかけたようで、申し訳ありません……」

「いいのいいの、あの人のおかげで私はまた強くなれたわ。それでね、香織さん。ちょっと織斑一夏君に言伝を頼んでもいいかな？」

一夏に？ 何のようだろうか。

「一夏君、ぶっちゃけ今の立場って結構やばいのよ。一夏君を酷い目に合わせて千冬さんの悲しむところは見たくないし……。だから鍛えることにしたわ。第三アリーナで待ってるから、すぐ来るように言ってくれないかしら？」

「は、はあ……」

「それじゃ、頼んだわよ！」

しゅばっ！ と効果音が付きそうな勢いでまたもや走り去っていった生徒会長に、一同呆気に取りられる。

……なんだっただ、一体。

「……お姉ちゃん、ちょっと変わったかも」

「わ、わかるんだ……」

「……元姉妹だから」

で、とりあえず一夏をアリーナに行かせてその日は終わったわけですが。

私たちはまだ知らなかったのです。天災が二人に増えていたことを。

第41話 天才は天災へ（後書き）

ということで、楯無が復活&千冬さんに惚れました。

理由としては「天災の素質があつた楯無が、天災を惹き付ける千冬さんに会ったせい」です。ついでに天災として覚醒。

この作品内では天災は天才の上位系であり、下位系でもあります。

そんなこんなで、楯無はとにかく滅茶苦茶な存在へと変貌しました。

行動原理は自分の利益になるかと、千冬さんが喜ぶかどうかです。

ある意味人間として壊れました。

そしてそんな楯無さんを書いているのがとても楽しい。やつべー。

第42話 学園祭（前書き）

ちよつと急ぎすぎたかもしれん。これでは学園祭が一話で終わってしまいそう。

第42話 学園祭

学園祭当日。

「皆さん、ここまででやれることは全てやってきました。あとは皆さんの力を全て出し切って、この学園祭を成功させましょう！」

「「「「「おーっ！」「」「」」」」

私の音頭で、全員が右腕を天高く突き上げる。

「あー、皆無理だけはしないようにな。辛かったらすぐに戻ってくれ」

「では皆さん、張り切ってまいりましょう！」

一夏と私の言葉で、扉が開く。
私が外に出て、盛大に。

「IS学園一年一組、『@クルーズ特別出張 IS学園店』、ただ今より開店でーす！」

「虚、準備は？」

「万事明瞭に整っております」

「そう。お疲れ様」

学園中が祭りに湧いている頃、恋華^{れんげ}は愉しげに嗤^{わら}っていた。事実愉しくて仕方がない。この世の全てが新鮮に感じられて、どうしようもなく愉しいのだ。

無論、それを疑問ありげに見つめる虚もいたわけだが、恋華はそれを構うことなく嗤う。

恋華にとって、今の虚はちょっと手を出してみたい部下である。もちろんそれによって関係が悪化することも考えられ、そうなれば仕事能率の悪化は避けられないだろう。よって、少しばかり慎重にならざるを得ないのである。

「とりあえず、学園祭の仕事に戻ってもいいわ」
「はい。それでは」

ぺこりと綺麗に一礼してから、虚は生徒会室から出て行った。その直後、恋華はにへら、と嗤いをだらしない笑みへと変えて、懐から一枚の写真を取り出した。

それは、IS学園の裏ルートで売買されている織斑千冬の写真。凛々しく引き締まったその横顔が映し出されたそれを眺めて、恋華はにやにやとした笑みをだだもらしている。

『おい、何ニヤニヤしてるんだい？』

「はっ?! しまった、愛が漏れたわ」

『君も大概だね。まあいいけど? 恋華ちゃん』

声と共に現れたウィンドウに写っているのはウサ耳をつけた女性。本来ならば決して呼ばれない本名を呼ばれても、恋華は嫌悪感を醸し出すことすらせずに笑みを浮かべた。

「さて……。こんにちは、《人類最低》」

『やあ、こんにちは！ 君は……。どう呼ぶか？』

「名前なんて必要ないわよ、私には千冬さんに認識される名だけあればいい。それでも呼びたいなら、そうね。《恋愛中毒》ラブジャンキーでいいんじゃない？」

『まあ、私は昨日通り恋華ちゃんって呼ぶけどね、同類？』

天災同士の会合は、そう静かに始まった。

《人類最低》、篠ノ之束。

《恋愛中毒》、更識恋華。

互いは天災であり、天災であることは天災でしかわからない。

その二人がこうして連絡を取り合っているのには、一つの訳があった。

「それにしても、あの子が男ねえ……」

『だから、あんまりちよつかい出しちゃ駄目だよ？』

「わかってるわ、君は私のことを一体なんだと思ってるんだい？」

『天災』

「素晴らしい、お友達になりましょう」

下らない言葉の掛け合い。けれど、二人ともそれには意味があると思っているわけではない。ただただ単純に、他人と言葉を交わすことが快感になっているだけだった。

天災は少ない。それこそ、ISコアなど目ではない程に少ない。それゆえに、今まで束はその誕生を感じ取ったことはあっても、出会ったことはなかった。

その矢先に新たな天災が覚醒したのだから、束がそこに手を出すのは至極当たり前のことと言えた。

「ところで、昨日の話だけど」
『ああ、《亡国機業》^{ファントム・タスク}？ いやー、私の領域に手を出すなんてアホだね、バカだね、どうしようもないクズだねえ。幾ら《彼ら》の影でコソコソやっていたからって、その程度のことをごちらにばれないなんて思っているのだったら、それは因果律への反逆と言ってもいいんだよ』

クスクスと嗤うそれはあまりに狂気染みていて、その様に恋華は頬を吊り上げた。

なんと愉しそうな同類だろう。見ろ、同類。世界はこんなに愉しいぞ。

『襲撃をかけるのは四名、情報はそちに放り込んだから、あーちやんと一緒に対応してね！』

「え、私殴られたんだけど」

『でも治ったでしょ？ 今の恋華ちゃんなら簡単に治るくせに』

「おいおい、私を見くびるなよ。恋愛ゲージ二六〇〇%なんだぜ？ 首が跳んだって生えてくるね」

誇らしげに首を刎ねるような動作をしてみせる恋華。

犬歯を剥き出しに、彼女は嗤う。

「まあいいわ、おっけー。大体把握したから。それじゃあ、また連絡するわね《天災》」

『はいはい。ばいちー《天災》』

ぶつりと通信が途切れ、ノイズだけになったウィンドウを操作して閉じる。

残されたそこには、歪な笑みを浮かべた天災が残された。

「三番テーブルご案内ですー！」

「当店限定ミックスパフェでございますね！　かしこまりました、少々お待ちください！」

「ご来店ありがとうございますー！」

少女たちの明るい声が響く中、私は何とか休みをとることができた。

開店してから数時間、やはり人の出入りは激しく、そして店内の回転もすさまじい。

「鷹月さん、休憩入りますね」
たかつき

「あ、うん！　お疲れ様ー！」

ぺこりと頭を下げながら、私はメイド服姿のまま教室を出る。

と、そこでは既にチャイナドレス姿のふーちゃん、制服の簪ちゃんが待っていた。

「お待たせ、二人とも」

「ラウラは？」

「まだお仕事中。三人で行って来てくれって」
「大変そう……」

ああ、うん。すつごい大変ですとも。

一夏目当てのお客さんが山のように来てる上に、@クルーズの知名度が上乘せされてるから混雑度は三〇〇%。これが丸一日続くなれば、そりゃあ大変だろう。

私も一時間休んだらまたこの地獄へ逆戻りだ、頑張らねば。

しかも、一夏は先日の一件以来ずっと篝さんと一緒に楯無さんに鍛えられているらしく、全身筋肉痛で尋常でない痛みらしい。ご愁傷様。

そう言えば、一夏は全然戻ってこないなあ……。なにしてるんだろ。

「それにしても、ふーちゃん可愛いねえ」

「ありがと。シニヨンなんて久しぶりに付けたわよ」

「似合ってる……」

「ん、ありがと。それじゃ、とりあえず行きましょうか」

「「おー」」

この時間中に、私はふーちゃんと簪ちゃんの二人と学園祭を回る事になっていた。

さて、何処へいこうか。

校舎の外に出て出店を見て回っていると、突然ふーちゃんが目を輝かせる。視線の先にあったのは、透明のビニールが被せられたわたあめだった。

「あ、わたあめー!!」

「あ、ちよつと! もう、行こう簪ちゃん」

「うん……」

猛然とダッシュを始めたふーちゃんを追って、私は簪ちゃんの手を取ると走り出す。

すぐそこだというのに止まらない理由はといえば、ふーちゃん
好物がわたあめだからだね。

追いつくと、既にふーちゃんはわたあめを三つ購入したところだ
った。なんという早業……。

「はい、二人とも」

「あ、ありがとう」

「ありがとう……、鈴……」

「アタシの奢りだから気にしないで。んーっ、あんまいっ！」

一舐めする度に頬が落ちる様な顔を浮かべ、それはそれは幸せそ
うにわたあめを食べるふーちゃん。まあ、わたあめに限らずこっ
ったふわふわした甘いものはふーちゃんの好みだ。

「あ、簪ちゃん」

「え？」

私の声に反応してこちらを向いた簪ちゃんの、鼻の頭に乗っかっ
ていたわたあめを舌で掬って舐め取る。ん、甘い。
しかし、私もこういうこと慣れてきちゃったなあ……。

「あ、あ、ああっ！？」

「えっと、嫌だった……？」

顔を真っ赤にしながらもぶんぶんと首を横に振る簪ちゃん。

それを見て、ふーちゃんも急いで鼻の頭にわたあめをちょこんと
乗つけると、アピールするようにこちらへ突き出してくる。

「えーっと……」

「んー！」

「……ぺろっ」

まあ、やれってことだろうから。

ぺろりと舐め取って、それからこれでいいかとふーちゃんの方を見やった。うん、いいらしい。

けど、どうせならウラもこれたらよかったのに。今ウラは別のシフトで入ってるから、私と行動を共にすることは出来ないのです。もったいない。

「聞いた？ 生徒会の出し物！」

「聞いた聞いた！ 織斑君が出てるんだって！ 早く見に行こうよ！」

……おい？ 何してるんですかあれは。

「あのー、すみません。その出し物って何処でやってます？」

「え？ ああ、第四アリーナだよ。シンデレラで演劇やるんだって！」

「ありがとうございます」

近くにいた女性とにペコリと頭を下げ、それからこれが誰が原因なのかを思案する。二秒で弾き出せた。

「先日生徒会長から感じたあの感じが、東さんと同様のものだとすれば……」

十中八九これは生徒会長のやったことだろう。
全く、なんちゅうことを……。ただでさえうちは回しづらいつて
いうのに！

「お姉ちゃん、また何かやらかしてるんだ……」

「で、行くの？」

「もちろん」

とりあえず、何をしているのかを見に行くことに致しましょうか。そしてやってきた第四アリーナ。凄まじい人だかりの中を抜けていくと、そこには王子様スタイルに変身した一夏が立っていた。頭に王冠乗っけて。

「……これ、シンデレラ？」

『否、それは最早名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵を薙ぎ倒し、灰燼を纏うことさえ厭わぬ地上最強の兵士達！ 彼女らと呼ぶにふさわしい称号……それが！ 灰被り姫^{シンデレラ}！』

「そうみたいね。設定改悪ってレベルじゃないけど」

「お姉ちゃん……、悪乗りのレベル上がりすぎ……」

ポカーンとする一夏と私。うん、一夏、君の気持ち、今だけは分かる。代弁しよう。

……え？

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！』

放送が続く。

「は、はあっ！？」

一夏がそう言った直後、一夏の足元で銃弾が爆ぜた。跳弾の仕方

と角度から言ってスナイパーライフル系のはずだ。っていうか、学校内でそれは……、いいのか。IS学園は何処の国でもないんだから。

だからってそれはどうかと思うんだけど!?

『っていうかイヴ! 久しぶりだけどさっきの跳弾角度から射手の位置の割り出し!』

『埋め合わせはまだですかね……。っと、できました。ここから三五度上方、左方五度です』

そこをじつと見つめると……。キラリと光が反射する金髪。まあ、ここであんなことしてるのってセシリアさんしかないよねえ。

まあ、セシリアさんの腕ならまちがって脳天ぶち抜いたりなんてないだろうし、大丈夫だろう。多分。

なんて言っていると、瞬く間に人が増えていった。どうやら、フリーエントリー組も参入してきたらしい。ちなみに、ラウラも参加していた。なにか考えがあるんだろうと思っっているうちに、一夏が消えた。

「……ねえ、一夏いないわよね」

「いない……。消えた?」

「いや、そんなまさか」

どうせどこかに身を隠しているだけだろうと、笑い飛ばそうとした直後。

アリーナ全体を強烈な爆発音と地鳴りが襲った。

第42話 学園祭（後書き）

香織ちゃんが男だということが恋華にばれました。束ちゃんが問題なしと判断してばらしたのですが、和解はすぐにされますのでご安心を。

西尾維新成分が入りだしております。苦手な方はご注意を。

第43話 襲撃？

突然の爆音と共に、そこら中から火の手が上がる。

何が起こったのかを把握しようと周囲を見渡せば、空から三機のI
Sが飛び込んでくるのが見えた。

「あれは……！」

そのうちの一機には、見覚えがあつた。臨海学校での事件の折、
私たちが最後に遭遇した謎の機体。

確か、彼女はキティと名乗った。私の、妹だと。

……いや、今はいい。そんなことは。

「ふーちゃん、簪ちゃん！」

「オツケー。避難誘導は先生たちに任せましょ」

「私たちは、あつちを……！」

戦意十分な二人に頷いて、静かに目を閉じる。

「イヴ、行こう」

「はい、カオリ！」

直後、私たち三人は光に包まれたかと思えば、次の瞬間にはそれ
ぞれのISに身を包まれていた。

と、突然通信回線が開いてそこに束ちゃんの顔が映し出される。

「聞こえてるかな、皆？」

「束ちゃん、どうしたの？」

「今そつちで襲撃あつたでしょ？ いつくんが狙いみたいなんだけ

ど、そっちは生徒会長さんが片付けるから、皆は他の三機を担当してね!」

「でも、見えただけで三機よ? まだいるの? っていつか、それ一夏が狙われてるってこと!？」

『まだド素人のうちに白式を奪うつもりなんだろうけど、束さんを出し抜けるとか思ってたら大間違いなんだぜ! とりあえずよろしくね! くれぐれも怪我だけはしないように!』

「わかった……。行ってきます、社長……」

ぶつん、と通信が切れた。

襲撃してきたのは全部で四機、そのうち一機は一夏が狙いだけど、生徒会長が止めるらしい。束ちゃん情報ならほぼ間違いないと言っても大丈夫かな?

けど、一体他の三人はどういう目的で……。まさか攪乱ってだけじゃないよね。

「とにかく、行ってみよう。一機叩くよ!」

「りょーかい!」

「うん……!」

一斉に飛び立ち、シールドの割れたアリーナを越えてその向こう側へ飛ぶ。

先生たちは訓練機に乗って一般客や一般生徒の避難誘導を行っているらしく、その様子が空からも見える。

と、視界の端にこちらへ飛んでくる一機のISが見えた。咄嗟にハイパーセンサーを確認。

『カオリ、所属不明機! エネミーです!』

「ッ! 待ちなさい!」

「あら、可愛い子が三人も。そこを退いてくれないかしら?」

開放通信から聞こえてきたのは、背筋に怖気が走るほど美しい声だった。

ギリッ、と奥歯を食い縛ってそちらを睨みつける。負けるな、気圧されるな。

「ISを解除して、投降して下さい！」

「ふふ、絶対に聞き入れられないと知っていても、そう言うのね？」

「お決まりですから。投降の意思はないんですね？」

「ええ。ないわよ」

答えた瞬間に《夜鷹》^{よたか}を呼び出す。両腕で構えを取る。

それと同時に、ふーちゃんが《双天牙月》^{そうつんがげつ}を、簪ちゃんが《朱鉄》^{あかがね}を呼び出して構える。

にやりと、彼女が笑った。

「だから、墜として通るわね？」

咄嗟に《夜羽》^{よばみ}を交差させて銃弾を防いだ。見えなかった。

まるで初めからそこに弾があったように、当たり前のように《夜羽》によって防がれる。いつだ、いつ撃った！？

「あら、いい反応ね」

「はっ！」

コメントしながらも、ふーちゃんの撃ち出している衝撃砲を軽々と避けてみせる。見ていない、感覚だけで避けているのか。

一気に接近を試みてはいるが、その度に牽制するように撃ち出される弾丸を防いでいるせいで今一距離を詰められない。これは、使えないか。

『《ナイトホーク》で仕掛けるよ。援護よろしく』

『了解!』

『わかった……!』

ブライベート・チャネル

二人に個人間秘匿通信で伝えた後、即座に《夜鷹》の武装特性、《ナイトホーク》を起動させて接近していく。

各種ステルス類はきちんと起動している。偶然でもない限り当たる事は、

「そこね」

「っ!？」

ないと思っていた。それを嘲笑うように、無数の弾丸が《夜羽》へと撃ちこまれていく。しかも、その合間合間に撃ち込まれる衝撃砲も見えているように避けていつている。

どうということ、何で見えてるの?!

「はああああつ!」

「こっつ……!」

「残念、外れよ?」

狙い澄ました二人の一撃が、スルリと避けられた。

なんだ、この人。当たるところか、一発もかすらないなんて!

しかも、こっちは下にいる人たちを気にしているからあまり大きな攻撃は行えない。あまりにハンデが大きすぎる。

「そろそろ終わりにしてくれないかしら? 私にもやることがあるのよ」

「もうちよつと構ってもらうわよ!」

「行かせない……！」

「そういうことだから、行かせる訳にはいきません！」

「そう。なら……ここで墜ちなさい！」

ISのスペックは負けていない。少なくとも速度はこちらの方が上だ。けれど、明らかに戦い方は向こうの方が巧かった。

この人、こうした混乱の中での戦い方が分かってる。一体どうすれば……！

「きゃああああ！」

「っ、ふーちゃん！」

「かはっ……！」

「簪ちゃん！」

「さて、次は貴女ね？」

一瞬で二人が倒された。瞬く間にシールドエネルギーが消滅したのが見えていたけど、あれほど苛烈な攻撃をあの一瞬で二度も繰り出すなんて、やっぱり只者じゃなさそうだ。

けど、まあ。二人をやってくれたお礼はしないとね……！

「はあっ！」

「あら、まだやるの？」

「当然！ ウィングビット、《ナイトホーク》！」

一〇基のウィングビットと《夜羽》の武装特性を起動させ、更に接近しながらオールレンジ攻撃を仕掛ける。

やはり向こうはこちらの動きが見えているかのように弾丸を浴びせてくるが、それでも一〇基のビットによる一斉攻撃は防ぎづららしく、若干動きがぎこちなくなっていた。

けれど、これにも死角がある。相手が下方を背にしたら、私は上

空からの攻撃を行えなくなる。彼女がこちらを向いていてくれるからこうして戦えているが、まだ避難が済んでいない下へ行かれればウイングビットは使えない。

恐ろしいことに、彼女はその状況下でビットを狙い撃つだけの余裕を持っていた。ダメージは少ないが、当たる回数は増えてきている。このままではまずい。

だから、その前にケリをつけてやる！

「そこオ！」

「しまったっ！？」

一気に接近し、《夜鷹》を振りぬく。装甲を切り裂いたが、トドメにまでは行かなかったらしい。向こうはこちらを面白そうに見やっつてから、急加速で私たちの来た方向へと飛んでいってしまった。

「ま、待て！」

「カオリ、危険です！　今までのダメージが蓄積しているせいで、ウイングビットの制御に支障が出ています！　一度修復を！」

「……くそっ」

イヴに止められ、パラメータグラフに目をやる。恐ろしいことに《夜羽》とウイングビットの耐久度は二割以下に落ち込んでいた。たった数分の戦闘で、ここまで削られたのか。

「ふーちゃん、簪ちゃん、大丈夫！？」

「こっちは大丈夫よ！　簪も無事！　あいつは！？」

「ごめん、取り逃がした。一度戻って修復しないと。《夜羽》がぼろぼろだ」

「了解、こっちも修復中よ。降りてきて、簪の『モーティブ』で修復できるって」

どうやら二人は無事らしく、個人間秘密通信できちんと応答してくれた。よかった、怪我はないみたい。

とにかく、《夜羽》を修復するために私は下へ降りることにした。一体、何がどうなってるんだ……。

「ちくしょう、なんなんだクソがつ！」

「そう粗暴な言葉を使うと、品位が疑われるわよ？」
亡国機業実働
ファントム・タスク

部隊、オータムさん？」

「下調べは済んでるってか？ ハッ、上等だ糞ガキ、ぶっ殺してそいつも頂くぜエ！」

へし折られた五本の装甲脚を蹴り飛ばし、場所を確保する。

目の前にいるのは残る三本の装甲脚を背中に背負い、こちらに相対するオータム。背後にいるのは、オータムを警戒している義弟である。あ、いやいや、織斑一夏くん。うん、義弟じゃないね、まだ。けどゆくゆくは千冬さんと結ばれるわけだから、問題ないんじゃないかしら？

……ふう。よし、精神集中。私は出来る子危ない子！

「その前に、私も自己紹介しておきましょうか。名乗りって大切よ？」

「ああ!？」

ラブジャンキー

「私は《恋愛中毒》の更識楯無。そして私の専用IS、『ミステリアス・レディ』。以後よろしく?」

「けっ、今更名乗りだあ? 舐めてんじゃねえぞ糞ガキイ!」

装甲脚から撃ち出されたBT弾を水で弾き、蛇腹剣である《ラスティ・ネイル》で斬り付ける。はい、これで六本目。

「おいおい、その程度かい? そりゃあないぜ!」

「うるせえって……、言ってんだろぅが!」

一瞬、姿が消える。

その直後、私の上空で大量の弾薬を投下するオータムが見えた。何処に隠し持っていたのやら。

「死ねエエエエ!」

「た、楯無さんっ!」

大量の弾薬が誘爆を引き起こし、瞬く間に私の体を爆発で包んでいく。

傍目から見れば、私はこれで死んだように見えただろう。絶対防御はあるが、ブラックアウトには十分すぎる量の爆発が起きている。まあ、今までの私なら、こうさせる前にしとめるんだろぅけどね? 私はそうじゃないわけだ。

「は、ははは! バカが、図に乗るからこうなるんだぜ!」

「おいおい、まさか知らなかったのか?」

「っ……!?!」

粉塵の中から聞こえる声に、嗤っていたオータムが身構える。

「私は《恋愛中毒》なんだぜ？　愛ある限り私は死なねえ、覚えとくといいわよ」

「て、メエ……！！」

ぽかんとしている一夏クンと、歯を食い縛ってこちらを睨みつけているオータム。

彼女を見据え、言葉を紡ぐ。

「それではとくにご照覧あれ、愛と正義の舞踏会！」

さて、それじゃあ始めましょうか。

これも千冬さんのためなものね。

第43話 襲撃 ? (後書き)

やたらと強いこの人は亡国機業のあの人。

そしてぶっ飛んでいる楯無さん。一夏困惑。

次回も戦闘です。葵の戦闘シーンがやっとな……！

「それでは更識を始めよう」

書いてるときにふと言わせたくなった。

このネタでネタ帳に投下するかも。

第44話 襲撃 ？

更識楯無がオータムを弄んでいた頃、葵は一人『レベル4』以上の権限を持つ物しか通れない扉の前に立っていた。

その手には一振りの刀を持ち、ただひたすらにそこへ至る階段を凝視する。

「……来たか」

呟いた直後、階段が吹き飛んだ。

強烈な爆風にも目を閉じず、飛んできた瓦礫を素手で打ち払ってそこをただ見つめる。

立ち込める粉塵が晴れると、そこには左腕の装甲に一筋の切れ目を入れたISが立っていた。いや、正確には浮いているのだが。

それを見て、葵はようやくかと言わんばかりに刀を鞘から抜き放つ。光が漏れることもなく、気が狂わんばかりの妖気が溢れ出るということもなく、それは戒めより解き放たれた。

「久しぶりね、葵ちゃん」

「ああ、久しぶりだな。今はスコールだったか？」

「三年ぶり、と言ったところかしら。びっくりしたわ、まさか貴女ほどの女がこんな箱庭に入っているだなんて」

「事情があるのさ。のっぴきならない、な」

旧知の仲と言った様子で話す二人だったが、既に間合いを目測し、互いの喉笛を掻き切らんと視線を交差させていた。

重苦しいどころでない重圧が歡喜してその場を蹂躪する。威圧感という言葉をちんけに思わせるほどのプレッシャーが、互いから放たれていることを二人は感じた。

けれど、止まらない。

「それで、通してはくれないのでしょうか？」

「無論だ。死合うぞ、スコール……ッ！」

瞬間、刃が交差した。

音も光も、存在すらも置き去りにするような速度で加速した両者はそのままにぶつかり合うと、「ただの刀」と「ISのブレード」が同じだけの金音かなおとで泣き喚く。

一合、二合、更に増える。瞬きの一瞬の間に、五度は打ち合っていた。

しかし、それはほんの序章。エンジン体を暖めるために、ただ吹かしているだけに過ぎない。

「やはり、速い！」

「全てを退けるために、私は強くなった！ 心の通っていない木偶を使ったところで、勝ち目などないっ！」

言葉と共に、動作は更に加速する。

目で追うことすら出来なかった刃が、近くの外側に飛び出す。それを、スコールは確かに感じて受け止めていた。

スコールは思案する。目の前の少女は少女ではなく、もし少女と考えれば一瞬で体は赤い霧と消えるだろう。なればこそ、彼女はそれだけの実力を有していながら、今だ本気を出していない。

ISの限界ですら彼女に追いつくには相当な鍛錬が必要だったけれど、今は追いつけている。自らの鍛錬の成果ではなく、彼女に加減されているせいだ。

昔彼女と戦ったときに感じた、いつそ清々しいほどの恐怖を、目の前の迫り来る刃からは感じられない。少女が鈍ったわけではなく、それほどにスコールは目の前の少女、葵に加減されていた。

上段から繰り出される剣戟を受け止めようと構えた直後、あったはずのそれが消え、なかったはずの右下半身目掛けての刃が打ち上げられる。

それを左サイドと身を回すことで入れ替えて回避した刹那、今度は自身の背後というありえない場所からの突きがスコールを襲う。

「はあっ！」

気迫と共にブレードを振り下ろし、回避されたと理解する前に刃を返して更に回避方向へ剣を進める。

傍目から見れば異常な光景だっただろう。

ただの鉄の塊であるう日本刀を振るう葵が、最強の兵器と目されるISを駆るスコールを相手に一步も引かぬ、むしろ三步も四歩も踏み入った戦いを繰り広げているのだから。

けれど、スコールにとって見ればそんなことは当たり前のことだった。

彼女は葵のことをそれなりによく知っている。だからこそ、ISを纏って彼女の前に立って尚、警戒を怠らず、一撃の下に沈めるだけの気迫を滾らせていたのだ。

だがしかし、彼女は読み違った。三年、それだけの期間があつて葵がどれほど生長したのか、その式の最後の空欄、答えの部分を読み間違え、謝った解に導いてしまった。

「くうっ!？」

「まず、一本」

その結果がこれだった。

一瞬の隙を突かれ、あるうことが唯一葵に追いつけたであろう刃を真横から斬り落とされる。

ギリッ、と奥歯を噛み、どうすべきかを頭の中で計算する。しか

し、ブレードを失った今のスコールでは、まず間違いなく向かっていけば殺される。そうなる確信が、スコールにはあった。

手持ちの武装はグレネードランチャーとマシンガン、そして防御兵装の盾のみ。

すぐさま撤退の二文字を弾き出すと、真っ直ぐな視線にありつたけの敵意と殺意を乗せて葵を見据える。

「さて、どうする？」

「当然、逃げるわ」

言った直後、スコールはグレネードランチャーを狭い通路のそこから中に乱射すると、粉塵の煙幕を作り出し、それを収納する^{クローズ}と同時にマシンガンと盾を展開、^{オプン}煙幕の中に弾丸をありつたけ撃ちこんでいく。

そうしながら徐々に上昇していくが、スコールの耳には確かに聞こえていた。

『銃弾を斬り裂いて疾駆する』葵の足音が。

「逃すと思うか？」

左腕で構えていた盾へ衝撃が走ったかと思えば、左腕の装甲ごと盾が斬り落ちされる。

煙を靡かせて跳んでいた葵は、落ちていく盾を踏み台にして更に跳躍を重ね、スコールの目の前へと到達した。

「コアはもうござ、スコール！」

「やれるものならねえ！」

言葉と共にマシンガンを乱射するが、その弾丸の全てが刀によって叩き落され、残った弾丸はあろうことか葵が踏み台に使っている。

直後、スコールの首元へと、研ぎ澄まされた刃が迫った。

一方その頃、ラウラ、セシリア、シャルロット、箒の四人は二対四の戦いの最中にいた。

一機は福音事件の折に現れた『灰狼』^{グレイウルフ}、もう一機は、あるうことがイギリスより盗まれたもう一機のB T兵器搭載型IS、『サイレント・ゼフィルス』だった。

「はあああああ！」

「遅いぞ、第四世代！」

「私もおりましてよ！」

^{フレキシブル}「偏光制御射撃もできないクズが、私の前に立つな！」

戦いの中で四人は、『灰狼』はラウラとシャルロットが、『サイレント・ゼフィルス』はセシリアと箒が相手取るように動いていた。尤も、それが相手に動かされているのか、相手を自分達が動かしているのか、それが分からないのが気になるどころだったが。

「ちょこまかと……！」

「よく動くなっ！」

「ふふ、オオカミはそう簡単には捕まりませんわよ？」

『灰狼』の方は回避中心での、『サイレント・ゼフィルス』の方

はカウンター中心での戦闘が続いている。

度々互いがすれ違うことはあったが、お互いに気を割いている余裕はなかった。

代表候補生三名と第四世代が揃い、尚且つ二対一と言うこの状況下にあつて、二の側であるラウラたちは圧倒的に追い詰められていた。

「マドカ、墜とさないの？」

「くっ、黙れ！ 私に話しかけるな！」

軽薄な笑いを顔に貼り付け、『灰狼』を駆るキティの言った言葉に、『サイレント・ゼフィルス』を操縦するマドカはイライラしながら吼えた。

先ほどから頭の中をかき回す声に苛立ちながらも、マドカの操縦に危うさは全く感じられず、あまつさえ箒とセシリアの二人は追い詰められてきていた。

「早々に落として戻らせてもらうぞ……！」

「負けるものか……、私だって専用機持ちだ！」

「偏光制御射撃が出来なくても、貴女程度は！」

「吼えるな雑兵が！ 貴様らは地に這いつくばっている！」

六基のビットを繰り出し、更に正確無比な精密射撃を撃ち込んでくる彼女の標的は箒だった。

例え第四世代を持っていたとしても、その操縦技術は恐ろしく拙い。いまだ機体の性能に助けられてばかりの彼女にとって、六基のビットを手足のように使いこなし、その中で更に研ぎ澄まされた射撃を繰り出すマドカはとてつもない強敵だった。

「まずは足をもらうぞ！ そこだっ！」

「ぐっ、しまつたっ!？」

「箒さん!？ それ以上はやらせませんわ!」

「ビットも碌に扱えない癖に! 墜ちろっ!」

一撃を受けた箒を見て、激昂したセシリアは咄嗟にビットを繰り出す。

しかし、それは先読みしていたマドカのビットによって撃ち落とされ、抱えていたB Tライフルによって絶対防御を発動させられてしまう。

そのまま二度、三度と撃ち込まれ、セシリアは一瞬でシールドエネルギーをゼロにされてしまった。

「セシリア!？ 貴様アアア!」

「動きが直線的だ、ド素人が!」

「がはっ!？」

突っ込んできた箒へ向けて無造作に弾丸を撃ち放ち、追い討ちにビットから繰り出されたB Tエネルギー弾でシールドエネルギーを削り切る。

一瞬でエネルギーを空にされた箒もまた、戦う力を失いアリーナへと落ちていった。

「キティ、貴様はそこでそいつらと遊んでいる!」

「あら、私を置いていつてしまうの?」

「ッ、だ、まれ……! くそっ!」

キティの言葉に一瞬葛藤するような素振りを見せたマドカだったが、そう吐き捨てるとその場から姿を消す。

残されたのは、キティの乗る『灰狼』と、ラウラの乗る『シュヴアルツェア・レーゲン』、シャルロットの乗る『ラファール・リヴ

アイヴ・カスタム？』のみ。

「お仲間が行ってしまったようだ？」

「別にいいわよ、あの子にはあの子のやるべきことがあるもの。それまでは縛らないでいてあげるの」

「どうでもいいけど、投降するか帰るかしてくれないかな？」

「残念、撤退命令出るまで帰れないのよね。うちってほら、上が厳しいから」

まるで世間話でもしているかのような三人だが、その間にも戦いは続いていた。

ラウラの放ったAICをいとも容易く回避してみせると、そのオカミにも似た姿のISを持ってして、両腕に三枚ずつ取り付けられた刃で次々にシャルロットの放った弾丸を打ち払っていく。

それを行いながらも、ラウラのレールカノンを見切ってはそれすら回避し、隙間を縫って針を刺すように三角錐状のBTエネルギーを撃ち出してくる。

「そろそろ飽きてきたわ……」

「じゃあ、墜ちてくれないっ？」

「それはあ……、む、り 《ウルフズ》、武装特性発動！ 《狼^{ウル}の咆哮^{フ・ハウリング}》！」

叫んだ瞬間、甲高い共鳴音が《灰狼》の両腕に取り付けられた刃から発せられる。

耳を劈く^{つんざ}ようなその音が鳴り響くうちに、その刃は徐々に長さを伸ばしていった。

それを見たラウラは、信じられないような顔でそれを見た。

「バカな、武装特性だと！？」

「香織と簪ちゃんだけじゃなかったの!？」

「あら、お兄様たちだけが使えるわけではありませんのよ？ この子は私が生み出した娘、使えて当たり前ですわ」

「くっ……！ これはまずいか……！」

頬ずりするように刃に顔を近づけてウツトリと眺めていたキティだったが、突如として不満そうな顔に戻った。

そして大きく溜め息をつく、刃を元に戻して詰まらなそうに口を開いた。

「どうやら、作戦は失敗のようですね。はあ……。私はこれでお暇させていただきます、さようなら」

「な、逃さないよ！」

「よせシャルロット！ 今追ってもやられるだけだ」

「……くっ」

先ほどまでの攻勢が嘘だったかのように静かとなった空で、ラウとシャルロットは静かに唇を噛んだ。

第44話 襲撃 ? (後書き)

まだまだ続くよ襲撃事件。

オータムとスコールの顛末は次回に持ち越し。あれ、主人公出てない。

第45話 襲撃？そして……？

「コアはもうござ、スコール！」

「やれるものならねえ！」

マシンガンの弾を裂き、踏み台にしてその首目掛け刃を振るう。
その刹那、

「ッ、くっ！」

葵を狙って放たれた無数のBTエネルギー弾を刀で弾き、身を回転させて回避する。

傷は負わなかったが、そのせいで距離を随分と離れてしまった。
軽く舌打ちしながら空中で体を捻り、校舎の屋上へと着地する。
既に一般生徒や客は避難を完了しているらしく、屋上に人気はなかった。

「ちっ、外したか！」

「エム！？ 貴女なぜここに！？」

「貴様の方があの猫科の地球外生命体よりよほどマシだ！ 貴様こそ、あんな生身の女一人に何を苦戦している！」

「彼女を普通の人間だと思っでは駄目、今回は退くわよ」

「なにっ！？ 何故だ！」

「いいから言う事を聞いてちょうだい。これは命令よ」

しばらく迷っていたマド力だったが、仕方ないと溜め息をついてからチラリとアリーナ側を見る。

「貴様は先に行っている。私はオータムを拾ってくる。大方負けて

いる頃だろう」

「そうね……。お願いするわ」

エムは小さく頷き、一度葵の方へ視線を向けたかと思うと、そのままアリーナの方へと飛び去った。

「あら、見逃してくれるの？」

「もうそっちを追う手段がないからな。今日のところは見逃すさ」

「……ねえ、葵。本当にこちらに来る気はない？ 貴女をこんなところにとどめてしまう世界なら……」

猫なで声でスコールは葵にそう言葉を掛ける。

しかし、葵は静かに首を横に振った。

「くどい、言った筈だ。私の答えは三年前から変わっていない」

「……そう」

スコールは酷く残念そうにそう言つと、ゆっくりとその場を離れていく。

その様子を、葵はどこか悲しそうな瞳で見つめていた。

「ガッ!？」

水を纏ったランスが。『アラクネ』の装甲を剥ぎ取っていく。楯無は口元にくつきりと笑みを浮かべながら、オータムへの猛攻を続けていた。

その圧倒的な力に、一夏は驚愕から目を見開いてそれを見つめている。今まで訓練の相手にはなっていたが、きちんと相対したことのなかった彼女の強さに、驚きを隠せないでいた。

一方のオータムもまた、その強さに驚嘆していた。

IS学園の生徒会長が強いとは聞いていたが、これほど人間離れた強さだとは聞いていない。まるで人の皮を被った化け物と相対しているような感覚だった。

しかし、彼女も秘密結社の実働部隊の端くれであり、まずは生きて戻れることを最優先に考えることにした。

「ク、オラア！」

「おっと」

投擲された二本のカタールを水のヴェールで弾いた隙に、オータムは懷から咄嗟に四〇センチほどの四足の機械を楯無の方へと放り投げる。

それは空中で器用に開くと、楯無の胸元へと装着され、がっちりと体を拘束した。

「あらら？」

「はっ、本当は白式の方に使う予定だったが……、まあいい。 teme のISは頂くぜ！」

「え？ きゃああああああっ！」

オータムの言葉が終わった直後、楯無を電撃と激痛が襲った。

それは胸元の装置から発せられているらしく、激痛と共に徐々にISが解除され始める。

「楯無さん！ くそ、白式！」

「おせえんだよガキがつ！ おラァ！」

「ぐはっ！」

楯無を助けようと、『白式』を展開しようとした一夏をオータムが蹴り飛ばす。一夏の体は軽々と吹き飛び、ロッカーへと叩きつけられた。

その最中、楯無が動いた。ベキリ、と不穏な音を響かせて。

「あ？」

「痛いわ、すっごい痛い。痛くて痛くて泣いちゃいそうなんだけど、ねえそこるところどう思う？」

「テメエ、なんで動ける！？ 剥離材はちゃんと機能してるはず

！？」

に、と楯無は口を三日月に裂いて嗤う。

楯無が普通の最強であつたなら、既に勝負は決していた。オータムの勝ちとして終わっていただろう。

だがしかし、そうではないのが現実だった。

「痛いのは千冬さんに甘えれば治るけどお……。会長的には貴女をぶつ潰しておいた方がいいよね？ ということで大人しく捕縛されなさい、愛とか正義とかその辺の事情を考慮して」

「な、なんで動けるんだよテメエ！？」

「さっきも言ったじゃねーか、私は愛ある限り死なねえ、つてよ。

私は千冬さんへの愛と自己愛の塊だぜ？」

「わけわかんねえこと、言ってるじゃねえ！」

にやにやと嗤いながら言う楯無を、オータムはどこかおぞましい

気配を感じながら睨みつけた。

果たして、彼女がもう少し愚かしければ、あるいはもう少しばかりの思慮があつたならば、彼女もその結末になることはなかっただろう。

楯無はランスを量子変換して収納すると、ヴェールクロースを作り出していたアクアクリスタルを一箇所に集める。

そのままナノマシンによって操られた水で胸部に取り付けられた剥離材を包むと、ベキベキと水圧で押し潰し始めた。

ナノマシンによって操作されているそれはプレス機のような役割も果たすことが出来る。それでもつた数秒のうちに剥離材をペシャンコのブロックに変えてしまった楯無は、それを摘み上げると一夏の方へと放った。

「一夏クン、それ持っててね。あとで調べるから」

「は、はい！」

「じゃあとりあえず……、君のIS頂くね」

「ざっけんじゃ　！」

言つた直後、鋭く圧縮された水がオータムへと撃ち出され、四肢を壁へ固定する。

たつたそれだけで動けなくなったオータムへと近づき、楯無は静かに片腕をオータムへ翳した。

「包め、アルカエスト」

「ッ！？　ガ、ゴハアッ！？」

翳した手の平を伝い、大量の水がオータムを包み込む。かと思いきや、恐ろしげなしゅうしゅうという音を立てて装甲を溶かし始めた。

どろどろと溶けていく装甲と、削られていくシールドエネルギー

に、オータムは今度こそ驚愕に目を見開いてパラメータを見続ける。やがて完全に融解した装甲は消失し、強制的にISは解除される。ぼとつ、と待機状態である指輪に戻った『アラクネ』を拾い上げると、楯無は興味を失ったようにオータムを殴りつけた。

「がつ……！」

「はい、これでしゅーりょー。つまんねーし意外性ゼロだな、何か奥の手とか、こんなこともあるうか！ とかないの？」

「た、楯無さん、そいつ……」

「ああ、死んでないわよ。とりあえずISは回収したし……」

「ではそいつだけでも返してもらおうか」

壊れた壁から飛び込んできたのは、『サイレント・ゼフィルス』だった。

彼女は倒れているオータムの首を掴むと、顔の見えないバイザー状のその向こう側から楯無たちを睨みつけ、それから一瞬でそこから姿を消す。

嵐のような戦闘が、ようやく終わった。

戦いが終わった後、私達専用機持ちは生徒会室へと集められていた。

無論、一夏たちも一緒である。あと生徒会長たちも。

「で、会長。疲れている私たちをここに集めて何をするつもりですか？」

「香織ちゃん、ずばずば言っちゃーよ。今説明してくれるわ」

してくれる、という言葉に疑問を抱いたものの、説明はあるという事で納得しておくことにした。

疲れた体を椅子に預け、小さく溜め息を吐き出す。

と、全員に見えるほど大きな仮想ディスプレイが開き、そこにウサ耳の女性が映し出された。

「束ちゃん！？」

『はろーはろー、皆無事みたいで何よりだね！ 恋華ちゃん、報告ヨロー』

「はいはい 被害は建築物への影響以外なし、そっちも大した被害じゃないわ。あと、オータムって奴のISを剥ぎ取ったわ」

『オータムって言うと、アラクネだね。アメリカの第二世代型IS』

手元のディスプレイをいじくりながら、束ちゃんが言った。

というか、生徒会長と束ちゃんってこんなに仲が良かったの？

というか面識あったの？ しかも別の名前で呼んでるし。

『おや、どうしたのだい香織ちゃん？ 何か疑問でも？』

「あの、会長と束ちゃんって、面識あったの？」

『なるほど、言ってなかったね。私は『天災』という種類に属しているね、恋華ちゃんも同じ存在になったから、こうして仲良くしてるのだよ』

「『天災』は、まあそういうものだと思ってくれればいいわ。理不尽の塊。そちらのお姉さんには、敵わないけどねー」

その生徒会長の言葉に、壁にもたれかかって目を瞑っていた葵は

小さく頬を吊り上げた。

「あれほど死に急いでいた小娘とは思えないわね。立ち直った代わりに人をやめたか」

「いい気分よ？ 千冬さんの膝枕」

「……おい一之瀬姉、コイツを退かせ」

「……えー、現在会長は千冬さんの膝の上に頭を乗せています。俗に言う膝枕だね。」

会長ってこういう感じじゃなかったような……？

「面倒なので嫌です。小娘、お前の名は？」

「《恋愛中毒》^{ラブジャンキー}、よろしくね？」

「ふん。で、本名が恋華ね。暗部が本名を明かしてもいいの？」

「いいのよ別に。私にとって名前は千冬さんに呼ばれるための記号であって、知られたり教えたりすることで不利益を被るものではないわ。公の場では楯無で行くけど」

そ、そういうものなのかな。

まあそういうものだとな納得しておこう。理不尽の塊にならば毎日会っていた訳だし。

「そうそう、ちなみに私は《人類最低》だよ、あらためてよろしくね、《無色主義者》^{ノットマイン}」

「……古臭い名前を穿り返すな、捻じ切るぞ《人類最低》」

ぞくりと、久しぶりにお姉ちゃんの殺意を感じた。

ああ、お姉ちゃんの『二つ名』か。しかもそれってかなり最初の頃のものだね。よく調べて出てきたもんだ。

『あはは、ごめんねあーちゃん。さて、それで話を戻すけど。君たち皆には、もつと強くなってもらわないと。亡国機業ファントム・タスクがこうして動き出している以上、いっくんというイレギュラー要素を狙っているのはまず間違いないから』

「俺が……。それにあいつら、昔の俺の誘拐事件の時も！」

『そう。ちよつと調べてみたけど、いっくんの誘拐を頼んだのはドイツみたい。全ては筋書き通り、自国に縛り付けてちーちゃんのデータ採取と、自軍IS部隊の強化を目論んでたらしいね』

「なつ、私の祖国がそんなことを……。！？」

一夏の誘拐事件は、ラウラにも関係してくることだ。それが、ドイツの仕込んだ舞台の上で踊っていただけとは。

けれど、亡国機業はただ利用されるだけの相手じゃない。実際に戦ってみてそう感じた。

『おそらく連中は、誘拐したときにいっくんのデータを採ったんじゃないかな。だから、いっくんがISを動かせるという何らかの確証を持っていた。そういうことだと思うんだ』

「ねえ束ちゃん、結局連中はなにがしたいわけ？」

『それがねえ……。この束さんにも分からないんだ。データ、紙類はおろか、音声にだって組織の目的なんて一言も出てない。どうやって統率してるのかすら不明だよ。組織の規模もね』

ナターシャさんの言葉に、やれやれと言った様子で返す束ちゃん。亡国機業……。得体の知れない相手であることに間違いはなさそうだ。

とそのとき、そろーつと手を上げる人が一人。

「あの一……」

「ん、なにかなシャルロットちゃん？」

「僕とラウラはあの『灰狼』^{グレイウルフ}って機体と戦ったんです。そのときに、その操縦者が「お兄様」って……。臨海学校の時にもあったし、それは香織へ向けて言ってるみたいでした。あれは一体……」

「……そう言えば、香織の姿を大浴場で見かけたことはないな」

「確かに、言われて見ればそうでしたわ。香織さん、何かお風呂に入れない事情でも？」

おいーなんか変なところから綻び始めてるんだけどー。まさかこのタイミングで男バレの危機来るとは思わなかったわー。

ちなみに、疑惑の目を向けているのは一夏、篝さん、セシリアさん、シャルロットさんの四名。他は皆私が男だってことを知って……。

……会長知らないじゃん。

「そう言えば香織、お前ってあの戦いの時自分のことを僕って言うてたよな。普段は私なのに」

超絶鈍感朴念神一夏君ー！ どうして君はどうでもいいところでその無駄な記憶力が活用されるのー！？ いまだにISの専門用語は怪しいところがあるというのに何故なのー！？

「えっと、それは……」

「……もしかして香織って、男の子なの？」

姉さん、ピンチです。

第45話 襲撃？そして……？（後書き）

ということで香織ピンチ。

葵の人外っぷりと恋華の再起、おたのしみいただけましたでしょうか。

次回からはオリジナル展開が加速！そしてとっとと六巻買わないと進められなくなる！俺もピンチ！

第46話 泣き落とせ！

どうも、香織です。

男性疑惑浮上しました。まあ、むしろ今までばれなかったことの方がすごいと思うんだけど。

今までがんばってきた身としては、ここは何とか切り抜きたいところだ。なのでなんとかしてみよう。

「……それって、私が可愛くないってことですか？ 男臭いってことですか！？」

「えっ！？ いや、そういうことを言ってるんじゃないくてね！？ その」

「ひどいです！ シャルロットさんは私のこと男だと思ってたんですね！？」

ものすごい踏ん張って涙を溢れさせながら、シャルロットさんに詰め寄ってそう叫ぶ。

ちなみにこれ、中学校のときにも一回やりました。相手は泣いて謝った。嫌な思い出だけでも、使わねば切り抜けられないだろう。

「ち、違うの！？」

「違いますっ！ ひどい、ひどすぎますっ！」

ぱっ、と効果音がつきそうぐらいの勢いで生徒会室を飛び出し、屋上までひた走る。

『イヴ、誰か追いかけてきてる？』

『鈴が来ています。他には誰も』

よかった、これで一夏たちの誰かが来てたらアウトだったかもしれないし。

というかあれやるのすっごい疲れるんだよね。もう泣かれました、今日はもう出ません。出したくもないし。

とりあえず屋上でべたりと座り込むと、大きく息を吐き出した。すでに服は着替えているから、普段どおりの制服姿だ。

「香織、お疲れ」

「あ、ふーちゃん。参ったよ、まさかあそこであればかけるなんて。皆は？」

「千冬さんに説教されてるわ。襲撃事件については、今度会社に行ったときにまた話し合うつて」

「わかったー」

隣に座り込んだふーちゃんにそう返ししながら、大きく溜息、というか息を吐き出した。

こうしてボーっとしていると、襲撃なんてなかったみたいに感じるねえ。

「あー、かおりんと鈴ちゃんだあー」

「のほほんさん、今朝ぶりですね」

「相変わらずゆったりしてるわねー」

「あははー、とーうー」

どこから現れたのほほんさんが、突然私とふーちゃんのお腹の上に乗っかってきた。ちょうど布団に寝るようにうつ伏せに。しかも頭は私の方に。

のほほんさんって軽いなあ。二人で支えてるみたいなものだから余計だろうけど。

「とりあえず、おかえりー」

「はい、ただいま」

「ただいまー」

柔らかな笑い顔ののほほんさんを眺めながら、私はそう言葉を返す。

あー……、平和っていいなあ。

「なんだかおりんも鈴ちゃんも、いつも何かに巻き込まれてるねえー」

それはいわないでくださいのほほんさん。自分でもなぜなのかわからないんですから。

いや、まあそういう人種ばかり集まっているからだと思うんですけど。そういう場に行くって選んだのも私ですけどね。

「そういう体質じゃない？」

「うわーいやだー」

「とにかく、今日も生きて帰ってこれてよかったって、感じかなー」

……ほんと、そうだよなあー……。

「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、

投票結果の発表を始めます」

時は流れて翌日。

出し物への投票の集計も完了したらしく、恋華^{れんげ}さんの司会で集会が進行していく。

ちなみに、昨日の一件については翌朝に一夏たちから謝罪があったので水に流しました。これからはあまり疑われることもないだろう。大浴場に出てこないのは恥ずかしいからだということで押し通しました！ ええ！

「一位は、生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「……え？」

……えーつと、シンデレラってそんな好評だったの？ というかあんな騒動あったのに投票ってちゃんとできたんだ。まあ、彼女たちが撤退してからも一応学園祭は続いてたし、いいのかな。

「卑怯！ ずるい！ イカサマ！」

「なんで生徒会なのよ！ おかしいわよ！」

「私たちががんばったのに！」

やんややんやと声を上げる生徒たちを手で制し、恋華さんはものすつこくめんどくさそうに言葉を続けた。

あ、ちなみに恋華さんって名前は恋華さん直々に「呼んでいいよー」とオツケーができました。恋華さんいわく「恩人の妹さんだからね！」だそうです。お姉ちゃん何したの……！？

「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは別に参加を強制したわけではないのだから、立派に民意と言えるわね」

それって生徒側が馬鹿なだけじゃないかな。

部の利益より自分の利益を優先させてしまうところなるのだね。
周りを見て行動しよう。

けれどそれでもブーイングしたくなってしまうのが人の性、先ほどよりは静かになっていただけ、それでも声はやまなかった。

「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏君は、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」

「ま、まあ、それなら……」

「し、仕方ないわね。納得してあげましょうか」

「うちの部活勝ち目なかったし、これはタナボタね！」

「じゃあまずはサッカー部に来てもらわないと！」

「何言ってるのよ、ラクロス部の方が先なんだから！」

「料理部もいますよ」

「はい！ はいはい！ 茶道部ここです！」

「剣道部は、まあ二番に来てくれればいいですよ？」

「柔道部！ 寝技、あるよ！」

「それでは、特に問題もないようなので、織斑一夏くんは生徒会へ所属、以後は私の指示に従ってもらいます」

パンパン、と恋華さんがそう締めた。

一夏、大変だね……。

かくして大変なことになった一夏を眺めていると、クラスに戻る途中でナターシャさんがちよいちよい、と手招きしていた。

「えっと、なんですかナターシャ先生？」

「はい、恋華ちゃんの番号。渡してくれて頼まれたの。それと、昨日はお疲れ様。助けに入れなくてごめんね、ちよっと別行動して

たから」

そういつてナターシャさんに渡されたのは、小さなデータチップだった。

それをポケットにしまいこむと、ナターシャさんは既に消えた後でした。……私の周囲の年上の人間って、何で半分人間やめてるんだろう。

っていうか別行動って、何してたんですかナターシャさん。

「んー、それはひ・み・つ」

「えー」

「いい女には秘密が多いものよ」

「っていうか一瞬で消えてまた戻ってきたりしないでください。物理法則に従って動いてください」

「はいはい。じゃーねー」

そしてまた消えるナターシャさん。なぜだ、なぜうちの人たちは

……！

……いいや、考えても仕方ないし。

などと考えながら廊下を歩いていると突然端末に連絡が。ちなみに今日は集会だけでお休みです。昨日が平日で学園祭だったから、振り替え休日ってやつだね。

「はい、もしもし」

『もしもしー、恋華ちゃんだけどー』

「ああ、会長。私これの番号教えましたっけ……？」

『ウサギさんから聞いたのよ！ ちなみにあなたが男だってことも知ってるわ！ ばらす気はないから安心してねー』

……ばれてたあああ！？

まっつて、つてことは恋華さんもこっちの協力者になってくれるの？ お姉ちゃんとの仲とかいろいろ大丈夫？

『これだと話せないこととかもあるから、今日の夜、八時ぐらいに生徒会室に来てちょうだいな』

「え？ え、ちよつとまっ」

ぶつり。

……世の中って、忙しいね。

「はい、夜でーす」

「香織……大丈夫……？」

「ああうん、大丈夫」

最近なんだか疲れ気味なんだよねえ……。

寮を出るところで簪ちゃんと会ったので、簪ちゃんと二人で生徒会室へと向かっております。

ってーか何で夜に呼び出すのかなあ……。ほんとに。

「えっと、ノックした方がいいよね」

「……うん」

コンコン、と大きな扉をノックすると、中からどうぞ、と声がか

かった。うん、恋華さんの声だ。

「失礼します」

「します……」

中に入ると、生徒会長にお姉ちゃんが……、お姉ちゃん？ あれ？
あとナターシャさんもいるし。

「なんでお姉ちゃんとナターシャ先生がここに？」

「仲直りも兼ねて、話の翻訳にね」

「私顧問だから、生徒会の」

「は、はあ……」

「まーまー、座って座って。ほら簪ちゃんも！」

促されるままに、私と簪ちゃんはペタリとパイプ椅子に座り込む。
机の向かい側に恋華さんが座り、その横にナターシャさんが立つ
て、私たちの側にはお姉ちゃんが立っているような形になった。

「で、話とは……？」

「うん、一夏クンにはもう話したんだけど、一応これ話しといたほ
うがいいかなーと思って。私たち更識家は、古くから裏の世界で暗
躍する暗部に対抗する、専門の組織、いわば暗部用の暗部としての
役割を持っているわ。私はその一七代目当主よ」

あ、恋華さんがまじめだ。

つて、暗部？ 暗部……、よくわからないね。

「つまり、ヤクザよ」

「なるほど」

「違うわよう!？」

「でもあながち間違っではない……」

ってことは、恋華さんはヤクザの親分さんなのか。すごいなあ。

「ま、冗談だけど。一般人に被害が及ばないよう、また他の暗部に情報を取られないようにしている、いわば現代版忍者って所ね」

「あー、なんとなくわかった気がする」

「……まあその説明でいいか。一応私はそういう役回りもあるから何か困ったことがあればこっちにも相談してもらっていいわよ。ウサギさんと他ならぬ千冬さんの頼みだし」

恋華さんって、千冬さん大好きなのかな。すごい押してくるけど、
というか簪ちゃん、その「うっぜえええ……」って目やめない？
怖いよ。

「そういうことだから、私たちバインド・カンパニーとも共闘することがあるってことは覚えておいてね、香織君」

「あ、はい。けど、なんだか話が大きくなってきましたね」

「心配ないわ、ここにはほとんど世界最強が揃っているんだし。不本意ながら生徒会長も役に立ちそうだからね」

「あつ、ひつどーい！ 恋華ちゃん傷ついちゃったなあー……」

「じゃあ織斑先生のところにもいつてくれば？」

「オーケー！ じゃあ戸締りよろし」

く、まで言わずに恋華さんは扉から駆け出していった。寮の方向に。

……急展開過ぎませんか、これ。さすがに疲れた。

「……ガンバ」

簪ちゃん、その優しさが痛いです。

第46話 泣き落とせ！（後書き）

ということで、若干疲れちゃった香織ちゃん。
いろいろな人が暗躍し始めて、私も混乱し始めました。

第47話 枷

「一之瀬」

「なんです、織斑先生？」

あの事件から数日が経った日曜日、私用で校舎を訪れていた私と葵は、スーツ姿の織斑先生に出くわした。

「今暇か？」

「まあ、やることは特にありませんが」

「ではちよつとこい。模擬戦だ」

「……いやいやいやいや。話が見えないんですが」

何だこの人、脳筋にしか通じないような会話方法を選択するな。私は脳筋じゃないぞ。

いろいろやることもあるだろうに、なぜ今模擬戦なんだ？

「お前の肉体スペックは私を超えていることはわかったが、ISでどれほど戦えるのかを知りたい。この学園でお前の相手になるのは私くらいだろうからな」

「それを今やる理由は？」

「先日 of 襲撃事件も踏まえて、この学園の戦力を明確化させておきたい。いざというときに複数で攻め込まれて、一箇所の戦力が足りませんでした、では話にならないからな」

まあ、理由としては正しいだろうけど……。だからといってせつかくの休みを……。

『まあまあ、やってあげてよあーちゃん！』

「たっちゃん、するつと出てくるのってどうかな？」

突然目の前に開かれた仮想ディスプレイにそう突っ込む。本当にどこにでも出てくるな、たっちゃん。まあ天災ってそういうものだから慣れてるけど。

『ごみーん　でさ、一応こっちのデータ採りもしたいし、どうかな？』

「……まあ、そういうことなら。それで、どこでやるんです？」

そしてたっちゃん、てへぺろするな。それは君の妹の役目だ。

……はっ、私はいったい何を……。

「ああ、第一アリーナだ。今日はちょうど誰も使っていないからな」
「わかりました。ISはどっちを？」

「私は『打鉄』を使う。お前はどっする？」

「では私も『打鉄』で」

「わかった。ではいくか」

そんなわけでアリーナへ。

お互いISスーツに着替え、訓練機の『打鉄』を身に纏ってアリーナの中央に向かい合って立つ。

ちなみにたっちゃんの映ったディスプレイはすでに消えているが、アリーナの監視カメラでモニタリングしてるんだろう。あとは、この『打鉄』にハッキングしてデータ盗んでるか、コアネットワークから直接データもらってるか。どれもあり得るからすごいな……。

「準備はいいか？」

「はい。ルールはどうします？」

「シールドエネルギーが尽きるか、どちらかのギブアップで終了だ。

システム、カウントダウン」

カウントダウンを開始します。戦闘開始まで、五、四、三

……

管制システムの機械的な音声が響き、今までの暖かな雰囲気が消える。

そこにあるのは、互いの隙を見出し、鋭く尖った一撃を加えんと牙を研ぐ、二人の闘志。

二、一、戦闘開始

言葉の意味が伝わる前に私と彼女は地を蹴った。

一息で音速を超えて斬り込んだ互いの刃がぶつかり合い、大きく甲高い金音を奏でる。

なるほど、やはりISでは全力を出し切れないか。一瞬、極超音速を越えさせようかとしてみたが、専用機でもないこれでは間違はなく耐え切れないだろうと思いやめた。一撃で自分のISを大破させました、となれば少々カッコがつかないだろう。

「はっ！」

考えながらも、動くことはやめない。壊れない程度に力を制御^{セーブ}して刃を振るい、織斑先生の『打鉄』を破壊しないようにする。

繰り出される刃を次々に受け止めると、今度はこちらから打ち込んでいく。

織斑先生の打ち込みの速度は一秒間にせいぜい三回、これに耐えられるのなら、もう少し無理してもISに影響はないだろう。

「では、いきます」

宣言するようにそう言つて、手に持った刀を片手で打ち込んでいく。一秒間に二三回、無理をすれば倍以上だが、それをする必要はないだろう。というかそれをやったらISがもたない。

「くっ！」

織斑先生は何とか凌いでいたが、やがて凌ぎきれなくなったのかバックステップでこちらから距離をとった。そこで私もようやく刃を仕舞う。

『打鉄』の装備は近接用ブレードと短距離射撃用拳銃のみ、そして離れた織斑先生の手にはそのハンドガンが握られていた。

「まさか剣で負けるとはな。いくぞっ！」

「律儀に宣言しないでいいのに……」

ばやきつつ、ハンドガンの銃口から吐き出される弾丸をブレードで斬り落としていく。射撃速度はまあまあだが、この学園の誰よりも精確に狙いをつけていることだろう。しかも、三分の一ほどは意図的に位置をずらした弾丸を撃ち込んできている。

「なら、私もこっちで対応しましょうか」

片手でブレードを操りながら、もう片方の手にハンドガンを呼び出し、そっち側を前にすると同時に半身を後ろに下げ、こちらへ迫りくる弾丸に狙いをつけ、引き金を引く。

次から次へと弾丸を弾丸で撃ち潰しながら、時折その隙間を縫って本体の織斑先生に弾丸を放っていく。

「やれるだろうと思つたが、やはり相殺してくるか」

「この大きさの弾丸なら数百倍余裕ですね」

「私も斬ることはできるが、撃ち落すのは専門外だな」

「で、これでは決着がつかないのですか」

「……よし、私が許可を出す。全力で戦え。束、聞こえてるな？」

打鉄が大破した場合は今晚修復だ、出て来い」

『私を鼻で使えるのはちーちゃんくらいだねっ！ まあこつちもデ
ータ採りできるし、その代金分は働いてあげましようっ！ にひひ
ーっ』

音声だけのたっちゃんに苦笑いを浮かべながら、私はハンドガンクロースを
収納する。

次の瞬間には、残った弾丸をすべてブレードの腹で叩き落とし、織
斑先生の懷に飛び込んでいた。

「では、失礼っ」

ブレードを切り返すこと、一八回。一秒半程度で繰り出したその
連続攻撃に、織斑先生のISのシールドエネルギーは一瞬で消え去
る。ついでに私の打鉄もブザー音とともに停止した。

……やっぱり無理だったか。一五回辺りで限界らしい。やはりI
Sは枷にしかないか。少なくとも、このISでは。

「……ふう。やはり私でも勝てないか。ISの反応速度を超えると
いうのは滅茶苦茶だな」

「織斑先生こそ、ISをつけない方が強いでしょう？ 少なくとも
訓練用では枷にしかないはず」

「さてな。束、データ整理しながらでいいからとつと来い」

『はいはい。あーちゃん、今度会社に来るときまでに武装作っ
ておくからね！』

「ええ、よろしくね」

武装、専用機ではなく私が生身で使うものだ。

しばらくは専用機を持たず、生身で戦うことにした私がそのことをたっちゃんに伝えたら、「じゃあ生身で使う武装作るね！ 後でデータ採りさせて！」ということだったので、丁度よかった。短時間とはいえ休みを潰されるとは思わなかったが。

しかしたっちゃん、指名手配されて全国的に探し人なのに、ひよこひよこ出てくるな。まあ、仕方ないか。たっちゃんだし。

そんな感じで休日が終わった。ちなみに、翌日には打鉄は完璧に直っていたらしい。

「おー、おーおーおー！ すっごいねさすがだよさすがの私でもこれほどは思ってたって言うかももちろん想定はしていたけど想定外の予想外の範囲外だね！ うふふふ、うふふふふふふふ！ ハル、ハルハルハールー！ 」

『はいはい、なんですかお母様』

「今すぐ今までの武装プランを片っ端から引き出して！ 使えないってポイしたやつもバックアップあるから！」

『はい、ただいま』

月面コロニー『アルカディア・？』。そのIS建造用アリーナで、束は一人狂喜乱舞していた。

葵の乗っていた打鉄から採れたデータは案の定常軌を逸したもの

だった。腕力、脚力、握力、人間のスペックとしてはあり得ない数値ばかりが並び、そしてそれすらも手加減したものだと知っている束は、その数値で扱える武装の二段階ほど上の武装を構想していた。ハルは束の言葉通りにデータを引き出すと、彼女の前に羅列していく。

「やっぱり身に着けるタイプがいいよねとすると簞手とか甲冑とかでもそれだと武装って言うか防御用って感じだから剣とかにしとこうかなでもでも斧とか槍とかでもいいよねぐぬぬ決めづらいよあそくだ決められないなら全部作ってしまえばいいじゃないの精神が私にはあるじゃない的な！　ということでハル、全部作るよ！」

『はい！』

高らかに宣言すると、彼女はハルとともに製作に取り掛かった。人外仕様の武装一覧が作られるまで、もう少しである。

さて寝ようかとしたとき、私の携帯端末に着信があった。こんにちは、鈴よ。ちなみにこの端末は束社長お手製の超高性能端末で、携帯より便利なのに携帯より小型。しかも深海だろうと大気圏外だろうと使用可能というスペシャル仕様よ。

「もしもし」

『もしもし、ふあん・りんいん鳳鈴音元候補生ですか？』

端末から聞こえてきたのは、懐かしい女性の声。中国の代表候補生の管理をしている楊麗々さん^{ヤン・レイレイ}だった。

「あれ、楊候補生管理官。なんで突然？」

『番号は変えていなかったようです。そろそろ『キャノンボール・ファスト』の時期でしょう、こちらで開発途中だった高機動パッケージのデータを送ります』

「でも、私もう中国所属じゃ」

『これは貴女の『甲籠^{シエンロン}』専用のパッケージです。貴女の所の社長なら簡単に完成させるでしょう。理由は知りませんが、上層部の指示ですから』

今まではガツチガチの軍人さんだと思ってたけど、彼女の言葉にはどこか柔らかな響きがあった。

……なんだか、印象と違うかも。

『それに』

一度言葉を区切って、楊さんが続ける。

『貴女の事は、嫌いではありませんでした。指示にはきちんと従い、自分を消さず、決して天狗になることもない。今まで指導してきた者の中で最上の部類に入るでしょう』

「楊さん……」

『……私情が入ってしまいました。ともかく、頑張りなさい。鳳鈴音』

「楊さっ」

ぶつつ、と通信が切れた。

……楊さん、意外と私のこと良く見てくれてたんだな。向こうにいるときには怖いってイメージしかなかったから。
ともかく、キャノンボール・ファストに向けて、束社長にこれを仕上げてもらおう。

端末で回線を開き、私はメール画面を開いた。

第47話 枷（後書き）

お姉ちゃんががんばる、束さん大喜び、楊さんデレる。以上の三本でお送りしました。

あれ、主人公出てないな。

次回から本格的に6巻の内容に入ります。今日買えたからね！

第48話 身支度（前書き）

やべえ、六巻って意外と内容薄い……？

第48話 身支度

「はい、それでは皆さん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

我がクラスの副担任、山田真耶先生の声で、今日の授業は始まった。

ちなみに、今朝はセシリアさんが一夏の部屋に泊まったとかで大荒れだったのですよ。一夏はぐったり、セシリアさんはお肌つるつる。まあ、そういう行為には及んでないでしょう。一夏があれだから。うん。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能であることは先週言いましたね？ それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

山田先生の言葉でそこを見ると、一夏とセシリアさんが立っていた。

「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん！」

四基のBT射撃用ビットと二基のミサイルビットを全て脚部パーツに連結して、スラスターとして使用することで高速機動を実現させているらしい。さながら、それはスカートのように見えてなかなかにお洒落である。ところどころゴツゴツしていたり尖っていたりするけど。

セシリアさんはあの襲撃事件のときに『サイレント・ゼフィルス』と戦って、負けてしまったらしい。

サイレント・ゼフィルス、元々はBT兵装を積んだイギリスの第三世代型ISで、ブルー・ティアーズのデータを基盤とした二号機でもある。そのサイレント・ゼフィルスの操縦者が使いこなして見せた偏光制御射撃が使えないと悩んでいるらしい。

私は、たぶん一生しない悩みだろうなあ。BTエネルギーはよくわからないし。

「それと、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑君！ この二人に一周して来てもらいましゅー！」

クラスメイトから飛んでくるがんばれーの声援に、二人は軽く手を上げて応えた。

少しして、山田先生がフラッグを掲げる。

「では、……三、二、一、ゴー！」

フラッグが振り下ろされると同時に二人が一気に飛翔し、そこから加速して音速を超える。

瞬く間に小さくなっていく二人を眺めていると、ちょんちょんと腕を引かれた。振り向くと、そこにはラウラの姿が。

『どうしたの？』

『香織は、超高速戦闘は行ったことがあるのか？』

『ううん、ないよ。福音のときにマツハ二ちょっとは出したけど、戦闘はほぼ無理だった。まあ、あの時はISとしての形すら成してなかった頃だけだね。だから、たぶん初心者』

『そうか。では、私が教えてやろう』

『ありがとう、ラウラ』

軽く微笑むと、ラウラはたじろいだ様に顔を赤くする。可愛いなあ、小動物チックで。

そんなことを考えていると、周回を終えた二人が戻ってきていた。どうでもいいですが山田先生、揺れてます。そして視線が釘付けです。などと思っていたら、千冬さんが手を叩いて全員の意識を集める。

「いいか。今年は異例の一年生参加だが、やる以上は各自結果を残すように。キャノンボール・ファストでの経験は必ず生きてくるだろう。それでは訓練機組の選出を行うので、各自割り振られた機体に取り込め。ばやばやるな。開始！」

その掛け声で皆がばらけていく。

キャノンボール・ファストは、要するにIS同士でのレースだ。

ただし妨害ありの。

市のISアリーナを使用するイベントで、本来なら国際大会も開かれる競技だけど、ここIS学園ではちょっと事情が違うらしい。

今までの襲撃事件のこともあり、今年は本来不参加の一年生も参加することになっている。だから、今日はその特訓第一回目というわけだ。

「よし、勝つぞー」

「お姉さまにいいとこ見せなきゃ！」

「勝ったらデザート無料券！ これは本気にならざるを得ないわね！」

ものすごく気合が入っている女子たちに比例して、教師の皆さんのやる気も上がっている。やはりデザート無料券と織斑姉弟が効いているのだろうか。

誰だって、尊敬する、もしくは好きな人の前ではいい格好したい

ものだ。

「じゃ、ラウラ。よろしく」

「ああ、よろしく頼む。それで、香織はどうやってレースに出るつもりだ？」

「増設スラスターか、機体出力調整かだね。梟自体、高速戦闘にも使えるからパッケージはないし」

「そうか。私はドイツの姉妹機の高機動パッケージを調整して使用する。まあ、基本的には増設スラスターになるな」

なるほど……。

でも、この場合私は機体の出力調整かな。出力自体はあるし、スラスターは不用意に増やすとバランスとれなくなりそうだし。

そのことを伝えると、ラウラは小さく頷いた。

「では、どれをスラスターにするのか、攻撃に回すのか、いろいろ考えなければな」

で、それから数日。私はラウラに猛特訓を受けていた。

ふーちゃんは特注の高機動パッケージのテストで休日は会社に、簪ちゃんしんうちは『真打・鉄くろがね』に展開装甲を搭載するとかで月に行っているので不在なのです。

「そこだ、そこで曲がれ！　よし、そのままゆっくり速度を上げていけ！」

「よっ……、と。ここで……、こっ！」

カーブの前に力を抜いて減速気味にカーブに突っ込むと、角度を変えたところで急加速。以前ゲームセンターでやった、VRレーシングゲームを思い出すな。あれを全体的に加速させたような感じだ。

PICのおかげで空気抵抗も感じずにスピードを上げていくけれど、コースアウトしそうになるとかならず警報が鳴り響くから速度と進路には注意しないといけない。

『初日より大分上達しています。この分なら、大会までに十分なタイムが期待できそうですね』
『ありがと、イヴ』

頭の中で礼を言いながら、コーナーを攻める。本番はこれの他に相手からの妨害の対処と相手への妨害の両方をこなさなければいけないのだから、大変だ。
それでも、生き死にを賭けた戦いでないだけマシというものだろう。

そんな訓練を続けること数時間、日も暮れてきたところでその日の特訓は終了となった。

「疲れたぁ……」

「大分動きがよくなってきたな。しっかり食べてゆっくり休めよ」

「うん、ありがとウラ」

「気にするな。嫁のサポートも夫の役目だ」

「あ、あはは……」

それはまだ続いていたのでございませうか。

そんな感想とともに、今日は終わりを告げたのであった。

「どう、束社長？」

「大体は完成済みみたいだねー。今の『甲龍』にこれ以上のものつけようとしてもオーバースペックになるだけだし、それだと扱いきれないでしょ？」

「そうね……。弄けるところある？」

「全部弄くれるけど、それはだめ？」

「ダメー」

ところ変わってここはBC本社。

改造ルームと化した整備室で言葉を交わしているのは、束の考案したBCの制服に身を包んだ鈴と、同じくその制服にウサ耳を装着した束だった。

束曰く「宇宙の会社には制服が必須なのだよ！」という理由から考案されたこの制服は、ベージュの下地に白いラインをあしらいい見すると普通のスーツのように見えるものである。服はもちろんISの技術や宇宙開発用のなんだかを流用しており、マシンガンをばら撒かれようと傷一つ付かず衝撃も通さない超防弾、防刃仕様なのである。

ちなみに、胸元には社員証が貼り付けられるようになっており、人目で名前と部署がわかるようになっていた。無駄に豪華な服だが着心地は抜群で、下はズボンとスカートの両方が選べるようになっている。

余談だが、鈴はズボン、束はスカートである。余談だが。

「じゃあ、武装を改造しとこっか！ 後々展開装甲も積みたいしー……、それに関してはかんちゃんが一步リードだね！」

「オッケー、じゃあよろしく頼むわね」

「はいはい、任せなさいっ！」

嬉々として二五個のモニターに向かい、三八枚のキーボードを移動式ISラボ、『名前はまだない吾輩は猫である』の四本のメカアームを加えた六本の腕で叩いていく。

その姿にまるで無理している様子はなく、むしろ余裕すら感じられた。ともすればそれは片手間で済ませられそうなものだったが、鈴はそれに圧倒されることもなく静かに整備室から出て行く。

ここ最近、鈴の周辺に現れる大人は規格外ばかりだ。織斑千冬は中国に一度戻る前から半分人外の域に足を突っ込んでいるとわかっていたが、まさかそれ以上の規格外がぞろぞろ出てくるとは思いもしなかった。

それゆえに、高々二桁程度の部品の電子機器を操る程度の芸当は、規格外筆頭の束にとつては当たり前のことであり、鈴が驚く要素などまるでなかったのだ。

尤も、鈴本人はそのことにやや頭を悩ませているのだが、平然と量子変換転送装置などという、聞きようによつては物騒なものを利用している彼女もその異常が常識になりつつあるのだろう。

『一息入れますか？ 鈴』

「ああ、ハル。そうね、ウーロン茶でも淹れてもらえる？」

『はい、では食堂へ』

会社の事業のほとんどを取り仕切っている『HAL-30000』に比べ、鈴は軽い足取りで食堂の扉を潜る。

社内は一面銀風景で、一番近い言葉では『近未来』といったものだろう。

どちらかと言えばひんやりとしたイメージの椅子に腰掛けると、意外にもそれは冷たいと感じるほどの温度ではなかった。

少し待つと、天井から鈴用のマグカップを掴んだメカアームが降りてきて、ゆっくりと鈴の前にマグカップを置くと天井に引っ込ん

でいく。

最初はこれにも戸惑ったものだが、今では当たり前のようにお茶を飲めるくらいにまで適応していた。

「ふうー……。ところでハル、簪の作業は順調なの？」

『はい、もうしばらくするとお帰りになれると思いますか？』

「そう。じゃあ、ちょっと見に行ってくるわ。片付けお願いしていい？」

『はい、やっておきます。行つてらっしゃいませ』

丁寧な言葉遣いで告げたハルに軽く微笑むと、鈴は残りのウーロン茶を一気に飲み干してからカツンツ、とテーブルに置き直して席を立つ。

普段つけている『甲龍』の待機状態、黒のブレスレットは高機動パッケージを最高の状態に持つていくために、そしてついでの整備のためにと束に預けてあるため、普段はあったその感触がなくなっていることに、なんとなく不安感を覚えた。

それを振り払うようにタタツとワープ装置にはいると、手元の装置を操作して月のコロニーに設置してあるワープ装置へ接続、数秒のカウンtdownの後に鈴の姿はそこから掻き消えた。

そしてその直後、月のワープ装置へと到着した鈴は、簪がいますというIS建造用アリーナに向かう。

重力は月と同じになっているため、軽々と身を宙に浮かしながら走って、もとい跳んでいく。

薄く青の塗装を施されたアリーナの扉を潜ると、そこには『モータータイプ』を起動して『真打・鉄』の装甲を取り替えている簪の姿があった。

「簪、お疲れ」

「あ、鈴。うん、お疲れ」

「どう、順調に行ってる？」

「調度背面の装甲と脚部の装甲のパラメータ同期が終わったところ。何か用事？」

普段は常につけている小型ディスプレイ用眼鏡を外し、鋭い視線で仮想ディスプレイを睨んでいた簪は、訪ねてきた鈴を見ると目じりを落としてやんわりとした笑顔を作る。

その姿が香織にどこなく似ていて、鈴は抱きしめなくなる衝動をぐつと堪えた。傍から見れば立派な変態さんである。

「用事ってわけじゃないけど。にしてもいまだに信じられないわね、ここが月だなんて」

「……ねえ、コロニーの端っこ行ってみる？」

「時間はいいの？」

「後は片付けただけだから、大丈夫」

「じゃ、行ってみますか！」

パンツ、とハイタッチすると、反動でぐるんと回転しそうになつて慌てて後方宙返り。月の重力の弱さはここでも現れていた。

簪も同様にして体勢を立て直すと、改めてアリーナを出て探検を始めることにした。

結局、その後二人は三時間近くアリーナを駆け回り、たつぷりと月を堪能したという。

未知の世界は人を魅了してやまない。彼女たちもその一人なのである。そして遅くなりすぎてハルに心配されたのは彼女たちだけの秘密である。

第48話 身支度（後書き）

月を駆け回る少女たちのお話でした。

次回は本番、鈴と簪の高機動仕様お披露目です！

第49話 キャノンボール・ファスト

やってきました、キャノンボール・ファスト本番。

現在は二年生のレースが行われていて、お姉ちゃんも出場している。見た感じぶつちぎりで『走ってる』。もう一回言おうか、『走ってる』。

皆啞然としてるけど、私はお姉ちゃんの速力に付いていけているISの方にびつくりだ。

「違う……。あれ、バチバチいつてる……。もう脚部パーツが機能してない……」

「えっ」

「つまり葵義姉さんは使えないIS抱えて走ってるってこと!？」

頭を振るふーちゃんだけど、これは最早慣れるしかないのですよ。そうかー、だからお姉ちゃんが一番最後のレースを希望したのか。そりゃ無茶できないもんね、めっちゃ怒られそうなんだけど。

なんて思っている間に二〇〇メートル以上離してお姉ちゃんが単独トップゴールを果たす。……まあ、勝ったからいいの、かな？

「相変わらず義姉上は滅茶苦茶だな」

「まあ、お姉ちゃんだし」

「そうね、義姉さんだもんね」

「お義姉ちゃん……だし……」

はい、満場一致で仕方ないという結論に達したのでお話終わり！

「それでいいのか……」

「これに納得したら負けな気がする」

「しかし、なぜあれほどの方が燻っていらつしやるのかしら……」
「そこなんだ、突っ込むところ……」

上から一夏、箒さん、セシリアさん、シャルロットさんです。仕方ないね！

で、次は私たち一年専用機組のレースなので、全員移動なのです。というか、全員すでにISを纏って待機してるからね。

「それにしても、なんかごついな。鈴のパッケージ」

「もともとごつい奴を社長が更に改造したからね。速度だけなら簪にだって負けないわ」

ふーちゃんは、中国で開発されて束ちゃんが仕上げた高機動パッケージ『バオ・フエン暴風』を装備している。増設スラスター六基に全身に防御用装甲が追加され、生半可な攻撃ではびくともしないほどの強度を誇っている。更に衝撃砲は煌々と紅く煌いており、何か特別仕様になっていることが伺えた。ついでに随時ふーちゃんの周りをびゅんびゅん飛び回っているけど、あれはふーちゃんの意志で動くんだらう。

「私を忘れてもらっては困るな。戦いとは流れた、全体を支配するものが勝つ」

ラウラはドイツから送られてきた三基の新型増設スラスターを装備しており、速度的には十分だらう。そこにラウラの操作技術が加わるのだから、油断ならない。

「流れは、断ち切るものだよ……」

簪ちゃんと言えば、恐ろしいことに背面装甲と脚部装甲を全て

展開装甲に取り替え、《あかがね朱鉄》の灰熱エネルギーを展開装甲で取り

込み、常時瞬時加速状態を作り出すらしい。しかもそれは超音速機動状態のことだから、通常の云十倍の加速があるだろう。

しかも展開装甲によって脚部には何か武装を仕込んでいるとかで、そちらも恐ろしいところだ。

「私と同じ展開装甲……、油断ならない相手だな。簪、負けんぞ？」
「……うん」

簪さんと簪ちゃんが、互いの眼を見てにやりと笑う。おお、ライバル同士のアイコンタクトと言うやつか！？ いいなー、私もやってみたいものだ。

あ、のほほんさんとはできるけど、ライバルじゃないし。

私は中の出力を調整して使用するだけだけど、一次移行しただけファースト・シフトあつて速度もコントロールも抜群だ。負けるつもりはない。

「みなさーん、準備はいいですかー？ スタートポイントまで移動しますよー」

山田先生の声で、私たちはマーカー誘導に従ってスタート位置へと移動した。

この独特の緊張感、命を欠けなくていい戦いつて、なんて良いんだろっね。……それはそれで気持ち悪いけど。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します！』

アナウンスを合図に、私たちは一斉に高速機動用のハイパーセンサー・バイザーを下ろす。私以外。

梟にハイパーセンサー・バイザーは付いていない。ハイパーセン

サーはあるけど、通常状態で高速機動が可能なスペックのため、バ
イザーはないのだ。

三

スラスター音が鳴り響き、辺りに満ちる。

二

じわりと汗が出てきて、軽く頭を振った。

一

よし、

—……、ゴーツ！

ドンツ！ と急速な加速で景色が飛び、一瞬一夏が戸惑った様子
を見せる。もちろん、こっちはそんなこともなく全ての情報を取り
込んで的確なコースに入っていく。

練習で何度も繰り返したスタートダッシュの成果が出て、出だし
は上々。後はここからだ。

先頭はセシリアになっていたが、そこへふーちゃんが突っ込んで
いく。

「オラオラオラオラア！ 当たると痛いわよオ！」

二基の衝撃砲から放たれる見えない弾丸は、予想以上の勢いで周
囲の壁を削っていく。それと共にセシリア目掛けて撃ち放たれたそ
れは、見事にセシリアのスラスターにダメージを蓄積させていつて

いた。

「くっ、さすがですわねっ！」

「もちのロンロン、あの人に手を加えてもらって、負けるわけには
いかないでしょうが！」

「私を、忘れるなよっ！」

そこへ、加速したラウラの大口徑リボルバー・キャノンが撃ち込まれる。しかし、強化された防御の前に、弾丸はすげなく防御されてしまう。ダメ押しとばかりに衝撃すら吸収して見せたそれに目を見張ったラウラは、目標変更して防御装甲のない部分へと銃弾を浴びせていった。

「香織、ぼさつとしてると抜いちゃうよ！」

「させませんよ。はあっ！」

ウイングビットを展開、肉薄してきたシャルロットさん目掛け次々と射撃を開始する。ちなみに、これはBT兵器です。……うん、この前BTとか良くわからないしって言ったのほんとだからね？だからエネルギーとか曲げられないし。

ちなみに、私のBTエネルギーは黒く輝いています。ちょっと不気味だけどかつこいいからいいや。

もちろん、ビットだけで落とせるとは思っていないけど、それでも足止めには十分すぎる！

「くっ、強いね！」

「それはどうも！」

その一方で、一夏と篝さん、そして簪ちゃんの方も接戦になっていた。

一夏の《雪片式型》と第さんの刀は互いにレーザーを撃ち、あるいはそれを打ち消しながら戦っている。その中に、たびたび斬り込んでいるのは簪ちゃんだった。

《朱鉄》あかがねを片手で振り回しながら、恐ろしい速度で変幻自在に切っては離れ、切っては離れを繰り返している。……あの、すごい怖いんですけど。

《朱鉄》あかがねはまだ発熱が初期状態だからいいけど、時間が経てば経つほど威力は上がる。早いところ離れたほうが良いかな。

そんな感じで一週目を終えた私たちだったが、唐突に穏やかな戦いは終わりを告げた。

上空から降り注いだBTエネルギーがトップ集団を撃ち抜かんとし、それに対してふーちゃんが装甲を盾にして防御する。さすがと言うべきか、ほとんどダメージはなさそうだった。

「!? なんだっ!」

「あれは……『サイレント・ゼフィルス』!」

「それに『灰狼』グレイ・ウルフまで!? どうなってんのよ!」

一夏、セシリアさん、ふーちゃんの言葉で、全員が意識を戦闘へと切り替える。

ファントム・タスク
亡国機業の襲撃だった。

「今度は何が目的なの?」

「あら、随分と嫌われてしまいましたわね。今日はエムちゃんのお供ですわ」

警戒心を露わにして問うた香織に、『灰狼』の操縦者、キティは拗ねたような顔から一転、朗らかな笑みを浮かべてそう答えた。

香織の周囲には先頭集団に混ざっていた鈴とラウラ、後方で斬り合いを演じていた簪が集まっており、自然と『灰狼』は香織たちが『サイレント・ゼフィルス』は一夏たちが担当するようになっていく。

「まあ、なんでもいいわ。よくもぬけぬけと顔を出せたものね」

「ここで仕留めさせてもらおう。これ以上手出しされても面白くない」

「そういうことだから……」

一斉に武装を展開、臨戦態勢をとる。油断すればいかに装甲の厚い今の鈴ですら、たやすく落とされるだろう。相手はそれほどの実力者であり、香織たちはそれに対抗するだけの技術をいまだ身につけるには至っていなかった。

対するキティはいえば、実に楽しそうにカラカラと笑い、それからようやく武装を起動させた。腕部装甲に直接取り付けられた三本の爪のような、『ウルフズ』という名の近接兵装。

カチンカチンと互い違いに爪を打ち鳴らしながら、直後。

瞬く間もなく『灰狼』は距離を詰め、その鋭利な爪の切っ先を振るい突き立てた。

「ぐっ!?!」

「香織! このお!」

「あはは! 今の衝撃砲程度の速度では、この子は捕らえられませんわよ!」

縦横無尽、まさしくその言葉の通りに、キティは壁も天井も床も、重力など知ったことかと言わんばかりに駆け回り跳び回り、衝撃砲から吐き出される無色透明の弾丸を悉く回避していつていた。

「相変わらずちょこまかと飛び回りおつて！ はっ！」

「っと、止められてしまいましたわ」

「これで、終わりっ！」

がくんつ、と唐突に灰狼の動きが止まる。中空で不自然に停止したそれを留めているのは、ラウラの操る『シュヴァルツエア・レーゲン』から発せられるA I Cだった。

いい的となつた灰狼目がけ、今度はそれなりに排熱量が増した《朱鉄》を構えた『真打・鉄』が突っ込んでいく。

一息で斬り潰せるというところまで迫ったところで、キティはその頬を吊り上げ妖艶な笑みを浮かべた。

「で・も ウルフ・ハウリング 《狼の咆哮》！」

「また武装特性か！」

「何あいつ、そんなものまで使えるわけ！？」

襲撃事件の折には腰を折られて結局その正体を露わにすることはなかった武装特性が、今度こそ発動された。

狼の遠吠えのような奇怪な音が鳴り響く中、A I Cが一瞬で破壊され、その危険性に気付いた簪は何とか後退する。

「バカなっ！？ A I Cが！」

「《ウルフズ》の武装特性は超音波攻撃、停止結界程度の弱い力で留めることはできませんわ？」

「なんか話し方がむかつくわね……！ 《龍砲》！」

あつけらかんと言い放ち、鈴の放ってくる龍砲をまるで見えていくのかのようにその爪で打ち払っていく。

見たところシールドエネルギーは減っていないため、鈴は早々に龍砲での射撃を諦めた。止められるとわかっていてリソースを消費するほど脳筋ではない。

その時、静かに香織が羽を開く。

「サンプリング完了、あれは破れるよ」

「ほんと!？」

「うん。梟、行くよ　っ!」

言葉が終ると共に四枚の羽根が振るえ、共鳴する。

そこで生まれた鳥のさえずりは、確かな力となって場内を駆け巡っていた。

「《狼の咆哮》を《バードエイクとりのさえずり》で中和しているのですわね？

さすがお兄様、サポートAIのレベルも高いご様子で」

「……どこまで知ってるのかな？」

「大体のことは知っていますわよ？　まあ、それはいいですわ。戦いましょう、お兄様!」

超音波を掻き消され、しかしキティに弱った様子はどこも見当たらなかった。

爛々と戦意に瞳を輝かせながら突っ込んでくるキティを迎え撃つべく、香織は《よたか夜鷹》を_{オープン}展開して構える。

それと共に、鈴の衝撃砲、ラウラの砲撃、簪の《あおがね蒼鉄》の弾丸が飛んでくるキティ目掛け撃ち出された。

「はああああ!」

「あはははは！」

三人の砲撃とも呼べるそれを身に受けてなお、キティは健在だった。

『灰狼』から煙を立ち上らせて『梟』と打ち合い、その速度は瞬く間に上がっていく。

戦いは、更に苛烈さを増していく。その場にいる全員がその予感を感じていた。

第49話 キャノンボール・ファスト（後書き）

レース回なのに半分くらい戦闘でござる。
次回も戦闘続きです。

第50話 二度目の襲撃戦

香織たちがコースで戦闘を行っていた頃、葵は一人換気口から管制室へと向かっていた。

二年生と言えど専用機がなければただの一般生徒であり、その戦力は大きく減少する。よって二年生も実技成績上位者を除いて非難しており、その実技成績上位者も非難誘導に当たっているのだが、葵にとってはそんなものはただの規則の域を出なかった。

「あの二人が来ているなら……、彼女も必ず」

それは殆ど確信ですらあった。

換気口の格子窓を音を立てずに外して中を覗くと、管制室は大わらわになっっていた。

しかし、それは葵にとって好都合。音もなく彼らの背後に降り立つと、一人目を手刀を後頭部に叩き込むことで気絶させ、もう一人を上段蹴りで気絶させる。

一瞬で管制室を制圧すると、葵は迷わずコンソールへ向かった。

「上空部分のシールドバリアが破られてる……、あそこから侵入したのか。なら……！」

手元のコンソールのキーを何度か叩くと、配列された沢山のボタンのうちの一つを押し込む。すると、修復完了の文字と共にシールドバリア強度が最高まで引き上げられたことを示した。

それを確認した葵は、次に監視カメラの映像を次々に拡大していく。やがて、目当てのそれを見つけた葵は監視カメラの番号と、場内の監視カメラの番号が書き込まれた地図を見比べて、その位置を頭へと叩き込んだ。

「ビンゴ、やっぱり来てたのね」

管制室を出てひた走りながら、葵は呟く。

金色の髪にそれを引き立たせる色のスーツ、人としての魅力に満ち溢れた彼女の名を呼ぶ。

無表情に、あるいはその中に苦々しげな色を隠して。

「スコール」

「ふふ、エムもキティもさすがというべきかしら、あれだけの専用機持ちを相手に、よく立ち回るものだわ」

しかし、と彼女は続ける。

人気のなくなった客席の中で、優雅にもその椅子に腰掛けて。

「エムの方の相手は大した事ないわねえ。篠ノ之博士の手掛けた機体、それも一機は第四世代。もっといい勝負になるかと思ったけど

……」

「あら、イベントに強制参加しておいて評論家気分かしら」

「IS『モスクワの深い霧』グストイ・トゥマン・モスクヴェだったかしら？ あなたの機体は」

「それは前の名前、今は『ミステリアス・レイディ』と言っの」

「そう」

振り向くと同時に、ゆつくりと手にした鞘から刃を抜き放つ。

スコール、彼女が自分自身の感覚を信じるならば、眼前の少女は人の領域から外れかけていた。故に、ISを出してこない限りは生身で対応する。完全に人から外れた人を相手取るために強くなつたその体は、未だやや不完全な『天災』を相手取るには十分であつた。

「ならば、潔く散りなさい。そのISを動かす前にね」

「……貴女は」

「……？」

突然俯いた楯無は、ぶつぶつと呟いていたかと思うと前髪を垂らして目を隠しながら突然スコールを見る。

「貴女は、千冬さんの邪魔をするのかな？」

「……そう、それが貴女というわけね。そうね、私が動けば彼女の仕事は増えるわ、どうする？」

「なら容赦しねエな。《恋愛中毒》ラブジャンキー 更識恋華、愛し尽くして枯らし尽くして鬬り尽くして殺し尽くしてやるわ」

目の色を変え、楯無もとい恋華がそう声を荒げた。

姿かたちは変わっていないというのに、雰囲気はまるで別人。それこそ仮面を付け替えた、否、仮面を外した彼女の姿なのだろうと、スコールは睨む。

「準備はいいかしら？」

「ええ、いつでも？」

「それでは」

刹那、ドンツ！ と空気の押し出される音と共に二人はその力を

ぶつけ合う。

びりびりと大気が震え、最大まで引き上げられたシールドバリアですらギチギチと悲鳴を上げる。その中であって、台風の目である彼女らは次々に刃と拳をぶつけ合っていた。

「本当に、滅茶苦茶なのね！ 天災と言う人種は！」

「口を開くな言葉を発するな息をするなッ！」

どこか楽しそうなスコールとは対照的に、憎々しげな色を映して吐き捨てる恋華。

人から外れたものと戦うために人から外れかけた女性と、人であることを自ら捨て去った少女の戦いが更に加速せんとした、その直後。

「どけ、《恋愛中毒》」

ぞわりと、怖気立つ声音がその耳に音として伝わった瞬間、恋華は咄嗟にそこから飛び退いていた。

その直後に、一瞬前まで恋華が立っていた場所が破裂し、そこから一人の女性が飛び上がってきた。

「スコール、待たせたな。貴様の相手は私だ」

「葵ちゃん……、来てくれたのね。ええ、死合いましょう」

「待ちなさい、こいつは私が殺すのよ」

「貴様はコースの一年を助ける。まだ未熟な彼女たちでは太刀打ちできないだろう」

その言葉に恐ろしい重圧を感じた恋華は、小さく溜め息を吐くと、こねても仕方ないと考えたのか、葵の開けた穴を通って下へと降りていった。

確かに、恋華でもスコールを捕まえることはできただろう。だが、その場合恋華はスコールを間違いないく殺してしまうため、情報を引き出すことができない。そのぐらいならば、腕の一本でも奪っておとなしくさせられる葵の方が彼女の相手には適任だった。

それに、恋華はまだ天災となつてから格上の存在との戦いを経験していない。その初戦がスコールでは荷が勝ちすぎていた。

「……行つたか」

「ええ、行つたわね」

二人してそう呟いた、そう互いが認識した瞬間、殺気にも似た色濃い闘気を放つ。

あまりに濃厚なそれは周囲の椅子や床をひしゃげさせ、どこからか亀裂の入る音すら聞こえてきた。

「安心しろ、監視カメラはここだけ止めてある」

「そう。なら安心して戦えるわね」

足場を確保するように踏ん張ると、べこりとその足元が円形に陥没した。

その刹那、二人は一息で互いの攻撃圏内に飛び込むと、スコールは元々持っていた刀で、葵はどこからか取り出した刀で打ち合う。それによつて生み出された衝撃波で今度こそ、周囲に亀裂が走っていく。

一瞬にその一〇倍以上の打ち合いを繰り返す二人の感覚は、その一瞬ごとに鋭敏になっていく。

どこまでも鋭く、そしてどこまでも広くなつていくそれを感じながら、二人は確かに自らの刃から鳴った亀裂の音を聞いた。

「はあっ！」

「くっ！」

葵の狙い澄ました一撃が確かにスコールの刃を捕らえ、パキリと碎ける音と共にスコールの刀が根元から折られ、吹き飛ばされる。壁まで一直線に飛ばされたスコールは、そのまま壁にヒビを入れる勢いで激突した。

「かはっ……！」

「……ちっ、監視カメラの範囲内か。スコール、勝負は預ける」

心底残念そうにそう吐き捨てると、葵は出したときと同じようにどこかへと刀を消し去り、自分の開けた大穴から姿を消した。その様子を見送り、スコールは一人ごちる。

「……無様ね。これほどになってもまだ勝てないだなんて」

自嘲し、それから痛みをこらえて立ち上がる。

その目は闘士ではなく亡国機業幹部の一人としての色に移り変わっていた。

「はあああ！」

「例え第四世代と言えど、乗り手がひよっこではな！」

「黙れっ！」

「箒、熱くなりすぎたらだめだよっ！」

「逃しませんわ！」

「セシリア、前に出すぎだっ！」

『サイレント・ゼフィルス』を相手取っている一夏たち四人は、相手に突っ込もうとする箒、セシリアと、それを抑えながら戦う一夏とシャルロットに分かれていた。

箒は自らの未熟さを指摘された怒りから、セシリアは二号機を取り戻そうとする使命感から先走りすぎており、そのことに一夏とシャルロットは齒噛みしながらも何とか戦線を維持している。

「二人とも突っ込みすぎだよっ！ 戻って！」

「だがっ！」

「ですが！」

「それで二人が落とされたら元も子もないよ！ 頭を冷やして！」

シャルロットは半ば悲鳴のように叫び、箒たちはようやくその動きを止める。

と、そこを『サイレント・ゼフィルス』のBTライフルが撃ち抜いた。

「ぐうっ！」

「箒！ てめえ！」

「一夏、駄目だつてば！ ああもう！」

大きなダメージを受けた箒を見て激昂した一夏が、《雪片式型》ゆきひらがたを手に《零落白夜》ていらくひやくやを発動させて切り込む。

その様子を見たシャルロットは、最早悲鳴と変わらない声を上げながら仕方なく連装ショットガン《レイン・オブ・サタデー》でサポートに回ることにした。

「零落白夜、確かに当たれば恐ろしいが、当てられる腕を持っていないだろう」

「うるせえよ、とつとと堕ちやがれ！」

「わたくしもお忘れにならないでくださいまし！」

「だから二人とも、突っ込みすぎだつてばっ！」

《零落白夜》を発動させた『白式』、この中で最高性能を誇る『紅椿』、Bタイプルを構えた『ブルー・ティアーズ』の三機を相手取り、なおも『サイレント・ゼフィルス』は嘲笑うように回避しながらライフルで鋭い一撃を加えていく。

なんとかサポートに回ろうとするシャルロットだが、動き出すその隙を見逃さずに放たれるBタイプルを咄嗟に回避していくため、どうしても三人のサポートには回れなかった。

だが、次の瞬間、軽々と回避して攻撃を行っていた『サイレント・ゼフィルス』に無数の銃弾が撃ち放たれた。

「ちっ、増援か！」

「その通り。葵ちゃんに追い出されちゃったからね、貴女で憂さ晴らしさせてもらうわよ」

先ほどと違い生徒会長の目に戻った恋華が、にいつ、と口端を吊り上げてぞつとするような笑みを浮かべる。

その身には、大量の水のヴェールを纏ったIS『ミステリアス・レイディ』を纏い、四門のガトリングが装備されたランスを手にしていた。

「更識楯無……、いいだろう、この雑魚どもに加わってようやくまともに戦えそうじゃないか？」

「あら、私が加わったら戦力過多よ？ そんなに悠長にしてい

いのかしら」

「ふん……、やってみればわかることだ！」

六基のビットと共にB Tライフルを乱射するも、直進してくる『ミステリアス・レイディ』のヴェールに当たった途端にエネルギーが水に溶け込んでしまう。

水を操っているナノマシンがB Tエネルギーを散らしていることに気付いたエムは、ピンク色のナイフを取り出して直接格闘戦を挑まんと加速を試みようとし、

「なんだ、スコール。……ああ、わかった」

そのまま取り出したばかりのナイフを量子変換して消滅させると、エムは興醒めだとはかりに五人の方へ眼を向けた。

「指示が出たのでな、撤退させてもらおう」

「逃がすと思いますか？」

「私が、逃がしてもらおうと思っているとでも？」

「よしなさい、セシリアちゃん。あの子は強い、準備のない現状では面倒よ」

食い下がろうとするセシリアを恋華が押し留め、その様子を眺めながらエムは一斉にB Tエネルギーを撃ち放つと、エネルギーバリアを破って外へ逃げて行った。

「……くっ！」

一人、セシリアの心に苦い思いを残して。

第50話 二度目の襲撃戦（後書き）

次回でキャノンボール・ファスト編、完全終了となります。

未だ勝ち星を収めていない専用機持ちたち、一体これからどうなるのか。

お楽しみに。

第51話 一夏の誕生日

キティが突然引き上げていった時、私たちはすでに満身創痍だった。

なぜ撤退命令が出たのかはわからないけど、作戦時間が決まっていたりしたのかもしれない。あそこにはお姉ちゃんも恋華さんも千冬さんもいたわけだし。

「せーのっ」

私たち四人でもまともに相對するのは数分が限界だったキティに、一夏たちを圧倒したエム。……もつと強くならなきゃ、だめかな。

「一夏、お誕生日おめでとっっ！」

パンパン！ とクラッカーが鳴り、皆が声を上げた。

ここは一夏の家、時刻は夕方五時丁度。

私たちはあの戦いの後、一夏の誕生日を祝うべく一夏の家にやってきていた。とは言っても、民間のISドームで発生した事件だったため、私たち当事者は警察の取調べを受け、大分時間を使ってしまったのだが。

ちなみに私を担当した刑事さんはお姉ちゃんの関係で知り合いの方だったので、事情聴取はすぐに終わった。その後でふーちゃんから今日が一夏の誕生日だということを聞いて、わらわらとこの家に集まったというわけである。

「お、おう。サンキュ。しかし……、この人数は何事だよ？」

「それだけ慕われているということに納得しておいたほうが良いですよ。数蛇ですから」

「おう？ ……おう」

アシカじゃないんだから、一夏。
ちなみにここにいるメンバーは、篝さん、セシリアさん、ふーち
やん、シャルロットさんにラウラ。

一夏の友人である五反田^{ごたんだ}弾君^{だん}に御手洗^{みたらい}数馬君^{かずま}、そして弾君の妹さ
んの五反田^{ごたんだ}蘭ちゃん。

生徒会メンバーである恋華^{こいけ}さんにのほほんさん、会計にしてのほ
ほんさんのお姉さんであるの布^{のほ}仏^{とつ}虚^{つぼ}先輩、新聞部の黛^{まい}薫^{かほる}子先輩。

そして私にお姉ちゃん、千冬^{ちふゆ}さんになぜかいるナターシャさん。

……いや、教員だったし、流れて付いてきたってわかってはいるけ
どね。

「その辺はほら、おねーさん監視役だから。お酒とタバコはハタチ
になつてからよー？」

「日本はその辺厳しいですからね。あとサラリと読心術使わないで
ください」

いつのまにか傍によって来ていたナターシャさんの言葉にすかさ
ず返してみた。

あとナターシャさん、その手に持っている缶は……。

「おねーさんはハタチ超えてるのでいいんですうー。大丈夫、おね
ーさんお酒強いから」

「だからって生徒の前で飲酒しないでくださいよ……。まあ、あん
まり強く言いませんけど」

「一之瀬妹、言うだけ野暮という奴だ。今日くらい勘弁してやれ」
「……はあ」

ニコニコと缶ビールを飲み下すナターシャさんと、ごろにゃーん

とばかりに胡坐あぐらで座る千冬さんの太ももに頭を乗せて寝転がっている恋華さんを見て、仕方ないかとあきらめることにした。

考えていたら、頭が痛くなりそうだったから。

「あ、あ、あのつ、一夏さん！ け、ケーキ焼いてきましたから！」

「おお、蘭。今日、どうだった？ 楽しめたか？ って言っても、途中で滅茶苦茶になったけどよ」

「は、はい！ あの、かつこよかったです！ あつ、ケーキどうぞ！」

「サンキュ」

一夏にケーキを差し出す蘭ちゃんと、それを受け取る一夏。それにしても、あれだね。学校外でもしっかり一夏の体質は機能しているようだ。迷惑極まりない。

さて、それじゃあちよつと一夏に惚れている女の子をピックアップしてみようか。

まず箒さん、セシリアさんにシャルロットさん、ここで蘭ちゃんが入ってと。計四人、一人に惚れる人数としては多いと言わざるを得ない。

「うまいなー、これ。蘭一人で作ったのか？」

「は、はい！」

「蘭って料理上手だよな。うん、いいお嫁さんになるぞ」

「お、お嫁っ……！？」

おおつとー、一夏のボディブローだー。蘭ちゃんが揺らいでいるぞー。

「見てみなさいよ箒たちったら。じーつと一夏と蘭のこと見つめてるわよ」

「嫉妬は醜い……」

「辛らつだね、簪ちゃん……」

皆でケーキをつまみながら、そんなことを話してみる。

「しかし香織、このケーキは美味しいな！」

「ああほら、口についてるよ」

こつちを見てパア……、と顔を輝かせて言ったラウラの口周りを人差し指で拭い、ついていたクリームを自分の口に運ぶ。

うん、確かに美味しいです。だって私が追加で買ってきたもの。プロが作ってるからそりゃ美味しいですね。

「ああ、すまん」

「いえいえ。……あのー、そこのお三方？」

「……なんだ？」

「なんですの……？」

「なに……？」

暗い。ものすごく暗い！

一夏に惚れている蘭ちゃん以外の三人、つまり篝さんたちはどんな顔でこちらを向いた。

「えっと、なぜそこまで暗いのですか……？」

「……まともに戦えもしくなくてな。己の不甲斐無さを嘆いていたところだ……」

「……フレキシブル偏光制御射撃の特訓プランを立てなければと考えているのですわ」

「まあ……、イノシシ三匹制御するのは大変だなあ、って。普通のライフルとか入れようかなって……」

「は、はあ……」

えっと、篝さんはいいとして、セシリアさんは多分、『サイレント・ゼフィルス』が偏光制御射撃を使えるからいろいろ思うところがあるんだろうなあ……。

「で、シャルロットさんはなぜにイノシシ云々なんです？」

「一夏も篝もセシリアも、なぜかことごとく挑発に乗って突っ込んでいくんだよねえ……。易々と、これ見よがしにつ、いとも簡単につ！」

「……反省しています」

「……申し訳ありませんわ」

ああー、そういうことかあ……。

まあ、そういう気性が寄り集まってる中で、シャルロットさんだけがちゃんと自分をセーブできていたと聞くし……、ほんと、お疲れ様です。

「でも、まだ時間はあるんですから、これから直して、もっと強くなればいいんですよ」

「そ、そうだな！ うむ！」

「そ、そうですね！」

「……まあ、いいか」

逃げ道を見つけたとばかりに賛同して頷く篝さんとセシリアさん。そしてそれを見て溜め息を吐くシャルロット。なんだかシャルロットさんが母親みたいに見えてくるねえ、これは。

「千冬さん、あーん」

「……あーん」

視界の隅で、恋華さんがケーキを千冬さんに食べさせているのが見えた。

千冬さん、ちょっと頼染めてませんか？ まあ深くは突っ込みませんけど。

「こっちこっち、こっちよ弾！」

「虚、こっち……」

「待て待て、引っ張るなって！」

「お嬢様、待ってくださいいっ」

で、なぜふーちゃんと簪ちゃんはその誰かを引き連れてきてるの
でせうか？

「これが五反田弾よ、私の友達。弾、こっちは一之瀬香織、私の幼
馴染よ」

「俺たち以外に友達いたんだな……」

「ぶっとばすわよ」

「すまん、すいませんした」

凶暴な笑みを浮かべて手を握り込むふーちゃんに、諸手を挙げて
降参をアピールする弾君。なるほど、気のいいお調子者系か。

「あーっと、五反田弾だ。弾って呼んでくれ」

「一之瀬香織です、名前で良いですよ。よろしく、弾君」

「ああ、よろしくな」

ぐっ、と握手。ふむ、何かお料理をしている手かな。なんとなく
傷の痕がある。

で、今度は簪ちゃんが引っ張ってきた女性。生徒会の会計担当、

布仏虚先輩その人であつた。……ああ、一応お嬢様呼びなんだね。

「名前、知ってるよね……。香織……」

「布仏虚、三年よ。よろしくね」

「はい、よろしく願います。一之瀬香織、一年です。あのそれで……」

「……はい？」

そそくさと虚さんの傍により、頭を下げる。

「お姉ちゃんがご迷惑をかけて、すいませんでした。お姉ちゃんもいたずらにやっているわけじゃなくて、その……」

「……ええ、わかつてるわ。こっちにこそ非があつたのだし、お姉さんの行動も行き過ぎだとしてもこちらにそれを批判する権利はないもの。……お嬢様があなつたのは、ちょっとあれだけけど」

「本当にすいません……」

向こうが頭を下げてきて、慌ててこっちも頭を深く下げる。

すると、虚先輩も更に頭を下げてきて、こっちもそれより深く頭を下げて、そうしたら虚先輩がもっと下げてきて、それよりも下に深く頭を下げて……。

「……そろそろ、やめましょうか」

「……そうですね」

「あ、これ私のアドレスです。もしお姉ちゃんがご迷惑をおかけしたときにはご一報を」

「これはどうもご丁寧に。私のアドレスです、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

またもや頭を下げあい、それからアドレスの書かれた紙を受け取

る。なんか、お見合いみたいなんですけど。

「おい、終わったかしら」

「あ、うん！ ごめんごめん」

まあ、そんな感じで、一夏の誕生日会は私たちの持ち込んだものもあつたので、買い足しすることなくつつがなく終わったのであった。

キャノンボール・ファストから数えて最初の日曜日、私たちBC社員は本社へと出向いていた。

「やあやあ、よく来たね皆！」

「束ちゃん、何か用事があるって言ってたけど……」

「そう、そうなんだよ！ ようやくあーちゃん用の武装が出来上がったから、そのお披露目にね！」

意気揚々と言い放った束ちゃんは、そう言って片手を空高く上げる。

すると、近くの壁がパツクリと開き、そこから銀色のアタッシュケースが押し出されてきた。それを軽々と取り出すと、床が押し出されてできたテーブルの上に乗せる。

「これが、束ちゃん特製、あーちゃん専用兵装だよん！ ささ、葵ちゃん、開けて開けてー！」

その言葉に、お姉ちゃんがアタツシケースを押し開ける。そこには、『BC』と刻まれた武器たちが納められていた。

「ブレードにナックル、ランス、アックス、スナイパーライフルにナイフ、荷電粒子砲、と。随分作ったのねー」

「張り切ったからねん！ この『Bind Collection Series』、略してBCシリーズはISよりも頑丈だから安心していいよ！」

そう言うと、束ちゃんがブレードを取り出してさらに続ける。

「ブレードバージョンは切断に、ナックルバージョンは打撃に、ランスバージョンは刺突に、アックスバージョンとナイフバージョンはその他にに応じてご利用あれ！ おまけでスナイパーライフルバージョンと荷電粒子砲バージョンもつけておいたから！」

「ありがと、さすがねたっちゃん」

「それほどでもー それじゃ、先に渡しておいたBCリングに格納しておいてね」

「それじゃ、こっちは返しておくわ。私の全力には耐えられそうもないから」

お姉ちゃんが指輪から取り出したのは、ボロボロになった刀だった。たしか、キャノンボール・ファストのときに使ったって言うてたっけ。お姉ちゃんの使った武器がボロボロになるなんて、滅多にないことなのに。余程の相手と戦ったんだろう。

刀を受け取った束ちゃんは、それをどこかへと転送するところらへ向き直る。

というかお姉ちゃん、いつの間に量子変換機能のある指輪なんかもらってたんだろうか。

「BCリングは皆の分を作る予定だから、お楽しみにね！」

「もうなんでもござれね……」

「でもそこがいい……」

「服とかも格納できるの？」

「もちろん！ 生モノじゃない限り安全性は問題ないよ！」

「オッケー、助かるわね」

ふーちゃん、簪ちゃん、ナターシャさんが口々に漏らす。

『……常識ってなんだっけ』

『壊れゆくものでは？』

イヴ、それを言ったらどうしようもないでしょ。

第51話 一夏の誕生日（後書き）

ということで、六巻の内容が終了です。
……早い、六巻早い。

第52話 特訓

「特訓？」

「ああ。俺たちも力不足を痛感してさ……。香織たちさえよければ、一緒にどうかと思って」

とある日の放課後、すでに当たり前のように私の机の周りに集まっていたふーちゃんと簪ちゃん、そしてラウラを交えて、一夏たちからそんな話が持ちかけられた。

「私がかまいませんけど」

「アタシもいいわよ。簪とラウラは？」

「私も……いい……」

「構わん。あのメス猫に一撃くれてやらねば気が済まんしな」

「ということで、オッケーですよ」

ラウラだけなかなかに苛烈なお言葉だったけども、それぐらい腹が立っているんだろう。

いくら不意打ちで純粋な戦闘用装備ではなかったとはいえ、負ければ悔しい。まして、相手に情けをかけてもらったようなものなのだから。

「よし、それじゃあ早速アリーナに行こうぜ。第五アリーナを取ってあるから」

その一夏の言葉に頷いて、皆でアリーナまで出向く。アリーナに設置されているシールドエネルギー補給装置の傍で服を量子変換すると同時にISを身に纏うと、すぐに装置でシールドエネルギーを回復する。

これは基本的に授業と放課後に許可の出されているときにしか外に出されていない。理由としては盗難や悪用の防止、だそうだ。

「で、どういう訓練でしょうか。プランはありますか？」

「それなら僕が作ってきたよ。香織たちのは大雑把になっちゃってるけど……」

「いえ、気にしないでください。それで、どういった訓練を？」

「じゃあ、まず一夏から言うね」

そう言ってシャルロットさんが出した案は以下のとおり。

一夏は射撃兵装の知識の復習、実戦で体に射撃兵装の動きを叩き込んで慣れさせる。

フンオフ・アヒリテ

箒はまず単一技能を安定して起動させるために模擬戦、相手はセシリアが務める。

フレキシブル

セシリアは偏光制御射撃の習得のため、箒に対して極力のみで模擬戦。

ブルー・ティアーズ

シャルロットは一応のラインには達しているので一夏の特訓相手。とまあ、ざっとこんな感じだった。

「ん、良いんじゃないでしょうか。じゃあ私は……、近接戦闘スキルを上げるために、ふーちゃん。相手してもらえる？」

「オーケー、《ナイトホーク》はなしね」

「そりゃそうだよ。それで、簪ちゃんとラウラはどうするの？」

「ラウラと模擬戦……」

「よし、ではやるか。シャルロット、こちらも決まったぞ」

「うん、それじゃあ皆、それぞれがんばろう」

シャルロットさんの言葉で、皆がそれぞれに散らばっていく。さて、がんばろうっと。

あー、その、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。

……こんな感じで、良いのか？　そ、そうか。いや、夏休みの間にクラリツサを筆頭とする私の部下たちと交流を深めたのだが……。その時に「話を始めるときには名前を言っておくと皆がわかりやすく良いのでは？」と言われてな。何のことだと返したら、電波を受信したとか何とか。

まあ、皆良い隊員たちだということだ。うん。

「ラウラ……、大丈夫……？」

「あ、ああ、大丈夫だ。そっちの準備は終わったか？」

「うん……」

目の前の鎧武者が、巨大な鉄板のような赤黒い光を放つ剣、《^{あか}朱鉄^{がね}》を手に頷いた。

普段は小動物のような簪だったが、これほどの装備を整えていると恐ろしさすら感じてくる。しかも、背部と脚部は展開装甲のまま変えていないというのだからとんでもない代物だろう。

私は知らず知らずのうちに『シュヴァルツェア・レーゲン』に装備されているプラズマブレードを起動させ、戦闘体勢をとっていた。それほどの相手、ということなのだ。

簪は元日本代表候補生だと聞く、実力的に言えば五分五分かも知れず、ましてその機体が簞に勝らずとも劣らないものとするならば、やはり油断はできない。

ふと、視界にカウントダウンが映る。

三、二、一、試合開始

カウントダウン終了と同時に互いが空を裂き、一直線に相手へと向かっていく。

開始直後に急接近してのAICは真横への瞬間加速によつて回避された。体への負荷をまるで感じていないかのような軌道を描き、《朱鉄》を振りかざしてこちらへ接近してくる。

背部の展開装甲で驚異的な推進力を、脚部の展開装甲で機動のほとんどの補助を行っている『真打・鉄』しんうち くるがねは、第三世代の『シュヴァルツェア・レーゲン』を軽々と越える機動性能をもっている上に、操縦者である簪の技術も高い。こちらにも出し惜しみはできないな！

「いけっ！」

片目を隠している眼帯を量子変換して消し去り、奥の手である《ヴォーダン・オージェ越界の瞳》を発動、反応速度を跳ね上げる。

それと同時に六本のワイヤーブレードを射出、手足を狙って次々に走らせていく。

「そう簡単には、捕まらない……！」

突然、蒼いエネルギー弾が一本のワイヤーブレードを弾き飛ばす。みると、簪は空いていた片方の手に蒼い銃剣を装備していた。なるほど、《蒼鉄》あおがねの射撃でブレードを弾き飛ばしたのか。

あまり悠長に戦っていると《朱鉄》の武装特性を使われかねない上に、もしかすると《蒼鉄》の武装特性まで出てくるかもしれない。そうでなくとも余裕がないのだ、もたもたしてはいられないだろう。

「早々にけりをつけさせてもらっぞ！」
「やれるものなら……！」

言葉が消えるのと同時に、全身を悪寒が包む。
咄嗟に身を引くと、すぐ目の前を赤黒い板が通り過ぎて行った。
何が起きたのかと簪の機体を確認すると、脚部と背部の展開装甲が完全に開いていた。あれを使って瞬時加速を超える速度を出しているのか。

しかし、あれほどの加速ならばエネルギー効率が悪くはらず、そこが狙い目か。

「グレンノアカガネ
《紅蓮朱鉄》……！」
「なっ！？」

武装特性を発動させた簪が、私の目の前でその刃を振り上げる。
爆発的に増えた熱量が質量へと変換され、ただでさえ巨大だった刃があつという間に自分の二倍以上の大きさへと膨れ上がる。

咄嗟に身を翻して後方へ飛ぶと、次の瞬間には背中を掠めるようにして膨大な熱が振り下ろされた。

圧倒的なその威圧感が突如として霧散し、武装特性の発現が終わったことを感じた私は、すぐさま振り返って攻撃に転じようとした。

「ソウエイノアオガネ
武装特性、《蒼鋭蒼鉄》」

その言葉が聞こえると同時に絶対防御が発動し、シールドエネルギーがごっそりと削られる。

驚愕とともに簪を見ると、彼女の手握られていた銃剣の銃口からは、蒼いBTエネルギーが剣のように伸び、実体剣の部分までを飲み込んで一振りの青い刃になっていた。

まったく、つくづく驚かされる。ここで《蒼鉄》の武装特性とは。

「……終わり」

「……面目丸つぶれだな、私は」

先ほどのダメージで機体の損傷はかなり大きくなった。今の距離から次の一撃を回避することは不可能だろう。

「だが、せめて一矢報いらせてもらおうぞ！」

両腕のプラズマブレードを限界まで伸ばし、《蒼鉄》を構える簪へと突っ込む。

私は未だ、未熟だ。

「……ふう、これで今日の仕事も終わりか」

手続きを終えた書類をまとめ、重要書類と書かれたシールの貼つてある引き出しに入れる。

これを翌朝に他の先生が取り出して手続きを進めたりするわけだ。つまり、私は残業してでもこういった書類は仕上げないといけないわけだ。

まして私はあの問題児だらけの一年一組の担任であるから、書く書類も多い。尤も、この学校の教師はみな多かれ少なかれ残業を行うことが多々あるのだが、私と山田先生の場合はそれが特に顕著だ。

「お疲れ様です、千冬さん！」

「織斑先生だ、バカ者。また来たのか」

ほとんどの電気が落とされた職員室で一人肩を揉んでいた私に抱きついてきたのは、このIS学園の生徒会長、更識楯無だった。

後ろからぎゅーっと私を抱きしめているが、その顔は横から見ても至極幸せそうな笑みになっている。

こいつは私に懸想している。本人からそう伝えられたし、あの時からこいつは私に尽くしてくれていることからそれはわかった。

しかし、私はこいつの愛に応えてやれる自信もないし、人を愛する、人に愛されるということも分らない。初恋だってない枯れた女なのだ。

女同士であることに偏見はないし、そもそもほとんど女しかいないこの環境で仕事をしてきた私は、散々女性同士の恋愛というものを見てきた。だから、まあ、そういった話も別にかまわないし、男だろうが女だろうが、真に好いた者同士ならば好きにすればいいと思っている。

だが、私は……。

「千冬さん、暗い顔してますよー？　だめだめ、ちゃんと笑ってなきゃ。ね？」

「……まったく。織斑先生と呼べと、言っているだろうが」

気遣わしげな楯無、いや、恋華^{れんげ}の態度に強く怒ることもできず、やんわりとそう言うに留める。

「……本当にどうしたんですか？　いつもならゴチン、ってするのに」

「人を暴力教師のように言うな」

確かに手を上げることはあるが、それだって無闇やたらにやっているわけではない。

指導のためでもあるし、教師としてなめられない為でもある。こは学校であると同時にISという危険な道具の使い方を教えている学校なのだから、万が一を起こさない為にも教師は生徒の上でなければいけないのだ。

尤も、こいつはその例外なのだが。

「……恋華」

「はいっ。なんですか、千冬さん？」

「お前は、私が好き　、なんだよな？」

「はい！」

高らかに宣言された。満面の笑みで。

「……私は、お前のことを好ましいと思っている。だが、それが恋愛としての意味の好きかどうか分からないんだ」

そう、私には恋愛感情が分からない。

一夏を狙っている女子どもに偉そうなことを言っではいるが、おそらく色恋に関してはあいつらの方が上だろう。

人付き合いと恋愛をいっしょくたにしてしまう私のような人間よりも、ずっと。

「そうですか……」

「悪いな……」

「いえ！　それならそれでいいんです！」

にこりと笑みを浮かべた恋華は、そう言って頭を下げると職員室

を出て行った。

……悪いことをしてしまったな。

どことなくぱつとしないもやもやを抱えたまま寮に戻った私は、頭を下げて挨拶してくる生徒たちに挨拶を返しながら自室の扉をあける。

「おかえりなさい、千冬さん！」

裸エプロンの恋華がいた。

……ばたん。

「ふーっ……。あれか、疲れているのだな私は」

そうだ、ありえないだろう。私の部屋は寮長室、同室の人間もない。

ということで、もう一度扉をあける。

「おかえりなさいぶぎゅっ！」

「でていけい！」

アイアンクローで頭を鷲掴み、盛大に外へ放り出す。あいつ、本当にエプロン一枚だったぞ……。

「まったく……」

がちやり、と鍵を閉め、それからスーツをハンガーにかける。寮の就寝時間まで眠ることは出来ないが、少し休むくらいならスーツを脱いでいても問題はない。誰か尋ねてきたときはこのままでも問題はないのだし。

そんなことを考えていると、ふと乱雑に物が乗ったテーブルの上

に、湯気を立ち昇らせる黄色と濃いオレンジ色のコントラストが見えた。テーブルは其処だけが綺麗に片づけられている。

「これは……」

近づいてみると、それは綺麗に形作られたオムライスだった。ケチャップで器用にハートマークと文字が細く描かれており、わざわざこの為だけにケチャップの出し口を狭めるという器用なことをしていたことがわかる。

「千冬さん、お疲れ様です。恋華より……、か」

それは、恋華が私のために作ってくれたオムライスだった。

ひらがなで書かれた文字が可愛らしく、思わずあいつがこれを作っているところを想像してしまう。

私は携帯を取り出すと、メール画面を開いて文面入力に切り替える。

『食事ありがとう。さっきはすまなかった』

誤字がないことを確認すると、出来るだけ見ないように送信を押す。

……オムライスは、予想以上に美味しかった。

第52話 特訓（後書き）

簪、蒼鉄の武装特性を開放。ちなみにエネルギー刃は振れば飛びます。

そして千冬さんのフラグが進行しました。初恋もまだな千冬さんと恋華の仲は……？

第53話 簪と代表候補生

それは、とある日の昼休みのこと。

食事を終えてクラスに戻ろうとした僕たちの前に立ちはだかったのは、一人の女子生徒でした。

「ちょっとよろしいかしら？」

「えっと、どちらさま？」

「私は天王寺葉桜^{てんのうじ はよくい}、二年の日本代表候補生よ。更識さん、貴女は一体どういづつもり？」

突然現れた、黒い髪を長く伸ばしたその少女は、不思議そうに彼女を見つめる簪ちゃんに詰め寄る。

まるで、親の敵でも見るかのような目で簪ちゃんを見ると、唾を吐きかけるような勢いで口を開いた。

「まるで捨てるように日本代表候補生をやめるどころか、日本国籍まで捨てるなんて！　なんて愚かなんですの！？」

「それが、何か」

「それが何か！？　貴女、今そうおっしゃいました！？　貴女には、日本人としての誇りはないのですか！？」

「……貴女には、あるの？」

呆れたように聞く簪ちゃんに向けて、天王寺さんはまるで芝居でもしているかのように大振りな仕草で続ける。

「ありますとも！　選ばれた人間、努力と優れた才能によって登り詰めた地位！　そこに誇りを持たずしてどうしますの？」

「……そう」

「……ふん、所詮は姉の七光りで選ばただけの人間ですね。更
識の名だけで選ばただけでは、誇りなどもてようはずもありませ
んわね！」

そう言うのと、彼女は高らかに笑っていた。

……この人、滅茶苦茶嫌な感じだ。でも、簪ちゃんが黙っている
以上私が怒るわけにはいかない。

けれどふーちゃんがキレそうです。

「あんたね、上級生だからって言っていていいことと悪いことがあるで
しょー？」

「鈴、いい……」

「簪、でもっ！」

「弱い犬ほど良く吠える……。噛み付く牙すらもてないなら野垂れ
死ね……」

訂正。ふーちゃんよりも簪ちゃんの方がカチンと来ているよう
です。

そして案の定、顔を真っ赤にした天王寺さん。見事な挑発でした。

「このっ……！ いいでしょう、どちらが優れているか、はっきり
させてあげますわ！ 明日の放課後、第二アリーナでけりをつけさ
せていただきます！」

「上等……、獣が人に勝てないってことを教えてあげる……」

にやり、と恐ろしげな笑みを浮かべて言い放った簪ちゃんを見て、
天王寺さんは顔を真っ赤にして自クラスへかけていった。

……簪ちゃん、笑顔が怒ったときの千冬さんのようでしたよ。

時間は飛んで翌日の放課後。

私は『真打・鉄』を身に纏って、天王寺さんの前に浮いていた。

「『打鉄・式』……、完成したんだ……」

「倉持技研の連中が、貴女が完成させられなかったからと、私に泣きついてきたのよ。それで？ あなたが自分で造ったとか言うISはそれ？」

「『真打・鉄』、負けるつもりはないから……」

「どうせ出来損ないの機体なのでしょう？ それとも、それも更識の力で作り上げたのかしらね？」

ぎゃんぎゃんと良く吠える犬だ。まるでなっていない。

「相手を怒らせるならもう少し挑発の方法を考えたほうがいい……。程度が知れるよ……」

「何ですって……！ 名前だけの小娘が、図に乗って！ 叩き潰してあげますわ！」

『打鉄・式』の特徴はその機動性と遠距離用誘導弾頭型兵装『山嵐』。

当初のモデルでは『山嵐』は八門のミサイルポッドを六機搭載し、マルチロクオン・システムによって最大四八発の弾頭を一斉発射するものだった。

見たところその仕様は変わっていないようだから、確実に叩ける。

「両者、遺憾なく終わらせろ」

監督を頼んだ織斑先生の言葉に小さく頷く。

昨日の夜に立会いを頼んでおいてよかった。もし妙なことがあっても、織斑先生なら大丈夫だろう。

「では……、開始！」

放送でその言葉が響いた瞬間、天王寺さんが背中の荷電粒子砲を連射してくる。

次々と繰り出されるその攻撃を、左右へ揺れ動いてスレスレのところでかわしていく。

それにしても、『打鉄・式式』は高機動型だったはず。どうして一歩も動かないんだろう。

「まあ、いいか」

《朱鉄》^{あかがね}を呼び出し、一直線に天王寺さんへと駆ける。と、天王寺さんは荷電粒子砲《春雷》^{しゅんらい}を撃ち放ちながら薙刀の様な形の《夢現》^{ゆめうつ}を手迎え撃ってきた。

《夢現》は超振動する薙刀で、複合装甲に対して強力な威力を発揮する。けれど、この展開装甲や武装同士の打ち合いにはやや不利だ。

「ふっ」

「くっ……！ 振った後が隙だらけですわよ！」

「そう思っならかかってくるという……」

斬り返しは素早く、確実に。狙い澄ました一撃を装甲に食い込ま

せんと、刃が唸る。

対する天王寺さんはやや機動が不恰好だ。まだ『打鉄・弑式』に慣れていないのだろうか。なんにしても、手加減する要因には成り得ないのだけれど。

なにより、この戦いは香織達も見ている。そんなところで無様な姿を曝すなんて、耐え難い屈辱だ。
だから勝つ。

「はあああああ！」

「一撃一撃が軽い……、やっぱり貴女は犬だ」

「黙りなさい！」

天王寺さんは私から離れると、こちらへ照準を定める。危険、
ロックされています！

「堕ちろっ！」

背中の《山嵐》から無数の弾頭が射出され、こちらへと一直線に飛んでくる。

それを見ながら、《蒼鉄》あおがねを呼び出す。この程度、物の数ではない。

「ソウエイノアオガネ
《蒼鋭蒼鉄》」

《蒼鉄》の武装特性を発動させ、接近しすぎた弾頭を切り払うと、まだ遠くにある弾へ向けて刃を振るう。

空気を切り裂くように、三日月形の形を持って飛ぶBTエネルギーの刃が次々に弾を破壊していく。

それにしても、自分で作ったのなら武装特性くらい使えるはずなのに、なんで使えないんだろうか。

「な、なんなのそれは!？」

「……もしかして、武装特性を知らないの？」

「はあ!？ わけのわからないことを! もう手加減はやめですわ、堕ちなさい!」

怒ったのだろうか、顔を真っ赤にした天王寺さんはロックを完全にこちらへと集約させた。今までの三倍以上か。なら、こちらもそれなりの対応をさせてもらおう。

「グレンノアカガネ
《紅蓮朱鉄》」

熱量を質量へと変換していき、巨大な刃へと変えていく。
さて、と。

「薙ぎ払え……、朱鉄ッ!」

近くにあつた弾を《蒼鉄》で切り払い、片手で持っている《朱鉄》を大きく横に薙ぎ払う。

その進路上に存在した弾を全て爆破させると、余剰熱波が天王寺さんへと襲い掛かる。

「きゃあああああ!」

その熱量で殆どのシールドエネルギーが持っていかれた上、部品の一部は完全に逝かれたようだった。

なんにしてもこれで終わりだろう。いや、おわらせる。

「ふっ
!」

縦へ大きく振り下ろした《蒼鉄》から放たれたエネルギー刃が、しっかりと残りのエネルギーを奪い去る。

……さて、これで終わりだね。

「そこまで！ 勝者、更識簪！」

「私の勝ち……」

「くっ……！」

悔しそつにこちらを見る天王寺さんだっただけ、不思議とかわいそうだとかそういう気持ちにはならなかった。だって、清々堂々戦って勝った結果だから。

それに、この人はもっと強くなれる。『打鉄・弑式』の戦い方をちゃんとわかれば。

「ああ、そうだ」

「……？」

アリーナから出ようとして、一度振り返る。

これだけは、言いたかった。

「人と戦うためには、犬のままじゃ駄目だよ。もう一度、貴女が本当に強くなったときは、また戦おう」

もう一度ここまでくるのを、楽しみにしてるから。

「……更識、簪」

誰もが消え去った更衣室で、葉桜は小さくつぶやく。

自らが完成させた『打鉄・式』をもってしても打ち勝てない相手は確かに存在したし、自分がトップではないことぐらいはわかっている。

わかつていたが、同じ日本代表候補生でありながら安易にその地位を捨て、まるで何の努力もしていないかのように実態不明の会社へと移った簪のことが、彼女は許せなかった。

日本人としての誇り、天王寺家唯一の代表候補生としての誇り、そして同じ自作EISを持っている者としての対抗心。全てがごちゃ混ぜになって、葉桜は思わず簪に喧嘩を吹っかけていたのだった。

ところがどうだ、戦ってみれば相手は自分より数枚上手どころか、まるで遊びのように戦っているではないか。おまけに自分の知らない技術すら使い、いとも簡単に勝って見せた。

「天王寺」

「織斑、先生……」

「強かっただろう、あいつは」

「……はい」

いつの間にかやってきていた千冬の言葉に、拳を握りながらも頷く。

どうしようもなく認めなければならぬほど、葉桜と簪の力量差は圧倒的だった。

「なぜ負けたか、わかるか？」

「……機体の性能差、根本的な力量の違い、ですか」

「それもある。だが、本当に違っていたのは覚悟の差だ」

覚悟、その言葉を口内で反芻し、それから振り返るように千冬に聞く。

「それは、一体」

「確かにあいつの力量はずば抜けて高い。だが、あいつは戦うことに命と魂を賭けている。愛するもののために戦う覚悟を決めているのさ」

「戦う、覚悟……」

「……いずれ、お前もわかる 때가来る。腐るなよ」

普段は厳しい千冬の優しい一言に、葉桜は思わず涙を溢れさせた。自分には、誇りはあってもそれだけだった。それをわかっていたはずなのに、どうしても認められなかったただけなのだ。

天王寺葉桜は、名門天王寺家の一人娘として育てられた。いつでも、天王寺家は代々男系の家系であったため、ISが出てきてからは衰退の一步を辿っていたのだ。

葉桜はISが出てきてからというものの、殆ど自由を与えられずに天王寺家を救うための才子となるべく育てられた。一流の教育を施され、レールに乗って進むことが当たり前前の人生。いつしか葉桜は、自由を愛する自分を守るために、誇りを守るという名目で他人に当たるようになっていた。

だからこそ、簪はどうしても認められなかった。才覚ある姉をもち、自らも代表候補生だったはずが、あっさりとその地位を捨てられる、そのことを認められなかったのである。

だが、もうそれもなくった。

「……簪さん。今度は、負けませんわ」

勝ちたいと、心から願う相手が生まれた。

この日から、天王寺葉桜は再び花開くその時を目指して走り出したのである。

彼女が日の目を見るときは、また後々のお話。

第53話 簪と代表候補生（後書き）

簪主人公回でした。

葉桜ちゃんはまだ後々出てきます。オリキャラですが、一応これだけ強いんだよ、という目安回でもある。

第54話 変わる心（前書き）

今回は少々短いです。

第54話 変わる心

高層マンションの最上階の一室で、キティはベッドの上にいた。

「ふふ……、ここがいいの？」

「うく、あはあっ！」

キティが体ごと這っているのは、一糸纏わぬ、生まれたままの姿となっているオータムの上だった。

オータムは頬を染め、まるで愛しい相手とまぐわうかのように甘い声を上げながら乱れている。その体軀へと、キティはこそまさしく愛しい物を見、愛でる様に指を這わせた。

荒事も多く経験していながら、オータムの肌はまるで赤ん坊のように一つの傷もなく、キティがその短く切りそろえられた爪を立てると、鮮やかな紅として残るほどに美しい。

「キティ、キティい……」

「あらあら、可愛い声を上げて。嫉妬と憎悪に狂ったメス猫はどこへ行ったのかしらね？」

「ご、ごめんなさい、私……！」

ころころと楽しげに言葉を並べるキティのそれを聞いて、オータムはまるで世界の終わりのような顔で謝罪の言葉を口にする。あたかもそれは、忠義に厚い犬が主へ許しを請うような、いつそ悲痛なまでの媚を含んでいた。

その言葉を聴きながら、しかしキティは人差し指を立ててオータムの唇へと添えて口を開く。

「いいのよ、オータム。今の貴女はおりこうさん、もうあんな愚か

な、愚鈍でおぞましい真似はしないわよね？」

「うん、うん……！ 絶対しない……！ だから、だから捨てないでキティ……！」

「ええ、捨てやしないわ。私とスコールで、ずっと可愛がってあげる」

子供をあやすように猫撫で声でそう言うと、キティは片手で喉を圧迫しながらもう片方の手を下の泉へと伸ばしていく。くちゅりと音が響いた。

「ふああ！ そこ、そこお……！」

「んー？ なあに、なにか言いたいのかしら？」

「いいっ……！ もっと、もっとしてえ！」

「あはは、いいわよ。ほら、もっとと乱れて……！」

それからしばらくの間、部屋から媚声がやむことはなかった。やがて部屋が静まり返った頃、コンコンと部屋をノックする音。

「どうぞ」

扉を見ることがなくキティが言うと、扉がそつと押し開けられる。そこには、バスローブ一枚に身を包んだスコールの姿があった。

スコールは扉に鍵をかけると、ベッドの上で下半身をシーツで隠したキティの横に腰掛ける。

「お待たせ、キティ。待ったかしら」

「いいえ、大丈夫よ？」

「その割には、オータムが果て過ぎていない？」

「少し過激に可愛がってしまったの。新入りの奴隷はきっちり、主が誰か教えてあげなければね……。ふふ」

艶やかに、そしてどこか怖気の走る笑みを浮かべたキティを見てから、スコールは体を後ろへ倒す。丁度、キティの膝上へ後頭部が当たるように。

自分から絡め採られにきたスコールは、魔性の牙の施しを受けんとし、濁った目を眼前の子猫へ向けて身を委ねる。

喉笛を曝すスコールを前にちろりと舌なめずりをして見せたキティは、ゆっくりと顔を下ろす。それはあたかも恋人に口付けんとするように、妖艶なもので。

その口付けは、ゆっくりと首筋に牙を沈め、スコールの媚声が鳴り終えるまで続いた。

「違う……私はあのお方のことなど……、くそ、違う、私は、私は」

その頃、別の部屋ではマドカが一人、電気もつけずに蹲っていた。頭の中がかき乱され、まるで自分が自分ではないような感覚が四六時中続いているマドカの精神は、すでにほぼ限界に達していた。キティの頭の中ではもう一人の自分が常時ささやいている。屈服しろと、体を明け渡せと。

「黙れ、黙れ……！」

『もついいでしょう、屈してしまっても。身を委ねれば、甘美な快楽が、支配される幸福がずっと続くのよ？　これほど幸せなものは

他にない……。あの方に身を委ねましょう、ずっと飼い殺されるのも、悪い選択ではないわ」

「うるさい……！ 私は私だ……！ 貴様の意見になど耳は貸さん！」

息を荒立て、精神を軋ませながら尚もマド力は抵抗を続ける。

今にも沈みそうな浮き舟は、寸でのところでまだ沈まずに保たれていた。

そんなマド力を、もう一人の自分は冷笑する。

『あつはははは！ 本当にお馬鹿さんなのね、『私』！ いいわ、そうやって拒絶していなさい。寵愛を受けるのは私の役目、甘美なる時をずっと待ち焦がれているから！ お前は所詮木偶人形、殺すことでしか自分を知ることができないのね！ ああ、可哀想な『私』！ なんて不幸なんでしょう！』

「うるさい！ 黙れえ！」

目の前の姿見を拳で叩き割る。割れた鏡が手を傷つけ、真つ赤な血を滴らせた。

ああ、傷つけてしまった。あのお方に怒られてしまう。

思ってから気づく。自分は今何を思ったと。

『くすくす、貴女ももう持たないわね。ああ、安心して？』『私』の代わりに私がこの体を使ってあげる。精一杯、あのお方の役に立てるように、卑しい奴隷として、ね……』

「あ、あああああああああああああああああああああああああああああああああ！――」

媚声と慟哭は交じり合い、やがて物語を乱す力となる。
しかし、それが露わとなるのは今しばらく先のことであった。

「ひっ……！？」

「ん、どうした一之瀬」

授業を受けていると、突然背筋が凍るような恐ろしさを感じた。
わ、皆に見られてるし。

「あ、い、いえ、なんでもありません。手の上にハエが止まっていたので……。手を洗ってきてても良いですか？」

「ああ、行つて来い。では授業を続けるぞ……」

千冬さんに許可を貰って、ゆつたりとした歩調で教室を出る。
なんとというか、胸の奥をぐちゃぐちゃにかき回されたような気持ち悪さがする。変な物を食べたわけでもないのに、一体どういふことなんだろう。

洗面所まで辿り着くと、冷水機で冷たく冷やされた水を飲み込んで吐き気を抑えた。それでも、胸糞悪いというか、そんなような感じは消えなかった。

「イヴ、健康状態は大丈夫？」

「はい、特に異常はありませんが？」

『そう。ありがとう』

『……あまり無理はしないでください。無茶はもう諦めましたが、平時くらい体に気を使ってください』

『あはは……、気をつけます』

イヴに叱られながらも、私は教室への帰路に着いた。
そして、時間は過ぎ去って午後の授業。

「では、私とナターシャ先生とで指導を行う。偶数は私、奇数はナターシャ先生の方へ行け。専用気持ちはいったん出ている。駆け足！」

珍しく一組と四組の合同実習となった今日の午後は、そんな言葉と共に始まった。

それにしても、ナターシャさんって意外と指導厳しいんだよね。
元軍人だし、当たり前だけど。

「はい、私語はやめなさい。今日は皆に遠距離武装と近距離武装の違いを実体験してもらいます」

「先生、それは一学期でもやったんじゃない……」

四組の生徒が質問する。

「そのことは聞いてるわ。けど、あなたたちがやったのは触りの部分。今日は二時間かけてみっちり、その使い方を学んでもらうわ」
「あの、具体的には何を……」

「まず全員、ISを装備してもらいます。こっちは装備の量が多いラファール・リヴァイヴよ。でも、量がないから半分ずつね。さ、まずは一組の生徒からやってもらいましょうか」

一組の生徒が『ラファール・リヴァイヴ』を装着し終えたところで、ナターシャさんがこちらを見た。

「それじゃあ、専用機持ちの皆はISを装備している子達に指導する側よ。サポートするから、がんばってみて。さあ、それじゃあ均等にバラけてね」

はい、とISを装着した子達が返事をしてから、手際よくバラけていく。さすが織斑先生が一学期間みっちりやっただけあって、移動はスムーズだ。

「私のところは六人か。皆、よろしくね」

「はい！」

「よろしくね、一之瀬さん」

「よろしくー！」

「よろしくお願いします」

口々にそう言う皆。

そんな中、ナターシャさんが声を上げた。

「それじゃ、まずは射撃兵装から行きましょうか！」

「はい。それじゃあ皆、マシンガン呼び出して」

私の言葉に従って、慣れないながらも量子変換されているマシンガンを呼び出す六人。ちなみに、私もすでに『梟』に乗っております。

で、私も《夜雀^{よじやぐ}》を呼び出して、肩に構える。

「撃ち方は一学期やったとおり、肩に当てるか腰溜めに撃つかです。片手で伸ばして撃つてもいいですが、その場合は命中率が落ちるこ

とを忘れずに。それじゃあ、的を出すので一人ずつ射撃してみましよう。六つ出すので、半分は肩、半分は腰でやってみてください。忘れずに、モードは単発にしておいてくださいね」

よし、がんばろう。

第54話 変わる心（後書き）

がつつり危ない描写をいれてみました。
さて、そろそろ七巻の話に入れるだろうか……？

第55話 ずれる齒車

その知らせが来たのは、普段通りの授業の途中だった。

突然第二会議室へ集められた一年の専用機持ちたちは、揃ってその椅子に並んで腰掛けるよう言われた。

「突然招集をかけてすまない。緊急事態だ」

「……夏のメンバーと同じということは、またそう言った事態ですか？」

「そういうことだ。全員、くれぐれもこの内容は漏らすな。良いな」

織斑先生が、表情をより一層引き締めて言った。

ここにいる教員は織斑先生に山田先生、そしてナターシャさんの三人。バックアップには他の先生も入るんだろうけど……、一体何が起きたんだろう。

「今から一〇分ほど前、ここIS学園へ向けて時速四〇〇〇キロを超える速度で進む三機のISを確認した。ここへの到達時刻は今から一〇分後、上層部は夏のメンバーと我々三人でその三機を押さえろと言ってきた」

「……一〇分あれば、この学園の生徒なら全員逃げられますよね。それに、この学園には自衛用の装備もある。時間稼ぎぐらいはできるはずだ」

「だろうな。だが、上層部は懲りずにやれとお達した。全員、準備を整えてアリーナへ向かえ。万一外に出た場合は深追いしないでいい、今回の目的は学園の防衛だ」

夏のあれでもまだ懲りてなかったのか……。それにしても、一体どこの誰が……？

「相手の情報はどうなっていますの？」

「……驚かずに聞け。相手は三人とも、男のIS操縦者だ」

「なっ……!？」

「男ですって!？ そんなばかな！」

男のIS操縦者は、私と一夏の二人だけ。

ここに来ていきなり三人も、しかも全員ISに乗ってここを目指しているなんて……。束ちゃんからの連絡はないから、たぶんこれは束ちゃんのやっていることじゃない。

けど、本当に一体どういうこと……？

「生徒会も動いているから、一般への被害は最小限に抑えられるだろう。しかし、万が一もある。注意して戦闘を行ってくれ」

「織斑先生、報酬は出るんですか？」

「くると思っていたさ。今回は出さないそうだ」

……おい、ちょっと待てって。

「それは、私たちに喧嘩を売っているということでもいいんでしょうか？」

「さて、落ち着け。その代わり、私の個人資産と、楯無を通じて日本政府から報奨金が出る。全員合わせて二億程度だが……、いいか？」

「……まあ、良いでしょう。私自身は非常に不満ですが、他の皆がやる気になっているので」

それに、焦った千冬さんが見られてちょっと楽しかったりしますし。

けど、これはつまり「自分の通ってる学校守るんだし、お金要ら

ないよねー？」ということでもいいんですね？ よーし、後で覚えとけよ。

『イヴ、記録録った？』

『ばっちりです』

『ナイス』

音声ログもばっちり残ったし、これでもし「私たちが出しました」と言っても言い逃れはできない。
さて、それはともかくとして。

「それで、相手の機体情報がありますか？」

「……いや、ない。全て未確認の機体だ」

「独力でコア三つと完全なアンノウンの機体を揃えられる国が組織が絡んでるってことですか」

「だろうな。殆ど不確定要素ばかりだが、よろしく頼む」

そう言つて、千冬さんはこちらへ頭を下げた。

……本当に珍しい。千冬さんが頭を下げるなんて。

「それじゃあ、ブリーフィングを始めますね。皆さん」

そんな山田先生の言葉と共に、私たちは一層気を引き締めた。
どうなることやら……。

その頃、IS学園より六〇〇キロメートル強の地点にて、三人の男が言葉を交わしていた。

「まったく、親父殿も扱いが荒いぜ。ポッドから出していきなり「死んで来い」だぜ？」

ケラケラと軽く笑いながら、漆黒の機体に身を包んだ少年はつまらなそうにそう言う。

その言葉に、隣を飛ぶ青年は諦めたような溜め息を吐きながら返す。

「それが父上だ、仕方あるまい。あの人は生粋の研究者でもあるからな」

「どうでもいいけどさあ、殺しちゃ駄目なんだろう？ つまんねー仕事……」

「ケヒヤーハハハア！ 別にいいじゃねーか、泣き叫ぶ顔を堪能させてもらおうぜ？」

「まあ、それもいいかあ……。ぶち殺せないのはつまらないけど」
「全く、お前たちは……」

高校生くらいの少年が高笑い、それよりも幼い少年は裂けるような笑みを浮かべる。

その様子を見て、青年はそんなことを呟きながら頭に手をやって頭を振った。

「まっ、いっちょ派手に打ち上げようぜ？」

世界に、反撃の狼煙をよオ？

三機は飛ぶ。

世界に、新たな風を吹かせるために。

『アンノウナー、二、三、到達しました！ エンゲージまでカウントダウン！』

『各員、死ぬことは私が許さん！ 相手が撤退を始めたら深追いはするな、いいな！』

「はいっ！」

『了解』

『……うん』

『了解、千冬姉！』

『了解です』

『わかっていますわ！』

『はいっ』

オープンチャネル

開放通信から聞こえる千冬さんの声に、皆が口々に応える。

目標が降り立つであろうアリーナには、私たち全員が待機していた。

張り詰めた緊張感が、まるで釣り糸のようにぴんと張り巡らされる。直後、肌が逆立つようなおぞましい感覚と共に、アリーナのシルドバリアが砲撃によって碎かれた。

「よーオーIS操縦者諸君！ 元気でやってるかアー!?」

「あまり派手なのは好みではないが……、まあよかるう。諸君、我々は一般生徒に危害を加える気はない。それは我々としても不本意だ。専用機持ちの諸君とだけ戦えれば、それでいい」

「どうでもいいけど、不慮の事故なら殺しても良いよね」

地に降り立つた三機のISを見た途端、背筋が凍るような感覚に襲われる。

殺気だった。いつそ純粹なほどの殺意の鎧に身を包んだ三人の男たちの中の一人、やたらとテンションの高い青年が前へ一歩進み出た。

「さて、それで？ 誰が相手してくれるんだ？ まさか teme たちがやるんじゃないかなあ？」

「残念ですが、わたくし達ですわ」

「セシリア・オルコット、イギリスの候補生だな。出来損ないの遠隔装備」

「カツ！ そんな糞ガキに用はねーんだよ！ 福音の操縦者、teme ならまだやれんだろ？ いっちよかまそうじゃねえの？」

「あら、ダンスのお誘い？ 良いわよ、あなたの相手は私がしてあげる」

糞ガキと呼ばれて若干切れているセシリアさんを尻目に、ナターシャさんは相手の殺気とプレッシャーをもともせずじゃんわりと返した。

「他に被害を出したくないのでしょうか？ なら、それぞれ別のアリーナでやり合わない？」

「……そうだな。我々としてもその申し出はありがたい。だが、ナターシャ嬢はともかく、君達学生が私たちと対等に渡り合えるなど

とは思いつがらないほうがいい。死ぬぞ」

「なんだと……！」

「聞き捨てなりませんわね……！」

「熱くなるな、バカどもめ。相手の实力は未知数、この殺気から言ってもあの余裕の元は見て取れるだろう。うかつに挑発に乗るな」

穏やかそうな男性の言葉に激昂した二人をラウラがたしなめると、頬を吊り上げて眼帯を格納領域へ転送した。

「うわあ、ばつちりやる気になってるねラウラ。」

「どうでもいいからさあ、やるの？ やらないの？ はっきりしてよ」

「……皆さん、あの口の悪い人は私とナターシャさん、簪ちゃん。男性の方は一夏、セシリアさん、シャルロットさんが。残った彼はふーちゃんとラウラ、箒さんでお願いできますか？」

「私は賛成よ」

「問題……ない……」

「ああ、いいぜ」

「……わかりましたわ」

「オツケ、暴走しないように見張るのも含めてね」

「余りものって気に食わないけど……、りょーかいよ」

「了解だ！」

「承知！」

全員分の返答が返ってきた次の瞬間には、それぞれがそれぞれの相手へ向けて武装を構える。

その様子を見て向こうも此方の意図を察したのか、口の悪い青年はにやりと嫌な笑みを浮かべた。

「いいねえ、じゃあ始めるとしようかア！ ローウェン、テメエは

五番だ。アルファ、テメエは三番、行け！」

「了解した。では、行くとしよう」

「命令するなよ……。別にいいけど」

男性と少年が飛び去り、それを追って皆もそれぞれの相手を追って飛び去る。

残ったのは、私と簪ちゃん、そしてナターシャさん。ちなみに、ナターシャさんはまだISを起動していない。

「……さつてと。テメエらが俺の相手つてわけだな？」

「そうよ。お互い名乗りを上げておきましょうか、様式美としてね？」

言ってから、静かにISを起動させる。

現れたのは、新調され更に銀の輝きが増した『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』を纏った姿のナターシャさん。

「私はナターシャ・ファイルス、バインド・カンパニー所属よ。はい次、香織ちゃん」

「はあ……。緊張感に欠けますね。私は一之瀬香織、バインド・カンパニー所属です。よろしく」

「……ああ、親父殿の言つてたプロトタイプってのはテメエのことか！ ハッハアー！ なるほど、そういうことが、カカカカカ！ おもしろえな！」

「何を言ってるんです？」

「ああ？ あー、テメエはまだしらねえのか。まあいいや、そのうち嫌でも知ることになるぜ。今知りたいなら、まず俺を倒すんだな？ クキカカケケケカカ！」

なんだこの人は……。なんだか気味が悪い。

どこかずれていると言うか、なんだか違うんだ。何か、何か。

「……私は更識簪、バインド・カンパニー所属。覚悟して」

「ああ、お前はいいや。興味ねーし」

「……あなた、友達少ない？」

「うるッせエーよ！ まあいいや、俺の名はグリム、そしてこいつが」

肩辺りまで伸びた黒髪を振り乱し、獰猛な視線で私たちを見る。
全身を覆ったその装甲をふわりと浮かせ、牙を剥き出しにして笑みを浮かべた。

「、『ニユクス』だ。死なねえ程度に殺してやつから、覚悟しとけよ？ クキカカケコカケキクケカキケカカコキカッ！」

第55話 ずれる齒車（後書き）

はい、原作崩壊開始。

突然現れた三人の男性IS操縦者、その正体と目的とは。
次回もお楽しみに！

第56話 死神たち（前書き）

今回は途中経過です。

第56話 死神たち

「ツアシャツハア!!」

「くっ……! はあっ!」

「ハンツ、良い打ち込みだが、そんなもんじゃ『ニユクス』の防御は破れねえぞオ!」

戦闘が始まってから数分、香織達とグリムの戦闘は互いに傷を与えることなく続いていた。

と言っても、互いの消耗具合は大きく違う。香織達がやや汗ばんでいるのにもかかわらず、グリムは汗一つかいていない。

この数分間を全力で攻め立てていると言うのに、グリムの操る『ニユクス』の装甲には傷一つつけられていなかった。

「なんて硬さなの……!」

「硬いだけじゃない、まるでアレ自体で弾かれてるみたいなの……」

「BTエネルギーも実弾も通用しない、か。なんて滅茶苦茶なのかしらね」

そう言いながらも、攻撃の手を休めることはしない三人に、グリムはにやりと笑みを送る。

まるで、破られないことが確実だと言つかのようなその笑みに、三人は更に攻め手を苛烈に加速させていく。

「そろそろどうしたア! まるで通ってねエぞ!」

「こうなったら……! 《紅蓮朱鉄》!」

グレンノアカガネ

「ッ、ナターシャさん!」

「おーけー、下がるわよ!」

香織とナターシャが後方へ下がり、簪が前線へ残る。数分ではあるがたまった熱量をすべて物質化すると、防御を固める『ニユクス』目掛けてその刃を振り下ろした。が。

「……おいおい、効いてねエぞオ！ ふざけてんのか、糞ガキがア！」

「簪ちゃん、下がって！ 次は私がいく！」

タッチするかのように前後を替わると、香織は突撃姿勢へと体を構える。そしてゆっくりと呼吸を整え、静かにグリムの方へと視線を向けた。

「《啄木鳥^{きつつき}》、武装特性、《ピンポイントクエイカー》起動！」

声に反応し、左腕の装甲に隠れていた《啄木鳥》が大仰に展開されていく。

やがてそこに残ったのは、恐ろしいほどに巨大な一つのパイルバンカー。《啄木鳥》の優に五倍はあるだろうそれに加え、巨大な鉄杭の後ろには火薬を爆破させる大きなカートリッジが装填されていた。

「おおおおおっ！」

「ハッ、貫けんのか、そんなもんでッ！」

「打ち」

火薬に引火、接敵した瞬間に杭が打ち出される。

「貫くッ！」

直後、金属同士が激突する悲鳴のような音と共に、装甲がべこんと凹んだ。

けれど、それだけ。その結果に、香織は思わずそこから飛び退いてグリムを睨みつける。

『イヴ、解析は後どれくらいで終わる？』

『後五分は必要です、稼いでください』

『りょーかい』

五分間というその長さが、今は恐ろしく長く感じられることだろう。

香織たちが警戒しながら武装を整えているあいだ、グリムは不気味に香織たちの方を見つめ続けていた。

その頃、第五アリーナへ到着した男性と一夏たち三人は、互いに相向かっていた。

「織斑一夏、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア。なるほど、安定はしているようだな」

「どういう意味だ？」

「戦闘陣形としてはいい形だということだ。だが、それだけでは勝てないな」

そういうと、男性はあまりにも軽装なそのISを軽く動かし、戦闘態勢に入る。

「私の名はローウェン、そしてこいつは『ヒュプノス』。苦しみなき死をもたらす力だ。お前たちはどれほどこの眠りに抗えるか……、試してみるか？」

「その言葉、後悔させてあげますわ！」

「二人とも、あまり前に出すぎないように！」

三人も臨戦態勢へと突入したその直後、ローウェンは『ヒュプノス』と共に飛び上がる。

しかし、『ヒュプノス』は次の瞬間、その姿をかき消した。

「なっ！？」

「消えた！？」

「ここだ」

声が聞こえたと同時にセシリアの背部装甲が打撃され、ぐらりとセシリアの体が揺れる。

いつ現れたのかもわからないローウェンは、またもや姿を消した。

「消えてるわけじゃない、知覚できないスピードで動いてるだけだよ！」

「けど、ハイパーセンサーでも捉えられないってどうなってんだ！？」

「くっ……！ 逃がしませんわ！」

当惑する二人の影から、セシリアは《ブルー・ティアーズ》を繰り出す。

なんとかしてローウエンの姿を捉えようと、四滴の蒼い雫を飛ばすセシリアだったが、その直後にそのうちの一基が『蹴り碎かれた』。

「なあっ!？」

パキヤン、と情けないほどに呆気ない音を立てて碎けたそれは、光となって格納領域へ戻される。

それを見て、セシリアは戦慄した。相手が、確実に装甲を砕くだけの力を、その脚に持っていることを確信したから。

ただの蹴りだったはずのそれで武器が砕けるということはつまり、蹴られればそれ以上の衝撃が加わる。

思わず絶対防御が働かなかつたらという想像をしてしまい、セシリアはふるふると顔を左右に振り、歯を食いしばってそこにいない相手を見据えた。

「セシリア、大丈夫？」

「え、ええ。けれど、油断ならない相手だというのははつきりしましたわね……」

「もとよりそのつもりで掛かって来い。ISに乗っていると、いかな武人と言えどもその感覚は鈍る。あまりに利便性の高いそのせいで、己の技が鈍る故にな」

再び目の前に姿を現したローウエンはそう言い放ち、再び姿を消す。

猛然と繰り出される蹴りを回避すべく空へ飛んだ三人だったが、次の瞬間にはシャルロットが地面へと叩き落されていた。

「シャル!」

「くッ!!! 二人ともとにかく飛んで! 出来る限り速く!」

「わ、わかりましたわ！」

シャルロットの指示に従い、全速力での回避機動を開始する二人に対して、ローウェンはただその冷めた瞳をむけるだけだった。

第三アリーナへと飛んだ黒いISの少年と、鈴、ラウラ、箒はそこへと到着すると、互いに向き合うようにして戦闘意欲をむき出しにしていた。

ただし、鈴と箒は闘気、少年とラウラは殺意と言う違いはあったが。

「あーあ、戦えそうなのは皆向こうに取られちゃったな」

「へえ、私たちは戦えないっての？」

「……そっちの遺伝子強化素体はまだやれそうだね？ 僕らよりも不完全だけど」

「……やはり貴様達、バイオノイドか」

「わかってたんだ。まあ、あれだけ情報出してたし、そりゃそうか。グリムもバカだよね、いくら発言許可が下りてるからって」

ラウラと少年は、互いに殺気と言葉をぶつけ合う。その視線は、相手の一挙手一投足をしっかりと監視するように向けられていた。互いの素性を知ったのは、ラウラと少年のみ。しかし、鈴と箒はそれに気をとられることなく警戒を続ける。

目の前の相手は注意を散らして勝てる相手ではない。それをわかつていからこそ、不可解なことがあったとしても、決してそれに気をとられることはなかった。

やがて、少年はにやりと頬を吊り上げて笑う。その途端に、今までの殺気が嘘だったように濃密な殺気が溢れ出して来た。

「いいね、ようやく楽しめそうだ。僕の名はアルファ、そしてこいつは『タナトス』。僕の一撃を受け止められるかな？」

「上等だ、掛かって来い！」

「負けるわけには行かないのよ！」

「聞かせてもらうぞ、貴様らのことを！」

直後、互いは一斉に空を蹴る。

手を翳して放たれたラウラのAICを急なバクターンからの急上昇で回避すると、追い討ちをかけるように放たれた鈴の《龍砲》を三基のスラスターを使用した短距離の瞬間加速、個別連続瞬間加速によって回避してみせる。

その姿をもしナターシャが見ていれば、驚愕したことだろう。彼女の元パートナーだったイリス・コーリングの使用した技術を、完全な形で見せ付けられたのだから。もっとも、スラスターの数はイリスよりも一つ少なかったが、それでも恐ろしく繊細で超絶的な技術には変わりなかった。

その技術力の高さを目の前で見せ付けられた三人だったが、それでも闘気が落ちることはなく、むしろ高まりさえしていた。

「斬るッ！」

「のろまが、斬るって言うのはこうやるんだよッ！」

「なっ！？」

「第！」

鋭く斬り込んだその一撃をいとも簡単に回避して見せたアルファは、振り返りざまに瞬時加速を発動させて急接近し、手にした大鎌を大きく振りぬく。

装甲を大きく斬り削られた筈は、その衝撃を逃がすように後方へと吹き飛ばされた。

「ぐっ……！　なんだ、あの鎌は……！？　斬られた痛みが、確かに……！」

「あっはははは！　こいつは《デスサイズ》、その武装特性は斬った相手にその痛みを与えることさ！　ほらほら、いつショック死するかな！」

「悪趣味な武装なこと」

「まったくだ。筈、やれるか？」

「ああ、大丈夫だ……！　一度斬られたくらいで、落とされるものか！」

三人が、アルファを囲むようにして宙を舞う。

その中で、アルファはにやりと頬を吊り上げた。

「恋華^{れんげ}、状況はどうなっている」

「ベリーバッド、とても悪いわ。生徒は全員地下シェルターに避難させたけど……、相手のISはデータなし、操縦者の戸籍もなし」

香織達がそれぞれの戦いを始めた頃、恋華と千冬、真耶は管制室に集まっていた。

「私の《アルカエスト》は相手が弱つてないと取れないし……、私でも真つ当に戦えるレベルの相手を三人も揃えるなんて」

恋華はそう言つて歯噛みする。学園祭の折に『ミステリアス・レイディ』が剥離剤リムーバーの機能を取り込んだことで発生したナノマシン、《アルカエスト》は、相手のISを強制解除し手に入れることができるが、それは相手のISのシールドエネルギーが二桁以下であり、武装や装甲が相当破壊されていないといけないため、かなり使い勝手は悪い。

それに加えて今はあれほど溺愛していた妹が戦っている上に、愛する千冬は手を煩わされている。これで彼女がまともに黙っているわけがなかった。

「……彼女を頼りましょう」

「……それしかないか。あいつには私から連絡を入れる。お前は織斑たちのところへ行つてやれ。あそこが一番不利だ。私もあいつを呼んだら『打鉄』で出る」

「いいんですか、千冬さん？ そんなことすれば、委員会が……」

現在、出撃指令が降りているのは一年生の専用機持ちとナターシヤのみ。

しかし恋華は生徒会長であるため問題はないが、千冬は一教師である。いかに特別待遇とはいえ、身勝手な行動を行えばどうなるかわからない。

そのことを聞いた恋華に、千冬はいつもと変わらぬ不敵な笑みを浮かべて見せた。

「教え子を守れぬ教師など、死ぬべきだ。私はまだ死にたくないからな。山田君、管制は頼むぞ」

「はい、任せてください」

力強く頷いた真耶を見ながら、千冬は堂々と携帯端末を取り出す。ここに、世界最強たちが動き出した。

第56話 死神たち（後書き）

それぞれを圧倒する三機のISと、動き出した千冬さん達。
次回もお楽しみに！

第57話 勇気の雫（前書き）

どうしてこうなった！

第57話 勇気の雫

「おおおおおっ!」

「攻撃が大振りすぎるぞ」

《零落白夜》れいらくびやくやを発動した《雪片式型》ゆきひらにがたを振りかざした一夏の閃を、ローウエンはいとも簡単に回避し、お返しとばかりに蹴り付ける。

バキッ、と装甲の軋む音とともに一夏が吹き飛ばされると、その隙を突いてセシリアとシャルロットの射撃が飛んでくるが、その全てを蹴りの一撃で叩き落とした。

「出鱈目ですわね……!」

「一夏、大丈夫!？」

「おう、なんとかな……。けど、もうシールドエネルギーも少ないぜ」

「……そろそろ決めるとしよう。行くぞ」

ローウエンの声が聞こえた瞬間に、全員の動きが止まる。

正確には、止められていた。人の知覚もハイパーセンサーも完全に超えた速度で三人を蹴り続けているせいで、一切の身動きが取れなくなってしまうていた。

「ぐああ……っ!？」

「こんな、もので……っ!」

三人のシールドエネルギーは瞬く間に減っていき、中でも初めからかなり減っていた一夏のシールドエネルギーは、ほとんど切れかかっている。

次の瞬間、一際強力な一撃が一夏の腹部に突き刺さり、一夏は衝撃とともにアリーナの壁に激突し、意識を失った。

「一夏さん！」

「一夏！ この…… おおおおっ！」

「怒るか。だが、それでも足りんぞ」

気絶した一夏を見て頭に血が上ったシャルロットは、加速をつけてローウェンに接近すると、勢いに乗って近接ブレード《ブレット・スライサー》を振りかざす。

しかし、当たる間際で回避され咄嗟にそこから飛び退いたシャルロットの背部を、『ヒュプノス』の一撃が襲った。

「きゃああああ！」

「シャルロットさん！」

「これで二機。さて、どうする？ セシリア・オルコット」

後部からの一撃で落とされたシャルロットを庇う暇もなく、残されたセシリアの前にローウェンが立ちはだかった。

一撃をかすらせることもできず、あっという間に一夏とシャルロットを落としたローウェンだったが、そこに疲れた様子はまるでない。そんなローウェンをみて、セシリアは今度こそ『恐怖』で心が震えた。

今まで、ISに乗って恐怖を感じたことなどなかった。そこには確かに『絶対防御』という壁があり、命までは落とさないという妄信にも似た確信があったから。

もしISが何かの拍子に動かなくなってしまうえば、それはイコール死に結ばれるんですよ！？

セシリアが思い出したのは、夏の戦いの折に聞いた、香織の悲痛な叫び。

あの時はまだ、本当に分かっていたわけではなかった。そのことに、今になって気づいたセシリアの眼からは、押し出されるようにして涙が溢れ出した。

ただ、怖い。その思いで溢れ出た涙は、次々に頬を伝って落ちていく。

「泣いているのか」

「あ……」

「……その恐怖も、すぐに終わる。祈れ」

いつそ思いやりの心すら伝わりそうな優しい声に、しかしセシリアは身を震わせる。

先ほどまでの挙動が嘘のようにゆっくりとした仕草で近づいてくるローウエンの足が、ざりざりと砂を踏みしめる。その音で、自分がいつの間にか地上に降りていたことに気付いたセシリアは、思わず腰を抜かして地面に座り込んでしまった。

「いや……こないでえ……！」

セシリアは必死に手と足で体を押して後ずさるが、その距離は一向に縮まることがない。ローウエンが決して付かず離れず、ぴつたりと数十メートルの距離をとって歩いているせいで。

やがてISの装甲とアリーナの壁がぶつかり、ガチンと音が立つ。その音で、セシリアは自分の逃げ場がなくなってしまったことを知る。

涙が、止まった。

「……いや」

「安らかに眠れ。永久に」

「……いや、ですわ……」

消える。涙も、恐怖もすべて。いつの間にか、セシリアの心には一つのだけが現れていた。

さあ、撃て。

声が、セシリアの頭の中に響く。

いつの間にか、世界は止まっていた。その中で、主の命を待つ三滴の雫。それが視界に収まり、セシリアはゆっくりと腕を持ち上げる。

ブルー・ティアーズ、その名の意味は。

「そこに込められた、思いは……！」

止まった世界の中で、セシリアは思い出す。まだ両親が生きていた頃、父が生き生きと話していた話題を。そこで、出会ったのだ。

「思い出しましたわ……！」

イギリスの第三世代IS、『ブルー・ティアーズ』。その初期構想は、セシリアの父、ブラウン・オルコットの発案したものだった。ISという、言わばロマンを追い求められるそれが登場してから、父は卑屈にはなっていたがそれ以上に夢を追っていた。だからこそ、母も父のことを見離さず、時折熱に浮かされたような眼で見っていたのだと、セシリアはその時ようやく悟る。

時を隔て、意図せずに父の夢を受け継いだセシリアの心は、不思議

議と温かった。

「まったく、娘にはまるでそんな姿を見せないのですから……。困った父親ですわ」

ねえ、お父様？

今まで一度も口にしなかったその言葉を、嫌悪していたその言葉を、セシリアは困ったように口にした。

忌避感はなく、ただただそこにあるのは、溢れんばかりの家族への愛。

止まった世界で、セシリアは思う。もっと早くに気付けていれば、思い出せていれば、あるいはこのブルー・ティアーズの意味にも気づけたのではないかと。

しかし、いまさらそれを言ったところで仕方のないことだということもまた分かっていること。

決して流さなかったその涙によって、その意味に気づけたのだから。

「お父様が『ブルー・ティアーズ』の名に込めたその思いは、涙を流す者たちの、その思いを背負う力となること。悲しみも、苦しみも、全てを打ち払う雫となること！」

然り。今こそ発せよ、汝に受け継がれるべき、その名を！

頭の中に響く声に動揺することもなく、セシリアは止まった世界の中で口を開く。

その相貌を見開き、悠然と迫りくる形のまま止まったローウェンへ向けて。

「その涙を払いましょう。目覚めなさい、『ブレイブ・ティアーズ』」

父が思い描き、そしてイギリス政府がその思いを汲んで作りだした『ブルー・ティアーズ』は、その声を聞き届けたように光を発する。

装甲は全てがシールドビットへと変わり、BTビットは三倍の数である一二基、ミサイルビットは六基に増設され、装甲自体も水を切り払うような鋭い姿へと移り変わっていった。

全ての変化が終わった時、ようやく止まっていた時が動き出す。時間にすればほんの一瞬であったそれは数千倍、数万倍に引き伸ばされ、その中で起こった変化を見届けたローウェンは驚きに目を見開いていた。

「ほう、ここで二次移行セカンド・シフトを遂げるか。私にどれだけ通用するか、試してみるがいい」

「……ええ、そうさせていただきますわ。『ブルー・ティアーズ』」

セシリアの声で、大破したはずの一機を加えた一二基全てが宙に浮かぶ。手元に『スターダストmk?』を呼び出すと、出来なかった筈の並列武装操作を軽々とこなして見せた。

ビットそれぞれを操りながら、『スターダストmk?』で正確に狙いを定め引き金を引く。それを異常な速度で回避して見せたローウェン目掛け、全てのビットからコンマ数秒ずらして射撃する。

「だが、手数が増えただけでは勝てんぞ！」

「残念ですが、それだけではありませんのよ！」

またもやその射撃を回避したローウェンの背部を、捻じ曲がった

B Tエネルギー弾が撃ち抜き、それを皮切りに体が揺らいだローウエンを次々と打ち抜く。

偏光制御射撃と呼ばれる高等技法ですら、今のセシリアには兎戯に等しかった。

「なるほど、ようやくまともに戦える力を得たと言うことが。いいだろう、こい！」

直後、ローウエンとセシリアは互い目掛け加速した。

戦いが始まってから既に二〇分以上が経つ。

その中で、互いのシールドエネルギーは一たりとも減ってはいなかった。

「おいおいおいおい、テメエらまじで火力不足かあ？」

「硬すぎ……」

「《啄木鳥きつじき》の武装特性で凹ませるだけって、どれだけ防御固めたんだ……？」

「ねえ、貴方も飽きてこない？」

皆一様に若干の疲れをにじませながらも、やはり闘気を衰えさせることはない。

そんな中で、グリムは全身に纏っている装甲をゆっくりと開いて

いった。

「しかたねえ、ボーナスステージだ。今度は攻めに出てやる、ちつたあ楽しませろよ？」

グリムの言葉と共に、防御兵装であつたはずのその装甲の一つ一つを構成している六角形のパネルがバラけていく。

それは複数枚がまるでパズルのように組み合わせると、ビットのようにグリムの周囲を飛び回っていた。

「『ニユクス』の防御兵装、《ブラックカーテン》。そして、その武装特性は、《ブラッドカーテン》！ その名の通り、テメェらの血でカーテンを引いてやるってエことだよ！ まさに幕引き、そら行くぞオ！」

「ッ！ ウイングビット！」

「援護するわ！ 《銀の鐘》！」
シルバー・ベル

「近距離は……任せて……！」

数十基のビットへと変化した《ブラックカーテン》は、真っ黒なそれとなつて宙に舞い、香織達へと向かつていった。

対する香織達も黙つてやられるばかりではない。香織はウイングビットを、ナターシャは『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの新規武装、束が手ずから作成したそれを、そして簪は《朱鉄》あかがねを振りかざして、それぞれの戦い方でもって挑んでいく。

このときの香織達は知る由もなかったが、『ニユクス』に装備された《ブラックカーテン》には二つの特徴があつた。

一つは、防御兵装である本来の状態であれば、磁気的反発力によつて殆どの実弾系兵装を無力化できる他、エネルギー類もあつさと霧散するほどの強固な壁であること。

そしてもう一つは、《ブラッドカーテン》を発動させているとき

には、その防御力の殆どは攻撃のためのエネルギーに回されるため、大した力は発揮できないと言ったことだった。

「ビットの扱いなら……、負けないっ！」

「弾幕戦は私の本領発揮よ！ 派手にやりましょう、『ゴスペル』

！」

「はああ……！」

ビットを打ち払い、切り払い、そして時には殴り、蹴り壊しながら、三人は目を睜^{みは}るような美しい連携を見せて進んでいく。

斬り込んだ簪の合間を縫うように香織のウィングビットが簪を囲むビットを打ち抜き、さらにその上空からはナターシャが、滅茶苦茶に威力が引き上げられた大口徑レールカノン《銀の鐘》を連射して弾丸の雨を降らせていた。

しかし、そこまでの猛攻の中でもグリムの操る『ニユクス』には傷一つつけられないでいる。そこから、グリムの操縦技術がずば抜けて高いということが三人にはよく理解できた。

「それでも、負けられない！」

戦いは、いまだ終わる気配を見せない。

「ああもつつ、なんなのこいつら……！？」

その頃、一夏たちの元へ向かうはずだった恋華は、何者かに追われていた。

部屋を出てしばらく行った所で突然教員用の《ラファール・リヴアイヴ》三体が立ち塞がったのだ。

IS 同士の戦闘では恋華が勝利したが、今度はロケットランチャーだの対戦車ライフルだの対物ライフルだのと言った重火器を持ち出してきたため、とにかく学校を傷つけないように誘導しながら逃げていた。

生身相手に IS を使えば後々が面倒だと言ったことが考えられているあたりまだまだ余裕なのだろうが、やはり恋華にとっては一分一秒が惜しい。

千冬の頼みごとを遂行できないと言うのは、恋華にとっては万死に値する行為だ。それ故に、逃げれば逃げるほど相手への殺意は高まっていた。

「もう、いいや。殺してやろう」

そして、その時は不意に訪れる。

アクアクリスタルだけを量子変換した恋華は、音速を超えた速度で水を動かし、ばつさりと生身の人間を一人斬り殺す。

恋華が突然その行動に移ったのがよほど拍子抜けだったのか、追っ手の残り二人は目を丸くして恋華のほうを見つめる。

「……そうか、殺されることも予期していなかったのね。いいわ、貴方達はなるべく惨たらしく殺してあげる。千冬さんの頼みを遅らせようとした罰よ」

次の瞬間、再び IS を纏った恋華は猛然とその二人に向かっていった。

第57話 勇気の雫（後書き）

はい、なぜかセシリアが二次移行しました。

おつかしいなー、そんなはずじゃなかったのに。

ちなみに、『ブレイブ・ティアーズ』の裏話はこれから話されますので、楽しみに。

ほんとにどうしてこうなった……？

第58話 紅椿（前書き）

こっちはちゃんと考えていたプロット通り！ うん！

第58話 紅椿

「たああああっ!!」

大気を押し潰すようにして撃ち出されていく《龍砲》の弾丸を斬り裂き、アルファの操る『タナトス』の凶刃が迫る。

咄嗟に『甲龍』の《双天牙月》そうてんがけつによってその刃を受け止めると、甲高い金属音を響かせながらギリギリと鏝迫り合う。

「あははは、僕の《デスサイズ》を受け止めて踏ん張れるなんて、タフネスだねえ？」

「うっさい……、わよっ！」

「動きを止めればどうということはない！」

「あつはつはつは、止まらないよ！」

「ちょこまかと、動くなア！」

飛び退いたアルファ目掛けて飛ばされた、『紅椿』のエネルギー刃を《デスサイズ》で切り裂き、イグニッション・ブースト瞬時加速で第へと接近する。

「第、避けて！ 下よ！」

「遅オい！ ハッハア！」

最初の頃の億劫とした姿はどこへ消えたのか、やたらと高いテンションで斬り込んでくるアルファのそれを避けようとした第だったが、鈴の一声で咄嗟に下へ刃を構える。

次の瞬間、ちょうどそこへ打ち付けられた大鎌と刀がぶつかり、さらに金属音を響かせた。

「いつの間に!？」

「箒、鎌の動きは円運動よ！ 振り被っていても下から来ることだってあるわ！」

「賢い子だ、そのとオーリ！ でもそれだけじゃあない、『タナトス』のトリック、見破れるかな？」

「ふざけたことを！ 鈴、箒、とつと片付けるぞ！」

ケタケタと笑って鎌を操るアルファは、まるで道化のように鈴たちを見据える。

その姿を見て、いの一番に飛び出したのは箒だった。

「はあああああつ！」

「攻撃が直線的すぎるねつ、ほらほら、切り刻むよおバカさん！」

「この……っ！ 貴様っ！」

「箒、挑発に乗るな！ ああくそつ、鈴！ サポートを頼む！」

「わかったわ！ 箒、ちよつとなにしてるの！」

挑発に乗って飛び出していった箒を追って、鈴が飛んでいく。

奇立たしげに舌打ちして見せながら、鈴は《双天牙月》を思い切りよく振り上げ、投げる。円を描き飛んでいく《双天牙月》を鎌の刃で捕まえ受け流したアルファは、斬り込んできた箒の腕部目掛け鎌を振り下ろした。

ガチンツ！ と甲高い音を立てて装甲に突き立てられたその刃に抵抗できたのは一瞬、瞬きの間もなく振り抜かれる。

「ガッ！？ ああああああ！」

「あはははは！ どうだい、腕を切り取られた痛みは！？ 爽快だろオ？！」

「あ、ああつ！ あああああつ！」

「貴様……！ 鈴、箒を頼む！」

「ラウラ！？ ちょ、まちなさい！ ああもうっ！」

悲鳴を上げて痛みに悶える箒と、それを嘲笑うアルファを見てぶちぎれたラウラは、憤怒の表情を隠そうともせずに加速していった。鈴はとにかく箒の元へ飛ぶと、箒の体を抱きかかえるようにしてアルファとラウラの元から離れていった。

それを見届けた後、ラウラは武装を全開にしてアルファを見据える。その目には、確かな怒りがあった。

「君は戦えるのかな？」

「御託を並べるのが貴様の言う戦いか？　なら貴様の勝ちだろうな、私は貴様と無駄話をする気はない」

「……まあいいや、死んじゃえよ出来損ない！」

次の瞬間、互いの刃が激突した。

ラウラの操る『シユヴァルツェア・レーゲン』のプラズマ手刀と『タナトス』の《デスサイズ》が言い知れぬ不快な音を奏でながら鏖迫り合う。

その中で、ラウラは背部のワイヤーブレードを全て射出し、アルファを捕らえるべく空を走らせた。

「あはは、無駄だよ！」

そう言った直後、ワイヤーブレードは全て細切れに変えられる。

それと共に、プラズマ手刀と競り合っていた《デスサイズ》は大きく上へ跳ね上げられ、瞬きの間に下からの斬撃が繰り出される。

「くっ……！　やはり、手元で回転させていたか！」

「あら、ばれちゃった？　でも、『タナトス』のトリックを見破った気になるのはまだ早いよ！　そら、踊れ踊れ！」

笑いながら《デスサイズ》を駆るアルファへ向け、ラウラは手を翳す。

友が戻ってくるまでのしばしの時間、眼前の敵を縛り付けるために。

「あ、ああ、腕が、私の腕が……！」

「落ち着きなさい！ 大丈夫、腕は残ってるから！ 箒、箒ってば！」

着地して箒を抱きしめ、落ち着かせるように声をかける。

ガタガタと震えるせいで装甲同士がこすれ、ぶつかり、がちゃがちゃとうるさく音を立てる。それがたまらなく鈴の心を焦らせていた。

命を掛けて戦うことの意味を、箒は本当の意味では知らなかった。だからこそ失う痛みにもがき苦しんで、痛みから逃れようと必死になる。

その様子を、鈴は痛々しそうに見つめ、それからさらにきつく抱きしめた。

それから腕のアーム部分だけを消すと、箒の手をアーム部分から抜き出してぎゅっと握りこむ。

「箒、落ち着いて……。ほら、腕はある、私の手を握ってるわ。ね」「り、ん……？」

「そうよ。だから落ち着いて、大丈夫だから」
「……あ、ああ……」

ぞつとするほど冷たくなった肌に、暖かいそれが伝わる。恐る恐るなくなつた感触のあつた右腕でそれに触れると、自分が涙を流していたことを知った。

「私は……」

「大丈夫よ、大丈夫。……戦える？」

「……ああ、大丈夫だ。大丈夫だと、思う」

まだ震えてはいたが、しっかりと頷く。

「無理なら下がってもいいのよ？」

「……いや、下がらない。これ以上、自分を無様にしたくはない……！」

それは、涙まで流してしまつた簾の矜持でもあつた。

ぎりつと奥歯を噛み締め、睨みつけるようにラウラと戦うアルファを見据える。そこには、まるで遊んでいるかのようなアルファの姿が見える。

姉からもらつた力を使いこなすこともできず、いまだ勝ち星を収めることも難しい。そんな自分が、涙など流すことは許し難かつた。何よりも、己が。

「どんな感情を持っていても、私の姉から受け取つた力だ。それを使いこなせぬまま、負けを認めてたまるものか……！」
「簾……」

勝ちたい。

涙まで流し、無様に倒れかけた自分が情けない。わざわざ機械の右腕までくれてやったのだ、次は自分が奪い取る番だと。箒はただひたすらに思う。勝利を。

「私は、勝ちたいのだ。この機体で」

「なら、勝てばいいじゃない。箒ならできるわ」

優しく微笑んでそう声をかけた鈴は、まるで聖母のような笑みを浮かべて、それから箒の手を引いて立ち上がった。

普段は鈴を見下ろしている形の箒の目には、鈴が自分よりもずつと背が高いような錯覚が見え、それから納得する。

鈴は己よりもずつと強いのだと、自らの力の一部を失った箒は得心した。

「……鈴」

「なに？」

「……ありがとう」

「ええ、どういたしまして」

パシンッ、と素手同士で音を立ててハイタッチしてから、箒は再びアーム部分を作り出す。が、やはり右腕の部分は無様に切り落とされていた。

だが、箒はそれに目もくれず、先に飛び上がった鈴と共に空へ戻る。

「ラウラ、お待たせ」

「遅いぞ鈴。箒も……、大丈夫なようだな？」

「ああ、心配を掛けた。もう大丈夫だ」

「あらら、戻ってきたんだ。まあいいや、また戦えるんだろ？ ほらほら、殺しあおう！ さあ！」

無邪気に笑うアルファを、射るような視線と共に見る箒。
その目には、先ほどの痛みに怯えた輝きはなかった。

「あれ、あれ？ 珍しいね、確かに片腕ふっ飛ばしたのに。怖くないの？」

「ふん、恐怖心はとうに失せたわ。貴様程度に姉さんの作った機体が負けるなど、あつてたまるものか」

まるで箒の怒気そのもののように『紅椿』の紅い装甲が明滅しだす。

それに気づかぬまま、箒はその手に再び《空裂》^{からわれ}を作り出し、静かに構える。

次の瞬間、紅蓮に染まったエネルギー光が箒の周りに溢れ出していった。

「……つまらないな。いいや、あんたはもう死ね。ここで、死にさせエ！」

一瞬で箒の目の前に移動したアルファが、落胆気味に言い放って刃を振り上げる。

その直後、アルファがさつきと同じように手元で鎌の柄を回し、箒の真下から大鎌の刃を襲わせる。

ガギンッ！ と甲高い金属音が響き、確実に命中したと確信できたその瞬間、

「もう、見えたぞ」

「ッ！？ くっ、このおっ！」

凜と響いた箒の言葉に怖気が走ったアルファは、咄嗟に弾かれた

刃を上から思い切り落とす。

ところが、今までは面白いように当たっていたその攻撃が、今度は持ち上げられただけの《空裂》の刃で受け止められた。

「なんだ、なんだなんだよっ！ 弱いくせに、粹がりやがって！

雑魚は死ね、死ねエ！！」

「貴様に私の欲を満たせるか？」

「……あ？」

いつそ凍てつくほどの怒気が込められた一言に、駄々をこねる子供のようだったアルファは思わず言葉をとめる。

「私は、勝ちたい」

地上に降りる前とはあまりに違うその姿に、アルファは少しだけ後ろに下がる。

それを見ながら、箒は続けた。

「この力で、この機体で、何よりも勝利を。強者と打ち合い、掴み取る、その欲を貴様程度を満たせるか？」

「うる……セエんだよ出来損ないがア！ 第四世代だからっていい気になるなよ、どうせ使えもしないくせに！」

「使えるさ。何せ今の私は」

その直後、紅いエネルギー光はずたずたに切り裂かれた『紅椿』の右腕へと集っていく。

やがて、そこには切り落とされる前と変わらない右腕部があった。

それと共に、箒は願う。ただ無心に、勝利だけを。

「最強を目指す身だ」

口にした瞬間、全身を力が満たす。

S i s t e m a l l g r e e n .
O p e n a b i l i t y .

それと同時に『紅椿』の削られていたシールドエネルギーも上昇していき、数秒ほどでマックスの八〇〇まで戻った。

ISのシールドエネルギーを無限大に増大させる、『紅椿』の単一技能。それこそが、『けんらんぶとう絢爛舞踏』だった。

ようやくか、おぼこい娘子め。

「ああ、すまないな。 共に行こう」

どこからか頭の中に聞こえたその言葉に答え、それから悠然と現れた右腕に『あまつき雨月』を呼び出す。

そうしていつものように構えを取り、箒は今度こそまっすぐにアルファを見据えた。

「さあ、仕切り直しだ。その刃がこの身に届くというのならば、掛かってくるがいい！」

「ふざけやがって……、ぶっ殺してやるよオオオ!!」

鈴とラウラの二人がまるで消え去ったかのような存在感を発し、箒は絶叫して突っ込んでくるアルファを迎え撃つべくその身を動かした。

第58話 紅椿（後書き）

はい、と言うことで篝ちゃん覚醒の回でした。

これにより、篝ちゃんも天災の領域がわかるようになりました。あと、《絢爛舞踏》の発動条件が『勝利への欲』に変更。強い相手と戦っていないと発動できなくせつけのある子に変身。

ま、いいよね！ 元々力に溺れやすいなら、その力も全部使いこなせるようにすればいいじゃないという、そんな感じ。

鈴はオカン、ラウラはオトン。篝ちゃんは多感な一人娘、書いていてなんだかそんな感じがしました。

第59話 大人たち

『ということだ』

「なるほど、つまり……、助けが必要だと」

一年の専用機持ちたちがアリーナで奮戦している頃、葵は地下シエルターの隅で端末の向こう側の女性と話していた。

生徒への避難の話が来たのが三五分ほど前、その中でも飛びきり優れたものはそれが『ただの避難訓練』ではなく、何か『緊急の要件に関係した避難』であるということに気づいている。

その『何か』を知らされ、葵は思わず歯噛みした。

「わかった、何とかして出てみる。学園の換気口の配線図は頭に入っているから、そこから行くわ」

『こちらから打鉄』で出る。そっちも気をつける』
「了解」

端末の通信を切り、それから軽く周囲を見渡す。

生徒達の大半は友人達との歓談に興じているが、そのうちの数人は周囲に鋭い視線を送っていた。

それをみて、葵は端末を操ると二人の女性の名を分割表示で呼び出す。

『はいはい、なんスか？』

『なあに、葵？ どうしたの？』

「二人とも、すぐに右奥の私のところまで来て、すぐに。周囲に気取られないように」

『……なーんかヤバげな話っすね？ オッケイッス』
「わかったわ、すぐ行く」

呼び出した二人は、それから三〇秒と立たずにやってきた。葵の注文通りに周囲の視線を引いていないところから、それなりの実力者であることがうかがえた。

一人はフォルテ・サファイア。専用IS『コールド・ブラッド』を所持しているが、どこの代表候補なのか、それとも企業代表なのかすら不明である。もっとも、その防御を葵の生身の蹴りの一撃だけでぶち抜かれてからは、葵のことを姉御と慕うようになってしまったが。

そしてもう一人はサラ・ウェルキン。セシリアと同じイギリス代表候補生ではあるが、専用機はない。しかしその操縦技術は高く、セシリアに指導したこともあるという。

始めの頃は衝突することもあったが、今では葵の良き友の一人となっていた。

「おまたせっス、姉御」

「おまたせ、葵。それで、何の用なの？」

「これからここをこっそり抜け出さないといけないわ。手伝ってくれない？」

「了解っス！ 任せてくださいっ！」

「また厄介ごとなのね……。もう慣れたけど」

フォルテは本当に楽しそうに、サラは苦笑い気味ながらも了承する。

二人から良しの答えを受け取った葵は、唇の端を歪めながら手早く周囲を再確認し、それからシエルターの上部にある換気口の位置を確認すると、二人に上を見るように指差した。

「あそこから行くわ。サラは残ってオペレート、フォルテは着いてきて。専用機は持つてるわよね？」

「もちのロンロンっス！ サラ、頼むっすよ！」

「わかったわ。くれぐれもやばいと思ったら逃げてね、データを揉み消すのって意外と大変なんだから」

ちなみに、一年生の頃に葵が伝説を作らなかったのは、サラが必死にデータや噂の揉み消しに走っていたからである。自重していてもその超人ぶりは隠せない葵であった。

二人は頷いてから軽々と跳び上がり、頭上数メートルのところにある溝に手を掛けると、螺子で止められた部分を量子変換して取り出したドライバーで外して換気口の中に入る。

内部はきちんと掃除されているらしく、中に入っても汚れは見当たらない。

「フォルテ、大丈夫？」

「問題ないっス！」

「よし、このまま進むわよ。この先には少し開けた場所があるから、そこで一旦通信」

「了解！」

指示を出してから二人は四つん這いで先へ進んで行く。

しばらく進んだところで、パイプがやや膨らんだところに辿り着き、そこで一度歩みを止めて端末を操作する。

「もしもし、サラ？ 聞こえる？」

『ええ、大丈夫よ。フォルテは通常回線を開いておいて、これからはこのチャンネルを使うわ』

『りょーかい』

葵は懷からインカムを取り出すと、端末に端子を接続し、無線式のインカムを耳に取り付けてから端末を懷にしまいこんだ。

「これで問題なし、と。サラ、そっちに送った見取り図は使える？」
『ええ、ばっちり。そこは……、少し進めば換気口が丁度上にあるから、そっちに入って。次は追って指示するわ』
「了解。行きましょ、フォルテ」
「ういっス」

サラの指示の元、二人は換気口のパイプの中を進んでいく。

千冬の頼みは、アリーナで戦っている一年生の助けに入ってほしいというものだった。そのためにシエルターを脱出し、こうして換気口を通り外へ脱出する計画を立てたのである。

二〇〇メートルほど進むと、丁度上に円形の金網があたり、それを手で押しあけて上のパイプへ移動する。

幸い音の反響は鈍く、大きな音を立てても外に響くことはなさそうだった。

「サラ、着いたわ。次は？」

『じゃあ、そのパイプを進んでいってちょうだい。そうすれば三階の女子トイレに出るから、そこから進んで』

「よりにもよってトイレなの？」

『文句なら設計者に言ってちょうだい。気をつけてね』

インカムからのサラの声が途切れる。

本当に、なぜトイレに繋がっているのかが不思議でなかったが、のっぴきならない事情でもあったのだらうと無理やり納得し、二人はそのパイプの中を進んでいく。

今度は少し短めだったらしく、五分も進んだところで出口の金網にぶつかった。

それを音をたてないように外すと、脇に寄せて顔だけを出し、外を探る。

人の気配はおるかネズミ一匹感じ取ることができず、葵はそつとその身を外へ出した。

「……よし、いいわよ」

「ういーっス、よつと」

ストーン、と軽い音を立てて着地した葵とフォルテは、周囲を見渡しながらゆつくりとトイレの入り口まで移動すると、葵がインカムでサラに呼びかけた。

「サラ、外に出たわ」

『いい調子ね、今近くの監視カメラをハックしたわ。学校の構造は覚えてるわよね？　そこからアリーナ入り口を目指して』

「了解」

インカムからの声に従って、二人は廊下を進んでいく。と、その途中で突然インカムから大きめの声が響く。

『待つて！　待つて、ストップよ……』

「どうしたの？」

『これ……、今そつちに映像回すわ。とにかく見て』

サラの声とともに、端末に映し出された映像には、廊下を進む黒ずくめの男たちが映っていた。

手には銃器を所持しており、明らかに一般の人間ではないことがよくわかる。

それを見て、葵は軽く眉を顰めながらサラに声をかけた。

「サラ、大丈夫。私なら大丈夫よ。フォルテ、いける？」

「普通の銃器なら問題ないっス。専用機もあるっスから」

「そういうことよ。ナビよろしく、ただしあまり戦闘はないようにお願い」

「……まったく、了解。貴女といると退屈しないでいいわね。そこから一番東の階段を二階に下りて、そこから最初の窓から飛び降りて」

「……は？」

呆れながらも嬉しそうに答えたサラの声に、思わずフォルテはそう声を返す。

普通であれば専用機もちでない葵の方の反応であろうが、残念ながら葵が常識の適応外にあると知っているサラはあっさりと言っているのけたしまった。

「まさか、アタシは生身でっスか！？」

「そうよ？　ISを展開したらばれちゃうじゃない」

「大丈夫よ、私が抱えてあげるわ」

「あ、姉御に抱いてもらえるんだったら、そのお……」

「……葵、フォルテは放って先に進んでちょうだい」

突然真っ赤になってにやけながらくねくねしだしたフォルテに、それを監視カメラで見えていたサラは辛らつに言い放つ。明らかに呆れているように聞こえたのは気のせいではないだろう。

「……フォルテ、行くわよ」

「あ、待ってくれっス姉御ー！」

二人して音をたてないように廊下を進んでいくと、一番端にある階段をゆっくりと降りていく。二階にも見たところ人影はなく、障害なく降りて行った。

二階の階段から一番近い窓を開けると、下と周囲を確認して、そ

ここにも人影がないことをしつかりと確認する。

「……ほんとに飛び降りるんスカ？」

「当然。怖いなら残る？」

「……えつと、抱きかかえてくれるなら」

「はいはい」

またもや頬を染めて言ったフォルテを軽々と抱き抱える葵。誰が見てもお姫様だつこだと答えるそれをされたフォルテは、今度こそ顔を真っ赤にしてオーバーヒートした。

「……フォルテ、フォルテ？」

「あ、姉御が、姉御が私のことをおお……！ え、えへへ……」
「まったく……。ほら、行くわよ！」

反応しそうにないフォルテを抱いたまま窓から飛び降りた葵は、そのまま一切の衝撃も音も立てずに着地する。一人を抱えて五、六メートルの所から飛び降りたとはとても思えない状態だった。

「フォルテ、そろそろ行くわよ？」

「へっ？ あ、はいっス！」

ようやく戻ってきたフォルテとともに走りだし、アリーナ目指して走っていく。

と、そこでサラの通信が入った。

『二人とも、無事に出たみたいね。今は外の監視カメラからモニターしてるわ。そこからアリーナの来賓入り口に向かってちょうだい。第一アリーナに出るはずよ』

「了解。ここからは通信なしでいいわ。オペありがと」

『どう致しまして。それじゃ、気をつけて』

それきりサラの声が消え、二人は周囲を警戒しながら進んでいく。外に黒ずくめの連中はいないらしく、まるで何事もない昼下がりのように進んでいった。

アリーナの扉を開け、中に人影がないことを確認してから内部に体を滑り込ませる。

「敵影なし、と。フォルテ、いいわよ」

扉の外で待つていたフォルテを中に呼び込み、ゆつくりとアリーナの内部へ歩を進めていく。すると、奥の方からはISの駆動音が聞こえてきた。

葵は手の仕草でフォルテにISを装着するように言うと、自分も指にはめたBCリングからブレードコイルを呼び出して身構え、ゆつくりとアリーナの通用口からアリーナの中心部へ進む。

すると、そこには特徴的なフォルムをもった一機のISの姿があった。

「……………恋華れんげ？」

「その声……………葵ちゃん？　ちゃんと出てこれたのね。それで、そこらは……………フォルテ・サファイアさんね」

「な、なんで知ってるんスか」

「全生徒の名前はちゃんと覚えてるわ。で、葵ちゃん。ここに来たってことは、状況はわかってるわよね」

生徒会長である恋華は、人を魅了するようなその笑みを葵たちに向けてながら近づいてくる。

目の前まで来たところで、葵は口を開いた。

「ええ。フォルテに説明よろしく、私は面倒だから。それで、戦闘はどこで起こってるの？」

「第六、第五、第三アリーナよ。第六アリーナのシールドバリアが砲撃一回で破られたわ」

「また高出力な武装ね。わかった、私が第五に行く。恋華は第三に行つて。フォルテはここで待機よ」

指示を飛ばし、空いている片手にナイフをコール。それだけで、葵の支度は済んだ。

葵に命じられたフォルテはこくりと頷くと、宙に浮いてごろりと寝転がる。フォルテのいつもの待機スタイルだった。

「ところで、千冬さんは？」

「もうすぐ来るわ。今教員用の『打鉄』^{うちがね}の最適化中よ^{フィッティング}」

「すまん、待たせた」

その言葉とともに奥からやってきたのは、『打鉄』に身を包んだ織斑千冬だった。

装備はハンドガンが取り外され、刀一本に最適化されている他、動きやすさを考慮してか装甲もやや少なめになっていた。

「それでは、行くでしょう」

その一言で、二人も頷く。

「さあ、反撃開始だ」

最強たちが、動き出した。

第59話 大人たち（後書き）

初出演のフォルテ・サファイアとサラ・ウェルキンでした。

だいぶキャラ変ってるのは許してください。サラは原作で名前しか出ていないのをいいことに好き勝手やりました。フォルテはもっと好き勝手やりました。

あ、フォルテは葵ラヴです。はい。

最強たちが立ち上がった次回、とうとう決着か？

第60話 幕引き

強烈な爆風が三人を襲い、大きく距離を引き離す。

その爆発は、《ブラック・カーテン》の武装特性、《ブラッド・カーテン》によってビットへと変わった《ブラック・カーテン》が自爆したものだっただけ。

「くう……！」

「二人とも、大丈夫！？」

「私は、大丈夫……！」

「私も大丈夫です！　けど、あの攻撃は……」

齒噛みするように香織が言う。

グリムの防御壁であった《ブラック・カーテン》が事実上失われた今になっても香織たち三人が攻め立てられない理由は、単にその攻撃性能の高さと厄介さにあった。

「近づけば任意で起爆できるうえに、自己再生もちの攻撃ビットかあ……、厄介なことこの上ないわね」

「おいおい、せっかく防御をやめてやったのに、これですまいじゃねエだろ？」

「もちろんよ。ダンスはまだまだ序章だもの」

「そうこなくっちゃあ、なア！」

一つ吼え、グリムはビットと化した《ブラック・カーテン》を引き連れて突っ込む。

香織の連撃を流れるように回避し、簪の一撃を受け流し、もっとも脅威度の高いナターシャ目掛け突進していく。

それを迎え撃つように、ナターシャは《銀の鐘》シルバー・ベルを構えると、弾

数を気にすることなく滅茶苦茶に乱射していくが、その悉くをグリムは次々に避けていった。

「これなら、どうっ！？」

その言葉とともに繰り出されたのは、左腕部に格納されたエネルギーギブレード《銀の刃》シルバー・ブレードの刃だった。

銀色に輝くそれをグリム目掛け放つナターシャ。確実にそれが当たったと思われた、その瞬間。盛大な爆発音とともにナターシャが吹き飛ばされる。

「がは　っ！」

「ナターシャさんッ！」

「アメーのよ、武器はいくらでも元に戻せるんだからなア！」

真横から接近していた一基のビットの爆発によって吹き飛ばされたナターシャは、咄嗟に空中で姿勢を制御すると斜めに地面を見つめる姿勢のまま《銀の鐘》を次々に打ちはなつ。

弾丸によって抉られた大地が土煙を巻き起こし、更に視界を悪化させたところで、ナターシャはようやくその手を休めた。

「はあっ……、はあっ……！」

「一撃くらいは……、入った……？」

「　カ、カカカカカカアアアアアアアアアアッ！！」

『敵機健在、ダメージが通っていませんっ！』

プライベート・チャネル

甲高い笑い声と同時に、全員の個人間秘匿通信に響いたイヴの言葉でナターシャは咄嗟に防御姿勢をとる。

土煙を突き破り、その向こうから二本のブレードをその手に備えたグリムが、恐ろしい笑いを顔に貼り付けてナターシャへと突き進

んで行く。

いけない、アレは！

「絶^たアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツツ
ツツツツツツ！」

ナターシャの頭の中に声が聞こえたその刹那、雄叫びと共に両肩に叩き込まれる金属刀。

肩の装甲を砕き、骨まで衝撃を伝えたそれは、斬られずにあったものの、その中にある骨はぐしゃぐしゃに砕いていた。

「グッ、ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

「な、ナターシャさん！？ お前……！！」

「クク、カカカカカカ！ 肩の骨をぶち壊した！ もうテメエは戦えねエ！」

[illegible]

宙に浮いてはいるものの、激痛と呼ぶことすら生ぬるいであろうそれに苛まれ、ナターシャは脂汗を滲ませながら呻いた。

「さアて……トドメというかア！」

「させるかつ！
《夜雀》武装特性起動！
《クリア・スピック・
オール》！」

「『蒼鉄』、『蒼鋭蒼鉄』……ッ！」

咄嗟に《夜雀》を呼び出して武装特性を發動、無数の見えない弾丸を一斉に撃ち出す香織と、《蒼銳蒼鉄》を發動して刃を飛ばす簪だが、そのどちらもが突然現れた《ブラッド・カーテン》に阻まれてグリムの元へは届かない。

「無駄だぜエ……、逝イイツちまいなアアアアア！！」
「くう　！」

ダメエエエエエ！

振り下ろされる双刃がナターシャへと迫る。
もう駄目かと、目を閉じ覚悟した刹那。

ヒーローは、遅れて現れる。

「……アア？」

「ふむ、同僚に好き勝手してくれたようだ。この代償は支払ってもらわねば」

斬られていないその感触と、聞き慣れた友の声に、恐る恐る目を開く。

「間に合ったようだ。全員無事、ではなさそうだが。まあ、少し待て、すぐに片付ける」

そこには、『打鉄』を纏った『ブリュンヒルデ』がたたずんでいた。

「デメエ、邪魔してくれてんじゃねエよ糞が……」
「すまないな、私は今　」

刃を押し返し、片腕でそれを軽々と使いこなしてみせる千冬。数年も前線に立っていないなどというブランクは感じさせることもなく、千冬はその一本だけで次々と剣を弾いていく。

一方、それよりも少し前、葵は第五アリーナへと到着した。

「逃しませんわ!」

「しかしこれでは千日手、互いに消耗を続けるだけだな」

そこにいたのは、今までとは全く違う形の、一二基に増えたビットを操りながら狙撃用エネルギーライフルを高速機動で引き金を引くセシリアと、それを恐ろしい速度で回避していくローウェン。

その様子を少しの間見ていた葵は、ふと自分のやるべきことを思い出してアリーナの中へと足を踏み入れた。

「その二人、止まれ」

ギシリ、とその場が止まり、歪む。

冷酷なほどに強烈で重い言葉は、空間すらも停止させるほどの重みを含んでいた。

「一之瀬葵……、姉君か」

「……その口ぶり、やはり貴様『人形』か」

「貴女がでてくるとは……、そろそろ幕引き、ということか」

言葉を交わす二人を、セシリアはただ見つめる。自分が口を出す

ところではないと、雰囲気であわっていた。

と、ローウェンはセシリアの方をまっすぐに見つめて声を上げる。

「セシリア・オルコット！　なかなかに好ましい死合手しあてであつた！
次にまみえる時が来るとするならば、その時こそはこの決着、つ
けさせてもらおう！」

「……ええ、私の名において約束致しましょう。いずれ、またいず
れ！」

互いにそう言葉を交わすと、ローウェンはゆっくりと空へあがつ
ていく。

その顔には、穏やかな笑みが浮かんでいた。

「では諸君、私はここでお別れだ。良き日々を！」

「ローウェン……、何を　！？」

「まずい、退避しなさい！」

葵の叫びも遅く、アリーナ全体を恐ろしいほどの爆発が包み込ん
だ。

「このおおおおおー！」
「遅いぞ」

上段から落とされた刃を紙一重で見事に避け、手首へ向けて逆刃になった《空裂》^{からわれ}が下から襲う。

それをギリギリのところで《デスサイズ》の柄をずらし対応して見せたアルファだったが、《空裂》はその刀身に紅いエネルギーを宿したかと思えば、恐ろしい勢いで細振動し、あっという間にその柄を切断してしまった。

「ふざけるなよ糞ッ！　ただの人間に、共鳴したくらいで負けるなんてあるもんか！」

「貴様が何を口走っているのかは知らんが……、無駄口を叩いている暇があるか？」

「このっ……！　《デスサイズ》武装特性起動！　《魂狩リ》^{タムガ}！」

目の前でそう叫んだアルファの手にあった《デスサイズ》が、その言葉を発した途端にがちやがちやと震えだす。

次の瞬間、アルファは今までとはまるで違う速度で斬り込んで来た。

「くっ……」

「はは、あははははは！　どうだ、武装特性も使えないくせに、いきがるなよ！」

「……なるほど、今がそうか。常々、香織達のあの力がどうやって引き出されているのか疑問だったが……」

もう覚えたぞ。

に……、と深く笑った筈は、次々に斬り込み装甲に傷をつけている《デスサイズ》を足で蹴り飛ばすと、空裂を鞘へと収める。

前傾姿勢へと変わった筈は、鋭くアルファへと視線を固定すると、息を止め言葉を吐き出した。

「《空裂》、武装特性起動……！ 《空海断絶》！」
チハイワウル

その直後、紅い閃光と共に放たれた『刃の残滓』がアルファと『タナトス』に一瞬で到達、片腕を紙切れのように斬り落としてアリナンの壁を縦に裂いて消え去った。

装甲はおろか絶対防御すら発動させず、あらゆる物を切り裂くその武装特性を受けたアルファは、痛みすら感じさせる憎悪をこめて箒を睨みつけると、おもむろに自分の胸へと残った片腕を突き立てた。

ぞぶり、と肉を裂くおぞましい音が辺りに響き渡る。

「予想外だよ、天災の妹なら警戒しておくべきだった……。まあ、それも終わりだ、僕はここで幕引きだからね……。！」

「貴様、何を……？」

「こついう、ことさあああぁー！」

「熱量増大！？ くつ、AICではー！」

「箒、逃げてっ！」

「遅オい！ 地獄で会おうぜベイビィィィィ！」

吠える声と共に、辺り一体を爆発の熱と風が包む。

それは奇しくも、ローウエンのものと全く同じ瞬間だった。

第60話 幕引き（後書き）

自爆に巻き込まれた第五と第三アリーナの彼女達の安否やいかに！
そして彼らの目的とはなんだったのか。

次回も乞うご期待！

次回終わったら7巻かも……。今から進め方考えておかないと。

第61話 その後

医務室。

立ち入った途端に鼻を突く薬品の臭いに顔を顰めながら、箒はそこを進んでいった。

医務室のベッドを占拠しているのは、先刻の戦いで重傷ではないにしろ怪我を負った者達、箒の級友達であった。

あの戦いの最後、自爆を行ったローウェンとアルファに相対していた者達のうち、身動きの取れなかった一夏、シャルロットは絶対防御もあり軽傷、至近距離で受けたセシリアは火傷と咄嗟の自身の能力以上の過剰使用による頭痛に悩まされていた。

また、グリムの攻撃によって両肩を破壊されたナターシャは集中治療室に入れられているが、既に三時間になる。東の特製ナノマシンの投与の甲斐もあってか、既に快方に向かっているようだった。結局、無事だったのは箒、ラウラ、鈴、香織、簪の五名。助けに入った千冬と葵に怪我はなかった。

では、あの至近距離で箒たち三人が爆発から逃れられたのはなぜか。答えは、目の前で一夏の傍に座る女性だった。

「……あら、こんにちは箒ちゃん」
「どうも」

軽く会釈するように頭を下げてから、向かい合うように椅子に座る。

生徒会長、更識楯無。暗部『更識』の一七代目当主に当たり、本名は恋華。そして、箒にとっては姉の同類という認識もある。

彼女の遣わした水のヴェールによって爆発は無効化され、その場にいた者達は怪我を負わずに済んだのだ。

「先ほどはありがとうございました。貴女の助力がなければ、どうなっていたか」

「……箒ちゃん、変わったわね」

「……ええ。自分が真に求むるものを見つけた、まさにそんなところですよ」

そう答えた彼女の姿は、特に変わるところはなかった。自然体でそこにあり、背筋が伸び、まさに武人と言ふ言葉をその身で表しているような少女。

しかし、確かに彼女の中は変わっていた。あの時、『紅椿』がなんなのか、自らが何を欲しているのかを確かに見つけていた。

だからこそ彼女は《空裂》^{からわれ}の武装特性を手に出たのであり、それこそ彼女が本物となった証拠である。

「それじゃ、私は千冬さんのところに行ってくるわねー」

ひらひらと片手を幾度か翻し、医務室から出て行った恋華。

その背中を見送った箒は、そっと眠っている一夏の額に掛かっている髪を払うと、その手を膝まで戻してから口を開く。

「……一夏」

呼びかけた声が帰ってくることはない。強烈なダメージがいまだ体の中に残っているらしく、それが抜ける深夜辺りまでは目を覚まさないだろうと言ふ葵の診断だった。

箒が触れてみた限りでは、自身も葵と全く同じ判断をした。彼女は信用できる人でもあるため、箒はその答えに確かな自身を持っていた。

だから、その呼びかけは無駄なものだと知っている。

「私は、まだお前と共に生けない」

それ故に、箒は自分に誓うように続ける。

「この戦いで、私は己が思う以上に未熟であることに気づいた。私
がもっと強くなったとき、そのときには……」

想いを、告げよう。

心のうちの恋慕を、しかし箒は吐き出すことを是としなかった。
自らのそれを持ったまま、武の道を極める。その決意を持って、
箒は口を嚙む。

「……ではな、一夏。早く起きろよ」

小さな笑みを口元に浮かべ、箒はその場を後にした。紅椿の待機
状態である赤い紐に付いている金と銀の鈴が、小さく奏でた音を置
き土産に。

「……まったく、素直なのかそうでないのか」

箒が去った後、そこに小さく呟く者がいた。

金色の髪を揺らし、頭痛に苛まれながらも箒と同じように小さな
笑みを浮かべるのは、セシリア・オルコットだった。

ベッドに預けていた身を起こすと、耳に付けられている『ブレイ
ブ・ティアーズ』を外して手の平に乗せ、優しいな笑みでそれを見
つめる。

『ブルー・ティアーズ』の二次移行形態、『ブレイブ・ティアー
ズ』。その待機形態は以前と変わらぬものの、それが確かに変わっ
ていることを、セシリアははっきり知っていた。

「次の休みには、取り急いでお墓参りに行かなければ参りませんかね。かつこつけのお父様に、文句を付けなければなりませんから」

ねえ、ブレイブ・ティアーズ？

最後の言葉は心の中で呟く。

あの戦いの中で確かに頭の中に響いた、力強い女性の声。母に似た、暖かさと厳しさを持ったそれに、きつとその声は届いていると信じている。

セシリアは一度目を瞑り、それから少しの間音のしない医務室の空気に耳を澄ませ、それから再び^{まぶた}瞼を持ち上げる。

それから『ブレイブ・ティアーズ』を耳に付け直し、頭を襲う鈍痛が無くなっていることに気が付いた。

「あら……」

後は火傷を治すだけか、とぼんやり思いながら、セシリアは再びベッドに身を預け、目を閉じた。

「結論から言えば……、あいつらは人ではない」

会議室では、その一言で会議が始まっていた。

あの戦いの後、私たちを除く一般生徒は全員が寮に帰され、アリーナでは職員達が急ピッチでアリーナの修復に当たっている。

この会議室にいるのは、怪我のなかった専用機持ちと、お姉ちゃんに協力してくれたフォルテ先輩、サラ先輩、助けに駆けつけてくれた千冬さんに恋華さん、お姉ちゃんの計一〇名。

円卓を囲むように座った私たちの前で、千冬さんだけがそこに立っている。山田先生は修復班に回されてしまっているせいで出席できていなかった。

「人ではない？ どういうことですか？」

「彼らはISコアを心臓部として生み出された、完全なバイオノイドよ。簡単に言えば人造人間ね」

「さらに言えば、ISコア自体も残骸から解析した結果、束の作つたものではないことが判明した」

お姉ちゃんと千冬さんが話を進めていると、突然中央に仮想ディスプレイが映し出され、そこに束ちゃんの顔が浮かんでくる。

『私自身が解析したからね。皆、今回はお疲れ様。あれは厳密にはISコアではなく、量産と人体への結合を最重要視した劣化コピーだよ。だけど、あれほどのクオリティを保って再現するなんて……』
「さすがのお前も凹んでいるようだね？」

『まあ、それ以上にぶつつんしてるけどね。ああ、これは亡国機業ファントム・タスクの仕様じゃあない、これが出るならISを奪う必要はないからね』
「そうでしょうね。たちん、これをやったのがどこの誰か調べはつきそう？」

ニコニコしながらも怒気を隠そうとしない束ちゃんを見ながら、お姉ちゃんが苦々しい顔で言う。

束ちゃんはこくりと頷くと、既にやっている、四〇枚近くの仮

想ディスプレイを指し示した。

「ありがとう、たちん。それじゃあ、そっちはよろしく」

『はいはい。皆、無理しちゃ駄目だぞっ』

きゃぴきゃぴとした雰囲気を全力で撒き散らしながら、束ちゃんの映ったディスプレイが閉じられる。

……なんていうか、束ちゃんって見てると癒されるなあ。ほら、子供見てるみたいで。

「さて、フォルテ・サファイア、サラ・ウェルキン。ここでのことは戒厳令が敷かれる他、上にバレれば別口で罰則が入る危険性がある。くれぐれも言動と取り扱うデータには注意するように。いいな？」

「は、はいっす！」

「了解しました」

「……まあ、細かい話はここまでだ。恋華、この二人と一之瀬姉の分もやれるか？」

「もちろんですよ、千冬さん！ 任せてください！」

ぶんぶんと振られる尻尾が見えそうなくらいに満面の笑みを浮かべる恋華さんだった。

「では、これで会議は終了とする。皆、不審な点があれば逐一報告するように。また、来週には専用機持ちのみのタッグマッチトーナメントが開催される予定だ。各員とも注意を怠るな」

その言葉と共に、千冬さんは恋華さんを伴って会議室から出て行った。

それに続く人はおらず、皆がようやくと一息つけた、といったと

ころだった。

「……はあー、まだまだね、アタシ」

「私もだ。一対三で手も足も出ないとは……」

「一年生、今から落ち込んでもしようがないっすよ。まずはどうやったら強くなれるのかを考えるほうが有意義っす」

愚痴るふーちゃんとラウラに声を掛けたのは、フォルテ先輩だった。

決して軽い空気を崩してはいないが、それでも気遣っていることがわかる声音で言った先輩は、ぐっと椅子から立ち上がると、会議室の入り口まで歩いていく。

「アタシには、一年生達がどういう戦いをしてきたかつてのは知らないっす。けど、肝心なのは止まることじゃなくて進むことっすよ。アタシたちにはまだまだ時間があるんすから」

「そういうことね。聞きたいことがあればいつでもいらっしやい、二〇四二号室にいるから」

「あ、ならアタシのどこにも聞きに來るといいっす。隣の二〇四一号室っすよ」

そういい残して去っていったフォルテ先輩と、その後を追って出て行ったサラ先輩。

後には、お姉ちゃんと一年生陣が残される。

その中で席を立ったのは、篝さんとお姉ちゃんだった。

「私はそろそろ戻ろう。明日もあるからな」

「私も戻ろうかな。皆、夜更かししちゃ駄目よ」

そそくさと立ち去った二人もいなくなり、残ったのはいつものメ

ンバー。

「……私たちも戻りましょうか」

「そうだな」

「同意……」

「そうだね」

ふーちゃんの言葉に三者三様で頷いた私たちは、そのまま会議室を後にすることにした。

なんか、しまらないなあ……。

会議が終わった後、束は普段の姿からは想像もつかないほどに顔を歪めながら無数のディスプレイと向き合っていた。

「あの組織構成、どこかで見覚えがある……。もっと昔に見た、何か……」

そのディスプレイの一つに映し出されているのは、DNAの構成図とISCコアのフラグメントマップだった。

束と限られた研究者しか知らないことだが、DNAとフラグメントマップは元々互換性を持っていた。それ故に、フラグメントマップをDNAの代わりとして人間に移植することも、DNAをISCコアにフラグメントマップの代わりとして入力することも可能ではあ

った。

しかし、それを行う労力の割りに得られる成果はまるで代わり映えないもののため、束はそれを企画倒れとして記憶の片隅に追いやっていたのだ。

「それを、ここまで発展させる人がいるなんて……」

人間のDNAを全てフラグメントマップで代替し、心臓部位を全てISCコアで代用する。それを見る限り、束に言わせればあれは人間に限りなく近い人造人間ではなく、人間に限りなく近いISCであった。

「……もう少しで思い出せそうんだけど」

こつこつと金属製の机を指先で叩きながら呟いた束の声は、誰が返すこともなく暗闇に吸い込まれるだけであった。

第61話 その後（後書き）

オリジナル設定爆 誕っ！

さて、次回から七巻の内容に入っていきますよー！ 多分ね！

第62話 タッグマッチのお話

あの襲撃事件から数日、IS学園はようやく平和な日常に戻った。私たち専用機持ちも、そんな穏やかな日々を享受していた。

「それで香織、今週末のあれ、どうするの？」

お昼休み、一夏たちと共に屋上で食事を取っていた私に、ふーちやんがそう聞いてきた。

ちなみに、今この場には一年生の専用機持ちは全員揃ってます。国一つくらい一瞬で滅ぼせる戦力だね。お姉ちゃんがいたら一瞬でこっちが滅ぶけど。

「そうだねえー……。どうしたもんか」

「ねえ、一夏は誰と組むの？ もう目星付けてる？」

「……いや、全く」

シャルロットさんの言葉に、一夏も首を振る。

そう、困ったことに今週末の全学年合同タッグマッチ、その中の専用機部門で出ることになっている私たちだけど、その肝心のタッグが決まっていないのです。

「なあ、箒はもう決めたのか？」

「……ああ。セシリア、組まないか？」

「わたくしですか？ 珍しいですね、箒さんがそんなことを言い出すなんて。てっきりわたくしは……」

「誓いを自ら破るわけにも行くまい。また強くなったのだろっ、是非とも見てみたい」

「ふふ、いいですよ。そうも情熱的な申し入れ、断っては名が廃

りますもの」

……あれ、なんかあの二人やたら仲がいい？

そういえば、あの戦いで二次移行したんだよね、セシリアさんの機体。箒さんも何か掴んだみたいだし、一歩進んだ者同士気が合うのかな。

「ということで一夏さん、わたくしと箒さんは先約済みですわ」

「おう、わかった。それじゃあ……」

「あ、い、一夏！ 僕と組まない！？」

「んー……、そうだな。いいぜ」

「ほ、ほんと！？ やたっ……！」

シャルロットさんが物凄く喜んでるけど、一夏の場合は「前も組んだし、やりやすいだろ」みたいな感じだろうね。賭けてもいい。さて、上級生と組むわけにも行かないし……、またいつものメンバーで組むってことになりそうだな。

「よし、じゃあジャンケンよジャンケン。勝った人が香織と組むってことで」

「あれ、私の意志は？」

「いいだろう、ドイツの意地というものを見せてやろう」

「あのー？」

「ふっふっふ……、あまり私を舐めない方がいい……。それでも私は昔、巷でジャンケン界にこの人在りと謳われたのだ……」

「……もういいですよ」

五分後。

「「「あいこでしょっ！ あいこでしょっ！ あいこでしょっ！」「「「

」

更に五分後。

「いよっしゃあああああ！」

「くっ……！ まさかあそこでパーを出すとは……！」

「私の負け……。二代目ジャンケンチャンピオンの座は、鈴にあげる……」

ということで、私のパートナーはふーちゃんに決定しました。

……いや、あれでよかったのか？

その日の放課後、箒はセシリアとタッグの特訓を積むためにアリーナにやってきていた。

「しかし、本当に良かったのか？」

「何がですか？」

「一夏に立候補しなくて、ということだ」

「それを言うなら箒さんこそ。何か思うところがあったのでしょう？」

互いに相棒を身に纏ってアリーナの片隅に佇む二人は、プライベート個人間秘匿通信で声を交しあう。

元々は同じ相手に恋したライバル同士であり、犬猿の仲でもあった二人だったが、今の二人を見る限りそのような気配はまるでなかった。

『私は、私が更なる高みへ昇るその時まで、恋慕の情は封ずる事にした。『紅椿』と真剣に向き合ったときにわかったのだ、色恋にかまけている限り、この力は私のほうを向いてはくれないと』

『隣へ立つ為に離れる、ということですか。……気高い心意気ですわ』

『そんなものではないさ。私は、ただ勝利を得るために強くなりただけだ』

『それでも、ですわ』

優しいな声音を返すセシリア。

その声にはんのわずか口端を持ち上げた筈は、取って返すように声を上げる。

『それで、お前はなぜだ？』

『わたくしは……、彼との約束を果たすために、この力を、お父様から継いだ遺志を、更に強固にしたいのです』

『父の遺志……。彼というのは、例の襲撃者か』

『彼は自爆という手を取りましたが……、なぜか、死んだように思えないのです』

『……なら、再び見える時が来るといいな』

『ええ』

言葉を切り、そしてどちらからともなく武装を構える。

二人とも、強くなりたいという願望に見合うだけの確固たる理由を見つけ、それを叶えるために一夏と相對することになっただけのこと。

今の二人は同じ人を想う少女ではなく、自分の想いによって立ち、その手に武器を携える戦士であった。

「行くぞ、『紅椿』」

「行きましょう、『ブレイブ・ティアーズ』」

直後、セシリアの《ブルー・ティアーズ》が放った一二の光を、
箒が《空裂》^{からわれ}の刀身で掻き消していく。その刀身には紅いエネルギーが纏われており、それが微細な振動によってBTエネルギーを打ち消していた。

「不意打ちか」

「卑怯だなんて申しませんわよね？」

「理解するためには刃を交えること。卑怯などという言葉で覆い隠す気はないっ！」

BTエネルギー弾を《空裂》で打ち消しながら距離を詰めていく
箒に対して、セシリアは徹底した中、遠距離戦闘を続けていく。

近づけばミサイルとBTライフルによる狙撃の雨が降り注ぐ中、
箒は器用にも片手に《空裂》を、もう片手に《雨月》^{あまつき}を持ってその
弾のことごとくを打ち消し、切り払いながら突き進む。

接近して一太刀を浴びせんと刃を振るった直後、それを食い止めるように《空裂》に打ち付けられたのは、『ブルー・ティアーズ』
の頃からセシリアの機体に搭載されている唯一の実体近距離用刀剣
型兵装、《インターセプター》であった。

「近接武装は苦手ではなかったか？」

「克服したのですわ、使えないなんてわがままは言っていられせんもの！」

「それは結構、だっ！」

セシリアをその剣ごと断ち切らんと、大きく振り切ったその手へ目掛けて撃ち放たれる六つの光の矢を、腕部の展開装甲を開き、上方へ加速させることで無理やり回避する。

その程度の急加速では痛みを感じることがないくらいには、箒は自身を鍛えていた。

無論、その回避が行われた瞬間にはセシリアも次の攻撃に移っている。

回避されたはずの光の矢を、セシリアは無意識のうちに箒へ向けて捻じ曲げる。武器として扱うのではなく、自分の一部として、自由に使えるものとしてそれを認識することで、偏光制御射撃フレキシブルを使いこなしていた。

曲げられた光弾を一つ、二つと切り捨て、箒は進む。空を蹴るように急な方向転換を重ねながら、その機体の特性である全身の展開装甲をフルに使用して、箒はその技法、不確定三次元攻法ランダム・トリックを少しずつ完成の形へと突き詰めていく。

あの戦いの中で、一瞬のうちにアルファが見せた鎌の扱い方。現れたと思えばそこにはなく、思いもよらぬところからの強烈な一撃が襲いくるそれを思い浮かべながら、箒はそれを自分の体全体で行っていく。

最初の頃は捻じ曲がったBTエネルギー弾がかすっていたため、強制的に展開装甲からエネルギーを噴射して回避していたが、一〇分も経った頃には箒の動きはなかなか様になってきていた。

「まったく、奇妙な機動ですわね！」

「それが売りでな！ 散々やられた相手から何も学ばずにいるのでは、意味がない！」

上段と見せかけた下段からの突き上げを《インターセプター》で受け止めると、間髪いれずに引き金を引かれた《スターダストmk

『?』から吐き出された光弾が、ビットからのものと合わさり太い帯となって箒を付け狙う。

「ではそろそろ　！」

それを箒の眼前で一気に一三個の光弾に拡散させると、その中心を突くように『スターダストmk?』の引き金を更に二度引く。

「閉幕ですわ！」

合わせて一五となった光弾は交わり、時に弾けながら箒の周囲を付かず離れず飛び続ける。

その直後、箒が構えに入った瞬間にセシリアが叫んだ。

「『ブルー・ティアーズ』武装特性起動！　『そのなみだを^{Blow}はらい^{off}まし^{ears}よう』……！」

「使えるようになったか……！　いいだろう、篠ノ之箒、『紅椿』！　推して参る！」

『ブルー・ティアーズ』の武装特性を起動させ、ほぼ全てのBTエネルギーを辺り一帯に散布したセシリアは、その二次段階として八基のBTビットをその周囲に配置、中に入れた四基のビットから残りのBTエネルギーを更に散布し、内部のエネルギー密度を高めていく。

BTエネルギーはその特性上、相手に触れていれば触れているだけダメージを蓄積させる。そのBTエネルギーの霧ともなれば、ダメージ量は生半可なものではすまないだろう。無論、それは全てのBTビットが健在であるときの話ではあるが、今はそれが真となっていた。

「^{フィナーレ} 終幕ですわっ……！」

その直後、大気を揺らすほどの大爆発が巻き起こる。それは、限定空間内で飽和状態となったＢＴエネルギーが逃げ場を失って暴発したものだった。

これほどの爆発の中で、なおなお生き残っているとするならば、それは。

「……さすがに、負けたかと思っただぞ」

「……さすがに、倒したと思いましたわ」

煙の中から現れたのは、《絢爛舞踏》を発動させ、エネルギーを常にフルチャージ状態にした『紅椿』だった。

箒はゆっくりと居合いの形に刃を構えると、まっすぐにセシリアを見つめる。

「^{チヘイワフル} 《空海断絶》」

眩くと、暴風のように吹き荒れる紅いエネルギーが一点に収束していく。

これからしばらくの間、共に戦う戦友への選別として、箒は全力を魅せることを選んだ。

己はこれほどのものだど、知ってもらうことで高みへ上るための糧となってもらうために。そして、彼女自身が戦うときに、真っ向から打ち破ったのだと言う証明のために。

「斬り捨て……っ！」

煌々と輝く紅を抜き放ち、箒は叫んだ。

「御オオめエエエエエエんツッ！」

直後、全てを消し飛ばすような紅い斬撃が、セシリアの全身を覆い尽くした。

「あれが、『紅椿』。それに『ブレイブ・ティアーズ』……」

その戦いをモニターしていた一人の少女が、ポツリと呟く。
天王寺葉桜、簪に叩き潰され、更なる高みへ上り詰めることを望んだ少女だった。

「……私だけのISを、もっともっと強く……」

そして、私自身も。

最後にそう付け加え、彼女はぐっと拳を握り締めた。

彼女の願いがかなう日は、いつのことか。

第62話 タッグマッチのお話（後書き）

ということで、箒とセシリアが覚醒したものの同士で組みました。理由は違いますが、一夏争奪戦からは一旦離脱、強くなるための修行タイムです。

そしてセシリアも武装特性が機動可能に、箒はアルファの戦い方を覚えました。

さて、次回はどうなることやら。

簪ちゃん大暴走の回だったりする。

第63話 フランスへ（前書き）

突発的&オリジナルイベントです。
あと短めです。

第63話 フランスへ

「フランスに行くですってえ？」

朝一番に聞いた香織の言葉に、アタシは思わずそう声を上げた。なんでも、シャルロットがフランスへ一度戻るから、その付き添いで行ってやってほしいという千冬さんの頼みなんだそうだ。……いや、この時期に？ タッグマツチまでもう四日しかないのよ？

「うん。だから、ふーちゃんにも付いてきてほしいんだけど……」

だめかな？

くいつと首を傾げて聞いてくる香織に、思わず鼻血が出そうになった。

どうしてこの子はこういう動作が似合うのかしらねえ……！でも、正直言うで行かせたくはない。そもそもシャルロットは元々二人目の男性IS操縦者として入学してきたのに、当時そのことは全く聞かなかった。噂一つないなんて、普通はあり得ない。

このことから、シャルロットは男とは考えられないというのがアタシの意見だったわけだけど、まあどんピシャリだったわけよ。どうしてそういうことしてたのかっていうのは知らないけどね。

で、そのシャルロットがこの時期にフランスからの呼び出し。明らかに何かあるわ。

「……だめ？」

かはつ。危ない危ない、血が飛びそうになったわ。

……仕方ないわね。

「いいわ、その代わり簪も連れて行くわよ。戦力は多い方がいいんだから。東社長にも話を通さなきゃ」

「ほんとっ！？ ありがとう、ふーちゃん！」

ぎゅっ、と抱きしめてくる香織。

ほら、愛が溢れちゃうから。

『話は聞かせてもらった！ 人類は滅亡する！』

「ノストラダムスのせいね」

『そんなわけだから、パスポート作っとくねー。みんなのISの格納領域に送っとくから！』

「あ、はい。ありがとう、東ちゃん」

『なんのなんの！ それじゃーねー！』

ぶつり、と青い仮想ディスプレイが消え去る。

東社長、相変わらず嵐みたいな人ね。

時は流れて一時間後、アタシたちは空港へやってきていた。

メンバーはアタシ、香織、簪、一夏、シャルロットの五人に、怪我が治りたてのナターシャ。肩ぶっ壊されて数日で治るって、さすがよねナノマシン。

ほかの面々は国籍や特訓やらで不参加である。まあ、それでも多いわけだけど。

「こんなに付いてこなくてもよかったのに……」

「厚意は素直に受け取るときなさい。それで、向かうのは本社なのよね？」

「うん、呼び出しはそっちだったから」

「それじゃ、飛行機に乗りましょうか！」

ナターシャの一声で検査を通り、飛行機へ搭乗する。

待機状態のISはほとんどの検問に引っかからないから、金属探知機なんかに全く引っかからない。

それぞれが持ち前の資金でファーストクラスに搭乗を済ませると、飛行機が動き出した。

「……それにしても、こんな急な呼び出しってあるの？」

「何か急に伝えないといけないことが出来たって言ってたけど……、よくわからない」

香織の言葉に、シャルロットは首をかしげながら答える。

その動きはどこかきこちなくて、何となく違和感を覚えさせるものだった。

それきり、皆は大したことを喋ることもなくフランスへの旅路をゆったりと過ごすのであった。

……で、フランスに着いたわけだけど。

「動くな。全員こちらへ従ってもらおう」

「フランス流の出迎えってこういうのなのかしら」

「違うと思うよ。少なくとも僕はこういう教育は受けてないから」

出迎えたのは、防弾チョッキを着込んでアサルトライフルを構えた男たち十数人だった。

嫌な予感はしてただけだね、フランス到着してからすぐこれってどうなの？

「あんたたち、誰に銃向けてるか分かってる？ バインド・カンパニーの代表操縦者四名に世界で唯一の男性IS操縦者、ついでにデユノアの御曹司。これだけの面子相手に豆鉄砲構えて何のつもり？」

とりあえず軽くメンチ切ってそう言ってみると、数名の男が鼻で笑って口を開いた。

「死んでしまえば、ただの肉塊だろう？」

「やれるもんなら、ねっ！」

言った直後、示し合わせたように一夏以外の五人が一斉に動き出す。

私が近くの男の股間を蹴り上げ、うずくまっていたところで顔面に香織の膝が叩き込まれる。バキッ、と何かの折れるような音がした。

「があっ!？」

「この……、小娘どもが！」

「あら、おねーさんも小娘なの？ ありがと、お礼に鉛弾をご馳走してあげるわ！」

ナターシャが小さなハンドガンを量子変換して取り出すと、近くの男の脳天に弾丸を撃ち込む。脳髓を撒き散らして後ろに吹き飛んだ男からするとアサルトライフルを抜き取ったシャルロットが、丁度銃を構えた男たち数人にマガジンが空になるまで銃弾をバラまいた。

「くそ、なんだこいつら！ 話と違う！」

「あら、どういつ話を聞いてたのかしら？」

「ひいつ！ た、たすけて」

「問答無用……」

パン、と音高く空港内に響く銃声と共に吐き出された弾丸が、男の頭蓋を打ち砕いた。ぴちゃっ、と近くにいたアタシの頬に血が乗る。

これで半分と少し、残りは四人。

「くっ、男とデュノアの娘だけ生きていればいい！ 他は殺せ！」

「やっぱり僕と一夏が狙い……！」

「残念だけど、それは無理よ。ここであんたたちはゲームオーバーなんだからっ！」

残った四人を、痺れを切らしたアタシが呼び出した《龍砲》で吹き飛ばす。これでおわり、っと。

「全員無事？」

「それは敵さんに聞いたほうがいいわねー。っと、一夏君無事？」

「え、ええ……。これは、いったい？」

「敵襲……少なくとも組織の……」

「そうだね。狙いは僕と一夏だったわけだし、家庭の事情に他人を巻き込みたくはないから。本当は一人で行くつもりだったけど、向こうはこっちの事情もわかってることかな……」

シャルロットが悲痛な面持ちでそう呟く。

あの、それはいいんだけどさ。こっちはこちらでまずいわよ。とっとと行かないと。

「皆、行くわよ。いつまでも留まっていられないわ」

「さっきの銃撃戦で私たちまで面倒ごとに巻き込まれてるからね。急ごう」

「わかった。皆、付いてきて」

アタシと香織の言葉に頷いたシャルロットの先導で、とりあえず空港から脱出することにした。

「それで、どこへ向かうつもり？」

「とりあえず本社へ。相手もデュノア社本社の中では仕掛けてこないと思う。まあ、これが父の仕業でなければ、だけど」

悲しそうに呟いたシャルロット。だけど、それに対する答えを私たちは持ち合わせていなかった。

近くでタクシーを拾った私たちは、その足でデュノア社の本社へと向かう。

寄り道すれば狙われる危険性もあったし、なによりも時間を掛けたくはないというシャルロットの要望によるものだった。

けれど、デュノア社に向かうにつれて隣に座るシャルロットの顔が暗くなっていく。

ちなみに、タクシーは二台。さすがに一台に六人は無理だったからね。前にはシャルロット、アタシ、香織。後ろには簪、ナターシヤ、一夏が乗っている。

「やっぱり心配なの？」

「……うん。怖い、かな」

ちらりと、タクシーの運転手がミラー越しにこちらを見て、口を開いた。

「お嬢ちゃん、なんかあったのかい？」

「……父と、ちょっと。喧嘩と言うか、なんと言うか……」

喧嘩、ね。明らかに喧嘩じゃないけど、運転手のおじさんは何かを知り得て得心するように頷いた。

「まあ、お父さんは大切にしてやんな。俺にも子供がいるが、これがまた可愛くねエ奴でな。口を開けばくそ親父だなんだって。でもな、そんなあいつが俺は大切だし、あいつも心のどっかでは俺のことをちゃんと認めてくれてるってわかってるから、真っ向から喧嘩することもできるんだわ」

嬢ちゃんのお父さんも、きつとお嬢ちゃんのことを大切に思ってるだろうよ。

運転手のおじさんはニカツと笑いながらそう言った。

その言葉を、シャルロットは車中でずっと考えていたらしかった。

タクシーから降りてデュノア社にやってきたアタシたちだったけど、どうも雰囲気がおかしなことに気づいた。

「どういうことだろ、いつもは人がたくさんいるのに……」

「何かあったのかもしれないわね。行ってみましょう」

ナターシャの言葉で、アタシ達はデュノア社の中へと入っていく。

中には人の気配がなく、不気味な静寂だけが鎮座していた。受付の人も姿が見えないのは、さすがにおかしいでしょ？

「これ、どうなってんだ……？」

「とりあえず、社長室まで行ってみましょう」

「そうだね……。社長室は一五階にあるから、エレベーターで昇った方が早いよ」

「オッケー、それじゃあそれで行きましょうか」

頷いてから、シャルロットの案内でエレベーターへの道を歩いていく。電気はちゃんと通っているから、何かの事故というわけではなさそうだ。

エレベーターのボタンを押して待つ間、アタシは軽く周囲に目を配る。

すると、綺麗に掃除された床にいくつかの泥の足跡が残っているのが見えた。もちろん、アタシ達の足跡じゃあない。もっと別の、誰かの……。

「来たよ」

チンツ、と音がして、エレベーターの扉が開く。
そこに見えたのは。

「なんだよ、これ……！」

「死んでる……！」

一夏とシャルロットの声が、辺りに響く。
エレベーターの中には、壁に付いている鏡にもたれかかるように座っている、血まみれの男性がいた。

そして、その鏡には、血文字ではっきりと『I Kill You』と記されていた。

第63話 フランスへ（後書き）

この中途半端な時期に娘を呼びつけた社長の意図は？　そして今デユノア社で何が起きているのか。

突然のお話ですが、お付き合いいただければ幸いです。

ちなみに、シャルロットは彼らを殺さないように防弾チョッキの部分を撃っています。鈴と簪は、香織に銃を向けた時点で抹殺確定。しかもためらっていないのでちょっと人間の道を踏み外してたり。それでは、次回もお楽しみに。

第64話 デュノア社の異変（前書き）

また短いです。

第64話 デュノア社の異変

「胸糞悪いわね……」

「一体、誰があんなことを……」

「許せねえ……、人間をあんな風に……！」

ポツリと呟いたアタシの言葉に応じるように、シャルロットと一夏が声を出す。

あの死体のあったエレベーターに乗る気にはなれなかったため、その後アタシたちは辺りを警戒しつつ階段で進むことを選択していた。

二人一組の二列になって並んでいて、一番前がナターシャと簪、二番目がシャルロットと一夏、最後尾はアタシと香織が担当して進んでいる。

空気は重苦しく、一夏とシャルロットはあの死体が相当ダメージになっているようだ。

アタシと簪は曲がりなりにもそういった訓練は受けているし、香織がいる以上へこたれてなんていられない。好きな人に無様な姿は見せたくないもの。

ナターシャは元軍人だけあってこういうのには慣れているけど、不快感は隠そうとしていない。そうすることで一夏とシャルロットの心の痛みを軽減するつもりなんだろう。自分だけが辛いわけじゃないという風に痛みを分け合うことで軽減する、集団心理のようなものだ。

不思議なのは香織よ。まるで辛い様子は見せないけど、慣れているわけでもなさそうだった。不思議そうな顔をしていたけど……。

「香織、アンタは大丈夫？」

「え？ あ、うん。血塗れはお姉ちゃんがヤンチャしてる頃に見慣

れちゃったから。思ったより大変なことになりそうだなあーってだけで」

「……アンタも大概大物よね」

でも、葵義姉さん^{ねえ}だつたら仕方ないわね。

それにしても、あれほど派手に殺しておいてまるで手を出してこないってどういうことかしら。向こうはアタシたちが来ているのに気付いているはずなのに。

そんな疑問は、六階に差し掛かったところで見事に霧散することとなった。

「っ、全員伏せて！」

思いもよらぬ簪の声に咄嗟に反応したアタシたちの頭の上を、無数の弾丸が通り過ぎていく。

相変わらず熱烈な歓迎でありがたい限りね、まったく。

「いい？ 合図したら一斉にISを起動させて。そのまま通らせてもらうわよ」

「わ、わかった！」

「おう！」

「了解……」

「りょーかいですっ」

「はいはい」

それぞれが返事をしたところで階段から顔だけをひょこっと出して、壁が弾丸で削られたせいで出来た粉塵の向こう側の人影を確認する。

数は大したことないけど、武装は空港の連中よりもしっかりしている。ただのテロリストや強盗じゃなさそうね。

息を整え、向こうがこちらを覗きこんでくるのを待つ。あまり殺すした後でうるさそうだし、出来る限り無力化で納めないと。アタシだって積極的に殺したいわけじゃないし。

「……よし、いくわよっ」

言つと同時に『シエンロン甲龍』を起動して衝撃砲を撃ち放つ。出来る限り出力は抑えたが、それでもまともに食らった数人は壁にめり込んで意識を落としていた。心臓が止まっていなければいいけど。

「くっ、撃て！」

「効かないわよー。それっ」

「がはあっ！？」

悠々と近づいて行ったナターシャが、俗にヤクザキックと呼ばれるらしい蹴り方で数人を蹴り飛ばす。足の部分だけ補助動力を切っていたらしく、ダメージは動けない程度に抑えられていた。補助動力ありなら軽々と体が吹き飛び、壁が砕け散ったことだろう。

残りの二人は簪が後頭部にチョップを入れて意識を落とした。あつちは補助動力いれてるのに綺麗に気絶だけさせてるわね。器用なもんだわ。

「身元が割れるもの持ってないの？」

「んー……、ダメね。武器しか持ってないわ。それと交通費」

「交通費い？ この格好で地下鉄にでも乗るっての？」

「この装備品、全部ひっくるめても大きめのスポーツバッグ一つに納まる規模よ。電車ですべてきて、どこかで着替えて襲撃、終わったらまた着替えて何事もなかったかのように悠々と出て行く。よくやる手よ」

なにそのスパイ映画。

けど、これで少なくとも個人規模じゃないだろうって事ははっきりした。落ち目とはいえまだ第二世代のISシェアを一手に握ってるここを、個人で襲撃しようなんて馬鹿はそういないもの。

「とにかく、早く社長さんに会いに行くわよ。直通エレベーターとかないの？」

「ごめん、そういうのはないんだ……」

「ぼやいても仕方ないよ。階段以外は危険だし、上がどうなってるかもわからないんだから」

「そうだな……、とにかくISを着けた状態で進まない。またいきなり銃撃なんて洒落にならないぜ」

「それじゃ、とつとと行きましょ。いつまでもここに留まってやる必要もないんだし」

ナターシャが締め、それから同じ隊列で上へ向かう階段を進むこととなった。

それにしても、本当に人気がない。というか、あの空港にいた奴らとさっきの奴らが繋がっているだろうって事は想像できるけど……、デュノア社に一体何の用なのよ？

そんなことを考えながらデュノア社内部を進んでいくと、突然階段が吹き飛んだ。

「な、なんだあ！？」

「なんだ、この数は？ 織斑一夏にシャルロット・デュノアだけのはずだろうに」

「な、なんなんですか貴女は！？」

吹き飛んだ階段の残りカスを消し飛ばすように現れたそれは、冷徹な声を響かせた。

どこかで聞いたような声、それにその機体。

「ラウ、ラ……？」

「ラウラ？ ああ、オリジナルか。主様の恩寵を受けられぬ哀れな亡霊」

「……あんだ、何者よ」

ハイパーセンサー用のバイザーで目元を隠してはいるものの、その冷徹さは私たちと出会って最初のころのラウラにそっくりだった。主様、と言った所でどこか陶醉したようなそぶりを見せていたが、突然武器を構えると、頬を吊り上げて恐ろしげな笑みを浮かべる。

「私はアイン、主様の御子、ハイ・アドヴァンスド改変遺伝子強化素体だ！」

「どうやら、まともな相手じゃなさそうね……。とつとと置むわよ！」

先手を打って《龍砲》を叩き込むが、アインにはまるで効いていない様子じゃなかった。

「ふん、まるで遊びだな」

「どうしてここを襲撃したの！」

「……ああ、ああつ！ お兄様！ お兄様なのです！ お会いしようございました！」

香織の声を聞いた途端に、先ほどまでの冷徹な態度を消し去って嬉しそうに、無防備にこちらへ歩いてくるアイン。

どこか不気味なその姿に、アタシたちは思わず攻撃の手を止めてしまっ。

「君は、一体……？」

「最初に生み出されたお兄様から連なる『ドール』の系譜、その先で生み出されたのが私たちなのです」

「生み出された……？ 何の事を言ってるんだ！？」

「……ああ、そういうことでしたか。あの雌狐、お兄様の記憶を弄ったのですね……！ 許せない……！」

アインは近くの壁を殴りつけると、粉微塵に吹き飛ばす。

あいつのIS、補助動力があるってレベルじゃない。肉体的にも明らかに人間の範疇を超えてる……！

「さあお兄様、ともに帰りましょう！ お父様もいらっしやいます！」

「僕の父は物心着いた頃に事故で死んだんだよ？ 君みたいな妹はいないし、君のお父さんは僕の父じゃない」

「ああ、なんてお可哀想な！ 記憶を改変されたばかりに自らの出自すら偽られ……！ 大丈夫ですお兄様、アインがお兄様をお守りいたしますから……！」

言った直後、アタシたちへ向けて手にしていたショットガンを乱射してくる。

明らかに競技用ではなく軍用として調整されたISの攻撃は、普段の数十倍は強烈なものだった。

それを香織は《夜羽^{おはみ}》で防ぐと、お返しとばかりに《夜雀^{よじやく}》を撃ち込んでいく。

厚い装甲に覆われたアインにはダメージは通らなかったようだけど、それでも彼女の動きを止めるには十分だったらしい。

「なぜ……、なぜ私を撃つのですか……？ お兄様……！」

「なぜ、って……」

「お兄様は私を嫌いに……、あ、ああああアアああああああ

「ああっ！」

「っ！？ 待つ　！」

「パン、と音が響く。」

目の前で、アインと名乗ったラウラによく似た少女は、慟哭の中で自らの脳天に銃口を突き付け、引き金を引いてその命を絶った。

出会って数分、たったそれだけの時間で、彼女は死んだ。

がしゃがしゃとうるさい音を立てて、装甲ごと彼女が倒れる。

それを、アタシは咄嗟に抱きとめていた。

「ちょっと、しっかりしなさいよ！　ねえ！」

思いのほか動揺しているようで、声が震えていた。

拳を交わした友と瓜二つの少女が、心を壊して死ぬ様を見せつけられて、アタシは。

「……ちゃん、ふーちゃん！」

「　　はあっ、はあっ……！　　ラウ、ラあ……！」

「ラウラじゃない、違う人だから。大丈夫、大丈夫だよ」

いつの間にかISを解いていた私を、同じようにISを解いていた香織が抱きしめる。

その体をぎゅっと抱いて、アタシは恥も外聞もなく泣き喚いていた。

アインの奴、しくじったな？

仕方あるまい、彼女は生まれて間もなかった。父上、同胞に被害は？

「ない。全て予定通りだ」

緑色が光る培養ポッドに囲まれた部屋の中で、男が声を発する。話しかけているのは、培養ポッドに取り付けられた特殊なスピーカーから発せられる音声だった。

あんな出来損ないを使つて、俺達の存在を示す必要なんてあったのかよ？

「既にドイツからデータは拝借した。フランスのデータは既に送られてきている」

アメリカ、イギリス、中国も同様にデータを入手している。完成は時間の問題だ。

世界中のISデータ、篠ノ之東の手元にあるもの以外は全て手に入れるつもりなんだろ？ 後どれくらいなんだ？

「半年……、あるいはそれ以上か」

呟くように言った男は、黒い髪を撫でつけながらキーボードを叩く。その速度は、彼の天災にも劣らないものであった。

まあ、楽しみにしてるぜ。

それきり、そのスピーカーから声は聞こえなくなった。
男は一枚の紙を手にとると、にやりと頬を吊り上げる。

「……お前は私に従うか、それとも対するか？ ……結末は見えて
いるのかな」

どこか遠い目をしながら笑みを浮かべた男は、それきりまたディスプレイに視線を戻し、黙り込んでしまった。

第64話 デュノア社の異変（後書き）

突然出てきて突然パァンしたアインちゃん。

さて、デュノア社は一体どうなっているのか、次回もお楽しみに！

第65話 親子（前書き）

急展開！

第65話 親子

ISに乗ったまま、最上階である一五階まで辿り着いたアタシ達は、革張りの重厚な扉の前に立っていた。

まだアタシの目は赤く腫れているけど、もう心の整理はついている。全く、アタシもまだまだね。

「シャルロット、心の準備はいい？」

「……うん。大丈夫」

ごくりと生唾を飲み込み、シャルロットが頷く。

さて、それじゃあご対面と行きましようか。ついでに何でこんなことがおきているのかも説明してもらわないといけないしね。

アタシと簪が両側の扉を開き、中へ踏み込んでいく。

「……来たか、シャルロット。無事でよかった」

「父さん……」

そこの一番奥、社長椅子に座っている男性は、苦しそうに顔を歪めながらも優しげな声音でそう告げた。

「……まずいわ、撃たれてる。」

周りに倒れている男達の様子から見て、ここで銃撃戦があったんだろう。倒したのはいいけど、お返しとばかりに一発貰ってしまったのか。

「無傷で切り抜けられると思っていたが……、やはり私も衰えたな……。まだ生きているうちに会えて良かった」

「今更何を……！」

「お前を今日呼びつけたのは、お前に全てを話し、贈り物をしたか

ったからだ。状況が変わってな……」

時折顔を顰めながら話す彼を見て、シャルロットは見る間に表情を変えていく。

最初は憤怒、次は困惑。ほんの数秒でころろと表情を変えるシャルロットを見つめながら、彼は更に口を開いた。

「元々、私も妻も、お前を嫌ってなどいない。むしろ愛していたのだ。だからこそ、守るために冷たく当たり、私たちを脅すのにシャルロットは使えないと見せかけた。どこに監視の目があるかわからんからな……」

「……そんなの、いまさら言われても信じられない！ 母が死んだ時だって、貴方は涙の一つも流さなかったじゃないか！ 今更、愛しているだって……、そんなの……っ！」

あからさまに動揺しながら、それでも否定するシャルロット。……なんかあるんでしょうね、これ。

そんな親父さんのことを、一夏は不可解な目で見ている。あの様子だと何か事情を知っているみたいね。そして、それは千冬さんも知っていて香織に同行を頼んだ。なら何かあるのは当然か。

「一夏」

「な、なんだ？ 鈴」

「どういふことなのか、説明してもらえる？ シャルロットが男として学校に来たことと関係があるんでしょう？」

「……シャル、いいか？」

「……うん。知ってもらわないと、意味がわからないだろうから」
「わかった。実はな……」

一夏から語られたことは、アタシにとっては大体予想できたもの

だった。

さて、それで彼の様子を見る限りでは……、と。

「なるほどね……。社長さん、貴方の話を信じるなら、貴方はどこから脅されていたのね？　ISに関係することか、家庭の事情か、それは知らないけど、自分を脅すのにシャルロットが危険に曝される可能性があった。貴方の言うとおり監視の目がどこにあるのかわからない以上、家庭内でも愛情をもって接することが出来ない。自分と奥さんをシャルロットが敬遠する様になれば、シャルロットが狙われることもなくなる。そして念のために、非情な社長を装ってシャルロットをIS学園に送った。アタシの憶測が半分以上だけど、合ってるかしら？」

長々としたアタシの言葉に、社長は小さく一つ頷いた。やっぱりね……。

IS適正がいくら高いからって、本当に無関心なら認知もしないはずだろうしね。

「だが、憎んでもらえてよかった……。苦労した甲斐が、あったというものだ」

「でも、なんで今になって……！」

「……奴らはデュノアを潰すつもりだ。奴らが欲していたのはISのデータだ、コアじゃなく、な。そのデータを、さっき奪われた。もうここは用済みと言うわけだ……」

「巨大企業デュノアでも太刀打ちできない相手ってことね……。簪ちゃん、ここのデータバンクにハッキング掛けて、全データ吸い上げておいて。狙いを割り出さない」と

「了解……。モーティブ」

部屋の隅で、ナターシャの指示を受けた簪が『モーティブ』を展

開する。

さて、シャルロットはどうするのかしら。

「……僕への贈り物ってなに？」

「私とクラリス、そして社員の一部が総力を挙げて作り上げた、デユノア社最後のISだ。地下の第三整備室に保管してあるから、データごとをもって行きなさい……。それと、私とクラリスの遺産だ。どこへ行ってもやっていけるくらいの額はある……」

齒を食いしばりながらもそう伝える彼の額には、脂汗すら滲み出ていた。

もう長くはないだろう。けれど、アタシ達に手当てをする用意はない。医療キットは今はないし、どうしようもなかった。

「……今更、父親面しないでよ！ 僕がどんな思いで、これまで生きてきたのか！ 貴方にわかる！？」

「……今更済まないとは言わない。だが、これだけは言わせてくれ。愛している、シャルロット」

罵声すら心地いい音楽のように聴き、彼はそつと目を伏せる。

「織斑一夏君。娘を、頼む」

「……はい。絶対に守ります」

「ねえ、待って……！ 勝手に終わりにしないでよ！ 僕をおいていかないで！ ねえ！ 嫌だ、もう一人にしないでよぉ！」

ISを解除し、机の向こうの父親に駆け寄るシャルロット。
けれど、彼女の手が届くよりも少し早く、彼は。

ここは……。

「あら、アル。久しぶりね」

「シルヴィー！？　なぜお前が……！　……いや、これは夢か？」

目の前にいたのは、ずっと昔に死んでしまった、私の愛した人だった。

最後に見た光景は、私の愛する娘が此方へ駆け寄ってくるその姿。それで、私の意識は途切れている。

気が付くと、周囲は真っ白になっていて、私がそこにいた。

「夢じゃないわ。そうね、夢と現の狭間、あの世とこの世の境目よ。私は、貴方と親友を迎えに来たの」

「私と、クラリスを？　……では、やはり死んだのか、私たちは」

襲撃者達が入ってきたとき、私はクラリスをかばって体に一発銃弾を受けた。

致命傷ではなかったが、確実に命を削り取ったそれはクラリスにも貫通していて、二人揃って銃弾をその身に受けてしまった結果になった。

しかも、私が庇ったせいで弾速が遅くなったのか、弾はクラリスの体内に残留してしまっていた。

その後、私よりも早くクラリスが逝き、シャルロットたちがやってきた。……無事に言葉を伝えられてよかった。

「さて、アル。一発殴らせてもらえるかしら」

「え？ おごふあ！？」

ボゴツ！ と顔を殴られた割にはありえない音と共に私が吹き飛ぶ。私は全裸だったが、シルヴィも同じく全裸だった。その状態でぶん殴られた。

「ふう、すつきりした。今は寂しい思いをした娘の分よ。……でも、ありがとう。あの子を守ってくれて」

綺麗な笑みを浮かべてそう言ったシルヴィ。

シルヴィは、昔に私と付き合っていた女性だった。

気立てがよく明るく、大切なときにはぐいぐいと引っ張る強さも持った女性。しかし、私は彼女ではなく彼女の親友であるクラリスを選んだ。

互いによく話し合い、クラリスを交えた三人で話し合ったこともある。そして、私抜きで二人が話し合ったこともあったという。

私はデュノア社の一人息子で跡取りだ。シルヴィは町娘、クラリスは小さいながらも財閥の娘であることが絡み、二人は親友だったこともあってクラリスが私と結ばれたほうが世間的にも安心するだろうと、シルヴィの方から離れていったのだ。

尤も、その前にすることを致してしまっていた為、シルヴィと私の娘、シャルロットの養育費や生活費など、支援できるなら何だってやった。クラリスも進んで協力してくれたが、いつしかシルヴィは不治の病に掛かっていた。

私とクラリスは経営の傍ら、必死になって以前愛した人を、大親友を救うための方法を探したが……、願いも叶わず彼女は逝ってしまった。

「あの時、最後にした約束。覚えてる？」

「クラリスと私で、君と私の子供を守ってほしい、だったか。……最後まで見てやれなくてすまない」

「いいのよ、もうあの子の周りには、守ってくれる人たちがたくさんいるわ。だから大丈夫」

そういつて微笑んだ彼女は、小さく頷く。

全く、いつも彼女には敵わなかった。軍に所属していた経験のある私が、彼女にだけはどうしても敵わなかったのだ。

「アルフォンス」

「クラリス。お前も来たのか」

「ええ。どうして素っ裸なのかって言うのは疑問視せざるを得ないのだけれどね。久しぶりね、シルヴィ」

「久しぶり、クラリス」

突然現れ、力強く握手を交わしたクラリスとシルヴィは、揃って私の手を引いた。

シャルロット……、強くなれ。お前は私と同じ道に行く必要などないのだから。

愛されていないと思っていた。

母が亡くなってから、僕は一人ぼっちだと。

「……父さん」

冷たくなりだした体を抱きしめて、僕は小さく呼ぶ。今まで、あの人や父親としか呼ばず、面と向かっても社長としか呼ばなかった彼を、初めてそう呼んだ。

……不思議だった。目の前が滲む。どうしたんだろう。

「シャル、お前……」

「あ、あれ、おかしいな。目の前がぐちゃぐちゃなんだ」

「シャルロット……」

「ねえ、なにかおかしいかな？」

力が入らない、どうしてだろう。

父さんと呼んだのは、これが初めてだった。

母さん、本当の母さんじゃない母さん。僕を愛していたなんて、そんなこと信じられるわけじゃないじゃないか。

でも、彼女は僕を愛していたらしい。最初にぶたれてから、一度も会った事のないあの人。ちゃんと話せば、彼女は僕の母親になってくれたんだろうか。

「……シャルロット、これ」

いつの間にか近くに来ていた簪ちゃんが、僕に仮想ディスプレイに表示された手紙を見せてくれた。

差出人は『アルフォンス・デュノア、クラリス・デュノア』、宛先は……、僕だった。

シャルロットへ。

これを読んでいるということは、きっと私と妻は死んでいること

だろう。

私たちがお前にした仕打ちの数々は許されるものではないし、守るためだと言ってもきつと信じてくれないだろう。

私たちはお前の母親であるシルヴィに託されたお前を、絶対に権力抗争に巻き込むわけにはいかなかった。

そのために、私たちは全力を尽くした。

私たちがシルヴィの願いを破らなかったことだけは、覚えておいてほしい。

遺産相続については既に全ての手続きが済んでいるから、役所に届出を出せばすぐにでも遺産相続が完了する。

そのための書類は引き出しの上から二番目に入っているからもっていくように。

健康に気をつけて、友達は大切にしなさい。

どという風に生きていきたいか、これからは自分で決められるんだから。

愛する娘に幸あれ。

「……父さん、母さん……！」

愛されて、いたんだ。

二人には二人の考えがあつて、僕を守るために必死になって。

自分の目で見たもの以外のことを考えられずに、勝手に判断して恨んで憎んで。それでも、あの人たちは僕を愛している、と。

「父さん……！」

もっと、話したかった。

お父さんって呼びたかったのに……！

ぴちゃっ、と床に水が落ちる。

ああ、
私、泣いているんだ。
そうか。

第65話 親子（後書き）

お父さんいい人だったよ、お母さんもいい人だったよ！ な今回でした。

若い頃はシャルの母親と付き合っていたけど、体裁とかを考えてその親友と結婚したお父さんのアルフォンス。

友情と愛情と約束と責任感、義務感で必死になってシャルを守ってたお母さんのクラリス。

シャルに愛情を向けられなかったのはデュノア社を脅していた何者に狙われなかったため、権力抗争に巻き込まないためだった、と言う設定。原作だとシャルの親子関連は二巻以降ぜんぜん触れられていませんのであしからず。

って言うかクラリスのセリフが死んだ後にしか出せなかった。ごめんねクラリス、オリキャラなのに。

第6話 新たな力

「シャル、大丈夫か？」

「うん、もう大丈夫。皆ごめん、心配掛けて」

一夏にそう答えて皆に謝ると、皆は構わないと返してくれた。あれから一〇分余りが経ち、僕はようやく涙を抑えて立ち上がる事が出来た。

父の遺体は、後でちゃんと埋葬する。母も一緒に。お葬式のために、何日かIS学園を休むことになるだろう。でも、今は。

「地下に行こう」

「ああ。親父さんの贈り物、ちゃんと受け取らないとな」

机の引き出しにあった書類を手にして、再びISを纏う。そこで、簪が声を上げた。

「一〇階の会議室に、この人が捕らえられてる……」

「それじゃあ、アタシと香織と簪で拘束されている人たちを助けに行くわね。エントランスで落ち合いましょう」

「わかった。三人とも、気をつけて」

「そっちこそ。一夏、ちゃんと守んなさいよ」

「おう、任せとけ！」

ガチンツ！ とISの手の平に拳を叩きつけ、重々しい音を立てながら一夏が頷く。

その様子を見た鈴たちは、一つ頷くと先に部屋を出て行った。

僕達も周囲を警戒しながら三人で社長室を出ると、そのまま元来

た階段を戻る。

途中で出会った、ラウラに似たアインという少女は、あの後粒子となって消え去ってしまっていた。一体、どうしたことだったのだろうか。

ともかく、警戒を怠らないように、けれどなるべく急いで階段を下がっていく。目指すは地下二階だ。

すると、五階まで降りたところで、上の方の階から爆発音が聞こえてきた。

「なんだ!？」

「また敵襲……!？ 助けに！」

「待ちなさい。あそこには鈴ちゃん達がいるわ、大丈夫よ。それよりも、こっちは早く贈り物とやらを受け取りに行きましょう」

僕と一夏を止めたのは、あの三人と親しそだったナターシャさんだった。

その彼女が、鋭い視線で此方を見つめて口を開く。

「それとも、あの三人が信じられない？」

「……でも……」

「大丈夫、あの三人なら最悪逃げ切れるわ。それに、私たちが行っても社員の人たちを危険に曝してしまう可能性を上げてしまうだけよ。こんな閉所でのIS戦闘なんて危険すぎるもの」

確かに、ナターシャさんの言うとおりだった。

あの三人は基本的に近接戦闘中心だけど、僕とナターシャさんは射撃中心だ。一夏に至っては閉所でのIS戦闘の訓練すらしていない。

「……わかりました。すいません、我俣言って」

「気にしないでいいわよ。ありがとうね、あの子達を気に掛けてくれて」

そういったナターシャさんは、とても穏やかな笑顔だった。凄いな。信じてるんだ、香織達を。

「一夏、行こう。僕らも急がなきゃ」

「そうだな。とっとと贈り物を受け取って、あいつらを待っててやらないとな」

こくりと頷き、それから更に階段を下っていく。

数分で地下二階まで到着すると、中に入るための重厚な扉にパスワードが掛かっていることに気づいた。

「これは……」

「パスワードね。ハッキングは無理だし……、シャルロットちゃん、知らない？」

「……もしかして」

ここに僕への贈り物があって、僕のことを愛していて。

それなら、もしかして。

そう思っただけで投影式仮想キーボードに打ち込んだその単語で、扉のロックが開いた。

「開いたわね。やるじゃない、シャルロットちゃん」

「……は、はい」

笑ってそう言ってくれたナターシャさんは、僕の手元を見ていたからわかったのだろう。

打ち込んだ文字は「シャルロット」^{シャルロット}、つまり僕の名前だっ

た。

「よし、それじゃ行ってみようぜ」

「そ、そうだね！ うん！」

ちよつと泣きそうになってしまった僕の背中をバンツ、と叩いて、一夏が扉を押し開ける。

そこには、一台のISが鎮座していた。そして、それに繋がれている沢山のタワー型サーバ。その全てを使って余りあるほどのデータ量が、それには収められていた。

「これが、贈り物……、デュノア最後のIS」

『カスタム？』を待機状態に戻してから傍に寄る。

カラーは『カスタム？』と同じくオレンジと白のコントラスト。けれど、一番特徴的なのはその左腕だった。

巨大なメカアームとも形容できるそれが特徴的な機体にゆっくりと乗り込むと、目の前に文字が表示された。

『声紋認証、指紋認証、虹彩認証を行います。そのままでじつとして、何か喋ってください』

「ええと……、こ、こんにちは」

『認証中……。認証完了、本人と確認しました。こんにちは、シャルロット。デュノア社最新型IS、『ミストラル・リヴァイヴ』の受領、おめでとうございます』

そんな文字が躍り、機体のスペックデータやなんかが一面に表示される。

『なお、このメッセージは自動的に消滅します。』ミストラル・リ

ヴァイヴ』をどう扱うかは貴女次第です』

次の瞬間、メッセージはパチンと弾けて消え去り、代わりに武装一覧が表示される。

スเปックデータの中でも特別目を引いたのは、とんでもなく大きい拡張領域バススロットだった。

拡張領域は『カスタム？』の三倍、武装は最低六〇個は搭載できるトンでもサイズだけど、その半分は第三世代の特殊兵装の処理領域に使われていた。

「この武装……、こんなものが作れたなんて」

「シャル、どうだ？」

「……ちよつと悔しいけど、このISは凄いよ。本当に、凄い」

基礎スเปックも『カスタム？』を大きく上回っている。第三世代の名は伊達じゃないってことが……。

フォーマット フィッティング

「よし、それじゃあ初期化と最適化しながら一階まで戻りましょうか。それが終わったら、三人を助けに行きましょう」

「はい！」

「はいっ」

ISに乗りながら、僕と一夏はそう答えて頷いた。待ってて、三人とも。すぐに行くからね。

「なによこいつら！」

「さあ、ねっ！」

近くの黒いISを横薙ぎに二閃、一気に吹き飛ばす。

ふーちゃんと簪ちゃんと共に、三人で会議室へ向かっていた僕たちの前に立ちはだかったのは、五体の黒いIS。

二体は動物のように四足歩行になっていて、残りの三体は四肢と頭部が大きく膨れ上がっている不格好な姿。クラス代表戦のときに束ちゃんの送りこんだものに似ているけど、それとは明らかに違う感じがする。

明らかに、殺すために作られたものだ。さっき回避した腕の一撃は一瞬で壁をぶち壊したくらいなんだから。あんなものが当たれば、例え絶対防御があってもただでは済まない。

「束ちゃん、聞こえる！？ こいつらどうなってるの！？」

『それも疑似ISコアを核にした無人機だよ！ 私の作品じゃない！』

「弱点わかる、社長！？」

『コアを消し飛ばすくらいの一撃を加えれば止まるはず！ 今解析してるから持ちこたえて！』

それきり音声が途切れた代わりに、猛然と仮想キーボードをタイプする音が聞こえてくる。

とりあえず、束ちゃんのものじゃないってことがわかったただけで十分。とにかく壊せばいいんだから。

「イヴ、《バードエイクとりのさえずり》！」

『了解です！』

装甲同士を震わせて特殊な音波を発生、獣のようなISのビーム攻撃を弱めていく。

それでも壁をがりがり削るほどの威力を有するそれに当たらないようにしつつ、吹き飛ばした人型のISへと一気に接近、《啄木^{つき}鳥》を打ち込んでいく。

三発目で装甲を貫通し、その穴へさらにもう一撃《啄木鳥》を打ち込むと、パキンツという音と共に内部のコアが弾け飛んだ。

「よし、一機撃破っ！」

さすがにリミッターを解除した攻撃には耐えきれなかったのか、それともただこのISがもろいのか。

僕たちBC所属の機体にはリミッターのオンオフ機能が隠されている。束ちゃんがかもしもの時のためにと付けたものだけど、こんなに早く使うことになるとは思わなかった。

けど、一体どうなっているんだろう。アインって少女にこの黒いISとISモドキ。何かが起きているのかもしれない。

「こっちも、はああっ……！」

考えながら剣を振るっていると、真横に接近してきていた獣型を簪^{あかがね}ちゃんが《朱鉄》で真つ二つにしていた。

相変わらずすごい威力だなあ。あまり食らいたくはない。

「くおのっ！」

廊下の向こう側でも、ふーちゃんが《双天牙^{そつてんがげつ}月》を振るって更に一機、人型のISを破壊した。

これで残りは人型と獣型が一機ずつ。

そう思った直後、人型と獣型はがしゃがしゃと不規則に震えだしたかと思うと、突然部品が宙に浮き、それぞれのコアが露出する。

「何……！？」

「これは……まさか……！」

ふーちゃんは怪訝そうな、簪ちゃんは若干ワクワクしながらそれを見つめている。

そんな中、人型と獣型はコアを上下に配置すると、その周囲に次々と組み上げられるようにくつついていく。

それどころか、壊したはずのISの部品までもが吸い寄せられ、コアを中心に大きく組み立てられていった。

そうして出来上がったのは、とても巨大な人型のIS。クラス代表戦で出てきたものですら見劣りしてしまいそうなほどに大きな、いつそ本当にロボットとっていい大きさのものだった。

「合体したああああ……！！！」

「簪ちゃん、そんなきらきらした目で見ないでっ！？ あれ敵だから！」

「つつつても、寄り集まっただけでしょ！ とつととぶっ壊すわよ！」

《龍砲》を次々に撃ち放ちながら斬りかかったふーちゃんだったが、全ての攻撃が弾かれてしまう。

「なあっ！？ なによこの堅さ！ 集まっただけじゃないの！？」

『悔しいけど目茶苦茶かつこいい！』

「束ちゃん喜んでないで解析ーっ！」

「合体口ボはなぜか強くなる法則……、理由なんてない……！」

「いや、あってももらわないと困るのはこっちなの！ ってこっち来

「たああああ!!」

がしょんがしょんとこちらへ歩いてくる合体ISだけど、なぜ飛んでこないんだろう。まあ、たださえ天井が壊れてしまっている状況だし、飛んでも意味がないと言えば意味がないんだけど。

と思つたら、こつちへ腕を向けて腕のクリスタルが紅く発光して
!?

「まずっ、避けて!」

「ぬおおおおおっ!? ちょ、シャレにならないわよあの極太ビーム!」

「ギリギリ……!」

寸でのところでモロに食らうことは避けられたけど、それでも装甲が少しダメージを負った。リミッターを外しているおかげでワールドエネルギーの残量は大きく増えているけど、それでもダメージは大きい。

そんなことを考えている間にクリスタルが紅く発光しだした直後、そこへ強烈な威力を伴った弾丸が撃ち込まれる。

「今のは……」

「はろー、皆お待たせ。ナターシャお姉さんと愉快的仲間たちの到着よ」

「皆、大丈夫!」

「間に合ったか! ってなんだありゃあ!」

僕たちの後ろから現れたのは、それぞれがISを纏ったナターシャさん、シャルロットさん、一夏の三人だった。

シャルロットさんが纏っているISは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』ではない別のものだったから、それがデュノア社長か

ら彼女へのプレゼントだということはすぐに分かった。

今撃ち込まれたのは、構え方からしてナターシャさんの《銀の鐘シルバー・ベル》だろう。あの強固な装甲も、やたらに改造されたあれを撃ち込まれればさすがにへこむらしい。いや、凹むだけっていうのもすごいんだけど。

「細かい話はあと、とにかくぶっ壊すわよ！ 会議室はこの向こうなんだから！」

「わ、わかった！」

「僕に任せて。こういう手合いは僕の方がやりやすいそうだから」

そういうと、シャルロットさんが前へ進み出て、前傾姿勢をとる。その直後、イグニッション・ブースト瞬時加速によって一気に加速して合体したISへ突っ込んだシャルロットさんは、その左腕で胴体をがっしりと掴んだ。

「これが、『ミストラル・リヴアイヴ暴風の再誕』の第三世代兵装……！」

黒いISの動きが、急に停止する。

その止まり方は、ISがエネルギーを失った時とまるで同じだった。

「《デュノア・オルグイユ》！」

その直後、黒いISを掴んでいた『ミストラル・リヴアイヴ』のメカアームからオレンジ色の光が溢れ、やがてそれは光の束となって黒いISを飲み込む砲撃と化した。

その光が止んだ時、そこには焦げた壁や床、天井のほかには何もなく、通路の向こう側には外の景色が映っていた。

「……すっげえ」

「こんなに威力があるなんて……」

「一体どういう武装なんですか？ 掴んだ途端に動きが止まったところを見ると、スタン兵装とか？」

そう聞くと、シャルロットさんは呆然としながらも首を振った。

じゃあ、一体どういう武装なんだろう。砲撃系だと思うんだけど。

「仕様書には、相手のシールドエネルギーの部分に無理やりバイパス通してエネルギーを抜き取って、それを攻撃エネルギーに変換して砲撃する、って」

「なによそのえぐ過ぎる武装……。目茶苦茶ってレベルじゃないわね」

「でも、相手を掴まないとバイパス接続出来ない上に、エネルギータンクが満タンにならないと攻撃エネルギーへの変換ができないから、使い勝手は悪いけどね」

いえ、それでも十分すぎるほど強力です。

だって、強制的にシールドエネルギー吸い上げるうえに、からっからになったところでやたら強力な砲撃をゼロ距離で叩き込めるんだから。

「って、その話は学校に帰ってからにしよう。今は会社の人を助けないきゃ」

「そうね。よし、行くわよ！」

そう言って、ふーちゃんが先陣を切って歩きだす。

とりあえず、ようやく動乱のフランス訪問は終わりを迎えてくれそうなのに、僕は何とか一息ついていた。

第66話 新たな力（後書き）

ということでチート武装を得たシャルの回でした。

しかもまだ強化フラグ建てられるんだ。BC関係じゃないけどね！
さて、次回からはまたIS学園に戻ります。やっと七巻の内容の本筋に戻るよ。

第67話 ただいま そしてお熱

「帰ってこれたぁ……」

「ほんと目茶苦茶な一日だったわね。うわっ、もう三時よ？」

現在時刻、午前三時。午後八時時に出発して、ようやく日本の空に到着しました。何この弾丸日程。

昔はフランスまで一三時間以上かかっていたみたいだけど、今では各国が日本に交流を持とうとするほかに科学技術の急速な発展に伴って、なんと日本とフランスの直通便が七時間で空の旅を終えられるという素晴らしい時代になったのです。ほんと、すごいね科学。

「肩凝ったー……」

「あとでマッサージしてあげようか？」

「お、それじゃ頼むぜシャル」

「ほくほく」

「んー、さすがジャパニメーション、レベル高かったわねー」

「こいつらほんとに満喫したわね」

七時間に渡る快適な空の旅の中で、一夏は普通に眠っていたせいか肩が凝り、シャルとそんなことを話していた。

簪ちゃんはナターシャさんと一緒に携行していたHDDから仮想ディスプレイにデータを流してアニメを楽しんでいたから、簪ちゃんもナターシャさんも非常に楽しそうで何よりでした。

えっと、私はですね。アインというあの少女のことを考えてました。

……私と彼女たちが同じって、どういうことなんだろう。それに『ドール』って。

「こら、香織。しんみりしないっ」

「あ、ごめん」

そうだ、ちゃんと皆無事で帰ってこれたんだし、しんみりするところじゃないな。

あの後、社員の皆さんを無事救出した私たちは、その場でデュノア社がシャルロットさんのものとなったことを聞かされた。

副社長であるアンナ・ラフォンさんによると、すでにデュノア社は数日前にシャルロットさんのものとなっていて、それを知らせるのは全てのこたごたが終わった後だと社長のアルフォンスさんが決めていたらしい。

アルフォンスさんの後輩でもあったアンナさんがこれからの経営などを引き受けるつもりではあるが、デュノア社はその規模を大きく縮小、町工場より少し小さなサイズに縮めるんだそうだ。

実験用のコアとして『カスタム？』と『ミストラル・オルグイユ』の二つを所持するという体裁をとるためにISの武装の開発をメインとした事業に移るらしい。

シャルロットさんは社長の座をアンナさんに渡してもいいし、自分で社長となってもいいと、アンナさんが言っていたけど、あの様子だと会社を継ぐんだらう。

「ん、どうしたの香織？」

「あ、ううん。なんでもない」

おっと、いつの間にか彼女を見つめてしまっていたらしい。

慌ててそう返すと、眠い目をこすりながらも人気の少ない空港を歩いていく。

私たちがこの時間に戻るのは千冬さんも知っているから、今頃学校で待っていていることだらう。

「さあ、帰りましょうか。私たちの学校に」

「ああつ」

「うん！」

「そーねっ」

「ん……」

「よーし、しゅっぱーつつ！」

とにかく、皆無事でよかった。

「只今帰りましたー……」

それから少し時間は移って、午前三時半ごろ。

寮の入り口で待っていた千冬さんは、眠いだろうから緊急の話がないなら詳しい話は明日に回すということで、千冬さんのご厚意で私たちはすぐに部屋に戻る事ができた。

今頃は皆それぞれのベッドで疲れを癒していることだろう。

と、部屋に入ったところで、机に突っ伏して小さな寝息を立てているのほんさんが目に入った。

黄色いきぐるみのパジャマを着ているところを見ると、お風呂に入ってから私のことをずっと待っていたんだろっ。

「……ありがとうございます、のほんさん」

やわらかな髪をゆっくりと撫でてから、彼女の体をぐっ持ち上げる。

予想以上に軽い彼女をお姫さま抱っこのような形で抱き上げると、そのまま入口に近い方のベッドに起こさないようにゆっくりと降ろした。

「ゆっくり休んでくださいね」

布団をかけてそう呟くと、心なしかのほほんさんが笑ったように見えた。

……ただいま、のほほんさん。

「つまり、縮小したデュノアを継いで、社長と企業代表を兼任するということではないんだな？」

「はい。政府には既に話が付いているとのことでしたから、代表候補生ではなく企業代表として二つのコアを所有するということがつきました」

翌朝、昨日のメンツを呼び出した私は会議室でデュノアからそんな話を聞いていた。

両親が死んだ、か。今のこいつには重い話だろうな。だが、乗り越えなければならぬものだ。

「……わかった。こちらではそのように手続きしておこう」

「すみません、織斑先生」

「気にするな。なんにしても、うちの生徒と教師に怪我がなくてよかった、といったところか。皆ご苦労だった。午後からの授業にはきっちり出るよ」

そう言い残し、私は会議室から出ていく。

と、いつの間にか私の傍には恋華が歩いていた。……本当に呼吸するように出てくるな。

「とりあえず前回の襲撃相手の撃退報酬搾り取れました！ 一人頭五〇〇〇万、ざっとこのくらいですね」

「ふむ……、わかった。ご苦労だったな、恋華」

「いーえー、千冬さんのためですもの いつでもなんでも、言ってくださいね！」

馬鹿みたいに明るく答えた恋華だったが、突然俯いたかと思うとぶつぶつと呟きだした。

「千冬さんのために動いているのにあの禿げオヤジども、あれこれ言つてきやがつて……。こっちはテメエらの利権のためにやってんじゃねえんだよ糞が」

「恋華、あまり苛立つな」

「あ、はいっ！ ふあ、え、えへへ……」

ぼんつ、と恋華の頭に手を乗せて軽く撫でてやると、恋華はまるでさっきまでのイライラが嘘のように機嫌を取り戻した。

……本当に、私のことを好いてくれているのか。その想いに応えてやれない自分が、本当に嫌になる。

まだ昼前ではあったが、やはり今朝方まで起きて徹夜で出てきているのが祟ったのか、少々足元が覚束ない。

今までの疲れもあるのだろうが、私も衰えたものだ。この程度で体が音を上げるとは。

「危ないっ！」

ふらっ、と視界がぶれたところで、そんな声とともに体が支えら

れる。

「大丈夫ですか？ 千冬さん……。今日は休んだ方が……」

こちらを下から覗き込む形になっている恋華を見て、ようやく自分が倒れ掛かっていることに気付き、足に力を込めて何とか持ち直す。

「いや、私がこの程度で倒れていては……」

「……ちよつと失礼」

そういうや否や、私の額に手を当てる恋華。ひんやりとしていて、とても心地いい。

数秒手を当ててからすぐに手を離れた彼女は、やや怒った様子で切り出した。

「千冬さん、お熱です」

「……は？」

「だーかーらーっ！ お熱があります、風邪引いてるんです！」

「何を馬鹿な、そんなに柔な体じゃ」

「そういう事言ってるから体調崩すんですよ？ ほら、部屋に戻りますよ」

そう言って私の手を引いて歩きだす恋華になぜか抗うこともできず、そのままバランスを崩しながら歩きだしてしまう。

「いや、しかし仕事が」

「仕事なら生徒会やほかの先生が受け持ちますから！ それよりも今は体を休めてください！」

私の手を引く恋華の強い口調に気圧され、私は反論することでもできずに頷いてしまった。

「……うむ、これでは私はヘタレのようだな。……いやいや、私がか？」

確かに恋愛は奥手だし、よくわからんが……。
いかん、考えているとまたボーっとして……。

「つと、大丈夫ですか？」

「あ……、あ、ありがとう……」

「いえいえ。……本格的に風邪ですね。顔真っ赤です。早く寮に戻りましょう、ほら」

「ああ……」

ふらふらしながらも恋華に支えられ、何とか学校を出て寮の自室まで戻る。

敷きつ放しになっていた布団に横になると、恋華はごそそと押入れの中から私の寝巻き代わりのYシャツを取り出して広げていた。

「今濡れタオルを作りますから、千冬さんは寝ていてください。その間に冷えピタ買ってきますから」

「いや、そこまでやらせるわけには……」

「いいから寝ててくださいいっ、きゃっ!？」

ぐいつ、と布団に押し返された拍子に恋華がバランスを崩し、此方へ倒れこんでくる。

突然のことに対応できなかった私は、私の上に落ちてきた恋華の体をもろに受けてしまった。

「ぐっ……!」

「あ、ご、ごめんなさい千冬さん！ 痛かったですよね……? ご

めんなさい……！」

「い、いや、大丈夫、だ。少し息が、詰まったがな」

やや痛みはあるが、耐えられないほどではない。

大丈夫だとアピールしていると、恋華が此方を見つめていた。

「……千冬さん」

「な、なんだ？」

「可愛いです……、潤んだ目が小動物みたいで」

「は、はあ！？　なにをいきなり……い……」

思わず起き上がろうとしたところで体にどつと疲労感が押し寄せてくる。

それと同時に眠気も。

「れん、げ……、後は、頼んだ……」

「……千冬さん？　……寝ちゃった」

もう、限界、だ……。

穏やかな寝息を立てる千冬さんの寝顔をしばし見つめた後、私はたと我に返って台所へ向かう。

水を桶に汲むと、冷凍庫から氷を取り出して桶に浮かべてから夕

オルを水に濡らしてきつく絞って、千冬さんの額に乗せた。

ざっと見た限り結構な熱が出ているから、こっちで仕事を済ませておくべきだろう。

それとともに購買に冷えピタを買いに行かなければ。生徒会の物は既に在庫切れだ。

「ふふっ、かわいいっ……」

にんまりと笑みを浮かべ、あどけない寝顔を浮かべる千冬さんを見る。

こんなに頑張らなくても、周りの人に頼ってもいいんですよ。支えてくれる人は、いっぱいいますから。私も、いますから。

「千冬さん……」

想いは、声と一緒に届かない。

何かを振り払うように頭を振ると、私は購買へ向けて駆け出した。

第67話 ただいま　そしてお熱（後書き）

過労で倒れた千冬さんと、かいがいしく看病しようとする恋華のお話でした。

そしてシャルロットは社長令嬢から社長へ、会社は小さくなりましたがこれから頑張っていくようです。

第68話 トーナメント開始……？（前書き）

引っ越しに伴う一時的なネット環境の消滅で、連続更新が途絶えてしまいました。無念。

今回こそ、目指せ連続更新一か月。

そんな感じで、今回は二話連続でお届けします。

第68話 トーナメント開始……？

香織達がフランスへ飛んでいた頃、ラウラは一人部屋で通信回線を開いていた。

『こちら、クラリツサ・ハルフォーフ大尉です』

「クラリツサか」

『隊長！？ 突然どうされました？』

「ああ、いや、その……」

普段のようにはきはきと喋ることが出来ず、ラウラは自分で考えて動くことがこれほど大変なことだとは思ってもよらなんだ、と頭を振りそうになりながらも、ラウラはなんとか言葉を搾り出そうと必死になっていた。

というのも、なぜこんなことになっているのかと言えば、今朝方のラウラの思いつきが原因だった。

今日は同室のシャルロットがいない。

なら、私の用事も済ませられるのでは。

そんな思いで、今まで冷たく接してきた部下達に謝って、関係改善を図ろうと考えた小さな上司ラウラは、色々と考えた末にまずは副官との関係を修復しようと考えたわけである。

で、色々考えながら通信回線を開いたのが今の状態であった。

ぶっちゃけ、考えなしに告白に来た中学生みたいになっている。

きっと誰かが見れば相当面白い光景だろうが、残念ながらそれを見ているのはクラリツサただ一人であった。

『あの、隊長……？』

「す、すまん！ その、色々考えていたんだが、頭が真っ白になってしまつて……。とりあえず、私の話を、聞いてくれない、か？」
『あ、は、はい』

あからさまに困惑するクラリツサだが、心中ではかなり色々な気持ちがあつた。持ちが交錯していた。

何があつたのかと心配する部下としての心もちろんなのだが、最も大きい心は「何この可愛い生き物」だった。

それもそのはず、クラリツサは日本のカルチャー文化、いわゆるアニメや漫画などに多大な影響を受けている。その上で隊長であり上司であるラウラを見てみればどうだろう、見目麗しい美少女以外の何者でもないではないか。

そんな彼女であるからして、今までのように傲岸不遜、威風堂々、鉄の女とまで呼ばれそうなお堅かったラウラがこれほど戸惑い、ともすれば泣き出してしまいそうに目を潤ませていては、そりゃあ彼女の心中穏やかではなかった。

「……おほん。その、今まで色々と冷たく当たつてしまつて、すまなかつたな」

『……え？』

「お、怒っているか？ あ、いや、怒っているよな、今まで私はお前達よりも年下でありながら散々なことを言ってきたわけだし……。いくら上司といつても不愉快だっただろう……？」

『い、いえ、そんなことは！ 隊長、何かあつたのですか？』

シュヴァルツェ・ハーゼの隊長であるという責任感からもあつたのだろう、彼女は少女ではなく常に軍人としての行動を肝に銘じていた。

IS学園に行つてから少しして、定期報告のときの彼女の様子がやや変わっていたことに気づいていたクラリツサだったが、何か心

境の変化でもあったのだらうと考えてはいた。

しかし、かしである。彼女はこのような弱々しく謝るような性格であつただろうか、心中でクラリツサは思わず首をかしげた。

「いや、そういうわけではないのだ。ただ、最近色々考えることがあつてな……。私は今までお前達部下に冷たく当たってきただろう。何も知ってやれなかった。それを謝りたかつたのだ」

『ボーデヴィツヒ隊長……』

「本当に、すまなかつた。本来なら部下一人一人にこうして謝つて回るべきなのだが……。勇気が、出ないのだ」

目の端から涙を溢れさせ、ラウラはそう零すように言う。

そんな彼女を、クラリツサは隊長ではなくただの年下の少女としか見られなかった。

だからこそ、彼女はラウラのことを糾弾するわけでもなく、ただ淡々とその謝罪を受け入れることにした。

『……いえ、構いません。隊長の謝罪、確かに受け取りました』
「クラリツサ……」

驚いたように目を開いたラウラだったが、やがて嬉しそうに顔を綻ばせる。それがやはり少女然としていて、クラリツサは神妙にしていたその顔に思わず笑みを浮かべた。

それに気づき、今度はラウラが慌てたように顔を引き締める。

「な、何かおかしいところがあつたか？」

『いえ、なにも？ 隊長もそんな可愛らしい顔をするんだな、思つていただけです』

「か、可愛いっ！？ ば、バ力を言つなクラリツサ！ 私は別に……！」

あたふたと言葉にならない言葉を並べ立てるラウラを眺めながら、クラリッサは静かに微笑む。

それを見て、ラウラは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

失敗したかと内心苦笑気味に思うと、彼女は俯いたままで口を開いた。

「クラリッサは……意地悪なのだな。初めて知ったぞ……」

『もしかしたらそうかもしれないね。ふふっ、私のこと、少しわかりました？ 隊長？』

「あ……」

そう言うと、ラウラはやられたと言った表情でクラリッサの方を見返す。

クラリッサは、いたずらが成功したような顔で微笑みを返した。

『今まで知れなかったなら、これから知っていけばいいんです。そうでしょう？ 隊長』

「クラリッサ……。あ、ああ、そうだな……」

どんなことがあったのかはまた追々聞くとして、今はこの可愛い隊長さんとの会話を楽しむことしよう。

そんな、半分我欲の塊のような思いを抱いて、クラリッサは口を開くのであった。

なおよたらと楽しそうに話すばかりか自分達のちよつと見られない一面をぼろぼろ話しやがる副隊長に、他の隊員が気づかないわけもなく。

ほんの十数分でシュヴァルツェ・ハーゼの通信室が満杯になったのは余談である。

日本への帰国から数日が経ち、私たち専用機持ちの出場する『専用機持ちタッグマッチトーナメント』の当日がやってきた。

私たちはそれぞれの立ち位置でその場所に立ち、生徒会長たる恋華さんの開会宣言を待っていた。

「どうも、皆さん。今日は専用機持ちのタッグマッチトーナメントですが、試合内容は生徒の皆さんにとっても勉強になると思います。しっかりと見ていてください」

凜と淀みない声でそう宣言する恋華さん。

けれど、多分彼女も実際にはそうは思っていないだろう。何せ、今回の大会に出場する専用機持ちは全員が全員どこかぶっ飛んでいる。

近接装備とチート能力だけしかない、半素人『織斑一夏』。

東ちゃんお手製の第四世代に、また一段と我が道を行くを極めだした『篠ノ之箒』。

世界でも数少ない偏光制御射撃会得者にして、この学園の専用機持ち唯一の二次移行者『セシリア・オルコット』。

独自の技能である《高速切替》ラビット・スイッチによって多種多様な武装を次々に使いこなすばかりか、強力な第三世代兵装も手に入れた『シャルロツト・デュノア』。

広い射程を誇る武装《龍砲》と安定した継戦能力が特徴の機体を操る『鳳鈴音』。

慣性制御型特殊兵装《AIC》を操り、その高い戦闘能力を遺憾なく発揮できる『ラウラ・ボーデヴィツヒ』。

自らが月のコロニー『アルカディア・?』で作り上げた第三世代と第四世代の狭間とも呼べる機体を操る『更識簪』。

そして、突出した防御性能を誇る《夜羽》ワンオフ・アビリティと単一技能を持つ私、
『一之瀬香織』。

一年生だけでもこれだけ癖のある専用機持ちが揃っている上、その半数が『武装特性』の起動を行えるというのだから、おそらく参考になる動きなど一握りだろう。

そして、それを見抜けるものはきっと相当な腕の持ち主だ。……
まあ、これだけ束になってもお姉ちゃんには勝てないんだけどね。

「まあ、それはそれとして！」

……はあ、嫌な予感。

「今日は生徒全員に楽しんでもらうために、生徒会である企画を考えました。名づけて『優勝ペア予想応援・食券争奪戦』！」

一斉に周りが盛り上がり、そして私は盛り下がる。

あー、やっぱり恋華さんは恋華さんでしたね。やな予感してたんだー。

一夏が壇上で何か恋華さんと喋ってるけど、無駄だぜー夏クン。ああなったらあの人種は止まらない。静止されないように周りを動かすから。厄介だけどとっても世渡り上手なんだ。

「では、対戦表を発表します！」

声がしてからほんのわずかで、恋華さんの背後の仮想ディスプレイにババンツ、と文字が展開される。

そこには、

『第一試合 篠ノ之箒、セシリア・オルコットペア VS フォルテ・サファイア、ダリル・ケイシーペア』

表示されたその直後、前方で恐ろしいまでの闘気があふれ出る。

「いの一番とは幸先がいいな……」

「ええ、胸を借りると致しましょう」

周りの生徒が気圧される中、箒さんとセシリアさんは背筋が凍るような美しい笑みを浮かべていた。

「セシリア」

試合予定の発表から少し経ち、私は選手控え室で精神統一をしているセシリアに声を掛ける。

タッグを組んだ後の模擬戦以降、私たちの間にあった壁はまるで元からそんなものはなかったかのように消え去っていた。

「篤さん、どうしました？」

「いや、いつも通りコンディションの確認だ。いけるか？」

「もちろんですわ。篤さんこそ大丈夫ですよ？」

「ふっ、見くびってくれるなよ」

私の答えに満足げに頷くと、セシリアは再び目を閉じる。

その中で、セシリアが口を開いた。

「いい空気ですね。まるで、元から貴女と共にいた様です」

「私もだ。お前の周りの空気は澄み渡っていて好ましい」

セシリアの後ろ、ベンチの空きに背中合わせに座り込み、そう答える。

互いに目を閉じて互いの体温を感じ、言葉を交わして意思を通じさせる。私とセシリアが模擬戦の前には必ずやっていることだった。こうすると、互いの考えが多少なりとも読めるようになる。思い込みかもしれないが、あるいは本当にそういうことが起きているのやも知れない。

重要なのは、私とセシリアはこうすることで意思疎通が図れるということだった。

「……勝つぞ」

「ええ」

それだけを発し、ただひたすらに思いを高める。
そうして、幾許かの時が過ぎた、その瞬間、

学校中に、爆音が鳴り響いた。

第68話 トーナメント開始……？（後書き）

トーナメント改め戦闘開始！。

第69話 トーナメント襲撃（前書き）

連続投稿二話目です。

第69話 トーナメント襲撃

「織斑先生！」

既に管制室に入っていた私の元に、山田先生が駆けつけた。

「山田先生、状況は何が起きている？」

「襲撃です、この画像を！」

そういつて山田先生が私に見せたのは、アリーナの監視カメラから山田先生の携帯端末に送られてきた、鮮明な画像。

束が以前使った無人機、それを発展させたものようだったが：

…。

「無人機か……！」

「はい、数は八基、空中に待機していたらしく、急降下からの強襲によって出現、各ピットに待機中だった専用機持ちたちが襲撃を受けています！」

このタイミングで襲撃……、束がこんな意味のないことをするか？
いくら実験といっても、他にやりようがあるはずだ。あいつには協力してくれる人間がいるのだし……。

……呼んでみるか。

「山田先生、これから見ることは他言無用でお願いします」

「え？ は、はいっ」

一瞬あっけにとられた彼女は、それから真剣な顔になって頷く。
それを見届けると、私は口を開いてあいつを呼ぶことにした。

「束」

『呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん！ 皆のアイドル束ちゃん、ただいま推参！ それで何か用かな、ちーちゃん？』

「この事態はお前の仕業ではないんだな？」

『この事態？ ああー、ゴーレムちゃんの開発はとくに終わってるから、今更そこで実験しようなんて思わないよ？ どこかの誰かさんじゃあないかな』

そのことを認めたくはなかったが、どうやら事実らしいと言つことに思わず齒噛みする。

こいつの話が本当なら、束クラスでないにしろそれに近い天才がまだこの学園を狙っていることになる。冗談じゃないぞ、全く。

「じゃあ、もしかして以前の擬似コアを作った誰かが……？」

『鋭いねえ、おっぱい魔人ちゃん！』

「お、おっぱっ！？ なんですかその嫌な名前ーっ！」

「束、今回襲ってきたそのゴーレムとやらの偽者のコアと、以前の擬似コアが同一かどうか、確かめられるか？」

『もちのロンロンだよ！ まっかせなさーいっ！』

通信回線の向こうで胸を叩く束。……その大きな胸が揺れた。

「るるるー……、私はスルーなんですねー……」

山田先生、疲れているのだろうか。

……それはそれとして、だ。

やはり私も、もう一度剣を握るべきだな。教え子に頼りきりでは、私は我慢できんらしい。

「東、これが終わったら一つ、頼みがある」

「また無人機かあああ！」

「ふーちゃん、どうどう」

すらりとした美しいフォルムの無人機と、後退しつつ交戦中の私とふーちゃん。

ほんと、私たちって無人機に縁があるね。嫌になりそう。

「ってーか、フランスのとは違う見たいね、これ！」

「この数日でバージョンアップしたのかは知らないけど、これはなんと……、面倒くさい！」

《夜雀^{よじやく}》で弾をばら撒いているけど、一向にダメージを与えている様子が見られない。装甲は尋常じゃなく硬いらしい。

「ふーちゃん、《龍砲^{りゆうほう}》で動きを止めて！ 《啄木鳥^{てくもく}》で一気に終わらせるから！」

「りょー……、かいつ！」

ふーちゃんが最大出力の衝撃砲でその巨大な図体の上半身を重点的に狙い撃つと、ぐらりと大きく後ろへ揺らぐ。

その黒いISへ向けて瞬間加速で突っ込むと、左腕を大きく突き

出した。

「《啄木鳥》、武装特性起動！ 《ピンポイントクエイカー》ッ！」

単純計算で十数倍の威力を発揮するその一撃が、ものの見事に黒い無人機の腹部に叩き込まれる。

轟音と共にその杭の先端が叩き込まれ。

『損傷軽微。戦闘行動続行』

『シールドエネルギーの減衰、確認できず！ まだ動きます！』
「なあっ!？」

イヴの声に驚きを隠せないまま、咄嗟に真横へ飛び退く。

その直後、さっきまで自分が立っていたその場所に、強烈な斬撃の軌跡が描かれた。

『久しぶりの登場ですが、かなりまずいですね』

「《ピンポイントクエイカー》が通じないなんて……。『ニユクス』の装甲も凹ませる位にはいったのに……！」

「つまりそれより堅い、防御重視型ってことでしょ。無人機だから操縦者への負担を考えなくていいから、どんな素材でもどんな構造でも問題ないし」

『つまり超強敵ってことです。どうやら襲撃を掛けたのは八機、こちらにはそのうちの一機がやってきているようですね』

冷静な意見ありがとう、とってもまずい状況だってことは良くわかった。

とにかく攻撃し続けるしかないか。と思った瞬間に飛んでくる熱線。威力はかなり上昇している、もろに受ければただではすまないだろう。

「なら、斬れるまで斬るしかないか！ イヴ、リミッター解除！

ワンオフで仕掛ける！」

『了解！ リミット・オフ！ 単一技能、《とりのさえずり》ワンオフ・アヒリティ 起動

！』

「《ナイトホーク》起動！」

ふくろう 梟のリミッターを外し、ワンオフと《夜鷹》よたかの武装特性を起動させる。

あらゆるセンサー機器から姿を消した私は、一気に接近して次々に別の場所を切りつけていく。

けれど、その半分以上は装甲で弾かれ、数少ない有効打もあまり効いているとはいえない現状だった。

「さすがに堅い……！」

「香織、ひたすら一点だけを狙うわよ！ いくら堅いつて言っただけ、過負荷を掛ければ壊れるはず！」

「オツケー！ イヴ、どの部分が一番薄いかスキャンお願い！」

『了解です！ ……でました、胸部中央右寄り！』

「了解！」

イヴの声に応え、私とふーちゃんは共に地を蹴る。

私の《啄木鳥》とふーちゃんの《双天牙月》そうつんがけつが僅かなずれと共に

イヴの指定したポイントに叩きつけられると、轟音の後にピシッ、という音が鳴った。

「効いてる！」

『シールドエネルギー減少、いけます！』

「よし、とつとと片付けるわよ！」

ふーちゃんの一声で、私はふーちゃんと同時に攻勢に打って出た。

轟音が収まらない内に、私たちの前に現れたのは二機の人型のフォルムを持った黒いISだった。

一目で無人機であることがわかるそれを見て、私は無意識に舌打ちを、そしてセシリアは不愉快そうに眉を潜める。

「……セシリア」

「ええ、ええ。わかっていますわ、けれどこれは余りに馬鹿にしていますんこと？」

「ああ。私たちの初陣だったと言うのに」

同時にISを纏い、殺意にも近い闘気を垂れ流す。
心なしか、無人機の動きが鈍った。

「このような木偶の坊に台無しにされるとはな……！」

「これが誰の仕業であれ、許すわけには参りませんわね」

ガシャン。音と共にこちらへ銃口を向ける二機。

その直後、一機は一瞬で腕が破裂し、もう一機は四つの穴がちょうど全て真つ二つになるように切り裂かれる。

前者はセシリアがレーザーで銃口の内部を狙い撃ち、後者は私がそうなるように斬り裂いた結果だった。

余りにもろい。

機械は人を超えられない。人の脳のスペックを全て使えば、どんなコンピュータよりも速い処理速度を持ち、どんなコンピュータよりも容量の大きな記憶装置のある万能コンピュータへと早変わりするのだから。

そんな人間相手に、無人機とは。舐めた真似をしてくれる。

「そう急くな。貴様らの相手はたつぷりとしてやるさ」

「情熱的に鬨り尽くした後で、ですが」

その直後、二機は咄嗟にその場を飛び退いた。今度はセンサーが感知できたらしく、一瞬前にいた場所を私の斬撃が挟り取る。しかし、攻撃に転じさせることなどさせはしない。

「咲きなさい　ッ！」

三基の《ブルー・ティアーズ》から撃ち出されたレーザーが、そのセシリアの声を合図に無数の細い線へと分裂する。

まさしく花開くように四方八方へ分かれた無数のレーザーは、セシリアの意思に導かれて相手の装甲と装甲の隙間へと入り込んでいき、その直後、弾けるように一機が四散した。

「一丁上がり、ですわね」

「ふむ、私も負けてはいられないようだ……！」

《空裂》からわれの武装特性、《空海断絶》チヘイワウルを発動させようとした瞬間、瞬間加速を併用した踏み込みで無人機が切り込んでくる。

咄嗟に腕で防御するが、そこで腕に恐ろしいまでの衝撃が走り、思わず口の端を歪める。

ダメージが通っている。絶対防御が発動していなかった。

「これが、実戦……！ 本物の傷み……！」

「箒さん！」

「心配無用だ、委細問題ない！」

戦いが、ここにあつた。

私が無意識に願っていた戦いが、血生臭い斬り合いが、ここにあつた。

そのことに無上の喜びを覚えるも、その相手が無人であることにまた不機嫌さを増す結果となった。

だが、それでもこれは殺し合いであり、箒が欲していたのは強者との戦い、そして命をとしたギリギリの戦いであつた。

「面白い……！」

更なる踏み込みを、上から足を踏みつけることで阻止し、裏拳気味に拳でバイザーごと顔面に当たる部分を横から殴りつける。

メシャツ、と音が鳴ったが、やはりその程度では止まらない。

だが、一瞬隙が出来ただけで十分だった。

「《雨月》^{あまづき}、武装特性……！ 《万障一穿》^{スベテラウガツ}！」

《絢爛舞踏》^{けんらんぶとう}と同時に発動させた《雨月》の武装特性の型は、ただ突くこと。

それだけに特化した武装特性は、あらゆる装甲も障壁も、関係なしに貫いていく。

故に、どれほど強固な装甲であっても、私の《雨月》の前には無力だった。

無人機の装甲ごと胴体に穴を開け、バランスを崩した無人機へ向けて、更に《雨月》^{クロース}を収納して居合いの形をとる。

「《空海断絶》！ 斬り捨て御めエエエエんツッ！」

ギユイイツ！ という甲高い音と共に、無人機を半分に割った斬撃はそのまま控え室の壁を切り裂いてその向こう側まで消えていく。
……倒したはいいが、やりすぎたか？

「そうですわね、ちょっとやりすぎですわ」

うむ、そうだな。ちょっとやりすぎだな。いくら憂さ晴らしとはいえ。

第69話 トーナメント襲撃（後書き）

セシリアと箒がやたら強くなっている。そろそろ自重させよう。
次回は誰かな……？

第70話 絶体絶命（前書き）

タイトルがネタばれ！

今日から自宅のネットがつながったので、ようやくまともに更新できそうです。

ネットの使えない二、三日、辛かった……！

やっぱり、ネットは世界とつながっているとこのを実感しました。そんな感じでどうぞ。

第70話 絶体絶命

「こいつらは……!？」

「フランスに出た機体と似てる……、発展形……?」

私とラウラが試合の準備をしていた時、突然現れたそのISは能面のように気味の悪い姿をしていた。

明らかに無人機であるとわかるそれを見て、私たちはとっさにISを身につける。

「一体、何の目的で……?」

「少なくとも友好的な相手ではないことは確かだろうっ！　くるぞ！」

《あかがね朱鉄》を呼び出し、突っ込んできたISの刃を受けきる。凄まじい衝撃が、腕を通して私に伝わってきた。

けれど、耐え切れないほどじゃない。そう思った次の瞬間、ビクンツとその巨体が震えた。

『五号機、六号機大破。『ブレイブ・ティアーズ』及び『紅椿』のデータ収集不完全。大破前のデータから自己成長促進プログラムに書き込みを行います』

直後に鳴り響く、おそらくは内部の処理によって発生しているのであろう音。

ほんの数秒でそれが済んだ時、無人機は明らかに違う拳動で刃を引き戻し、まるで刀を納めるようにその肘から延びる剣を左の懐、腕と胴体の間へと差し込む。

ピクリと動いた瞬間、私は背筋を駆け巡るおぞましい程の悪寒に

従って《朱鉄》を斜めに、盾にするように動かす。

その直後、轟音と共に私の腕に伝わる衝撃。先ほどのものとは比べ物にならない、まるで素手で飛んでくる大砲を受け止めたようなそれがびりびりと伝わってくる。

「ぐ、あつ……！！」

イグニッション・ブースト

瞬時加速を踏み込みに使用し、その勢いを一切殺さずに、重心を全て剣に乗せての居合い。その形だけは、以前箒がやって見せた武装特性に良く似ていた。

尤も、箒の場合はただその場での居合いだけで刃を届かせる点だけが違っただけだが、その威力は劣化しているとはいえやはり驚異的なものがあつた。

私は呻きながらも必死にその場でこらえると、横つ面を張り倒すようにラウラのワイヤーブレードが真横から無数に飛んできた。

確実にはいったと思ったそれを、無人機は後ろへ下がることで回避すると、そこから流れるように全てのワイヤーブレードを断ち切る。

「無事か、簪！」

「うん……、なんとか……。でも、《朱鉄》が……」

「無事ならばいい、武装は改修すれば直せるが、体はそう簡単には治らんからな」

「ラウラ……」

「さて、反撃するぞ。奴め、見たところさっきのデータの書き込みで『ブレイブ・ティアーズ』と『紅椿』の動きを使えるようになってるらしい。幸い、奴にビット兵器は詰まれないようだがな」

「だとしても厄介には違いない、と笑うラウラだけど、その笑みはとても心強く見えた。」

ラウラの推測が正しければ、相手は『紅椿』と同じ威力、同じ技巧の技を使ってくることになる。……気は抜けそうにない。

「私は《蒼鉄》^{あおがね}で叩くから……、ラウラは」

「ああ、私は《A I C》が仕掛けられないか試してみよう。力づくで抜けられる可能性のほうが高いだろうがな」

頷いてから、《蒼鉄》をコールし、《蒼鋭蒼鉄》^{ソウエイノアオガネ}を発動させる。青いB Tエネルギーが刃を形作り、ぼんやりと手元を青く照らした。

「あいつの攻撃は、出来る限り回避して……。まともに受ければ墜とされる……！」

「了解だ！ とつと潰すでしょう！」

私たちの気配を感じ取ったのだろう、その場で静かに佇んでいただけの無人機は、そのモノアイを光らせてこちらを見る。

刹那、私たちは大気を押し出して前進する。

それを皮切りに、音速という区切りを一瞬で置き去りにした私たちの戦いが幕を開けた。

「はあああああっ！」

一夏の雄叫びと共に振り下ろされた《雪片弑型》ゆきひらにがたを、無人機は軽々と回避してみせる。

そこへ目掛け、正確無比なシャルロットのライフルによる射撃が突き刺さるが、そのダメージは軽微たるもので、その勢いを殺ぐには余りに非力なものだった。

しかし、シャルロットの狙いはそこではなかった。

『一夏、《零落白夜》の脅威がある限り、相手はそれを目ざとく見つけて回避しようとするはず。逃げ道を一箇所に絞って。そうすれば僕がそっちから回りこむよ』
『わかった、やってみるぜ！』

今のシャルロットの機体は、捕まえてしまえばもうそれでゲームオーバー、確実に落とせる威力の武装を持った機体である。

それ故に、いかに扱いに慣れているとはいってもいまだ素人の一夏よりも、人並み以上にISを扱えるシャルロットがその一撃必殺を担った方がほど効率的であることは、二人ともが納得していた。

「だあ畜生！　ふらふらふら避けやがって！」

「一般の生徒に被害が出なければ問題ないよ、落ち着いていこう！」

「おう、しっかしなんだってこんなに無人機が多いんだ？　一体誰が……」

「ストップ、今は目の前の相手に集中しよう。」

「……だな、わりい」

一通り言葉を交わし終えた後、一夏とシャルロットは再び息を整えて刃と銃を構える。

次の瞬間、一夏が不意打ち気味の瞬間加速で接近し、大きく刃を振り上げる。それを待ち構えていたかのように自らの腕から伸びる剣を振るおとと動き、そして飛来する無数の榴弾を受けて斜め後ろ

へと吹き飛ばされた。

その爆風の中を、刃の切っ先で粉塵を蹴散らしながら突き進む一夏は、爆発によって押し出された無人機の胸部の装甲目掛け、左下から勢いよく切り上げる。

ギインツ！ と甲高い音でその刃を阻んだ左腕の砲身には大きく切り込まれた刃が食い込み、離れようとしなかった。

「ここだ、シャルツ！」

「うん！ 行くよっ！」

大きく頷くと共に接近したシャルの左腕が、がしつと無人機の胴体を掴み取る。

異常を感知した無人機は咄嗟にもがこうとするが、それよりも早くシールドエネルギーの吸収が開始された。

『異常事態発生、異常事態発生！ シールドエネルギーのコアバイパスに不正アクセス！ エネルギー流出中！』

「もう遅いよ、丸ごと消し飛ばしてやる！」

『警告、警告！ 直ちにアクセスを中止しなさい！ 直ちにアクセスを』

機械音声を意にも介さず、シャルロットは満タンになったエネルギータンク内のエネルギーを攻撃エネルギーへと変換していく。

そして、エネルギーの変換が終了したその瞬間。

『警告、けいこ。 対象のシールドエネルギーの消滅、及び生命活動の停止を行動目標に再設定。リミッターオフ』

「え？」

『対象、シャルロット・デュノア。抹殺開始』

ドスッ。

突き刺さったブレードはシャルロットの装甲を突き破り、肩を貫通していた。

「……ぐ、あああああああつ!?!」

「シャルツ! くそつ、ダメエ!」

『対象の血液反応を確認。アタックに成功』

無機質な反応を返すそれに怒った一夏が、《雪片式型》を《零落白夜》を発動させた状態で振り切る。

ガシャン、と左腕が斬り落とされるが、まるで意に介さずに無人機はシャルロットの肩の傷口を抉っていく。

「あ、あああああ!」

「やめろよ、やめろつつつてんだろぅ、がアツ!」

硬い音を響かせて、一夏の刃がシャルロットに突き刺さっていた刃を肘先から切り落とす。

そうしてシャルロットはようやくその刃を引き抜くと、肩で荒く息をしながらも力強い目で無人機を見据えた。

「いち、か……。僕の腕を支えて、一人じゃ持ち上がらないんだ……!」

「けど、シャル!」

「いいから……! これが終わったら医務室に行くから、今は……!」

「……わかった。必ずいけよ……!」

シャルロットの思いに応え、一夏はその腕を支えて砲台のように据える。

痛みを堪えて顔を顰めていたシャルロットは、それでも皮肉氣に口元を歪めると、頭の中でその引き金を引いた。

ギョオツ、とオレンジ色のエネルギーの奔流が無人機を飲み込み、壁ごと駆逐して行く。

その向こう側には、これ以上動かしようのない残骸となった無人機が打ち捨てられるように転がっていた。

「ハア……ハアツ……！」

「お疲れ、シャル……！ 早く医務室へ！」
「うん……」

ダメージを負った方とは逆の肩を抱き上げ、一歩足を踏み出す。その直後、その目の前に熱線が降り注ぐ。

「糞ッ、まだいるのかよ！」

そんな悪態を聞き届ける相手は、丁度さっきの相手を吹き飛ばしたその向こう側からやってきていた。

先ほどまでと全く同じ、外傷のない綺麗な風貌で。

「……シャル、少し待っててくれ。すぐ片付ける」

「一夏、無理しないでね……」
「おう」

無理しないというのは無理だろう。

一夏は心の中でそんなことを考えつつ、静かに《雪片式型》を構築した。

「ちょこまかと動きおって……！」

「次右、ブレード！」

「了解、だっ！」

簪の指示に従って、私はプラズマ手刀で相手の刃を受け止める。その超至近距離の状態から、右肩に搭載されているレールカノンの発射口を無人機の顔面へと突きつけ、そのまま撃ち放つ。

しかし、弾丸が接触するほんのコンマ数秒前というところで真横に回避した無人機は、明らかに人間が可能な動きの範疇を超えていた。

まったくもって、面倒なことこの上ない相手ではある。だが、どうやって戦うか……。

「まずい……そろそろB Tエネルギーが」

「……わかった、次で落とすぞ」

「了解」

確かに、戦いだしてからそれなりに時間が経過している。

エネルギーを使う武装ではない私はともかく、簪の《蒼鉄》はB Tエネルギーを使用する武装だ。であれば、長時間の戦闘はエネルギー補給経路を確保していなければ不利になるばかりだった。

私は何度か手を開き、閉じを繰り返し、静かに《A I C》のタイミングを計る。

「熱線が来たら回避、踏み込みに合わせて《A I C》を当てるから、

そこに刃を叩き込め」

「了解、がんばろう……」

「ああ」

言葉を交わし終え、意識の全てを無人機へ傾ける。

それが、あだとなった。

「　　がぁ……っ!？」

「ッ!？　簪!」

背後から近づいてきていた無人機は、確かにハイパーセンサーに反応していた。それに気づかなかったのは、相手が一機だという思い込みと、集中力を一機だけに傾けてしまった故。

ぞぶり、と叫びだしたくなるようなおぞましい音を響かせ、簪の腹部に突き刺さり、その血で真っ赤に彩られた刃を引き抜いたもう一機の無人機は、無機質なそのバイザーを輝かせてこちらを見た。

「がはっ……!　ぐ、ううう……!」

「簪!　くそ、貴様ら……、ぐうつ!？」

警戒しながらも睨みつけると、次の瞬間には八本分の熱線がこちらへ迫ってくる。

それを回避しようと斜め前方へ動いた瞬間、文字通り熱線がねじ曲がって私の装甲を次々に焼いていた。

「な、曲がった!？　そんな、馬鹿な……?!」

肌もだいぶ焼かれたらしく、火傷に伴う相当な痛みがじくじくと私を苛んでいる。

そのせいで集中できず、《A I C》も使えそうになかった。

と、無人機の一機がガツン、と簪を蹴り飛ばす。力なく蹴り飛ばされた簪は、壁に叩きつけられた衝撃で血を吐きだした。

「かふっ……！」

「よせ、やめろお！　がはっ！」

声をあげた私を熱線が狙い、回避したその場所にねじ曲がった熱線が叩き込まれる。

あっという間にシールドエネルギーは削られていき、すでに二ヶタ台にまで落ち込んでいた。

そこでようやく気付く、自分と簪のISの絶対防御が発動していないことに。

「うぐっ……」

簪の呻き声が木霊する中、私は焦燥感に歯噛みしていた。
このままでは。

第70話 絶体絶命（後書き）

ぼろぼろの一夏&シャルロットペアと、ラウラ&簪ペア。
果たしてどうなるのか！ 次回お楽しみに！

第71話 力の意味（前書き）

ちよつと短めです。

第71話 力の意味

状況は最悪だった。

簪は腹部に大きく傷を付けられ、私も無事とはいえない状態。

反撃の最中に何とか片方のブレードは破壊したが、それでも曲がる熱線と強烈な踏み込みによる一撃は残っている。

歯軋りする間もなく迫り来る熱線を何とか回避しながら、突破口を必死になって探し続ける。

「ぐ、うぐああ……！」

「くっ……！ 簪、耐えてくれ……！」

うめき声を上げる簪に狙いを定めないのが、唯一の救いか。

しかし、既に周囲はぼろぼろに破壊され、がらんどうの通路まで見えている。このままこの無人機が通路を進んで行ってしまうと、他の一般生徒達の元まで行ってしまうだろう。

それだけは、避けなければならない。

そんなことを考えていたからなのだろうか。接近するブレード持ちに気づけなかったのは。

「しまっ！？ ガハアッ！」

『敵性ISの沈黙を確認』

踏み込みに耐え切れずに壁に叩きつけられた私のシールドエネルギーが底をつく。

それを確認した無人機は、私に背を向けてゆっくりと動き出した。痛みで朦朧とする意識の中、私は必死に瞼を閉じまいと足掻く。そんな私の耳に、その声は聞こえた。

「に、げて……！」

『真打・鉄』のシールドエネルギーの残留を確認、排除します』

よせ、やめてくれ。

声も虚しく、静かに構えられた八つの銃口に赤い光が溜まっていた。

私は、香織どころか仲間一人満足に守れないのか。遺伝子強化素アドヴァンス体が聞いて呆れる。

頼む、『シュヴァルツェア・レーゲン』。私に、力をくれ。

力を
！

かちり。かちり。

音がして、私は目が覚めた。

ぼーっとした感覚のまま周囲を見渡すと、そこはレンガ造りの小さな家だった。

フリルの付いたテーブルクロスに、マフィンと紅茶がそっと置かれている。

目の前には、白い肌に黒い髪をした女性が座っていた。

「……こう、は」

声を出してから、自分がどういう状況に置かれているのかを悟る。理解できたわけでも、納得できたわけでもなく、ただ解った。

「お前の中、か」

「そう。初めまして、もしくはこんにちはは、カメラード戦友」

シュヴァルツェア・レーゲン。彼女はそのコアの人格だった。でなければ、私を戦友などとは呼ばないだろうし、私をこのような不可解な場所につれてこられるはずもない。

彼女は紅茶の香りを楽しみながらスコーンを頬張ると、美味しそうに口を動かした。

「それで、なぜ私はここに？」

「んくつ……。つぶはー。力、ほしいんでしょ？」

さも当たり前のように口にした彼女が手を振るうと、テーブルクロスの上にかちゃん、と二つのビンが現れた。

小さな薬瓶くらいの大きさのそれは、片方は白、片方は黒に染め上げられている。

それを指先で撫でながら、彼女が言った。

「白い方を飲めば守る力。黒い方を飲めば壊す力。どちらか好きな方を選びなさい」

私は選択には口を出さない。

笑みを形作りながらそう言った彼女は、それきり口を閉じた。守る力と、壊す力。その選択肢を作るということは、それによって何かが変わるかもしれないということ。

そして、その変化を恐れないものが、力を掴み取れる。……きっと、以前の私なら迷わず黒いビンだけを飲んでいただろう。

「……シュヴァルツェア・レーゲン。一つだけはつきりさせておく」

「……？」

「私は愚か者で世間知らずな糞ガキだ。今はまだ誰かを守ること一つ満足に出来ない」

たとえISを持っていたても、優秀な力があっても、子供は子供だった。

結局私は私から抜け出すことはできない、けれど、周囲が私を知ってくれる。私は周囲を知ることが出来る。だから、私は私を変えられる。

「だが、そんな私に手を差し伸べてくれる人がいた。目を上げれば、沢山な」

「……そう」

その沢山の人たちの思いを背負って、私はこうして生きている。
アドヴァンスド
遺伝子強化素体だからではなく、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』だから生きている。

だから、それを守るための力ならば。私が使う力ならば、それこそが相応しいだろう。

「だからこそ。私はこの道をとらせてもらう」

そう言って、私は黒い薬瓶を手にとると、中身を一気に飲み干す。胃がム力つくような感覚に、ぐらりと視界が揺れるが、必死にその場に踏ん張った。

彼女は、悲しそうにこちらを見る。

「そう……。それが、あなたの選択……」

「だが、これだけだと言った？」

「え　？」

やや体の力が抜けた状態で、白い薬瓶を驚掴むと、また一気にそれを飲み干した。すると、さっきまでの体の異常が瞬く間に治っていく。

驚いた顔の彼女を見据え、ニヤリと皮肉気に笑ってみる。上手く笑えただろうか。

「守る力も壊す力も、共に力だ。力の意味を変えるのはいつだって人だ。私はそれを今までの戦い、人との触れ合いで知った。ならば、両方を飲み下すことこそ、前へ進む道だろう？」

「……驚いた、まさかそんな無茶を試してみせるなんて」

力に貴賤はなく、故に力はただ力ではない。

私はもう、力の意味を見失わない。強さの意味を、見間違えない。まだ私は見つけていないが、いつか見つけてみせてやろうじゃないか。そのための力だ。

だから、そのために今は、仲間を守る力になってくれ。

「いくぞ、暖かな夢は終わりだ」

「……ええ、戦友」

頬を吊り上げた笑いを見せると、ゆっくりと私の意識が遠のいていく。

そして、次の瞬間にはぼろぼろになっていた私の周囲が完全に止まっていた。

光を放つ私のレッグバンドに触れると、勝手にISが起動し、次々にウィンドウを開いては処理を終えていく。

数秒で処理を終えたあと、目の前には一つのウィンドウが表示されていた。

『二次移行処理が終了しました。完了を押して二次移行を完了してください』

迷わず完了を押すと、私のISが穏やかな光を放ちだす。装甲は形を変えていき、武装もその数や種類を変えて行った。

その光が収まったとき、そこにあつたのは『シュヴァルツエア・レーゲン』であつて『シュヴァルツエア・レーゲン』でないもの。二門となったレールカノンに、倍以上の数に増殖したワイヤーブレード。プラズマ手刀は大きく強化され、普通の装甲なら一瞬で切り裂けるプラズマブレードになっている。そして装甲は、四肢と胸部を守るように増えていた。

全てのスペックを読み解きながら、私は静かに目を開く。そこに輝いているのは、二つの金の瞳。

ISと共に、私も進化した。自らを進化させ、本当の『ヴォーダン・オージェ越界の瞳』を手に入れ、ようやく私は『私』になれた。

自分で望んで手に入れた力だ、二度と誤つてなるものか。

そう決意し、私は無意識的に発動させている『AIC』を意識的に切り替える。そうすることで、簪の周囲一帯を対象としていた『AIC』は、無人機たちだけに限定された。

「遅くなった、簪」

「ラウ、ラ……」

「すぐに片付ける。待っている」

冷徹に無人機を睨みつけながら、出来るだけ優しく簪に声をかける。

簪と鈴は、言わばライバルでもあり、未来の家族でもあるのだ。

邪険にする理由などない。

それに、私は友は助ける。

「さあ……、いくぞ木偶人形。エネルギーの貯蔵は十分か？」

尤も、すぐに尽き果てることになるだろうがな。

吐き捨てるように言い放ち、私はワイヤーブレードを撃ち出した。空を裂き疾駆するそれを操作し、四〇にも及ぶワイヤーブレードでブレードのない無人機の左腕に装着されている砲塔を絡め捕る。そのままそれを引きずってこちらへ引き倒すと、両肩に備え付けられたレールカノンで次々に無人機へ弾丸を撃ち込んでいく。

耳障りな機械音を掻き消すように射撃は苛烈さを増していき、やがて装甲がぼろぼろに壊れたところで片腕のプラズマブレードをその装甲を潰すように突き刺した。

バギツ、と堅い音が響き、コアが壊れる感触がブレードを伝わってこの手に広がる。

コアを壊された無人機は溶けるように消滅する。その様を、私は冷たい視線のままで見ていた。

見届けた後、もう一機のブレード持ちの方へと向き直る。簪の方を向いて銃口を突き付けた状態で固まっているそいつへワイヤーブレードを繰り出すと、切っ先を全て装甲へ突き立てる。

その状態でワイヤーブレードを大きく振り回し、次々に地面や天井へと叩きつけていく。その度にシールドエネルギーがガリガリと削れ、バイザーの奥のモノアイが鈍く光る。

「貴様らは……、ここで潰す！ シュヴァルツェア・レーゲン！」

次の瞬間、全てのワイヤーブレードの剣先からプラズマブレードが形作られ、絡みついている無人機を一斉に貫く。

そのうちの何本かがコアに達したのだろう、無人機の挙動がおか

しくなってきた。やがて何か言葉を吐き出すこともできなくなった
無人機は、ゆつくりと溶解していった。

そこまでやって、私はようやく息を吐き出すと、すぐに簪の元ま
で駆け寄って横抱きに抱き上げた。

「すぐに医務室に連れて行くからな。耐えろよ」

「うん……、あり、がとう……」

苦痛に眉を顰めながら、それでも無理矢理に笑みを形作る簪を見
て、私は思った。

仲間を、家族を、守れる自分になろうと。せめて手の届くものた
ちだけは守れるようになるうと。

……強さの意味が、ほんの少しだけわかった気がした。

第71話 力の意味（後書き）

ラウラ覚醒回。目新しい武装はありませんが、格段に強化。ラウラが見た目イノベーター化しました。次回こそ一夏、かなあ。

第72話 白き力

次々に繰り出される打ち込みを必死にいなしながら、一夏はなんとか反撃の糸口を見つけ出そうとしていた。

《零落白夜》れいらくびゃくやを発動させようとしても、それを阻むように繰り出される鋭い一撃に対応するために《雪片弐型》ゆきひらにがたを振るうために集中もできず、ひたすら攻撃に対して対応するだけのため、発動するとはおるか攻めに転じることすらできていなかった。

ただでさえシャルロットの怪我のせいで焦っている一夏は、時折掛かる強烈な衝撃を堪えながら刃を振るっていた。

「どうにかして、隙を見つけ出さないと……！」

考えながらも剣を振るう手は止められない。

と、突然がくん、と無人機が動きを止める。その挙動に不審なものを感じた一夏は、油断なく無人機を見据えて《雪片弐型》を構え直す。

心配そうにシャルロットが見つめている中で、無人機はおもむろにその機械じみた音声を流しだした。

『二号機、三号機大破。』しんうち真打・鉄くろがね』及び『シユヴァルツェア・レーゲン』セカンドシフトのデータ収集不完全。『シユヴァルツェア・レーゲン』の二次移行を確認。大破前のデータから自己成長促進プログラムに書き込みを行います』

「自己成長……！？ さっきと同じだ、一夏！」

「なら、ここで倒せば問題ねえ！ うおおおおおおお！」

シャルロットの焦った声に応え、一夏は《零落白夜》を発動させて大振りに斬り込む。

その瞬間、一夏の体がピシリと固まった。

「なっ、に……!!?」

「これは……!!」

バイザーの奥のモノアイが鈍く赤い光を放っている。明らかに何かの武装を使用しているが、それは本来この無人機には積まれているはずのものだった。

「《A I C》……!!? そんな!」

「体が……!! ちくしょう、またこれかよ……!!」

『《Active Inertial Canceller》正常稼働』

動かない体で必死にもがきながら、一夏は何とか抜け出そうとする。

しかし、既にボロボロになっている『白式』にも、そして一夏自身にもこの事態を打破する手は残されていなかった。

ゆつくりと、空中で静止する一夏へ向けて四つの砲門の取り付けられた右腕の熱線砲を構える。

「やめて、やめてよっ!!」

涙を溢れさせながら、しかしシャルロットはそう叫ぶことしか出来ない。

自分の無力さに打ちひしがれながら、シャルロットはただただ叫んだ。

やがて、熱線砲の光が砲門から溢れ出していく。

次の瞬間、一夏の意識はぶつりと途切れ闇におちた。

穏やかな歌が聞こえた。

気が付くと、一夏はどこかの浜辺に横たわっていた。横になっ
ている場所は芝生になっていて、太陽の光を遮るようにヤシの葉が頭
上に広がっている。

体を起こして歌の主を探してみれば、大きな流木の端に立って歌
う彼女が見えた。

「この歌……」

それは、とても暖かな印象を受ける穏やかな歌だった。

しばらくの間ゆっくりとそれを眺めていた一夏だったが、少女が
歌うことを止めたところでハッと我に返る。

少女は穏やかな歌声と同じような、温かな目を一夏に向けてきて
いた。

「君は……？」

「それは、一夏。貴方がもう知っているはず」

やはりと言うべきか、声も暖かなものだった。

真っ白い髪に白のワンピースで身を包み、笑みを崩さない少女。
見たことはなかったが、一夏の胸の中にはどこか暖かい懐かしさの
ようなものが灯っていた。

「力を、欲しますか？」

「ああ」

今までと違う、斬りこまれる様な鋭い一言に、一夏は躊躇いなく頷いた。

そのさまを見て、少女は更に言葉を続ける。

「なんのために？」

「仲間を、守りたい」

一夏はシャルロットの涙を見て思った。自分は、また誰かに心配をかけて、悲しませて、それで終わりなのかと。

それは、とてもいやなことだった。

だからこそ、守りたいと強く願った。

「俺の友達を、仲間を、家族を、守れるだけの力が欲しい！」

「……その言葉に、偽りなきことを誓うか？」

いつの間にか、少女の後ろには白い騎士が立っていた。

どこかで見た覚えのある甲冑姿の、女性の姿。それはとても誰かに良く似ていた。

「ああ」

けれど、それに思いを馳せることもなく、一夏はまたもや躊躇いなく頷く。

その答えが正しかったのか、白い騎士は小さく頷くと少女の肩に手を置いた。

「わかりました。既に、貴方には力を扱うだけの思いと素質があり

ます。この力を、どうか誤らずに」

「……ありがとう」

光を放つ何かを少女の手から受け取った一夏は、ようやく笑みを浮かべる。

いつの間にか感じていたもどかしさが、ようやく消えた感じがしたから。

「……ありがとう、白式」

「……どういたしまして、一夏」

最後にそう礼を言って、一夏はその場から消えていく。

後には、白式と呼ばれた少女と、白い騎士の女性だけが残された。

「一夏ああああ！」

強烈な爆発と共に、辺りに煙が立ち込める。

凄まじい煙で視界が悪いその向こう側にいるはずの、好きな人の名前を呼び続けた。

シャルロットの目の前で起きたことが、彼女にとっては信じられないことだったから。

「嘘、嘘だよ……？ いちか、一夏あっ！」

必死に呼ぶも、反応はない。
ただ、キーン、と言う音が響く、だけ。

なんだ、この音。

ふと疑問に思った次の瞬間、轟っ！ と風が吹き荒れる。
その中心には。

「間一髪、間に合ったか」

「一夏！」

ニヤリと笑みを浮かべた一夏の姿があった。

その左腕は巨大な腕部パーツへと変貌しているほか、背中には四基のウイングスラスタ^{スラスタ}が作り出されていた。

その姿を見て、シャルロットは瞬時に一夏の『白式』^{セカンドシフト}が二次移行を遂げたのだと悟る。土壇場での二次移行なんて、ずいぶん主人公らしいな、と、シャルロットはそんなことを考えていた。

「シャルロット、すぐに片付けるから、ちょっと待っててくれよな」

闘志を漲らせ、一夏はそう宣言する。

その直後、一夏は瞬時加速で無人機へと突撃していく。
イグニッション・ブースト

即座に熱線が迫るが、それはメカアームを振りかざすことによって掻き消された。

『熱線の消滅を確認、原因不明』

不可解そうに機械音声でそう告げる無人機へ向けて、一夏は明け透けな笑みを浮かべながら『零落白夜』を発動させた『雪片式型』

を振りかざす。

体をくねらせて回避しようとした無人機だったが、そこへもう一本の刃が迫る。メカアームの先端から伸びたエネルギーブレードだった。

多機能武装腕《雪羅》^{せいろ}、それが一夏の新たな武装である。

大型荷電粒子砲、エネルギーブレードに零落白夜のエネルギー爪などを搭載し、零落白夜のエネルギーを防御用のバリアとして展開できる機能も持っている。

その《雪羅》の先端からブレードを展開している一夏の一撃が、熱線を繰り出し続けていた左腕の砲身を肩口から切り落とした。ガシャン、と大きな音を立てて地面に落ちた砲身に目もくれず、一夏はブレードを収めると《雪片式型》の刃を一気に叩きつける。頑丈なブレードによってそれを受け止めた無人機へ向けて左腕を掲げた一夏が、にっと笑みを浮かべた。

「行くぜ、黒尽くめ野郎！」

次の瞬間、エネルギー充填の終わった荷電粒子砲が至近距離から無人機に撃ち込まれる。

無人機の強固な装甲を次々に溶かし尽くしていくその弾丸が消え去り、ようやく反撃だと動き出そうとした刹那、その無人機の頭上から光の刃が叩きつけられ、ばっさりと切り捨てられた。

そこでようやく《零落白夜》を解いた一夏は、無人機が沈黙したのを見てやっと安堵したように息を吐きだす。

「シャル、大丈夫か!？」

「うん、まだ痛いけど、生命維持がフルで稼働してるから大丈夫……。よかった、無事で……」

「それをシャルが言うかよ……。とにかく、早く医務室に行かないと」

念のために『白式』の第二形態、『雪羅』を身に纏ったままでシャルロットに近づく一夏。

肩の怪我はある程度出血が抑えられているらしく、時折痛みに顔を顰めるものの意識ははっきりしていた。

「えっと、一夏……。もしよかったらで、いいんだけど」
「ん？」

突然、頬を染めてもじもじしながら、シャルロットが続ける。

「医務室まで、運んでくれないかな？ 肩が痛くて……」
「おう、いいぜ」

簡単に頷いた一夏は、四肢の武装だけを解除して、最低限の機能使用に必要な分だけISを残したシャルロットをそっと抱きあげる。それは、俗にお姫様だっこといわれるものであった。

あんな戦闘のあったすぐ後に何をしているのかと言われればそれまでだが、これも恋する少女の強さであるのだろう。

一夏とシャルロットは、そのうち来るはずの整備班に後を任せ、医務室へと急いだ。

「千冬さん、恋華^{れんけ}。やっぱりここにいたのね」

その頃、葵あおいは一人管制室にやってきていた。

アリーナにあるすべての監視カメラの映像が流れてくる管制室にいたのは、数日前にあった襲撃事件の折、管制と助太刀を行った山や田真耶またまや、織斑千冬おりむらちふゆ、更識恋華さとしきの三名。

その中に一切の躊躇いなく入っていった葵は、我が物顔で近くの椅子に腰かけると言葉を続けた。

「ほかの教師はどうしたの？」

「みな警備や生徒の誘導に回っている。いつ奴らが増援で現れるともわからんからな」

「こっちは何が起きてもいいようにここに詰めてるってわけよ」

「なんだか、もう今年は滅茶苦茶ですね……。穏やかな日々というのはいつ来るんでしょうか」

理知的な声を響かせる二人とは対照的に、真耶は疲れ切った様子でそうこぼした。

その様子に千冬が苦笑し、それを見て真耶に恋華が嫉妬するとう一幕があつたが、それは取り立てて言うべきことでもないだろう。葵はふうん、と言つぶやくと、それきり黙りこくる。

嵐はいまだ収まらず、これからの何かを予見しているようにも思えた。

第72話 白き力（後書き）

やっと一夏覚醒！

次回はようやく香織サイドに戻ります。

あ、雪羅は特に変わらないですのであしからず。

第73話 終結……？

「いやー、長いつスね先輩」

「そうだなー、反撃してねえもんなー」

皆が戦っているなか、無人機の一機に襲われた専用機持ちの三年、ダリル・ケイシーと二年、フォルテ・サファイアの二人は、熱線と強烈な踏み込みの全てを、防御と回避に専念することで全て受け流していた。

そういつてしまえばまるで怠けているようだが、適度に小突いてターゲットを変更させないことで二人に攻撃を集中させ、周辺に残っていた一般生徒へ攻撃させないと言う意味もあった。

その一般生徒達の非難も終了した今、本来なら反撃しても問題ないわけなのだが。

「けど殴るのもアレっスよねー」

「そうだなー、疲れたくねえもんなー」

ご覧の有様である。

しかもフォルテに至っては今回の『無人機の強襲』という事態を目の当たりにして、学園側のこの反応の遅さからこのようなことが一学期にもあつたなと思いついて出していた。

一学期のクラス代表戦での『試験機の暴走』に始まり、その後の学園別タッグトーナメントでのドイツ代表候補生の専用機の暴走。

二学期に入ったところで今度は謎に満ちた男性IS操縦者三名が襲撃、内二名は木っ端微塵に自爆すると言つ過激な最期を遂げている。

さてさて、そこまでを含めてこれを考えてみよう。数日前には五〇〇〇万と少し、例の件の『報酬』とやらがフォルテの講座に振り

込まれていた。しかもそれは日本政府から楯無会長が搾り取り、そこに織斑千冬の個人資産から彼女自身が厚意と善意で提供した資金である。

報酬もろくに出さず、命を懸けると何度も何度も戦場に連れ出す。確かにIS操縦者はいざそうなったときには戦力として扱われるが、ここは学校である。そんな扱いをして何の見返りもなければ、それはそれは大いに叩かれることだろう。

ここまで考えてから、改めてフォルテは思った。ここやばい、とおそらく委員会の子飼いであろう黒尽くめ集団はいるわ、やたらと狙われて命が危ないわ、もうまともな生活なんて期待できもしない。

そのことは大体の範囲でダリルも解っていたため、二人して戦うこと自体が面倒になっていた。

「けどなあー、やらねえとおわんねーしなあー」

「そっすねー。んじゃー、まあ」

面倒ではある。あるのだが、それを面倒くさがって委員会に目をつけられでもすれば非常にめんどくさい事態になりかねない。というか目をつけられれば間違いなく面倒なことになる。

であるからして、そんな結論に至ったフォルテとダリルは。

「いっちょ」

「反撃しますか」

その声とともに攻撃に転じようとしたその瞬間、無人機のブレード部分を荷電粒子砲の砲撃が消し飛ばしていた。

「余計なお世話だったかしら」

「あ、姉御!？」

ぶち破られたその壁の向こう側に立っていたのは、巨大な荷電粒子砲を片腕で担ぎあげている葵だった。

その姿を見たフォルテは、驚きの声を上げる。

「おいおい、生身でそんな物騒なもん使えるやつがいたのか……」

「一之瀬葵、二年よ。よろしく」

「ああ、三年のダリル・ケイシーだ。よろしくな」

呆れ半分驚愕半分と言った様子ながら、葵に近づいて行ったダリルは腕の部分のISを解除して軽く握手を交わす。物騒な代物に見合わない柔らかな葵の手に、ダリルは少なからず驚きを見せた。

そんな中で、無人機はようやくダメージの後遺症から抜けきったのだろ。ガチャガチャと耳障りな音を響かせながら三人の方へ左腕の銃口を振りかざしてみせる。

その様子を、葵はただただ見つめていた。

「なんとも不格好ね。似合わないわよ、それ」

次の瞬間にBCブレードから軽口の音とともに放たれた神速の斬撃が、衝撃波となって無人機の左肩へと食らい付く。

音もなくその部分を裂いた斬撃が後方へ消え去り、無人機は何が起きたのかもわからないままその左腕に取り付けられた砲塔を地面に落した。

「うん、いい感じだわ。スマートよ」

「……おい後輩、これほんとに人間か？」

「あたしの知る限りでは織斑先生に勝てる唯一の存在っス」

「マジかよ……」

葵のそばで二人がそんなことを呟いていたが、葵はあえて聞いていないことにした。

「さて、と。これで破壊を確認したのは七体ね」

「全部で何体来てるんスか？」

「八体よ。そのうち六体はさっきまでで破壊されたし、今ので七体目よ」

「つてことは残り一体か。場所はわかるのか？」

「ええ。ここからはかなり遠いけど」

そう言つて葵は端末の情報を仮想ディスプレイに映し出す。

そこには、ISコアの反応に似たものがチカチカと点滅していた。残っているのは、第三選手控室の一点のみ。

「すでにナターシャ先生が向かつてるから、二人は一度戻ってきて案内するわ」

「了解ッス！」

「おう、わかった」

ISを身につけたままの二人を先導して、葵は管制室へと歩き出した。

一方その頃。

「っただあつ、堅すぎよっ！」

「狙って叩いてるのに、効かないなんて……！」

『内部にもシールドビットを配置しているようです。衝撃はそれで吸収されてしまっています！』

件の第三選手控室にて戦闘を続けていた香織と鈴、そしてそのサポートを行っているイヴの二人と一機は、予想外の強敵に苦戦していた。

ほかの無人機と違いシールドビットを備え、内外にシールドを張り巡らせている相手とあつては、自慢の攻撃力も半減させられてしまう。

かといって無茶苦茶に高威力な武器と言ってもあるわけなく、二人はイヴのサポートを受けながら時間を稼ぐのが精いっぱいだった。

「こうなったら一か八か、賭けてみる？」

「……でも、どうやって？」

『二人とも、無理は禁物です。アウェイでない以上勝機はもぎ取れます。なにより、私のサポートで負けを経験させるわけにはいきません』

「イヴ、随分張り切ってる、ねっ」

『最近めつきり出番が減りましたから、この辺で存在感を出しておかないと』

「……イヴ、貴女疲れてるのよ」

『鈴、今私のことをバカにしませんでしたか？』

「してないしてない」

和氣藹々^{わき あいあい}と言葉を交わしあいながら、相手を警戒することは忘れない。

鋭い踏み込みの一瞬を狙って鈴が言って早く切り込むも、シールド

ドビットのエネルギー場によってそれは阻まれ、踏み込みの後の隙を狙って香織が《啄木鳥》を突き立てれば、コアに届く寸前で内部のシールドビットのシールドによって止められてしまう。

ぎりつ、と奥歯を噛み締めながらも必死に攻勢を維持しようとするが、一対二という比較的不利な状態にもかかわらず、香織と鈴の攻撃はまるで歯が立っていないかった。

と、突然無人機に降り注ぐ銀色のエネルギー弾。その豪雨に晒され、シールドビットで防ぎきれなかった二割ほどがその装甲に大きく傷を付けた。

「これは!？」

「ハロー、お待たせ二人とも。皆大好きナターシャお姉さん、参上よ!」

「ナターシャあ!？ ま、まあいいわ、助かる!」

現れたのは、銀色のIS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』をその身に纏ったナターシャだった。

その手に備えた《シルバー・ベル銀の鐘》のカノンタイプと、頭部に備え付けられている本来の広域射撃武器である《銀の鐘》から純白のエネルギー光を溢れさせ、にやりと笑みを浮かべる。

「さて、それじゃあとつとと終わらせましょうか! Silver Wing《銀の翼の奏でる鐘》!」

その声に反応し、頭部の《銀の鐘》にカノンタイプがドッキングしていく。

二枚の羽を補強する形で装着し終えたそれが、眩い白の光を溢れ出させた。

「これって、《銀の鐘》の武装特性!？」

「ナターシャさん、使えるようになったんですね！」

「まーねえ、お姉さんは何でも出来なきゃ。ってことで、行くわよーっ！ 歌い奏でましょう、『ゴスペル』！」

直後、十数倍に広がった一対の白い羽。

光を放ちながら羽ばたくそれからは、一度羽ばたく度に目も眩むような弾幕が振るい出されていく。

金属質な音を響かせながら、無人機はシールドビットのシールドとその機動性を持って何とか回避していくが、やはり回避しきれない弾幕の一部が無人機へと降り注いだ。

『危険！ 危険！ 損傷増大！』

銀の鐘の音に叩きのめされながらも、無人機は熱線で壁を抜くと更に広いアリーナへと逃げていく。

しかし、背を向けたその隙を、ナターシャが逃すはずもなかった。

「あまーい Dig Dissector
《銀色の鐘の音》！」

白く大きくなった羽はそのままに、右腕に装着された《銀の鐘》は、カノンタイプに切り替わりエネルギーを一瞬でマックスにまで跳ね上げる。

次の瞬間、《銀の鐘》から研ぎ澄まされた一撃が撃ち放たれ、無人機の下半身をこっさり抉り取っていった。

「どんなもんよ！」

「滅茶苦茶ね……」

「ありがとうございます、ナターシャさん。助かりまし」

『全機撃墜を確認。これより最終フェイズへ移行します』

ぞわり、背筋に怖気が走った。

それがなんだったのか、その答えはすぐにやってくる。

勝利に湧いていた三人の目の前で、下半身の消し飛んだ無人機が P I C によって宙に浮くと、がばつ、とその口を開いた。

「なに……！？」

「おーいこういうの前にも一回あったわよね……！？」

「ってことは、つまり……？」

『全ての機体を量子変換。結合プロセスへ移行します』

次の瞬間、香織達三人の目の前に現れたのは大量の無人機の残骸。何事かとそれを見つめてみると、残った一機はあろうことが、その口を大きく開いてががつとその残骸を喰らい始める。

いっそ清々しいほどにおぞましい、吐き気を催すようなその光景を目の当たりにして、香織と鈴は思わず嗚咽を漏らし、ナターシャは不愉快そうに眉を潜めた。

『全機体との結合、情報同期完了。システム再起動、』
『ゴーレム？』、再起動完了』

ゴーレム？。

自らをそう言ったそれは、左腕に九つの砲門を備え、右腕には地面まで着かんとするほど巨大な刃が取り付けられていた。

その体軀は I S を装備した香織達の優に三倍はあるだろう。

八つのモノアイが不規則に蠢き、粘ついたオイルを垂れ流すその口が動く。

『殲滅対象、I S 学園。殲滅を開始します』

直後、背中から大量のレーザービットが吐き出された。

「まずっ
」！」

終わったはずの戦いが、再び始まる。

それは、長い嵐の始まりを告げる鐘の音であった。

第73話 終結……？（後書き）

ナターシャがまた強くなり、ゴーレムが進化しました。

全長約10メートルのゴーレム（今までの戦闘経験と戦闘装備殆ど完備）を前に、彼女たちはどう戦うのか！

第74話 終結

「か、回避ーっ！」

『射撃』

咄嗟に飛び上がると、それを追いかけるようにして目の前のデカブツが左腕の九門熱線砲をぶっ放してくる。

ただでさえ堅かったのに、多分もっと堅くなっているだろう。それでは攻撃も通せない。

「なんなのよアイツーっ！ 無人機は皆合体しなきゃいけない法律でも出来たわけ！？」

「単純に考えれば例の無人機の発展系ってことなんでしょうけど、こりゃ滅茶苦茶ね！」

ふーちゃんとナターシャさんもそれぞれバラバラに飛んでいるけど、ぐねぐねとうねる三本の熱線がそれぞれを狙っていた。

それどころか、時折一、二本が追尾から外れては外壁を溶かし、破壊行為に逸れていることがあるから性質が悪い。

「ナターシャさん、通信は！？」

「……よし、繋がるわ！ 管制室、聞こえてる！？」

『通信来ました！ はい、聞こえてますナターシャ先生！』

通信回線の向こう側にいたのは山田先生だった。

音声通信だけの状況でも、向こうが混乱していたことは容易に伝わってくる声音で、山田先生が応答する。

「そつちからこつちの状況はわかる！？」

『ナターシャ、千冬だ。今すぐ今動ける専用機持ちに通信を繋げ、そっちに行ってもらう。それまで堪えろ』

「千冬！ その答えてことはモニターできてるのね！」

『ああ。鳳、一之瀬、聞こえているか？』

「は、はいっ！」

「はい、聞こえてますっ」

通信を代わった千冬さんの声に、私とふーちゃんが頷かず声だけで返答した。

『お前たちには辛い戦いを強いるが……、すまん。しばらく堪えろ』

「大丈夫よ、千冬さん！ このくらいどーってことないわ！」

「ちよつと大変ですけど、やれないことはありませんから。それより、早く救援を頼みます！」

『あ、ああ。死ぬなよ、三人とも』

それを最後に、通信が切れる。

全く、最後に「死ぬな」なんて、どこの映画のシーンなんだろうね。全く。

「さて、それじゃあ何とかやりますか！」

「ビットは今のところ待機状態です、一気に破壊しましょう！」

「それは香織、アンタに任せるわ。アタシはアイツの注意を引くから！」

「じゃ、私は両方のサポートに回るとしますか。さあ、ちゃっちゃん叩くわよ！」

ナターシャさんのその言葉を合図に、私たちはいつせいに動き出した。

ウィングビットを起動し、《夜雀》よじゃくと《夜鷹》よたかの片方を展開し構

える。

ふーちゃんが衝撃砲で本体に射撃し続ける中を掻い潜り、熱線の嵐を避けながら無数のシールドビットを破壊していく。

『香織！ 後方です！』

「なあっ！？ んのおっ！」

突然後方からエネルギー反応を感知し、咄嗟に耐エネルギー加工を施してある方の《夜羽^{よはね}》を振るう。

パンッ！ と高い音が響き、小さなエネルギー弾が弾けた。

その先にあつたのは、小さな銃口を煌かせて浮遊するビット。マジですか？

『間違いなくビット兵器ですね。注意してください。シールドビットの中に無数に紛れています』

「最悪の展開ってこういうことを言うのかな？」

『かも知れませんが。 きます！』

「ああもつつ、なんて数だよ！」

悪態を吐きながらも休むことは許されていなかった。

ぞつとするような数のシールドビットと射撃用ビットの群れへ、文字通り雀の涙ほどの弾丸をばら撒いて、私は一度解除していた《ナイトホーク》を発動、同じように《^{バードエイク}とりのさえずり》を再度起動する。

全てのエネルギー反応と姿を消した私は、傍にあつたビットを叩き潰すと、加速をつけてその群れの周囲を周りながら攻撃を加えていく。

目の端ではガスガスと衝撃砲をぶっ放すふーちゃんの姿と、それを受けて微量ながらもダメージを蓄積させるゴーレム？の姿が……？

「あれ、衝撃砲が当たってない……？」

『……これは……っ！ 香織、ゴーレム？は《A I C》を使用しています！ それで衝撃砲の弾丸を停止させているんです！』

「はいっ！？ な、なんであのゴーレムに！？」

『このビットや、あの姿になる前の踏み込みの速度を考えると……、おそらくは戦った相手の技や武装を合体したときに生成しているのかもしれない』

イヴの話したとんでもない事実、私は頬を引きつらせながらビットへの攻撃を続ける。

あのタイミングでやってきたということは、最悪ほぼ全員分の武装や技能があるってことだ。それも計算に入れて戦っていないと、あつという間に潰されてしまうだろう。

本当に、滅茶苦茶だ。

心なしが徐々にこちらを補足するようになってきつつあるレーザーを回避しながら、《夜鷹》とウィングビット、《夜雀》で次々にビットを破壊していく。

時折銀の弾丸がビットを撃ち抜いていく光景も繰り広げられる中、突然蠢いていたビットたちはピシリと固まった。

その光景にどこかおぞましいものを感じた私へ向けて、ぎょろりとその銃口を向けた射撃用ビットが一斉に赤黒い光を放つ。

咄嗟に回避機動へ移った私だったが、それを嘲笑うように全てのレーザーが曲がった。

「なっ！？」

『避けてください、香織っ！』

全方位から迫るそれに気圧されたのか、私の体は動かない。

《夜羽》で身を覆うしか出来ずに、私は思わず瞼を閉じ、衝撃に備え、

「そこまですわ」

果たして、その衝撃は一つたりともやってくることはなかった。

キュキュイ！ とガラスを擦るような奇妙な音と共に全ての赤黒いレーザーが美しい青い光によって打ち消される。

「ご無事ですか、香織さん？」

「セシリア、さん……！？」

「ええ。それと、わたくしだけではございませんことよ？」

宙を漂うようにふわふわと浮かぶセシリアさんは、私の上に佇んでいた。

蟲惑的な笑みを浮かべる彼女の傍には、一二基に増えた《ブルー・ティアーズ》、そしてその手に携えているのは《スターライトmk ？》。

執拗にレーザーを放つビットへ向けて、セシリアさんは無造作につい、と指を動かした。

刹那、視認できない速度で放たれた一本のレーザーが、次々と直角に曲がって全てのレーザーを掻き消し、その半数の発射元を撃ち貫く。

「す、すい……！」

「うふふ、お褒めの言葉ありがとうございます」

口元で小さく笑みを形作るセシリアさんは、なぜか同い年のはずなのに私よりうんと年上の、お姉さんのように見えてしまう。

と、私の目の端を真っ赤な線が通り過ぎていった。……ん？

「第!？」

「そいつとの試合は譲ってもらうぞ、鈴!」

「え、いや、いいけど……」

困惑するふーちゃんを尻目に、《空裂》からわれと《雨月》あまつきを両手に備えた第さんは、獰猛な笑みと共に本体へ斬撃を浴びせていく。

時折繰り出される九本の熱線を、あるうことか《空裂》の一閃ですべて斬り伏せながら、第さんは片手に大きなブレードを構えたゴーレム?と真正面から打ち合っていた。

獰猛な闘争心を滾らせ、まるで本当の斬り合いのごとくその身を削って斬り合っているかのように、私には見えた。

「……えー……」

『多少人間離れしてきましたね、彼女は』

多少なのかな、アレは。

なんて考えている間にも、ゴーレムと赤椿の戦いは激化していく。青く光を放っているゴーレムの刃と紅く染まっている赤椿の刃が接するたびに火花を散らし、離れば互いがそれぞれの色のエネルギー刃を飛ばして応戦する。

思い出したように時々撃ち出される熱線は《雨月》から放たれるエネルギーによって相殺され、お返しとばかりに放たれる《AIC》は高速機動によって回避されていた。

「楽しそうですわね、第さんったら」

「……いや、まあ笑ってますけどね」

なんでそんなに「あらあらまあまあ」みたいな顔して微笑んでるんですか、セシリアさん。

それはともかく、セシリアさんもなかなか滅茶苦茶だ。

殆ど意識を向けていないのに、撃ち出されるレーザーを全て撃ち落し、発射したビットを全く同じ経路を辿って打ち抜いているんだから。

なんてことを考えていると、おもむろにセシリアさんがライフルを構え、数発撃ち放つ。

その直後、発射されたB.Tエネルギー弾は避けるように無数の線へと変わり、宙を漂う無数のシールドビットを残らず撃ち抜いていた。

「これで仕上げですわ。箒さん、こちらは終わりましたよ」
「ならばこちらも終いにしましょう！」

轟つ、と響くその声の後、箒さんの勢いが突然消える。

それを幸いとばかりに攻め込もうとしたゴーレム？だったが、それよりも早く箒さんは構えの姿勢に入っていた。

「ああ、これは決まったわね」

ぽつりとふーちゃんが眩き、いつの間にか傍に来ていたナターシヤさんと共に頷く。

その直後、箒さんが口を開いた。

「行くぞ。『スヘテラウガツ万障一穿』……！」

音高く響いた、鉄の音。

肩口にその突きの一撃を受けたゴーレム？は、ぐらりとその身を大きく揺らした。

「『チヘイラワル空海断絶』！ 行くぞ、斬り捨て……、御免ッ！」

振り抜かれた刃は、音すら立てずに装甲を滑らせ、そしてゆつくりと斬り落とす。

アレほど頑丈だった、冗談の様な装甲を誇ったあのゴーレムが、まるで熱された飴細工のように簡単に斬りおとされて行った。べしやりと、地面に落ちる音がする。

それで、全てが終わった。

IS学園より二〇〇キロ離れた沖合い、その上空に浮かぶ人影があった。

「……どうやら、失敗に終わったようですね。ふふ、当たり前ですわ。あんな偽者でお兄様たちを殺せるだなんて、喜劇もいいところですよ」

愉悦に口を歪ませ、少女、キティはカタカタと嗤った。

それから一転して、彼女は真面目な表情に切り替えて更に言葉を紡ぐ。

「それにしても、なんて面白い方なんでしょう……！ 彼の織斑千冬がこれほどだなんて……！」

口にしたのは、今回の襲撃では戦わなかったはずの一人の女性の

名。

彼女の兄と姉、その二人と同じほどに、彼女に強烈な興味をそそられた。

「篠ノ之束、更識楯無、篠ノ之箒、セシリア・オルコット……、彼女はやはり、真理に近づくことの出来る存在なのかもしれませんわ……」

とするのならば、いずれ兄も自身のことを思い出すだろう。

そうなった時が本当の再会のときだと、彼女は胸を躍らせる。

まるで恋する乙女のように頬を染め、しかしその手には死を齎す爪を備えて。

彼女は、ただ嗤っていた。

第74話 終結（後書き）

相変わらずやたら強い筈さんとセシリアさんがウサ晴らしにやってきて終わりました。他の人は管制室でもしもの事態に備えて待機してたり、一般生徒のいる地下シェルターへの道を警備していました。ゴーレム来たら抑えられないので。

でも一番の要因は「あのぐらいなら出なくても大丈夫」という姉貴の言葉である。

そして最後に不気味な登場を見せたキティ。
さて、これからどうなることやら。

第75話 日常に戻るひとつ前

「さて」

以前もお世話になった会議室。その一番奥側で千冬さんがその口を開いた。

「皆、昨日はご苦労だった。怪我をした者もいる中、よくやってくれた」

『昨日のゴーレムの残骸データを解析した結果、間違いなく例の疑似ISコアと同一のものであったことが判明したよ。差し向けた奴も同一犯である可能性が高いね』

束ちゃんが細々とした表を指で示しながらそう告げる。

一体、どこの誰があんなことを……。襲撃はいいけど、その意図がまるでわからない。

『あの無人機、私たちの動きや武装データを取り込んだ……。もしあれが相手のデータバンクに送られていたら……』

『大変なことだね……。どれくらい持つて行かれてるのか……』

医務室から仮想ディスプレイを通じて会議に参加している簪ちゃんとシャルロットさん。あの戦いで負傷して、今はナノマシンで治療中。今日一日かければ速攻で治せるらしいから、ナノマシンも凄いものだ。

「わたくしも調査に協力致しましょう。今のわたくしの立場なら、それなりのところまで食い込めますわ」

「日本とロシアは私、イギリスはセシリアちゃん、と。他に探せる

場所はある？」

「ドイツの方は私が話してみよう。私の隊の者と、そこに繋がりのある者なら動かせる」

『フランスは任せて。もしデュノア社を襲った連中がこれと繋がってるなら、必ず暴き立ててやる』

セシリアさん、恋華さん、ラウラ、シャルロットさんがそれぞれに発言する。

けれど、調査の手はこれ以上には伸ばせない。前回の男性操縦者襲撃事件のときに動いていた黒尽くめの集団がまだ残っている以上、委員会自体が敵である可能性もあるんだから、感づかれないようにしなければならぬ。

まあ、他に調査できる場所があるかって言うと、とっても怪しいわけだけど。

「姉さん。姉さんの力で探し出せないのか？」

『うーん、それがね？ いないんだよ、どこ探しても。私は道がなくつても飛んだり跳ねたりして先へ進めるけど、世界がそこでぶつかり終わってちゃあ、さしもの束ちゃんもお手上げ侍なのですよ、
箒ちゃん』

「そうか……」

それと、なぜか箒さんと束ちゃんが仲直りしていました。なぜだ。いや、兄弟姉妹は仲がいい方がいいよね。ぎくしゃくしなくて。

「ここで話されたこと、及び今回の一件は全て口外厳禁という事を忘れないように。では解散！」

特に話すこともなくなったため、私たちはそろそろと会議室から出て行く。

ぶっちゃけると、今は色々考えるよりも休みたかった。一日経ったくらいじゃあの疲れは抜けそうにないです。それに、二人も負傷者が出てるし……。

「香織、大丈夫？ 顔色悪いわよ？」

「あ、うん。大丈夫。簪ちゃんとシャルロットさんのお見舞いいいこっか」

「そうねー。ラウラもくるでしょ？」

「ああ。もちろんだ」

そんな調子でふーちゃん、ラウラと共に医務室へ。そこには、先に来ていたであろう一夏たちの姿もあった。

「あ、香織……」

「昨日は絶対安静だったから会いに来れなくてごめんね。どう、具合は？」

「うん、大分楽になってる。……香織、そっちこそ大丈夫？」

「え？」

「顔が真っ青だし、ちよつと震えてる……」

ベッドに横になっている簪ちゃんが、そう言って傍に座った私の顔に手を伸ばす。

少し冷えた指先が頬に触れて、それで私はようやく自分が震えていることに気づいた。

ぴちゃつと、水滴が眼から零れる。

「……ごめ、私……！」

「香織……。ごめんね、心配かけて。もう大丈夫だよ」

恐ろしかった。

命には関わらないと言っても、それでも怪我をしていたのは事実で、もしかしたら失われてしまうんじゃないかと、心底恐ろしくてそれに今更気がついて、私はベッドの空いている場所に思わず突っ伏していた。

ただただ泣き続ける私を、簪ちゃんが頭を撫で、ふーちゃんとうらが手を握ってくれていた。

いつからだっただろう。私が姉さんを嫌うようになっていたのは。

問いは自分の中へ投げかけられ、そして返答もまた、自分の中からやってくる。

あの頃からだ、私が人を、殺めかけてしまった時。

私力が手にしたのは、剣道を始めて大分経った頃だった。

元より剣の才があったのであるう私は、周りの子供たちよりも頭二つ以上も抜きん出た実力を持っていた。

そんな私はあるとき、まだESが出てきていない頃に、中学生くらいの男たちに囲まれたことがあった。相手は三人だったが、いちやもんをつけて突っかかってきた彼らを、私は近くにあった木の枝で滅多打ちにした。

木の枝が頑丈だったこともあって、男たちは額から血を流し、腕

や足を折る大怪我を負った。だが、私はそれでは止まらずに徹底的に痛めつけたのだ。

誰かが通報したのだろう、救急車で運ばれていった彼らを見て、私はひどくすっきりとした気分だった。自分は強いのだ、あの程度の奴は簡単にやつつけられる。そう思い上がって、現実を見ずに。彼らのうちの一人が神経麻痺による半身不随、もう一人が脳へのダメージで言語障害を負い、残った一人も数十箇所骨折で半年の入院生活を余儀なくされたと後から聞かされたとき、私はぞっとした。自分はなんておぞましいことをしてしまったのだろうと。

両親が私を叱り、私も自分を殺してしまいたいと思っていたとき、姉さんだけはにこやかな笑みを浮かべていった。

「箒ちゃんは悪くないよ？ 悪いのは、箒ちゃんより弱いあいつらだもん」

その言葉を吐いた姉の笑みをみて、私は寒気すら覚えた。

その当時の私からすれば、姉の言ったことは理解しがたかったことだっただろう。だから、姉さんを遠ざけ、自分の罪から目をそらそうとした。

「……とんだ道化だな、私は」

皮肉気に口を歪め、私は胴着の襟を正しながら呟いた。

私は一夏には付いていかず、あの会議の後一人で剣道場にやってきていた。

放課後も大分時間を過ぎている今では、そこにいるのは私一人。竹刀ではなく木刀を両手に構え、私はある人を思い描き対峙していた。

私の父、篠ノ之柳韻。りゅういん

父さんの剣には、私はまだ達していない。

だからこそ、超えたいと願う。その剣を、いつか。

ひたすらに打ち合うようにして剣を振るう。切っ先に反射した夕日が軌跡を描いていく。

どれくらい続けただろうか、いつしか夕日の光も沈みだした頃、剣道場にパチパチと拍手の音が響いていた。

「おみごとだね？ 篠ノ之さん？」

「部長……。すみません、勝手に使用して」

入り口に立っていたのは、胴着姿の剣道部部长だった。

今まで走りこみでもしていたのか、額には随分と汗をかいている。胴着姿でやっていたのだろうか。

「いやいや、かまわないよ？ ……それより」

嬉しそうな笑みを浮かべていた部長は、私の隙間を突くようにして目の前に現れる。……見えなかった、足運びですらほんの僅かに感じただけ。

「今の、殺しの剣だね？」

「……っ！」

顔を突き合わせるように下から迫ってきた部長は、まるで猫のような笑みを浮かべながら、

ギョーンッ！ と顎を掠め、突きを放ってきた。

咄嗟に木刀で逸らすと、上がりきったその腕の真横からもう片手

が突き出される。

掌底の形で突き出されたそれを小刀の方の木刀で受け止め、後ろに飛び退く。

「何を……！」

「ようやくまともな顔になったね？ 箒ちゃん？」

問い詰めようとしたところに被せるようにして、部長が言った。

「なんだかんだ言っても、結局ここつてISを使えるようにするための学校だからね？ 私たちみたいに、一つ危ない人たちのための学校じゃあないわけだね？」

突きを放ったその木刀を片手でくるくると縦横無尽に回しながら、部長は楽しそうに続ける。

「そんな中でそういう殺しの剣を使えるようになるのは、ほんの一握りの人だけなんだね？ だから……、手合わせ、しない？」

ぴたり。

先ほどまで重さを感じさせないほどに軽々と手元で回していたその木刀を、手首と手のひらの力だけで止め、部長は猫の笑みを深くして問うた。

その笑みに、私は心の中の歓喜を抑えきれずに刃を構える。笑みを見て悟った、この人も同じだと。

「ええ」

直後、剣道場に複数の剣のぶつかる音が鳴り響く。

私の振り下ろした刃を部長が受け止め、下に流した返しの刃での

突きを私が小刀で逸らし、首元目掛けもう一度振るった刃を、あるうことか手元を片手で握ることで受け止めた。

……強い。

「さすがですね」

「それほどでも？　ないけどね？」

話しながらも手を休めず。

打ち合う音は、その後も途切れることなく　。

「強いですね、部長」

「あははー、そりゃあ部長だからね？　まだまだ部員には負けられないってことだね？　ま、IS使われたら一瞬だけどね？」

胴着を片付けて、私は部長と共に外を歩いていた。

一時間以上も全力で打ち合っていた私たちは汗だくになっていたため、部室棟のシャワールームで汗を流した後、制服に着替えて外で涼みながら帰っているわけである。

ちなみに、試合の結果は私の負け。喉元に切っ先を突きつけられて降参した。

まだまだ私は弱い。だが、毎日とはいかずとも放課後に時間が空けばし合ってくれるということだったから、私はまだまだ強くなれるだろう。

「……入った頃とは随分変わったね？ 箒ちゃん？」

「そうでしょうか。……私は、まだ何も」

「そう思えるのが変わったということだね？」

私よりも背が低い部長だったが、よしよしと私の頭を撫で、ようとして届かなかったので私の膝に裏からケリを入れてきた。

「撫でられないんだね？」

「だからといって強引に屈ませようとしないでくれませんか。私倒れるので」

「じゃあしゃがむといいね？」

「はいはい」

あれほどの強者だったというのに、こうしていると本当に普通の女子学生だった。

……こういう普通の日々も、悪くないかな。

そう思った一時だった。

第75話 日常に戻るひとつ前（後書き）

両親の残した篠ノ之流の看板を背負い、失踪した姉の手がかりを求めて箒がやってきたのはIS学園。

その剣道部で紡がれるドラマ、そして部長と箒との間に隠された、驚きの真実とは！？

次回からは「剣戟少女『箒』」、始まるよ！

嘘だよ！ 始まらないよ！

ちよつと書きたくなつたからね！ やつちやつただけ！

っていうか部長のキャラ濃すぎじゃね？ 身長低めで某カエル顔の医師のような口調で箒より剣術強いとか。いや、いいんですけどね。ちなみに、部長はIS苦手です。生身じゃないと違和感あるわーって人なので。

よーし、次回から少し日常回書こうかな。ぜんぜんヒロイン押ししてないし。むしろ箒ばかり活躍してない？

第76話 少しでも変わってしまった日常

あの襲撃戦から数日が経って、学校はとても静かだった。

なぜかって？ そりゃ、あんなに大規模だった襲撃が外に漏れないはずがない。各国からの問い合わせや「おんどりやあ隠しとるとタメにならんぞ我エ」というちょっとした脅しによってあっさりと情報を漏らしたIS委員会のおかげで、襲撃情報は手を離れたボールの様にあっさりと零れてしまっていた。

そのせいで、それを知った親や各国政府が自分の娘や自国の代表候補生なんかを呼び戻す事態が相次ぎ、結果として学校に残っているのは日本や他の国の数少ない代表候補生、親が寛容な子たちくらいだった。

ちなみに、私たちの仲間内はみんな残っている。それぞれ圧力かけたりしてるみたいだけど……、大丈夫なんだろうか。

「香織、どうかしたか？」

「ああ、いえ。随分減ってしまったなと」

昼食時、閑散としている食堂で、私たちは食事をとっていた。

あの賑やかだった食堂も、いまではちらほらと人影が見えるくらい。その人たちも、広すぎるように感じる食堂のせいで騒ぐこともできずに、静かに食事をとっているようだった。

「まあ、仕方ないっちゃ仕方ないけどな」

「心配するのが親心というものだろうな。いかにISがあっても、全員が持っているわけではないからな」

「でも、なんだか寂しいね。人がいた時は騒々しいくらいだったけど、こうなっちゃうと」

一夏に続くように、箒さんと復帰したシャルロットさんが話す。

「ま、それを今アタシたちが話してもしょうがないでしょ。とつとと食べて、次の授業の準備しましょ」

それをバツサリと切って、ふーちゃんはかつ丼をががつと胃袋に掻き込んでいく。うん、あいも変わらずいい食べっぷりだ。

ちなみに、やけに日本人の多い我が一組はほぼ半数以上が残っている。そりゃ、専用機持ちが六人もいればそんなに怖くはないわな！。

なんて考えていると、突然私の背中にぼふっ、という重みが。

「ご飯中にお行儀悪いですよ、のほほんさん」

「んー、かおりんに最近抱きついてなかったからあ、エネルギー補給中なのだあー」

はしっ、と背中にしがみついているのほほんさんが、もぞもぞと私の顔の横に自分の顔を突き出してくる。ふんわりと、優しいシャンプーの匂いが漂ってきた。

「あれ、シャンプー変えましたか？」

「おおー、よくぞ気づいたあー。っていうかねえ、どうしてかおりんは私にだけ敬語が外れてないのかなあー？」

「なんだか、敬語じゃないといけない気がするので。嫌なら変えますよ？」

「んー、やっぱりいいやあー。んにいー」

むにい。

私の頬に自分の頬を押し付けたのほほんさんは、嬉しそうに笑う。まったくもう、この子ってば。

「……つかしいなー、負けた気がする」

「本音……ずるい……」

「ふむ、私も今度やってみるか」

……まったくもう、この子たちってば。
そう言っておけばいいのでしょうか。

「ただいま帰りましたー」

「ただいまぁー、そしておかえりいー」

「はい、ただいま。のほほんさん」

久しぶりに穏やかなその日を終え、私はのほほんさんと共に部屋へ戻ってきた。

のほほんさんは帰り道も私の背中に乗っていたので、今も乗りっぱなしだ。

「とおー」

ゆるゆると私の背から降りたのほほんさんは、のろのろと自分のベッドへダイブする。妙に滞空時間が長かった気がするのは気のせいなんだろうか。

なんて考えていると、のほほんさんが両手を広げこちらを見ていた。

「……えっと」

「おいでおいでえー」

にへらぁ、と笑って言うのほほんさん。……なんだか逃げたらいけないというか、逃げられない空気。

とりあえずおずおずと近くに座ると、のほほんさんははしつ、と私のことを抱きしめた。

「……あんまり、無理しちゃあだめだよお？」

「な、なんのことで」

「一杯泣いて、一杯痛い思いして、それでもがんばるんなら、せめて無理だけはしちゃ駄目。ゆっくり、ね？」

ぽんぽん、ぽんぽん、と私の背を手のひらで軽く叩きながら言うのほほんさん。

なんだかあやされている様なその感じが、不思議と嫌じゃなかった。なんだか、ほっとするような。そんな感覚だった。

「私は何にもできないけど……、それでも、こうしてかおりんと一緒にいてあげられるから。無理しちゃいけないよ」

「のほほんさん……」

同い年のはずなのに、なぜか彼女の方が一つの二つも年上のように感じる。お姉ちゃんと一緒にいるときは、また違う感じ。

「今日は、一緒に寝ようか？」

穏やかなその問いかけに、私は小さく頷いていた。

深夜を過ぎて、私は目を覚ました。

目の前には、可愛らしい寝顔を見せる友の姿。いつもぼろぼろになつて帰ってくる、どうしようもなくバカな、愛しい友人。

守りたいと思つた。守られるだけではなく、ただ私の本心から、守りたいと。

だから随分前になるだろう、篝さんにも酷いことを言つてしまつた。もちろん、あの後きちんと謝つて仲直りはしたけど。

私にはなんにも力なんてない。ISも持つていないし、せいぜい出来るとしたら整備くらい。

だけど、それでも香織を守りたい。あの笑顔を曇らせるなんて、したくない。

今はまだ力はない。だから、見守ることにした。

香織の帰つてこられる日常を私が続けていれば、香織はちゃんと帰つてくれる。その場所を、私が作る。

もしかすると、私が彼女に抱いている思いは何か別のものなのかもしれない。許されないものかもしれないけれど、それだつて構わない。

「……愛しているのかもしれないね、かおりん？」

ちゅっ、と。

私の口付けの音が、夜闇に溶けた。

「香織」

「え？ んうつ！？」

翌朝。

出会い頭にふーちゃんにキスされた。

「んあ、ふつ、あふつ……！」

「ぶあつ……、フフツ、どう？」

しかもディープな方を。

口元を拭ってニヤリと笑ったふーちゃんは、なんだかエロティッ
クな魅力に溢れていました。

……え、え？

「鈴も……！ か、香織！」

「は、はいんむう！？」

その様子を見ていた簪ちゃんに呼ばれ、慌てて振り向いたらまた
マウストウマウス。

っていうか簪ちゃん耳真っ赤ですが。大丈夫？

「だ、ただ、大好きっ！」

「あ、ありが、とう？」

「くっ、これほど先を越されるとは……！ 香織！」
「もう流れが見えたよんむっ！？」

溜め息すら吐かせてもらえずにラウラからもキスが来ました。
えっと、ですね、これどういう状況？

ああ、ちなみにふーちゃん以外はディープじゃありませんでした。

むしろ皆ディープで来たら怖いんですけどね。

「なんだかのほほんさんにとられそうな感じがしたからね！」

「唾、付けとく」

「先を越されるわけにはいかんからな」

堂々と言つてのける三人ですが、その理由で道の往来でディープキスやらなんやらかまさないでいただきたい！
と言つてもおそらく効果はないので軽く諫めるだけにした。

「まあ、ほどほどにね？」

「わかつてるわよ」

「多分」

「だな」

解っている上で破る気満々な三名でしたとき。

……いや、それも困るんだけどなあ。

「かーおーりーんっ」

「わっ！？」

と、突然背中に走る衝撃。

見ると、のほほんさんが背中に抱きついてきていた。

「んー、お日様の匂いだあー」

「干しましたからねー。はい、背中から降りてくださいね」

「はーい」

そう言つてピョンと飛び降りるのほほんさん、相変わらずのフットワークの軽さである。

降りたかと思ったら、今度は前から飛びついてきた。こう、首にぶら下がる感じで。

「おっとつと」

「へへー、かおりんたかーいっ」

「どうしたんですか、のほほんさん？　今日はなんだかいつもと違いますよ？」

「んふふー、かおりん？」

「はい？　っ！？」

突然、唇が触れ合った。

それだけでは飽き足らずに、のほほんさんはするりと舌を入れてくると私の口の中を蹂躪していく。

たったそれだけのことはすなのに、私は足の力が抜けて、ぺたりとコンクリートの上に座り込んでしまった。

のほほんさんはそれでもやめずに、キスを続ける。

徐々に息が出来なくなってきた、目の前が潤んで

「はい、おしまい」

「はあ、はあ……。の、のほほんさん……？」

目の前に立っている少女は、いたずらげにちろりと舌を出すと、彼女らしい柔らかな笑みを浮かべて走り去ってしまった。

……のほほんさん……。

……せっかく真剣になっていたのに、道の端で両手と両膝を突いてうなだれている三名の女子のことは、この空気と彼女たちの名譽のために伏せておこうと思った。

第76話 少しでも変わってしまった日常（後書き）

のほほんさんとのんびり回を書こうとしたらシリアスになっていった。

何を言っているの（ry。

そんな感じで、微妙に入れるかわからない日常編突入です。

第77話 準備（前書き）

戯言シリーズの成分が混入しています。注意。

第77話 準備

電気の消された寮の一室で、三人は集まっていた。

「さて、と。集まったわね」

「うん」

「ああ」

三者三様に頷くなりなんなりと返答する。

集まっているその場所は、鈴の自室。相部屋であつた谷津坂楓は親に呼び戻されて実家へ強制送還されているため、現在は鈴一人であつた。

楓が持つて帰っていなかった、ベッドの裏に隠していたお菓子類をこそごとひっぱりだすと、そのうちの一袋を開けてから再度座りなおす。

この場にいるのは、鈴、簪、ラウラの三人だつた。

わざわざ電気を落としカーテンを引いてまで雰囲気作りをした理由はと言えば、至極単純。

「それでは第一回、デートプランニング会議を開きます」

「どんどんぱふぱふ」

簪の相の手で、ぐいつと胸を張る鈴。無い胸で必死に自己主張しているところが悲しい現実だつた。

しかし、この場にそれを指摘するほど空気の読めない者はおらず、慎ましやかに会議は進行する。

この会議を開いた理由は全く持つて単純明快、香織と本音の仲が妙に進展しているように見えたからである。

ただそれだけだと言いたくなるものだが、恋する乙女たちにとって

は地球が滅ぶよりも大変なことであつた。

「なぜのほほんさんが香織とあんなに仲がいいのかは……、まあなんとなくわかるわ。アタシものほほんさんにはあんまりぎゃんぎゃん言えないし」

「本音は昔から、他人に好かれるタイプ……。でも、あんなに積極的なのは見たことない……」

「他人に好かれるタイプの人間が自分から行動しているということか。中々に強敵だな」

スナック菓子を摘みながら真面目腐った顔で話し合う三人。

しかし、本音のことを決して悪い意味での敵としては見ない辺り、彼女たちの人の良さが窺えるだろう。

「ということで、私たちも早急に動くべきよ。いくら許嫁と言えど、相手は寢所を共にしているわ。何か手を打たないと……」

「本音も、ライバル……？」

「だな。それで、具体的にはどうする？ ……寢床に潜り込むか」

「とても魅力的な案だけどナシよ。香織はそういうのに弱くはあるけど、もう少し関係を深めてからの方がいいわ」

「そうか……」

すでにやる気でいたのだろうか、ラウラはやや落ち込んだ様子で答える。

そんなラウラの頭を撫でながら、簪は鋭い視線を鈴へと向けた。

「鈴は、もう考えてあるんでしょ……？」

「ええ。だからこそこの会議名なのよ」

そう言つて鈴が持ち出してきた仮想ディスプレイに表示されてい

るのは、修飾された『デートプランニング会議』の文字。

「私たち三人、それぞれ一人ずつ香織とデートするのよ。順番はクジ引きで、週一回のお休みの日ごとに」

「香織の予定は大丈夫なのか？」

「しばらくは静養したいって言ってたから、予定は入ってないはずよ？」

「それなら大丈夫そう……。でも、どこでデートするの……？」

その簪の言葉に、鈴は指先でディスプレイを操作する。

修飾された題名が消え、そこには街全体の立体図面が投影された。

「本当はちよつと遠出したいところだけど、今までのことも考えてこの街でデートした方がいいと思うの。それに、ラウラなんかは街に馴染みが無いから新鮮でいいだろうし」

「でも……。香織の友達と会つかも……」

「だから、全員私服よ。キチンとコーディネートしなさいね？」

にやりと笑って見せる鈴とは対称的に、その言葉を聞いたラウラはあたふたと慌てだす。

「ま、まてっ！ 私は私服は一着しか持っていないぞ！？」

「なら明日にでも買いに行くわよ！ っていうかあのイブニングドレスみたいな服じゃ気軽に着れないわよね……。簪、一緒に行くわよね？」

「うん……。私もデートに向けて下調べしたいし……」

「し、しかし、私にお前たちを付き合わせるわけには……」

「友達でしょうが、いいってのよ！ それに、もしかしたら家族になるかもしれないんだから、今のうちに迷惑のかけ方覚えときなさいな」

「り、鈴……」

うるうると目を潤ませて呟いたラウラの頭を、鈴と簪と一緒に撫でる。それはさながら小動物と戯れる二人の少女のようだったが、残念ながらまたもや彼女たちを見ている者はいないのだった。

「よし、それじゃあ今日はこれで解散ね。明日の放課後に校門前で待ち合わせてことで」

「了解だ」

「らじゃ」

かくして、三人はそれぞれ自室へと戻っていくのであった。なんだかんだいって、香織がいなくてもこの三人はとても仲が良かったりする。

同時刻。

葵は一人BC本社へと出向いていた。

ワープ装置から出てきた葵を出迎えたのは、白い煙を立ち上らせるTシャツ姿のナターシャだった。

「ナターシャ……？　っていかどうしたのその格好は」

「お風呂上りよ。最近徹夜続きでお風呂もまともに入れなかったんだもの。ちょっと休憩。それに、束ちゃんに呼ばれてるしね？」

「そういうこと。二人とも、こっち来て」

執務室へと繋がる廊下だけが照らし出され、奥から声が響く。普段のどこか浮かれた束の声ではなく、落ち着いた年長者の声。

その声を追うように部屋へと入った二人の前には、いつものアリス姿で機械のウサギの耳をつけた束が社長椅子に座っていた。

「来てくれてありがとうね。とりあえず座ってよ」

そんな束の言葉に従って、二人は近くのソファーに相對するよう
に腰掛ける。

それを見届けた束は、つい、と指先を動かして仮想ディスプレイ
を呼び出した。

「あーちゃんを呼び出したのは他でもないの。例の擬似ISコアの
製作者、わかったよ。ナターシャちゃんにも教えておこうと思っ
てね」

そう言った束の顔が、いらだたしげに歪む。それは、果たしてど
んな感情によって歪められたものなのか。二人には判別することは
出来そうになかった。

そんな二人を尻目に、束はディスプレイに映し出されている情報
を切り替える。

そこには、葵が望んでいた情報があった。

「これは……！」

「擬似ISコアの製作者は一之瀬巖隆^{いわたか}。それだけが、コアの残骸の
情報蓄積層部分に残されてた。……知らせているつもりなんだろう
ね、自分を」

その名を目にした途端、葵の表情は一変した。
憎悪と憤怒を浮かべてソファアの革部分を握ると、我慢できないようにぐっと握り締める。それだけで、中に握り込まれた革はばらばらに潰れ砕けた。

「巖隆……！ やっぱり生きていたのか……！」
「……お父さん、みたいね」

事情を察したのか、ナターシャは辛そうに眉を寄せてそう呟く。
ひたすらにその名を睨みつけていた葵も、その声でふっと気配を消した。

「……ごめんなさい、見苦しいところを」
「構わないわよ。誰にだってそういうところはあるもの」
「まあ、そのことを頭に入れておいてね。……これは、ひよつとしなくても戦争になるかも知れない。《狐と鷹の大戦争》以来の、ね」

《狐と鷹の大戦争》、《大戦争》と略されることもあるそれは、かつて《人類最悪》と《人類最強》が繰り広げた壮大な戦いのことを指している。

最高に最悪な暗部《殺し名》や《呪い名》達に、日本財政界のトップたる《四神一鏡》、財閥家系の最上モデル《玖渚機関》に多大な損害を与えた大戦争であり、その傷跡は今なお一部に残っている。

「……それほどのことに？」
「……ワールド・ウォー」
「《世界大戦》なんて比べ物にならない。本当に戦争をするなら、こちらもそれなりに支度をしなければならなくなる」

そこで言葉を区切り、束はそこで初めて嗤った。
凄惨に、唾棄すべく、下劣に、歓迎すべく、壮絶に、蹂躪すべく、

嗤った。

《人類最低》、篠ノ之束。その笑みが持つ意味を読み取ることは叶わずとも、そのおぞましきだけはひしひしと伝わる。

その中で、葵は平然とした表情で立っていた。

「なら、早めに始めましょう」

今度こそ、殺そう。この手で。

その言葉を受けて、ウサギは、頷いた。

時間は流れて翌日の放課後。

鈴たち三人は念のために私服でIS学園の入り口にやってきていた。

鈴は大き目のカーキのパーカーに黒いTシャツ、薄い青のジーンズに大き目のバックルの白いベルトを締めている。

その横では簷が普段着ている茶色のTシャツにフリルをあしらった長いスカート、シャツの上にはオレンジのダウンジャケットを羽織っていた。

「なるほど、こういうのもあるのだな」

「アタシのちっちゃくない？」

「いや、大丈夫だ。暖かいぞ」

「そ。よかった」

そうだった鈴の目線の先には、鈴から借りた暗めの若草色のサフアリジャケットを上に着て、シャルロットと共に夏に購入した服一式を身に纏っているラウラがいた。

所在なさにそわそわしていたラウラだったが、時折嬉しそうにジャケットに顔を伏せている。

「香織の匂いはしないわよー？」

「あ、いや、そういうわけでなくな！？　ちよつと、その……」

「別に、変とか思わないから、大丈夫……」

「そ、そう、か？　……うむう……」

ラウラの着ているジャケットは、鈴が香織からお下がりで貰い受けたものだった。どうせならと言うことで経緯込みで聞かせてもらってから借りたため、ラウラは時折ジャケットの匂いを嗅ぐように顔をうずめることがあった。

傍から見れば服の臭いを確認する少女に見えなくもないし、鈴も簪もラウラの行為を否定できるほどではないのは自覚しているため、特に苦言を呈する者もいなかったのである。

「よし、それじゃあカジュアルショップにでも行きましょうか。

今年は冷えるって言ってたからねー、暖かいやつ買いましょ」

「資金には事欠かんからな」

「久しぶりのお買い物……」

そんな三人のお買い物の結果は、また後日。

第77話 準備（後書き）

二つの意味での準備開始！

果たして、束のいう戦争とはどういうものなのか。
とうとう現れた葵と香織の父親、その目的とは？

そして三人のデートのご予定は！？

次回も乞うご期待です！

第78話 デート 簪編

時間はさらに流れて、土曜日。

食堂で夕食をとっていた香織の元に訪れた鈴たちは、いつものように食事の乗ったお盆を手に香織の近くに座りこんだ。

「お疲れ様、香織」

「うん、お疲れ様ふうちゃん。簪ちゃんも、ラウラも、お疲れ様」

「うん……」

「ああ、そっちな」

互いにそんな話を話して食事の続けながら、突然鈴が話題を切り出す。

「香織、アンタしばらくはゆっくりするのよね？」

「うん、そのつもりだけど……？」

「じゃ、明日の日曜日から毎週、アタシ達と順番でデートね」

「……はい！？ ちょ、なに、どういうこと！？」

突然話されたそれについていけずに目を白黒させる香織だったが、それに構わずに鈴たちは香織を見据えてさらに続ける。

「ちょっと相談したんだけど、アタシ達って許嫁なわけじゃない？

ならそれなりに触れ合いを持つべきだと思うのよ」

「だから、デート」

「順番は既に決めてあるから、あとは香織の都合だけだぞ」

「え、ちょ、ええっ！？」

にこやかに話す三人とは対称的に、何が何だかわかっていない香

織はパニックになりつつもなんとか言葉を探す。

幸いだったのは、比較的遅い時間のため食堂に人影はほとんどなかったことだろう。

「あ、えつと、うん。わ、わかった。僕はいい、よ？」

「香織、一人称戻ってるわよ」

「あ、ご、ごめん……」

周囲に人がいなかったため、鈴は周囲を見回してほっと一息ついてから更に言葉を続けた。

「さっきも言った通り、順番は決めてあるわ。明日の朝九時に学園入口に私服で集合すること、オッケー？」

「わ、わかった。でも、友達に会ったらどうするの？」

「同じ学校の友達とでも言っときなさい。後は……、葵義姉さんの決めた許嫁って言っとけば大概は大丈夫よ」

一之瀬葵という存在は彼女たちの中でどうなっているのかと考えそうになったが、それを考え出すと三日三晩程度では終わらない気がしたのであえて考えないことにした。

「それじゃ、私たちはこれでいくわね。明日楽しみにしてなさいな」

「う、うん。それじゃあね、お休み」

「おやすみ……」

「ああ、良い夜を」

鈴たちが去った後、香織は一人中空を見つめていた。

その様子はどこか絵になっているものではあったが、その様子を見た生徒たちは皆「疲れ切った眼をしていた」と語っていたという。

翌朝。

私、いや僕は普段通りＴシャツにジャンパー、ジーンズにスニーカーという姿で校門の前にやってきていた。
相手は後から来るって言ってたけど……。

「香織、待った……？」

そんなことを考えながら待っていると、突然後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこには胸元にワンポイントのロゴが入った茶色のＴシャツにオレンジのダウンジャケットを羽織り、茶色のジーンズを履いている簪ちゃんが。

……惜しい、なんかジーンズの辺りがすごく惜しい！
って、そうじゃなくて。

「あ、ううん、大丈夫。今来たところだから」

「そ、そう……？ 変じゃない……？」

「大丈夫、かわいいよ」

「えっ……！？ か、かわいい……？」

「うん」

ぼふんっ、と顔を真っ赤にする簪ちゃん。あれ、僕何かへんなこと言っただけかな？

「あ、ああ、ありがとう……！」

「どういたしまして。さてと、ここでボーっとしててもアレだし、早く行こうか。案内してくれるんだよね？」

「う、うん！ 任せて……！」

拳を握り込んで頷いた簪ちゃんに手を引かれ、僕は久しぶりに『僕』として外に遊びに行くこととなった。

本当に久しぶりである。

それにしても、なんでいきなりデートなんだろ。ちょうど一段落してるし、落ち着いてるときにつてことなのかな。

まあ、一夏ほど朴念仁であるつもりもないし、好意を向けられているのは解ってる、というか表明されたし。

……難しいこと考えずに楽しめばいいのかな。

そんなことをぼんやりと考えながら、じつと僕の手を見つめる簪ちゃんを眺めつつモノレールから降車。

「つと、はぐれたらアレだし、手、繋ごうか」

「え！？ あ、う、うん！」

ぎゅつと僕の右手を掴んだ簪ちゃんは、嬉しそうに頬を染めながらはにかんだ。

「ところで、どこにいくの？」

「えっと、香織はこの辺よく知ってる……？」

「そうだね、昔から良く遊んでたし。でも最近は来れてないから、新しいお店とかは解らないかも」

「えっと、それじゃ……」

あまり強くはない力で僕の手を引いた簪ちゃんの足が向いたのは、

割と大きなゲームセンター。

その中でも一際大きな筐体に向かっていった簪ちゃんの雰囲気が一変する。

「あれって……、IS/V S?」
インフィニティヴァルサトスカイ

「私の、一番の特技。誰にも見せたことないから……」

香織が初めてだよ。

言ってから、簪ちゃんは明るく微笑んで筐体の前へ座り込む。しばらくしてから、その空気が徐々におかしくなっていくた。

何事かと簪ちゃんの傍に近寄って見ると、そこには「アイ・サズナック」という名が表示されていた。

「おい、まじかよ……!」

「表記も全く同じ……、マジもんだぜ!？」

筐体の周囲で話していた青年たちが、途端に筐体に目線を釘付けにする。

目線を辿っていくと、そこにはハンドルネームの横のランキングの数字が記されていた。

その数字は、

「ランカーズ?、最初の五人の一人が、なんでこんなところに?」

「んなこたあどうだっていい! あのランカーズと戦えるチャンスなんて滅多にねえんだ、俺はやるぜ!」

「お、俺もだ!」

「私も次入るわ!」

突然がやがやが広がる。あっという間に熱はゲームセンター中に

広まり、なぜか店員は実況まで始めていた。

「これは、一体……？」

「若いの、彼女を知らんのかな？」

状況に困惑していると、近くにいた腰の曲がったおじいさんが突然話しかけてきた。

「え？ 友達ですけど……」

人の良さそうな、和服を着たおじいさんはそれを聞くと、楽しそうに笑った。

「ほっほっほ、なるほど。ではよくお聞き、彼女のハンドルネーム「アイ・サズナック」というのは、わし等VSゲーマーの中では神、そして越えるべき壁として存在しておるのじゃ」

「壁……？」

「うむ、ちよいと昔の話になるが、聞く気はあるかな？」

「あ、はい」

ゲームを始めた簪ちゃんの視線は鋭く、戦闘時とまるで変わらない集中力を見せている。

「っていうか、ゲームの中素人目に見てもワンサイドゲームじゃありませんか？」

「このゲームが発売された当初、あらゆるバージョンで無類の強さを誇る者達がおった。彼らの尽力のおかげでVSはあらゆる枠を超えて楽しめる最高のゲームとして認められ、こうして世界に普及するに至ったのじゃ。無論、家庭用では各国のバージョンごとに性能が変えられた機体が使われておるが、この筐体版、俗に全世界版と

呼ばれる方は違う。全ての機体がそれぞれの持ち味をそのままに一定ライン以上まで性能を引き上げられ、万人に楽しめるゲームとなっておる。その中でも最強を誇るのが、『最初の五人』と呼ばれる上位ランカーなのじゃよ」

長いお話でした。

要するに、簪ちゃんは最強のプレイヤーの一人としてこのゲームの普及に協力したってことかな。……まった、このゲームの発売って四年前だよな？ 小学校のときくらいからやってるんだ……。

「彼女、「アイ・サズナック」の特徴はその恐ろしいまでの機動予測じゃ。相手の動きに合わせるのではなく、相手が次に行く動きに必ず合わせて行動する。故に相手は自分が彼女の術中に嵌っていることにも気づかずに落とされる、というわけじゃ」

そんな話をしている間に、並んでいた数人のゲーマーたちは軒並み倒されたらしい。……あの、ノーダメですか。このゲームやってるけど初めてみた……。

嬉しそうに小さくガッツポーズを見せた簪ちゃんが、嬉しそうにこちらを振り向く。

「凄いね、簪ちゃん……」

「昔からやってたから。……変？」

「ううん、凄いよ。僕もやってるけど、ぜんぜんレベルが違うし、自慢していいと思うよ」

素直にそう思った。

途中でちらちら画面を見ていたけど、見たことないようなコンボが次々に繋がっていた。あのレベルに達するには一体どれほどやりこめばいいのか、気が遠くなりそうだったくらい。

だから、多分。それぐらいのものなら自慢しても誰も笑わないと思うのですよ。

「……香織、今から帰ってゲームする？」

「え、でもいいの？」

「うん。外で遊ぶより、そっちの方が多分、楽しいから」

そう言うてはにかんだ簪ちゃんはとっても綺麗で、なんだか勝った女性というのは美しいものだ、そう感じた。

「……勝てない」

「えへへ……」

その後、部屋に戻った僕と簪ちゃんは、制服に着替えてから簪ちゃんの部屋でゲームに興じていましたのです。

もちろんソフトはIS/VIS、内部情報は簪ちゃんが全世界版と全く同じに調整した仕様。ちなみにこのタイプは来年にでも全世界版として発売されて、これからは世界大会も開かれるんだそう。で、戦ってみた結果がこれ。

一一七戦、一一六敗、一引き分け。最後の一回で何とか引き分けた。……それでも余裕そうな辺り、まだまだ本気じゃないんだろう。ちなみに、簪ちゃんも僕も『打鉄』を使っていたけど、コンボも機動もあらゆるものが上だった。やっぱり、実際に戦うのとはぜ

んぜん違うな。

「でも、なんだかいいな。こういのの」

「え……？」

「休日に二人でゲーム三昧って、意外と楽しいね」

「あ、う、うん……！」

僕の腕を掴んで嬉しそうに笑った簪ちゃん。

デートとは言えないかも知れないけど、簪ちゃんの新しい一面が見られたので、満足といえば満足です。

「じゃあ……もう一回……」

「お、おー……」

結果、この日僕は二三八戦、二三六敗、二引き分けた。

……強すぎだよ、簪ちゃん。

第78話 デート 簪編（後書き）

出かけるよりゲームしましよになった簪ちゃん。

IS/VISの中でも最強の一角だと言ったことが発覚しました。

『最初の五人』はACから名称をお借りいたしました。

さて、次回は……？

第79話 デート ラウラ編（前書き）

最後の方にネタを仕込んでしまった。

第79話 デート ラウラ編

時間は更に流れて翌週の日曜日である。

とりあえず先週と同じ服装でES学園の入り口で待機。……そろそろ一〇月も半ばだからなあ、ちよつと冷えるかも。

「待ったか、香織？」

「あ、ラウラ。ううん、今来たところ」

なんて考えていると、またもや後ろから声をかけられた。振り返りながらそう答え、やってきたラウラの姿をその目に収める。

灰色のキャスケットを深めに被り、薄いカーキのダッフルコートを上纏っている。茶色のロングブーツを履き、スカートは膝上までの短い黒を使っていた。

「ん、どうした香織。何か変か？」

「あ、ううん。綺麗だなと思って」

「き、綺麗！？ 私がか……！？」

「うん。とっても似合ってるよ」

すぐそばにやってきたラウラは、耳を赤くして俯いてしまった。先週も同じ光景を見た気がする。

「あ、ありがとう……」

「はい、どういたしまして」

お礼を言つと、ラウラは嬉しそうな笑みを浮かべて頬を染める。なんていうか、年相応な姿だと安心するなあ。

そんなことを考えながら、僕はそつとラウラの手をとる。外の冷気に中てられてか、その手は早速冷たくなっていた。

「あ……」

「寒いでしょ？ 今日はすごく冷えるって言ってたから」

「ああ。……暖かいな、香織は」

「ありがと。さっ、早くいこう？ どこか回るの？」

「うむ、実はな……、特に決めていないのだ」

そう言つと、ラウラは僕のことを上目づかいに見上げると、小さくはにかんで言う。

「私はこの辺りのことはよくわからん。だから、香織が案内してくれないか？」

「え、でも、いいの？」

「私が案内するよりよほど楽しめるだろう。なにより私は満足に知識がないまま戦場を歩き回るのはしないぞ」

「そ、そう……」

例えばアレだけど、要するに不安だということらしい。

僕は小さく頷くと、少し強めにラウラの手を握る。はぐれたら大変だし。

「ラウラは、神社とかは好き？」

「ああ、日本の文化は総じて気に入っている。あの何とも言えぬ味わいが好きだ」

「それじゃあ、年末年始に必ず行ってる神社があるから、そつちに行かない？」

「うむ！」

大きく頷いた拍子にキャスケットが飛び降りかけ、それを慌てて押さえる。

それから、僕らは二人で近所の神社へと歩き出した。

その神社はIS学園からモノレールで街に戻り、そこから少し歩いた郊外にある。名前もわからない寂れた神社だけど、僕はよくお姉ちゃんに連れられて行っていた。

友達とよく遊んだ場所でもあるけど、最近の子はあまり近寄らないらしいと聞く。

「はい、到着」

「なんだか、寂れたところだな……」

「でも静かで気持ちいいんだ。ほら、こっち」

呟きながらも街の喧騒が嘘のように消えていることに驚いているラウラの手を引いて、神社の裏に回る。

そこには、不器用ながらも手作りされた小さな扉が神社の下、人の手で掘られている階段の突き当りにあった。

「これは……、塹壕か何かか？」

「あはは、違うよ。これは僕らが小さい頃に作った秘密基地。僕とふーちゃんと、友達二人で」

「秘密基地か……！ 何だかわくわくしてくるな！」

事実を教えてあげると、ラウラは途端に目を輝かせてくる。

やっぱり秘密基地とかそういうものが好きだったらしい。僕の勘は当たっていたようだ。

「入ってみる？」

「いいのか！？」

「うん、もちろん」

そう言いながら、ラウラと一緒に扉の中に入る。

中は割と広かったけれど、それでも僕は少しだけ屈まないと頭がぶつかってしまいうくらいの広さだった。

「おお、なかなか広いな」

「ふーちゃんと友達の一人が張り切っちゃって。脚立まで持ち出してきたからね」

最初はシャベルだけでやっていたけど、だんだん本格的になってきて、最終的にはここで一夜を明かせるくらいまで改良していったのである。

中にはたくさんの小物と内部を掘り進めたりするための道具があった。その中の一つ、壊れかけているランタンを手に取ったラウラは、につ、と笑った。

「これは、まだ使えるな」

「え？ でももう壊れてるよ？」

「そう見えるだけだ。見えているといい」

そう言っただけから大きめのアーミーナイフを取り出すと、ドライバーで内部をふさいでいるふたのネジを外し、ナイフで中を弄っていく。

それにしてもごつついナイフだなあ……。ラウラってあんなの使ってるのかな。

「……よし、出来た。つけるぞ」

ラウラはそう言っただけから今度はオイルとジッポライターを取り出すと、ランタンにオイルを入れてから火口に火をつける。

すると、あっという間に火がついてしまった。凄いな、直るんだ。

「あとは掃除すればまだ使えるな。香織、これはどうする？」

「そうだね……、持っていてもしようがないし、ラウラが欲しいならあげるよ？」

「いいのか!？」

「あ、うん」

僕が頷くと、ラウラは嬉しそうにランタンの火を消してISの格納領域へと放り込んだ。

ただのランタンだけど……骨董品とか？ いや、それはないか。

「そういえば、ラウラってあんなに太いナイフ使うの？」

「いや、アレは隊員から送られてきたものだ。これからは、私も部下との意思疎通をきちんと図ろうと思って……。話しているうちに色々送られてきた」

「そ、そうなんだ……」

でもまあ、仲良くできることはいいことだね、うん。

だからと言ってアーミーナイフを贈り物にするのはどうかと思うけど。

「今度、鈴と簪もつれてもう一度ここへ来ないか？ お前と一緒に

いられるのは嬉しいのだが、楽しいことは皆の方がいい」

「ラウラ……」

「……よし、では次にいくぞ！」

照れを隠すようにコートの襟に顔を埋めたラウラは、そう言って外へと出て行く。

それを追って外に出ると、ラウラの後に続いて少しばかり足早に

歩いていった。

それから少しの間、二人して特に喋ることもしないまま歩いていったけれど、ふと気が付くと川縁の土手にまでやってきていた。

「ラウラは、土手は初めて？」

「ああ。いいものだな、心地いい景色だ」

草に座り込んだ僕とラウラは、ぼーっと夕日を見つめる。
そうか、もうそんな時間だったんだ。

「香織」

「なに？」

「……この景色を、私は守りたいと思う。お前と、皆と、そしてこの景色と、全てひっくるめて守ってみせる」

呟くように言ったその言葉は、大気に溶けていく。
ぐっ、と、ラウラが拳を握りこんだ。

「……正直言つて私は、まだ色恋というものはよくわからん。だが、その、なんだ。お前と一緒にいると心が温かくなる……。皆一緒だと、もっと温かくなるんだ……。だから……」

そう言ったラウラに、もう最初の頃の面影は残っていなかった。
人として生き、願いを見つけた一人の少女。そう見える。

「香織。もし私が色恋をわかって、そのときまたお前に恋すること
があれば、お前を愛することがあれば。その時は、もう一度告白さ
せてくれ」

「……うん。待ってるよ、楽しみにしてる」

「そうか……、ありがとう」

少しだけ笑い、それからラウラは跳ね上がるように立ち上がった。

「お、アイスクリーム屋があるぞ？ 香織、食べるか！」

「でも今日寒いよ？」

「寒くなったならくつつけばいいじゃないか」

「まったくもう。お腹壊さないようにね！」

「わかってる！ よし、行くぞ！」

一目散に駆け出すラウラの後を追いながら思った。
こんな日常も悪くないな、なんて。

「ち、ふ、ゆ、さーん！」

「夜なんだから静かにしろばか者！」

「うきゅっ！？ ご、ごめんなさい……」

「それで？　今日はどうした？」

「一緒に寝ましょ！」

「……お前な」

「だめ……？」

「……わかった、わかったからその顔で見つめるな！」

「わーい」

ラウラたちが帰宅した後の寮長室の様子であった。

「織斑先生×生徒会長……、先生がまさかのネコ！？　いけるわ、いけるわあああ！」

そしてその電波を受信したのが、一時期一夏×シャルロット（男装版）で本を出していた生徒だったことは、その本が寮内に出回る来年になってわかったことであった。

第79話 デート ラウラ編（後書き）

はい、最後の方はほんとすいませんw
どうしても電波が、ね？
しかし恋愛って難しい。

第80話 デート 鈴編（前書き）

今回でデート終了です。これだけで三週間が内部時間で経過中。

第80話 デート 鈴編

「さあ、いくわよ!」

「あの、まだ八時なんですが……」

更に翌週。

校門にまで僕を引っ張ってきたふーちゃんでしたが……、現在時刻午前八時。予定時刻より二時間も早いのです。

そんなふーちゃんは、少し大きめの茶色のパーカーに深い緑のTシャツを着て、バックルの太い白のベルトをジーンズに通している。薄い黒のレンズが入った細見のサングラスがまた似合っていた。

「ん、これ? 顔バレ防止よ」

「ああ、そういえばモデルとかやってるんだっけ?」

「今はもうやってないけど、その分ばれると面倒だしね」

薄く笑ったふーちゃんは、頭にかぶったフードをとってから僕の手に自分の手を絡める。

「とりあえず買い物行きましょ」

「わかったから、少しゆっくりいこうよ。まだ八時だよ?」

「はいはい。っていうか、この前秘密基地行ったのよね?」

「なんで知ってるのさ?」

「一昨日ラウラに教えてもらったのよ。嬉しそうにランタン抱えてね」

ラウラ、そんなに嬉しかったんだ……。

僕もプレゼントくらい買っておくべきかな。

「まあ、それはさておいて。買い物行くわよー」

「え、秘密基地の話は……?」

「したかっただけよ」

「さいですか……」

道を歩きながらそんなことを話している僕らの目の前に、突然人影が。

「わっ!?!」

「きゃあっ!?!」

「おっとおお!?!」

避けきれずにぶつかってしまったふーちゃんとその人はぐらりと揺れ、それに引つ張られて僕も後ろへ倒れていく。

頭をぶつけるのは回避できたけど、その分したたかに体を打ち付けてしまった。

「いたたた……」

「つつうー……、あの、大丈夫ですか?」

「あ、は、はい、すいません……。そちらの方は大丈夫ですか?」

「平気よ平気。それにしても、そんなに焦ってどうしたの?」

全員がそれぞれに声を掛けながら立ち上がると、ぶつかってしまった人を見る。

赤毛の目立つ制服の子だけど、少しそわそわしているようだった。
ん、この子どこかで……?

「実は、友達とはぐれちゃって……。あの子方向音痴だし、ここ三回くらいしか来たことないんです」

「……あれ、蘭？」

「え？　なんで私の名前……」

蘭、蘭……、ああ！　この前一夏の誕生日会にケーキ持ってきてた子か！　すごいすつきりした、思い出せなくてもややもやしてたからね。

けど、件の蘭ちゃんはふーちゃんのことからずいぶん頭の上にハテナマークを躍らせている。

その様子を楽しそうに見つめながら、ふーちゃんはサングラスを外した。

「ばあ、アタシよ、蘭」

「り、鈴さん！？　わ、すごい……全然気付かなかった……。あの、こちらの方は……？」

「一之瀬香織、私の幼馴染よ。ほら、誕生日会の時にいたじゃない」

「……ああ、す、すいません！　あの時は、その……」

僕が誕生日会にいたことを思い出した蘭ちゃんは、わたわたと頭を下げながら言うてくる。

「いいよいいよ、あの時は一夏一直線だったみたいだし」

「あう……」

「改めて、一之瀬香織です。よろしくね、蘭ちゃん」

「あ、は、はい！　五反田蘭です、よろしくおねがいしますっ！」

顔を真っ赤にした蘭ちゃんが、取り繕うように大声で答える。その様子がなんだか初々しくて、僕は思わずくすりと笑ってしまった。

「ま、それはともかく。友達探してるの？」

「あ、は、はい。あの子本当にいろんなところに行っちゃって……」

「しょうがないわね、皆で探せばすぐに見つかるでしょ」

この時間なら空いてる店少ないし、と続けたふーちゃんのことを、
びつくりしたような顔で見つめる蘭ちゃん。

すると携帯端末を取り出すと、蘭ちゃんへ突き出した。

「ほら、画像持ってたら送って。早く探さないと、お店開いちゃうよ」

「でも、いいんですか……？」

「いいわよ、遠慮しなくても」

「じゃ、じゃあお願いしますっ」

「私も手伝うよ。いいかな、蘭ちゃん」

「は、はいっ！」

困っている人を放ってデートなんて、ちょっと後味悪いしね。

ふーちゃん経由で画像を受け取った僕は、それを頭の中に叩き込んでおく。さて、どこに行ったのやら。

「それじゃ、私は西のほうを探してみますね」

「アタシは東行ってみるわ。蘭は北をお願い」

「は、はいっ！　お願いしますっ！」

もう一度ばさっ、と頭を下げた蘭ちゃんへ向けて、僕らはそろって笑みを返していた。

それから少しして、僕はショッピングモール『レゾナンス』の中を走り回っていた。

そばに浮かんでいる仮想ディスプレイには、蘭ちゃんの友人の画像が映し出されている。

それにしても、一体どこへ行っただろうか。大体探したけど、残っているのは路地裏辺りだ。

この辺りは観光名所でもあると同時に、ここからつながる路地裏は不良やちよつと危ない系の人たちの溜まり場になっている。僕は大丈夫だけど、他の人が行くと危ないかな……。

「……一応行っておくか」

路地裏へ踏み入ろうとしたところで、突然端末から着信音が鳴り響いた。

『レゾナンス』自体は早い時間帯からやっているけど、人はそんなに来ていない。九時近くになった今でも、来ているのは店員さんくらいのものだ。

だから、そんな伽藍堂のモール内に響き渡った着信音が妙に物悲しくて、僕は二コール目に入る前に端末をとった。

「もしもし」

『あ、香織？ ごめん、デートだったのに勝手に引き受けて』

『ううん、いいよ別に。困ってる人を見捨てられないもんね』

『終わったら喫茶店に入りましょ、まだまだ朝早いんだし』

『うん。それじゃ、見つかったらまた』

ぶつつ、と音声切れる。

端末をしまいこむと、気を改めて路地裏へと一步を踏み入れた。

空調の利いているモール内と違い、路地裏に空調設備はない。そのせいか、どこかじめじめとした空気が漂っていた。こんなところに来ているとは思えないけど……。

「美雪^{みゆき}さん、いませんかー!？」

かー……。

反響するも、返事はない。

やはり杞憂だったかと踵を返そうとした直後、ごくごくそと物音が聞こえた。

「誰かいるの!？」

「んー……、だあれえー……?」

「……ん!？」

声は、奥の段ボールの塊のあたりから聞こえてきていた。

どこか聞き覚えのあるその声の主を探ろうと、折り重なっている段ボールを剥いでいく。

一〇枚と少しの段ボールをすべて排除すると、そこにいたのは……、メイド喫茶『@クルーズ』の店長さんだった。

「あらあー? お嬢様あー」

「うわっ……、酔っぱらってるの?」

「あははー、おひやけのんれまーすう!」

「しかも泥酔状態……。ほら美華^{みか}さん、起きて」
「んにゅうー……」

口元から涎を垂らしながら酔っぱらっている店長さん、藤島美華さんを引っ張り上げると、腕をこっちの肩に回して担ぎ上げる。と、美華さんが仮想ディスプレイに表示されている画像を見た

たんに目を見開いた。

「み、美雪！？ お嬢様がなんで美雪のことを！？」

「まってまって、どういうこと？ 美雪さんのこと知ってるんですか？」

「美雪は、私の妹よ！ 美雪になにかあったの！？」

なんと、美華さんは美雪さんのお姉さんだったのか。確かに、言われてみれば目元とか似てるな。

って、そうじゃないそうじゃない。

酔いが完全に醒めた美華さんの肩を掴んで、視線を合わせて口を開く。

「落ち着いてください、美華さん。美雪さんはお友達と来ていて迷子になっただけです。僕は今、その子を手伝って美雪さんを探してるんです」

「そ、そういうことだったの……。よかった、美雪に何かあったのかと……」

ようやく息を吐き出して安堵のため息もついでに漏らした美華さんは、どさっとその場に座り込んだ。

「で、なんでこんなところで寝てたんですか？」

「んー、昨日従業員の皆と飲みに行って、皆ぐでんぐでんに酔っぱらって散り散りに帰ってたのよ。だから、そのせいじゃない？」

「はあ……。それじゃ、僕はまた美雪さんを探しに行きますから。美華さんは早く家に帰ってくださいね」

「でも、私も探さなくていいの？」

「『@クルーズ』はどうするんですか？ 僕らが見つけておきますから、大丈夫です」

「そ、そう？ それじゃあ、頼んだわね」

お願いねー、なんて叫びながら走って行く美華さん。さっきまでぐでぐでんだったのに元気ですね。

さて、それはさておいて美雪さんを探さなければ。

こつちにはいないようだし、一体どこに。

「きゃっ、いや、放して！」

「うつせえな、とつとこいよ！」

声が聞こえた直後、僕は駆け出していた。

美雪さんらしき人影が、大柄な男にその細い手首を掴み上げられているのを視界に収めると、一気に加速してその手を素手で打ち払った。

パァン、と高い音が響く。

「ぐっ！？ なんだよテメエ！？」

「嫌だつて言ってるんだから、放してあげなよ。今消えれば酷いことはいないから」

「ぶざけやがつて、ぶっ殺してや」

最後まで言わずに中心線に沿って掌底を打ちはなっていく。

一撃一撃に全体重の七割ほどを乗せているため、そのダメージは目を覆うようなものになっているだろう。

内臓にも酷いダメージを負わせているだろうけど、そんなことは僕の知ったことじゃないね。

「がはあっ……！」

「ぶっ殺してやるっていう言葉は、終わってから使うものですよ。君、大丈夫？」

「……………」

「あの、大丈夫？ どこか痛い？」

「え？ あ、ああ、大丈夫です！ あ、ありがとうございます！」

頬を紅潮させた少女は、ほっとしたように笑みを浮かべる。

制服は……どこだったか。確か結構レベル高い学校だったと思うんだけど。

「道に迷っていたら突然連れ込まれて、どうしようかって……」

「ってことは、君が美雪さんでいいのかな？ 蘭ちゃんから頼まれて探しに来たんですよ」

「え、蘭ちゃんのお知り合いの方、ですか？」

「彼女の思い人の友人です。いま連絡しますね」

軽くウィンクを返してから、端末で蘭ちゃんに繋いだ。

『もしもし？』

三コールの半ばくらいで繋がった回線の向こう側で、蘭ちゃんの声がした。

「えと、香織です。美雪ちゃん見つかりましたよ」

『本当ですか！？ 今どこに！？』

「西区画の……、ハンバーガーショップの前。待ってますね」

『わかりました、すぐ行きますね！』

音の切れた端末を操作して、ふーちゃんにも同様の情報を伝える。それから十数分後、二人してやってきた蘭ちゃんとふーちゃんはほっとした表情を浮かべていた。

「もうすっかり夕方ねー」

あの後、美雪ちゃんの手をはしつと握って遊びに出かけていった蘭ちゃんを見送り、僕らも元々予定していた喫茶店に入って少し休み、そのあと映画を堪能していた。

映画館と一緒に入っている小さなゲームセンターでクレインゲームを堪能してから出てきたときには既に日も大分暮れていたから、そろそろ帰ろうかという話になっていた。

「でも結局、デートらしいデートってやらなかったなあ」

「……それがアタシ達ってことじゃない？　少しあせってたのかもね」

明るい笑みを浮かべてそう告げるふーちゃん。

何をあせっていたのかは解らないけれど、それでも皆と過ごす時間には楽しいと再認識して。

「さて、帰りましょうか！」

「そう、だね」

この人たちが一緒にいてくれることが、本当に幸せなことなのだと、そう感じた。

そしてそれから幾許かの日が過ぎ、世界は悲鳴に包まれることとも、その時はまだ知らずに。

第80話 デート 鈴編（後書き）

不穏な引きと共に終了した今回でした。

……誰一人としてまともにデートしてない。と言っか鈴が一番不憫か？

やはりラブコメは書き難いです。

第81話 変わりゆく世界（前書き）

つつーことでオリジナル展開に突入。
お楽しみにね！

第81話 変わりゆく世界

普段通りの風景、普段通りの会話、普段通りの命。

そんなものは、一瞬で崩れる。それを知らないものたちは、戦争を知らないものたちでもある。

ファントムタスク

亡国機業は、そんな世界への憎悪が作り出した、亡き国を想う者たちの力。

「さあ、始めましょう。私たちの思いを知らしめるために」

日本から二〇〇キロほど離れた海の上で、それは始動していた。全長横幅五キロ、縦幅四〇メートル。巨大なバーのようなその中心核となっているのは擬似ISコアだった。

その中の操縦区画の一つにいたスコールは、静かにコンソールへとその手を伸ばす。

「主砲発射準備」

その言葉に、全面に浮かんでいる仮想ディスプレイにカウントダウンが表示される。

周辺には誰もおらず、ただスコールが一人いるだけ。それだけで、この巨大なISは動かせた。

「逝きましょう、『ファントム』」

『二、一……、主砲発射』

カウントダウンが終わる。

直後、直線状にあった一つの町が、消えた。

圧倒的なエネルギーの奔流に包まれ、瞬く間に消滅していくそれ

を眺めながら、スコールは唇を歪め笑う。

「充填率三パーセントではこの程度ね。皆、準備はいいかしら？」

『おう、いつでもいいぜ』

『やるならば早くしろ……、長くは持たん……！』

『あらあら、せっかちさん。いいわよ、スコール』

総勢、四名。それがこの巨大すぎるISに搭乗している人員だった。

「始めましょう、戦争よ」

もう一度、スコールは笑みを浮かべ言う。

ISの安全神話は、この日崩れることとなった。

「一体どうしたんですか、専用機持ちだけを緊急招集だなんて」
「また厄介ことなわけ？」

私とふーちゃんの声に、千冬さんは思いつめた表情で頷く。

出来るだけ軽く言っただつたが、その様子を見て私たちも意識を切り替えた。どうやら相当にまずいことになっているらしい。

「今より一時間前、太平洋沿岸の、IS学園所有のドームが設置さ

れていた町が消滅した」

「え……？」

「……生存者はなし、消滅範囲は半径約一二キロ、観測されたエネルギーはISの射撃兵装用エネルギーだったそうだ」

せいぜい襲撃が確認された程度だろうと想っていたところに、とんでもない爆弾が落とされた。

……え、消滅って何？ どうなってるの？

「日本政府もこの事態にはさすがに重い腰を上げるらしい。日本の代表と学園の専用機持ちでこの事態に当たれと言ったことだ」

「……さすがに出ないとまずい、ですよ」

「だろうな。正直私もお前たちを行かせたくはないが……」

苦々しげに奥歯を噛み締める千冬さんに、そつと恋華さんが寄り添う。……いつの間にか間柄が進展しているんじゃないかな、というのはスルーで。

「やるのでしたら早めに動きましょう。織斑先生、相手のデータはありますか？」

「画像データと相手の主砲と思しき武装の攻撃データなら残っている。とりあえず見てくれ」

千冬さんは手元の端末を操作し、会議室中央に映像を映し出す。そこにあったのは、縮尺された謎の機体と、砲撃の放たれた瞬間の画像。縦から見た宇宙戦艦的な何かを横に引き伸ばしたようなその下には、縮尺前の原寸を示す、地図に良く付いているあれがあった。

それを使って全長を計算してみると。

「五、五キロ……？」

「そうだ。横幅全長五キロ、縦幅全長四〇メートル。全体的に見れば薄く長くだが、こちらから見れば驚異的な大きさだ。装甲もそれなりのものだろう」

「まるでロボットアニメの要塞だな……」

「見たことあるんですか？」

「昔、弾にちよつとな。けど、これってどこを叩けばいいんだ？」

「こういうものを作る場合、核は複数個所設置している可能性がある……。叩くときには部隊を複数に分けたほうがいい……」

「核を複数……、例の擬似コアも使われている可能性があるね」

「この砲撃、エネルギー体である以上、私の《A I C》では止められないな。香織、《夜羽》で防げるか？」

「リミッターを解除すれば、三度くらいならいけますが……、相手も軍用をはるかに超えた代物でしょうから、防ぐより逸らしたり、回避したりした方がいいですね」

ずらずらと会話を続ける私たちを見つめている二年と三年の専用機持ちさんたちがじーっと見つめていた。

……なんでしょうか。

「なあ、後輩」

「なんスか」

「こいつら、なんでこんな場慣れしてんの？」

「今までも色々あったからッス。私はでてないけど」

「そうかー」

「そうッス」

「その二人、現実逃避してないで話に参加しろ。死ぬぞ」

「ういッス」

「了解……」

千冬さんに言われ、仕方なく話し合いに参加してきた二人も含め、ここにいる専用機持ちは一二人。日本の代表も含めると一三人だけど、やはりあのデカブツに対応するには少ない気がする。

せめてもう七人くらい、ね。無理だろうけど。

「けど、あれがISなら絶対防御はあるのよね……。破壊は出来るの？」

『そのことについてだけど、私から話があるよ』

「束ちゃん、出てくるならもうちよつと心臓に優しい出現の仕方をしてくれないかな」

『善処します。で、あのISなんだけど、解析したらコアも擬似コアを使用しているから、絶対防御はないよ。最低限の生態維持機能は付いているようだけど、擬似コアの解析情報からすれば絶対防御は付いてないみたい』

「ってことは、前に来たあの無人機もグリム達も絶対防御はなかったってことか……」。

擬似コアの方が安全性は下なんだ……。

「それなら戦いようもあるわね」

『でも、あの外装は通常の兵器じゃ傷一つ付かないね。ISじゃないと』

「やはりそうか……。ともかく、あれはまだ海の上だ。そこで仕留めるぞ」

「射撃班と近接班に分かれた方がいいかも知れないわね。それぞれ分かれたら三つくらいの班にしましょ」

そのふーちゃんの言葉に全員が頷き、会議室の中でそれぞれ分かれる。

近接系は私とふーちゃん、簪ちゃんに一夏に箒さん。射撃系はセ

シリアさん。他の人たちは大体どちらもこなせるから、基本的に射撃形に回ってもらうことになる。

「本丸、主砲のある部分の上に操縦部分があるようですから、そこは箒さん、セシリアさん、私とラウラの四人で担当させてもらっていいでしょうか」

「妥当だな。現状で一番強力なメンバーだろう。では残りの八名を二組に分けるとするぞ」

千冬さんの言葉で編成が開始された。
結果は以下の通り。

一斑、本丸攻略組：篠ノ之箒、セシリア・オルコット、一之瀬香織、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

二班、左翼攻略組：織斑一夏、シャルロット・デュノア、更識恋華、フォルテ・サファイア。

三班、右翼攻略組：更識簪、凰鈴音、ダリル・ケイシー、ナターシャ・ファイルス。

「よろしく、箒さん、セシリアさん」

「そろそろさん付けはいいぞ。戦いの最中にいちいちさん付けも面倒だろう」

「わたくしもさん付けはいりませんわ。その代わり、こちらと呼び捨てでかまいませんこと？」

「うん、もちろん。よろしく、箒、セシリア」

「私もよろしく頼むぞ。このメンバーならそう負けはすまい」

それぞれが挨拶を交わし終わると、丁度束ちゃんが口を開く。

『内部構造の把握は難しいけど、入り口くらいは一時間で割り出して見せるよ。それまでにISの整備やつておいてね』

「わかった。それじゃあよろしくね」

「皆さんのオペレートは私たちは必ず遂行しますから、大船に乗った気持ちでいてくださいね！」

「ありがとうございます、山田先生」

どんつ、という効果音が鳴り響きそうなくらいに胸を張る山田先生。

と、突然会議室の扉が開いた。
そこにいたのは。

「お姉ちゃん!？」

「一之瀬姉か。今回は招集はかけていないが？」

「私の意志よ。足さえ用意してくれば私も出るわ」

「だが、相手は今までのものとは」

違う、と千冬さんが言おうとした直後、その顔面にいつ展開されたかもわからない荷電粒子砲が突きつけられた。

「スコールと名乗っている彼女とだけは、私がけりをつけなければならぬ。そこに、国も人種も、何も関係ない」

「……だがっ」

「安心して。バレはしないわ」

『ちーちゃん、あーちゃんはやるっていったらやるよ。あーちゃん、足はこつちで用意するから安心して』

「そう。……ありがとうございます。千冬さんも、物騒なこととして悪かったわね」

荷電粒子砲を量子変換して指輪に格納しなおすと、お姉ちゃんは優しい笑顔を浮かべて近くの椅子に腰掛ける。

その様子を見て、千冬さんは表情を暗くした。

「お前とあいつの間に、一体何が……」

「……くだらない感傷よ。貴女が知るようなことじゃない」

千冬さんの言葉をばっさりと切り捨て、それから束ちゃんに向き直る。

「たっちん、彼女の機体はどうなってるの？」

『無論完成済みだよん、今そっちに郵送中ー。あと二〇分もすれば着くから』

「何の話だ、束？」

『ちーちゃんの、新しい専用機のお話だよー？ 前に言ってたじゃないかよー！』

ぶーぶーとブーイングする束ちゃんを、疲れたような顔で見る千冬さん。

まあ、気持ちはわかりますけど。

「わかった、到着次第受領しよう。あとは仕事に戻ってくれ」

『ういいういー、ほいじゃねー』

ぶつりと通信が切れ、会議室に静寂が訪れる。

そこに、千冬さんの咳払いが響き渡った。

「あー、各自調整に入ってくれ。後続の支援には私が入るから安心してほしい。……以上だ」

「そ、それじゃあ皆さん、それぞれ調整に行きましょうか！ ね！」

「そ、そーね！ そうしましょ！」

「よーし、いくわよ少年少女たち！」

千冬さんの疲れたような声のあとに、私とふーちゃん、ナターシヤさんの声が響く。

千冬さん、お疲れ様です……！

第81話 変わりゆく世界（後書き）

突然現れた戦艦規模の巨大IS。

町一つを一瞬で消し飛ばしたそれを相手に、香織達が立つ！

そして、日本の代表とは一体だれなのか。

次回をお楽しみに！

巨大ISの姿は横長の円盤に砲塔が満載されているような感じですよ。
まさしく空中要塞。主砲はど真ん中です。

第82話 要塞内部へ

一時間後、私たちは第六アリーナに立っていた。

「私たちの目的はあのデカブツを止め、周囲に被害を出さぬよう破壊することだ。まあ、委員会からは『出来る限り捕獲しろ』という指令だが……、かまわん。潰せ」

「元よりそのつもりです、織斑先生」

この中で一番闘志をむき出しにしている筈がそう言い切る。

全員ISを展開して、しかも全員がリミッター解除状態。洪っているところは今回だけ束ちゃんが解除しました。黙ってりやばれねーんだよとは、束ちゃんの談。

「束の割り出した進入口のデータを送っておいた。各自、無事に内部に辿り着き動力部分を破壊してくれ」

「オペレーションは一斑を私が、二班を榊原先生が、三班をフランシイ先生が担当します」

「部活やってる子は会ったことあるかもしれないわね。榊原菜月よ、普段は部活棟の管理をしてるわ。よろしく」

「数学のエドワース・フランシイです。一年生の皆さんは数学の時間にお会いしていますね。今日は尽力させていただきます」

山田先生の紹介で、二人の先生が軽く会釈した。

それでも私たちより緊張した面持ちなのは、こう言った命懸けの事態に出くわした事は余りないからなのだろうか。

「それと、今回共に行動することになっている、日本代表の倉持早百合だ」

「倉持です。今日はよろしく願いします」

千冬さんの横に立っていた和風美人さんがそう言って頭を下げた。
倉持早百合……、もしかして倉持技研と何か関係があるのかな。

「ですが織斑先生、倉持さんが入るとバランスが……」

「倉持には最初は遊撃、私と葵が行く時についてきてもらう。何か質問は？」

その言葉に反応するものは誰もいなかった。

千冬さんが小さく一つ頷くと、各自飛翔する姿勢をとる。

「では、一つだけ私から言葉を。……死ぬな、必ず生きて帰って来い！」

右手を挙げ敬礼を見せた千冬さんに親指を上を立てて突きつけると、私たちは一斉に飛び立った。

戦うために。

一気に空を突き抜けた香織たちの前に現れたのは、恐ろしく巨大なそれだった。

まさしく要塞のごとく空に鎮座するそれを見て、各々戦意を昂ぶらせていく。

「それじゃ、まず開戦の狼煙といきましょうか！　《銀の翼の奏でる鐘》^{Bell}！」

大きさだけで横幅直径五キロに達するそれに向けて、最初の一撃を撃ち放つのはナターシャだった。

《銀の鐘》^{シルバー・ベル}の武装特性を起動させ、視界いっぱい銀色の弾丸をばら撒いていく。

「ついでに持ってきたさい、《銀色の鐘の音》^{Ding Dongsveer}！」

その弾幕が着弾するよりも早く、カノンタイプの《銀の鐘》の武装特性を起動させ撃ち放つ。

音速を超えたその弾丸たちが悉く要塞型ISとも呼べるそれにぶつかり、粉塵を巻き上げた。

「どう？　やった？」

「……だめです、損傷なし！」

「うそーん」

粉塵が晴れ、そこにあつたのは全く傷のついていない装甲だった。かなり攻撃力の高い《銀の鐘》でもまるで効果が見られないことに落胆しつつ、当初の予定通りに内部に入り込むことにした。

「それじゃ、皆死なないように！　いくわよ！」

ナターシャの掛け声で、それぞれがマップに表示された進入口へと飛んでいく。

香織達一斑が向かったのは、中央の巨大砲塔脇の空いている部分。そこから内部に侵入すると、各々武装を構えながら内部を進んでい

った。

「本当に要塞みたい……」

「人気はないな。電子制御か？」

「どちらにしても破壊するだけだな」

「周囲への警戒は忘れずにですわ、箒さん」

「わかっているさ」

言葉を交わしながら進んでいくと、丁度丁字路に突き当たった。

配線がむき出しになっている壁を見ると、多くの配線は左へと向かっているように見える。

配線の行き先につられてそちらを向いた四人の目に飛び込んできたのは、どこかで見たことがあるような黒いISたち。

「またですか……」

「木偶どもが何匹集まろうと、なんら問題はない」

「ですわね。どうしましょうか？」

「なら、先に私が行こう」

黒いISの群れを鼻で笑った箒とセシリアの隣で、ラウラがワイヤーブレードを射出する。

四〇本のワイヤーブレードが群れの中へと入り込むと、ラウラは軽く拳を握りこむ。

「どうやらこいつは、好きな場所から刃を出せるようだな」

普段つけていた眼帯を量子変換して取り外すと、黄金の双眸で黒の群れを見やりながらそこへ《AIC》を放ち、動きを止める。

「こういうことも出来るわけだ」

握りこんだ拳を一気に開いた直後、ワイヤーブレードのワイヤーの部分から、エネルギーブレードが無数に突き出される。

滅多刺しにされた黒い無人機たちは、それだけで活動を停止してどろりと溶けた。

「ワイヤーブレード型遠隔兵装、『シユヴァルツ・ドライト』の武装特性、『ウン・ハイル・ドルン』。よく味わえよ」

「ふむ、便利だな」

「ですわね」

「そういう感想でいいのかな」

やや緊張感を失いながらも、香織達四人は黒いISの群れがいた通路を通って先へ進んでいく。

時折感じる振動が、この静寂の中でも化け物じみたこのISの鼓動を感じさせている。

『皆さん、周辺の解析が終わったのでマップデータを送りますね』
「あ、はい」

通信回線が開いたと同時に真耶の声が飛び込んてくる。香織の返事でファイルが解凍されると、目の前に半透明のマップデータが展開された。

それによれば、この周囲は複雑な迷路のように入り組んでおり、スイッチでルートを切り替えながら進む必要があるようだ。

「うんざりしそうな地図だな」

「何を想ってこんな構造に……」

「多分偶然じゃないですか。多分」

口々に感想を呟くも、やはりマップの通りに進むのはとても面倒である。

そんな思いを抱いた四人の中で、箒が言い出した。

「……別にバカ丁寧に道を通ってやらずとも、壁をぶち破って道を通せばいいではないか」

「それもそうですわね。箒さん、よろしく願いいたします」

「え、ちょ」

「では行くぞ。衝撃に備えておけよ」

犬歯をむき出しにして笑った箒は、止める間もなく刃を構える。
紅いエネルギーが《空裂》からわれを収める鞘から迸り、腕部までもが紅く発光し始める。

「斬り捨て御免ッ、《空海断絶》チハイワフルッ！」

直後、目の眩むような紅い閃光と共に抜き放たれた刃は、目の前にあった壁も通路も、何もかもを剣圧で巻き込んで消し去っていく。数秒後には、斬撃の通ったあとにはぽっかりと穴が開いていた。

「……うわぁ」

「なんとという威力だ……」

「殆ど制限無しで撃ち出ただけあって、恐ろしい威力ですわね……」

「……」

「さて、進むとしよう」

その絶大な威力に頬を引きつらせながらも、四人は開いた穴を通って先へと進む。

直線距離で五〇〇メートルほど進んだ辺りで、突然先頭を行っていた箒が立ち止まると、鋭い視線を奥へ向けると共に刃を構えた。

「出て来い。隠れていても無駄だぞ」

「あらあら、ばれてしまいましたの。皆さんごきげんよう、先ほどのパフォーマンスはいかがでしたか？」

「キティ！」

通路の奥から現れたのは、『グレイウルフ灰狼』を纏ったキティだった。

無邪気に微笑んだキティは、カチカチと左右の爪を打ち鳴らしながら言葉を続ける。

「あの威力でも一割も出していないんですよ？ ふふ、あれが国の首都に撃ち込まれたらどうなるでしょうね？」

「そうせんために私たちがここにいる」

「なぜ貴女たちが命を張る必要があるのです？ 貴女方は全員、日本という国に恩義などないでしょうに」

「国が問題なのではありませんわ。このような危険極まりない代物を、貴女たちのような存在に持たせておくわけには参りませんもの」
「私はどうでもいいが……、強者と戦えればそれでいい」

それはどうなんだろうと思った香織だったが、ここでその突込みを入れるのは余りに空気を呼んでいないんだろうなと思いやめておいた。

そんな香織を見ながら、キティは更にカチカチと爪を打ち鳴らす。

「まあ、それはともかく。この先にはこの機体の心臓部の一つがありますわ。私を倒せたら、どうぞ壊していただくさいな」

「それはつまり、挑戦と言うことでいいんだな？」

「ええ。ただし」

銀色に鈍く光る爪に舌を這わせ、熱に浮かされたような目で香織

を見るキティ。

その様子に、香織は背筋を舐め上げられたような生理的なおぞましさを感じた。

「私が勝ったときには、お兄様をいただきますわ」

「なっ……！ ふざけるなよ、誰がやらせるか……！」

「ふふっ、では試してくださいまし。ああお兄様、もうすぐ思い出させて差し上げますわ……！」

直後、笑みを浮かべるキティを紅と青のエネルギーが襲った。

第82話 要塞内部へ（後書き）

キティ再登場。

というわけで今回から要塞攻略戦闘に。 幕さん力技。 もし普通の幕
だったらちゃんと迷路入りました。

第83話 戦う者たち

キティを襲った二つの力。

『紅椿』の斬撃と『ブレイブ・ティアーズ』の銃撃が重なり合い、キティの小さな体躯へと吸い込まれていく、が。

「ふふつ、その程度では墜ちませんわよ？」

「止めた、か」

妖しげな笑みを浮かべたキティは、赤と青のエネルギーを振り払うと静かに爪を構える。

それを見て、四人は今度こそ臨戦態勢に入った。

「行くぞっ」

先陣を切ったのは箒だった。

音速で接近し、滑るように刃を振りぬく。しかし、その刃をキティは片腕の爪で受け止めた。

「残念」

笑い、自分を中心にして回りだす。

瞬く間に回転数を上げていくキティの近くにいた『紅椿』の装甲が、ガリガリと削られていく。

と、回っているキティの周囲に、徐々に青い光が纏わりついてきた。

「逃しませんわ」

「こちらも忘れるなよ」

「おまけにこつちもね」

その青い光を追うようにして、四〇本のワイヤーブレード、《シユヴァルツ・ドラート》と、香織の操る一〇基のウイングビットが飛ぶ。

回転するキティへ向けて、一斉にそれぞれの光が放たれた。

「撃ち抜きますわ……！」

「《ウン・ハイル・ドルン》！」

「ウイングビットッ！」

BTエネルギーが二二発、ワイヤーブレードから発生した長いプラズマブレードが一〇〇本余り。

まともな相手ならばこれでも十分すぎるほどだが、ラウラと香織はダメ押しとばかりに背負った二門のレルカノンと《夜雀》の弾丸をありったけ撃ち放つ。

直後、粉塵が立ち込めるそこから、大きな爆発が巻き起こった。しかし。

「いい攻撃ですわね。ですが……」

「っ！ バードエイク 《とりのさえずり》！」

「ウルフ・ハウリング 《狼の咆哮》！」

ぐわん、と空間が歪む。

出力の拮抗した二つの音がぶつかり合い、大気もそれに覆い隠された其処すらも歪めていく。

「ぐっ……！」

「あはははっ！ これほどまでに力を上げていらしたのですね！ ふふ、あははははははは！」

「皆、大丈夫……！？」

甲高い笑い声を上げて喜ぶキティとは対称的に、その顔を苦痛に歪める香織。

いかにISの保護があるとしても、二つの破壊的な周波数の音を目の前でぶつけ、その余波をもろに受けているとあつては、身体に大きな影響を受けていることは確実だった。

そんな中で、香織は齒を食いしばりながらもそう声を上げる。

「ああつ、こちらへの余波は私が《A I C》で食い止めている！」

「そ、つか、よかった……！」

「香織だけに負担をかけるわけには参りませんわね。箒さん、やりますわよ！」

「委細承知！ ラウラ、《A I C》を解いてくれ！」

「やられるなよ！」

「わかつている！」

《A I C》が消滅した途端、二人に襲い掛かってくる衝撃に、二人は顔を顰めながらもそれぞれの獲物を手にキティを睨む。

時折撃ち出されてくるB Tエネルギーをラウラが《シユヴァルツ・ドライト》で打ち払いつつ、箒が接近戦を、セシリアが中距離戦を仕掛けていく。

「《蒼と紅の輪舞曲》、共に踊りましょう？」

そう歌う様に口ずさみ、その直後には紅と蒼のエネルギー光が途切れることなく打ち出されていく。

《スターライトmk?》から撃ち出された弾丸はハウセンカのよ
うに無数の細い糸に分かれ、《雨月》^{あめつき}の生み出した紅いエネルギー
を守るように取り巻き、手が無数に見えるほどに刺突を繰り返す箒

はひたすらにキティを睨みつける。

指向性を持たせて範囲を限定した《とりのさえずり》を避けるように動くそれは、殆どがキティのISから伸びる《尾》によって叩き落とされてしまっているが、そのせいもあってかキティの集中力が僅かに鈍ってきていた。

「さつきからちよろちよろと……！ 邪魔ですわ！ 《断罪のため
ッシメント
の尾》！」

ギョルン！ と《尾》が唸りを上げ、鈍色にびいろの光が《尾》を包む。
その直後、飛び回っていた箒とセシリアへ向けてそれが叩きつけられた。

「やるぞ、セシリア！」

「ええ！」

間近へと迫ってくるそれを見据え、セシリアは九基の《ブルー・ティアーズ》を呼び戻し、八基からBTエネルギーを放って八角形を形作り、その上に残る一基を配置することで八角錐を作り出す。
更に、その隙間を埋めるように全てのシールドビットとなっている装甲を配置していった。

「その程度で止められませんか！」

「誰が終わりだと言った！ おおおおおおお！！！」

その八角錐の中へと『紅椿』の《絢爛舞踏けんらんぶたつ》によって作り出した無限大のエネルギーを注ぎ込むと、それは《尾》へ向けられた巨大で鋭い傘のように形作られた。

次の瞬間、轟音を立てて《尾》が傘へと接触する。エネルギーが迸り、鈍色と紅と蒼が交じり合うようにして弾け合う。

その中で、セシリアは更に《スターライトmk?》を構えた。

「お楽しみは、これからですわ！ 第！」

「わかっている！ エネルギーへの干渉を開始、構成情報を変換、全てのエネルギーの構成情報を『ブレイブ・ティアーズ』の制御下へ！」

「まさか、エネルギーの制御権を無理やり奪い取るつもりですか？」

「ここだつ……！ 《とりのさえずり》出力最大！」
「しまつ！？」

動揺を見せたその一瞬の隙を突いて、香織は全力で《狼の咆哮》を押し返す。

咄嗟にそれに対応して見せたキティだったが、そのせいでエネルギー制御がおろそかになってしまう。

「いただくぞ、貴様の力！ やれ、セシリア！」
「エネルギーの全制御権獲得……、始めますわよ、《スターライトmk?》！」

色とりどりのエネルギーが発光しだし、次々に蒼く変色したかと思えば、セシリアのエネルギーライフルの銃口へと集っていく。

第もまた刃を鞘に戻し、《絢爛舞踏》を完全発動させていた。そして、次の瞬間。

「撃ち貫きなさい、《Star Right&Strike 星明かりの一撃》！」

銃口の十数倍はあるだろう大きさへと膨れ上がったその光が、流れ星となって撃ち出される。

ぐねぐねと不規則な軌道を描いて大気を裂くそれが、キティの《

尾へと確かに命中し、目も眩むような青い光を放つ。

「くっ、この程度で！」

「それだけではないということだ」

悪態を吐こうと口を開いたキティの右肩から先の感覚が消える。
余りの衝撃に、其処にあったという感覚自体が死んだことに気づいたのは、紅の一撃が胸を突いたときだった。

「スベテラウガツ
《万障一穿》、《空海断絶》
！」

「がはっ……！？」

血反吐を吐いて吹き飛ぶキティ目掛け、完全な不確定三次元攻法
ランダム・トリック
で接近していく筈。

「我流、千一閃！
いっせんいっせん」

その直後、キティの体を文字通り千の刃が切り刻んだ。

一方その頃、左翼攻略の二班。

「それにしても、こんな大きなものがISだなんて……」

「ま、元々ブラックボックスだらけ何だから、作れても不思議じゃ

「あねーっス」

「そーそつ。さて、大分進んだけど……」

「さっきから無人機は来てるけど、進んでる実感しないな……」

時折攻撃を仕掛けてくる無人機を破壊しながら、一夏たちは内部を進んでいた。

時折入る榊原（ひかきは）からの通信を頼りに進んでいつてはいるが、やはり風景が変わらないと精神的な疲労は募る。それ正規の訓練を受けていない一夏ともなればひとしおだった。

一瞬だけ一夏が周辺から注意を逸らした、その瞬間。

「っ……！」

「くっ、誰っスか!？」

「『サイレント・ゼフィルス』……、キャノンボール・ファストのときの!」

「久しぶりだな、織斑一夏」

「やっぱり出てきやがったか……!」

姿を現した『サイレント・ゼフィルス』を見て、即座に全員が戦闘態勢へ移行する。

それを見て、『サイレント・ゼフィルス』の操縦者、マド力は唇を歪め笑った。

「貴様を、殺せるなら……! 私が消えようとかまう物か! 最後の仕事だ、ゼフィルス!」

「何を言ってやがる!」

「まあなんでもいいわ、殺すわよ」

直後、『サイレント・ゼフィルス』を無数の水の槍が襲う。それを器用に避けながら、マド力はビットを射出する。射撃用の

B TビットとB Tライフル、そして片手にはピンク色に発光するナイフを持ち、マド力はまるで死に急ぐように突進してくる。

しかし、その攻撃は巧みに計算されたもの。接近戦での一撃をかわせば、隙間を縫うようにB Tエネルギーの弾丸が降り注ぎ、それに気をとられれば零落白夜を打ち消す謎のナイフが突き立てられる。

「つよっ！？ 強くないッスかこいつ！？」

「そういう相手なんです！ はあっ！」

「ええい、ちょこまかとお！」

「くそっ、当たらない！」

口々に悪態を吐きながら、更に攻撃を仕掛ける四人。

それを嘲笑うかのようにマド力は悉く避け続け、お返しとばかりに弾丸の雨を降らせていく。

しかし、その動きはどこか精彩を欠いていた。まるで、出来の悪い人形のように歪な動き。

その答えがすぐそこで大口を開けて待っていることを、五人はまだ知らずにいた。

第83話 戦う者たち（後書き）

箒とセシリアが更にパワーアップ。

まあ前回から一ヶ月近く経っているので、その間の訓練の結果です。この二人、いい加減強くなるのやめてくれないだろうか。書いてると勝手に強くなるんだが。

第84話 さらに戦う者たち（前書き）

今回は落とし所が見つからずにいたので短くなっています。

第84話 さらに戦う者たち

それなりに広くなっている通路の中で、五人は刃を振るい、引き金を引く。

正確には四人と一人、戦線から外れた恋華は一人後ろに下がって集中力を高めていた。

ISを強制的に融解させ、一気に引き剥がす特殊兵装、《アルカエスト》。あらゆる物質を『第一質料』と呼ばれる存在に融解することのできる万物溶解剤からその名がとられたそれは、その強力な性能と引き換えに大量のエネルギーを必要とし、制御には尋常でない集中力が必要だった。

いかに天災である恋華であつても、それは変わらない。むしろ、天災という歪ながらも基礎スペックが高いからこそ戦闘中に使用準備を整えることができるのである。

「リムーバー剥離剤を取り込んだという兵器……！ 使用させるものか！」

「お前の！」

「相手は！」

「アタシらっスよ！」

『白式』の第二形態『雪羅』と同じ名を持つ多機能武装腕《せつら雪羅》、『ミストラル・リヴァイヴ』の左腕となっている第三世代兵装、《デュノア・オルグイユ》、フォルテの第三世代型IS『コールド・ブラッド』の特殊兵装、《アイス・メイカー》の弾丸が同時に迫る。マドカはその三人の同時攻撃を、あるうことか片手のナイフを突き刺して《雪羅》を、もう片方のBTライフルで《デュノア・オルグイユ》を撃ち抜いて止め、残った《アイス・メイカー》の弾丸をBTビットで撃ち抜いて破壊した。

「くっ、やっぱつええ……！」

「しかも、スピードもパワーも上がってる……。あの時は手加減してたってこと!？」

「どっちにしても、倒すだけっスよ。まずは私が行くっスから、見てるっスよ後輩！」

マド力を睨みつけた二人に対して、フォルテがそう声をかける。この相手と対したのは初めてだったが、フォルテの心の内は冷静だった。

なにせ、相手は素手でISを撃破出来るほどの強者ではない。ならば、さして何かを恐れる必要もなかった。

それは、葵という絶対強者を相手にしたことのある者だけが持てる心の余裕。それを心のうちに秘め、『イージス』と呼ばれるタッグ時専用の作戦を崩した、単独戦闘用の戦闘プランを脳内に作成した。

「さて、とつとと潰させてもらっス」

ざわ……。っ、と空気が変わる。

次の瞬間、フォルテの姿はマド力の眼前に迫っていた。

「ッ!？ くっ!」

「おっと」

咄嗟に振るわれたナイフを避ける様に上へ飛んだフォルテが、その最中に右腕部から突き出ている銃口から幾つかの弾丸を周囲に吐き出す。

円を描くように横へ飛んだフォルテはまたもやギリギリまで接近すると、反撃を避けて周囲へと弾丸をばら撒いていく。

接近しては避けて弾をばら撒く、その行為を何度か続けていると、

次第にマドカの方が反撃を過激にするようになっていった。

それもそうだろう、何の意味もなく接近しては離れて弾をばら撒いていく姿を見て、彼女は予想以上にいらだっていた。

だが、それこそフォルテの狙い。一夏とシャルロットを置き去りにしてまで単独で動いた理由は、其処にある。

「さっきから、目の前をちよろちよると！ 落ちろ！」

「先輩！？」

「危ない、よけて！」

痺れを切らしたマドカが、六基のBTビットとBTライフルから一斉に銃弾を撃ち放つ。

それは偏光制御射撃によってぐにやりとその進路を捻じ曲げ、フォルテへと殺到する。

「残念。墜ちるのは」

七本のBTエネルギーの矢がうなりをあげて迫る中、フォルテは静かに笑った。

その直後、各機の大気モニターに異常を示すブザーが鳴り響く。その視界には、霜と霧がひしめいていた。

「お前っス！ 《アイシング・ジャングル》！」

《アイシング・ジャングル》。

それは、《アイス・メイカー》によってばら撒かれた弾丸から冷気を発生させ、周囲の大気の温度を急激に下げる、『コールド・ブラッド』に搭載された第三世代兵装。

その急激な温度低下に伴って生じた霜などは、光の屈折率を変化させ、幻覚さえ見せると言う。

それが、カナダ代表候補のフォルテの専用IS、『コールド・ブラッド』の力だった。

大気中に大量の霜を生み出したそれは、霜を集めて氷を生み出す。その氷の鏡にぶつかったBTエネルギーは、あらゆる角度へと捻じ曲げられてしまった。

「なっ!？」

「極寒の地で凍りつくがいいっす! 《アイシング・ジャングル》全開!」

「くそっ、この程度で! この……っ!」

動こうとしたマド力だったが、自身の周囲に撃ち込まれた弾丸の発生させる冷気は、最早地球上に存在できるあらゆる物質を凍らせるレベルにまで冷たくなっていた。

その様子を見て、フォルテが小さく嘆息する。

「マイナスケルビンよりも低い、あらゆる物質を停止させる温度っす。まっ、まだ実験段階っすけど。後輩、あとはパスするっすよ!」
「はいっ! 行くぞ、白式!」
「行こう、ミストラル・リヴァイヴ!」

その直後、青白い《零落白夜》の光と《デュノア・オルグイユ》の拳が叩き込まれ、マド力は小さなその身を地面へと投げ出す。その顔を見て、三人は思わず息を呑んだ。

「千冬、ねえ……!？」

「そんな、どういうこと!？」

「予想外すぎるっすよ……!」

「……ふっ、あははははは! 私はお前だよ。私は織村マド力、ドイツに作られた千冬姉さんのクローンさ!」

観念したのか、高く笑ったマドカは人を食ったような笑みで一夏へと話しかける。

そのとき、マドカは鈍痛を堪えるように時折眉を潜めた。

「くっ……！……まあ、どうせこの言葉ももう意味のないものだ」
「え？」

カチン、とマドカの懷から音が鳴る。

其処にあったのは、いつかみた剥離剤に似た謎の物体。その天辺から何かが引き抜かれたあとがあるのを見て、いの一番にシャルロツトが叫ぶ。

「まずっ、逃げて！」

その直後、四人の体を壮絶な爆発が包み込んだ。

その頃、地上。

「えっと、改めまして。倉持早百合です。よろしく」
「一之瀬葵よ、今日はよろしく」

BCリングから武装を出して点検していた葵の元に歩み寄ってき

た早百合は、小さく頭を下げると険しそうに眉を潜めて、巨大なISがいるであろう空の向こうを睨む。

「いるんですよ、向こうに」

「ええ。怖い？」

「怖いです。ですが、これで怖気づいて逃げたら意味がありませんから」

自身もISのチェックを始めた早百合だったが、その表情はどこか浮かない顔だった。

どうしたのかと聞けば、本当の戦い、恐怖を持った戦いは初めてなのだと語る。

それもそうだろう、このご時勢に本当に命を懸けて戦うことなど早々ありはしない。だが、葵はそんな当たり前のことは口にしなかった。

「恐がることから逃げてはダメよ。怖いって感情は、必ず自分を強くするから」

「……まるで知っているように話すんですね」
「知っているもの」

呟くようなその会話の中にも、葵の気遣わしげな声色が見えて、早百合はやや安堵した。

IS学園に行っていたのは昔の話だが、今でもこうして暖かな会話を交わせる心を持った人がいるのだと、そう感じて。

と、其処へようやく千冬がやってくる。

その手に美しい指輪をはめて。

「準備は出来ているか？」

「ええ。あとは先生だけよ」

「そうか。二人とも、よろしく頼む」

「はいっ」

「ええ」

その言葉が途切れると共に、葵はBCリングに脳内で指令を送る。すると、BCリングの中から薄い茶色の、流線型の物体が引きずり出されてきた。

名はフライト・ボード、葵を空へ上げるためだけに束が特注したものである。

「では、行くとしよう」

光に包まれた千冬がそう言うと共に、三人は同時に地を蹴った。

第84話 さらに戦う者たち（後書き）

次回は鈴たちの方をクローズアップ！

第85話　ならにならに戦う者たち（前書き）

二時間で頑張つて書いた。

そのせいで量が少ないよ！　ぐすん。

第85話 さらにさらに戦う者たち

「くそつたれ、どうなってるのよこれはーっ！」

「そんなこと言ってもっ、しょうがないっ」

「そーゆーことよ、とにかく戦うっ！」

「にしてもうんざりする量だなっ」

それぞれがそれぞれの戦いをしている頃、右翼攻略を任されていた三班の面々は黒い無人機の群れに進路を阻まれていた。

ありつたけの武装を駆使してその猛攻を凌いではいるものの、現状擬似第四世代の『真打・鉄』しんうち くるがね以外は、全てリミッターを外しているとはいえスポーツレベルに調整された、二次移行も遂げていない第三世代である。何十と続く無人機の波の前にはさすがに手を焼いていた。

おまけに、接敵した段階で通信はジャミングされて使い物になっていない。

「皆下がって、朱鉄を使うからっ」

「りょーかいっ！」

「わかったわ、ダリル、下がるわよ」

「なんだか知らんが、わかった！」

簪あかがねの声で三人が後ろへと退避する。その直後、簪の手に握られた《朱鉄》が暴力的なまでの熱量を解き放ち、巨大な刃を形成して行く。

グレンノアカガネ

《紅蓮朱鉄》を発動させた簪は、それをバットのように握りこむと、横薙ぎに一閃する。

『真打・鉄』の背丈の倍以上の長さを持った刃が通路を真横に薙ぎ払い、そこにいた無人機たちを圧倒的な熱量によって焼ききって

いく。否、むしろ溶かし切っていく、という方が正しいだろうか。
ともかく、それによって二〇機余りが撃破されたが、未だにその
数は減ったように感じられないほどに残っていた。

「げんなりするわね……」

シルバリオ・ゴスベル

「『銀の福音』もデチューンしちゃってるから、一掃もできないし
ねえ。三年生、何かいい案ない？」

「なんで私に振るんですか……。あー、特攻？」

「却下ねー。簪ちゃん、なんかないー？」

「あつたら……苦労しない……」

なんともいえない空気が辺りを包むが、その直後、無数の無人機
が一斉に爆発しそこらじゅうに飛び散っていく。

「なに！？」

「こんなもんそろそろ出してちんたらやるくらいなら、とっとと潰
しちまった方が早いじゃねーか……」

道の奥から聞こえてきた声は、べつとりとまとわりつくような気
味悪さを持ったものだった。

がしやがしやと音を響かせ、ISを纏ってわざわざ歩いてくるそ
の女性は、三日月形に口を歪め、愉悦の笑みを漏らす。

「アンタは……！」

「亡国機業実働部隊所属、オータム。ISコアはないはずだから、
擬似コアを使っただんでしょね」

「正解だよ、クソババア。とっととメエらをミンチにさせてもら
うぜ」

啖呵を切ったオータムが身に纏っているのは、アラクネと全く同

じものだった。

擬似ISコアにオリジナルの『アラクネ』のデータを読み込ませて作り出したその性能は、オリジナルと遜色ないものである。

その『アラクネ』を身に纏い、オータムは臨戦態勢に入る。

「死ねやコルアアアアア！」

「簪、前つ！」

「わかってるっ！」

直後、簪の初期状態に戻った《朱鉄》とオータムの両手に握られたカタールがぶつかり合い、耳を劈く金属音が鳴り響く。

その音が連続して響き渡り、簀はあつという間に防勢に押し込まれてしまっていた。

「退きなさいよっ！」

「はああつ！」

「はっ、当たるかヨオ！」

鈴の衝撃砲を、背部に設置された八本のメカアームの先端に取り付けられたエネルギー射撃兵装のうち、二本で迎撃し、ナターシャの弾幕をあるうことか六本のメカアームの先端を繋げて盾とする。ことで防いだオータムは、苛烈なまでの連撃を更に押し通そうとする。

《朱鉄》を盾としてその猛攻を受け止めている簪の額に、一筋の汗が流れた。

「死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね死ね死ね死ね死ね死ねエ！ 死んじまえよオ、クソガキがアアアア！」

「ぐう、ぐう……！」

笑い声と共に刃を振るい、二人の攻撃を完璧にいなしていくオー

タムと対称的に、簪の眉間には多くの皺が刻まれていく。

圧倒的に不利かと思われたその刹那、その声が響き渡った。

「死ね死ねうるせえな、スマートにできねえのかテメエは」

ガチリと音が響き、オータムは宙高く吹き飛ばされる。

その真後ろにいたのは、自身の第三世代型IS『ヘル・ハウンド ver2.5』を装着し、ボウガン型の射撃兵装を片手に構えたダリルだった。

ダリルは気だるそうにボウガン型遠距離兵装《A & A》アボロン・アルテミスクロウズを収納すると、大剣型近距離兵装、《アレス》コールを呼び出した。

「餓鬼が、ふざけんなよ、調子に乗ってんじゃねえぞオオオ！」

「危ない、先輩！」

鈴が叫ぶのとオータムが肉薄するのは同時だった。

振り抜かれた二本のカタールと八本のメカアームが静止し、オータムの口が歪む。

「は、粹がるからこういう目に」

「なんだって？ 私は耳が悪いんだ、もうちょっとはつきり喋れよ」

そしてその歪みは驚愕によって更に歪に歪められた。

瞬く間すらなく全ての攻撃を回避して見せたダリルは、その一瞬で片方のカタールを斬りおとしていた。

カラン、と音を立ててこれ見よがしに地面へカタールの刃を落としたダリルは、今だるそうに手にした刃を振るうと、肩に乗せて踵を鳴らす。

「テ、メエ……！ この、クソガキがアアアアア！」

「今度はうるせエよ、クソが」

またもや一瞬で接近したダリルが、そのままの速度で足の裏で蹴りを入れる。やくざキックやなんだと言われる蹴り方でオータムを吹き飛ばすと、そこへすかさず鈴、ナターシャが引き金を引き、簪が刃を振るった。

その直後、衝撃砲とエネルギーカノンの弾頭、そして青いエネルギー刀がオータムへと殺到し、恐ろしいまでの爆発を引き起こす。通路が、びりびりと揺れた。

「……さすがにこれだけやれば終わったでしょ」

「多分……」

「三年生、なかなか強いじゃない」

「まあ、それなりに」

ちょっと会話しただけでまたもや微妙な空気になったそこへ、獣のうなり声のようなものが響く。

声の主は、オータムのすぐ横に立っていた。四つ足で。

「……ちよつと、まさか　！」

脳内で連想されたことを肯定するように、黒い四つ足のISは牙を剥いて嗤った。

「おい、マジかよ」

「R-18指定」

「グロそうね」

口々に言つも、ナターシャですら引き気味になっている。その中で、獣は一つ吠えた後、オータムの腕を喰らった。

ガキヤ、ぶつり。音が響く。

「ぐあつ……、ああがつ、ぐううあああああ！　ぐ、く、そつ、
何しやがるクソがッ！」

オータムが吠えるが、まるで意に介さずに獣はその口を蠢かせる。
ごくり、とそれを腹へ溜め込んだあとで、獣はその気味の悪い大
口を開けてオータムへと迫った。

「は　？　おい、まで、なんのじようだ　」

今度こそ、オータムが食われる。まるで最初から其処にいなかった
ようにほぼ丸ごと口の中に収められたオータムの悲鳴が、何度か
獣が咀嚼の度に口を開くことに辺りへ響いた。

その様子を見て、鈴は思わず胃の中ものを吐き出してしまった。
前回戦ったときには捕食対象が機械だったからまだ耐えられたもの
の、今度のはさすがに耐え切れない。

そんな鈴を横目に、咀嚼を終えた獣は静かに鈴たちの方を向いて
後ろの二本で立ち上がる。

その直後、獣の全身をばこばこ波打って、様々な器官が突き出
してきた。

「おえ………！？」

『キ、ギギ、ガ、キシ、ガ、ギヒ、グヒヒヤ、ガジ、ギヒヤ』

「何………！？　なんなのアイツ………！？」

「薄気味悪い奴だな、こりゃ」

武装のようなものが全身のところどころに出現する中、それは徐
々に人型のISとして完成されていく。

そして最後に残ったのは、人に似た仮面のような顔だった。

「顔が……できてる……」

「おはようございます、下等種族の皆様」

「喋った!？」

にたあ、と嗤ったそれは、中性的な声でもってそんなことを言い出す。

それが、四人にはたまらなく気味悪いものを感じられた。

「本来ならば私本来の仕事に入るところですが、せっかく血肉となつてくれた下等種族の願いくらいは叶えてあげましょう」

そう言つと、左腕を巨大な砲塔に、右腕を巨大なブレードに変え、背部から一六本のメカアームを出現させる。

それは、まるで虫が変態するときのようだった。

「眼前の敵の抹殺を開始します」

「っ、全員散開!　くるわよ!」

ナターシャが咄嗟に指示を出すと同時、四人を一六本のエネルギー弾が襲う。

捻じ曲がつて追ってくるそれを迎撃する四人を眺めながら、そのISは嗤った。

「逃げ切れませんよ、ギシ、ゲヒヒヤヒヤ!」

第85話 さらにさらに戦う者たち（後書き）

もうISって括りにしちゃいけないかもしれない、この作品。
とうとう人を食って進化した無人機を相手に、四人はどう戦うのか！
次回をお楽しみに！

第86話 関わり（前書き）

ちょっとややこしい話なのでかなり短めになりました。

前は話を讀んだ方に不快な思ひを抱かせてしまつて申し訳ありませんでした。

次回からはこうした描写が出ることを前書きで注意していきたいと思います。

第86話 関わり

「我流、千一閃！」

文字通りの千の刃がキティの体に傷跡を刻み付けて行く。

凄まじい猛攻によつてその体から徐々に力が抜けて行くのを見て、箒は最後の一撃を叩き込まんと刃を振り上げる。

その刃が煌くと同時、キティが嗤った。

「甘すぎますわ、貴女たちって」

「っ！？ ガハアッ！？」

長く伸びた双手の爪、《ウルフズ》によつて両腕を刺し貫かれた箒が、蹴り飛ばされて壁面へ減り込む。

「箒！？ くつ、《ブルー・ティアーズ》！」

「《シュヴァルツ・ドラート》ッ！」

血反吐を吐いて目を見開いた箒を見て激昂したセシリアとラウラが、それぞれの武装を一斉に飛ばす。しかし、それを全て双爪で弾き飛ばすと、一瞬でセシリアの目の前へと接近、瞬く間にセシリアの装甲に傷をつけていった。

「くっう……！」

「セシリア！ 貴様あ！」

「遅いですわよ、ウサギさん」

《尾》の一撃がラウラの視認速度よりも速く迫り、ラウラの小さな体軀がくの字に折り曲げられ吹き飛ばされる。

たった数秒で、攻勢に出ていた香織達四人のうち二人が倒され、残る二人のうちの一人も猛攻に晒されていた。

まさしく圧倒的。その言葉そのものように攻撃を続けるキティが、突然笑いを止める。

それと全く同じ瞬間に、香織を耐え難い頭痛と吐き気が襲った。

「……この感じ、ああ、なるほど。生まれたのですね、一人目が」
「ぐあ……！ げほっ、おえっ……！ な、に、これ……っ！」

頭の中をかき回されるような激痛と、喉の奥に手を入れられたような猛烈な吐き気を堪えようと必死になるが、そのせいで涙が溢れてくる。

目を見開いて何とか呼吸しようと口を開くが、ただえづくことしか出来なかった。

「香織！？ 大丈夫ですよ！？」

「お兄様！ 邪魔です、わっ！」

「きゃあっ！」

異変をきたした香織に、セシリアを吹き飛ばしたキティが慌てて近寄ってきた。

その様子はまるで本当に兄を心配する妹のようで、先ほどまでの恐ろしさは微塵も感じられない。

そのことに、呻きながらも意識を保っていたセシリアは少なからず驚いていた。

「お兄様、気をしっかり持ってくださいませ！ お兄様！」

相当負荷が高いのか、香織はとうとうその場に蹲って呻く。その香織の肩を、キティは優しく抱きかかえるとそっと地面に座らせて

声をかけ続ける。

その様子を、意識の戻った箒とラウラ、そしてセシリアの三人は咄然とした様子で見つめていたが、やっと意識の戻ってきたラウラは急いで香織の傍に駆け寄った。

「香織、しつかりしろ！ くそつ、どうなってるんだ！ お前は何か知らないのか！？」

「おそらく、先ほどの進化情報がお兄様の脳内に流れ込んでいるのです。ついさつき、無人機のうちの一機が人間を食らって進化いたしましたわ」

「なっ！？ いや、今はいい、それよりも香織は！？」

「情報を整理できれば……！ こうなったら、私が直接お兄様とシンクロして情報整理を行いますわ。一時休戦しますわよ」

キティは愛する兄のために、そしてラウラは守ると誓った彼のため、二人は互いにその言葉を信じて頷く。

元より、キティは香織を必要以上に傷つける気はない。キティの存在理由そのものといってもいい香織を守るためならば、キティはどんなこととしてもみせるだろう。

そして、ラウラはそのキティのことを、同じ者を愛する人として信じることにした。

「ラウラ、いいのか？」

「今はいがみ合っている場合ではない。キティ、それをやれば必ず助かるんだな？」

「助かるわけではありませんわ、助けるのです。私に不可能はありませんわ」

箒に素早く切り返すと、ラウラの問いにキティが力強く頷いて答えた。

そつとキティが呻く香織の額に手を翳すと、ゆつくりと目を閉じる。

「潜行、開始　！」

直後、キティの意識は香織の中へと潜っていった。

「……ここが、お兄様の中ですか」

気が付くと、私は空の上に浮かんでいました。

ここがお兄様の中、なんだか暖かな場所ですわね。

と、そんなことを考えている場合ではありませんわ。早くお兄様に目覚めていただかなければ。

私はお兄様の後に生み出された、数少ないバイオノイドの生き残り。創造主たる巖隆いわたかの元を逃げ出してISを強奪し、こうしてしかない秘密結社に身を寄せていましたが……。

ようやくここまで来たのです、せつかくですから少しお兄様の思い出も覗いていきましようか。

「まずは脳内区画に入らないといけませんわね」

呟いてから、思考をパラメータ化した仮想ディスプレイを起動させる。

私は精神調整に重点をおかれて開発されましたから、このくらいの精神活動はお茶の子さいさいですの。それにしても……。

「どうしてこんなに不安定なのでしょう、お兄様の記憶保存回路は」

そう、お兄様の記憶を保存する道筋、つまり末端から情報を拾って脳の最深部まで届けるその道がずたずたになっているのです。新しい記憶はきちんと保存されているようですが……、これは一体。少しばかり探ってみる必要がありますわね。

空を飛ぶように中を進んで行くと、突然そこに現れた鉄の箱。それに触れると、それが解体されていくようにカタカタと片付いて行く。

そうして其処に残ったのは、小さなメモリーチップ。手のひらで握りつぶしてしまうほどの大きさのそれを手に取ると、途端に私の中にお兄様の記憶が流れ込んできた。

「これはっ……！」

お兄様の消されていた記憶、それがそこに封じ込められていた。流れ込んできたそれを読み取りながら思案する。このタイプの記憶改竄装置は巖隆が使っていたこともある。とすると、これを使っただのは……。

「お姉様……。お兄様を戦いの道に招かぬように、ずっとお一人で……」

一之瀬葵、出自から言えば私と血のつながりはないが、それでもお兄様の姉なのだからお姉様だ。

お姉様はお兄様を戦いに巻き込まないように記憶を改竄していた。

その副作用で記憶保存回路まで損傷を受けていたらしい。

「解いてしもうたか、写し身の娘」

「……貴女は、梟ですのね」

突然声がした方を向くと、其処には黒く艶やかな髪を伸ばした女性
性が立っていた。

お兄様の専用IS『梟』、そのISコア人格もあの情報を受けて
行動を開始しているらしい。

「然様。あの偽者がおぞましき姿に変わったことは、香織に送られ
てきた情報から読み取った。主は香織をあの戦場へ行かせる気か？」

「いいえ、そんなことはいたしませんわ。けれど、もしお兄様が自
らの意志で決めたのであれば、私は……」

「……ふむ。わかった、主の言葉を信用しよう。だが、今日のこ
ろは矛を引いて欲しい。お主とて弱った相手と戦って勝っても、嬉
しくもなんともなかるう？」

頷いた梟が、かつんとかかとを鳴らす。そこに、小さな光で照ら
された道が出来る。

それを指し示しながら、梟はちいさく頷く。

「この先に送られてきた情報がある。主を頼むぞ」

何かを語ることもなく、梟はすう、と消えて行く。
それを見送りながら、私は小さく息を吐き出した。

「親父殿、こいつ使うのかよ？」

モニターの並ぶ部屋の中で、グリムの声が響く。

指し示しているのは、モニターの群れのうちの一つに映る黒いISもどき。

オータムを食らって強化されたそれは、もはやISという名を使って示してはいけないほどにおぞましい存在へと変わっていた。

「必要なことだ」

「ふーん……。まあいいけどよ」

甲高い笑い声を漏らしながら、グリムは静かに笑みを浮かべた。
ただ、嗤っていた。

第86話 関わり（後書き）

キティの正体がようやく普通にばれた今回。

せつかくの戦闘が台無しになった原因の情報がなぜ香織に流れ込んできたのか。

次回もお楽しみに。

第87話 起死回生

撃ち、避け、撃ち、防ぎ、撃ち、避け、撃ち、撃ち、撃ち、そして防ぐ。

それが、私たちの目の前で無重力にすら縛られることなく動き続ける無人機（あれを無人機と呼んでいいならばだが）の行動の一部始終だった。

「どうしましたか、逃げてばかりですよ？」

「うるっさいわね！ とつとと墜ちなさいよ！」

二年の鈴が全開で衝撃砲を撃ち放つも、それはあっさりと装甲に受け止められ、大したダメージも入れられていないようだった。まったく、大した装甲だ。あいつは確か、元は中国の候補生だったはず、その機体となればそれなりの威力だろうに。

つと、自己紹介がまだだったか。私はダリル・ケイシー、ギリシヤの代表候補生だ。

まあ、それはいい。今は目の前のことに集中しよう。

「装甲に自信があるらしいな？」

「すくなくとも、貴女方程式ではこの装甲は貫けませんよ。グギヒヤヒヤ！」

「不愉快な笑い方だ。アポロン・アルテミス
《A & A》……！」

《A & A》、正式名称《Apollon & Artemis》はギリシャ神話の双子神『アポロン』と『アルテミス』から名をとった、ボウガン型の中・遠距離用兵装だ。

一点集中型の『シフト・アポロン』と拡散型の『シフト・アルテミス』の二種類が存在しているが、こいつにアルテミスをぶつけて

も弾かれるだけだろう。

思考操作でシフトチェンジすると、『シフト・アポロン』で照準を合わせ、引き金を引く。

エネルギー兵装であるこいつのエネルギーはBTではなく、それ以前に使われていた射撃用エネルギーだ。曲げたりは出来ないが、補給用のエネルギーパックも開発されているため持久力は高い。

「そんな武装では壊せません。壊せないのが私なのですよ！ ギヒハハハハ！」

「うるさい……、壊れる……ッ！」

平手で《A & A》の弾丸を全て握り潰して高笑いする無人機へ向けて、今度は簪とやらがバカみたいに分厚く、更に熱まで放つ《朱^{あか}鉄^{がね}》とかいう武装を振り下ろす。

あの武装、ぱつと見た感じエネルギーを消費しているように見えない。BTでもないし、今まであんな武器は見たこともない。それに、さっき一度サーモグラフィーで確認したら、あの大剣の周辺は温度が上がったり下がったりしていた。反対に、あの刀身は周囲が下がれば温度が上がり、上がれば下がっている。

……まさか、な。そんな馬鹿なことがあつて堪るか。

「ギヒィーハハハハハハ！ 効かない効かない、無駄ですよ！」

「腹立つわねえー……！」

二学期から学校へやってきた元軍人でもある、ナターシャ先生がイライラしながらそう漏らした。

だが、その言葉には全く持つて同意したいところだ。あの異常なまでに堅い装甲、そして私たちのうちの誰よりも高い機動力。そしてなによりもイライラさせられるのは、あの人をおちよくったようなエセ敬語だ。願わくば、あの頭を吹き飛ばしてやりたいが、今の

装備では無理だ。

私のIS『ヘル・ハウンドver2.5』に収められている武装は全部で三つ。《A&A》と《アレス》、そして脚部装甲と同化している《ヘルメス》。

《アレス》は近接用の大型ブレードで、相手にもよるが大概の装甲を叩き割れる威力の物理ダメージを弾き出せる。

もっとも、『シフト・アポロン』に耐えるような相手ではとても有効とはいえないが。

そして《ヘルメス》は、加速用の補助スラスタ―イクニッション・ブースト内蔵型脚部武装。要するに加速装置という奴だ。地面を蹴って瞬時加速よりも強い加速を叩きだせる。もちろんそれは数秒だけだが、有用な装備ではある。

さて、ざっと見たがこれであの装甲を叩き割ることは無理だろうかといって装甲の隙間に攻撃を入れるのも無理、そもそも当てること自体が至難の業だ。

「どうするか……」

「手詰まりですか？ ギヒハハ、では」

嗤っていた無人機の腕が、うぞうぞと動く。

気味の悪さに思わず顔を顰めたが、次の瞬間にはその腕から血の色をしたオイルらしき液体を流しながら、巨大な砲塔を出現させた。

「吹き飛ばして、血肉をバラけさせてあげましょう！ ギヒハハハ
ハァー！ イッツ、シヨウターインムッ！」

「やばいな」

「やばいわね」

「激ヤバ……？」

「喋ってないで下がる！」

ナターシャ先生の声で全員が後方へスラスターを吹かす。と、目の前で気味の悪い巨大な砲塔をこちらへ向けた無人機が馬鹿でかい笑い声を上げながらエネルギーの充填を開始した。

頭の中でガンガンと警報が鳴り響く。ISが相手のエネルギーチャージを感知して鳴らしているんだろうが、わかり切っていることを言われるとさすがにいらだつな。

下がりながら『サイド・アポロン』を撃ちだしたが、チャージ中のエネルギーで掻き消された。まずいな、アレを撃たればここは消し炭だ。

「なにか止める方法はないの!？」

「ない! とつとと下がるわよ!」

「断言しなくても……」

「お前ら余裕だな……。くるぞっ!」

ほんの十数秒の間にチャージは殆ど完了していた。

トリガーを引かれる前に叩き潰す必要があるが、ここからでは…

…!

「グッバイガールズ! 来世ではせめて苦しまないよう、ミジンコなどに生まれてみることをお勧めしましょう! ギヒャーハハハハハア! ブラストカノン、トリガー!」

「くそっ……!」

「こんなところで終わりなんて、冗談じゃないわよ……!」

鈴と共に悪態をつきながらも、奴の攻撃を防ぐことは出来そうになかった。

迫りくるエネルギー光を前に、私たちはもつためかと目を閉じ、

「またこういうタイミングか。まあ、嫌いではないがな」

刃が何かを断ち切る鋭い音で、その目を開くことになった。

「さて」

私のために束が作り直した、新たな刃を片手に携えて、私はようやく其処へやってきていた。

それにしても、なんとも悪趣味な代物だな。もはや無人機とも呼べまい。

「千冬、さん……！？」

「来てくれたのね……！ 全く、いくらヒーローだからって寝坊しすぎよ」

「だが、いいタイミングだったろう」

凰ふあんとナターシャの言葉に、皮肉気に唇を吊り上げながらそう答える。

と、目の前で無人機……いや、デビルとでも呼称しておくか。わかりやすい名だろう。デビルが音声を響かせる。

「織斑千冬、機体情報無し。なるほど、貴女が共鳴者ですね？」

「なんのことだかさっぱりだが……、貴様は斬っていい相手だろう。」

とつとと終わらせよう」

新たな刃、《雪片零型》ゆきひられいがたを構え、精神を集中させる。

束の手によって作り直された私の新たなISが私の体に良く馴染んでいることもあるのか、相手の動きは手によるようにわかった。

「では、斬り殺しましょう！」

直後、両手の武器を刃へと変えてデビルが突っ込んでくる。

両手の猛攻を片腕の刃で受けきりながら、私は静かにその動きを観察していた。

「動き自体は本物だが……、破壊に囚われただけの存在か」

確かに、生半可な相手ではない。が、常軌を逸してはいても常識から逸脱しきっているわけではない。なら十分対処できる。

少なくとも、今の私と、私の専用IS『散桜』ちぢやくならば。

「凄い、あの猛攻を軽々と……」

「やっぱり強いわね、千冬……」

更識妹とナターシャが何か言っているが、まあいい。

この『散桜』は私に不要な機能を極力排し、徹底的に私が刃を振るうためだけの機体に調整してある。故に、ISの特徴である視界の広さなどもなくなっているが、それでいいのだ。

カチリ、カチリと頭の中に響く音。不思議と、私はそれが何なのかがわかる。たしか、以前グリム達三人が襲撃した際に『打鉄』に乗った際にもほんの僅かに聞こえた気がする音だった。

それは、共鳴の波長。私とISコアの共鳴の音。

その歯車が噛み合ったとき、私はようやくこいつを使いこなせる

ようになる。

ならば、その調整のためにこいつには踊ってもらおうとしよう。

「さあ、ゆくぞ《雪片零型》。奴を切り伏せる」

「面白い、いいですよ貴様！ 返り討ちでサンプルにしてあげましょう！ ギヒヒヤヒヤハハハハハハアー！」

不愉快な笑い声が響く中、私とデビルが激突する。
切り伏せる、この力で。

第87話 起死回生（後書き）

千冬さん、新ISと共に前線復帰。そして新たな力の覚醒も間近に。
新たなISのワンオフをお楽しみに！

第88話 超常の戦い

二度、三度と斬りあう中で、『散桜』と私はゆっくりと重なって行っていた。

デビルの刃は大して速く感じない。速いはずなのだが、こちらの知覚の速度自体が増しているような感覚だった。

「死ぬがいい、旧世代！」

「黙って斬られることもできないのか、ポンコツめ」

罵倒とも取れるような言葉を一息で斬り捨てながら、私は更に《ゆきひられいがた雪片零型》を振るい装甲を刻んでいく。

まるで熱されたナイフでバターを切るようにあっさりと切り裂かれて行く装甲を足で蹴飛ばしながら、剣道の型に嵌っているように嵌っていない、半ば本能に従った刃を振りぬいていくうちに、私の視界が徐々に二重に見えてくる。

これは……。

最初に『白騎士』に乗ったときに、私は不思議な感覚を感じたことを覚えている。

それと同じものが、たった今私の体の中から沸き起こってきている。とても奇妙だが、嫌な感じではなかった。

貴女が、わたしのご主人様？

お前は？

私は散桜。貴女の名前は？

散桜、私のISの名。ということは、この声の主はISコアなの

か。

ISコアには人格のようなものがある、という話は有名だが……。なるほどな、こういうことになっているのか。しかし、なんというか。戦っているのに戦っている実感が湧かないというのも不思議なものだ。

私は織斑千冬。知っているか？

うん、知ってる！ お母さんも皆も言ってる人だ！

お母さん、というのはおそらく束のことだろう。アイツが母親とは、なんとも不思議なものだ。

そして皆……、他のISコアのことだろうか。

それなら、私もちゃんと使ってくれる？

ああ。そのために私がここにいる。

そっか！ それじゃあ、一緒に戦おう！ よろしくね、ご主人様！

そう聞こえた直後、二重にダブっていた視界が唐突にクリアになる。

脳内のあらゆるデータが統合され、私に最適化されたものへと変化して行くのが自分でも解った。

そのデータによれば、自身のISと共鳴し合い、能力を相乗的に高める力。それが、私のものなのだという。

だが、まあいい。なぜそんなデータがあるのかも、データ自身の信頼性もどうだっていい。

唯一つ、奴を切り伏せるだけの力があれば、それでいいのだ。使い道は私が決める。

「……気配が変わりましたね？ まあ、斬ることに変わりはないの

ですが」

「斬れるか、私が」

すつと目を細め、刃に手をかける。

もはや、こいつを斬ることに何かを感じることすらない。そういう風に出来上がったのだから。

「グギガ、ギヒヤハハハハ！ 斬れますとも、柔らかな肉を切断することに大仰なナイフなど必要ありませんがねえ！」

「……愚かな。武装特性、単一技能同時発動。ワソオフ・アヒリテイ《剣舞》！」

口にするかしないかといったところで、手にしていた《雪片零型》の刃が細分化されていく。

それは一つ一つがエネルギーを刀身とした刃の核となっていく、私の周囲へと配置されていった。

一夏の《零落白夜》の反シールドエネルギーを刀身に仕立て、それを五〇の小さな刃へと変える。それが私の単一技能の力だった。根元すら残らなくなった《雪片零型》は、その刀身が全て反シールドエネルギーで形成され、細く鋭い刀の形へと変貌する。

「さて、散るがいい」

刹那、踏み込みに殆どのエネルギーを注ぎ込んだ私は、五〇の剣軍を引き連れてデビルへと刃を叩き込む。

一撃目、肩。二撃目、胸。三撃目、腕。四撃目、足。

そこから数えて合計五一の刃を突き立てられたデビルは、こちらへとそののつぺりとした口しかない頭部を向けてくる。

「ギ、きさ、まアアア……！！」

「まだ動けるのか、頑丈な奴め」

恨み言を言おうとしたその頭部を、《雪片零型》で真つ二つにぶった切つてやる。

その衝撃でコア部分が崩壊したらしく、デビルの体は一瞬で溶け黒い液体へと変わった。

「か、勝っちゃった……」

「つていうか、そのISは……？」

「束に依頼したものだ。誰にも言わないよ、四人とも」

ナターシャと凰の言葉にそう返すと、二人は猛烈な勢いで首を縦に振っていた。隣にいた二人も、ゆっくりだが焦ったように。

さて、まあ。終わったようだな。

そう思っていたとき、どこかからとんでもない爆音が鳴り響いた。

「なにが……っ!？」

「全員付いて来い、すぐに脱出するぞ!」

私の声に首をかしげているが、説明している時間はない。
この爆発は、十中八九アイツのせいだからな。

「ぐっうっ」

刀身が爆ぜ、勢い良く吹き飛ばされる体。
その髪は金色に輝き、その目には無心で力を振るう女性の姿があった。

「どうした、そんなものか」

「まだ、まだ……っ！」

「……そうか」

何とか立ち上がってその女性、葵と対峙したスコールの目に、淀みは欠片もなかった。

彼女と相対するときに必要なのは、壮絶なまでの覚悟である。

それを持つことはすなわち、命の取り合いを是とする者であることを証明することに他ならない。

であるならば、己の心を曇らせるものは全て思考から排除することなど、スコールのような『高み』に魅入られた存在にとっては容易なものだった。

それこそ、脳内を書き換えるナノマシンを自力で駆除できてしまっただけだ。

「はあああああ！」

「踏み込みが足りん！」

腕部だけを具現化し、一振りのブレードでもって斬りこんで来たその一撃を、葵は同じく呼び出した『ブレイド』でもって打ち返す。痺れなど、感覚などとうに忘れた。あるのはただ、打倒の気迫、それだけだった。

「おおおおおっ！」

「甘いつ！」

喉を狙った突きからなだれ込む様に胸への袈裟切りへと形を変えたそれを、葵は横笛のように口にくわえた《ナイフ》の切っ先で受け止め、そのままの体勢から独楽が歪に回るように、呼び出した《アックス》の刃を下方から競り上げる。

「まだ、だっ！」

ガギャン、と音高く跳ね上げられた斧を、あろうことか右腕の装甲に食い込ませることで文字通り食い止めたスコールが、激痛に苛まれている右腕の手中へとマシンガンを呼び出す。

咄嗟の行為だったが、その目的は確かに達せられた。

葵の心臓と銃口が直線で結ばれた刹那、スコールは手中のそれを握り潰すかのごとく握り締める。金属の歪む音と共に引き絞られた引き金が、その銃口へと弾丸を送り出す。

乱雑な火薬の爆ぜる音。それに混じってスコールが確かにその耳で聞き取ったのは、『金属同士のぶつかり合う音』だった。

「甘いと、言っただぞ」

「く……っ！」

互いにそれはわかりきっていたこと。

銃口より大気を疾駆せんと飛び出した全ての弾丸を、葵は瞬時に展開した『ナツクル』によって弾き落としていた。

麻痺していたせいで感じなかったのだ、巨大な斧の柄には、誰の手も添えられていないことに。

そしてその手にはナツクルが展開され、弾丸を阻んでいる。次の瞬間には、両者の位置関係は逆転していた。

「まだ、まだあああああ！！！」

上から押される位置に動いても、いまだスコールの意気は途絶えない。むしろ、追い込まれば追い込まれるほどに、その眼に灯る輝きは強く増していつているようにすら見えた。

片手ではブレード同士の競り合いを、もう片方の手ではナイフと拳での斬りあい、殴り合いを。時折役目を逆に変えながら、二人はひたすら戦っていた。

（ああ、貴女とこうしていられる日が来るなんて　　）

戦いの最中、スコールは想起する。彼女が葵と出会った日のこと、そして決別した日のことを。

昔、スコールはある任務の都合上、葵の中学に教師として赴任していた。

その頃の葵はただひたすらに自らを鍛えていた少女だったが、既にその強さはスコールを超えていた。

そんな彼女とたった一度だけ言葉を交わしたスコールは、すでにそのとき彼女に想いを囚われていたのだろう。気づけば戦いを挑み、そして敗北した。

それから、彼女とスコールはたまに話をしては戦い、そしてスコールがぼろ負けするという不思議な関係になっていた。

一月も経った頃だろうか、任務の終了したスコールは、迷わず葵を勧誘した。だが、彼女はその誘いに乗らなかった。

そのとき、スコールは悟った。彼女と自分の歩む道は、寄り添ってはいても交わることはないのだと。分岐点はなく、交差点もない、平行した一本の道。

だからこそスコールは彼女の人柄、そして強さに惹かれたのだ。その思いが果たされることがないと知ったから。

決して手に入るものがないものを、追い求めたくなってしまうから。

「だから、私は　ッ！」
「おおおおおおおおおっ！」

愚かだと笑いたければ笑うがいい。

そう言うかのごとく、スコールはその胸に吸い込まれるように突き立てられる刃を、おかしそうに見つめ、受け入れていた。

背中からまっすぐに血のりのべっとりついた刃を生やし、スコールは力なく葵にその身を預ける。当たり所が悪かったのか、視界がかすんでいた。

温かだけを頼りに体を預け、スコールは必死に待機状態に戻った、ネックレス状態のISを葵の手に握らせる。その手にも、既に武器は握られていなかった。

「　　どうして」

「ん……？」

「どうして、さっき避けなかった。避けられたはずだ、貴様なら」

託したように手に握らせた自らの手を、葵は放さなかった。

そのことに少しばかりの喜びを覚えながら、スコールは言葉を紡ごうと口を開く。

彼女の生の中に、己が存在したことの証明のために。

「　　だって、愛して、しまつたんだ、もの……」

既に視界が効かなくなってきたスコールは、抱きつくように葵に手を回しながらそう言った。

それから、その温もりに安堵を感じ。

最後に彼女は、微笑んで逝った。

愛に縛られ。

高みに魅入られ。

何も手に入れられず。

そうしてようやく、季節外れの土砂降りは

、

終わりを迎えた。

第88話 超常の戦い（後書き）

無人機、スコール撃破。ちなみに葵は操縦区画に直接突っ込んでお
ります。

次回は日本代表と他の仲間たち。

第89話 退避

「っ、はぁ……はぁ……」

香織の脳内に侵入してから現実世界で数分が経った頃、キティはその額にうつすらと汗をかきながらも意識を取り戻した。

荒い息を吐きながら床に膝をついたキティは、心配そうに香織とキティを見つめるラウラへと視線を向ける。

「とりあえず、脳内の情報処理回路の強化は済ませましたわ……。害はありませんが、目覚めるのに時間を必要とするかもしれないかもしれませんわ」

「だが、もう苦しむことはないんだな？」

「ええ。ただ……、回路の修復と強化のために、封印された記憶も開放してしまいましたが……」

そういつて俯くキティに、ラウラはそつと手をかける。

今の状況で戦うことは、誰にも出来そうになかった。

「香織がそんなことで変わるものか。大丈夫だ」

「……そう、ですわね。私としたことが、しおらしくなってしまいましたわ」

「それで、これからどうする？」

キティが脳内に侵入している間に体力を回復させた筈が、セシリアに肩を貸して近寄ってくる。

ところどころから血を流してはいるが、命に別状はない。

「この先のコアを破壊しなければいけませんわ。キティさん、何か

知っていませんか？」

「どうして私に？」

「それほど体力を消耗している状態で、三対一で戦うわけでもないだろう？　少なくとも私は遠慮させてもらうぞ」

軽く肩を竦めて言った箒に、キティは苦笑しながらも仕方無しと言う風に頷いた。

と、そこで突然箒の通信回線が開く。そこに映し出されたのは、千冬の顔だった。

『全員無事か？』

「織斑先生？　ええ、少し事情が込み入ってますが無事です。それより、そっちは」

言葉を続けようとした瞬間、機体全体が大きく揺れ、爆音が鳴り響く。

さっきも同じような爆発があったが、そのときには周囲を警戒していたせいで深くは考えていなかった。

「これは、いったい！？」

『詳しい話は後だ！　全員急ぎ機体を離脱するぞ！　コアは一之瀬姉が破壊している！』

「承知しました！　皆、すぐに脱出だ！」

「ええ！　……いえ、お待ちになってください、箒！　あれを！」

『どうした、何が？』

セシリアの声に疑問を投げかけた千冬だったが、唐突にノイズが走ったせいで通信が切れる。

通信回線を妨害したのは、突然通路の奥から現れた黒い影。無数の無人機たち。

それを確認した箒は、即座に両手の剣を構えて迎え撃つ姿勢をとった。明らかに、相手はこちらを叩くつもりだろう。

「キティ、ラウラ、セシリア。香織を連れて退避しろ」

「箒、お前はどつする！？ まさか戦うつもりか！？」

「案ずるな、この『紅椿』はこの状況では一番戦闘に向いている」

言葉と共に《けんらんぶとう絢爛舞踏》を発動させ、シールドエネルギーを回復させる。

次の瞬間には、箒の視線は黒の群れへと注がれていた。

その様子を見て、言葉は無駄だと悟ったのか。ラウラとキティが香織を担ぎ、セシリアは周囲を警戒すべく《ブルー・ティアーズ》を空に舞わせる。

「洗礼だ、必ず生きて戻れよ」

その言葉で、三人のISのシールドエネルギーが全て回復する。

紅と黄金の混じった粒子が、シールドエネルギーを回復させていた。

「……私まで、なぜ？」

「香織が何者なのか、お前が何者なのか、そんなことはどうでもいい。お前は香織を助けた、なら一度助けられても文句を言うな」

滅茶苦茶な理屈だったが、箒はそれだけを言い残してそれきり口を噤む。かちりと、刃を返す音がした。

「……お前こそ、死ぬなよ」

「ふ、無論だ。さあ……、行け！」

言葉を聞か聞かないかのうちに、三人は香織を担いで走り抜け

て行く。

それをISの視界で捉えた筈は、軽く二、三度床を踏みしめてから刃を煌かせる。

直後、黒い群れと一筋の紅が激突した。

煙を噴き上げて崩壊する通路。その瓦礫の山が、僅かに震える。

次の瞬間、中から巨大なメカアームが突き出され、穴を開けるようにがしやがしやとせわしなく動かしだした。

そうして出来た穴の中から何とか身を乗り出した少年、織斑一夏は、行き着く暇もなくもう片方の武装していない手を引き上げる。

その装甲で覆われた手の先には、シャットロット・デュノアの手が握られていた。

「無事か、シャル？」

「うん、何とか……。それより、会長と先輩は！？」

「生きてるわよー、ぶいぶい」

「こつちも問題ないっす。にしても小型爆弾の威力じゃないっすよ、今の……」

瓦礫の上で集合した四人は、それぞれ互いが無事なことを確認してから廊下を見渡す。

とんでもない威力の爆発のせいで廊下は殆どが吹き飛び、大穴が開いている。ISなら移動は問題ないにしろ、先ほどまで戦ってい

た相手は最早生死不明と判断するしかなかった。

「とにかく、先へ進まないと」

「っと新手ッス！」

恋華がほう、と息を吐きながら話していた途中で、唐突にフォルテが《アイス・メイカー》の弾丸を撃ち放つ。

着弾地点にいた黒いIS、無人機に弾丸が当たり、続け様に発砲された次の弾丸がそれを装甲の内部へと打ち込んで行く。

一瞬で破壊された無人機を踏み倒すようにして、その後ろからぞろぞろと次の相手が現れてくる。まるで、昆虫が何かのように。

「こりゃ、まずいわね……。アルカエストは使えるけど、もう剥がす人いないでしょ？」

「撤退するしかないッスね」

「まって、後ろからも来てる！ 今のエネルギーじゃ……！」

「くそっ、ここで終わりなのかよ！？」

それぞれのシールドエネルギーは限界値の三分の一を大きく下回り、『白式』に至っては一桁に大きく迫っているほど。この状態で交戦したとしても、まともな戦果は到底期待できないだろう。

しかし、戦わなければ逃げることも出来ない。完全な詰みの状態だった。

少なくとも、盤をひっくり返されない限りは。

「《一・過》ひとつめじす」

凜とした声。

響き渡ったそれと共に、後ろから迫ってきていた無人機の一団が

斬り捨てられる。横風の一撃が、廊下の壁面に一文字の傷跡を刻み付ける。

「皆さん、無事ですか！」

刃を片手に辿り着いた早百合さゆりが声を上げる。

『打鉄』によく似た姿だったが、赤いラインが所々に入れられているのは専用機の証だろうか。訓練機のそれよりも攻撃的な流線型のフォルムも特徴的だった。

「早百合さん！」

「全員無事みたいです。私が殿を務めます、撤退しましょう！」

「でも、まだコアが！」

「今は全員の命の方が優先です！ 急いで！」

「仕方ないわ、全員行くわよ！」

早百合に同調した恋華の言葉で、全員が頷く。冷静にならずとも、今の状況で正面突破は不可能だとわかったのだろう。

恋華を先頭に、ダリル、一夏、シャル、そして殿に早百合を置いて一向は撤退を開始した。

後方から迫ってくる黒い群れを斬り伏せながら、時には飛んでくる熱線やレーザーを実体シールドで防いでいく。その最中、恋華の元に通信回線が開いた。

『全員無事か！？』

「千冬さん！ どうしたの！？」

『ついさつき、篠ノ之達の班と連絡がつかなくなった。私はこちらの班を外へ出した後、中心部分から再突入を仕掛ける。お前たちは外で鳳たちと合流して学園へ戻れ。いいな』

「わかったわ。気をつけて」

『ああ』

やや焦った様子の千冬の顔が消え、今度は別の顔、榊原の顔が映し出された。

『織斑先生の通信は聞いた？』

「ええ、聞いたわよ」

『貴女たちも気をつけてね、まだ相手はたんまり残ってるみたいだから』

「りょーかい」

榊原の声に軽く返答すると、回線を閉じる。

とにかくここから早く出なければならぬ。その想いを新たに。

スコールとの戦いの後、コアの一つを破壊した葵はメインフレームにアクセスしていた。

少しでも情報を得るために、わざわざ破壊せずにいたその内容を見て、思わず葵は歯噛みする。

大規模殲滅型IS『ファントム』のコアは三つ、全てを擬似コアで代用可能。

それはつまり、このふざけたデカブツがあらゆる戦争に誰でも利

用でできてしまうということだった。

その事実を見つけた葵は、更に何か情報がないか探して行く。すると、かなり奥の方に小さく隠された情報が残されていた。

「コアの、自爆？ これはまさか……！」

コアの破壊、及びメインフレームへの不正アクセスが確認された場合、作成者の権限により当機は爆破されます。爆破の範囲は半径十数キロに及び、主要都市内で爆破させることで、その国の継戦機能を麻痺させることが出来ます。

その情報を表示させた数秒後に、画面全体に大きく赤い文字が映し出される。

それは、紛れもなく爆破へのカウントダウンだった。

主幹コアの破壊、メインフレームへの不正アクセスを確認。全システムを破棄した上で自爆シークエンスに入ります。職員は至急退去してください。繰り返します

「ちくしょう、ふざけやがるクソ親父が！ コンピュータ、爆破を停止させる手段は！」

回答。存在しません。爆破まで、残り九分四八秒。

無常な答えに、思わず歯噛みする。

と、その爆破のカウントダウンの下に小さく表示されている文字があった。

それをみて、葵は思わず眩暈すら覚えてしまう。

自爆に際し、標的の首都近辺まで移動します。尚、移動して

いる間もカウントダウンは進行します。

標的の首都、つまり東京。

日本の首都である東京の上空で、この巨大なISが爆発すれば、日本は壊滅的どころではない被害を被ることになる。

「上等だ、とめてやるよクソ親父」

吐き捨てるように呟き、葵は通信回線を開いた。

爆発まで、残り九分二七秒。

第89話 退避（後書き）

巨大ISは量産爆弾に出来たでござるの巻。
果たして単身残った筈はいかに。
そして日本はどうなるのか。乞うご期待！

第90話 脱出路（前書き）

ちよつと短めです。

第90話 脱出路

爆破まで、残り八分二四秒。

黒い群れと戦っている最中、そんな放送が流れてくる。

自爆か、一体何があったのか。

少なくとも、早いところ活動をとめなければ危ないことだけは確かかなようだ。

「はああっ！」

一振りで数体を一斉になぎ倒しながら、更に奥へと進んで行く。

大分先まで進んできたおかげか、心なし敵の数も少なくなってきたように思える。

帰りの時間も考えれば、せいぜいあと二分が限界か、急がなければ。

シールドエネルギーは《けんらんぶたい絢爛舞踏》で回復させているから、あとは私の気力と体力次第ということだ。

「それにしても、まるでゴキブ……」

言いかけて口を閉ざした。いくら戦士と云えど、アレはダメだ。

あの黒くて楕円形の生命体、台所や風呂場、トイレなんかによく出没する。

……意識を切り替えよう。

ここから先はほぼ一本道だろう、連中の湧いてくる方向に進めば辿り着けるはずだ。

ただ問題もある。それは、連中の数が心持減ってきているとはいえ、それでも十分すぎるほどに多いということだ。全くうんざりする

る。

『筭、筭聞こえる!?!』

「ああ、なんだ? どうした鈴」

突然開いた通信回線の向こう側には、鈴の顔が映し出される。
どうやら随分と焦っているようだが。

『どうしたじゃないわ、急いで脱出して! 爆破予告は聞いたですよ!?!』

「コアを全て壊せば止まるだろう、動力源を失っても動き続ける機械などあつて堪るか」

『そ、それはそうだけど! 危険よ!』

「元より承知の上さ。話はそれだけか?」

『ああもうっ! わかったわよ、好きにきなさい! けど、いい? 絶対に生きて戻ってくることに、指一本でも落としてきたら私がぶっ飛ばすからね!』

怒鳴りながらも、そう言った鈴は溜め息をつきながらそう締めた。
ふむ、それではもう少しがんばらなければな。

「わかったわかった。そっちも、合流したら香織達を頼むぞ」

『任せといて。気をつけてね』

「ああ。そっちもな」

通信を切り、わざわざ待っていたらしい無人機たちへと視線を向ける。

すると、突然無人機たちがガチャガチャと震えだし、次々に分解されていく。

ああ、前言撤回だ。こいつらこのために待っていたのか。

「全く、お前たちは合体が趣味なのか？ まあどうでもいいがな」
言いながら手近な数体を一齐に切り伏せる。その間も、合体は止まらなかった。いい隙だ。

そう思いながら斬っていくと、十数体目で合体が終わっていた。ふむ、私の背丈の数倍はあるようだが……。

武器情報を更新、対象に最も有効的な武装を使用します。

音声が鳴り響き、奴の背から数十基もののビットが展開される。全てが射撃用のBTビットか、面倒な。

「まあいいさ。やれるならやってみろ、木偶の坊が」

刃を構え、まっすぐに相手を見つめる。
さて、やるか。

「くそつ、なんという数だ！」

「キティさん、香織を放してはいけませんわよ！」

「解っていますわ！ 私がお兄様を放すとお思いなの！？」

「喋ってないで戦え！ くっ！」

プラスマブレードで一気に二体を切り裂きながら、熱線を《A I C》で停止させて砲身を《シュヴァルツ・ドライト》で貫く。その爆発でもう一体を破壊すると、私の背後にいた三体を《ブルー・ティアーズ》の閃光が貫いた。

「いい腕だな！」

「お褒めの言葉ありがとうございますわ！ キティさん、後ろです！」

「見えてますわよっ！」

軽口を叩きながらも、背部に取り付けられた特殊武装《尾》によって、キティの背後にいた二体が一斉に破壊される。まったく、なんでこんなに敵がいるんだ？ 行きの通路を遡っているだけのはずなのだが。

「キティ、なんでこんなに敵がいる？」

「擬似コアは既に量産体勢に入っているということですわ！ 乗ったときにデータを見ましたが、五〇〇〇はいましたから！」

「ふざけてますわね……！ いくら絶対防御がないとはいえ……」

全くだ。ISコアは五〇〇もないというのに。

「つて、まで。量産だと！？ なら、まさか！」

「ええ……。戦争が起こりますわよ、確実に」

ああ、くそつ。

擬似ISコアは厳密にはISコアとは違うものだろうから、ISを戦争に使用しないというアラスカ条例は無視できる。

真っ先に擬似コアを手に入れた国がどう動くか……。まあ、小さな国辺りならまだいいが、それなりに力がある国が手に入れてしま

つてはお終いだ。

「お二人とも、話は後で！ 今は脱出が先決ですわ！ 箒にどやされますわよ！」

「呼び捨てにしたのか？」

「ええ、いつまでもパートナーをさん付けというのもあれでしょう？」

「話は後でと言ったのは貴女でしょう、セシリア・オルコット！ お兄様を危険な目に遭わせたくて！」

「ああ、わかったキティ！ そうカッパするな！ 突破するぞ！」

「ちよつとした世間話でしょう！ 甲高い声で叫ばないでくださらない！」

「なんですって！？」

「セシリア、突つかかるんじゃない！ いいから先を急ぐぞ！ キティも反応するな！」

「でも向こうが！」

「黙って進めないのかお前たちは！？」

随分息が合ってるな。そういえば喋り方も良く似ているし。

この二人が一斉に喋ったら何を言っているかわからなくなりそうだな。

……いや、わかるか。声が違う。というかなんでこいつらはこんなに仲がいいんだ？ あ、いや、悪いのか？

「セシリア、前方を吹き飛ばす！ 手伝え！ キティは香織を頼む！」

「わかりましたわ！」

「お任せくださいな！」

レールカノンに弾丸を装填し、次々に前方の黒い群れへと撃ち放

っていく。

《ブルー・ティアーズ》の光線と《スターライトmk?》の武装特性、《Star Right Strike 星明かりの一撃》の援護もあり、眼前で壁となっていた群れは殆ど一掃できた。

残りを《シユヴァルツ・ドライト》で破壊しながら先を急ぐ。
にしてもこいつら、仲が悪いな。

複数の仮想ディスプレイに巨大ISの姿を映し出しながら、東は一人キーボードを叩いていた。

「一之瀬巖隆……、これを狼煙にするつもりか」

その目は『天才』篠ノ之束ではなく、『天災』《人類最低》としてのもの。

ディスプレイには覆いかぶさるにして情報が乱舞していた。
片手間でシミュレートした、都心を中心とした爆発のシミュレーション情報もその中に含まれている。

それによれば、爆心地は数十年は人が住めなくなる土地になるとされていた。

「東京がどうなろうと知ったことじゃあないけどね……。私の子供たちを巻き添えになんてさせないよ」

『データの収集が完了しました。次は何を?』

「みんなのISの強化のためにデータを引き出して。あーちゃんが使えるISの設計もしなきゃ」

『擬似コアを使用した巨大ISはどうしますか?』

「必要ないよ、すぐ壊れるから」

その言葉にこめられているのは、友人たちへの無償の信頼。だからこそ、束はこの事件が終わった後のことを考えていた。

「とにかく、まずは戦力を増やさなきゃね……。けど、あんまりコアを増やしてもあれだし」

『お母様、彼らに助力を頼んでみては?』

「彼ら? …… ああ、あの子達か。ふふ、いいかもね」

そう言っただ束は、ディスプレイをもう一つ呼び出して、どこかへと連絡を繋ぐ。

戦いが終わるまで、もう少し。

第90話 脱出路（後書き）

セシリアとキティは似たもの同士、無意識にキャラ被りを意識しています。

そしてラウラに苦勞人フラグが。

更に、束の連絡している者とは一体？

事件の終了にはあと少し掛かりそうです。

次回も乞うご期待。

第91話 作戦終了（前書き）

切りのいいところで止めたので、ちょっと短め。

第91話 作戦終了

「鈴、簪、ナターシャ!」

「先輩も、皆さんご無事のようで」

無数の黒いISを破壊しながら、なんとか逃走路を突破した私たちを待っていたのは、丁度こちらへ飛んできていた鈴たちだった。こちらをみて安堵のため息をついたような鈴たちだったが、キティが香織を担いでいるのを見て表情を硬くする。

「アンタ……! なんでいるのよ!」

「色々話さなければいけないことはありますが、とりあえず今私が貴女方と戦うつもりはございませんわ……」

「な、なによアンタ……。急にしおらしくなっちゃって……」

「鈴、キティは香織が突然倒れた時に香織を助けたのだ。今のところは敵ではないから、そう睨むな」

「……わかったわ。けど、香織は私が担ぐから。ほら、こっちに」
「ええ、どうぞ」

ゆつくりと、キティが鈴に香織の体を預ける。

まだ少し睨んではいるが、仕方あるまい。あの取り乱しようを見なければ、とてもキティが敵ではないとは信じられんだろうからな。

「ところでキティ、他の連中はまだいるのか?」

「スコールは恐らく死んでしまいましたわ。……きつと、お姉様に気持ちを伝えられたでしょうね」

「なぜわかる?」

「この戦いが始まる前に、スコールの中にいたナノマシンは彼女自身が駆逐してしまいましたから。そんなことができるほどの覚悟で

臨んだ戦いの相手がお姉様では、もう……」

キティいわく、自身の体内には様々なナノマシンが入っているらしい。私の唾液にも自然治癒を少しだけ促進させるナノマシンが含まれているが、それをめちやくちやに多くしたような状態だな。

その中に、脳を弄って自分への好意を増すナノマシンがあるらしく、スコールとオータム、そしてエムと名乗っていた少女の中に入れたらしい。

今反応が確認されているのはエムだけだという。……そうか。

「……やはり、辛いものですわね。自分で捻じ曲げたとはいえ、愛してくれた人が死ぬのは」

「意外だな。お前はそんなこと考えないと思っていた」

「私だって、そのぐらい思いますわ」

「それじゃあ、オータムが死んだことも知ってるのね？」

「ええ……。素直ないい子だったのに……」

鈴の言葉にそう返したキティの目じりに、少しだけ光る涙が見えた。

……泣けるのだな、こいつも。

「オータムは、どんな最期を？」

「悲惨だったわ。黒いISに喰われてね……」

「喰われた！？ まさか、奴らは人を喰うのか！？」

「多分……。人を喰って進化してたから……。千冬さんに、斬られたけど」

教官、いや、織斑先生が……。

それにしても、なんという相手だ。人を喰うなど、機械の域を超えている……。

「そう言えば、織斑先生はどうしたんですの？」

「千冬さんならとくに真ん中の突入経路に突っ込んでいったわ。すれ違わなかったの？」

「いえ、まったく」

「……まあいいわ、とにかく私たちは何が起きてもいいように待機しておきましょう。キティ、もしものときには協力してもらおうよ」

それぞれが言葉を交わす中で、私はそつと目を伏せた。
簾、帰ってこいよ。

「ずえあああああああ！」

気迫の一閃が合体したISを真つ二つに斬り裂く。

その直後、私の背後でそれが盛大に爆発した。……よし、倒したな。

残された時間は六分と少し、その間にコアに到達し、破壊して退避しなければならない。

「いけるか、紅椿」

きらりと、問いに答えるように装甲が光る。
体がやや重い、やはり実戦の空気が体に負担をかけているんだろ

う。だが、ここでへばってもいられん。

ドンツ、と空気を蹴りだして群れへと突っ込む。

すれ違いざまに数体を斬り捨てながら、通路を突き進んでいく。

残るコアは二つ、破壊できるか……！

通路を進み、邪魔な壁を切り払ってさらに進む。そうしていくうちに、目の前に巨大な空間が広がっているのが見えてきた。

「ここか！」

とても巨大な空間の中心には、手の平大の大きさの丸いコアのよなものが浮かんでいる。

本物のISコアが透き通った水晶なら、あれは少し曇っていた。フィルターを通して見ると、そこから膨大なエネルギーがこの機体全体に供給されているのが視覚化される。

まるで生きた爆弾だ。こんなものが爆発すれば、ドカンではすまないぞ……。

「解体か、破壊か。どちらがお好みかな？」

警告！ ここは現在立ち入り禁止区画に指定されています！
直ちに退去しなさい！ 指示に従わない場合は排除します！

「ほう、面白い。やってみろ！」

排除決定、ハイゴーレム、起動します。

その音声の直後、コアの向こう側の壁が開く。

その向こうから出てきたのは、ISと同じ大きさの黒と白のコントラストで配色された機体。

一目でわかった。これは今までのものとはまるで違つと。

「当該対象、確認。排除行動を開始します」

「切り刻んでやるさ」

直後、私の《空裂》^{からわれ}と奴の刃が交差し、金切り声を上げた。踏み込みの速度、角度、威力、どれも私と全く同じだ。こいつ、今までの私の戦闘データを総合したものを使っているのか。

「はあっ！」

人間ならすぐには反応できない角度から突き上げた《雨月》^{あまづき}を簡単に止めたハイゴレムとやらが、返しの刃で冗談から斬りつけんと、その腕と一体化した刃を振り上げる。

そこへ《空裂》の切っ先を振りぬき、腕を一本斬り飛ばした。

「ふん、その程度か！」

「当該対象の戦闘能力、確認完了。武装特性の再現を開始します」

「なんだと……？」

言葉を発しながら、奴が刃を脇に構える。ばちばちと気味の悪い黄土色のエネルギー光が漏れ出してきていた。

それを見て、私もすぐさま《空裂》を鞘に戻す。

そして、その直後。

「武装特性、《空海断絶》^{チヘイヨワフル}発動」

「舐めるなよ……！ 切捨て御免ッ！ 《空海断絶》^{チヘイヨワフル}！」

奴のエネルギー刃とこちらのエネルギー刃がぶつかり合い、轟音を撒き散らしてぶつかりあう。

その直後、奴の刃の後ろから更にもう一撃が放たれた。

クソ、負担を考えなくていいから連発できるのか！

「万事休すか……！」

「馬鹿者、まだ早いぞ」

こちらへ迫る攻撃の最中、硬直の最中に聞こえた声。
その直後、全てのエネルギー刃が桜色の斬撃で消し飛ばされた。

「この声は……」

「無事のような。とっとと片付けるぞ」

声の主は、白と桜色の装甲に身を包み、体の周囲に無数の刃を浮かべながらやってきていた。

皮肉な笑みを浮かべながら、刃を軽く振るった千冬さんは、瞬きの間に接近すると、一息でそれを切り裂いて行く。

「ふん、この程度か。やはり人為的な進化を遂げた程度では」

「なぜ、ここに？」

「バカが残っているだろうと思ってな。とっとと破壊するぞ」

「もう一つのコアは？」

「葵が破壊した。既に脱出しているから、急ぐぞ」

一之瀬先輩、やはりあの人が一番の規格外だ。ISに生身で勝てる人間なんてあの人くらいだろう。

と、喋っているうちにコアに刃を食い込ませ、木っ端微塵に破壊する。これで止まるはずだ。

エネルギーの供給停止を確認。現時点の残量エネルギーでこの機体を爆破します。

……止まるんじゃないのか、最悪だ。

「まあ、予想できたがな。行くぞ！」

「はいっ」

真剣な表情を浮かべた千冬さんに付いて、脱出を開始する。
さて、とつとと逃げるとするか。

「箒！」

「千冬さんも！」

「すまん、遅れた。すぐ逃げるぞ、もうすぐ爆発する」

千冬と箒が脱出した直後、ゆっくりと端の方から巨大ISが爆発して行くのが全員の視界に入る。

それを目にした全員が、その言葉に大きく頷いた。

「千冬、コアを破壊できたのね」

「お前が二つ壊してくれたおかげさ」

「っていつか千冬姉、そのIS……」

「詳しくは戻ってからだ。全員飛ぶぞ！」

声が響いた直後、皆の背後から揺れが伝わってきそうなほどの爆音が響く。

日本まで残り三〇キロ地点の海上にて、巨大ISは巨大な爆発と共に海に沈むこととなった。

第91話 作戦終了（後書き）

ということで巨大IS攻略戦終了。
次回からはまた新たな展開が……？

第92話 終わりの始まり

「皆さん！ ご無事でしたかあああ！」

「山田先生、泣かなくても……」

学園に帰ってきた一行を出迎えた真耶、榊原、エドワースの三人の元に駆け寄った一行は、しかしその表情を少し暗く俯かせた。

「あれ、皆さんどうし……た……」

「一之瀬さん……？ 織斑先生、一之瀬さんは一体……？」

「昏睡状態だ。脳の処理が追いつかないほどの過負荷が掛かったらしい。いつ目覚める？」

「早ければ今晚にでも。長ければ……、年単位で眠り続けますわ」

千冬にそう答えたキティの言葉に、香織にとっても近しかった者たちはもちろん、他の仲間も言葉を詰まらせる。

その中で口火を切ったのは、簪だった。

「でも、生きてる」

「簪ちゃん……」

「生きてるなら、起きるはずだよ。ずっと待つてる」

「……そうね。生きてるんだから大丈夫、腹に穴が開いたわけでもないし！」

「そう、だな。ああ、そうだと」

鈴とラウラが互いにそう声を掛け合う。その目には涙が見えたが、それを問う者は誰一人としていなかった。

「倉持君も、今回はありがとう」

「いえ、こちらこそ。それにしても、無人機なんて代物がいるとは聞いていましたが、トンでもないものですね……」

深刻そうに手を顎に当てて考え込む早百合。

その様子を見て、千冬は小さく笑みを零し、次の瞬間には後ろから恋華に飛び掛られていた。

「こら、恋華」

「んーっ、千冬さん千冬さん千冬さん千冬さん！ 今日是一緒に寝ましょ！」

「ったく……。わかったからひつつくな！ 仕事が終わったらな」
「はーいっ！」

はしゃぐ恋華を見やり、簪は小さく溜め息をついた。
それに連鎖するように、鈴も同じように息を吐き出す。

「向こうは元気……」

「こちとらえらくグロいもん見せられて、ちよつとグロツキーだつてのに……」

地面に座り込んでそんなことを零した二人のそばに、キティが近寄ってくる。

その顔は、どこか儚げな色を残していた。

「……鈴さん、簪さん」

「どったのよ、キティ。そんな顔して」

「ごめんなさい。お兄様をこんな風にしてしまつて……」

「ラウラから聞いているわよ。苦しんでた香織を助けたのはあんただつて。死んでないんだからそれでいいじゃない」

「ですが……っ！」

辛そうな顔で反論しようとしたキティの顔を両手で挟み込むと、鈴は真っ直ぐに目を見つめて笑った。

キティのきよんとしたその顔が本当に香織に良く似ていることに、鈴は不思議な感覚を覚えた。

「今は仲間でしょ？」

「鈴、さん……」

「いつまでも憎むのも、恨むのも、疲れるよ……」
「簪さん……。……ありがとうございます」

小さく頭を下げたキティ。

それから皆は、生きている今をしばしの間噛み締めるのであった。

その翌日。

私たちは寮の食堂で食事をとっていた。

つかの間の休息というべきか、昨日のこともあり今日は一日休みになっている。もちろん昨日参加した連中だけだけど。

っと、自己紹介してなかったっけ。鈴よ、ハロー。

昨日から香織は医務室で眠ってる。いつ目覚めるかはわからないけど、イヴとは会話できたからまだましね。

イヴによれば、今香織は脳内で自分の記憶やいろんな情報を整理しているところらしい。それがいつまで続くかは全くわからないけ

ど、とも。

ちなみに、キティには香織がここで女性と偽っていることを話してあるから、ちゃんと話は合わせられる。はずだ。

「しかし、あれよね。平和そのもの」

「ようやく片付いたのだから、少しくらい休んでも罰は当たらんさ」

「そうは言っけどねえ、大元がつぶれたわけじゃないんだし、やっぱり気になっちゃうのよ」

そう、まだ事件は終わったわけじゃない。あの疑似コアの大元が見つかったわけでもなければ、亡国機業もつぶれたわけじゃない。ファントムタスクなんとかしなきゃいけないって思うのは、高々学生のばかな思い上がりなんだろうか。

「……はあ、なんでご飯の時にこんなこと考えてんだろ」

「鈴、お揚げべちゃべちゃ」

「え？ ……んぎゃああああ！？ ア、アタシのおあ、お揚げがあああ！」

なんとということだ、ちょっと趣向を変えて頼んでみた私のかき揚げそばが……！

考え事をしているうちに麺はのびのびになり、かき揚げはべっちやべちやに……！

最悪だ、終わった……。

「はあ……。鈴さん」

「んうー……？」

「はい」

この世の終わりのような表情で、アタシを呼んだキティの方を向

くと、仕方なさそうに自分のかき揚げを私のそばの上へと放った。
かき揚げはまだサクサクで、汁に浸けていなかったただろうことは
容易にわかる。

「キティ、これ……！」

「あげますわ。私はそばだけでいいですもの」

「で、でも……」

「ほらほら、それまでべちゃべちゃにするつもりですよ？」

「うう……。あ、ありがと……」

礼を言ってから、サクサクのかき揚げを口に運ぶ。からっと揚げ
られた衣がよい触感を作り上げていて、思わず頬を釣り上げてしま
った。

そんな時、突然食堂にあったすべてのモニターの電源がつけられ
る。誰もそんな行動を起こしてはいないのに。

『IS学園の諸君、昨日はご苦労だった。私は一之瀬巖隆、科学者
だ』

声の直後、アタシの少し後ろから何かが壊れる音が聞こえた。

驚いて振り向いて、そして固まる。壮絶な顔でモニターを睨みつ
ける、葵義姉さんがいたから。

『私の作品を随分と破壊してくれたようだな。亡国機業の連中はや
はり使い方が下手だ、あれはもっと頭のいい使い方をすべきだと
いうのに』

「巖隆……っ！ 今度は何をするつもりだ！」

『そこにいたか、私の娘』

「黙れっ！ 貴様は私の父でもなんでもない！」

『ふっ、まあいい。今回、IS学園の諸君には正しい擬似コアの戦

い方という奴を教えて差し上げようと思ってな。試験運用も兼ねている、せいぜい足掻いてもらいたい。では」

ぶつり、と音が途切れる。数秒の嫌な沈黙のあと、静かに葵義姉さんが立ち上がった。

少し離れているのに、その怒気のようなものが肌を撫で付ける。吐きそうになるのを、必死で堪えていた。

「……全員アリーナへ。攻めてくるわ」
「え」

一夏が何かを言おうとした直後、食堂の半分が消し飛んだ。
……え？

「くそつ、全員ISを起動させろ！ お出ました！」
「皆、校舎に侵入されたら一巻の終わりだよ！」
「ちくしょう、何でもありかよ！」

それぞれが毒を吐きながらISを装着していく。
その中で、動揺しながら私も『甲龍』を身に着けて《そうてんがけつ双天牙月》を呼び出す。

「どこにいけば!？」
「ツーマンセルで動いて！ 私は一人でいい！」
「わ、わかった！」
「セシリア、行くぞ！」
「ええ！」

いの一番に飛び出していったのは箒とセシリアだった。
やや嬉しそうな箒と、苦笑しながらもはっきりと頷いたセシリア

が食堂から飛び去ると、続けて一夏とシャルロットのペアが飛んでいく。

……さて、アタシもがんばらないとね。

「キティ、組まない？」

「構いませんわよ」

「では、私は簪と組もう」

「わかった……」

キティと軽くハイタッチして、それから食堂を出る。
それにしても、一体なんでここを……。

「邪魔だ、どけっ！」

手近な三体を一閃して切り崩すと、背後にいる生徒にちらりと視線を向けてから嘆息する。

さっきの放送といい、一体何がどうなっている。あの巨大ISはデモンストレーションだったとも言うつもりか？

とにかく、通信を。

「つと、失せろ！」

しようとしたところで、飛んできた奴を切り捨てる。

よし、これで通信が出来そうだな。

「誰か、管制室誰かいなか!」

……だめか。やはり通信妨害されているようだな。

「あの、織斑先生、一体何が……」

「わからん。だが非常事態だ、地下の非常シェルターまで急ぐぞ。全員遅れずに付いてこい!」

「『は、はいっ!』」「『は、はいっ!』」

生徒たちに声をかけ、廊下を進んで行く。

こちらの方にはあまり来ていないようだが、ところどころ壁に穴が開いている。そこから進入してきたのだろう。

シェルターの入り口のある一階まで降りると、すでに正面玄関は崩壊し、ところどころで教員との戦闘が行われていた。

「全員シェルターの中へ、急げ!」

途中で拾った生徒も含め、約八〇人ほどの生徒をシェルターに押し込むと、外からロックをかける。大規模な爆弾でも吹き飛ばないほどの頑丈なシェルターだが、それでも奴らの攻撃をいつまでも凌げるとは思えない。

最悪、学園を放棄することも考えなければ……。

「千冬さん!」

「恋華か。状況はどうなってる?」

「まさに最悪、襲撃の数は一〇〇〇を超えてるわ。けど、上層部はここを放棄するって考えはないみたい」

近づいてきた恋華と言葉を交わしながら、数体を切り裂く。
しかし、千か。多いな。

「例の黒尽くめといい、一体この上層部はどうなっているんだ？」
「さあ？ とりあえず仕事を片付けましょ！」
「……だな」

背中合わせになりながら、周囲に目を走らせる。
これは、大仕事になりそうだ。

第92話 終わりの始まり（後書き）

さて、一難去ってまた一難。一夜明けてすぐにえらいことが起こりました。

一体ISS学園はどうなるのか？
乞うご期待！

第93話 校舎内の戦い

「はあああ！」

「箒、武装特性は控えるようにしてくださいね！ 周囲に被害が出ます！」

「解っているさ！ しかし、相変わらず滅茶苦茶な数だ、なっ！」

箒の一撃で数体がバラバラに吹き飛ばされ、周囲に当たりそうになったものをリミッターを解除した《ブルー・ティアーズ》で狙撃して消滅させる。

それにしても、確かに滅茶苦茶ですわね。相手の本拠地でもないのにこれほどの数。量産されているというのは本当のようですわ。

それに加えて、今回は侵攻作戦ではなく防衛作戦。どれほどのげるか……。

「それで、どこへ向かう？」

「マップも通信も機能しませんわ、とにかく道なりにすすんでみるしか」

「わかった」

頷いた箒の背後に忍び寄っていた一体を撃ち抜き、それから道を進んでいく。

廊下に響いているのは戦闘の音とどこかが破壊される音だけ、人気なんてまるで感じられない。

無人機を斬り払い、撃ち抜きながら進んでいくと、エントランスの辺りで数体が固まっているのが見えた。

「あれは……？」

「あそこはシエルターの入り口ですわ！ 箒！」

「応！」

《スターライトmk?》のエネルギー光と箒の刃の一閃が無人機に食い込み、爆発音を轟かせる。

周囲に敵がいなかったことを確認したわたくし達は、素早くシエルターのロックを解除して中を覗き込んだ。

「みなさん、無事ですか!？」

「セッシー、今どうなってるの……?」

「わかりませんが……、大丈夫です。皆さんは私たちが守りますから」

中で顔を見せたのは本音さんだった。

不安げな顔の本音さんにそう声をかけると、箒も同じように声をかける。

「本音、お前はシエルター内でパニックが起きないように、目を光らせておいてくれ」

「わかった、気をつけてね……」

「ああ」

「ええ」

心配そうに言った本音さんにそう答え、シャッターを改めてロックする。これではらくは大丈夫だと思っていたですわね。

そう考えていたとき、私たちの視界の前方奥の方に二機が降りてきた。

けれど、それはどう見ても周囲のずんぐりしたような体系でも、四足でも、ましてすらりとした人型でもない。

一機はわたくしの『ブレイブ・ティアーズ』と、もう一機は箒の『紅椿』とまったく同じ形をして、色だけが黒で塗りつぶされている。

中の人間のようなものは黒尽くめで、マネキンや人形のような感じを受けた。

「私たちの模造品か」

「不愉快ですわね」

武装を全て展開し、静かにその二体を睨みつける。

わたくしの『ブレイブ・ティアーズ』も箒の『紅椿』も、肉親から授けられた大切な機体だ。その模造品など、へどが出る。

「箒、お互い自分の偽物を叩き潰しませんこと？」

「ああ、その案乗ろう」

軽く手を打ち合わせ、次の瞬間には箒と共に空を蹴りつける。

オリジナルを確認、破壊します。

「黙りなさい」

《ブルー・ティアーズ》と《スターライトmk?》を一斉に撃ち放ち、相手が同じように撃ちだしてきたエネルギー弾を相殺する。と、その後ろから次の波がやってきていた。

「不意を打った程度で、わたくしを落とせるとお思いのですの？」

唯一残っていた近接武装、《インターセプター》^{オープン}を展開し、すべての弾丸を斬り払う。

その最中に《ブルー・ティアーズ》から放たれた二の光線と六のミサイルが一斉に相手へと押し寄せていく。

レーザーは花開くように分裂し、一二本のレーザーは一瞬で数え切れないほど細かなものへと変わっていく。その全ての挙動を脳内

で制御しながら、相手を取り囲むように動かして行った。

次の瞬間、無数の爆発が相手を覆い尽くして行く。……終わって
ませんわね。

BT兵器の拳動、威力を修正。オリジナルの抹殺を再開しま
す。

「物騒なこと」

音声が流された刹那、視界の前方を覆うほどに黒く濁りの入った
青いBTエネルギーが撃ち放たれる。

これは、まずいですわ
！

「はあっ！」

甲高い音を立てて、私の《空裂》からわれと偽者の刃がぶつかり合う。

くやしいが、その力は同等。少なくとも、腕力で押し切ることは
出来そうにない。ならば、技で押し切れればいいだけの話だ
！

「ふっ………！」

ドンッ！

強い踏み込みと共に倒れ込み、倒れるギリギリのところまで二歩目
を踏み出す。この体勢からならば、振り下ろされるよりも速く懷に

入れる。

悲鳴を上げる床を気にも留めず、ぐるりと回るようにして逆袈裟からの一閃を解き放った。

しかし。

「なっ!？」

対象の速度との適応完了。

適応だと、舐めたことを……!

……いや、熱くなるな。冷静になれ。あんなもの、容易に突き崩せるだろう。

構えを取り、息を整える。

刃を振り上げて迫る偽者に対して、その双眸で睨みを効かせ、一拍。

「我流、千一閃!」
いっせん いっせん

音速の壁を一瞬で踏み砕いた私の踏み込みと共に刃を繰り出す。合計一〇〇〇もの斬撃を全てその装甲に叩き込んでいく。装甲の奏でる甲高い悲鳴が耳に障る中で、一つだけ別の音がした。たとえるならば、そう。

刃で刃を受け止める、鋭い音が。

攻撃パターン確認完了。

「カハ……ア……ッ!？」

音が聞こえるか否かといったところで、その一撃が私の体に突き刺さる。

鋭い刃の切っ先は腹部の展開装甲に食い込み、その衝撃を体に伝えていた。

ぐらりと世界が揺れたのを、必死で歯を食いしばることで堪える。世界は、傾いた状態で静止した。

そのまま、朦朧とする頭を必死に首の力で支えて敵を見やる。

感情のないその瞳に、酷く腹が立った。こんなものに、私の刃が阻まれたのかと。

「いくぞ、木偶」

音も、色も、全てが失せた世界の中で一人、私は呟く。

刹那、双手に携えた長さの違う刃を煌かせ、一筋の紅色と化した私は、くすんだ紅の私の偽者と衝突した。

「おおおおおっ！」

「はああああっ！」

医務室へのルートを進んでいた鈴とキティもまた、偽物と相対していた。

「くっそ、なんなのよこいつら！」

「私たちの機体を無人機で再現したようですわ！尤も、私のものまで再現されているとは思いませんでしたけど！」

撃ち放たれる数々の弾丸を避け、時には自身の衝撃砲で相殺しつつ攻撃を仕掛けていく。

相對しているのはシャルロットの『ミストラル・リヴァイヴ』、そしてキティの『グレイウルフ灰狼』の偽者だった。

キティの操る『グレイウルフ灰狼』には遠距離、中距離用武装が搭載されていなかったのが功を奏したのか、二人は比較的優位に戦いを進めていた。

「シャルロットのは厄介、ねっ！」

「私のものは基本力押しですから構いませんけど、あちらは苦勞させられそうですわ！」

攻撃を何とか回避しつつ、偽の『ミストラル・リヴァイヴ』の肩口の装甲へ鈴の《双天牙月》を大きくたたき付ける。が、装甲が硬くなっているのか、少しへこんだ程度だった。

「なんなのよこいつら！ 堅すぎじゃないの!？」

「とにかく叩くしかありませんわ！ 大技使いますわよ！」
「オッケー！」

とんつ、と下がった鈴と入れ替わるようにしてキティが前へ出る。

「ティル・フォア・ジャツジメント《断罪のための尾》！」

そのままぐると大きく旋回すると同時に発動させた武装特性によつて膨大なエネルギーを迸らせる凶暴な武器と化した《尾》を偽者の『ミストラル・リヴァイヴ』へと叩きつける。轟音と共に機体が吹き飛び、それを追い撃つように鈴の衝撃砲が放たれた。

「どんなもんよ！」

粉塵を舞い上げながら壁にめり込んでいる偽者に向けて、鈴が言った。

が、次の瞬間、恐ろしいほどの衝撃と共に体を捕まれる。模倣された《デュノア・オルグイユ》が、がっしりと鈴の細い体躯と装甲を丸ごと掴んでいた。

「こ、の、放しなさいよっ！」

「鈴さん！」

エネルギーバイパス形成、シールドエネルギーの吸収を開始します。

機械音声が流れる中、鈴の脳内にシャルロットが見せたあの一撃が蘇る。

あんなものを受ければ、たとえ絶対防御があっても命に危険が及ぶだろう。二門ある衝撃砲を両方とも『ミストラル・リヴァイヴ』へ向け、フルパワーで撃ち放つ。

しかし、どれほど装甲がめくれ上がった後も一向に放そうとはしなかった。それどころか、締め付けはよりきつく苦しくなり、エネルギーの吸収速度も上がっていつている。

余りにきつい締め付けに、鈴は自分の意識が朦朧としかけているのに気づく。それほど強力な力で締め付けられているのだと気づいたときには、手足への血流は止まり感覚は麻痺しかけていた。

「くっ、《ウルフズ》！」

ダメかと思っていた直後、エネルギーの吸収を続ける偽者の腕を、叫んだキティの一撃が粉碎した。

何とかぐらぐらとゆれる意識を繋ぎ止めながらも、鈴は落ちるか

った自分の体をP I Cで支えて姿勢を保つ。

後ろから手を回したキティは、氣遣わしげに鈴を見やり口を開いた。

「大丈夫ですか、鈴さん？」

「え、ええ、なんとかね……。ごめん、助かったわ」

「気にしないでくださいませ。それより、来ますわよ！」

さっきの恐怖がまだとれないのか、少しだけ体を震わせる鈴に向けてキティが言う。

その言葉の通り、相手はまだ二体とも健在だった。

戦いは、まだまだ終わりを見せない。

第93話 校舎内の戦い（後書き）

専用機を模倣し、同じかそれ以上の強さを持ってやってきた無人機たち。

果たして戦いの行方はいかに！

第94話 いまだ終わらず（前書き）

ちょっと短いです。

第94話 いまだ終わらず

「なんスかこいつらアア！」

「知るかアアア！ 気になるなら尋ねてみる後輩イイ！」

「無理ツスウウ！」

ISでめちゃくちゃに校舎内を飛び回りながら、私たちは無人機から発射される無数の弾丸を避け続ける。

私たちの姿を模倣しているらしい無人機たちだったが、その力は間違いなく私たちと同等かそれ以上だ。なにしろ、向こうは負担を気にせず全力でISを使えるんだからな。

「この、『アイシング・ジャングル』！」

後輩、フォルテが特殊兵装を発動させるが、向こうも同じものを発動させて相殺してくる。

つくづく厄介だな、こういう相手は。

「だああああ！ なんなんスか！」

「とにかくお前も撃ち返せ！ こっちも、やるだけやる！」

言いながら『A&A』を『シフト・アルテミス』に切り替えて盛大に弾をばら撒く。

が、それを私とフォルテの偽物はあることが、『シフト・アポロン』の狙い撃ちと速射、『アイスメイカー』の狙い撃ちですべての弾をたたき落としてきた。

「めちゃくちゃだな、こいつら……！！！」

「近接戦で仕留めるしかなさそうっスね」

「だな」

フォルテは片手に近接用のブレードを展開する。それと同じようにして、私も《アレス》を呼び出した。

軽く振ってから身構えると、向こうは銃撃で応戦する気なのか、武装を展開する気配は見られない。

「よし、行くぞ」

「ういっす」

直後、一気に接近して《アレス》を叩きつける。その一撃は、一瞬にして展開された偽物の《アレス》によって阻まれた。

こいつ、展開速度も並みじゃない……！

「フォルテ、気をつけ　！」

「きゃあああああ！」

私の真横で、赤い血を噴き出してフォルテが吹き飛ばされる。

その目の前には、《アイス・メイカー》の銃口を赤く濡らした偽物の『コールド・ブラッド』が、

「　　つあああああああああああああああ！」

イグニッションブースト

瞬時加速で偽物の首をつかむと、脳天にあたる部分に《A & A》の銃口を突き付ける。

『シフト・アルテミス』を零距离で撃ったことなどないが、少なくともこのふざけた能面の顔面を砕くには十分すぎる威力を発揮してくれるだろうことはわかる。

こいつらには絶対防御がないが、私たちのものもこいつらのせいで消えているだろう。そのせいで、フォルテが。

後輩をやられて黙って見ているなど、「冗談じゃない……！」

「失せろおおお！」

機体情報以上の加速を確認！ 危険！

がちり、音が響く。

その直後、偽物の『コールド・ブラッド』の頭部から、けたたましい炸裂音が鳴り響いた。

その頃、ラウラと簪は部室棟の中を駆けていた。

部室棟に人がいるかもしれないという簪の言葉に同意したラウラが先導し、マップが使えないため目視で一部屋一部屋を確認していく。

時折襲ってくる無人機を破壊しながら進んでいた二人だったが、途中の部屋でぴたりと足を止めた。

耳を澄ますと、遠くから聞こえてくる戦闘音に混じって何かを振る音が聞こえてくる。それはその部屋、剣道場の中から聞こえてくるようだった。

「誰がいるのか!？」

声を上げながら剣道場の扉を開いたラウラの視界に入ったのは、黙々と竹刀で素振り続ける一人の女性の姿だった。

「無事のようだな……。済まない、少しいいか」

「……うん、なにかな？ ISまで装着して」

「詳しい事情はあとで、今は私たちの言う事を聞いてほしい。すぐにシエルターに避難してくれ、私たちが護衛しよう」

「今、ここは襲われてるから……」

「ふうん、わかったよ？ それじゃ、ちょっと待っててくれるかな？」

彼女は笑みを浮かべて小さく頷くと、近くにあったバッグを担ぎ上げる。

竹刀を袋に入れて肩に担ぐと、ラウラたちの方へと近づいてきた。

「よし、準備完了だね？ 護衛よろしく頼むよ？」

「簪、いけるか」

「うん。……まって、音が」

歩き出そうとした直後、簪の制止で三人の足が止まる。

次の瞬間、剣道場の天井から熱線が降り注ぎ、さっきまで彼女がいた場所を的確に吹き飛ばした。

苦々しげにそれを見つめるラウラと簪の目の前に現れたのは、

三機の無人機を伴った『シユヴァルツェア・レーゲン』と『真打・鉄』の偽物だった。
くろがね

「なん、だと……！？」

「偽物……、無人機？」

「……私は離れていた方がいいね？」

「……ああ、そうしてくれ。これは甘く考えていい相手ではないだろっな」

それは自らを過大評価しているわけではない、真つ当な理屈だった。

ただでさえ二次移行したおかげで性能が上がっている『シュヴァルツエア・レーゲン』に、疑似第四世代といってもいい『真打・鉄』の偽物となれば、生半可な相手ではない。

模倣品によくある性能の低下を期待したい二人だったが、幾度となく無人機とぶつかりあった彼女たちは無人機のパフォーマンスが十分に高いと理解してしまっていた。

それゆえに、二人は鋭い視線を向けながら静かに刃と弾丸を構える。

「行くぞ」

「うん。はあああああああ！」

次の瞬間、四〇の刃を携えた《シュヴァルツ・ドライト》と、《^{あかがね}朱鉄》^{とっかん}を携えた簪が呐喊する。

装甲と刃のぶつかり合う音を響かせながら激突する簪とその偽者の横で、ワイヤーブレードをプラズマブレードで切り裂き始めたラウラの偽者。それに向けて、ラウラの二門のレールカノンが撃ち放たれた。

「行けい！」

攻撃判定、武装選択。反撃します。

音声が流れた瞬間に、偽者が消える。

それに驚いたラウラの顎を、偽者のつま先が蹴りぬいた。

「ガッ、ア……ッ!?」

力なく宙に投げられた体へ、偽者が更に拳を叩き込む。

左からのフックで体を浮かせ、右の拳を撃ち下ろして体をバウン

ドさせる。少しだけ浮いたラウラを更につま先でもう一度蹴り上げると、首元を右腕で掴み勢いよく壁へと叩き付けた。

「カハッ……！」

オリジナルの弱体化を確認。生命活動を停止させます。

「ラウラあ！ こ、のお……っ！」

一瞬で叩きのめされたラウラの姿を見て激昂した簪が刃を振り上げるが、感情に任せて動いたせいか、やや動きが大振りになっている。

次の瞬間、横殴りに偽の《朱鉄》の腹が叩き込まれ、灼熱の刃が押し付けられる激痛と共に壁へ吹き飛ばされる。

「きゃあっ……！」

「ぐっ、簪……っ！」

共に身動きの取れなくなった二人へ向けて、静かに偽者の《シュヴァルツ・ドライト》が迫りくる。

終わったかと、心の隅で思ってしまった、その刹那。

キーン、と甲高い音で、その刃の進攻は食い止められる。

「私の後輩に、手を出さないでもらえるかな？」

日本刀を片手に《シュヴァルツ・ドライト》を阻んだ彼女が、静かに言葉を発する。

その威圧感に、機械であるはずの彼らは自らがきしむのをその回路で感じていた。

ぎしりと、鎧と化している偽者のISの外装が軋みを上げる。

「と言っても、私もそう凌げるわけじゃあないんだけどね？ 早く立ち上がりなさい？」

「せん、ぱい……？」

「ただの刀で、『シユヴァルツ・ドラート』を止めたのか……！？」

驚異的なまでの動体視力と身体能力を一瞬で発揮した彼女だったが、しかしその手に握られた刀は既にぼろぼろになっている。

ただでさえ通常の兵器を上回るISの攻撃を凌いだのだから、碎けていないだけマシというものだが、それでもこの状態でいつまでも凌げるわけではない。

二人はそれを悟り、稼いでもらった時間を使って何とか体を起す。

「ラウラ、時間稼いで……。『朱鉄』で止めを……！」

「わかった、気をつける。先輩、ありがとうございます」

「気にしないでね？ これも先輩の務めだからね？」

ニコニコと笑みを浮かべた彼女と入れ替わり、二人は再度戦闘態勢に入る。

シールドエネルギーは半分削られてしまったが、それでもまだ二人の意気は消えてはいなかった。

第94話 いまだ終わらず（後書き）

先輩がつよい。

でも受け止められるだけ、攻撃は出来ません。

設定では、世界の裏側には割りとかういう感じの人はごろごろして
ます。

出てこないのは、出てくる必要性を感じないから。

第95話 反撃の兆し（前書き）

でも反撃した人がキーパーソンだなんていうわけじゃない。

第95話 反撃の兆し

「うおおおお！」

「はああああ！」

一夏とシャルロットの声が響き、『甲龍』の偽者が大きく弾き飛ばされる。

まともに入った《零落白夜》が効いているのか、『甲龍』の偽者は動く様子がない。

しかし、二人はそれに油断することなくそれぞれの獲物を構えて『白式』の偽者へと視線を向けた。

「無人機もここまで来ると滅茶苦茶だね」

「全くだ。早いとこ片付けようぜ」

多機能武装腕《雪羅》のビームクローと《雪片式型》を両手に携えた一夏と、六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》を両手に構えるシャルロットが、それぞれ頷いてから臨戦態勢に入っている体を新たにしている。

廊下での戦闘はかなり機動が制限されるが、それゆえに上下左右への回避行動は難しい。基本的に回避することが望まれるショットガンも一夏の武装も、偽者の『白式』は全て防御するしかない状況に陥っていた。

しかし、一夏もシャルロットもだからと言って油断することはない。その程度の状況の有利不利を己が腕一つであっけなくひっくり返せるものを、二人ともごまんと見てきたのだから。

特に一夏はそれが多い。自らの武装はまさしく諸刃の剣と呼べ、姉は数や力の有利不利など簡単に覆してみせる。それ故に、油断の二文字は極力意識から排していた。

「よし、行くぞっ」

一夏の一言で、互い違いに二人は疾駆する。

暖房の聞いた室内の大きに外の冷気が流れ込むことで出来た生ぬるい風を受けながら、戦闘に立つたのはシャルロットだった。

両手のショットガンを、弾数をまるで気にせずに撃ち放っていく。《雪羅》を模した腕でシールドを作り、それをガードする偽者に弾丸が食い込んでいく。ガンガンと、鉄を金槌で思い切りよく叩いたときのような音が無数に広がり、じりじりとシールドエネルギーが削られていく。

無人機の活動停止条件は二つだけ、完全な自身の崩壊か、シールドエネルギーの枯渇。だが、無人機にシールドバリアはなく、絶対防御も存在しない。つまり、シールドエネルギーを削って活動停止に追い込むことはかなり難しくなっている。だからこそ、シールドにもシールドエネルギー自体が使われ、高性能な防御機能を実現させていた。

これは『白式』に装備されている《雪羅》のシールド能力を模したものであり、それ自体が『単一技能はコピーできていない』ワンオフ・アビリティことの証明でもある。

しかし、その防御が堅牢であることに変わりはない。

だが、それ自体を削り取る力が、『白式』、そして《雪羅》には備わっている。

「いまだよ、一夏!」

「応! オオオおおおおおおお!」

シャルロットの合図で、黄金の輝きに身を包んだ一夏が風を切り飛んで行く。

青白い刃を両手に携えて飛ぶ一夏へ向けて、再び動き出した偽の

『甲龍』の《龍砲》が撃ち放たれるが、器用にも空中で回避行動を取ることで殆どを避け、残った数発も装甲を掠めるに止まった。

「いっけえええええええええ！」

肉薄し、一閃。

『零落白夜』の青白い光を纏ったビームクローと『雪片式型』が『白式』の偽者に叩き込まれた。

金属を引つかくような耳障りな音を響かせて装甲を吹き飛ばされた偽者は、不可解な電子音を吐き出しながら大きく後方へと後退する。

シールドエネルギーは一〇〇を下回っているようだったが、それでも止めを刺すことはできないようだった。そのことをいまだ動くそれをみて察した一夏は、思わず顔を顰める。

「悪い、シャル」

「気にしないで。くるよ！」

言葉少なに謝罪を受け取ったシャルロットの一声と共に、左右を繋げられ一本の刀身となつた《双天牙月》が大気を切り裂き飛んでくる。

それを即座に呼び出した巨大な実体シールドで防いだシャルロットの背後で、エネルギーをチャージした一夏が身を乗り出し、《雪羅》に備えられた荷電粒子砲を発射する。

しかし、その砲弾はギリギリで動いた偽の『白式』の《雪羅》から放たれた同じ砲弾によって相殺されてしまった。

「まじかよ……!？」

「さすがにコンピュータ制御は狙いが精確だね。けど、その砲弾じやこれは防げないでしょ！」

驚愕の表情を浮かべて呟いた一夏に対して、シャルロットはそう言葉を返してから更に武装を変える。

呼び出したのは二丁の《デザート・フォックス》。五九口径重機関銃、その銃口を偽の『白式』へ向け構えると、一気に引き金を引き弾丸を吐き出していく。

咄嗟に《雪羅》のシールドを発動させたが、それが仇となって瞬く間にシールドエネルギーは弾丸に削られ消失した。

がくん、と巨大な体躯を地面に落として活動を止めた偽の『白式』を見届けた直後、背後から戻ってきた《双天牙月》を回避したシャルロットは、いまだ宙に止まるそれへ向けて残弾をありったけ撃ち出していく。

ところが、その残弾は一瞬で《双天牙月》を手の内に収めた偽の『甲龍』によって叩き落された。

「まだ、終わっちゃいないってことか……」

毒づくように吐き出した一夏が、再度武装を構えなおす。
戦闘は、まだまだ終わらない。

白刃が煌き、数体の無人機を一気に切り伏せる。

《ブレード》を手に静かに切り下ろした状態から立ち上がった葵は、自らを取り囲んでいた無人機の残骸を見て嘆息した。

斬外の数は、組み合わせれば総勢六〇以上にのぼる。その全てを、葵は単身傷つくこともなく倒して見せたのだ。

量産型のISと比べても遜色なく、絶対防御がないといってもその性能に違いはない。まともな人間なら攻撃する前に殺されてしまっただろう相手に対して。

しかし、葵の目つきは和らぐことなく一点を見つめていた。

その直後、そこから紫電が迸り、エネルギーの砲弾が撃ち出される。

音速を超えたその砲弾を片手で握った《ブレード》の一閃で下から上へと切り上げると、左右に分かれたそれは丁度葵を避けるようにして後ろへ飛んでいった。

「やはり、この程度では無駄でしたか」

「……出てきなさい」

葵がきつめにその声を掛けると、その声の主は静かに姿を現した。まるで、風景から溶け出てくるように、いつからそこにいたのかもわからないほど自然に。

見てくれは葵とよく似ていた。茶色の髪を短く切り揃えていて、背丈も葵と大差ない。

まるで、葵自身の模造品のような。

「貴様は、アイツの作った作品か」

「そう。貴女を殺すために作られた、『貴女』」

同じ声、しかし同じ声色でなく、気味が悪いほどに優しい猫撫で声で告げた彼女は、シャン、と鈴の音になるような音と共にどこからか刃を抜き出す。

「貴女を殺して、私はお父様に認めていただく。そのために」

言葉が途切れると同時に、彼女の姿が消える。

しかし、その消えたはずの彼女の体が葵にははっきりと見えていた。

後方からの切り上げ、ありえない位置から繰り出されたその一撃を、葵はいとも簡単に同じ刃で阻んでみせる。

「死んでもらうわ」

声も顔も、どこまでも優しさしか感じさせない、いつそ不気味な位に、憎悪も、嫌悪も、負の感情の一欠けらも見せずにそう言った彼女の動きが、突如として変わる。

先ほどまでも十分早かった速度は数倍に跳ね上がり、雰囲気だけはそのままに凶刃を煌かせた。

次々と繰り出される刃を片腕の《ブレード》で防ぎながら、葵は言葉を投げかける。

「貴様は疑問を持たないのか？ 奴に使われるだけの命に」

「それが私の生まれた意味、作られた意味。なぜ創造主に従わない人形が生かされる道理がありますか？」

当たり前のことを、分からず屋の子どもに優しく説き伏せるような声で彼女が言葉を返す。

それを聞いて、葵は眉をピクリとも動かさずに声を発した。

「自らを人形と称するか。哀れな」

「香織様だって、人形でしょう。貴女が弟と可愛がつているあの方がお父様に従わないことが、私には不思議でなりません。あれほど良くできたお人形が創造主をないがしろにするだなんて……、まあ、貴女が何かしたということは検討が付きそうです」

「あの子は、人形じゃない……！」

「いいえ、人形です。可愛い可愛いお人形、誰かに道を示してもらわなければ歩くことも、立つこともできない。愛しい、ただの木偶人形」

「貴様……」

薄気味悪い猫撫で声で歌うように話す彼女を、葵は憎々しげに睨み付ける。

しかし、彼女の方はそれすら心地よさげに受け止めながら更に刃を振るった。

「貴女はあのお人形をみすばらしい人間のように仕立て上げ、あたかも自分の意思で生きているように細工して。ああ、なんと可哀相なお人形なのでしょう！ お父様の元にいれば、人間の振りをして苦痛を味わうことなどないというのに！」

「黙れ……！」

「そうだわ、貴女を殺して『貴女』が貴女になってあげればいい！ そうすれば香織様はみすばらしい肉塊でなく、立派なお人形さんとして私が導いて差し上げられる！」

「黙れっ……！」

「そうと決まれば、貴女に生きていてもらう必要なんてありませんね？ 死んでください、香織様のために！」

けたたましい音を立てて、刃が交差する。

それは、初めて気味の悪い優しい迷彩が溶け、中にあった怖気の走るほどの憎悪が溢れ出た瞬間でもあった。

音高く刃を打ち付け、今度は攻勢へと回った葵が口を開く。

「殺すと言ったな、私を？ やってみせる木偶人形が！ 己の意思を持たず、貫かず、ただ従うことしか出来ないクズ共め！」

「それが私たちの正しい姿、貴女のような出来損ないではない、完璧な存在の在り方！」

「あの子を導くだと？ ふざけたことを滑らせる口だな！ あの子は導かれて素直に進むような意思の弱い子じゃない、はつきりと自らの進むべき道を、進みたい道を指し示せる！ 貴様が前に立つなら、押しのけて進むほどには強い！」

「あの子は私の弟だ！ 貴女を殺して『貴女』が貴女になる！ 貴女を私にする！」

「はっ、結局は独占欲か！ その思考がある限り、貴様は私には勝てん！」

苛烈に鳴り出した攻勢の音に、彼女は思わず齒噛みした。

まさしく圧倒的。擬似コアを核に作られた人造人間たちの身体能力は高いはずだったが、それをまるで遊んでいるかのように上回って戦う葵は、優しさと憎悪の二つの感情しか見せなかった彼女に初めて焦りという感情を感じさせていた。

「偽者の弟と偽者の姉、どちらも偽者なら本物になれるのに！ 貴女はなんでわからない！」

「出自であの子を決め付けるな。あの子は本物として生きている、偽者として諦めているお前とは、釣り合うわけがないだろう？」

独占欲をむき出しにして自らこそが本当の姉になれると語る彼女だったが、その言葉を葵は爪の先ほども聞き入れようとはしなかった。

彼女が持っている理想、夢、それらは全て作られる過程で埋め込まれたもの。自らが偽者であるとわかっているが故に、香織の姉である葵を殺し、そこに自らを置こうと考えたのか。

彼女は葵の模倣品として作られた。だからこそ、そんな思考になっ

てしまっているのだろう。姉であることと、自らの幸福を香織自

身に味わわせてやりたいという『優しさ』のために。

そんな彼女を、葵はいつそ不憫だとさえ思った。生まれてから行く道も理想も夢も、考え方も、何もかも決められた生、そんなうんざりしたものに付き合わされる位なら、いつそ死んだ方がマシだとも。

刃を最早目で追えないほどの速度で叩き付け合いながら、互いは空気の振動で位置を割り出し、そこへ刃を繰り出して対応し、更にそれより速く互いが互いを出し抜こうと刃を翻す。

「あの子は、あの子は私の弟だ！返せ、あの子を！返せええええ！え！」

「香織は、誰のものでもない」

[illegible]

徐々に彼女の動きが速くなっていく。

しかし、刃を振るうごとに彼女の皮膚が裂け、目や耳、口元からは血を垂らし、瞳は虚ろになりどこを見ているかすら分からなくなってくる。

鬼気迫る彼女を見ながらも、葵はその表情を変えなかった。

第95話 反撃の兆し（後書き）

実は『彼女』についてはこの回でとっとと退場願うつもりだったんですが、あんまりに展開速すぎるのと、

「せっかく出てきたのに私の出番少ないようー！」

と『彼女』が頭の中でじたばたするので次回以降に退場を伸ばしました。

……ち、違っんだ、僕は変態じゃないよ！

仮に変態だとしても、変態と言う名の（ry。

えー、一夏とシャルがカップリングでいいんじゃないかなこれ。

第とセシリアくっつけちゃおうかな。

でもなあ、でもなあ。

……真面目に悩みどころです。ただでさえ原作殴り飛ばす勢いで百合ツプル作ったので。

まあ、答えは続きで！

次回からは反撃編、かな？

第96話 零の力

「はあっ、はあっ……、うっ、くうっ……！」

青い装甲をぼろぼろにしながらも、セシリアは何とか宙に浮いていた。

朦朧とする頭で《ブルー・ティアーズ》を操り、相手のBTエネルギーを何とか相殺してはいるものの、既に彼女は死に体だった。息は荒く視界は揺らぎ、集中力が途切れ始めているのか、いくつかのビットは量子変換されるときに出す光を時折撒き散らしている。そんな中で彼女を支えているのは、ただ一つのプライドだった。偽者に負けたとあつては、父から託されたこの力がその程度のものだつたと証明してしまうことになる。それが、彼女は何よりも嫌だつた。

「どれほど泥にまみれようとも、もう見失わないと決めたのですわ……！」

失いそうな意識の中で、セシリアはそう吐き出すように呟く。貴族としての誇りではない。ただ、父と母が産んだ己が、自らを産んだ二人への敬意を忘れることなかれ、と。いつしか心に決めた言葉。

貴族でなくともいい。ただ、あの二人の娘であることを誇れば、それでかまわなかった。

目の前の敵を見る、醜く模倣することしか出来ない者を。誇りを傷つけた痴れ物を。

「ああ、腹立たしいですわね」

笑みすら形作らせた彼女の心に、恐れはない。

彼女が恐れるのは、自分を自分たらしめるそれを忘れてしまつことであり、眼前の憎むべき敵は恐れる対象にはなりえない。

それ故に、彼女の耳にはそれが届いた。

誇りを守れ、そのために手にせよ。

「ええ、力を貸しなさい、『ブレイブ・ティアーズ』……！」

それは、自らのISから聞こえてきた声だった。

澄み渡り凜とした、強く美しい女性の声。

それに母親の色を感じたセシリアは、小さく作っていた笑みを深めて、すつ、と息を吸い込む。

その直後、彼女の視界は白い閃光に覆われ、意識はそれによって連れ去られていった。

そこは、彼女の自室だった。

一体何がおきたのかと考えながら、自らのベッドから這い出た彼女は、そのままの姿で屋敷の中を歩き出した。

美しい絵画に一目見ただけで随分するだろうということがわかる花瓶など、見覚えのあるものが並ぶ中で、彼女は父親の書斎へと向かっていった。

殆ど家にいなかった父親、昔は嫌悪して近づきすらしなかったも

のだが、今となつては彼女にその気持ちはない。

そつと扉を押し開けると、金色の髪を長く伸ばした、セシリアによく似た女性が書斎の椅子に座っていた。

「よくここまで辿り着きましたね、セシリア」

「貴女は……？」

「私はブレイブ・ティアーズのコア人格、ずっと貴女を見ていましたよ」

「わたくし、を？」

気が付くと、本が乱雑に置かれていた書斎は綺麗に整頓され、書斎のテーブルの上には小さめのティーカップが二つ。セシリアと『ブレイブ・ティアーズ』と名乗る女性は向かい合うようにして座っていた。

ティーカップの中に入っている暖かなお茶で喉を潤した彼女は、また口を開く。

「父が貴女を思う気持ちは本物です。それに気づいてくれてありがとうございます」

「いえ、そんな……」

「ここはISCコア内部の特殊な空間。時間の流れ方も外とは違います。……少し、休んでいきなさい」

「ですが、外にはまだ助けを待っている人たちが！ それに、あの偽者を倒さなければ……」

声を上げるセシリアだったが、その瞬間に空間は違うものへと切り替わった。

大きなソファア、セシリアの母がよく仕事で疲れたときに座っていたのを覚えているそれに、彼女とセシリアは座っていた。

余りに懐かしい感触に、セシリアは思わず目頭を熱くして俯いて

しまう。

「貴女がここでどれだけ休んでも、現実の時間は経過しません。少し、その磨り減らした心を、ここで休めていきなさい」

「でも……」

「……セシリア、貴女は良くがんばっています。私は貴女のお父様とお母様のお二人の意思によって生み出されたもの、この空間も、貴女のためだけに作られたものなのですよ」

「お父様と、お母様が……」

「お二人は、貴女がここへ辿り着くまでに、きっと沢山の苦労を経験するだろうとお考えでした。だからこそ、ここで一度羽をお休みなさい。立ち上がるための力を、もう一度生み出すために」

彼女はセシリアをぎゅっと抱きしめると、優しく頭を撫で付けた。その温かさが昔母親に同じようにされたことを思い出しながら、セシリアは口を開いた。

「貴女は、お母様の人格を参考にしていますの？」

「ええ。貴女の記憶にあるシャロン・オルコットと、お父様が設計段階で入力したシャロン・オルコットのデータを共に参考に形成されています。貴女がここへきたとき、少しの間でも安らげるようにと」

そして、それは父の発案だと彼女は言った。

ずっとブラウンは娘の身を案じていた、そのことをセシリアは改めて伝えられ、今度こそ涙を堪えられずに目の端から流してしまう。

「……それでもわたくしは、行かなければ行けませんわ。例え安らぎがあつたとしても、時にはそれに身を任せず、自ら前へ進むことも必要なはずですよ」

「……本当に、あのお二人と同じですね。お父様もお母様も、きつとそう言うだろうと言っていましたよ」

「そう、でしたか……」

しかし、セシリアはそこで休まないことを選び取った。

自分一人がそこで立ち止まっていいはずがない。今の状況で危機に陥っているからこそ、セシリアは少しでも逃げる形になるようなことはしたくなかった。

その言葉を聞いて、彼女は優しく微笑んでそう返してくる。

すると、風景はまた元の書斎へと移り変わり、座っている場所もさつきと変わらない位置に移動する。

さつき抱きしめられたときの温もりが不意になくなってしまったことで少しだけ切なくなりながらも、セシリアはその強い意志を瞳に現して口を開いた。

「わたくしは、どうすれば元に戻れますの？」

「ここへは、私が貴女に力を貸す準備として招いたのです。まだまだ貴女と私には距離がある、それを詰めるのにはもう少しの時間が必要でしょう。だから、それまでを生き抜くために、ブレイブ・ティアーズの本当の力をあなたに預けます」

「本当の、力？」

「今のブレイブ・ティアーズは、まだ機体のスペック的には全開ではない。一時的に、その全開のブレイブ・ティアーズを預けます。使いこなせるようならそれでよし、もしダメならばもう少し時間が必要ということですよ」

そつとセシリアと手を重ねた彼女は、そうしてから笑みを形作る。暖かな手だと、セシリアは感じた。

「覚悟は、ありますか？」

「……ええ。この力を受け取ったときから、貴女と共に歩き始めたその日から、覚悟はとうに出来ていますわ」
「では、力を。信じています、セシリア」

最後に一度だけ微笑んだ彼女が言って、それから周囲は白の中に消えていく。

いつしかセシリアも、その中に溶けていつていた。

「……戻ってきましたのね」

夢から覚めたような心地で、セシリアが呟く。
眼前には変わらずレーザーを繰り出さんと浮かぶ偽者がいて、自分が身動きもとれず。

そこで、目の前のウィンドウに気づく。

『操縦者の最終確認と同時に全リミッターを一時的に解除します。
YesかNoを選択してください』

そんな言葉が並べられていることに気づいたセシリアは、今のことが夢でないことを確信した。

そして、痛む腕を持ち上げ、指先でYesを選択する。

小さなブザー音が鳴り、全てのウィンドウが閉じられた次の瞬間、ブレイブ・ティアーズの装甲は更に蒼を深め、全てのエネルギーゲ

ージは満タンに溜まっていた。

そうして、小さくウィンドウが一つ開く。

『リミッターの解除に伴い、全ての損傷箇所を修復しました。戦闘続行可能です』

「全く、気が利きますのね……！」

ここまでお膳立てされて、戦わずにいられようか。

ここで逃げれば、セシリアのプライドなど粉みじんに砕けてしまう。だからこそ、セシリアは己の意思で戦いの構えを取った。

全ての装甲に使われているシールドビットもマニュアル操作に回し、セシリアはそこに座るようにゆったりと構える。

「さあ、かかっているじゃないませ。これ以上好き勝手はさせませんわよ」

オリジナルのエネルギー回復を確認。再度攻撃に移ります。

音声が響き、くすんだ青色のBTレーザーが無数に飛んでくる。

その全てをセシリアはあろうことかマニュアル操作のシールドビットで防ぎきりながら、『ブルー・ティアーズ』のBTビットを射撃し、それを無数に細分化して細かなレーザーに変え、更にはその一本一本をでたらめに動かしながら相手に当てるという滅茶苦茶な芸当を見せつける。

「当たりませんわよ、へたくそさん！」

ビットの動きは徐々に機敏になっていき、射撃の狙いもそれに応じて正確になっていく。

ついには、絶えず止まることなく撃ち放たれるレーザーの嵐が偽者を覆い、偽者は対処することすら出来なくなっていた。

「さあ、フィナーレですね。《そのなみだを^{Blow}はらいましょう》！」

次の瞬間、ビットは一斉に位置に付き、偽者をBTレーザーの檻へと閉じ込める。

膨れ上がっていくBTエネルギーに偽者が警告音を上げるが、時既に遅し。瞬く間に膨れ上がったエネルギーに耐え切れなくなったレーザーの檻は一気に炸裂した。

「全く、随分じゃじゃ馬ですこと」

BTビットとシールドビット、合わせて八〇基近くの全てをマニュアル操作したセシリアは、ずきずきと痛みを訴える頭を抱えながらも、筈が戦っているであろう場所まで飛んでいくことにした。

枷から解き放たれた、本当の『ブレイブ・ティアーズ』と共に。

第96話 零の力（後書き）

セシリアのリミッターが解除されました。

そして初めての対話。この中でISの人格と対話しているのは香織、ラウラ、一夏、セシリアだけです。これから増えるかなー？

第97話 龍、爪を現す（前書き）

かなり短めです。私用で出かけていたり、やることあったりで大変……。

第97話 龍、爪を現す

《双天牙月》そうてんがげつと偽の《ウルフズ》がぶつかり、《尾》と偽の《デユノア・オルグイユ》が激突する。

火花を散らしてぶつかり合う中で、互い違いに鈴とキティが視線を交わす。

その直後、互いの相手からすれ違うようにして、別の相手と刃をぶつけ合った。

「こんのおっ！」

超至近距離からの《龍砲》の速射を受けて、僅かに偽の『ミストラル・リヴァイヴ』が後退する。それを見逃すことなく、鈴はその手に持った刃で円を描くようにして次々に攻撃を繰り返していく。しかし相手もそれで落ちるほどではない。

姿勢を立て直した偽者は自らの腕を鈴と打ち合わせるようにして振るい、確実に攻撃をしのいでいる。

鈴がいくらか出鱈目に攻撃を放つても、まったく同じ軌道を描いてその刃を止め、追い打ちとばかりに撃ち出される弾丸を、鈴が逆に必死になって相殺するという状況が続いていた。

「ああもうつ、なんなのよ一体！」

「防御はありませんけど、反応速度は滅茶苦茶ですわ！　鈴さん、まずどちらかを沈めた方がいいかも知れません！」

「同感ね！」

刃を交え、鈴とキティはそんな言葉を交わしながらどちらを潰すべきかを模索する。

とはいえ、結論はすぐさま出された。一撃必殺を持っている『ミ

ストラル・リヴァイヴ』の方が圧倒的に危険性は上だと判断した二人は、一斉にそちらへと攻撃を傾ける。

《龍砲》で援護しつつ、鈴の《双天牙月》とキティの《ウルフズ》の刃が迫るも、偽者は音声を響かせることもなくその全てを捌き続けていた。

「このままでは埒が明きませんわね……！」

「……キティ、私がおとりになるわ。その隙にアイツぶっ壊しなさい」

「しかし、もしミスすれば……！」

「ミスしなきゃいいのよ。やるしかない、埒が明かないわ」

忌々しそうに偽者を睨みつけた鈴が、《龍砲》を撃つ手を休めぬままにそう言い放つ。

互いに頷きあい、それきり口をつぐんだ二人目掛け、『ミストラル・リヴァイヴ』の弾丸が迫る。

「おおおおおおおおお！！！」

《龍砲》の轟音を響かせ、全ての弾丸を叩き落した鈴が呐喊する。その目に見据えているのは『ミストラル・リヴァイヴ』ただ一体のみ、離れた位置にいる『灰狼』^{グレイウルフ}のことなど気にも留めていない。

それは、背を預けているキティへの信頼の証でもあった。自らが落とされるよりも早く『ミストラル・リヴァイヴ』を落とすと信じているが故の行動。

その信頼に応えるかのように、キティは無言で《狼の咆哮》^{ウルフ・ハウリング}を起動させる。集中力が高まっているおかげか、指向性を持たせられた音の波は鈴を避けて確実に偽の『灰狼』と『ミストラル・リヴァイヴ』へと襲い掛かる。

オリジナルの突撃を視認。排除します。

無慈悲な電子音声と共に動き出そうとした『ミストラル・リヴァイヴ』の片腕、ただ銃を持っていただけの細腕を奇妙な音と共にヒビが伝う。

それがなんなのかを感知する前に、その片腕はキティの全力のスイングによって吹き飛ばされた。

「まず一本！ まだ終わらせませんわ！」

振りぬいた形から黒尽くめの中身に肘鉄を浴びせ、衝撃と共に背後から胸元へ掛けてその爪を押し通す。生々しいぞぶりという音と、金属質な金音が同時に鳴り響き、悲鳴にも似た音が辺りに響く。

「そして、これで――！」

まだ終わりではないというように爪をもう一本突き立てると、左右に捌くように思いつき引き裂く。

「終わりですわ！」

その一撃で、爪の一撃を浴びた擬似コアはあっけなく砕け散った。それを確認した鈴は、即座に背中へと刃を回し、その爪の一撃を防いでみせる。後ろから追ってきていた偽『灰狼』のそれを、鈴はそのあらゆる角度を見通せるハイパーセンサー特有の視野によって見つけ出し、即座に対応して見せたのだった。

「悪いけど、アンタたちの攻撃は終わりよ」

次の瞬間、鈴を中心として溢れ出る紅蓮の闘気。紅く、黒く、そ

して何よりも鋭く、しかし研ぎ澄まされたわけでもないそれが、カタカタと《双天牙月》を震わせていた。

「《双天牙月》、武装特性起動……！　　《三爪龍神》！」
さんそうりゅうじん

言葉にした途端、溢れ出ていた闘気は龍の形をとって鈴の周りに纏わりつく。

鈴の鋭い視線ははつきりと真後ろの偽『灰狼』へと注がれていた。

「反撃開始よ、クソ野郎」

振り向きざまに片方の刃を叩き込むと、頭の上で大きく回すようにして逆側の刃を逆の側面へと叩き込む。その瞬間、丁度刃を刻まれた二つの部分を結ぶように、その中心に大きな衝撃が打ち込まれた。

何が起ったのかもわからずに、偽の『灰狼』は咄嗟に鈴へ《ウルフズ》を繰り出すも、ガンガンッ！　と《双天牙月》で二度爪の同じ場所に打ち込まれ、弾かれた途端にその打ち込まれた場所へまたも衝撃が打ち込まれる。

「《三爪龍神》の能力は、一撃目と二撃目の中間地点に、その両方の衝撃を掛けた分の衝撃を叩き込む。受ければ受けるほど、アンタは負けに近づくのよ」

一〇の力で一撃目を加え、一五の力で二撃目を加えると、二撃目に加わった瞬間に中間地点へ一〇×一五、計一五〇の衝撃が加わる。それが《三爪龍神》の力。

今までへこみもしなかった偽者の装甲がいとも簡単に吹き飛ばされていることから、その強力さは伺える。

鈴は獰猛な視線を隠そうともせず、黒と紅の入り混じる龍と共に

に吠える。

「これで、終わりよ。はあああああああああああ！」

イグニッション・ブースト

至近距離からの瞬時加速、その擦れ違う刹那の間に、刃を叩きつけること六回。衝撃を叩きつけること三回。

それだけで、偽の『灰狼』の装甲は木っ端微塵に碎け、コア部分が露出するほどのダメージを蓄積させた。

「碎け散れエエエエエエエ！！」

鈍く煌く刃の一撃は、少女の雄叫びと共に振り下ろされる。
音高く、その割れる音が響いた。

「アアアああああああああアアアア！！」

一撃、また一撃。振るうごとに血が撒き散らされ、悲鳴が上がる。
彼女を見つめながら、葵は悲しそうな目で刃を受け続けていた。

「まだ続けるのかしら」

「当たり前、前だ！ あの子を、あの子を貴女から、取り戻すまでは……！」

既に満身創痍となり、立っていることさえ辛いはずの彼女の目が鋭い光を無くすことはない。

それほど妄信していながらも、自らの存在の答えだけははっきりと見えてしまっている彼女を、葵は酷く哀れだと感じていた。

それと共に、憎悪が募る。

たとえ人形としてもそこに命があることは変わらないというのに、命を命とも思わず、これほどに悲しい定めを生を生み出す。

そんなことのために優しい母が死んでしまったのだと考えると、葵の心中は穏やかではいられなかった。

そして、葵は決断する。どうせ血濡れの諸手、今更新たな血で上塗りしたところでさしたる意味などありはしないと自嘲して。

「もうお眠りなさい、永遠に」

「黙れ、だま」

不意に、音が止む。

赤く彩られた《ブレード》の切っ先が、彼女の背中から競り出ていた。丁度、心臓の位置にある擬似コアの残骸をその身に帯びて。

「哀れな子……。けれど、いずれ私がそちらに逝った時には、きっと……」

刃を抜き取って指輪へ収め、それから葵は呟きながら彼女の亡骸、いや、残骸をおもむろに抱きしめた。

すると、小さく彼女の唇が動く。動くはずのない、電池の切れた人形の唇が。

「さよ………う………な………ら………、『私』」

ぷつりと、言葉が途切れる。

今度こそ、その短い『生』を終えた彼女の唇は、ほんの少しだけ
笑みを形作っていた。

第97話 龍、爪を現す（後書き）

鈴が初めて武装特性に覚醒。
そして『彼女』がリタイアしました。

第98話 戦いは未だ終らず

「ハアッ、ハアッ……！」

息も絶え絶えになりながら、ダリルは自らの偽者と対峙していた。偽の『ヘル・ハウンドver2.5』は大したダメージも入っていないが、その一方でオリジナルであるダリルにはかなりのダメージが蓄積している。

絶対防御を無効化する何らかの機構を持っているらしい無人機たちのそれは、確かに偽物たちにも受け継がれているらしく、攻撃を受けても絶対防御は発動しなかった。

つまりそれは、如何なる攻撃からも操縦者を守るISのウリだった鉄壁の盾がなくなつた、死がぐつと近づいたということ。

それを知りながらも、ダリルの眼から光が失われることはなかった。

「おい、後輩……、いつまで寝てるつもりだ……。もう傷はふさがつてんだろ……」

後ろを見ないまま、ハイパーセンサーで後方を『視認』して声をかける。

赤い液体をべつたりと装甲にまき散らして倒れていたフォルテは、その声にピクリと体を動かした。

「無茶、言わないでくださいッス……。動くだけで腹よじれる位痛いんスよ？」

「動けるんだな、ならやるぞ」

「ほんと、無茶っスね」

「やれないわけじゃないだろ」

「……そっすね」

短い言葉を交わしあった二人は、ゆっくりと姿勢を立て直していく。

痛みを堪えながら浮き上がったフォルテがダリルの後ろにつき、息を長く細く吐き出して《アイス・メイカー》を片手に、実体シールドをもう片方の手に構える。

それをハイパーセンサーで確認したダリルも、《A & A》を『シフト・アポロン』に切り替え、片手に《アレス》を携えて偽者を睨みつけた。

すでに偽の『コールド・ブラッド』は零距离からの『シフト・アルテミス』の一斉射撃によって破壊されているため、状況は二対一になっている。

しかし、ほぼ無傷の偽者に対して二人は満身創痍、まともな勝負になるかどうかも疑わしい状況にあって、二人の戦意は尚も高まっていた。

「じゃ、行くぞ」

「ういっす」

たった一言の合図とともに、二人は一気に攻勢に出る。

撃ち、殴り、蹴り、斬り、また撃ち、さらに蹴り、斬り、殴り、撃ち、殴り。

二人が得意とする守りの陣形『イージス』とはまるで違う、圧倒的な攻撃の形。今はまだまだ名を持たない攻撃の嵐に晒され、偽者は瞬く間にその装甲を傷だらけのものに変えていく。

オリジナル二機の攻勢への傾倒を確認。反撃します。

「そうは」

「させねえっす！」

電子音声をかき消すかのように、二人の攻撃はさらに苛烈さを増していく。

その圧倒的なまでの力に押さえつけられた偽者は、反撃を許されぬままに《アレス》によってそのコアを貫かれた。

時間にしてほんの十数秒、たったそれだけで、二人を苦しめていた偽の『ヘル・ブラッドver2.5』は完全に破壊されることとなった。

「……なんかあつけないっすね」

「歯ごたえなんてない方がいいだろ」

「ま、同感っす」

武装を収納した二人は、ぼやくように互いにそう言葉をかける。
クローズ

と、そこで力が抜けたのか、思わず背中を壁につけて二人同時に座り込んでしまった。

とにもかくにも、ようやく二人は安堵の溜め息をつく。

ようやく、二人の戦いは幕引きを迎えた。

「ふっ、はあっ！」

一方その頃、恋華れんげと千冬ちふゆは『ミステリアス・レイディ』と『散桜』の偽者が率いる無人機の群れと戦っていた。

と言っても、その戦力差は圧倒的に恋華たちの方が勝っている。
その一つに、『散桜』の武装特性は単一技能ワンオフ・アビリティと平行使用しなければ機能しないことがあった。

五〇人分の刃が余計に降り注ぐ中、他の教員の援護射撃もあつて、恋華と千冬はたった二人で群れの中を踊っている。まるで、そこが専用に用意された舞台だとも言つように。

散桜、まだ尽きないのか？

もう二〇〇機以上壊してるけど、波長はぜんぜん途切れてないよ？

脳内で散桜のコア人格と会話しつつ、千冬はたった一振りの刃を振るい手近な数体を一気に破壊していく。

『散桜』の単一技能である《剣舞》ツルギノマイに使われているのは《零落白夜》と全く同じエネルギーであり、千冬と『散桜』との間にそれが生まれたのは全くの偶然だった。

しかし、元々千冬がただ斬り合うためだけに作り出された『散桜』にリミッターはなく、そのシールドエネルギーも軍用の更に十数倍という滅茶苦茶なものだったために、《零落白夜》と同じようにシールドエネルギーを攻撃用に転換しても全く問題はないほどに残っている。

それに加えて無人機たちは絶対防御を無効化する何かを発動させているため、攻撃を加えられても絶対防御でシールドエネルギーが持つていかれることもない。破壊せずに動きを止めるには最高の条件だった。

「恋華、ここを任せてもいいか」

「いいけれど、どうしたんですか？」

「嫌な予感がする、念のために地下から束の無人機に使われていたコアを回収してくる」

「解りましたー、行つてらっしゃーい！」

攻撃を捌き、反撃しながら明るい声でそう返した恋華に背を向け、千冬は一〇本ほどの小さな刃を引き連れて校舎の奥へと向かう。

それを見送ったあと、恋華は静かにアクアクリスタルから全ての水を流しだした。

「さて、それじゃとつと終わりにしましょうか」

オリジナルのナノマシン量増大。

偽の『ミステリアス・レイディ』から音声 flowed 瞬間、恋華目掛け全ての無人機が一斉に砲身を向ける。

危険だということが解っているのだろっ無人機たちが熱線を撃ち放とうとした、その瞬間。

「どかーん、てね」

言葉通り、全ての砲身が強烈な爆発を起こし消し飛ぶ。そこには、きらきらと光を受けて反射する水滴が全てに付着していた。

ナノマシンを含んだ水を操作して砲身の中に満たし、熱線を撃つのに合わせてナノマシンを超微細振動させることで温度を急激に上昇させ、気化熱によって爆破、熱線のエネルギーも加わって砲身をも吹き飛ばす高火力を実現させたのだ。

『ミステリアス・レイディ』の技、クリア・パッション清き熱情の応用によって全ての砲身を吹き飛ばした恋華は、思い出したように全てのナノマシンを自身の周囲へと集めていく。

「あんまり時間掛けててもつまらないでしょう？　ここで終わらせましょう」

言い放った恋華の瞳はあまりに冷たく、もしも誰かが見ていたらきっと、彼女であることを忘れてしまうほどに鋭かった。

右手を肩の高さまでゆつくりと伸ばすと、手の平を空へ向けて開く。そこへ、周囲を漂っていた全てのナノマシンと、それに引き連れられた大気中の水分、先ほどまで砲身に付着していた水滴が全てそこへ集う。

やがてそこに形作られたのは、巨大な、とても巨大な槍だった。透き通った水色があややかな光を放ち、手ごたえのない手ごたえを感じさせるような不思議な感覚をその手に伝えて来る。

「いつまでも千冬さんの手を煩わせているようなクズ共は、要らないのよ」

言葉と共に具現化させた近距離用槍型兵装蒼流旋を、逆手にした左手に構えると、水の槍を保持したまま右手を前へ押し出すようにして蒼流旋を投げる形に構える。

次の瞬間、一瞬で手元から離れた蒼流旋は、目の前にあった水の槍を纏い、水自体が螺旋を描いて飛んでいく。

一直線に偽の『ミステリアス・レイディ』目掛けて飛んでいくその槍を、偽者はいとも簡単に避け、

「後方注意ね」

その言葉の意味を問う前に、再度後ろから飛来した水を纏った蒼流旋によってコアを貫かれる。

バキッ、という音とともに、擬似コアは一瞬にして崩壊を始めた。それを冷やかな目で見つめながら、恋華は口の端だけを小さく歪める。残りは、有象無象だけだと。

「 強いな、木偶」

瞳を爛々と輝かせ、薄く切り裂かれた頬から血を垂れ流しながら
箒は笑った。

刃を打ち合わせることに二千と八九、切り裂かれることに一三、切り
裂くこと一三。

互いの力は全く持つて拮抗していた。

本来ならば確実に勝てるよう人間の限界を超えてチューンアップ
されたはずの偽者相手に、この短時間の間に追いつくほどの成長を
見せている箒の意思は今だ折れず、刃も力も尽き果てることはない。
歯をむき出しに獐猛な笑みを浮かべ、箒は叫んだ。

「まだやれるだろう、まだ斬り合えるだろう！ 私を映したのだ、
この程度でくたばってくれるなよ！」

既にストッパーは振り切り、エンジンは温まりきっている。この
状態で止まるなど、今の箒には考えられなかった。

一拍置き、箒はその刃を翳し一直線に大気を切り疾駆する。

音速を容易に置き去りにして振るわれたそれをしかと受け止めた
偽者は、お返しとばかりに《雨月》^{あまつき}の偽者をまっすぐ突き出して
くる。

それを身を翻すことによって回避すると、ぐるりと一回転すると
共に下から《空裂》^{からわれ}を腕目掛け振りぬく。

「ツアア！」

ガキンツ！

甲高い金音で食い止められたその刃のもち手へ向かい、更に別の角度から《雨月》の突きの一撃が放たれる。

それをありえない方向へ腕をひねり曲げることで回避した偽者は、更に速度を上げて蹴りを放ってきた。

「そう来るかつ！」

辛うじて身を捻ることでそれを避けて見せると、身を捻った体勢を戻す反動に乗って自らも蹴りを放つ。

己の上空から放たれた筈の蹴りを同じように振り上げた足で相殺した偽者が、電子音声でなく口を開いた。

さすがはオリジナル、追いついてくるところか、凌駕せんとするとは。感服します。

「……喋れたのか？」

つい先ほど目覚めたのです。我が名は『鈍刀^{どんとう}』、望みはただ狂おしき程の闘争也。貴女は我に死を超えた闘争を感じさせてくれますか？

流れてきたのは、美しい女性の声。

しかし、そこには確かに戦いを求める修羅の如き力があつた。

言葉を聞き、筈はただ唇を歪め笑みを形作る。そして、ただ一度だけ頷いた。

ああ、良かった。本当に良かった。ただ一度、闘争のために生み出された我が命。なればそのために磨り減らすことこそ我が本望……！

「 来い」

嬉しそうなその声に、箒は一言そう告げる。

箒は知らぬことだが、人格を与えられなかった擬似コアの構成体が人格を持つことは、本来有り得ないことだった。

それを可能としたのは、その場の空気の成せる業か、それとも第四世代という存在を模倣したが故の奇跡か。

一瞬にして、場の空気が静まる。常軌を逸したほどの静寂は、かえってその心をざわつかせる要因となることが頷けるように、それほどまでに大気は清と静まり返っていた。

互いが剣を鞘に収め、大気を切り裂かんばかりの眼光と共に諸手をそれぞれの柄に添える。

「では。いざ尋常に……」

……勝負。

言葉と全く同じ瞬間、再度解き放たれた互いの刃が煌く。
決着の時は、刻一刻と近づいていた。

第98話 戦いは未だ終らず（後書き）

最早ISの原形をとどめていない今日この頃。
でも突っ走ります。原作を悉くぶっ壊すのは私の悪い癖のようです。

第99話 終らせるとき（前書き）

ブレーカーが落ちて、一回半分以上文章消し飛びました。
おかげで超書けてた戦闘描写が駄文に……！
次こそもっと上手く書いてみせる！

第99話 終らせるとき

それぞれの戦いが終盤に迫る頃、千冬は一人学園内を全速力で飛んでいた。

「邪魔だ！」

刃を疑似コアに突き刺し、それと同時に小さな刃をそこら中の無人機の疑似コアに突き立てて一斉に破壊する。

崩れ落ちる無人機の中を疾駆し、たどり着いた突き当りには、巨大な隔壁とその横に小さなドアが備え付けられていた。

指紋と声紋、虹彩認証によってドアのロックを解除すると、ISを一度待機状態に戻して急ぎ中へと踏み入る。

中は透明の隔壁で中央が仕切られており、向こう側には未だ解体され内部を調査途中だった、束の制作した無人機が横たわっている。

コアは取り外され、無人機の残骸ともいえるものがあるフロアとは逆の場所、丁度今千冬が入ってきた部屋に安置されている。

ここにいた職員は調査の途中で慌てて飛び出していったのだろう、調査に使われていたと思わしき無人機の残骸に埋もれるようにして、コアの入った透明のカプセルのようなものが机の上に置かれていた。

「これが……」

コアの入ったカプセルを量子変換して拡張領域へと納めると、コアの状態を確認してから外へ出て扉をロックする。

ハッキングでもされない限りは破られないだろうが、この状況ではそれも怪しいだろう。

ため息をつきながら扉から目を離れた、次の瞬間。

轟音とともに学園が揺れた。

「っ、なんだ!？」

いや、いやあ!　だめ、消えてるの、いやあああ!!

どうした、散桜ちざくら!　なにがあつた!?

脳内に流れる悲痛な『散桜』の声に驚いた千冬だったが、直後には『散桜』を通して自分の頭に流れ込んでくる金切り声のような悲鳴に思わず耳をふさいでしまう。

「ぐ、あ、なんだ、これは……!？」

頭蓋を直接揺らされるような衝撃とともに流れ込んできたのは、何かがすり潰されるときにあげるような悲鳴。

目を見開いて必死に空気を吸い込む千冬の脳裏に、次々と手の平大の大きさの、六角形の疑似コアがひび割れ、崩壊していく様が再生される。

崩壊したコアからあふれ出すエネルギーは無人機の中だけに留まることなく、外へ漏れだした途端に恐ろしい威力の爆発を引き起こしていく。

いっばい消えてるの……、やだよ……!

散桜、気をしっかり持て!　意識の流れに飲まれるな!

脳内に流れ込む『散桜』の悲痛な叫び声を振り払うように、必死で呼びかけながら何とか意識を保ち立ち上がる。

いまだに流れ込んでくるおぞまじげな叫びのせいで少しばかり視界が揺れはするものの、まだまともに動けるくらいには保てていた。

「爆発……、自爆しているのか……!？」

その結論に至った千冬の脳裏に、昨日の巨大ISの爆発が浮かび上がる。

エネルギーが不十分だったあのときですら半径八キロ圏内が軽々と吹き飛んだ。ここでそれが起これば、ただでは済まないだろう。

「まずい……！」

一気に廊下を抜け、正面玄関近くまで飛んでいく。

そこに広がっていたのは、ぼろぼろになった教員たちとかるうじて立っている蓮華、そして一面が焼け野原になった正面玄関だった。残っていたのはほんの少しの建物の残骸だけ、あとはほとんどが融解してしまっている。

「みんな無事か！？」

「辛うじて、ですね……。織斑先生、コアの方は？」

「無事回収しました。それよりこれは……」

「突然爆発したの……。中はもつとひどいことになってると思う。しかも、連中まだまだ来てるわ」

恋華の言葉通り、空にはまだ数百体の無人機が今か今かと千冬たちへ視線を注いでいた。

それを苦々しげに見つめながらも、まだ続いている脳内に響く声に意識を持って行かれないように頭を振る。

「……限界だな、全員ここを離れるぞ！ 私が生徒を先導する！早く！」

「千冬さん、専用機持ちは！？」

『それならこつちで何とかするよ』

恋華の言葉に答えたのは、突然開いた青い仮想ディスプレイに映

り込んだ束だった。

『これは専用機持ちだけに流してるよ。専用機持ちは沿岸部に集合、そこで全員拾って離脱するから！』

「わかった、私は生徒を先導して脱出する！ 皆もよろしく頼む！」

「……は、はい！」……

「千冬さん、私も行くわ」

「……わかった。束、あいつらを頼むぞ」

『まっかせなさい！』

力強く頷いた束に頷いて返すと、ディスプレイが閉じてから千冬が声を張り上げる。

「これより、シェルター内の生徒を保護し、学園を脱出する！ 全員遅れるな！」

その瞬間、爆音にも負けぬほどの返事が鳴り響いた。

香織の体を保護した鈴も、束からの放送を聴いた。

「沿岸部ね、キティ、急ぎましょ！」

「……いえ、貴女とはここでお別れですわ」

小さく微笑んで言ったキティは、香織を優しく撫でると身を翻す。医務室から駆けて出て行ったキティを慌てて追った鈴は、出口で待ち受けていたキティによって頬に口付けられた。

「ふふ、お別れのキスですね。お兄様をお願い致します」

「ど、どうしてよ!? 一緒に行けばいいじゃない!」

「私と貴女は元々敵同士、この辺りで元に戻りましょう。楽しかったですわ、とっても。ありがとう、鈴さん」

儂げな笑顔を見せてそう言ったキティに、何も言えず立ち尽くす鈴。

キティはそんな鈴から視線を外すと、一直線に外へ向けて飛んでいった。

それをぼーっと眺めているばかりだった鈴も、気を取り直すように一つ息を吐き出すと、沿岸部へと視線を向ける。

「ぼーっとしてる場合じゃない、か」

頭を振り、それから宙を舞う。
別れを、振り切るように。

「おおおおおおオオオオ!」

ハアアアアア!!

金音と火花を撒き散らし、二人は疾駆する。

『紅椿』と『鈍刀』、二つの刃は互いに突き殺さんと、切り裂かんと喉笛を、或いは心の臓目掛け振るわれる。その度に、お互いの集中力が研ぎ澄まされていくような感覚に陥っていた。

長い斬り合いの中で、二人はそれぞれの形に進化していく。

『紅椿』は、装甲が壊されれば余剰エネルギーで補い、刃が折れればエネルギーで刃を形作る。

『鈍刀』はその強靱な装甲と刃でもって、無尽蔵の『紅椿』に挑んでいた。

「クク、アハハハハハハ！」

フ、アハハハハハ！」

『鈍刀』も箒も、いつしか笑っていた。それは互いの命を懸け、それを誇りとして斬り合う者同士だからこそ通じ合ったもの。

己の刃に一念を乗せ、全てを必殺の一撃として繰り出す。そうして、尚拮抗する両者の間には、いつしか奇妙な絆すら出来上がり始めている。

そして、戦いあう中で、『鈍刀』の姿は徐々に変わっていく。

箒との斬り合いの最中、その意気に穿たれ、一對の眼が。

その気に当てられ、形作られた口からは美しい声が。

人により近くなった『鈍刀』との斬り合いは、その戦いを更に加速させていく。

「ああ楽しい、これほどに楽しいとは思わなかった！ どうだ、『鈍刀』！」

「ええ、とても楽しい！ これこそ闘争、求めていたもの！」

『鈍^{なまく}ら刀』と名づけられた彼女だったが、その刃は何よりも鋭く、

そして美しく磨き上げられていた。

その刃でもって彼女が切り裂くのは、箒という存在そのもの。それほどの思いを、彼女はこの戦いに賭けていた。

しかし、箒もそれで負ける程度のものではない。

一秒一秒を感じ取り、更にそれを細かくしていった、それすらも感じ取るその感覚は、更に鋭敏化を続けていた。

そして、次の瞬間。

ほんの僅か、『次の時』がその視界に映る。

その一瞬に従って振り下ろした刃は、確実に『鈍刀』の刃を断ち切っていた。

「くっ……！」

「今のは、一体……！？」

自らも理解できない現象だったが、それでもその一瞬の太刀は確かに今の自分を超えたものだと確信した箒。

それを目の当たりにしながら、『鈍刀』は突然胸を押さえその場で蹲ってしまう。

「どうした！？」

「くっ、うう……っ！もう、限界のようです……！いつまでも爆破しないことが気に障ったでしょう、強制的に自爆プログラムが起動しました……！」

「なっ！？」

苦悶の表情で言葉を零すように呟きながら、彼女は更に続ける。

勝ち目がないと知りながらも挑んだ武士として、せめて最後までいは望む最後を得たいと感じて。

「逃げなさい、箒……！ 私が爆発すれば、この辺り一帯は吹き飛ばします……！」

「しかし……！」

「行きなさい！ ……ありがとう、もう十分よ。楽しかった……、生を受けた身として、これほど楽しい時はなかった……。もう、満足よ」

苦しみながら、それでも笑みを浮かべて言った彼女に、箒は歯を食いしばりながらも頷いて見せた。

背を向け飛び去っていく箒を見送りながら、彼女はその笑みを小さく、けれど消さずに保つ。せめてもの抵抗だった。

「お願い、箒。私が望んだ高みへ……！」

願いは届いたのだろうか。

次の瞬間、当たり一帯を強烈な爆発と爆風とが包み込み、彼女の体軀はそこに消え去った。

第99話 終わらせるとき（後書き）

ということで、IS学園崩壊開始。
さて、どうなることやら。

第100話 終わり、終る。(前書き)

祝、100話！

けれどまだまだ終る兆しが見えません！

第100話 終わり、終る。

「東社長！」

「りんちゃん、よかった、無事みたいだね。香織ちゃんは？」

「無事よ。まだ眠り続けているけど」

沿岸部で待っていた束の元に最初に到着したのは、香織を抱えた鈴だった。

疲れを見せながらも気丈に振舞う鈴を見ながら、束はその手で香織を抱き上げる。研究者であるはずの束が、その細腕で香織を軽々と持ち上げたことに、鈴は少なからず驚きを見せた。

「東社長、結構筋肉あるのね」

「まあねん。ほら、早く乗った乗った！」

束に急かされるままに乗ったそれは、巨大な戦艦だった。

戦艦と言っても形は奇妙で、本来あるはずの中央部分の突出した司令塔が存在せずに全体的に流線型の鋭い形を持っている。

それをいぶかしげに見つめながらも、鈴は束に続いて戦艦の甲板へと乗り上げた。

「私は皆を外で待つから、りんちゃんはあそこのドアから中に入ってね。はい、香織ちゃんをよろしく！」

「わかったわ」

再び腕の中に帰ってきた香織をいとおしげに見つめながら、鈴が頷く。

それを見て、束も頷いてから戦艦を降りる。そこで、爆発が続ける校舎から飛んでくる複数の影が見えた。

「社長……！」

「束さん！」

「かんちゃん、いっくん、おつかえりー！　そして他二名も不本意ながらお帰り」

「相変わらず拒絶されているな……」

「まあ、そういう人だって割り切っちゃえば、ほら」

やってきたのは、ボロボロになりながらも晴れ晴れとした顔の簪、ラウラ、一夏、シャルロットだった。

扱いに差はあるものの、ISの生みの親にあつたことで安堵したのだらう、全員の顔が柔らかく綻ぶ。

「束さん、これってどうなってるんだ？」

「さあ？　とにかく皆中に入って！」

「お、おう」

「うん……」

言われるがままに四人を押し込むと、次にやってきたのは葵だった。

人力で無人機をなぎ倒しながらやってきた彼女は、疲れた様子もなくその場に降り立つ。文字通り、空から。

「たっちん、これは……」

「ちよっとした伝だよん。ほら、入って入って！　あとは篤ちゃんとイギリス娘だけだから！」

そういった直後、海の方から無数の熱線が降り注いだ。

甲板を貫通するかと思われたそれだったが、薄い青色のシールドバリアによって進路を阻まれる。

「おおっ、早いねえ。でも無駄だよ、このシールドバリアは特別製、そんなものじゃあ破れない」

にやりと笑った束だったが、そこに通信が飛び込んでくる。
通信の主は若い男だった。

『クイーン、悠長に構えてる場合じゃないぜ！？ このままうじゃうじゃ来たら、今度は進めなくなっちゃう！』

「もうちよつと待てないの！？」

『いくらクイーンお手製の防衛システムつつつても限度がある！頼むから戻ってきてくれ！』

「……わかった。あーちゃん、乗って！」
「わかった！」

決断を下した束の声とともに、二人は戦艦の甲板へと上がる。

二人が上がりきったところで、甲板から続いていた階段が戦艦内に戻されていく。それで、陸との行き来は出来なくなった。

葵と共に司令部へと戻った束は、即座に通信回線を開いて今だ戻ってきていない専用機持ちへと連絡を入れる。

「箒ちゃん、イギリス娘、聞こえる？」

『姉さん。ああ、聞こえている』

『こちらでも聞こえていますわ』

「これからこの島を脱出する、逃げられるなら、今すぐ沿岸部からこの船を追って！」

その言葉に、通信回線の向こう側にいるはずの二人の声が消える。
何事かといぶかしんだとき、静かに箒の声が流れてきた。

『私は、ここで奴らの動きを止める。追われては、満足に逃げられないでしょう』

「箒ちゃん！？　なに言ってるの！？」

『……姉さん、私は死にません。彼女との斬り合いに水を差した無粋者をこの手で切り裂くまで、死ぬわけには行かない』

「箒、ちゃん……」

静かに、しかしはっきりと伝わってくる箒の思い。

いつの間にか大きく成長した彼女を、束は確かに感じていた。

『篠ノ之束の妹を、信じてください』

「……わかった、ちゃんと戻ってきてね」
『ええ』

優しい笑みを浮かべ、束は通信を切る。
その目には、小さく涙が浮かんでいた。

「社長……」

簪の小さな言葉が、その場に響く。

と、後ろを振り向いた束の顔は笑顔に変わっていた。

「さて、皆に紹介しないとね！　この船とここを根城にしている仲間たちを！」

いつの間にか集まっていた全員にそう告げると、束はカッソ、とつま先で床を叩く。

次の瞬間には、天井や床、壁の中から仕掛け扉で出てくる三人がいた。

「なっ!？」

「どういう演出よ……」

「やあやあ諸君、ご苦労さん！ 俺はK・K^{ケーケー}、この船、蜘蛛の巣^{スパイダーウェブ}の船長にしてリーダーさ！ よろしくな！」

中央にいた気さくな男がそう声を上げる。

人懐こそうな笑みだったが、どこか気味悪さを感じさせるそれ思わず一同は少しばかり足を引いてしまう。

それに続いて口を開いたのは、傍に座っていた黒人の男性。

「……クレイマンだ……。よろしく……」

「あ、ああ、よろしく」

がつしりしたその体躯と低く太い声、言葉少なにもその迫力は十二分に伝わってくる。

一夏だけがややびりつつも声を返したが、他は思い思いのリアクションをとっていた。

「ベル・ル・ベルよ、ぶっ壊したいものがあれば何でも言ってねー！」

既に十分ぶっ壊れているんじゃないかというぐらいテンションの高い女性が、とても楽しそうに言った。

どう返していいのかわからずに苦笑いで返した一同だったが、どうやら言っただけで満足したらしく、立ち上がったままの体勢で椅子に再び座り込んだ。

「……えっと、個性的な人たちね？」

「ちなみにあと二人いるよ！ 一人は腹痛でトイレ、もう一人は引きこもってるから！」

「ろくな奴がない！？」

「それでも《彼ら》を除けば世界最高峰のハッカーとクラッカーなんだよ？」

「そ、そう……」

《彼ら》が誰なのかを聞いたかった鈴だったが、なんだか妙に疲れてしまったためやめておいた。

「それじゃあ、皆それぞれ一休みしてから会議室に来て。マップはこつちで皆の方に転送しておくから」

「解ったわ。ありがとう、社長」

「気にしないで」

朗らかな笑みでそう返すと、束はその場から立ち去る。

あとには、微妙な空気を漂わせる三名と一夏たち一同が残された。

「……どないせいつちゅうねん」

「良かったのか、セシリア？」

宙に浮き、箒はふと聞いた。

戦いを終えたあと、箒と合流したセシリア選んだのは、脱出ではなく足止め。箒と共にいるということだった。

「ええ。私の相棒は貴女ですわよ」
「……ふ、ああ。わかつているさ」

まんざらでもないような顔で微笑んだ箒は、軽くセシリアと手を合わせ音を鳴らす。

そんな二人の目の前には、一〇〇〇機を超える無人機の群れが浮かんでいた。

それをまっすぐに見据えながら、二人は頬を吊り上げる。次の瞬間、箒の《絢爛舞踏^{けんらんぶとう}》が発動し、削り取られていたセシリアのダメージを一瞬で回復させる。

「アイツの弔い合戦でもある。派手にやるぞ」

「『鈍刀』、でしたわね。……ええ、貴女がそう言うのなら、それほど相手だったのでしょうか。その無念、私の推し量れるものではありませんが……」

リミッターの解けたセシリアが、『ブレイブ・ティアーズ』のシールドビットを全て宙に浮かせる。

その眼は、普段とはまるで違う猛々しい光を灯していた。

「せめて、ここで晴らしましょう」

「ああ」

紅と蒼、互い違いの色を撒き散らし、二人は学園中が吹き飛んでいく中で舞う。

近づいていた数機を一瞬で切り伏せ、その背後から迫る数体を撃ち抜き、入れ代わり立ち代わり壊していく。

「いね」

「 推して参るッ！」

刹那、紫色を持った一筋の光が敵の群れへと呐喊した。

そして、ついぞ彼女たちの消息は知れぬものとなることを、彼女たちはこのときはまだ知らずにいた。

翌朝、世界は混乱に包まれていた。

『世界中の諸君、おはよう。私の行ったデモンストレーションは見てもらえただろうか。ネットでも流れているから、是非見て欲しい。私の作り出した擬似ＩＳコアを使用したＩＳによって、ＩＳ学園は壊滅した。既に時代は女性優位ではない、新たな平等の時代がやってきたのだ』

混乱の原因である巖隆の放送は、いまや世界中で聴くことが出来る。

各国のニュースはこれを繰り返し報道し、男でも使える擬似ＩＳコアが作り出されたとテロップを躍らせている。

世の男たちがようやくまともな世界になるのかと考える一方で、有識者たちはその危うさに危機感を抱いていた。

今までは女性優位とはいえ戦争に使われぬよう条約が結ばれていたＩＳコアだったが、万人が使える擬似コアはその括りには入らな

い。まして同等の戦力がやり方次第でいくらでも手に入る可能性がある
あると知り、自国拡大、軍備拡大を狙う者たちの思惑は錯綜してい
った。

その日までは。

『これより、世界は新たな時代を迎える。平等な、死を迎えられる
世界へと』

その放送が流れた当日、世界中の首都を五〇〇機単位の無人機が
襲撃、世界は未曾有の混沌へと落とされていく。

しかし、舞台の幕はようやく開けたばかりであった。

第100話 終わり、終る。（後書き）

蜘蛛の巣、消えた筈とセシリア、そしてキティ。

混乱する世界の中で、束たちを乗せた船は一体どこへ向かうのか。
次回より第二幕の準備期間となります。どうぞお楽しみください。

第101話 旅の支度（前書き）

切りのいいところで切ったのでやや短め。

第101話 旅の支度

あの襲撃戦から数日が経ち、今日もまた変わらぬ太陽が上る。

その日差しの中、どこかの海を漂う『蜘蛛の巣^{スパイダーウェブ}の巣』の本拠地である戦艦の甲板に出た私、凰鈴音は大きく伸びをして燦々と降り注ぐ太陽光を一身に浴びていた。

「ふう……。……なんか、嘘みたい」

激動の日々を思い返し、鈴は一人ごちる。

戦いの連続だったあの日々から幾日がたった今、こうして平和な海を眺めているとそれも嘘だったように感じられてしまうのは、仕方のないことなのか。

そんなことを思っただけを眺めていると、とつぜん頬にひやりとした感触が当てられ、飛び上がりそうになりながら振り返る。

「やつ」

「ナターシャ……。もう、脅かさないで」

「あら、ごめんなさい」

冷たく冷やされた水の入ったカップを渡され、鈴は苦笑いしながらもそれを受け取って一口啣る。

12月の冷たい風も、朝の今は爽やかに感じられる。

そんななかで、ふと鈴が思い出した。

「そういえば、襲撃されたとき、ナターシャってどこにいたの？」

「ん、束ちゃんのお願いで情報収集に行ってたのよ」

ナターシャが合流したのは、IS学園から脱出した翌日のことだ

った。

彼女の持ち帰った情報によって巖隆の動きが表立って行われることを知った、その直後に各国の首都が攻撃されてしまったため、鈴たちは動くことが出来なかったのである。

「それで、これからどうするの？ もう三日以上上海の上よ？」

「まずは北アメリカに移動するわ。北西部の軍の拠点の近くにゴースタウンがあるの。そこで私の友人と落ち合うことになってるわ」

「ふんふん、それで？」

「動くには情報があるわ、そのためにアメリカ軍の一部に協力してもらうのよ。私のこともあるし、色々と都合付くから」

ぐいつ、と一口で水を飲み干したナターシャは、タンクトップに押し込まれた胸を揺らして空を見上げる。

その胸を羨ましそうに見つめる鈴だったが、やがて溜め息をつく
と、自身も空を見上げた。

「香織、まだ目が覚めないの」

「……色々、考えたりしてるんじゃない？ 死んでないんだし、いつかは目覚めるわよ。私たちががんばってれば」

「……そう、ね」

とはいえ、やはり気分は沈む。

香織が意識不明のままな上、箒とセシリアまで消息不明になってしまっている今、皆やはり精神的に負担が大きくなっている。

そのことを感じ取ったナターシャは、水を飲み終えた鈴をぎゅつと横から抱きしめた。

「な、なによっ！？」

「無理したらダメよ、香織君が起きたら心配しちゃうもの」

「ナターシャ……」

あやすように手を動かすナターシャに、鈴は小さく溜め息をついて身を預ける。その目には、蒼く広がる空が映りこんでいた。

「……どうしてこんなことになっちゃったんだろ」

「さあ。けど、世の中ってこういうものよ。理不尽そのものみたいなものだけど、私たちはその中で生きていくしかない。でしよう？」

どこか悟ったようなナターシャの言葉に、鈴は静かに頷く。

しばらくの間そうしていたのか、気が付くと甲板にはひとりの男が出てきていた。

「あら、クレイマン。おはよう」

「おはよう……。早いな、二人とも……」

軽く挨拶を交わしたクレイマンは、燦々と降り注ぐ光に目を細めながら甲板の中心に座り込み、座禅を組む。

澄んだ朝の大气の中で黒人が座禅を組んでいるその光景は、なんともいえない違和感を醸し出している。

「……そろそろ皆を起こしてくるわ」

「そうね、うん。行つてらっしゃいな」

ナターシャに見送られ、鈴は再び船の中へと戻ることにした。

船の中は随分と広く、バインド・カンパニー本社と同じように銀色の塗装が施されている。さながら近未来の宇宙戦艦の中といった所だろうか。

その中を歩いていく鈴が最初に叩いた扉には、「一〇一」というプレートが飾られている。

三度ほどノックすると、中から鍵が開けられ扉が押し開かれた。

「あ、鈴か。どうした？」

「起こしに來ただけよ。もう少ししたら朝ごはん作るから」

「おう、わかった」

中から顔を出したのは、Ｔシャツ姿の一夏だった。短く言葉を交わすと、再び扉を閉める。

次にあけたのは「一〇二」、一夏の部屋の隣の扉。

同じように三度ノックしたところで、「こそそと物音がして扉が開かれる。

「ん……、ああ、おはよう鈴」

「おはよう、シャルロット。もうすぐご飯だからね」

「手伝う？」

「いいわよ、昨日食事当番だったでしょ」

「そう？ それじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

「それじゃ」

扉を閉め、また歩き出す。

今日も、一日が始まった。

「さて、皆集まったね」

それから数時間後、艦内にいた全員が会議室に集まっていた。その中で、束だけが立ち上がりモニターの前に陣取っている。モニターには北アメリカの地形図が載せられており、複数の赤い点が各所に配置されているのが見えた。

「これから皆には、昼のうちにアメリカに渡って、夜になったら行動を開始してもらうことになる。K・K・説明」

「あいよ。まず今回の目的だが、情報の入手と物資の補給だ。ここからどう動くにも、まずは情報が必要だからな。しかも、情報化されていない生のものが。だから、このお嬢さんのお知り合いに協力してもらって軍から情報を貰うってわけだ」

そこでK・K・が言葉を切り、モニターを少し操作する。すると、沿岸部からやや離れた部分にあった赤い点が拡大され、「Ghost town」の文字が綴られた。

「今回は班を二つに分けるわ。一つはここで船を守り、一つは私と共にここまで行って情報と物資を補給する。物資は仲間が横流ししてくれるから問題ないわ」

「横流しね、それ大丈夫なの？」

「ええ。あの基地は軍の中でも機密とされている場所だから、少しくらいおかしくても誰も気にしないわ」

疑問を投げかけたベル・ル・ベル、通称ベルに対してナターシャが返す。

と、そこで初めて葵が口を開いた。

「私はここに残るわ。香織を守らないといけないし」

「その方がいいわね。私と一緒に来るのは……、鈴ちゃん、簪ちゃ

ん。一緒に来てちょうだい」

「ん……」

「わかったわ。一夏、シャルロット。香織を頼んだわよ」

「ああ、任せとけ」

「大船に乗ったつもりでいてね。乗ってるけど」

勢い良く頷いた一夏とシャルロット。

この二人には都市襲撃が行われる前に香織が男であることをばらしてしまっているため、大して話がギクシャクすることもなくなつた。

尤も、一番大事な部分はまだ束と葵の心の中に秘められているのだが。

「よし、それじゃあ束ちゃん、着岸次第行ってくるわね」

「頼んだよ」

先の一件以来、今までのような束は鳴りを潜め、どこか冷たい目をした彼女が言う。

その気持ちを知ってか知らずか、ナターシャは明るい笑みを浮かべて頷いた。

話が一段落したと思った途端、パタンと本を閉じる音が響く。そこには、冷めた目で一同を見つめる少女がいた。

名は空の^{くう}一文字、性別は女。齢八つの幼子でありながら、ハツカ―とクラッカーを兼任しあらゆる電子網を網羅する知識と腕を持つ異端児だった。

彼女は元々束が拾った少女だったが、一通りのことを学ばせたあとは『蜘蛛の巣』で経験を積ませるために束が送り込んだのだ。

彼女は、とかく人との交流を持たない。そんな彼女がこの場に出てきているのは、一重に束に出てきてくれと頼まれたからだだった。

「終わりましたか」

「終わったわよー？」

「それじゃ」

ベルの返事に、空はつまらなそうに呟くと椅子から降りて歩き出す。

その背中からは、万人を拒絶しているようにも思えるほどに寂しいものだった。

それから更に数時間後、あと二時間も経てば日も落ちるだろうという頃になって、一向は北アメリカ北西部の沿岸部に接岸していた。東が移動用にと艦内で突貫で作り上げた『フロートボート』が陸に上げられ、物資運搬用のコンテナがその後ろに接続される。

「フロートボートには一応武装も積んであるけど、最悪の場合はISを展開してね」

「わかってるわよ。そっちも気をつけて。三日もあれば帰れるから」
「ん。了解」

ナターシャと東が手の平を打ち合わせ、音を弾けさせる。陸の乾いた大気と海からの湿った風が混じりあう中に、それは不思議な音色を響かせた。

薄いオープンカーのような形をした、金属製の『フロートボート』に乗り込んだナターシャ、鈴、簪の三人は、皆ジャケットとジーンズというラフな格好である。

着岸地点は、マカー湾とオゼット湖の丁度中間辺り。ここから森と山をGPSを頼りに突っ切って、あらかじめナターシャが座標を入力した位置、『地図にない基地』^{イレースト} 近くにある山奥のゴーストタウンへと向かう予定になっていた。

「それじゃ、行ってきます」

「行ってきます、社長」

「行ってきます……」

「ん、皆行つてらっしゃい！ 気をつけてね！」

東の声を背に受け、三人は一路廃墟の町へ向けて走り出した。

第102話 穏やかなひと時

北アメリカの肥沃な大地の上を、一台の奇妙な車両が走っていく。それはスポーツカーを上から押し潰したような、流線型そのもののような形で、しかもタイヤではなく何かの力によって地面から浮いていた。

それに乗った三人の女性と少女が、風を切って走る中を心地よさそうに目を細めて息を吸い込む。

「いい風ねー！」

「ほんと、最高ね。これで戦争が起こらなければもっと最高」
「同感……」

向かい風に負けないように声を張り上げる鈴に、ナターシャと簪が小さく同意する。

無論その声は風によって掻き消されてしまっているが、それでも二人の表情を見て鈴が笑う。本当に、笑える日が来ればいいと、そんな願いをこめて。

木々の間を駆け抜ける『フロートボート』の速度は二〇〇キロを超えているが、防風はされているため身を乗り出さなければ風を浴びることはない。

しかし、鈴だけはそんなことお構い無しに防風用の透明な障壁から身を乗り出して風を一身に受けていた。

そんなこんながあつて、三人が人気の全くなかったゴーストタウンにやってきたのは、日が落ちてからのことだった。

「んー、くらっ！」

「そりゃ夜だし、外灯ないんだから暗いでしょーよ、っと。はい簪、ライト」

「ありがとう……」

至極当たり前のことを驚いたように言い放ったナターシャに、鈴がそんな言葉で返してバックパックからライトを取り出し、簪にも手渡す。

大き目のマグライトは意外と彼女たちの小さな手にも馴染み、いざというときはぶん殴っても故障しなさそうな程度に頑丈だった。尤も、本当にいざというときには刃の雨あられが降り注ぐことになるだろうことは言うまでもない。

「それで、どこに行けばいいの？」

「とりあえず近くの廃屋に入りましょう、今日の寢床よ」

「うそつ、日帰りじゃなくて!？」

「そりゃ掛かるわよ……。もう真夜中よ、動くなら明日の夜ね」

電子情報網が発達した現代では、たとえ夜の暗闇に紛れ、月の明かりを頼りにしても見つかるときは見つかってしまう。夜を跋扈する魔物など、当の昔に消え去ってしまった。

しかし、そんな現代でもやはり夜闇というものは非常に隠密性に優れている。黒と白、どちらに溶け込みやすいかと問われれば断然黒と答える方が多いだろう。何しろ、黒は時間と共にやってくるが、白なんてものはやってこないのだから。

白夜という表現もあるが、あれはただ緯度の関係で太陽が沈まないだけであり、空や大気が白くなるわけではない。

しかし、真夜中を過ぎて時刻は深夜二時を回っている。この時間から動き出すのは体調的にも良くないだろう。

ナターシャは鈴をそう説得し、それから寢床探しに精を出すことにした。

「それにしても、凄い量の廃屋ね」

「頑丈そうなのを探してね」

ゴーストタウン、と一口に言っても、その朽ち方は様々である。自然災害で出て行かざるを得なくなってしまったものもあれば、戦争や政治によってそうせざるを得ない場所もある。もしくは、開拓期に作られた村々のうちのいくつかは、その後の次なる開拓地に移り住んだときにそうなってしまうものもあるだろう。

とにかく、共通しているのは人がいないということ。

それはつまり、殆ど物音がしないということでもある。それは、とても不気味なものだろう。事実、この三人の中で一番心霊的なものが苦手な鈴は、ややびくびくしながら散策していた。

そんな彼女は近くの廃屋を覗き込む。中は酒場として使われていたらしく、丸テーブルやカウンターなどが今なお形を残していた。座った途端に崩れ落ちそうなほどに脆くなっていそうなそれをみて、ここは無理だと判断し、早々に次の場所を探しに行く。

それから更に一〇分ほどして、三人は大きめの一軒家を寢床とすることに決めた。

「結構よさそうな場所じゃない」

「窓もあるし、身を隠す場所もある。フロートボートとコンテナは裏に隠してあるからね」

「……ご飯食べよう。お腹空いた」

「あはは、そうね。鈴ちゃん、バックパック貸して」

「ん、はい」

軽く床を足で払って埃をどかすと、近くにあった木材を壊してそこにくべる。

バックの中からライターと着火剤を取り出すと、くべた木材の中心に入るように入れて、そこにライターで火をつけた。

木材がからからに乾燥していたおかげで、火はあっさりと付き、

三人の体をゆつくりと温めていく。

「さて、とつとご飯食べて休みましょう。見張り番は私がやるから」

「大丈夫なの？」

「これでも前はモノホンの軍人さんだったのよ？　一徹くらいどうってことないわよ」

「それじゃあ……お願い……」

了解、と上機嫌に返したナターシャに笑みを向けながら、鈴はバツクパックからレトルトの食材を取り出していく。

どこかキャンプを彷彿とさせる夜だった。

そして、翌朝。

目を覚ました鈴は、寝袋から這い出ると今だ寝ぼけ眼な自分をを起こすために、のそのそと家の外へ出る。

太陽は随分と高く上っていて、照りつけてくる日差しは起きたがらない瞼を引っ張り起こすのに十分な力を持っていた。

「んー……っ」

ぐいつ、と一杯に腕を上には伸ばし、体のコリを解す。ちなみに、今の鈴たちはそれぞれ束の用意した軽装のBC制服を着ているので、

ぱつと見ただけではただキャンプに来た一学生にしか見えないだろう。

鈴が朝の日差しを浴びていると、後ろからナターシャがやってくる。手には、見慣れない黒い物体、拳銃が握られていた。

「ちよ、なにそれ？」

「護身用に持ってきておいたの。一応整備しておこうと思ってね。使う？」

「冗談よして。訓練は受けたけど、人に向ける勇気なんてないわ」

「あら、フランスの時には随分暴れたくせに」

「香織が絡めば別よ、別」

片手で銃をくると回しながら言うナターシャの言葉に、鈴は苦笑いしながら答える。

中国で代表候補生をやっていた頃、鈴は他の候補生と共に軍で一通りの訓練を受けていた。

かつては色々横暴を働いて鼻つまみ者になっていた中国だったが、それも今となつては昔の話であり、今ではまともな国としてキチンと成り立っている。

そんな中国の軍で訓練を受けていた鈴は、すっかり銃器を扱う訓練も受けていた。もちろんそれは万が一の時のためのものだったが、的に向けるのと人に向けるのでは天と地ほどの差がある。それこそ、フランスのときのように精神状態に一石を投じるような状況でなければ扱えないだろうということは、鈴もキチンとわかっていた。

当たり前の答えが返ってきたことにややつまらなそうな顔をしながらも、同僚にしてある意味先輩である鈴が自分のことをわかっていることに安堵し、ナターシャは銃に安全装置をかけるとベルトに仕舞いこむ。

上手い具合にベルトとズボン、そして上着に隠されて見えなくな

っている銃を確かめ、ナターシャは軽く鈴の背中を叩いて中に返ろうと声をかけた。

「ん……、おはよう……」

「おはよう、簪ちゃん」

「よく寝てたわねー。ほら、寝癖。こつち来て」

「ん……」

中で起き出して来た簪を呼び寄せると、鈴はポケットに入っていた櫛とバックパックに入っていたスプレーを使って、簪の髪を整えていく。

ところどころが跳ねている簪の髪をゆっくりと水で濡らして櫛で梳かしていくと、簪は時折心地よさそうに目を細め「んう……」と声を漏らす。

その様子が鈴の琴線に触れたのか、鈴は笑みを漏らし楽しそうに髪を梳いている。

「気持ちよさそうねえ。ね、鈴ちゃん。今度私もやってくれない？」

「いいわよ。あんまり上手くないけど」

「んーん、気持ちいい……。なんだかほつとする……」

「そ、そう？　ありがと……」

自分の体の中でも、首から上だったり下半身だったりといったところは、そう人の手が触れるところではない。まして、血の繋がっていない赤の他人が触れる機会など、そういう時でもない限りはないだろう。

だからこそ、他人に髪を梳いてもらったり、洗ってもらったりするのは、格別心地がいいものなのだろう。もちろん、それが上手い人でなければただ不愉快で終わってしまうが、幸い鈴はかなり上手い部類に入っていた。

というのも、鈴が中学生の頃は香織の髪をよく梳いていたのだ。初めは鈴の寝癖を見つけて、香織が手持ちの櫛で髪を梳いたため、そのお返しとばかりに香織の髪を梳いていたところ、それを妙に鈴が気に入ってしまったらしく、それからというもの、時たま鈴は香織に頼んで彼の髪を梳くことがあった。

思い返してみればなんとも不思議な思い出だったが、そう言えばそんなこともあったなと鈴は小さくはにかむ。

遠い異国の地、しかも当の本人が眠り続けている今の状況でそんなことを思い出すのは、果たしてどんな意味があるのか。

とにかくにも、鈴は香織が起きたら一番に髪を梳いてやろうと、そう思った。

それから日が沈んだ頃、ナターシャたちの元に一台の車がやってきていた。

軍用と見えるそれを、ナターシャは窓からそつと顔を覗かせ観察する。

窓は曇りガラスと防弾性向上のために厚くなって中が見えなかったが、その車のデザインは『イラスト地図にない基地』独特のもので、それを確かめたナターシャは廃屋から出て行く。

「よう、ナタル。時間通りだな」

「久しぶりね、イーリ。そっちの二人も久しぶり」

ナターシャの言葉に敬礼で返した二人を見ながら、イーリ、イーリス・コーリングは軽く笑ってナターシャと握手を交わす。

「今日はよろしく頼むわね」

「おう、任せとけ。そっちの二人もな」

「ええ、よろしく」

「よろしく……」

アメリカ軍第一六国防戦略拠点、『地図イレーストにない基地』のメンバーとの会合を果たした三人は、話し合いのために廃屋へと戻っていく。戦いのための旅支度は、まだまだ始まったばかり。

「……」

ぼんやりとした明かりの中で、空くうは一人眠り続ける香織の元もとにいた。

じっと見つめるその瞳には、安らかに眠りにつく香織の顔が映り、それは布団が呼吸で動いていなければ死んでいるのだと錯覚してしまいそうだった。

「……温かい」

小さな手の平で、空は香織の頬に触れる。殆どの時間を冷たい機械と接してきた冷たい手に、じんわりとその温かさが広がっていくような錯覚を感じて、空は思わず目を細めた。

こうして香織に触れて、じっと彼を見つめるのは、香織が運び込まれてきてからの空の日課だった。

人を嫌う彼女が束以外に唯一心を許して接することが出来るのが、香織だったのだ。なぜなのかは彼女にもわからないが。

否、理解してはいるのだろう。ただ、気づけないだけで。

「……また来るね」

聞こえていないであろうことは百も承知で、空は表情を見せずに言う。

静かに席を立つと、医務室の扉を潜って外へ出る。人気のない廊下を、空はぽつぽつと歩いていく。

歩き通して出てきた場所は、船の甲板。今のところこの船はステルス状態となって隠されているため、あらゆるレーダーの探査範囲外になっている。

ステルスフィールドは東の作品であり、東はISが出てすぐの頃、スパイダーウエブ『蜘蛛の巣』に船をくれてやったことがある。この船に搭載されているシールドバリアもその一つだった。

というよりは、この船を渡したのは空を守るためでもあった。この船は、東の作り出した空の盾なのだ。

「……青い」

空を見上げ、空はポツリと呟く。

空は、どこまでも青かった。

第102話 穏やかなひと時（後書き）

東さん万能説。 っていうかもう説じゃなくて事実。

第103話 狼煙

「さて」

会議は、その一言で始まった。

ナターシャの両脇に鈴と簪、それと向かい合うようにして座るイーリスの両脇には二人の女性の軍人が座っている。

初めに口火を切ったのはナターシャだった。

「それで、どんな状況なの？」

「どんなもクソもあつたもんじゃない、どこも酷いもんさ。あのゴキブリ野郎にケツ追ひ回されて、マシだった人間なんていやしない。食われるか殺されるかさ。運がよければ逃げ延びて生き残れるけどな」

「そりゃひどいわね。軍は？」

「まるで役立たず。考えても見ろ、相手は絶対防御がないとはいえ死ぬことを怖がらない無人機だ。しかもISと同じ装甲だからマトモなオモチャじゃまるで歯が立たない。そのくせうちの国にあるISはせいぜい六〇とちょっと、その中で開発に回されているのは二〇とちょっと。残りの四〇でアメリカの首都や他の大都市を全てカバーしろってのは、到底無理な話さ」

ISの驚異的な機動性、火力、防衛力をもつてしても、相手が同等の機体と数百倍から数千倍の数で押してくれば押し負ける。防衛面積の関係もあるだろうが、それでも押し負けずに何とか全員を脱出させたIS学園の専用機持ちや教師たちは、その点で言えば相当おかしかつただろう。狂っていると形容してもいいくらいには。

そのことを知っているのか、イーリスは鈴と簪を賞賛するような視線で見っていた。それに気づき、鈴は小さく笑いかけてみる。

「今はゲリラ作戦で少しずつ相手の戦力を削る気らしいが……、こっちから言わせて貰えばそんなもん無駄だね」

「でしようね。相手が人間でないのだから」

ゲリラは遊撃で相手を物的、心的に消耗させる戦い方。しかし、量が不明瞭な現在、無人機相手にそれを行うことは下策も下策だろう。

一体上が何を考えているかもわからないと言ったナターシャに、片方の軍人が慌てて言葉を伝えた。

「まずくないですかコーリング少佐。本当にこれ大丈夫なんですか？」

「少なくとも悪い方には転ばないさ。ここはもうとつくにどん底だからな」

カラカラと笑うイーリスだったが、彼女にナターシャはやや驚いたような顔を向けた。

「貴女、階級上がったの？」

「ああ、少し前にな」

ナターシャとイーリスが同じように軍属でいた頃、二人は共に大尉であり、またある種特別な権限を与えられていた。それはどちらもISのパイロットとして優れた技能を持つからに他ならない。

友人の昇進を素直に喜ぶナターシャだったが、当のイーリスはつまらなそうだった。

「で、なんでそんなに不機嫌そうなの？」

「アタシは外出て戦ってる方がマシなの、知ってるだろ？ 紙切れ

と格闘なんて冗談じゃない」

「あらあら」

書類整理や事務仕事の苦手なイーリスは、時折ナターシャにそれを手伝ってもらったことがあった。

親友のそんな性格をしつかり把握しているナターシャは、彼女にご愁傷様と言葉を投げかけてから真面目な顔に変わる。

「それで、物資はどれくらい用意できた？」

「結構な量だぜ。物資運搬用のワゴン車使って正解だった」

「ありがと。なぜか知らないけど黒幕に目をつけられてる上に、首都には顔出せないから買い物ってしづらいのよ」

あの戦い以降、巖隆は随分と束一向に注目しているらしく、買い物がおおっぴらに出来ないのもそのためだった。

相手は擬似コアを量産するほどの科学力の持ち主だ、電子の世界で何をされるかわかったものじゃない。

無論、電子の世界だけの戦いなら束たちに負けはないが、そこに現実の戦力が絡むとなると話は別だ。

こちらは電子制御の相手を軒並み破壊するだけの過負荷を掛けながら、相手のハッキングの進行を食い止めるなんてことをやらなければならぬのに、相手はといえばこちらの居場所を突き止めるだけで勝負が付く。そんな賭けに出るほど、彼女たちは愚かではなかった。

「他の国のこと、何か知ってる？」

「ああ、フランスはやばいって聞いたな。何でも、トップが暗殺されるとかどうかって」

「……それ、詳しく聞かせて」

さらりと流れ出た重要情報に、三人が軽く身を乗り出す。
その様子に若干苦笑いしながらも、イーリスは口を開いた。

「オーケー。まずフランスだが、どうにも雲行きが怪しい。さつきも言ったようにトップ、つまり大統領が暗殺されるんじゃないかって話も出てるし、委員会から重圧掛けられてるって話も聞いている」
「ＩＳ委員会から？　なんで？」

「さあな。情報公開せずに独断での第三世代型作成及び譲渡ってあたりじゃないか？」

イーリスの口調からは、明らかに彼女がシャルロットの『ミストラル・リヴァイヴ』のことを知っているように感じられる。いや、事実知っているのだろう。

予想よりもよほど雲行きが怪しくなってきたのを感じて、ナターシャは小さく歯噛みした。

「じゃ、どうして大統領暗殺なんて話がでてるの？」

「そこで、もう一つの国と組織が関わってくる。ドイツと、『亡国機業』だ」
ム・タスク
ファント

待つてましたとばかりに手を打ち、音を響かせる。

「こっちの調査でもわかってきてることだが、ドイツの高官と連中の間には繋がりがある。連中を通じてドイツはフランスのトップに重圧を掛け、それに屈するなと脅しているのが委員会ってわけだ。両者共に大統領の部下たちを懐柔しに掛かってるだろうから、近々殺されるかもな」

「それって要するに、水面下で国取り合戦が始まってるってこと？」
「ああ。ドイツと『亡国機業』は、建前上で怪しまれない、自由に出来る場所が欲しい。委員会はそれを阻止したい。手っ取り早いの

は首を挿げ替えることだろ？」

ちくしょう、と鈴が毒づく。

世の中がどれほど汚いかはわかっているつもりだったが、これほどまでとは予想外だった。

しかし、なぜフランスなのか。そこだけが鈴やナターシャ、簪にとつての疑問点だった。

それを察し、イーリスが言葉を続ける。

「『ミストラル・リヴァイヴ』。こいつの武装は既に情報として流れてるが……、どうやら死の間際にデュノアは飛んだ化け物を生み出したらしいな？ 強制的にコアにバイパスして、シールドエネルギーを吸い上げ、放射する武装。しかも連中にとつて嬉しいことは、コイツがワンオフじゃないってことだ」

「そうね……。シャルロットのアレは喰らい掛けた私が一番よく知ってる。恐ろしいなんて代物じゃないわ」

同等以上の性能を誇る無人機に捕まれた経験のある鈴がそう漏らす。その言葉には、確かな実感と僅かな恐怖が滲み出ている。

「委員会は公明正大を謳っちゃいるが、中身は俗物だらけさ。そんな連中に渡ってみる、更に利権を得るために動くに決まってる」

「どっちにしても阻止しなきゃいけないわけね」

「ああ。手っ取り早いのは委員会と『亡国機業』を潰すことだ。ドイツは高官が集まって好き勝手してるだけだから、連中だけじゃ特に怖くない」

既に情報交換というレベルではなくなってきたいるが、ここでの音声は『銀の福音』、『甲龍』、『真打・鉄』の音声ログに残るため、大切なことを聞き逃すこともない。

その中で、突然イーリスの通信機が鳴り響いた。

「わるい、ちょっと待っててくれ。……なんだ？ ……なんだと！
？ わかった、すぐに戻る！ それまで堪えるよ！」

「どうしたの？」

「襲撃だ。例の無人機、数は不明」

それを聞いたナターシャの顔がこわばる。その顔を見て、鈴と簪は示し合わせたように頷いた。

「……鈴、簪」

「わかってるわよ。ったく、お人よしめ」

「でも、いいところ……」

「イーリス、私たちも加勢するわ。無人機との戦闘経験は私達の方が上よ」

突然そんなことを言い出したナターシャに、イーリスは目を見開いて啞然とする。

既にナターシャは部外者だ、軍属でもなければアメリカ国民でもない。守る義務などないのだと言おうとしたイーリスに、ナターシャは続け様に言葉をぶつける。

「昔の祖国を守るのに、理由が必要？」

「ナターシャ……」

「それに、私はまだ守ってもらうほど弱くなっただけじゃないわ。この子達だって、ね」

「そういうことよ、軍人さん。急がないと」

不敵な笑みを浮かべて言い放った鈴に、イーリスはさすがに舌を巻く。

しかし、数瞬の後には元の表情へと戻り、小さく頷いた。

「撃て、撃てーっ！」

「施設に近づけさせるな！ 食い止めるぞ！」

第一六国防戦略拠点、『イレイド地図にない基地』。そこでは、かつてないほど激しい戦闘が行われていた。

弾丸が飛び交い、時折飛び散る肉片と赤い液体、そして立ち上る炎が、寒々とした空と灰色の建物、コンクリートの地面を紅に染めていく。

その光景を目にしながらも、兵士たちは決して引こうとはしなかった。それが彼らの役割だったから。

世界最強の機動兵器に拒絶された彼らは、銃を取り祖国を愛する心に従ってその引き金を引くことを選んだ。

だからこそ、彼らは祖国を何の意味もなく、ただただ蹂躪せんとする者達が許せない。

無駄だと知りながらも銃弾を撃ち込み、せめて一瞬でも止まってくれと願う。それが、彼らに出来る最大限の抵抗だった。

果たして、それは正解だったのだろうか。

無人機たちに下されていた指令は『追撃』。逃げるものの背中を撃ち抜けと言う非道だった。

だからこそ、向かってくる者達に対しては無防備であり、防備する必要を感じない。それは己の任務ではないから。

「ちくしょう、なんだってこんなときに……！ 少佐がいなくてのに！」

「愚痴はいてる場合かっての！」

「わあってるよ！ くそつたれ！」

悪態をつきながらも、引き金を引く手は休めない。休めれば、それが死期となりえるだろう。

そんな彼らを、無人機たちは無感動にモノアイで眺め続ける。

次の瞬間、建物の一角を強烈な熱線が襲った。着弾したそれは恐ろしい温度でそこを融解させ、爆発させていく。

その光景を目の端に焼き付けながら、兵士たちはなおも撃ち続ける。

いい加減わずらわしいと思ったのか、そのとき無人機が唐突に兵士たちへと砲身を向けた。

これまでかと、息を呑んだ次の瞬間。

無人機が光の奔流に飲み込まれた。

「これ、は……！？」

「はあい、皆 元気してたあ？」

現れたのは銀色の天使。その背後には、赤と黒で彩られた龍、少し薄くなった黒で染め上げられた武者。

そして、天使の横に座するのは、タイガーストライプ虎模様の野獣だった。

「ファイルス大尉！？」

「今はもう無所属よ？ さて、と。やりましようか。行くわよ、
ゴスペル」

La ……、と美しい声が響く。

その直後、ハンドカノンタイプの《銀の鐘》シルバー・ベルからとんでもない速度で弾丸が打ち出される。

進路上にいた無人機を次々と撃ち抜き、瞬く間に道を作り出した。

「も一発！ 《銀の翼の奏でる鐘》Silver Wing Bell！」

ばさりと羽が大きく羽ばたかれる。カノンタイプとドッキングした頭部の《銀の鐘》は、一瞬で数千、或いは万に及ぶかもわからぬ量の弾丸を撃ち出した。

その弾丸の嵐に紛れ、呐喊するは武者と龍。

「《紅蓮朱鉄》グレンノアカガネ……！」
「《三爪龍神》さんそつりゅうじんッ！」

戦いの狼煙は、その一撃によって上げられた。

第103話 狼煙（後書き）

陰謀って苦手なんですよー。

いや、まじで。難しい話書きたいけど頭足りないから。ほんと、まじで。

だから矛盾点であんまりひどいのじゃない限り目を瞑っていただけとありがたいです。がんばるの。

第104話 発見!?

「チエストオオオオ！」

鈴の雄たけびとともに、数体の無人機が一瞬で破壊されていく。
荒れ狂う龍の顎^{あぎと}があらゆるものを噛み砕くかのようにあっけなく
衝撃を受けた無人機たちが爆散していく中、身の丈の四倍はあろう
かという赤い刃を振りかざし、簪が吼えた。

「オオおおおおおおおおあああああああああ！」

右から左への薙ぎ払いは前面に展開していた数十機の無人機を圧
倒的な熱量で焼き切っていく、振りぬいた直後にそのすべてが轟音
を響かせて爆発していく。

その様を、イーリスは頬を引きつらせながら見つめていた。

「な、なんじゃそりやあ……!?!? 反則ってレベルじゃねえぞあり
やっ!?!」

「でも溜めがいののよ」

「それでもだっ!?!? ってか、なんなんださっきの弾幕といい今の
剣といい、ついでにあの龍! もうISなのかあれ!?!」

「目の前の無人機さんよりはISじゃない?」

「いやいや、そうじゃなくてだなあ!?!」

今までの常識を一瞬で覆されたようなイーリスは尚も食い下がり、
その間にやってくる無人機をナターシャと共同で破壊していく。

やたらと手馴れたように行なうナターシャに対して、イーリスは戸
惑い気味だった。

それもそうだろう、いるはずのなかった無人機相手に、ナターシ

やはりまるで当たり前のように戦っているのだから。

一応ナターシャが無人機との戦闘経験があるということとは知っていたが、これほどまでとは思っていなかった。

「ま、慣れてるならそれでいいか」

「なにが？」

「なんでもねえ、よっ！」

イーリスの使う第三世代型IS『フアング・クエイク』に際立った武装はない。その機体そのものが武器となるためであり、『安定性と稼動効率』の極致、『武器使わなかったらエネルギー減らないんじゃない？』という滅茶苦茶な考えの下に考案されたためである。

しかし、そんなぶっ飛んだ機体は、肉弾戦がもつとも得意なイーリスにとつては非常に適していた。

そんなイーリスは、近寄ってきた一体を拳でぶち抜くと、続けざまに三体をその拳で破壊していく。その様子に、ナターシャは思わず苦笑いを見せた。

「いつもどおりだけど、相変わらずなのねそれ」

「仕方ないだろ、こういう戦い方のISなんだから」

軽口を叩き合いながらも、敵を見据えるその双眸は鋭さを鈍らせていない。

その一方で、鈴と簪はこの襲撃に不自然なものを感じていた。

「なんで、このタイミングなわけ？」

「わからない……。ナターシャ、他の拠点に襲撃は？」

「イーリス、どう？」

「……いや、ここだけらしいぞ」

「だって」

「……余計わからない。一体どうして？」

疑問を抱えながらも、簪の手が休まることはない。

そして、その手と同じように簪の頭もまたはつきりと動き出す。
なぜこのタイミングでの襲撃なのか、その意図は何なのか。あまりに明確すぎる違和感のはつきりと自己主張を重ねるうちに、簪の頭にはあつてはならない可能性が浮かび上がってきた。

「……鈴、ナターシャさん、全力で蹴散らす」

「どうしたのよ、簪？」

「もしかすると、船が危ない！」

「なっ!？」

「そりやまずいわね。とつとと片付けましょう！」

基地襲撃を陽動として、本体を叩く。早々に行われたその作戦にまんまと嵌ったことに気づいた簪は、ぎりっ、と音を立てて歯噛みしつつ、全力で《朱鉄》あかがねを振るい続ける。

この結論が杞憂で終わってほしいと、切に願いながら。

同じ頃、簪の予想はぴたりと的中していた。

『敵襲だ！ 連中に嗅ぎ付けられたぞ！』

「くそっ、いこう皆！」

「あーちゃんは甲板で防衛お願い！　まだジェットパックの調整が
終わってないの！」

「わかったわ！」

K・Kの艦内放送でいの一番に飛び出した一夏に続いて、シャルロットとラウラが飛び出していく。

それを追うようにして葵が甲板へ飛び出すと、そこにはすでに数十機の無人機が存在していた。

「畜生、囲まれてやがる……！」

「全て破壊すればいいだけだ！」

「だね！　いこう、二人とも！」

それぞれがISを展開し、一時的にバリアが解除された空へと上がる。

艦内では空とクレイマンが全力でバリアの特定箇所への展開操作を行っているため、甲板以外の全ての場所にバリアが展開されている。それを読み取った無人機たちは、一夏たちの撃墜を優先させたのか、武装を一夏たちへと向け始めた。

と、そのうちの数機が一瞬で爆破する。弾道は甲板からのものだった。

「私を忘れてもらっちゃ困るわね」

「ありがとうございます、先輩！　よし、いくぜ『白式』！」

《荷電粒子砲》と《スナイパーライフル》を両手に携え、ニヒルな笑みを見せた葵に頭を下げると、一夏が《雪羅》の荷電粒子砲を撃ち放つ。

射線上にいた数体を一気に蹴散らすと、そこにぽっかりと空いた穴目掛け呐喊した。

それに続くシャルロットの後ろで、ラウラが両手を左右に広げ、大きく息を吸い込んでその両手を前へと振るう。

「行け、《シユヴァルツ・ドラート》！」

その音が響く中、四〇のワイヤーブレードが無人機の群れへと殺到する。

大気を切り裂かんばかりの鋭い切れ味を持った刃が装甲に傷をつけていくが、それはまだ序の口。次の瞬間、ラウラの声が響き渡る。

「《ウン・ハイル・ドルン》！」

刹那、ワイヤーとその先のブレードのあらゆる箇所から発生したブラズマブレードが、周囲にいた無人機を滅多ざしにしていく。

以前はせいぜい一〇〇本程度だったそれも、強くなり続けている今は五〇本ほど増えていた。

一気に爆散する群れの中を疾駆するは、巨大な腕を持った二機のIS。

『ミストラル・リヴァイヴ』の第三世代兵装である《デュノア・オルグイユ》が無人機を鷲掴み、一気にシールドエネルギーを吸い上げる。

瞬く間にエネルギーをゼロにされた無人機は機能を停止し、シャルロットはその標的をいまだ残っている群れへと定めた。

「いつけええええ！」

直後、炸裂するオレンジのエネルギー光。

その奔流に飲み込まれた無人機は残らず融解していき、明らかな火力の違いを見せ付けていく。

そんな中、一夏は《零落白夜》の発動を限りなく短くすることで

継戦時間を延ばしている。そうでもしなければ、一番効率も腕も下な自分が先に落ちることがわかっているからだった。

「それにしても、さっきから数が減ってないように見えるな」

「同感。二〇機以上倒してるのに、全然減ってない。うっん、むしろ増えてる……？」

「ハハッ、ごめーとうっ！」

その声が聞こえた瞬間、各々が防御の体勢をとる。

そこには、変わらず『ニユクス』を操るグリムの姿があった。

「テメエ……！ これもテメエの仕業か！」

「今日はちょっとした挨拶だ、カッカすんなやガキ」

にい、と笑いを見せるグリムに、空へ上がっていた三人がその身を強張らせる。

挨拶という言葉とは裏腹に、びりびりと伝わってくるグリムの殺気がその原因だった。

「よくもまあ、あの襲撃から生き残れたもんだぜ、まったく。感嘆ものだね」

「お褒めの言葉ありがとう、お返しに鋼をくれてやろうか」

「おいおい、血の気の多いガキだな。今日は褒めにきてやったんだぜ、こいつらは偶然拾っただけ、俺の意思じゃない」

「なら素直に帰るか？」

「臨戦態勢で構えられて帰って？ ハッ、冗談キツいぜ」

軽い口調で答え続けるグリムだったが、すでに戦闘態勢に入っているところを見る限り、おとなしく帰る気などさらさらないだろう。そう判断したラウラは、先手必勝とばかりにワイヤーブレードを

全方位から繰り出していく。

「手のはええな？」

「なっ!？」

が、その全てを《ブラック・カーテン》で叩き落したグリムは、さらに笑みを深くして吼えた。

「オーケーオーケー、やっぱり俺たちは戦わなきゃあなあ！ 敵同士がツラ合わせてニコニコしてるなんざ、気色悪くてたまんねえぜ！」
「やっぱりこうなるのかよ！」

「まあ、もともと向こうもやる気だったみたいだし、ね！」

《雪片式型》を片手に携え、《雪羅》のブレードを展開して構える一夏と、片腕に《ガラム》を携えるシャルロット。

その後ろでは、再びワイヤーブレードを構えたラウラが、意識を集中させて《A I C》とレールカノンを操っている。その目は左右ともに黄金に染まっていた。

「ここで落とさせてもらうぞ！」

「ハッ、やれるもんならやってみろやアアアア！ 行くぜエ、《ブラッド・カーテン》ッ！」

無数のビットへと変化した《ブラック・カーテン》を操り、グリムが吼える。

その四人の戦いは、いまだ尽きぬ無人機たちが葵によって落とされ、爆発するその音によって開幕となった。

第104話 発見！？（後書き）

再び始まってしまった二つの戦闘。

まあ、そんなに長引きませんが。ちゃんと進めていかないとお話終わらないもんね！

第105話 グリム

白刃と黒の塊が激突し、大きく火花を撒き散らす。

その中で、グリムと一夏は単身ぶつかり合っていた。

「はあああああああああ！」

「カハハハハハハアッ！」

刃を振るう度に金音が響き、周囲に舞うその衝撃が無人機たちの装甲を揺らがせていく。

シャルロットとラウラが無人機を抑えている中で、一夏はひたすらにその刃を振るう。

次々に増える無人機以上にグリムのことを危険視する三人は、一番攻撃能力の高い一夏をグリムに当てていた。

「おいおいおいおい、その程度かよ少年？ 何のための剣だ、殺すための剣だろうがア！」

「うるせえ！ 黙って落とされやがれ！」

「ハッ！ やだね、バアーカ！ カッ、キヒヤーハハハアー！
ブラッド・カーテン、モードブレイドオ！」

グリムの叫びと共に、今まで宙を漂っていたビットが一点に連なっていく。

それはまさしく一振りの刃の如く、守りではなく攻めの形として形成され、組みあがっていく。

やがて戦闘の中で組み上げられたその刃を手にし、グリムは笑みを深めた。

「打ち合おうぜ、織斑一夏！ テメエの剣と俺の剣、どっちが先に

切り殺せるか！」

「俺は、そんなことのために剣を振るってるんじゃないっ！」

「ガキが絵空事ほざいてんじゃないねエ！ 剣ってのはなア、昔からテメエの敵をぶち殺すためだけのもんなんだよオ！ それを今、教えてやらアアアア！」

轟ッ！ 音がしたのは一瞬だったか、それとも数瞬の後だったか。瞬く間もなく接近したグリムは、目の前でその刃を大きく振るう。とつさに構えた《零落白夜》のシールドをいともたやすくぶち破り、金切り声を上げて刃が迫る。

刃が、上げたのだ。その音を。

「ぐっ！？」

ッ、キイイイイイアアアアアアアアッ！

その声は、果たして声ではなかった。音、金切り声のような音を伴って迫る刃を、一夏は身を翻すことで回避する。

直感的にその刃に当たればまずいと、一夏は言い知れぬおぞましい予感と共にその体を動かしていた。

そのことに、グリムはにい、と頬を吊り上げる。

「また防ぐんじゃねえかと期待してたがなア、どうやら外れちまつたらしい」

「その剣……、な、なんなんだ！？」

「物同士をこすり合わせれば振動が起こる、そいつを最大限発揮するためには、どうしてもこういう音が出ちまうのさ。振動で切れ味を上げてるようなもんだ。当たれば、切れるぜ？」

がしゃん、がしゃんと肩の装甲に刃を軽くぶつけながら、グリムは楽しそうにそう言った。

金音の悲鳴は今では聞こえず、それだけに不気味。反り返ったその刃は、攻撃のときにだけその悲鳴を響かせるのだろうとあたりを付けた一夏は、心を新たにその手にある刃を構え直した。

幸い、他の無人機は手数が武器の一つであるシャルロットとラウラが抑えている上に、甲板からの援護射撃もある。

ならば、自身はその役目を果たすだけだと、その眼に意思を宿す。必倒の意思、必滅の意思を。

雰囲気が変わったことを悟り、グリムが静かに刃を構える。

刹那、一拍を置かずにつつかり合う互いの刃。けれど、今度は一夏も不用意につつかり合うばかりではない。

一瞬だけ刃を重ね、それからすぐにそれを引き戻す。剣を振るう者の視覚、特に動体視力というものは非常に優れている。それを全力で活用し、刃の振動が始まる一瞬前に刃を引き戻すことで、相手の刃の勢いを止める剣を作り出していた。

一瞬、一瞬、そしてまた一瞬。

金音と火花と、そして視線が飛ぶ。飛び、交差する。

グリムの方はまだまだ余裕があるようだった。その証拠に、その視線は度々飛び散る火花に注がれたり、周囲を確認する仕草を見せたりしている。

対する一夏は、常に集中状態にあった。

一瞬の中に内包された情報を、音を、色を、形を、速度を、厚みを、重みを、全てを感じ取り、それを持って刃を重ね合わせること、ようやく対等に渡り合っている。渡り合うことを許されている。その事実を感じ取ってはいるものの、悔やむ間もなく次の刃が繰り出される。

とにかく、一夏の持つ剣、《雪片式型》の刃では、相手の攻撃を阻み続けるのが精一杯だった。

それももう、長くは保たないだろう。そう考えながらも、手を休めることは許されない。

「ちくしょう……っ！」

ばやくことで意識が散るのを防ぐ。はっきりと剣を見据え、それから、それから。

どうすればいい、どうすれば勝てる、突破口は、どこにある？

思案して、それから、

「オラァ！」

はっ、とした。けれど、もう遅い。

声が聞こえたと思ったときには、その一撃は確かに右肩から袈裟に駆け抜けていた。

絶対防御のおかげで傷になることはないが、それでもその強烈な斬撃を受けて、それだけで済むはずもなく。

結果として、一夏は貫通した衝撃をもろに受けていた。

「がはっ　！」

「ちっ、おいおいぼさっとしてんじゃねえよ」

興奮めしたとばかりに嘯く声。ああ、それなら帰ってくれないかと軽口を叩くこともできず、ただその強烈過ぎる衝撃に呻くばかり。それでも、決して剣は離さない。離してなるものかと、きつく柄を握り締めて、一夏は視線でグリムを貫いた。

「……はっ、いい面になったな。さっきの腑抜けた顔よりよっぽど良いぜ。かかってこいよ、人間。ぶった切ってやる」

「上等だ、クソヤロウ」

体が痛む、もう止せ、戦う必要がどこにある。脳内で冷静になると叫ぶ理性から、そんなことが伝わってくる。

しかし、止められない。止まってはならない。止まってしまう、こいつは船に向かってしまう。

止めるのだ、ここで。

しかと意思を新たにし、一夏は一度息を吐く。そして、戦いの大気を胸一杯に吸い込み、肺をただで満たしきる。

その刹那、大気を切り裂き疾駆した一夏の刃が、グリムの『刃』そのものへと突き刺さっていた。

「まだ、まだア！」

咆哮は刃が取って代わり、突き崩した『刃』の残骸ごとグリムを斬り捨てんと迫る。

「舐めんな、オラアアアア！」

矜持も信念もかなぐり捨てた、『守るため』の一念。

それを間近に感じ取り、初めてグリムは本当の意味で、一夏を『脅威』と認識した。

『一之瀬葵』以外で、己に迫る力を持ち。

『一之瀬香織』以外で、己を殺す可能性を持ち。

それは、獣と見間違ふほどの荒れ狂う意思を鋼へと変え、迫っていた。

しかし、しかし。グリムとてその刃に刺し貫かれるだけの弱き小鳥ではない。狩獵者なのだ、故に彼は引き金を引き絞り、確実にその命を刈り取らんと弾丸を撃ちだしていく。

「ぶち抜くッ！」

グリムの一声によって再びビットに戻った《ブラッド・カーテン》より放たれた一〇と少しの光弾。

ぼさつとしていれば確実に全身を貫かれるであろうそれをみて、確かに一夏は笑みを零した。

「これなら、問題ないな」

「ああ？」

グリムの声が響くかどうか、そんな瞬間に、一夏の左腕である《雪羅》から五本のビームクローが突出する。

ただし、普通のものではない。極限までその出力を抑えた《零落白夜》の光。それが細く鋭い爪となって《雪羅》を彩っていた。

一夏はハイパーセンサーで全ての光弾の位置を一瞬で把握すると、最短ルートを叩き出して《零落白夜》を発動させる。

振るわれた刃と爪は同じように青白い光を灯し、その軌跡が全ての光弾を一瞬にして打ち破る様を、グリムはしかと見つめていた。

「こんなもんか、グリム」

「ハッ、いい気になるのははええぞ。つつつても、今のまま戦うのもつまらねえな……。どうせもうすぐテメエらの仲間も帰ってきちまうだろうし、俺はそろそろ引かせてもらうぜ」

「逃がすとも思ってたのか？」

「おいおい、俺は見逃してやるつつつてんだ。少なくとも、テメエ一人落とすなんざたいした苦労じゃねえ。あの二人も同じだ。お荷物抱えてる相手に殺し合いを挑むほど、俺は非道じゃねーさ」

襲撃してきてどの口が言うかと思いはしたが、それでも引き下がつてくれるならそれに越したことはない。

一夏は一瞬逡巡したものの、仕方なくビームクローを収めた。

「……テメエの名は覚えとくぜ、織斑一夏。世の中捨てたもんじゃねえ」

「うるせえ、とつと行きやがれ」

「ハッ、じゃあな織斑一夏！ 次はマジで殺り合つとしようぜ！」

哄笑して去っていくグリムの背中を見つめながら、ようやく一夏は息を吐き出す。

と、そこでシャルロットが声をかけてきた。

「お疲れ様、一夏」

「あ、ああ。無人機は？」

「全て破壊した。甲板への被害もなし、最高の戦果だな」

ひょっこりと顔を出したラウラが、につ、と笑って片腕の装甲を量子変換すると、ぐしゃぐしゃと一夏の頭を撫で付ける。

「な、なんだよラウラ」

「いや、ちよつとやってみたくなつてな。ふむ、後で香織にもやるとしよう」

眼が覚めたら、という意味のその言葉からは、重い雰囲気はまるで感じられない。

いつ目覚めるかも知れない香織のことを案じていながら、決してそれを重荷と感じていないことは、それからよく伝わってきた。

一夏は小さくため息をつく、肩口の痛みに顔を顰める。

「ぐっ……」

「一夏、どこか怪我した？」

「いや、ちよつとダメージ食らっただけ。後で診てもらってから」

「そう、ならいいけど……」

「とにかく船に戻るぞ。いつまでもここにいても仕方ない」

ラウラの言葉に二人が頷き、それでようやく、襲撃の幕が下ろされた。

それから三〇分ほどが過ぎ、鈴たちはフロートボートと運搬用コンテナを携え、焦った様子で戻ってきたものの、事のあらましを聞くにあからさまに安堵の溜め息をついた。

何はともあれ、補給と情報の入手を済ませた一行は、再び会議室に集まっていた。

そこには、青白い顔をした男もいる。

「えっと、彼は？」

「あ、俺はマックってんだ。システムの構築なんかを担当してる。よろしくな」

「彼、いつも腹痛でトイレにこもってるの。で、あだ名がミスター・ストマックエイク」

「だからマックなのね……」

一夏の疑問も氷解したところで、全員が真面目な顔つきへと移り変わる。

口火を切ったのは束だった。

「情報によると、次の火種はフランスだね？」

「ええ、そうよ」

ナターシャが頷き、それからさらに続ける。

「フランスの大統領に何とかコンタクトを取るのと、委員会と亡国^{ファントム・タスク}機業が何を目的にしているのかを探る。この二点ね」

「あ、会社にも寄らせてもらえませんか？ 補給なら僕の伝が使えるかもしれませんし」

「わかったよ。それじゃあ皆、出港準備！」

束の一声で全員が動き出す。

戦いは一時の間終わiri、また海の旅が始まる。

次の目的地は、フランス。

第105話 グリム（後書き）

意外とあっけなく終わった戦い。ちなみに葵は常にサポートでした。
次の戦闘からは出せるかな。

第106話 紅と蒼のその後

ざざあん、ざざあん。静かな、とても穏やかな、波の音。

その音で、揺りかごの中にたゆたう私の意識は、目を覚ます。

「……ここは」

眩いて、ずきりと腕が痛んだ。

なんとか体を起こすと、そこが小さな寝室で、自分は硬いベッドに寝かせられていることがわかる。

痛みの元を見やると、体に着ているISスーツに似ても似つかない白い包帯が、ぐるぐると右腕に巻きつけられていた。

その傷を見て、それから思い出す。自分があの戦いの中で足止めを終えた後、必死になって連中から逃げていたことを。

どれほど倒しても、倒しても、倒しても、倒しても。奴らは途切れることなく現れた。

その戦いがどれほどつらいものだったか。彼女が撤退を言い出さなければ、きっと死んでいただろう。それほどに、終わらない戦いはつらい。

一〇、二〇の数でも、決して勝てない相手ではない。しかし、それは勝てないわけではないだけで、余裕綽々じやくじやくに戦い続けられる相手ではなかった。

思い返して唇を噛んでいると、扉が軋み、そっと押し開ける音が響く。

「箒、起きていましたか」

「セシリア……。ここは……」

「ああ、いけません箒。まだ寝ていなくては」

「いや、しかし、　　つぶ……!」

ベッドから降りようと身をよじった途端、全身に激痛が走る。
あまりの痛みに動きを止めたその隙に、セシリアはぐい、と私を
ベッドへと押し倒した。

「箒……、たまには言うことを聞いてくださいな」

「しかし……」

「お願いです、箒……」

息遣いが感じられるほどの距離で、セシリアが呟く。溜め息ほど
に小さなその音は、するりと私の耳に入り込んで、ぐしゃぐしゃと
意識をかき回す。

どきりと、どこかの高鳴る音が聞こえるような気がした。

ひんやりと冷たいセシリアの手が、私の頬を包む。熱くなってい
た私の顔が、すつ、と冷えていく感覚。

「あ、ああ……」

「ああよかった、これで聞いてくれなければ、口付けの一つでもす
るところでしたわ」

「口づつ……！？ ば、何を馬鹿なことを言って、つくう……
！」

「ああほら、急に動いたら体に障りますわ。じつとして」

再び走った激痛に押し負けて、ベッドに身を預ける。

それにしても、さっきのは一体なんだったのか。まさか彼女に懸
想しているわけでもあるまいに、馬鹿馬鹿しい。

それに、セシリアもセシリアだ。口付けなど、破廉恥な。……嫌

と言う感情が出なかった自分が、はなはだ疑問だが。

とにかく、今は怪我を治すのが最優先らしい。

「で、私は一体……？」

「アバラが数本折れているのと、あと腕の傷ですわね。アバラは『ブレイブ・ティアーズ』の拡張領域バースロットに入っていた応急セットのナノマシンで手当てしましたから、もうしばらくすれば軽く動けるようになるはずですよ。腕の方はこちらを貸してください。さっさと方が手当てしてくださいましたから、アバラが治ったらお礼を言っておいてくださいね？」

「ああ、わかった。すまなかったな、面倒をかけて」

「構いませんわ、相棒パートナーですもの」

ふわりと笑った彼女は凜々しさが垣間見える笑顔で、そういう所はやはり貴族なのだと、そう感じさせる。

長々と私に言って聞かせたセシリアは、ぎしりとスプリングの軋むベッドに腰掛け、私の手をそっと握る。

ずっと掛け布団の中で温められていた手が、彼女の冷たい手と触れ合って。それはとても、心地のいいものだった。

「戦争ですって、箒」

ぽつりと、彼女が呟いた。

セシリアの話では、あの戦いの後、世界各国の主要都市にあの無人機が大挙して押し寄せてきて、各国は今大パニックらしい。

しかも、例の『亡国機業』ファントム・タスクとやらもまだ動いている。件の無人機を率いているのは、どうやら奴らではないらしかった。

しかしまあ、どうにも、世界と言うのは本当に、争いごとを好みとするらしい。

だって、ほら、歴史の教科書でも開いてみる。世界中至る所で、日が昇り月が沈むまで、延々繰り返される血の宴。

これほど続くのなら、それはきつと、世界と言う奴がそれを好んでいるからに違いあるまい。

そんな戯言を浮かべてしまうほど、私は疲れているのだろう。

「……戦争か。嫌なものだな」

「わたくしは、もしかするとイギリスに帰らなければならないかもしれないかも
しれませんわ」

「義務、と言う奴か」

「ええ」

セシリアはひどく残念そうに答える。

彼女の肩書きは『国家代表候補生』、いざと言うときには兵役も
生じる立場であり、そのいざと言うときは間近に迫ってもいるよう
で。

いやな世の中だと、つくづくそう思う。

「さて、箒。そろそろまた眠った方がいいですわ。傷に響きます」

「……ああ、そうさせてもらおう。お休み、セシリア」

「ええ。お休みなさい、箒」

名残惜しげに絡む私と彼女の指が、するりと互いの間を抜けて離
れていく。手の温度は、二人とも同じくらいに。

扉から出て行くセシリアの背中を見送って、そっと目を閉じる。
悪夢から目をそらすのではない。一時、体を休めるだけ。

目覚めたときには、もう一度刃を振るう者として立ち上がれるよ
う、休むだけ。

そして、私は。

ゆっくりと、ゆっくりと。眠りの闇へ落ちていった。

「ふう……」

夜風に当たり、火照った頬がひやりと冷たくなっていくのを感じる。

造りのいいベランダからは丁度夜風が吹き込み、一人ワインを傾ける私の頬を優しく撫でてくれる。

この家は、私たちを助けてくださった人が貸してくれたものだ。まさか、家一軒を丸ごと貸してくださるとは思ってもみなかったが、本当にありがたい。

空になったワイングラスを丸いテーブルに置くと、もう少し夜風に当たろうとベランダに出る。

紅潮した頬は果たしてアルコールのせいなのか、それとも、箒と接したからなのか。

「……箒」

名を呟く。途端に、胸が跳ねた。

それで、ああ、と溜め息を漏らす。本当に、私は想っているのだと。

彼女のことをそう自覚したのは数日前。彼女の体がぼろぼろになっているとき、私も同じようにぼろぼろになっていた。

と言っても、やはり前衛と後衛の差はある。彼女の体に比べ、私は疲労困憊して各所に傷もできていたものの、休めば十分回復する程度のものであった。

だから、ここを借りてすぐに自分の体に鞭打って、箒の体にナノマシンを注入し、それから彼女の体を丁寧洗ってベッドに眠らせ

ただ。

そのときだろう、私が彼女の眠る姿に見惚れてしまったのは。

普段の力強く凛々しい顔とは違う、柔和であどけないその寝顔。

それを見たとき、私はじつと彼女の顔を見つめ、気づけば手を伸ばしていた。

はたと気づいてその手を引き戻したときには、もう、私は自分の心を偽ることなど忘れていた。だって、自分に嘘など吐けるはずがないのだから。

「……非生産的、ですわね。まったく」

ベランダから中に戻り、それからワインの瓶を傾けてワイングラスにたつぷりと赤ワインを注ぐ。

自分の中にあるもやもやを消し去ろうと、あるいは流してしまおうとするかのように、ぐいっとそれを飲み干していく。

そのせいで、また冷えたはずの体が熱を持ち始めた。

「これこれ、飲みすぎは体に悪いぞ」

「慣れていますから。こんばんは、いい夜ですわね」

唐突に現れたその人に驚くこともなく、私は言葉を返す。

黒い和服を身に纏った着流し姿で近づいてきた男性は、小さく笑うと瓶をその手にある小さな杯へ傾け、少しだけ注いで口に運ぶ。その様子を眺めながら、私はぼーっと見えない月を眺めていた。

「月は見えないだろう?」

「それでも、見ようとすれば見えてきますわ。月以外にも」

「では星かな?」

「いえ、ただ見ていただけです。空を」

そして正しくは宇宙^{そふ}を。

言葉にせずとも、その言葉は伝わったらしい。

彼は空を眺めながら、小さく頷いた。

「この空は広い。なぜ人は、その向こう側の広大な世界に目を向けようとしなのかな」

「それが人、と言うことではありませんか」

「……そうでもないよ、信じたいよ」

彼は溜め息をつくように言っ、杯をテーブルの上に置く。カツ、と音が響く。

ここにはテレビも電話もない。外と連絡をとる手段と成りえる物は何も。けれど、私にとってはそれが有難かった。

きつと今は、そつとそこにいるべき時。今は、ただ。

ふと、彼がベランダに出ていた。

そして、空を見上げている。

「私の娘のうちの一人は眠り、もう一人は空を目指している。子供の夢くらい、叶えてやるのが世界つてもものだろうに」

今度こそ、彼は大きな溜め息をついた。

娘、そつ。彼には二人の娘がいる。知っていた。

だって、彼は随分と有名人になっているから。世界中で、その名前を目にできる。調べれば、いとも容易く。

「 筈が目を覚ましたら、稽古をつけてやるとするか」

何かを決めたような顔で、彼は言った。

彼、篠ノ之柳^{しののやなぎ}韻は。

第106話 紅と蒼のその後（後書き）

ということで篠ノ之家お父さん登場。

そしてセシリアと箒が本格的に百合始動！

これから少しの間はセシリアと箒のターンかもしれません。

第107話 秘伝

扉を開けると、そこは壁紙も貼られていない、コンクリートの壁だった。

ひやりと冷たい空気が張り詰める中、私は素足のままでペタペタと歩いていく。

どれくらい眠っていたのか、既にアバラに痛みは感じない。腕の痛みも大分治まっているから、随分と眠っていたのだろう。

そうあたりをつけて、またペタペタ、ペタペタ。

しばらくそうしていると、じっと目を閉じて佇むセシリアの姿が見えた。

比較的大きな部屋の中央で、部屋の隅にはテーブルと椅子が片付けられている。

清、と静まり返った部屋の中にあつて、その空気を張り詰めたピアノ線のように変えているのは、ほかならぬ彼女であるらしい。

「……筹、おはようございます」

「ああ、おはよう。よく気づいたな」

「気配を読むくらいはできますわ。特に、慣れた貴方の気配なら」

目を瞑り、じつと下を向き続けるセシリアが言った。

気配を読むことは武術、武道において大切だ。相手の一手先を読むことと同義であり、また如何に相手に自らの気配を悟らせないかも重要となる。

それを読めるということはつまり、セシリアもその域に達していると言つことで。

それは、彼女が恐ろしい速度で成長を遂げていることを指していた。

「いつからそうしている？」

「つい、二、三時間前ですわ」

「そうか」

短く言葉を交わし、私は片付けられた椅子を引つ張り出すと、セシリアの顔がよく見える位置に置いて腰掛けた。

ようやく目覚めたと言うのに、大した言葉を交わすこともない。けれど、それが私と彼女の関係。距離を近づけすぎないように、私は特に気を払う。

近すぎると、見えなくなってしまうものがあるから。

と、そこで感じ取る。誰かが来た、この建物に入ってくる。

「セシリア」

「ここを貸してくれた方です。大丈夫」

警戒する私を宥めすかすように、セシリアがやはり目を閉じたままと言う。

トントントントン、階段を上がる音が響き、やがてその音の主はこの部屋に入ってくる。

そこで、私の思考は停止した。

「　　なんで」

「久しぶりだな、箒」

懐かしい声。幼い頃は姉と一緒にずっと聞いていたあの声。

でも、どうして。消えてしまったはずなのに。どこかに、いなくなってしまったはずだったのに。

「父、さん……」

「随分と、大きくなっ たな」

「なんで、ここに……」

「ここは僕の隠れ家だからな。もう歩いて平気なのか？」

「え、ええ……」

あまりに自然な言葉に、思わず頷く。

セシリアは、ただ見ているだけだった。

幼い頃の父の面影は、今の彼にはあまり残っていない。けれど、年老いたと言うよりは、成長したと言う言葉の方が似合いそうな姿。髪は白髪混じりになって、顔の皺も増えたが、それすらも彼の強靱な気配をより強くするための素材に見える。

「……本当に、父さんなんですな」

「抱きつくか？ 昔みたいに」

「まさか。セクハラですよ？」

「はは、だろうな」

快活に笑うその姿が、思い出にあるそれと重なる。

本当に、父さんなんだ。こんなところで会えるなんて、思っていなかったのに。

……けれど、今の私に再会を喜んでいる暇なんてない。まだやらなければ行けない事が残っているから。

「……体が治り次第、私は姉さんを追います」

「そうか。……なら、それを少し遅らせてくれ。お前に伝えるものがある」

「え？」

父さんの言葉が、途端に重くなる。視線が鋭く、身に纏う雰囲気も。

「篠ノ之流、その真髄は古武術であつて古武術でなく、剣術であつて剣術でない。唯一つの奥義を隠すただけに生み出されたものだ」
「父さん、何を？」

「お前には、それを知り、継ぐ権利がある。戦うのだらう、これから」

「っ」

真つ直ぐにこちらを見つめる目。それは私の目を見ているのではなく、私の心を見透かしている。

戦う力、殺す力、斬る力。それを得た私を、父さんは見つめている。

じつと見つめたまま、まだ言葉が続く。

「ならばその力を持って行きなさい。これから、戦はさらに酷くなる」

「なぜ、わかるのですか」

「血の臭いが、世界を覆い始めている。鉄と錆と、血と硝煙の臭い。お前には、その悉くを切り払う術を継いでほしい」

今ですら世界は壊れかけている。なのに、まだ酷くなると。

父さん、篠ノ之柳韻は言う。

私などでいいんだらうか。けれど、その力が必要なのもまた事実。足止めを買って出たときのように無様を晒さないためには、まだ私は弱い。

強くなるための、力が欲しい。溺れるほどの力など、今の私にはないのだから。

「……わかりました」

「お前は、力を嫌っているのに。済まないな」

「いえ、これでいいのです。いつまでも逃げることはできない、そ

れに。もう怖くはありませんから」

力に溺れることはない。私には、そうなったときに引き戻してくれる者がいる。

それに、そんな相手の前で無様を晒すのはこの上なく不愉快だ。だから、大丈夫。

そんな意思を込めて、私は小さく息を吸う。

彼が、頷いた。

それから数日後、セシリアと私、そして父さんは、隠れ家の地下にいた。

「そう言えば父さん、ここはどこなんです？」

「日本のとある廃村だよ。公共事業でビルが建てられたのはいいんだが、人が都会に行ってしまうって、それきりさ。ゴーストタウンという奴だな」

「護衛はどうなさったのですか？ 影も見えないようですが」

「撒いた。で、ここに逃げ込んで隠遁生活というわけだ」

その割には、地下室など作る余裕はあるらしい。

幸いにして村には田んぼも農場も残っていたらしく、そこを使って自給自足をしているそうだ。

ここに移ってきたのは数年前で、もうじき見つかってしまうかもしれないと考えていた矢先の、巖隆の世界への宣戦布告。さすがの父も肝を抜かれたらしい。

「で、なぜ地下に？」

「これから見せるのは純粋な『技』だ。あまり人目には付かない方がいい」

「では、わたくしも……」

「いや、君は見ていてくれ、セシリア・オルコット君。君も何かを

掴み取れるだろう」

その言葉に、セシリアが頷く。
しばらく階段を下りていくと、そこにはコンクリートで固められた大きな部屋が広がっていた。

父曰く、ここは最初からスペースができていたらしく、それを使いやすいように改装したのだという。

「さて、箒。よく見ているんだ」

そう言つて、父さんが静かに刃を構える。

いや、構えではないのかもしれない。手を柄に添えてはいるものの、引き抜く姿勢ではない。居合いでもない、別の形。

ぞわりと、視線を伝つて何かが私の中に入ってくる。なんだ、この気味悪さは。嫌悪感、なぜ。

カタカタと手が震える。私の中の何かが叫ぶ、嫌だ、嫌だ嫌だ。見せるな、こんなものを。

吐き気と共に、何も入っていないはずの胃袋から得体の知れない何かが競りあがってくる。なんで、なんで。

「箒」

震える私の手を、冷たい彼女の手が握る。それだけで、不思議なことに。

自分でも分からないうちに、その震えも気分の悪さも、嫌悪感も吐き気も、ずっと消えていく。

冷たい温もりが、私に伝わってくる。

「大丈夫。わたくしがいますわ」

「……ああ」

流れ込んできた気味悪さが薄れていく。こんなものを、父さんは使えるのか。

まだまだ遠い。私の目指す剣は、もっと先だ。

「古流」

静かに、父の声が聞こえる。

「篠ノ之流奥義」

次の瞬間、

「『ツルギ
拳』」

『音』が、消えた。

世界が混沌に包まれ、鎧を背負った者たちは、各々の目的のために動いていく。

ある者は、ただひたすらに混沌を。

ある者は、羽ばたく夢のための戦争を。

ある者は、乱世を斬り捨てるための闘争を。

ある者は、己が信念の元に猛進を。

世界は変わり、彼らは変わらず。

そして、物語は一年後の春を持って幕開けとなる。

果たして、その果てに待つものとは、如何に。

さあ皆様、ご照覧あれ。

哀れで愚昧な人間の、願いを掛けた戦いを。

第107話 秘伝（後書き）

まさかの急展開。でももともとこういう予定でした。

まだ出てないあの人やこの人なんかは、次回以降に登場します。

でも章は変わらないのです。本当は章を分ける前にこういうのやる
といいんですけどね。

それでは次回をお楽しみに。

第108話 一年後 春（前書き）

今回から一年後のお話です。

詳しい時間経過は本文にてどうぞ。

第108話 一年後 春

二〇四六年、四月一日。その日、変わってしまった世界を、もう一度変えようとする者たちがいた。

「皆、準備はいい？」

「ばっちりよ」

「問題ない」

「うん……」

「任せてください」

「いつでも行けるぜ」

「モチのロンよ」

うさ耳をつけ、明るい笑顔を浮かべた女性、篠ノ之東の声に応えたのは、五人の女性と一人の男。

鳳鈴音、ラウラ・ボーデヴィツヒ、更識簪、シャルロット・デュノア、織斑一夏、ナターシャ・ファイルス。以上の六名が、それぞれ戦いへ向けて意欲を燃やしていた。

ここは東謹製戦艦の中。その中にいる人間は、この一年の間に倍以上にまで増えていた。

「隊長、我々はいつも通りに？」

「ああ。皆、よろしく頼む」

元ドイツ軍特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ黒ウサギ隊』副隊長、クラリッサ・ハルフォーフを初めとした特殊部隊員、総勢一二名。ラウラを含め一三名は、正式に東の率いる『バインド・カンパニー』との雇用契約を結んでいた。

半年ほど前、ドイツの現首相を救出した際の交渉によって、半ば

託されたような形でこの船に乗り込んだ彼女たちは、それまでと同じようにラウラを隊長として小隊で動くことになる。

一年と少しの間に世界を巡り、コネクションを作っていた彼らの戦力は、ともすれば今世界を震撼させている無人機たちを殲滅しても余りあるほどだろう。敵が無人機だけならば。

「今回の目的は、全ての擬似コアの破壊と製造用基地の破壊。皆、しっかりね」

「破壊工作は我々が行う。そっちは連中を食い止めてほしい」
「分かった。よろしく頼むぜ」

一年の間にまた一回り大きくなった一夏が、ラウラの言葉に強く頷く。

二〇四四年、一月二六日のIS学園崩壊から、一年と四カ月と数日。人が成長するには、十分すぎる時間だった。

しかし、いまだ香織の目は覚めていない。そのことに一抹の不安を覚えながらも、一行は今やるべきことを済ませるために戦いへと赴いていく。

「よし、行くぞ」
「了解」

山中に作られた巖隆の『無人機製造プラント』の入り口に辿り着

いたラウラたち『黒ウサギ隊』は、マップを表示しながらそれぞれ頷く。

場所はフランス領南方の南極地域の小さな島。ケルゲレン諸島クールベ半島である。

現在束たちの活動を表立って支援しているのは、フランスとドイツ、中国、そして日本の四カ国だけである。しかし、それだけでも十分すぎる資産と装備を整えることができた。

何しろ、使う装備は全てオーダーメイドな上に、世界唯一のISの生みの親である束がいるのだから、その後の関係を考えても支援した方が利益が出ると考えたのだろう。

束としても、使えるものは使ってしまった方がいいと考えたため、とりあえず思惑は置いておいて、骨の髄まですり尽くすことにしたのである。

閑話休題。

それぞれISを展開し終えている小隊は、ラウラを先頭にして基地内部へと潜入していく。入り口はISが入ることを前提として設計されているのか、非常に広々としていた。

リーダーと自身の感覚、両方に気を張りながら、先頭をいくラウラはマップを確かめる。

構造は至極簡潔、上から下へと降りていくエレベーター式。元々まともに降りていく気などさらさらないラウラは、無造作に片腕を上げた。

「砲塔用意」

それと共に、自身も、背に構えた二門のレールカノンの砲塔を、下へ。

その目には、気だるげな光すら宿るように見えて。

「 撃て」

直後、一三の機体より迫り出す、二六の砲門。その全てが火を吹き上げ、鋼鉄で組み上げられたその床へと弾丸を撃ち込む。

建物内に伝播するその轟音は耳を破壊するほどだったが、ここはISを纏った戦士と、偽者しか存在しない。

故に、その心配など要らなかった。

けたたましい爆音、揺れる地面と、止まる空。その中で、ラウラはただただ、もうもうと立ち上がる煙の向こうを見透かそうと、その黄金の両目を輝かせる。

「……来るぞっ」

「総員戦闘体勢！」

ラウラの言葉でクラリツサが叫ぶ。その身に装着しているのは、『シュヴァルツェア・ツヴァイク』、『シュヴァルツェア・レーゲン』と対を成す、黒い枝。

そして、隊員たちが身に纏うのはその一世代前の機体、『ヴァイス・トロプフェン』、その名は白い滴しずくという。

全ての機体には二門のレールカノンが搭載されており、それによって撃ち放たれた弾丸は軽々と秒速二〇キロを超える。にも関わらず。

『GRRRRRRUUUU……』
レーストタイプ

「《獣型》か、各機散開して撃破！」

「「「了解！！」「」「」

砲弾を堅牢な牙によって食い止め、強靱な顎で噛み砕いたその黒い獣は、爛々と輝く機械の瞳をもってして、一行をねめつける。

ここの主戦力は一夏たちが引き付けているものの、やはり内部の警備には引つかかってしまう。

小さく舌打ちしながら、ラウラは冷静に《シュヴァルツ・ドラト》を撃ち、数体を絡めとって破壊していく。

ラウラの呟いた言葉、《獣型》は、束の使い出した無人機の区分。四足で立ち、無機物も有機物も関係なしに喰らい尽くす獣のことを指す。

戦闘能力はそれなりだが、センサー類が異常に発達しており、簡単なステルス程度なら一瞬で嗅ぎ分けるほどである。

「だが、所詮獣だ」

ラウラの言葉通り、《獣型》の欠点はそのAIの能力の低さにある。

簡単な命令しか理解できず、時折命令を不要なプログラムとして消去してしまうバグを持っているせいで、都市の無血制圧が大虐殺へと変わりかけたこともあった。

幸いにして、そのときは束たちの救援の手が間に合ったため、それは防がれたのだが。

ラウラの撃ち出した《シュヴァルツ・ドラト》のエネルギーブレードによって数は減ったものの、やはり量産型、しかもそのプラントだけあって量はまだまだある。

「ちいつ！ これでは埒が明かん……！ 一気に突破するぞ！ 続け！」

一つ吼え、ラウラは《AIC》で動きを止めると、両手のプラスマブレードで道を作り出していく。

切り裂き、切り裂き、切り裂き。オイルの臭いが鼻をつく中で、ラウラ達一行は一直線に最下層へと向かう。

マップによれば、このプラントの動力源となっている擬似コアは最下層に四個。そこからエネルギーを取り出し、増幅させて擬似コアを活性化させ、量産型無人機を大量生産しているのだらう。

バイオノイドの技術が応用されたその生産過程には、バイオポッドが使用されている。その証拠に、SF染みた緑色の薬液の詰まった大きなポッドが、各階層に随分と並べられていた。

悪趣味だ、と一瞥してから、ぎりつと奥歯をかみ締める。これ以上災厄を増やさせてたまるものかと。

誓い、駆ける。開いた大きな穴の中を、その異形の目、《越界の瞳^{イジェ}》で把握し、的確に《AIC》で敵の動きを絡め取っていく。

その最中、途中途中の階層で隊員たちは二人、三人と抜けていく。このプラントを崩壊させるためのタネを仕掛けるために。

最後にはラウラとクラリッサだけが残り、妨害に遭いながらも何とか最下層へと到着した。

周囲は血管を思わせる配線やパイプ管がやたらめったらに走っており、その中央には四つ寄り集まった球体の擬似コアが浮遊している。

「あれか。クラリッサ！」

「はい」

ラウラの指示を受け、クラリッサは拡張領域から小型の爆弾を取り出すと、コアの周辺に取り付けていく。

コアに直接取り付けた場合、コアからエネルギーが逆流して予期せぬ爆発が起こる危険性があるため、こうして周辺に設置していくようにと、束からの指示だった。

『全員準備はいいか？』

『『『『はいっ』』』』

隊員全員分の個人間秘匿通信を聞き終えたクラリツサがタイマーをセットすると、追ってきた《獣型》をラウラと共に《AIC》で食い止めながら全速力で離脱を開始する。

残り時間は五〇秒、ぐんぐんと加速していく中で、隊員たちが次々に集合していく。

空を目指し、ただひたすらに飛び続ける。そして、そして。

ふっ、と音が消えた直後、下に見える穴の奥底から、地鳴りのような爆発音が響き始める。

それを背にして、『黒ウサギ隊』は全速力で基地から離脱した。

「……そうか、破壊したか」

基地の崩壊から数時間後、一人の女性が携帯を片手に屋外でそう呟いた。

太陽は上がっているものの、雲がかかっているせいで日光は降り注いでいない。ここ数日、ずっとこんな様な日が続いている。

せつかくの春の幕開けも、こんな陽気ではがっかりだと、千冬は小さく心の中で呟いた。

『でも、まだまだありそうだよ。……どうするの？ そっちも大変でしょ？』

「ああ。教師はほとんど委員会に連れて行かれた。今は山田先生と私、残り少ない生徒たちで戦っている状態だ」

あれから一年以上が過ぎた今、千冬たち脱出者を取り巻く状況も変わってきている。

世界中が危険地帯となってしまった今となつては、残っている生徒は家に帰すより訓練をしながら逃亡を続けていた方が安全だと判断した教師陣が、それぞれの家に連絡を取つて了解を得た上で共に行動している。

とはいえ、家に帰りがかる者もたくさんいた。その者達を帰しながら日本中を回っているうちに、いつしか人数は一〇人程度に減ってきていた。

『何かあつたら、また連絡頂戴ね』

「ああ。それじゃあな、束」

通信を切り、千冬は空を見上げる。

雲のかかった、先の見えない空。まさしく今の世界にふさわしいもの。

暗澹とした気分で見上げていると、ふと千冬を呼ぶ声が聞こえた。

「千冬さん」

「ん、恋華か」

「そろそろご飯の時間ですよ。早くしないとなくなっちゃうかも？」

「それは困るな。すぐにいく」

「はい」

ニコニコと、いつも笑顔を決やさない楯無恋華。彼女の笑顔に、何度救われたことが。

そんな思いを抱いて、千冬は少しだけ大人っぽくなって髪の毛の伸びた彼女の背を追った。

第108話 一年後 春（後書き）

さて、ここからまた戦いの連続です。のんびり描写、ぜんぜん書いてないや。

そろそろのほほんさんの出番も増やせるかなあ……。主人公とメインヒロインが出ないってどうなのよ……。

第109話 海戦

早朝、まだ日も昇りきらないうちから、彼女は目を覚ます。

寝るとき用のジャージを脱ぐと、染み一つない美しいアジア系の肌が大気に触れ、温まりきっていないそれに触れた彼女は目を細める。

すばやくバインド・カンパニーの制服を身に纏うと長く伸びた髪を両側で纏め、一年前からずっと使い続けている髪留めで留めると、二度、三度と頭を振って型崩れしないことを確かめてから部屋を出た。

艦内はまだ静かで、皆が夢の中にあることを教えてくれる。

彼女、鈴は足音を立てぬよう静かに歩き出すと、香織の眠っているメディカルルームの扉を潜った。

「おはよう、香織」

小さく声をかけても、やはり返事はない。今日も、香織は起きていなかった。

鈴は入り口の水道でタオルを濡らし、そつと香織を抱き起こすと、その顔を濡れタオルで拭いていく。

毎日毎朝、繰り返す。せめて清潔に、彼を不快にさせないように。そう思つて。

体全体の殺菌は毎日、この船の管理を行っている『HAL-30000』がやっているから、これは気休め。分かっているけど、彼女にとってはせめてもの行いだった。

「……ねえ、いつまで寝てるつもりなの。そろそろ起きて来てもいい頃よ?」

言葉に、返事はない。当たり前だ、まだ眠っているのだから。

鈴は小さく溜め息をつく、また来るわ、とそれだけを言い残して部屋を出る。軋む扉の音が泣き声のように聞こえて、首を竦めながら。

医務室から出た鈴は、そこから階段を下って一つ下の階層へ。白と銀の風景が、途端に殺風景な鉄の色へと移り変わる。これも束の趣味なのだが、一年以上も過ごしていればいい加減慣れてしまった。

『おはようございます、鈴』

「おはよう、ハル。整備室のドア、開けてもらえる？」

『はい。……解錠しました、どうぞ』

『Maintenance Room』と記されたその扉のロックの解除をハルに要請した鈴は、数秒後に開いたそこを潜って中へと入る。そこには、さまざまな用途不明の機械に混じって鎮座する『甲龍』の姿があった。

「……こんにちは、バンシェン半身。調子はどう？」

言葉を投げかける。そこには、滲み出る暖かさと、信頼が見えた。ひやりと冷たい装甲に手をやり、寄り添うようにして身を預ける。トクン、トクン、と。鼓動のようなものが聞こえてくるような、そんな錯覚。

「今日も戦いよ。やれる？」

その問いにも、答えはない。もとより、応えることなど考えていない彼女は、それでも満足げに頷く。

何を期待したわけでもない。ただ、そうしかっただけで。

少し前の戦闘で一部破損してしまった甲龍を修復するためにメン

テナンスに回していたのだが、やはり自分と甲龍とは切っても切れない関係にあるらしいと、そうはにかむ。

何せ、一日待機状態のプレスレットがなかったただけでこのざまだ。まったく。

「……今日もやるわよ」

カッン、と軽い握り拳を装甲に合わせるようにぶつけ、軽く笑う。さて、がんばろうか。

数時間後。

鈴たち一行は、海上での戦闘を行っていた。

「ちくしょう、なんなんだこいつら！ 次から次へと！」

「随分急な襲撃じゃない、何が目的かしらね！」

一夏の悪態にそう返し、鈴はまた一機を破壊していく。

敵の数、初期計測にて四〇〇以上。その全てが、戦闘に大きく特化させた《戦闘特化型^{コンバットタイプ}》であることを考慮する限りでは、まさか偶然戦闘海域に入ってしまったわけでもあるまい。

大方、また街を破壊しにきたのだろう。そう踏んだ一行は、とにかく無人機を全て殲滅することを決定した。

「じゃ、まずは数を減らしましょうか！ 《銀の翼の奏でる鐘》^{Silver Wing Bell}！」

ナターシャの一声により撃ち放たれた無数の光弾。

それによって周辺の一〇体ほどは撃ち抜かれ爆散したものの、残りは全て別の形の無人機によって防がれる。それをみて、ナターシャは苛立たしげに舌を鳴らした。

「チツ、やっぱ拡散系じゃ《守護特化型》^{ガーディアンタイプ}に止められるかあ……」

無人機は、以前登場した《獣型》^{ビーストタイプ}も含めると、大まかに三種類に分けられる。

一つは、少し前のプラント破壊作戦でも出てきた獣、《獣型》。センサーやレーダーといった探知系機能を最大限に向上させた、プラントには必ずと言っていいほどいる無人機。特徴としては、その強靱な顎と細く、それでいてやはり強靱な四肢。動物特有の高い運動性能を誇る彼らの弱点は、その装甲の薄さにある。

しかし、しかし。今その案件はさして重要ではない。重要なのは、語るべきは、次の二つ。

一つは、たった今眼前に無数に孤立する《戦闘特化型》。その最もたる特徴は、頭部に溶け合わさるようにして付いている、一門の巨大なレールカノンだろう。

彼、もしくは彼女の風貌は、表すならば全身兵器。両手両足に備えた四本の巨大なロングブレードは常に微細な振動を続け、あらゆるものを一瞬で融解させ、溶かし切り裂くほどの力を持つ。

しかし、攻撃性能に特化させた結果、防御面で著しく弱体化してしまったため、単体での運用は確認されていない。

それを補うもう一つの機体が、《守護特化型》である。

常に《戦闘特化型》とツーマンセルで行動し、その機能は防御面に割り当てられている。

高い耐久性を持ち、《戦闘特化型》と情報をリンクさせることで

視野を三六〇度以上に広げている他、背面に取り付けられた五基のシールドビットによって、自身の低い加速、飛行性能をカバーしている。

この二機のツーマンセルが約二〇〇。視界に満たされたそれを見やりながら、それぞれが思い思いに溜め息を吐き散らしていた。

「じゃあ、まずは数を減らそう……」

その言葉と共に簪が呼び出したのは、《朱鉄》あかがねでも《蒼鉄》あおがねでもない武装。

白銀の配色に鋭利なフォルムを持った一对のそれは、大口径の銃口のふちを輝かせながら静かに簪の手中へと収まる。

名は《銀鉄》しろがね、完全なる中・遠距離用射撃兵装であり、この一年の間に簪が新たに開発した武装であった。

そのフォルムには新型の展開装甲が使用されており、この装甲は《朱鉄》に組み込まれている永久熱源機関の機能と同種の物を持っている。

ターゲット ロック
「標的、確認」

呟きは大気に消え、されどその意味は残り。

簪は、静かに息を吐き出す。静かに、静かに、吐き出して、そして。

「
Fire
射抜け」

ガチリ、と。音がする。

不思議とその音は大気を伝い、海の塩の薫りに混じって、『彼ら』へと運ばれる。

その、銀の光と不釣り合いな、黒光りする銃口から我先にと駆け出

て、鈴の周囲にゆらゆらと紅蓮の龍が立ちのぼる。

しかし、それでは終わらない。

すうつ、と鈴が大きく息を吸い込み、そして声を上げる。

「ハアアアアア！！」

刹那、呼応するように一対の《龍砲》が唸り、そして光を放つ。

それはまさしく龍の目のように、一対の光。

そこへゆつくりと紅蓮の龍が重なり合い、やがてそれは一体の巨大な龍となった。

数ヶ月前に発現したばかりの、《龍砲》の武装特性、《龍眼》^{じゅうがん}。その能力は、衝撃砲の弾丸の位置を自分だけが知ることができるようになること。そして、その位置を自由に書き換えられること。

「ぶつ壊れるッ！」

咆哮と共に撃ち放たれた幾重にも重なる衝撃は、てんでバラバラの方向へと一瞬で切り替わり、《戦闘特化型》を背部から喰らっていく。

それと同時に振り被った《双天牙月》の刃が次々に《守護特化型》へと叩き込まれ、その盾を破壊していく。

猛攻の最中、それを見た一夏たちもまた、につ、と笑みを見せてそれぞれの武器を手に戦いに挑む。

「おおおおお！」

「邪魔すると蜂の巣だよ！」

「止まっている、グズどもめ！」

「隊長の邪魔はさせません。総員、敵を撃破せよ！」

「「「「「^{了解}Jawohl!」」」」」

始まった海戦。

そして、それを見つめる目もあることに、一行はまだ気づかない。

「標的を確認。当該対象の抹殺に移ります」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

「確認」

まだ、まだ。

第109話 海戦（後書き）

いろいろと大変。

第110話 目的不明

「はあああああああ！」

「これで、最後っ！」

その言葉と共に、一夏の荷電粒子砲とシャルロットの《デュノア・オルグイユ》の光が収束する。

戦闘時間、九分四三秒。大した被害もなく、四〇〇以上の無人機を一気に破壊しきった総勢一八名のIS乗りは、ようやく安堵の息をつく。

『シュヴァルツェ・ハーゼ黒ウサギ隊』の隊員たちもさすがに本職の意地があるのか、恐ろしい数の無人機たち相手に一步も引かぬ大接戦を演じてみせ、おかげで彼女らの予想よりもはるかに速い戦闘終了を迎えることができた。

……終了、したのであれば、それでよかったのだが。

『つとー、まだまだらしいぜ？ 全員戦闘体勢を崩すな、お客さんだ！』

船にいるK・Kからの一報を受け、それぞれが新たに武装を構築る。

その直後。

「お初にお目にかかります、我が敵、怨敵、宿敵の皆様」

「私、だと……！？」

そこに、宙に浮いていたのは、ラウラと瓜二つの容姿を持ち、同じISを纏った少女だった。

無表情に口を開くその少女の周囲には、ゆっくりと、風景から溶

け出すように、まったく同じ姿の少女たちが姿を現していく。

「此度の催しはいかがでしたでしょうか。我が創造主はこうした祭の才は捨て置いているようですので、私が催させていただきました。少々血が流れましたが、紅は祭に似つかわしい色でしょう」

「残念だったわね、アンタたちの思い通りにはならなかったわよ。血なんて一滴も」

「いえ、いえ、いえ。今流れるのです、私の手で」

鈴の言葉を遮り、彼女は無表情のまま右手を肩の高さまで上げる。その広げた手のひらから一筋の光が放たれ、沿岸の町へと降り注ぐ。

直後、その町は一瞬にしてクレーターと化した。轟音と灼熱、その二つをもつてして。

「なっ……！？」

「ふふ、綺麗ですね。人の悲鳴、なんと甘美なことか。我がオリジナル、いえ、貴方も偽者か、まあどちらでも構いません。いかがですか、素晴らしい音色でしょう」

「アンタ……！なにやってるかわかってるの！？」

「汚点を浄化して差し上げただけのこと。不完全な人間の癖に、我らよりも正しき判断ができると、そう思い上がっているのですか？」

そこで、彼女の目に嗜虐の色が灯る。

あまりに滅茶苦茶なその言葉に、鈴はきつく彼女を睨み付けた。

「さあ、我が敵、怨敵、宿敵。我が宴にその血を捧げ、我らの供物となれ！」

「ラウラ、行けるわね！」

「無論だ！　ふざけたその口、斬り塞いでくれる！」

大気を蹴りつけ飛び出した鈴とラウラは、彼女が何者なのか、それすらも気にせずに刃を抜く。

いや、気にできるはずもない。

彼女たちの前で血を流した、その意味を思い知らせるために、意の一番で飛び出した二人に対し、彼女は嗤う。

「アッハハハハ！　系の途切れたマリオネットが、操る主と共にある我らに勝てると言うか！　人など下劣、愚昧、まさしく下の下に位置する存在！　粛清せねばならない！」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

「粛清を」

彼女の後に続くのは、無機質な二二の言葉。全てが、感情を露わにする彼女と、ある一点だけを除き一致していた。

不気味なその様を見ながらも、それでも二人は止まらない。そして、二人に続く者たちもまた。

「ぶっ飛ばす！」

「斬り潰すッ！」

ガギンッ！ と音高く、二人の刃が受け止められる。無表情に、二つの影がその刃を受け止めていた。

「ちっ、邪魔すんなっ！」

「敵性対象『凰鈴音』を確認。排除します」

鈴の斬撃を受け止めた一人が、瞬きする刹那すら与えずに刃を繰り出す。それは、ただのブレード。本当にただの、ただのブレードだった。

しかし、それを繰り出す速度は音速をはるかに超え、認識の範囲外からの攻撃と言っていい速度へと昇華している。

「鈴！」

「あらあら、お人形さん。貴方の相手はこちらですよッ！」

「ぐううっ……！」

彼女の言葉に咄嗟に構えたラウラの頭上から、長い槍を手にした彼女が降ってくる。

咄嗟に《A I C》で動きを止めようとしたラウラだったが、それはなぜか通用せずに、装甲へ大きな傷を負ってしまった。

ガリガリと削られた装甲をかばいながら、何とか攻撃範囲から少し身を引くと、注意深く彼女を観察する。

「あら、《A I C》が相殺されたことが、そんなに疑問ですか？」

「相殺だと？ ……いや、有り得るか。どうやら貴様らの創造主とやらは、私の元にも精通しているようだからな」

「ふふっ、その通りです。お兄様と面会したことのある『アイン』は、あるうことか拒絶されただけで自害したほど自我が曖昧でした

が……、私はそんなことはありませんし、妹たちは自我を消してありますから、壊れることはない。素晴らしいでしょう?」
「下種め」

フランスであつたことは、既にラウラも聞いている。

彼女の語つた内容から、フランスで襲撃してきた『アイン』の姉妹だとあたりをつけたラウラは、尚更必勝の意思を強めた。その出自を知るが故に。

「貴様は香織を貶めた。貴様を潰す理由など、たつたそれだけで十分すぎる!」

「恋は盲目ですか、人形が人形に恋をするなど! ああ、なんとロマンチック! けれどそれは必ずデッドエンドが運命付けられている喜劇です!」

「作られたものが運命を語るか!」

「作られたものだからこそ、ですよッ!」

彼女は量産型のブレードを、ラウラはプラズマブレードをぶつけ合い、幾度となく視線で打ち合う。

その周囲では、一夏たちがたくさんの『彼女』たちとの戦いを始めていた。

『お前たちはツーマンセルで相手にしろ! 無人機とはわけが違う!』

『了解しました!』

プライベート・チャネル

個人間秘匿通信でのラウラの指示に迷いなく頷いた『黒ウサギ隊』の面々が、すぐさま二人一組に変わって戦いだす。

とても自然かつ鮮やかに行われたそれを見ながらも、彼女から余裕が消えることはない。

「この程度で、止められると思うなっ！」

「やはり量産型はもろい……、ですが、十分！ その分、数を用意すれば事足りるのですから！」

「なっ！？ くうっ！」

プラズマブレードで刃を弾き、《シュヴァルツ・ドライト》で刃を砕いたラウラへと、新たにブレードを取り出した彼女が迫る。

幾層にも重ねた《A I C》を同じ数のそれで中和して叩きつけられたブレードをプラズマブレードで受け止め、ラウラは歯噛みする。相手は未知数、しかもこちらはやや防戦気味。

相手は恐らく擬似コアを心臓部に使用した人造人間だろうとあたりをつけたものの、それで何かが変わるわけではない。むしろ、人間以上に無茶できるとなればどうなることか。

一夏、シャルロット、簪、ナターシャは一对一、クラリツサを含めた『黒ウサギ隊』一二名は二対一で相手取っているこの状況で援助は期待できない。

葵は万が一の場合に備えて甲板で待機しているため、動くことは難しい。

何とかして自分で退けるしかないかとラウラは心中で悪態を吐きつつ、刃を振るっていく。

これ以上街を破壊させまいと、そしてこれ以上その口から発せられるあらゆる言葉を聴くまいと。

「おおおおおっ！」

「くっ……、さすがに強いですね！」

「貴様などに、負けると思うな！」

《ウン・ハイル・ドルン》を発動させた状態で《シュヴァルツ・ドライト》を自由自在に操りながら、両手のプラズマブレードと両

肩のレールカノンと同時に使い分けて攻勢を仕掛けるラウラ。

まともな状態ではとても捌ききれない量の武装も、彼女の両目に灯る黄金を持つてすれば容易に扱うことができた。

《シュヴァルツ・ドラート》で確実に相手の退路を断ち、出来た隙をレールカノンとプラズマブレードで追い詰めていく。

しかし恐るべきは、それを量産型ブレード二本で切り抜ける彼女だろう。事実、ラウラは決定打を決められないことに少しの焦りを見せていた。

刃同士を交錯させ、金音を響かせる。それぞれが入り乱れての戦闘の最中、突然鈴が相手にしていた少女がその身を硬直させていた。

「な、なに……!？」

「帰還指令を確認。帰還します」

「は？　ちょ、待ち　！」

無表情のままですう言葉を発した一人に続いて、次々と姿を消していく。まるで、現れたときと同じように溶けるようにして。

その様子を見ながら、彼女は皮肉気に笑いを漏らす。

「命拾いしましたね。創造主はここであなた方が敗れることを好ましく思っていないようです」

「まだ追い詰めてもいなくせに、随分な言い様だな？」

「忘れたわけではないでしょう、我々の心臓部は擬似コア。そのエネルギーを暴走させれば、あなた方を抹殺するなど容易いことです」

くすくすと笑いながら、彼女は言う。

それは言外に、自分たちはいつでもお前たちを殺せたのだと、そう告げられているに等しかった。

そのことに気づき、全員が悔しさを唇を噛む。

「それでは我が敵、怨敵、宿敵の皆々様。さようなら」

「待っている。いずれ貴様は、この手で」

「楽しみにしています。うふふ、あははははは！」

その笑いを残し、最後に彼女が消え去る。

後には、ただ戦乱の傷跡を負った彼女らだけが残された。

「ただいま戻りました、我が主、創造主」

「ああ」

どこかの誰かが言う。

暗い暗い闇の中、色は黒と、ディスプレイの青だけ。

それに照らされながら、闇の中に沈んでいる彼へ向けて、彼女、

『ツヴァイ』は口を開いた。

「ドライからドライツェンまでの稼働状況は良好、彼女たち以外に
ならば十分すぎる戦力として期待できるでしょう」

「よくやった」

「はっ、ありがたきお言葉」

片膝をつき、家臣の礼をしてみせるツヴァイへと、彼は決して目を向けない。

ツヴァイもまた、彼が自らに視線を注がないことを是とする。彼

女にとって彼は絶対であり、決して背くべきものではないのだから。

「それでは、私はメンテナンスに」
「ああ」

それを最後に、彼の気配が消える。

ぞくり、と、彼女はただその場で身を震わせるだけ。
その頬は、にい、と吊りあがっていた。

第110話 目的不明（後書き）

アインの後継たる彼女が登場。

果たして一体どんな目的で現れ、去っていったのか。

まだまだ謎が消えることはないようです。

第111話 その頃の千冬一行

戦いが続く中、千冬たちはイギリスに身を隠していた。

理由としてはその立場だろう。自国の財産である大切なIS『ブレイブ・ティアーズ』と、その操縦者にして有力な貴族の頭首であったセシリア・オルコットの行方不明。これをIS学園の監督責任とした上で、委員会に異議を申し立てている。

一年程度では消えない火種を強力な武器としたイギリスにやってきた千冬たちの目的は、イギリス国籍の生徒の身柄の返還も兼ね、今の世界の現状をどう認識しているのか、どう動くつもりなのかを国王に確認するつもりだった。

本来ならば一般人が一国の王と面会するなどありえないことだが、今は有事。世界で最も優れたIS操縦者である織斑千冬、他国とはいえ国家代表の更識楯無の要望であれば、国防の面からも多少の融通は利いた。

最も千冬たちにとって予想外だったのは、国王自らが面会を良しとしたことだろう。実権はないにしても、その影響力は依然として大きい。

「よく来て下さった。歓迎します、お二人とも」

「織斑千冬と申します。本日はお忙しいところ、お時間をご都合いただいてありがとうございます、陛下」

「警護の、更識楯無です」

「ああ、無駄な前置きは省略してもらって構いません。こちらとしても、すぐさま意見を交わさねばならないことは分かっていますから」

朗らかな笑みを浮かべたウィリアム五世は、流暢な日本語でそう告げる。その目は鋭く、強い光が見受けられる。

まさしく一国の王と呼ぶべきその眼差しに、しかし千冬もまた屈することなく真正面からその光を受け止めた。

ウィリアム五世、王としての期間は一〇年ややと短いように見えるものの、ISが登場して一年後に突然国王へと即位してからは、国王としての義務を立派に果たしてきた賢君として知られている。

「では陛下、単刀直入にお聞きします。この度の動乱、どうお考えですか」

「つまり、誰が糸をひき、何を持ってこの戦いを起こしているのか、それを問うと？」

「はい」

「……そうだな。私個人の考えに過ぎないが、あの無人機には憎悪を感じた。私が彼らに、ではない。彼らが我らに、だ」

そう語る五世は、悲痛に顔を歪めていた。

彼が感じたと言うその感情は、果たして無人機の向こう側にいるものの感情だったのか。それは、今の彼らにはわからない。

けれど、そう感じたと言うことはやはり、あれは味方にはなりえない存在だと、千冬は確信する。

それと共に、改めて切り出した。

「陛下、言葉を飾ることは致しません。我々に援助してくださいませんか」

「……わが国の宝を、子供たちを守ってくれたことには、国を代表して感謝の意を申し上げます。しかし、それは私の一存では決められません。あくまでそれを決めるのは国の民です」

「では、せめてこれだけでも聞いておいてください。我々はIS学園から脱出して一年間、独自に委員会の動きを追っていました。それによって分かったことは一つだけ。委員会は、ISを独占し、今度こそ世界を牛耳るつもりです」

千冬の言葉によって、悲痛に歪んでいた五世の顔が今度は驚愕に染まる。

それはそうだろう、ISはアラスカ条約によって強固に固められた、核弾頭よりも危険な代物になっている。それを独占されれば、いかな装備を用いたとしても反抗は許されなくなる。

それほどまでに大それたことを考えているなど、彼にはとても信じられなかった。否、信じたくなかったといったほうが適切か。

しかし、千冬はその言葉を休めない、止めない。

「初めて世界にISが現れたあの時、世界はその戦力をこぞって手に入れようとした。しかし、それを一国が独占することを危惧した世界はアラスカ条約と委員会を作り出し、その兵器をスポーツ用にまで弱体化させた。……しかし、その状況を打ち破る第三の力が、今までの兵器ともISとも違うそれが戦いを引き起こしたとすれば、彼らの手に入れたかったものは手に入る。戦乱に乗じてISを管理する名目でISを回収すればいいだけの話ですから」

いや、もつと大それた手も取れる。ISを戦闘に使用しないという事項を破った国からIS自体を没収すればいい。

告げた千冬の顔を、彼は有り得ないといった表情で見つめる。だが、そこには確かに一筋、有り得てしまうかもしれないという可能性が見えていた。

ファントム・タスク

「それだけではありません。『亡国機業』と名乗るテロリスト集団に、例の無人機を操る者たち。亡国機業に肩入れする国や人は多いでしょう、おそらく委員会内部も随分と割れているはず」

「世界は、そのものたちのチェス盤というわけか」

「はい。ですが陛下、それに甘んじる必要などありません。我々が今取るべきは、世界の敵となるその者たちを退けるための力を得る

ため、互いの手を取り合うことです」

「そのために、君たちの手をとれと言うのかい？」

その言葉に、千冬は首を横に振る。

答えは、ノー。

「我々への助力の願い出は、あくまでモノの次いんです。いま必要なのは世界の調和、敵を退けるために手を取り合うこと」

「……君たちは、一体何のために戦うのだい？」

「己のためですよ。世のため人のためなんて大それたものじゃない、明日の朝になって、美味しいご飯が食べたいから、愛しい人の顔を見たいから」

理由など、それで十分だと思いませんか。

「……いえ、出すぎたことを言いました。それでは陛下、我々はこれにて失礼させて頂きます。生徒は確かに」

「あ、ああ。確かに。……気をつけなさい、これは老婆心から言うことだが、君たちがやろうとしていることはきつと、そう、酷く難しく、そして気高い行いだ。それを邪魔に思う者もいるだろう。明日を目にする前に、その命を散らすことのないよう」

「はい。お言葉、確かに頂戴致しました。……それでは、これでお忙しいところ、お時間を取らせて申し訳御座いませんでした」

それを最後に、二人は宮殿を後にした。

ただ一人、目を瞑り考えるウィリアム五世を残して。

「……ぶはぁーっ、緊張した……！」

「珍しいですねー、千冬さんが緊張するなんて」

「一国の王と対面するのに緊張しないわけがなかるうが。委員会の爺どもと話すのとはわけが違う。度量が違うぞ、度量が」

力強くそこにあるバッキンガム宮殿の門を潜り終え、少し歩いたところで千冬が盛大に息を漏らす。

ここは霧の町と名高いロンドン。環境整備の進んだこの時代、春先に霧が出るなど最早あり得ない域に達しているのだが、それでも酷く冷え込んだ日に条件が合致すれば霧が出る事はあるらしい。冬であれば、それは尚更と千冬は聞いている。

かの有名な「ミステリーの女王」アガサ・クリステイや、名探偵シャーロック・ホームズを生み出したアーサー・コナン・ドイル所縁の地としても非常に有名なここだが、二人は早々に宿へと戻ることにした。

英語が話せないわけでもない二人は、マップを呼び出せば縁のないロンドンと言えど自由に歩きまわれるが、一国の王と面会に行つた彼女たちを、心配性の真耶や生徒たちが心配していないわけがない。彼女たちの心の平穩のためにも、ここは素直に帰還することにしたのである。

バッキンガム宮殿に近い宿の中で目をつけたのは、『Peace Hotel』と銘打たれたぼろいホテルだった。

もつとも、外見はぼろかったが中はつい最近新しくしたばかりらしく、とても綺麗なものだったのだが。

そのホテルへと戻ってきた二人を出迎えたのは、狭いロビーでそわそわそわそわしていた真耶と、それをなんとか宥めようとしてい

たサラだった。

「あ、お、織斑先生っ！ 無事だったんですねーっ！」

「別に連行されたわけじゃないんですから、無事に決まってるでしょ……。お疲れ様です、織斑先生、会長」

「ああ、今戻った。変わりはないか？」

「いえ、特には。あー、山田先生はいつも通りでした」

「そうか、ご苦労だった」

共に行動している生徒の一人、サラ・ウェルキンからそう報告を受けると、千冬は近くの椅子にどさっと座り込む。

生まれてから国のトップに会うことも何度かあった千冬だが、それでも彼のその鋭く力のある眼光を目にしたときにはたじろぎかけた。

自らに向けられたものではないと分かっているながらも、彼の王のもつ力強さはそれほどのもので。

まったく、と。小さく息を零す。やはり、自分は人の上に立つ器を持ってはいないのだと、そう自嘲した。

「それで、これからどうするんですか？ うまくいきました？」

「この事態を重く見て、どうにかしたいと考えてはいるようだ。援助は、まあ無理だったが」

特に残念そうな色を混ぜることもせず、千冬が話す。

元よりそんなことに期待などしていない。ただ前置きとして話しただけのことだ。

「まだフォルテとダリル先輩の資産が残ってますし、そっちは何とかなると思います。ただ、武装の強化は必要ですね……。実際に戦えるのはフォルテにダリル先輩、会長に織斑先生の四人だけ、ほか

はバックアップですし」

「そうですね、足止めくらいは出来ないと、これからきびしいかも
しれません」

コーヒを一口飲み下しながら、サラと真耶がそれぞれそう述べる。どちらの顔にもやはり疲れが見え隠れしていて、それは今までの旅路が決して安易なものではないことを示していた。

千冬たちは、日本を巡り終えた後、裏のルートを通り船でイギリスへとやってきていた。飛行機を使わなかったのは、そのネットワークから敵に居所がばれることを恐れたためである。

裏、つまり全うではない手段によって別のパスポートを人数分偽造し、データを入力して数と合わせ、飛行機で行ったように見せかける。

それと共に、本人たちは船でイギリスへと向かう。

そうすることで、注意深く進んできた彼女たちはイギリス、ロンドンへとたどり着いたのであった。

「他の連中はどうした？」

「布仏姉妹は睡眠中、ダリル先輩とフォルテも部屋にいますけど」

「よし、ではとりあえず、次の行き先を相談しよう。ろくに観光もさせられずに済まん」

「いえ、元々観光目的じゃありませんしね」

小さく笑みを見せたサラは、コーヒを一気に飲み干すと、自身の端末から世界地図を引き出す。青い仮想ディスプレイに表示されたそれには、いくつかのマークが付けられていた。

「まず、私たちは日本からここイギリスへ渡ってきた。で、一応生徒を帰すって目的は達成したわけだけど」

日本からイギリスへ指でなぞると、そこに白い線が引かれる。

「次は……、ギリシャ？」

「え、なんでですか？」

「ダリル先輩の知り合いがISの研究者らしくて、そこに顔を出すついでに物資の補給も出来るって言っていましたよ」

「そうなんですかー」

「いや、そうなんですかーって、先生……」

ニコニコと笑っている真耶に苦笑いするサラ。そんな二人を見て、思わず千冬は笑みを零していた。

「あ、織斑先生、なんで笑うんですかーっ!？」

「いや、すまんすまん。面白くて、ついな」

「……前は、こんな風に織斑先生が笑うなんて、思ってたかったな
ー」

「生徒の前じゃこんな顔見せませんでしたもんね、千冬さん」

感慨深げに呟いたサラの言葉を聞いて、恋華が薄く笑う。

からかっているのだろうか、その笑みはどこか軽薄さを含んでいるものの、千冬はそれ以上に壮絶な笑みでゆっくりと右手を伸ばす。
ほえ？ と頭の上にはてなマークを浮かべた恋華だったが、

ガシツ、という音で、自分がどういう状況なのかを悟った。

「あまり私をからかわないほうがいい」

ミシミシと悲鳴を上げる頭蓋、涙をあふれさせる涙。けれど、しかし。

その頬は、確かに朱に染められて。

「あはああああん」

直後、壮絶な打撃音がホテル内に響き渡った。

第111話 その頃の千冬一行（後書き）

ウィリアム陛下に関しては、自身の中でいろいろと年表と睨めつこした結果こうなりました。

現在のイギリスの王がエリザベス二世、おそらく次は順当に行けば息子であるチャールズ王太子です。ですが、現在の時間軸と同等に時間を進めていくと、チャールズ王太子はこのとき御年98、であればほぼ間違いなくその息子であり継承権第二位のウィリアム王子が継ぐだろうと考えてのもんです。

性格は完璧な捏造ですし、面会もごたごたに紛れてネームバリューを使い切ったうえで少しだけ出来ただけ、という超と言う字すら霞むVIPです。

現実のウィリアム王子とはなんら関係がないことを明記しておきます。

ちなみに彼はまた出てきますので、お楽しみに。

第112話 未だ戦い起らず

数日後。

千冬たち一行は『Peace Hotel』の一室に集まっていた。

「……ということだ。みんな、大丈夫そうか？」

「んー、たぶんー、大丈夫じゃあないですかあー？」

「本音、そろそろしゃんとなさい。もう朝よ」

「ううー……」

落ちかけている臉を何とか上げつつ言った本音の頭を、軽くはたいて叱りながら、^{うっほ}虚が言う。

イギリスにやってくるまでの間、戦闘続きでろくに睡眠もとっていなかった一行だが、一番ひどかったのは整備を担当していた布仏姉妹だろう。

昼夜を問わずに整備を続け、睡眠時間は一年の間に一週間あるかないか。それほど過密なスケジュールの中にあつて、なおも戦い続けられるほど正確な整備を続けていた彼女たちの腕は、一介の整備士のそれをはるかに上回っていた。

「それで、よく眠れたか？」

「はい、もう大丈夫です。心配をおかけしてすいませんでした。お嬢様も」

「もう、本当に心配したのよ？ 二人していきなり倒れて」

頬を膨らませ、怒っていますという風に見せかける恋華だったが、その実「虚のことだからきつと大丈夫でしょう」という、何とも言えない信頼を持たれていることに、当の本人は気付いていなかった。

実際の心中など、本人ですらわからぬ時がある、曖昧なものだが、虚と本音は、度重なる睡眠不足と整備からくる過労によって倒れてしまい、ここ数日の間は昏々と眠り続けていたのである。

「それで、ギリシヤに行くのは船ツスか？」

「そりやそうだろ。飛行機なんて目立ちすぎる。私たちは、とつくに連中に目をつけられてるだろうからな」

「でもダリル先輩、船って疲れませんか？」

「泳いでいくか？」

「あはは、ジョーダン」

軽口を叩きながらも、三人の間には悪い空気は見られない。もつとも、一年中一緒に戦っていたれば息も自然と合ってくるのだろうが、笑みを零しながら話し合う三人を眺めながら、ふと本音は嘆息する。その様子を見て、千冬はそつと彼女の頭に手を置いた。

「心配か」

「あ……。ええー、まあー……」

「まだ目覚めてはいないそうだ。だが、どこか体を悪くしているわけでもない。近々目覚めるさ」

「そつ、ですよね……」

束から提供された香織の容体の情報を、千冬はそつと本音にだけ教えていた。

千冬としてもそう言った愛情を恋華からもらっているため、もし彼女が香織のことを好いていても、何ら偏見は持っていない。

それどころか、香織が男だということを知っている千冬は、少しくらいの後押しをしても良いとすら思っていた。

そんな理由があることを本音を知る由もなく、本音は物憂げな表情でどこかを見つめ、それからふと笑みを浮かべる。

「ん、どうした？」

「……笑ってることにしました。かおりんが起きた時、私が難しい顔してたら心配されちゃうから」

「ふっ、そうだな。お前はその方が似合っているさ」

小さく笑みを浮かべ、もう一度頭を撫でる。

そつと目を細めた本音は、それを心地良さそうに受け入れていた。

「ああーっ！　ずるい、ずるいずるい本音ったら！　千冬さん、私もわたしもーっ！」

「ああ、はいはい。わかったから騒ぐな。ほら」

「えへへえー……」

その微笑ましい空間をいとも簡単にぶっ壊す者もいたわけだが。

イギリスは明日出発するようだから、それまで私、本音はロンドンを散策することにした。

といっても、ロンドンの地理なんてまるで分からないから、迷ってしまうといけないと思って宿の見える公園で過ごすことにする。

……暖かい、とはお世辞でも言えないけれど、それでも日差しを浴びていると暖かくなってくる。

「かおりん……」

香織、愛しい人。

一年前からずっと眠り続けていて、まだ目覚めていないらしい。
あの篠ノ之博士もいるし、鈴ちゃんたちも一緒だから、大丈夫だ
と思うけど。

だけど、やはり心配だ。

「……IS、かあ」

それがなければ、自分は香織とは出会えなかっただろう。
けれど、なければ、香織はこんなことにはならなかったかもしれ
ない。

ifの話だとわかつてはいるけれど、それでも。そう思わずには
いられない。

彼女のことを思うだけで、胸が苦しくなって、熱くなって。昔本
で読んだ「恋」とは少しだけ違う感じ。

愛していると、私はこの一年間の間に自覚していた。たとえ許さ
れないものでも、私はそれだって構わない。

もし彼女が受け入れてくれるのであれば、それでいいと。

「お嬢ちゃん、どうかしたかい？」

「え……？」

声に、振り向く。そこにいたのは、腰が少し曲がった細いお婆さ
んだった。

ふちの細い眼鏡をかけて、よく映画にいるようなしわしわの顔と
白い髪。

誰だろう、と首をかしげると、その様を見てだろうか。彼女はし
わしわの顔をくしゃっ、と縮めるようにして笑った。

「お婆さんは、誰？」

「しがない老婆さ。お嬢ちゃんは何か悩んでいるのだね？」

「……、うん……」

内容は言えないが、それでも何かを悩んでいる、と言うことを話すことは出来る。

なんとなく悪い人間には見えないこの老婆に、少しでも話してみようと考えた。

「……もし、お婆ちゃんの大切な人がずっと寝たまま、その原因が、自分では変えようのないものだったらどうする？」

「これはまた、お嬢ちゃんの年にしては重たい質問だねえ」

はて、と彼女は瞠目し、それからまぶたを下ろしてしばしの間静かに考えていた。

二分、三分程度だろうか。目を開いた老婆が口を開く。

「そうだねえ。受け入れて、待つしかないねえ。もし自分から何かできるならやるけれど、お嬢ちゃんの様子だと出来ないんだろう？」

「……うん。自分は何もできなくて、ただ待つだけ。……悔しいよ」

「その気持ちは、よくわかる。私の旦那も、随分前に逝っちまったけど、若いときに病を患ったことがあってね。手術で助かったけど、待っているときはつらかったもんだねえ」

「そう、なんだ……」

私は、自分が不幸だなんて思っていない。だけど、今の私は悲劇のヒロインぶった痛い子に見えやしないか。

そんな風に思った私の頭を、お婆さんの小さな手がぼんぽん、とさする。

「けれどねえ、決して諦めたりしちゃあいけないよ。待っていてくれる人がいる限り、その人は生きられるから」

「お爺さんも、そうだったんですか？」

「そうかもねえ。まあ、お嬢ちゃんがしたいようにして、生きたいように生きなさい。それが人生でしょうから」

こちらの事情など、知る由もないおばあさんの言葉。

けれど、それはなぜか重く響いてきて。

少しだけ、心が軽くなった、そんな気がした。

「ふっ、ハアッ！」

「甘いわよ、っと！」

「きゃっ!?!」

ドンッ、と鈍い音がして、その小さな体躯が宙を舞う。

壁に叩きつけられた衝撃で肺から空気が一気に抜け出した。

「いっつ……」

立ち上がるうとしてくらりとしたものの、何とか立ち上がって見ると、そのめまいは何とか治まる。

壁を背にした状態で立ち上がった鈴は、目の前のワンピース姿の

ナターシャに対して、溜め息交じりに視線をやった。

「相変わらず強いね……」

「元軍人ですもの。そりゃあ強いわよ」

「だーっ、訓練しても訓練しても、一夏以外には勝てないってどうなってるのよーっ！」

ぎゃあぎゃああと喚きたてる鈴に対して、ナターシャは苦笑いを浮かべている。

船の中で何もしていないとき、暇つぶしの一環として始めた実戦訓練だったが、先生役を務めたナターシャと葵の指導が良かったのか、この一年間で一行の肉体的な戦闘能力は恐ろしく向上していた。それでも、葵一人で十分殲滅できる程度にしかないというのは、比べる相手が間違っているのか否か。

それはともかくとして、鈴の喚いているその内容には注釈がいるだろう。なにしろ、彼女の言う『一夏以外』には、非戦闘員であるはずの『蜘蛛の巣^{スパイダーウェブ}の巣』のメンバーも含まれているのだから。

「K・K・もクレイマンもベルも空もマックも！ どうしてあんなに強いのだよ！」

「人は見かけによらないって言うけどねえ……」

K・K・は純粹な腕力。

クレイマンはまさかの空手と柔道。

ベルは確実に相手の弱点を突く軍隊仕込の格闘戦。

空はその小柄な肉体を利用した足技、関節技の数々。

マックは恐ろしいまでのスタミナと頑丈さ。

それぞれがずば抜けた特技を持っているからこそ、その強さは遺憾なく発揮されていた。それは、間違いない自身の身を守るために仕込まれたわざなのだろう。最も、空の場合は分らないのだが。

「さあ、もう一本いくわよ！」

「えー、もう二時間よー？」

「まだまだ強くなるの。もっと、もっと……！」

「鈴ちゃん……」

いまだ二次移行の兆しを見せない相棒。目覚めない、愛する人。どうしようもない焦燥感にさいなまれている彼女を見つめ、ナタシヤは静かに頷いた。

せめてこの一時、無心になれるようにと願って。

第113話 新たな火種

その一報は、五月に入ろうかといったところで、やってきた。

「なに、これ……！？」

「ひどい……っ！」

「なんだよ、なんなんだよこれは……っ！」

鈴が、簪が、一夏が、皆が口々に叫ぶ。

モニターに映し出されているのは、吹き飛ばされた一つの島。ハワイ沿岸の小さな島で、人はいなかったらしいが、それによって発生した津波のせいでハワイは大きな被害を受けていた。

島一つを用意に吹き飛ばすほどの力を生み出したのは、一年前彼女たちが破壊したあの巨大IS、ファントムだった。

「ファントムが、もう量産できるってこと……！」

「どうやらまたなにか放送があるらしいぜ。つけてみるか？」

「お願いします……！」

K・K・にそう言った一夏の言葉に頷き、K・K・は手元の端末を操作する。

薄い青の仮想ディスプレイには『VOICE ONLY』と表示されていた。

『世界中の諸君、そろそろ慣れた頃だろうと思って新たなスパイスを加えてみたが、どうだろうか。三日後にこの砲門を各都市へ向けるつもりだ。阻止するつもりならしてみるといい。楽しみにしている』

「……ふざけた野郎ね、相変わらず」

胸糞が悪くなるほどの宣戦布告に、葵は憎悪の色を隠そうともせず、そう吐き捨てる。

暗い、どこまでも暗い色を見せながら言ったそれに、一行は言葉をかけることも出来ずにいた。ただ一人を除いて。

「あつはは、おふぎけにもほどがあるよね！ ふふ、ふふふふ！」

声をかけるのではなく、ただ笑ったのは束だった。

ただ、その笑いは酷く冷たく。彼女の一面に慣れていない一夏やシャルロット、ラウラにとってはぞつとするほどのもの。

もっとも、鈴たちは既に束が無邪気なんて可愛らしい代物でないことは分かっているため、少しだけ身を引くだけで済んだ。

「おい、クイーン……？」

「K・K・止せ。束様は」

その言葉が終わる前に、バゴン！ と束の拳が鋼鉄よりも強靱な素材で出来た船の壁に食い込む。その惨状に、葵と空以外の全員が目を向いて驚いていた。

しかし、驚愕だけでは終わらない。

束から噴出した『何か』が、葵には見えていた。

「……許さない。殺す、あんなもの」

ぎりぎりと言を立てて、束の指が船の壁にめり込み、そのまま抉り取っていく。その束の手をとったのは、いつの間にかそばに歩いてきていた葵だった。

「たっちん、落ち着きなさい。皆怖がっているわ」

「許さない、許さない……！」

怨嗟の声が連なって流れていく。

葵の言葉すら聞こえているかどうか怪しい状態の束を見かね、葵は声を張り上げるのと同時に頬を張った。

「ッ、束！」

パアン！ と、高い音が響いて。

叩かれたことに驚いたのか、呆然とした束の顔を両手で挟みこむと、葵はまっすぐにその目に視線を合わせる。

「束、落ち着きなさい。私ができる？」

「あー、ちゃん……？」

「そうよ。少し落ち着きなさい」

その言葉に小さく頷く。どさつ、と近くの椅子に腰を下ろした束は、そつと目を伏せて溜め息をついてから、もう一度口を開いた。

「……ごめん。ちょっとキレちゃって」

「気にしないでいいわよ。これだけおちくられればキレもするわ」

その言葉を証明するように、葵の手はぐつと握り込まれていたせいか、少し血が溢れていた。

束の頬についてしまっている血を自身の手の甲で拭った葵は、そばに來た空に束の体を預ける。

「束様、お部屋に戻りましょう。葵様、後を頼んでも……？」

「ええ。たっちんのこと、よろしく頼むわね、空」

「はい」

恭しく礼をした空は、束を支えながら部屋から出ていった。
後に残された一行は、身動きできないままにそこにとどまっ
ている。それを見た葵は、小さく溜め息をつくと声を上げた。

「皆、とりあえず戦いの準備をして頂戴。一番近いファントムを破
壊するわよ」

「お、おう！ あんなに束さんが怒ったの初めてだしな……」

「あんなもんこれ以上撃たせて溜まるもんですか。速攻でぶっ潰し
ましょ」

拳を手のひらに叩きつけると、鈴はいの一番に会議室から出て行
く。それに続くように、そろそろとIS操縦者は全員出て行った。

それを見送った後で、葵が近くの壁を軽く殴りつける。それだけ
で、殴られた部分の壁面は大きくへこんだ。

「止めてやる……、かならず……！」

「だから船を壊すなっ……」

悲痛なK・Kの声は、葵の耳には入っていなかった。哀れであ
る。

「またでかいのがでてきたね？」

かちやり、と刃が鞘の中で声をあげた。
鐐つばを指で撫でるようにしながら、彼女はくすくすと笑う。笑い、
嗤い。そうしている彼女を見る目もまた。

「先輩、稽古は……？」

「今日はこれで終わりだね？」

「え、でも、まだ私は」

まだ動ける、そう言おうとした彼女、天王寺葉桜てんのうじ はぎくらの口元に、ぴたりと。彼女の指が付けられる。

丁度、静かにしるとジェスチャーするときのような形で。

彼女の容姿は確かに優れてはいるものの、絶世の美女というわけではない。しかし、葉桜の目の前に顔を寄せた彼女に、葉桜はうっすらと頬を染めていた。

決して葉桜が恋心を抱いているわけではないが、今の葉桜にとって彼女は尊敬する師であり、そんな女性にずいつ、と顔を寄せられれば、頬を染めてしまうのもまあ分らないでもないのである。

「息、切れてないね？」

「あ……、そういえば……」

「成果、出ているみたいだね？」

にたあ、と笑う彼女。その笑みに、葉桜はゾクリと身を震わせる。彼女の笑みを見るのはこれで初めてではない。けれど、その笑みを見るたびに、彼女は何か得体の知れない感情を感じて震えを抑える事が出来なかった。その後には放たれる言葉を想像すると、むしろちびりそうにすらなるのだが。

「じゃあ、あのデカブツ、斬ってみようか？」

「……はい？」

葉桜は一年前から幾度となく彼女との鍛錬を続けてきていたが故に、彼女の性格についても多少は把握している。

何しろ、剣についてはほぼ素人な葉桜に対していきなり真剣を渡し、斬り合いによって彼女の力量を把握した猛者であるからして、何らかの滅茶苦茶な言葉をぶっ放すだろうことは葉桜も予想できた。出来たのだが。

間の抜けた声を出してそう言った葉桜には、名家のお嬢様の風格など微塵もない。

あるのは、上司に「この書類、明日の会議に使うからやっ」と退社間際に言われたサラリーマンの顔を二〇〇倍ほどに濃くした苦悶の表情である。

それに気づいているのかいないのか。果たしてどちらなのかは、彼女にしか分からないが、とにかく。

「あのデカブツ、斬ってみようか？」

「リピートしないでください、怖いです怖い怖い目が怖いっ!？」

じりじり、じりじりと近づいてくる彼女の目は完全に本気だった。葉桜には、間違いなく彼女の言っているものがあの巨大なISであることがはつきりと分かる。というか、デカブツだなんて言葉を使う相手はあれくらいのもんだろう。

「……本当に、ですか？」

「ん？」

ひっそりと聞いた彼女の完敗だった。

たった一言で葉桜を撃沈させた彼女は、一歩で葉桜から離れると、爽やかな笑みを浮かべてさらに言葉が続ける。

「君は、強くなったよ？ 安心するといいね？」

「で、ですけど……。まだあの子の起動には時間が……」

「そのぐらい、私が時間を稼げばいいことだね？」

その言葉に、彼女が手にしていた鞘の中から、また刃が笑う。

かちやり、かちやりと。自らを主張するように。

聞こえたのか、それともそうでないのか。彼女もまた笑う。もしくは、嗤い、晒う。

果たして、それが葉桜にはどう見えたのか。

「……わかり、ました」

彼女の笑いに勇気付けられたのか、葉桜はこくりと頷く。

葉桜が彼女と出会ったのは一年と少し前。

あの襲撃事件の後、その事件より前に実家に戻っていた葉桜の元に現れたのは、お腹をすかせた彼女だった。IS学園から葉桜の実家までは随分と距離があるが、一体どういうことかと尋ねると、なんと彼女は飲まず喰わずで三日かけてIS学園から逃れてきたのだという。

あの日、千冬の手から漏れた生徒たちはほとんどいなかった。それはつまり、ほんの僅かはいたということで、その一人が彼女だったのである。

葉桜の実家までをそんな状態でたった三日で踏破したという彼女の實力は、葉桜が見ても恐ろしく高かった。むしろ底が見えない、青天井という言葉がふさわしいほどに。

だからこそ、葉桜は不完全だった己を鍛えるために、そして覚悟を決めるために彼女に師事を願い、そして彼女は受け入れた。

誤算だったのは、彼女が葉桜の予想以上に強く、そして弟子に対しては無慈悲だったことだろう。

打ちのめされ、ぶちのめされ、ぼこぼこにやられる日々が続く中で、葉桜は改めて自分を見つめていた。どれほど弱く、無様になるうとも、それが次に繋がると彼女には分かっていたからこそ。

「支度してきます」

「うん、それがいいね？」

彼女の笑顔が、今の葉桜にはとても眩しい。

奇妙な縁で結ばれた師弟は、そうして立ち上がるのだった。

天王寺葉桜の物語も、そうして、また。

第113話 新たな火種（後書き）

影の主人公3人目くらいの葉桜ちゃん登場。

IS学園と天王寺実家は東京から大阪までくらいの距離を想定しています。まあIS学園がどこにあるかわかんないので、IS学園自体は本土からちょっと離れた島にあるんじゃないかな、と思います

が。
アニメの描写的にもモノレール使ってますし、埋立地かな。わからんなあ……。

とうとう始まったファントムによる一斉攻撃。果たしてこれを止められるのか。

乞うご期待です。

第114話 『マドカ』(前書き)

エロ注意&ちよつと短め。

用事を済ませた後、PM一〇時から書き始めました。

第114話 『マドカ』

ファントムによる都市攻撃作戦が後二日と迫った頃、一人の少女は、小さな宿で目を覚ました。

「姉さま、姉さま……？ どこにいるの？」

目をこすりながら呟いた彼女の視界に映っているのは、小奇麗な宿の一室。

人気のないそこに取り残されたような感覚になり、彼女はじわりと目じりに涙を浮かべて周囲を見渡す。

すると、彼女の背中をぎゅっと抱きしめる暖かい感触が彼女を包む。

「姉さま……」

「ごめんなさいね、ちょっと意地悪してしまったわ」

「うう……ひどいです姉さま」

頬を染めながら答えた少女は、服を纏っていないかった。

そして、その少女を後ろから抱きしめているキティも、また同じ。素肌の温もりを互いに感じあいながら、少女はおもむろに首をかしげて首筋をさらす。

キティはその少女の肌に舌を這わすと、ぴちゃぴちゃと水音を立てながら舐め立てていく。その音に少女は頬を染め、心地よさそうに目を細める。

「ふあ……」

「ふふ、気持ちいいのね……。可愛いわ……」

「んう、くふう……。んあ、あつ……」

媚声を響かせながら快感に体を跳ねさせる少女は、未発達なその体を快樂に痺れさせている。

昨晚から明け方まで続いたキティとの情事の影響が色濃く残っているせいで、それはさらに強く少女の体に響いていた。

蕩けた目で虚空を見つめる少女だったが、キティも少女もそれが前戯ですらないと分かっている。

だからこそ、少女はその蕩けた目をキティへと向ける。キティが、小さく微笑んで牙を剥いた。

「つあ……！ ん、くう……！」

蕩けた眼の中にある淀んだ光をより一層曇らせながら、少女が色を帯びた声を上げて耐えるように目を見開く。

決して痛みを感じているわけではない。むしろ、彼女はその快樂の波に意識を流されまいと必死に繋ぎ止めている。

それは快樂に流されないためではなく、そうすることでさらに長い間、キティの与える快樂を受け止めたいと言う欲のためであった。少女の様子を見ながら、キティはその口からナノマシンを送り込んでいく。記憶を書き換え、脳を作り変え、肉体構造を組み替えていくその最中にも、少女の体には膨大と言っ言葉すら生ぬるほどの快樂が流れ込んでいく。

「ね、え、さま……！」

「ほはいお？」

「う、ううん、もっと……、もっとしてえ……！」

自らが消えてしまうほどの波の中にあつて、少女は尚も快樂を求める。

少女の中にあるのは彼女の与えてくれる快樂、そしてキティだけ。

そこに少女自身はおらず、少女は快樂とキティの中にこそ自身を見出す。それが、キティによって書き換えられたか弱い少女の全て。その少女の言葉に、開いたままの口を歪め笑ったキティは、より一層ナノマシンの注入を早めると同時に、自身で作りに出した『快感中枢を刺激するナノマシン』を送り込んで行く。

刺激されることで放出される脳内麻薬には、本来中毒性はない。

しかし、キティのナノマシンによってそれは作り変えられ、キティによって快樂を与えられることでしか絶頂は迎えられず、気分も晴れない、そんな体へと作り変えられていた。

心の深層の部分ではそれがなんとなく分かった少女だったが、それでも少女は拒まない。

キティの行うことには全て従い、心から愛するようにと作り変えられた少女にとって、それはむしろ喜ぶべきことであつたから。

「あ

」

一〇分以上それが続いた頃、ぶつりと少女の意識が途切れる。

あまりに膨大な快樂によって強制的に脳のブレーカーが落とされたのだらうと判断したキティは、そつと牙を抜き取ると、ペろりと唾液とそれに含まれる治癒用ナノマシンで傷を塞いでから、少女をベッドへと横たえた。

すやすやと眠る少女を見ながら、キティは彼女の髪をそつと撫でて笑みを零す。

少女の名は、マド力と言った。

「ここから、救難信号が……？」

それは、IS学園崩壊から数日後のこと。

空を彷徨っていたキティは、どこからか緊急回線を使用して発信される救難信号を辿っていた。

彼女が見つけたのは、どの沖とも知れぬ孤島。その森を薙ぎ払いながら進んでいった彼女が見つけたものは、痩せ細り虫の息となったマド力だった。

「マ、ド力……？」

「……あ、あ……」

「酷すぎますわ……。こんな……！」

涙を浮かべたキティは、すぐに死に体となっているマド力を抱き上げると、首筋に牙をつきたてる。

流し込むのは体調を整えるナノマシン。強めれば飲まず喰わずで活動できるものだが、それを弱めたものを流し込む。

「あ、かはっ、けほ、けほっ！」

か細い息だったマド力が息を吹き返し、虚ろだったその目には光が宿る。

間近にあるその顔を見て、マド力はあるという間にその頬を朱に染めた。

「キ、ティ……？」

「ええ、そうですわ。良かった、無事で」

「なんで……」

「貴女を助けに来たのですわ。まったく、無茶をして」

ぎゅっ、とマド力を抱きしめるキティ。

それは決して痛みを与えないように調整され、優しいの範疇に入ると言えるもの。

毛嫌いしていた彼女からの思わぬ行為だったが、マド力は拒むのでもなく当惑したようにキティを見つめていた。

その視線に気づいたキティが、不思議そうにマド力を見つめ返す。

「どうか致しましたの？」

「……どうして、私なんか」

「愛した相手を助けられないのは、もううんざりですわ……」

「キティ……」

少しだけ鬨りを見せるキティを見た途端、マド力の胸が高鳴る。
何事かと感じる暇はなかった。マド力の中で、決定的にそれが変わってしまったから。

「キティ」

「なんですの？」

「……私を、作り変えて。貴女だけを見て、貴女だけを愛するお人形に」

「……それはっ」

「酷いことだって分かってるの。だけど、貴女だけを見ていたい。
このままだと、私はまた貴女から離れてしまいそうだから」

自ら人形になることを望むマド力に、キティは信じられないものを見たような目で彼女を見る。

けれど、今のマド力にとってそれは至高の望みにも思っていた。
織斑一夏を殺し、織斑千冬に復讐するという彼女の望みは達成さ

れなかった。既に、彼女の心は肉体以上に死に向かっていた。

そんなときに彼女の命を救ったのは、酷く嫌っていたはずのキティ。

しかし、今ではナノマシンの影響を退けることも出来ずに、マドカの脳内は悉く書き換えられていた。

そんな中で、マドカはせめて自分らしく殺してほしいと、その願いを何とか伝えようとしていた。肉体ではなく、精神としての『織斑マドカ』の死を。

「……わかり、ましたわ」

そういったキティの目には、涙が溜まっていた。

いくら心を書き換えようとしていた相手とはいえ、『愛した』ことに変わりはない。

その彼女の『心』が死ぬのだ、まして自分が殺すのであれば、その痛みはひとしおだった。

けれど、受け入れるしかない。そうでなければ、彼女は肉体ごと消え去るだろうと、キティには分かっていた。

牙を突きたて、同時にナノマシンを放出して行く。

静かに、静かに。

そうして、織斑マドカは、死んだ。

「……らしくありませんわね、こんなの」

その日のことを思い出して、キティは小さく溜め息をつく。
元よりこんなことになるかもしれないと覚悟はしていたことだ。
だと言うのに、なんて弱い。

自嘲して、それからもう一度マドカの髪を撫でる。

今のマドカは織斑マドカではない。織斑マドカであつた頃の記憶はなく、マドカはただ『マドカ』としてキティと共に存在していた。

「貴女は、私が守りますわ」

もう二度と、愛した人を死なせないために。

どれほど歪んでいても、それが愛であることを彼女自身が信じている限り。

第114話 『マドカ』(後書き)

マドカ死亡、マドカ誕生。
果たしてどうなるやら。

第115話 ファントム

都市一斉攻撃まで、残り一日。

鈴たち一行は、海上にて待機している一機のファントムの前にいた。

総勢一八機のISの前に鎮座するのは、ゆつくりとエネルギーを充填しているファントム。エネルギーチャージはついさっき始まったばかりだが、一日かけて溜めたエネルギーを都市へ向けて放出すればどうなることが、考えるだけでもおぞましい。

「皆、動力源であるコアの場所は分かってるわ。外からぶち抜くわよ」

「けど、あれって相当硬いわよ?」

「私の一撃に耐え切れるほどかしら?」

「……まあ、そりゃそうね」

一年前の同型IS攻略戦から、改良を重ねられたフライト・ボードに乗った葵がいたずらげに言ったそれに、鈴は苦笑いしながらも同意する。

そう、今回は葵も参戦するのであった。

「で、アタシたちはどうするの?」

「鈴ちゃん、簪ちゃんは私と一緒にきて頂戴。他はここで無人機を足止めよ」

葵の言葉に、全員が一斉に頷く。

それぞれの武装を準備し終わると、既にファントムの方も迎撃体制を整えているように見えた。

「それじゃ、とっととおっぱじめますか」

「
「
「
「
「
Ja
!
!
「
「
「
「

一切の乱れなくラウラへと返答した隊員たちの意識は、既に出てくるであろう《戦闘特化型》と《守護特化型》へと向けられている。

まだ一日の猶予があるが、最短距離で移動した束たちでもまだ一機も破壊していない現状、世界中に現れたファントムは一〇機を超え、その全てが砲身にエネルギーを溜めながら国家の心臓部である首都を照準しているにも拘らずいまだ破壊されていない。

その原因の一つとして、各国のIS操縦者たちがこれほど巨大な兵器を攻略したことがないことが挙げられるだろう。

彼女たちの戦闘訓練は、あくまで『対IS』のための戦闘訓練であり、つまりはスポーツ。

一年の間に技量を向上させた者たちも少なからずいることにはいるだろう、だが。

だが、しかし。

彼の巨大要塞は、無数の無人機を内包し、自身の性能も高い。まして量産型と言えど今まで出てきた無人機はさらに性能が向上していた。一年前より、ずっと。

であるならば、通常のＩＳでは傷一つつかないだろう。世界は、無人機ですら混乱する有様だ。

一応 K・K に指示して東がファントムの情報を各国に流しはしたものの、それさえも有効活用はされていない。いつの世も、利益に目がくらむ連中と言うものはいるもので。

「それじゃ、いくわよ」

応、と返事が響き、直後。三人はファントムの頭上高くへと飛び上がっていく。

それを感知したのか、重低音を響かせてファントムの装甲が開き、そこから一対の無人機が無数に解放たれる。

おぞましい数を目の当たりにして、尚。残された者たちは頬を吊り上げ笑った。

「全員、目的は足止めだ。落ちることなく、無理に動くな」
「「「「「ja」」」」」

ラウラの言葉にそう返事を返した『黒ウサギ隊』と、頷いた一夏たちが武器を構える。

『黒ウサギ隊』の面々は、みな一様に左目を眼帯で覆っている。彼女たちが敬愛する隊長と同じその奥には、以前のラウラとは違い完全に自身の制御下に置かれた『越界の瞳^{ヴォーダン・オージェ}』が輝いている。

眼帯は、彼女たちがラウラと共に戦うことを象徴するモニユメントでもあるのだ。

だからこそ、彼女たちは眼帯を拡張領域へと納める。すでに、ラウラは両目に黄金を宿した。なれば、彼女たちもまた、その片目を開くとき。

「来るぞ　、全員攻撃開始！」

声と共に、戦乱は開始された。

「おおー、大きいねえ？」

その頃、日本。

胴着を身に着け、左手に鞘に納まった刀を携えた彼女は、右手を額に翳して大きく空を仰ぐ。

そこに見えるのは、全長五キロの『ファントム』。残り二四時間を切った死の体現。

そして、そこからやってくる無数の黒点。それを見据え、ただ彼女は見つめるだけ。

「
」

彼女の後ろには、静かに佇む葉桜がいた。

彼女たちの目標はただファントムを攻撃不能にするだけ。破壊な
ど目標ではない、ただ止められればそれでいいのだ。

だが、それでも。葉桜の心中には、それだけで済ませられないと
かなりたてる小さな自分がいる。

その言葉に従うかどうかは葉桜次第。彼女はただ、斬り捨てるの
みであるのだから。

「来る、かね？」

シャン、と鈴の音のように刃が鳴る。

見据えた視線の先には、徐々に大きくなる黒点が無数に舞っていた。距離関係上、ISが起動準備に入ったことに気づいて接近して
きているのだろうとあたりをつけ、静かに刃を抜き放つ。

普通ならば我先にと逃げ出すような光景であるものの、それでも
二人は微動だにせず。

そも、恐怖すら感じていない。感じる必要などない人間と、感じ
ることを忘れた人間の二種類しか、そこにはいなかった。

彼女は、後者。圧倒的な力の前に感じるのは、それをさらに圧倒的な力で蹂躪したいと言う欲望だけである。

欲によって動き、それ以外に動かされぬ彼女が抜き放った刃は、目も眩む輝きに満ち満ちていた。

たった一撃を防いだだけで刃がぼろぼろになってしまった一年前。けれど、今は昔ではない。

現在の彼女は過去の彼女とは違う。変わっているのだ、それが衰退か進歩かと言う疑問は置いておくとしても。

「では
」

故に、振るう。ただただ、自らに『敗北』を予見させた黒色の人形たちを残らず斬り捨てんばかりの気迫と共に、その白刃を。

音速で接近した一体を縦一文字に切り結ぶ。刃は、滑らかに滑り落ちた。

ストン、と音がするほどに鮮やかに、切り落とす。

本来ならば入るはずのない刃が、いとも簡単にその体躯を切り裂く。けれど、この場にそれを驚くものなどいなかった。

ぎりぎりと彼女の体が軋みを上げ、彼女はふむ、と心中で唸る。

この調子ではせいぜい六体を切り伏せたところで体が壊れるだろう。それだけの負担が、静かに彼女の体に積もっていることを、彼女は自身で理解していた。

だからこそ、彼女は刃を返すと斬りつけてくる《戦闘特化型》の刃を弾くことに専念することに意識を切り替える。

それを見ることもなく、葉桜はひたすらに目を閉じ続ける。ただ、己の首にかかっているネックレスと意識を通わせようと。

起動に必要な時間は五八秒、それだけの時間を、彼女は一人で稼ぐつもりだった。

五秒、一〇秒。

刻々と時間が過ぎる。

一五秒、二〇秒。

鮮血が舞い、彼女の体に小さく傷が刻まれていく。それでも、刃は止まらない。

二五秒、三〇秒。

パキンッ、と。刃の折れる音がした。

「か、はっ……！」

叩きつけられた鈍器のような腕。

それを、彼女は。

その細い、折れてしまいそうなほどの体で受け止めていた。

みしり、と音が鳴る。体から、鈍い音。

それを聞いて、なおも彼女はその眼に灯した『力』を消すことはない。

彼女は、恐怖しない。

拳を刃の代わりとして、彼女は真っ直ぐに突き抜く。

ただ一点、目前にあった黒いその体躯を、彼女の細腕が貫通した。死に体である。

彼女は、もはや先の一撃のせいで立つこともままならない。

けれど、しかし。

尚彼女は真っ直ぐに、その双眸を揺らがせることをせず。その光を消すこともせず。

「先輩、だからね？」

痛みにその顔を歪ませながらも、折れず。

三五秒、四〇秒。

群がる黒を、ただ一人で受け止める。致命傷を避け、その体で止め続ける。

いくら致命傷となる部分を避けたところで、ダメージは蓄積する。痛みが脳に警鐘を鳴らさせる。ぎしりと、動きが淀み。

そこへ群がる刃。迫る脅威を前に、けれど彼女の体は動かず、

「ふたつめへび
《二・蛇》」

直後、声と共に到来した鉄の塊によって、全ての黒が薙ぎ払われる。

その様子を、彼女はどこか朦朧とした中で見つめていた。

「間に合いましたね……。すぐ治療します、少し待っていてください」

「君は、誰かな……？」

「私ですか。私は」

黒髪を靡かせ、彼女は笑う。

片手に反りのない、長い直刀を。

片手に、S字をかたどったショーターを携え。

特別なチューンナップを続け、ひたすらに専用機としての側面を強めた、ただ刃を振るう力、『打鉄』を纏い。

「倉持早百合、貴女たちの先輩です」

早百合は、そう告げた。

起動まで、残り一三秒。

第115話 ファントム（後書き）

オリジナル設定や機体情報を更新する時間がない……！

第116話 桜（前書き）

ちよつと短いなあ……。

第116話 桜

「《一・渦》、《二・蛇》」

声に応え、刃が震える。

群がる黒を横一文字に斬り捨て、それを超えてやってくる者たちを伸縮する流体金属によって精製された刃で薙ぎ払う。

一秒ごとに移り変わる戦闘など、これまで一度しか経験したことのない重荷ではあった。

けれど、早百合はその目を輝かせ、刃を振るう。

背に守るべきものを背負い、信念のままに戦うこと。幼い頃憧れたヒーローの姿が、自分に重なって。

倉持早百合は、小さな町工場の一人娘として生まれた。

幼心にも、自分はこの町で暮らし続けるしかないんだろうな、なんてことを考えていた、小学生の頃。

けれど、それはISの登場によって一変する。

変わる世界の中で、早百合もまた、自分の夢を追いたいと両親に打ち明けたのだ。

それが、倉持技研創設の理由でもあった。倉持技研とはそもそも、早百合がISに乗るための施設に他ならない。

いつしか国家代表とやらにまで上り詰めてしまった早百合だったが、そこに喜びはあっても興奮はなかった。自分が目指したのは、そういうものではないと。

きつと聞く人が聞けば憤慨するだろう。争いを求めてISに乗るなど、と。

けれど、しかし。早百合にとってISは夢を実現する手段であって、それ以上ではなかったのだ。

ハンデを背負って、尚強くあること。それも、早百合が『打鉄』をチューンナップだけで強くし続ける理由の一つにある。

要するに、倉持早百合という人間は酷く自分勝手に。

そういう自分勝手な人種は、望む状況を手にしたとき、最も強くなれるのである。

「切り裂け……っ！」

再び刃を振るう。

この場に現れたのは本当の偶然、なんとかしなければと考えた末に、彼女が独断で動いたに過ぎない。

この期に及んで、日本政府は及び腰だった。もしかしたら撃たないかもしれない、そう簡単に撃てる筈がないと、そんな希望的観測だけで動く彼らを見限ったとも言えるだろう。

けれど、今の彼女にそんなしがらみは関係なかった。

ただひたすらに斬り捨てるだけ。一心不乱に、無我夢中に。

五〇秒、五五秒。

残り、三秒。

その瞬間、後方で待機していた軍勢が一斉に熱線を撃ち放つてくる。

ガーディアンタイプ
《守護特化型》に搭載されている熱線砲の一斉放射だった。

「しまっ　　！？」

早百合の操る『打鉄』に、あれほどのエネルギーを防ぎ切る装備など存在していない。

戦い方を誤ったかと瞠目した、次の瞬間。

「吹雪け、桜嵐！」
おうらん

凜としたその声と共に吹き荒れた桜吹雪によって、全ての熱線が掻き消される。

数瞬前に似たような光景を見たな、などどこか他人事のように見ていた早百合を守るように、それは降りたつた。

「お待たせしました、先輩方」

「君……、それは……」

「細かい話は後で。今はあれを破壊して、早く先輩を」

「……そうですね」

頷いて、そのISを操る葉桜と共に空を翔る。

『桜嵐』は第三世代型ISであり、基礎設計や武装プランなどは全て葉桜が担当し、天王寺家に由縁のあるメカニックが建設に携わったもの。

葉桜の家族は喜んでいたが、葉桜自身はそれを冷たい目で見つめていた。

元より、既に葉桜には家のためのプライドなど持ち合わせていなかった。ただ、簪に認められ、唯一無二のライバルになりたい。

その一念でここまでやってきたのだ。

故に、彼女は恐怖しない。その一念に勝てる恐怖を、彼らは持ち合わせていない。

「面を上げる、《枝垂》」
しだれ

ジャラ、という独特の音と共に、葉桜の手の内に一振りの刃が作り出される。

否、刃と言うにはあまりに歪。八つか、あるいは九つの細身の刃

が、一つの柄から生えている。丁度、枝垂桜のように垂れ下がった状態で。

ぎゃりぎゃりと、刃同士が擦り合わさって耳障りな音を立てる。それを大振りに振りかぶると、その直後。恐ろしいほどの速度を持つて、複数の刀身が次々に黒色の軍勢を貫いていく。

決して鋭いわけではない。力強いわけではない。されど、その刃は次々にその鎧を打ち砕く。

「ふつ　　！」

またもや、上空から降り注ぐ刀身が黒を貫通し、コアごと砕く。その力の源は、刀身一つ一つが纏うPICに存在していた。

ISのそれは慣性を中和するものだが、それとは性質を異にするPICが《枝垂》には搭載されている。

PICはもともと中和専用ではない。ならば、一定の方向に慣性を生み出すことも十分可能はずだった。

そこに目を向けたのが葉桜であり、なんとか武器に応用できないかと考えた結果生み出されたのが《枝垂》である。

PICによつて刀身の進行方向に慣性を発生させて膨大な貫通力を得る。それが《枝垂》の特性だった。

地球の引力も加算されるため、その攻撃は下方への一撃で真価を発揮する　　！

「はあっ！」

上空より到来するその刃は実際の質量の数十倍から数百倍の重圧を伴い、たった一点を貫かんとする。

その数は八つ、その全てが必殺の意思すら備えて　　！

その黒き体軀を貫通する。その数は、刃と等しく八つであつ

た。

「負けていられませんか！」

ことごとく群れを突破する葉桜を見て、小百合もまたにやりと頬を吊り上げる。

横一文字に繰り出されるそれを回避した敵を、確実に《二・蛇》で喰らい尽くしていく。

本来なら脅威となる黒の軍勢は、剣先をかすらせることも出来ずにことごとく散っていく。それはそうだろう。

やがて殲滅された黒の大群を一瞥し、それから葉桜はすぐに実家へと連絡を取る。天王寺は病院も構えているため、そこに送るのだ。

「いやあ……、悪いねえ？」

「冗談かましてる場合じゃありませんから。あれは私たちが潰してきます、先輩は病院に行ってくださいね」

「残念だ、弟子の戦いを見れないのは？」

「超無理がある喋り方ですね。とにかく、ちゃんと安静にしてください。すぐに救護班が来ますから」

体がぼろぼろとなり、身じろぎひとつ取れないであろうという状態にあっても、彼女はまだ自分のペースを崩さずにいた。

それは彼女の強さ故なのだろうか、などと思いを馳せながら、葉桜はひとまず彼女を安全なところへと移動させておく。抱き上げたときに痛みでもだえていたが、少しくらい我慢してもらうことにした。

それから、二人は静かに宙を舞う。

目標は、浮遊要塞『ファントム』。

「織斑先生たち、大丈夫でしょうか……」

心配そうに真耶が言う。

ギリシャに到着していた千冬たちもまた、ファントムの出現を期に動き出していた。

戦闘を行うのはギリシャのIS五機と千冬、恋華、フォルテ、ダリルの総勢九機。

残されたものたちは、ギリシャにてとった宿の室内で、みな集まって心配そうにしていた。

その中でも、本音と虚はひととき疲れきったような状態だったが、無理もない。なにしろ、一日通して四人のISのチューンナップに調整を行い続けていたのだ。

ISは絶好調になったが、二人は絶賛不調中である。それでも慣れた顔をしているあたり、大分旅に慣れてきてしまっているのだろう。

「大丈夫ですよ。あれだけの戦力が揃ってるんですし、一年前より強くなってる。落とされる道理はありませんって」

「それにいー、篠ノ之博士からもデータが送られて来てますしいー、大丈夫ですよー」

「そうですね……。すいません、心配させてしまうようなこと言っ
つて」

「まあ、お気持ちは分かります。……ちよっとお茶汲んできますね」

「あ、私もおー」

「本音は座ってなさい。こぼすから」
「うぁーい」

ぺしゃあ、とベッドの上でへたれた本音の頭を、傍に座っていたサラが撫でる。

その感触に、本音はにへらあ、と頬を緩めた。

「ん、さらさら」

「……ほ、本音さん。ちょっと触ってもいいですか？」

「いーですよー？」

「で、では失礼して……」

心地よさそうにするサラと本音に心くすぐられたのか、真耶は恐る恐る本音の髪を梳いてみる。

別に噛み付くわけではないのだから、もう少しリラックスしてもいいだろうにとも思ったが、本音はどうせ触られるのだからと真耶の好きにさせることにした。

「わっ、サラサラ……」

「なにしてるんですか、二人とも……」

「触られてるのぉー」

「まったく……。お茶はいりましたよ、どうぞ」

戻ってきた虚がため息混じりに呟き、テーブルにお茶を置いていく。

皆が少しだけ無理をして明るく振舞っていることは虚にも分かる。だから、咎めるようなことは言わず。

静かに、近くの椅子に腰を下ろすだけとした。

第116話 桜（後書き）

次回はちょっと時間が飛ぶかもしれませんが。

あ、メリークリスマス。イヴですが。

七時くらいに、クリスマスプレゼント的な意味で「ルイズがFat e / z e r oに飛ばされて、十年修行してから帰ってきたゼロ魔」を短編で投稿します。

どの陣営に属していたのか、どんな風が変わっているのかは楽しみに。

昨日の夜に思いついてカリカリ書いてました。

第117話 目覚めの時、来たる

「第三〇四八番記憶回路の修復を確認、と」

手元のディスプレイに入力して、それからぐっと伸びをする。
もう、一年か。もうちょっとなんだけだな。

一之瀬香織、二〇二九年四月に『創られた』人造人間。それが、僕。

初めはふさぎ込んでいたけれど、今はもうどうってことない。だって、受け入れてしまえばそれだけのことなんだから。

まあ、お姉ちゃんには感謝してもし足りない。僕がここまでこれたのは、全部お姉ちゃんのおかげなんだ。

『カオリ、三〇五〇番までの回路修復まであと少しです。がんばりましょう』

「わかってるよ、イヴ」

「ははっ、随分と明るくなったものじゃな。よいよい、実に良いことじゃ。のう、主殿」

小さな檻の中で作業を続ける僕の元へと、空と檻の外から声がかかる。

データとして梟経由で僕の中にアクセスしているイヴと、梟自身だった。

僕が行っているのは、自分の「肉体」の損傷の修復。内部に潜った今の状態である程度調整しないと、あの時とんでもない思念と情報量が一斉に襲い掛かったせいで記憶回路といくつかの脳の機能が失われかかってしまっていた。

一年かけて三〇五〇ある僕の記憶回路をゆっくり修復していたけど、もうそろそろそれも終わりだ。

この檻は僕を保護するための壁みたいなもので、これがあるおかげで僕は僕の意識を保ったまま肉体を修復できる。そうじゃなかったら今頃あの世だ。

イヴは外界の情報を僕に持ってきてくれて、梟は常に半起動状態にしておくことでシンク口率の上昇を図っている。

おかげで、今外で何が起きているかも良く分かる。くそつたれなくらいに。

「しかし、のう。主殿の体は、やはり特異じゃ。ネットワークで情報を得てみたが、人造人間よりもホムンクルスと名乗ったほうが格好が良いのではないか？」

「……あの、その無駄な知識を得るくらいなら手伝ってほしいんだけど……」

「無理じゃ。この檻は人でも機械でもどうしようもないからの」

「うん、まあ……、いいや」

梟は意外とお茶目さんだ。一年間一緒にいればそれぐらい分かる。それと、イヴは妙に上機嫌。もはや完全に人間そのものと言ったぐらいに超ハイテンションなくらい。なんでも、僕を一年も独占できているからだって。続いてほしくないけど嬉しいのはやっぱり嬉しい、だそうだ。

考え事をしながら、別の思考ラインを複数束ねて、三〇四九番の回路修復に当てることにする。

一年と五カ月かけて三〇五〇。一日かけて頑張つて、せいぜい六つの記憶回路を修復するのが限界だった。けど、それももう終わる。あと二つ。後二つだ。

「どうやら、そう簡単に終わらせてはくれぬようだぞ、主よ」
「え？ それは、どういう」

直後、咆哮が聞こえた。

胸を掻き乱されるようなその咆哮に混じり、響く。その哄笑、嘲笑。

「そら、来るぞッ!」

U R R R A A A A H H H A A A A A A ! !

空間すら歪めてしまえそうなほどの咆哮と共に飛来したのは、黒の塊。

いわば、黒い粘土を最低限人型として模っただけのような、歪なそれは、その手に一振りの刃を持って迫り来る。

その前に立ちふさがったのは、黒の着物をはためかせ、その手に鋭く黒い輝きを灯す《夜鷹》を携えた梟だった。

「梟!? 何を!?!」

「私が相手となろう! 主は、はよう回路の修復を終わらせろ!」

「けどっ!」

「その檻を消すには、回路を修復するしかあるまいよ! 急ぐが良
い!」

「くっ……! わかった! 倒れないで、梟!」

「承知!」

言葉を交わし終わると、梟は臨戦態勢へと入る。

恐怖が、満ちる。

『私がサポートします、急いで修復を!』

「うん!」

修復を加速させるのと、梟と黒の塊が激突するのは、ほぼ同時だった。

G R R R R R R R H H H A A A A A A A A ! !

咆哮による衝撃がこの身を襲う。

まるで音そのものが打撃してくるかのような錯覚に陥りかけ、それを一笑して刃を繰り出す。

相手が何者であるかは大方検討がついている。おそらく、一年前に流れ込んだ『人食い』の情報。あれが寄り集まって出来た、いわばバグだ。

記憶回路の修復を邪魔していたのは、おそらくこいつだろう。まったく、忌々しい。

「早々に散るが良い！」

G A A A A A A A A A A !

両手に携えた二振りの《夜鷹》で、奴の刃を弾き、切り込む。

切り込んだ、はずだと言うのに。

「な、に……！？」

確実に切り込んだはずの刃が、なぜか奴の体をすり抜けて行く。

……そうか、ここは主の脳内世界、そこで生まれた存在はこの中にある限り他の存在によっては崩壊しない。

なら、主殿ならばあるいは。

「では、持たせるのが私の役目か……！」

まったく、いささか荷が重いかもしれんな……。
しかしまあ。やるしかあるまいよ。

G R R R U U U ……。 F U G A A A A A A A !

「耳障りな声だ、その喉削ぎ落としてくれるわ！」

気づけば、奴ののっぺらぼうなその顔面に、裂けるように口が生
まれていた。

真っ赤なその口内が、どうも嘘くさく見えるのは気のせいではな
いだろう。

あの口は何かを含むものではなく、ただ声を発するためだけのも
のであろうから。

一拍を置かずに肉薄した互いの刃を避け、もう片手の刃を叩き込
む。それを、奴は素手でいなすと、あろうことが額をこちらの額に
叩きつけてきた。

ガオン！ と本来ありえない音が鳴り響く。

ぐらりと視界が揺れたものの、バランスを失うほどのものではな
かったのが幸いか。足の裏で地面とも知れない地面を掴み、おもい
きり踏ん張る。

O O O O O O O A A A A H A A A A A A A H A A A A A A ! !
「黙って、死ねッ！」

顎に掌底を叩き込むと、そのまま頭を引っつかんで地面へと叩き
つける。

猶予などやらない、このまま潰す ！

「おおおおおおお！」

地面に叩きつけられた頭を全力で踏み砕き、四肢を《夜鷹》で斬り飛ばす。ぶしゅつ、と黒い液体が吹き出てくるのにも構わずに。そこまでやって、まだ。まだ、奴の息は途絶えていない。足止めでも、全力でやって五分止まらないか。なんて出鱈目な。

OOOO……、AAAAAGGGAAAAA！！

びりびりと大気が振動する。

切り離れたはずの四肢が消滅し、代わりに奴の胴体から新しく生えてくる。……いくらなんでもそれは。

「頭部まで修復するか……。やはり私では無理なようだの」

だが、と続け。

気配を感じて、奴の動きも止まる。

「もう貴様は終わりのようじゃな。なにせ」

カッン、と音がする。

絶対の主、この場においてあらゆる権限と特権をその手に有する者。

「我が主が、檻から解き放たれたのじゃからのう」

一之瀬香織、我が主。

その身は、既に解き放たれた。

「待たせたね、梟」

「さしたることはない。それよりも、後は」
「うん。任せて」

香織は左手を水平に持ち上げると、そこに刃が、《夜鷹》が形作られていく。

まるでそれが当たり前のように。

カチャ、音を立てて柄を握り締めた香織の視線が奴を射抜く。びくりと、奴が震えた。

G U U U U U ……、G A A A A A A A !

吼える。先ほどまでの強いものではない、むしろ悲痛すら感じさせる、死の臭いを嗅ぎつけた咆哮。

それを聞いて尚、香織は臆することなく。

当然だ、自分よりも弱い相手に怯えるものなど、いるものか。

「ここは、僕の領域だ」

静かに、しかし力強く。

穏やかに、けれど荒々しく。

その言葉を聞いた直後、奴の拳動は決定的におかしくなる。恐怖、その二文字が奴を蝕んでいるのだと分かる。

「だから」

A A A A A D D H H H A A A A A A ! !

言い終えぬうちに、奴はその手にしている刃を振りかぶる。

振り下ろす速度は音速を容易に超えるだろう。けれど。

香織は、この世界で負けることはありえない。

「君は消える」

甲高い音で刃が弾き飛ばされる。

それを認識したのは、声と共に奴の体が真っ二つに断ち切られたときだった。

カラン、カランと刃が音を立てて落下する。

その直後、世界を穏やかな光がゆっくりと満たしていくのが見え。

そこで、私の意識は途絶えていた。

第117話 目覚めの時、来たる（後書き）

香織復活回。

次回は無双？

第118話 進化する翼（前書き）

こんな名前のカード、遊戯王であつたな。

第118話 進化する翼

暗い医務室の中で、彼が目を覚ます。

まるで、毎朝目覚めるかのように、当たり前。

「……おはようございます、香織様」

「うん、おはよう空ちゃん」

驚くこともなく、じつと香織を見つめていた空に、香織が微笑み返す。

空のことは、イヴからもたらされる情報によって把握していた。なぜ空が驚いていないのか、なぜ自分のことを様付けなのか、聞きたいことはまああったものの。

「それじゃあ、行ってくるね」

「はい。御武運を」

とりあえずそれは後回しにすることとした。

既に日は落ちている。いつファントムの主砲が発射されてもおかしくない状態にまで到達してしまっているのだ。

止めなければならぬ。

部屋を出た香織は、衰えている筋肉を全力で動かしながら艦内を駆けて行く。

リハビリは酷く堪えるだろうが、そればかりはどうしようもない。処理速度の遅い自分の体を恨むしかあるまい、などと冗談半分に考えつつ。

甲板まで上がっただけで、既に香織の体力は大分減っていた。一年間、その空白はやはり大きい。

「香織……！？ 起きたの！？」

「あ、お姉ちゃん。……うん、心配させてごめん」

「……それで、今度はどこへ行くつもりなの？」

呼び止めた葵は、まるで全て分かっているかのように微笑む。

本当は直ぐにでも抱きしめたいだろうに、それをせずに。ぐっと堪えて。

それを察したのか、香織は小さく微笑んでごめん、ともう一度呟いてから、改めて口を開く。

「戦うよ。僕も梟で、この空を守る」

「……わかったわ。行ってきなさい。どうせなら、皆を驚かせてやりなさいな」

「あはは、出来たらね」

久しぶりの姉弟の会話は、それで終わった。

けれど、惜しいなどとは微塵も思わない。戦いが終われば、また話せる。また会える。

信じるなどと言う話ではなく、それが当たり前なのだ。

だから、葵は静かにそれを受け入れる。

香織の背を見送る。『梟』を纏い、空へと飛び立つ彼を見送る。

自分の手から香織が離れていく、錯覚に陥った。

鈴たちは既に三機のプロントムを破壊していた。

三機に留まっているのは、精神的な疲労もあるが、一番大きな要因は国境の問題である。

このような世界情勢であっても国境はあり、うかつに通れば敵対行動ととられて動きづらくなる。そのため、国境を大きく迂回しながらプロントムの破壊を行わなければならないため、本来は五機以上破壊できているところが、いまだ三機しか破壊できていなかった。鈴たちの中に葵が含まれている理由は単純、ISの全力飛行にフライト・ボートのエネルギーが追いつかなかったためである。

それならISに運ばせればいいかもしれないが、そうなった場合そのISは戦闘に参加できない。結果として荷物になってしまふことを葵は良しとしなかった。

そんな理由もあり、鈴たちはIS部隊だけで次のプロントムの位置へと向かっていた。

なお、鈴たちには連絡が行っていないが、千冬たちが既に一機、葉桜たちが一機、他の各国のIS部隊によって二機が落とされているため、残っているのは四機。破壊された分を合わせれば、出現したのは一一機だった。

「イヴ」

『国境の警戒が甘い部分をピックアップしました。鈴たちの目標とは別のプロントムを叩きましょう』

「オッケー。急ぐよ！」

『はいっ』

視覚情報として取り込んだ世界地図、マップの全てを脳内で展開し、ミリ単位で国境の警戒線にかからないように調整する。

一年間、ひたすら自身の脳内で過ごした香織にとって、最早脳は手足と同じ。自分の『意思』によって操作できる端末に過ぎない。

そして、その中で『梟』もまた進化を果たしていた。

視界の端に収まる程度の情報量、そこに記されていたのは『二次^{ドシフト}移行まで残り一分』の文字。

一万時間以上の稼働時間を誇る今の香織と『梟』にとって、二次移行とはその程度のものでしかない。

「速度上昇、リミッター解除」

音速で飛行していた香織が呟く。

直後、飛行速度を示すメーターが更に上昇していく。三五〇〇、四〇〇〇、あるいはそれ以上に。

《夜羽》で前面を防御しつつ、飛行速度は時速二〇〇〇キロオーバー、マッハ二に迫ろうとしていた。

無論、その速度ですらまだ一次移行の段階である。ゆえに。

『二次移行、準備完了です』

「うん、じゃあお願い」

『はい。二次移行、スタート！』

イヴの言葉と共に、黒の機体は光に包まれる。その間もスピードは落ちることなく、ただひたすら、愚直に前へと進み続ける。

光に包まれた機体はほんの数秒でその光を晴らす。

しかし、そこにあつたのは大きく姿を変えた『梟』だった。

背部に浮遊する《夜羽》は六枚に増加し、加速用スラストとしての機能が追加されている。しかも、六枚全てが対エネルギー、対物理、どちらにも使用できる万能型である。

装甲は更に流線型に変わり、頑丈さと柔軟さを両立させている。素材の改変すら行われたそれは、生半可な武器では傷一つ付かないだろう。

他にも様々な部分が変わっているのだが、それらは割愛する。な

にしろ、目の前には既にファントムが迫っていたのだから。

「初陣がこれか、いいね」

『油断はしないでくださいね』

「わかってるよ」

言葉を交わしながら、静かにファントムを見つめる。

しかし、今までのように無人機が放出される気配がない。その代わりに。

キイイイイイン……！

何かを集中させているような、甲高い音が辺りに響く。

『射撃体勢に入っています！ 注意してください！』

「大丈夫。止められるから」

ゆつくりと、香織は戦闘体勢を整えて行く。

町ひとつを容易に消し飛ばせるあの砲撃を、止めると言って。

両手に更に鋭く、そして大きくなった《夜鷹》を構え、静かにそこに佇む。

そして、音が途切れると同時に、青白い稲光と共に中央の砲口から巨大なエネルギーが放出された。

『カオリ！』

「大丈夫だよ。《とりのさえずり》！」

バードエイク

不敵な笑みを浮かべながら、香織が自らの単一技能ワンオフ・アビリティを起動させる。今までは弱体化がせいぜいだったはずのそれを起動した直後、放

出されて束になっていたエネルギーはぐらりと揺らぎ、そして瞬間に消滅していく。

十数秒に及んで放出されたエネルギーを全て消滅させた香織は、それを確認する間もなく大気を蹴りつけた。

「一撃！」

音も立てず、振り抜かれた右の刃。大きくそこに傷が入り、装甲が砕け散る。

「二撃！」

今度は左。×の字になるように刻まれたその中心へと、更に攻撃の手は加わる。

「これで、最後！ 《ピンポイント・クエイカー》！」

ギウルギウルと音を立てて、螺旋と共に叩き込まれた《啄木鳥きつしぎ》の武装特性。

その衝撃は脆くなっていた装甲をあっけなく貫き、真っ直ぐコアを吹き飛ばした。

しかし、一個のコアを破壊しても他の二つはまだ残っている。

「よし、行つて！ ウィングビット！」

量が増え、それぞれの羽から一〇枚ずつ起動できるようになったウィングビット、合計六〇基が一斉に飛び出す。

内部をほぼ音速で飛行するウィングビットによって、残りの二つもあっさりと破壊されてしまった。

『滅茶苦茶ですね……』
「えへへ、そうかな？」

笑っている香織だが、笑い事で済ませられるレベルを超えてしまっている。

思いはしたが、イヴはあえて口に出すことは控えておいた。

「さて、と。鈴ちゃんたちにも一報入れなきゃね」
『そうですね。今頃もう一基破壊しているでしょうし』

爆発するファントムから発生する全てのエネルギーを、《とりのさえずり》によって消滅させていく。

今の《とりのさえずり》であれば、よほど強力な攻撃でない限りは止められるだろう。このワンオフは全ての『エネルギー』を対消滅させるのだから。

エネルギーの消滅を行いながら、香織は視覚で仮想ディスプレイを操作して鈴たちに通信をつなぐ。

「ハロハロ、皆！」

『へっ……？ か、かか、香織い！？』

「うん。そろそろそっちも終わった頃だろうと思って。やっと目覚めたよ、お待たせ！」

『香織、体はいいの……？』

『その前に。香織、お前は香織か？』

間に割って入ってきた簪とラウラの言葉に、それぞれ小さく頷いてから口を開く。

「大丈夫。僕は僕だよ」

『……そうか。おかえり、香織』

『心配掛けんじゃないわよ。船で待つてなさいよ!?!』

「うん。すぐ戻るよ」

『は? 戻る?』

「だって、今ファントム壊したところだし」

そう言った香織が耳にしたのは、鈴たちの強烈な溜め息だった。それは、果たしてどういう意味だったのか。おそらくは「ああ、やっぱこの子葵さんの妹ね」みたいな感じの内容であろうことは、容易に想像が付くわけなのだ。

第118話 進化する翼（後書き）

インフレが進行しました。

けどまだまだインフレは続くよ！

第119話 紅いサムライ

「目が覚めてからいの一番にファントム潰すって、あんたねえ……」

「滅茶苦茶だな……」

「っていつか、よく動けたね？」

上から鈴ちゃん、一夏、シャルロットさんです。

今は、ベッドに引き戻されてお叱り受けた後。とりあえず、近く
のファントムは破壊したけど、まだ二機残ってるから、なんとかし
ないといけないわけです。

しかし、体がだるい。まだきちんとリハビリしないうちに音速
飛行とかするんじゃないかな……。

「ま、なんにしても目覚めてよかったわ。アンタが居眠りこいてる
間に一年以上経ってるんだから」

「その辺の情報はイヴから全部もらってるよ」

『カオリが眠ってから目覚めるまでの全ての情報は入手してありま
す』

「ね？」

「わあーお、さすがね」

やや大げさにリアクションして、鈴ちゃんが笑う。

ちなみにこのイヴからもたらされた情報は、一年の間に動いたあ
りとあらゆる情報。だから、今の僕は世界中の一年間の動きを全て
網羅してるってことだ。

まあ、だから何だって感じただけだね。

「これからはリハビリだな？ 香織」

「まーね。性別偽らなくてもいいって気分いいな」

ラウラの言葉に、あっけらかんと答える。

そう、もう僕はいちいち男と女を切り替えなくてもいいのである！
このハチャメチャなご時勢に男だ女だと気にしてられないしね。

「って、のほほんと話してていいの！？ まだファントムは二機残
ってるんだけど！？」

「それならー、ちーちゃんから「一機落とした」って連絡あったよ
！」

「あ、おはよう束ちゃん」

「うむ、おはようなのだー！ でも、まだ一機残ってるんだよねー
？」

テンション高めの束ちゃん登場。相変わらずうさ耳が可愛い
ですね！

……よし、落ち着こう僕。なんか目が覚めてからテンション高い
ぞ。

さて、と。でもまだ一機残ってる。うん、どうするか。

そんなことを考えていたとき、一夏の声が飛び込んできた。

「おい、テレビ見てみる！」

「陛下！」

「わかつている。街の者の避難は終わったか？」

「まだ半数以上が残っています！ それと、メディアは避難勧告を無視しているようで……！」

「彼らなりの維持と矜持だろう。が、軍を使つてでもここから脱出させろ」

場所はイギリス。

バッキンガム宮殿内では、国王ウィリアム五世と複数の政治家が顔を揃えていた。

彼らの見ているディスプレイに映っているのは、イギリス上空に浮遊するファントム。その主砲には、ゆつくりと、だが確実にエネルギーが集束していつているのが見える。

万が一の場合に備え この場合はその万が一が極高い確立にまで上がってきているのだが イギリス国内、特にロンドンにいる者たちを避難させているが、それもあまりはかどつてはいない。

忌々しく睨みつけるものの、イギリス国内のISでまともに戦える機体は全て無人機に阻まれ、例え到達しても主砲の発射までに破壊するのは困難を極めるだろう。

しかし、だからと言って逃げ出すわけには行かない。最後の一人が脱出するまで、ウィリアム五世はここから立ち去る気などなかった。

たとえ、その結果その身が吹き飛ばされようとも。

「……ロンドンの壊滅は、必至か」

「アレを止める戦力がここにはありません。残念ですが……」

「……いや、人がいれば、建物などまた作り出せる。誰一人として犠牲を出すな」

今後を憂いながらも、それに甘んじることなく五世は告げる。

そのとき、バッキンガム宮殿の最奥、玉座に繋がる扉がそつと押

し開けられた。そこを通るものなど、もう残っていないはずだと言
うのに。

「何者だ」

力なく問うた五世の言葉に答えることなく、その者は静かに彼の
前まで歩いていく。

金色の髪をもち、蒼と紅で彩られた無地の白いドレスを纏った彼
女は、小さく礼をしてから口を開いた。

「お初にお目にかかります。セシリア・オルコットと申します」

「オルコット……、候補生のセシリア・オルコットか！」

「はい。わたくしの友人が、あのデカブツを破壊致しますので、心
配はありません」

にこり、と笑ったセシリアは、ディスプレイを表示させて映像を
映し出す。

そこには、ファントムを眺める一人の少女の姿があった。

鞘に納められた刀を腰に携え、赤い和服姿の少女、篠ノ之箒はた
だファントムを見据えている。

「この、少女は……？」

「篠ノ之箒。わたくしの最愛の方にして、これより我が祖国イギリ
スの助けとなる者」

「東博士の妹という、あの少女か……。しかし、どうやってファン
トムを？」

「ただ見ていてくだされば結構ですわ。すぐに済みますから」

綺麗な笑みを浮かべながら、セシリアは箒に通信を繋ぐ。

「箒、発射までカウントダウンですわ。準備を」
『わかった』

その言葉を皮切りに、映像が乱れ始める。

見れば、徐々に紅い『何か』が箒を中心に渦巻きだしているのが分かる。

「さて、あのデカブツさんは、一体どこまで耐えられるのでしょうか……？」

にい、と頬を吊り上げて壮絶な笑みを浮かべたセシリアの目には、既に箒しか入っていないかった。

「さて、やるか」

闘気を噴出しながら、自らの相棒を呼び出す。

声に出さずとも、思わずとも、ただそうしようと考える前に、『

紅椿』は箒のその恵まれた長身を包み込んで行く。

○三秒かからずに展開を終えた『紅椿』の装甲を軽く撫でながら微笑むと、『紅椿』はまるで意思を表すかのように小さく振動し、紅いエネルギー光を漏らした。

箒は一年間の鍛錬の末、それまで度々出ていた紅いエネルギーがなんなのかを理解していた。

それは、IS本来のエネルギーが純粹化したもの。要するに、IS自身の稼動に必要な根元のエネルギーが駄々漏れしているのである。

それはまずいんじゃないか、と言う声もあるだろうが、残念ながら《けんらんぶつ絢爛舞踏》はまたちよつとおかしな方向に進化してしまい、そのエネルギーすら無尽蔵に増幅させ補給することが出来るようになった。

残念ながらこのエネルギーが発生するのは、箒と『紅椿』がやる気になったときだけである。箒の場合は闘気というところのことを指す。何せ、『紅椿』が待機状態であつてもお構いなしに垂れ流すのだから。

まだ装甲などの復元は無尽蔵と言うわけには行かないが、『紅椿』本体だけならば一国とやり合つてもおつりが来るどころの騒ぎではないレベルに強化されているのである。

無論、ファントムはそんなこと知る由もなく黙々とエネルギーを蓄えている。

ここで落としてしまえばいいのに、箒はそんな無粋な真似はするまいと静かにそこに佇んでいた。

ただただ、紅いエネルギーを自分の周りに吹き荒れさせ、笑みを浮かべてその一撃を待ち望む。

一年間、ただひたすらに技を磨き、己を鍛え続けてきた。そうしてようやくここへ来たのだ。

宮殿で己の事を見ているであろう愛する者に、無様な姿を晒す訳にも行くまい。むしろ、そんなことになればひっぱたかれて一喝されるのがオチだ。

そんなことを考えながら、箒は小さく笑いを零す。

「さて、そろそろか？」

声を発した直後、遙か上空が揺らぐ。

普通ならば見通せないそれも、ハイパーセンサーを持つてすれば確認することは容易い。尤も、今の箒はハイパーセンサーを使っていないのだが。

大気が揺らめき、地鳴りのように振動する。

雲を突き抜けて疾駆するのは、充填率が八〇%を超えた主砲より放たれた一撃。

たった三%で町ひとつを消し飛ばすようなそれが、その一六倍以上の力を持つて迫り来る。

それを見て、箒はただ、笑った。

「その程度で」

しゃん、と鈴の音が鳴る。けれど、鈴などどこにもありはしない。研ぎ澄まされた刃の奏でる音が、それに近かったと言っただけ。その音を奏でた《空裂》からわれは、既にその刀身に紅い光を纏っていた。抜き身のままで、左側に刀を構える。腰よりも低く、逆袈裟に切り上げる形になるように。

「チハイラワル
《空海断絶》

！」

そこから放たれた紅の斬撃は、迫っていた禍々しき光と一瞬だけ拮抗し。

けれど、それを裂き、突き進む。

裂かれたそれが大気と混じり消え去る中、ただ愚直に進む刃が、砲身を真つ二つに切り裂いた。

裂いた、しかしそれでは終わらぬ。

終わらせぬとばかりに、箒は次の構えを取る。

「篠ノ之流奥義」

音が響く。ISを纏ってでは初めて使うその成功を、しかし彼女は疑問に思うこともなく。

ただ純粹に、自然体にその身を構える。

篠ノ之流の奥義は、女性が使ってこそそのものだ。なにせ、その開祖は女性であり、女性が乱世を生き抜くために作り出した技なのだから。

だとすれば、それを男の身で使って見せた柳韻は、果たしてどれほどのものだったか。

それを、箒は知っている。見て、学んで、そして覚えて。

そこに至るまでの全て、とまでは行かずとも、片鱗程度ならば彼女にも知りえた。

「
ツルギ
刃」

『音』が、消える。

柔を持つて剛を薙ぎ倒し、剛を持つて柔を絡めとる。

まるきり正反対の目的を行うための技が、篠ノ之流最後の奥義。

篠ノ之流の剣術など、付随に過ぎない。

放たれたそれは確実にファントムの強固な外装を切り刻んでいく。

「終わりだ、デカブツ」

直後、その言葉に呼応するように、ファントムは無数の粉へと裁断される。

まさに、刃に切り刻まれるかのごとく。

『刃』とは、別の言葉に同じ意味を込めた技。ツルギというその言葉であるならば、あらゆる力が奥義となる。

であるが故に、奥義は決して一つに留まらない。あくまで、一人が使える奥義が一つであるだけだ。

柳韻が使ったツルギは『拳』、己の肉体そのもので相手を拘束す

るように、拳の内部に作り上げた真空を相手に『投げ』て圧死させる、出鱈目な技。あるいは、もう技とも呼べぬモノ。

しかし、箒のツルギは違う。

彼女は女性の細腕では出しえぬ『剛』、力そのものを『柔』によって作り出し、それを相手に叩きつける。『刃』の言の葉の通り、刀を用いて行われるそれは、相手を一瞬で塵へと化すほどの斬撃を伴うのである。

どちらにしろ、出鱈目であることに変わりはないが。

少なくとも、今この場においてそれを指摘するものはいなかった。

この日、イギリスには永久的に、『紅いサムライ』の言葉が語り継がれることとなるのを、今の彼女はまだ知らずにいた。

第119話 紅いサムライ（後書き）

箒とセシリアが帰還！

箒はまた一步人外への道を歩んでいるようです。

第120話 紅蒼（前書き）

注意！

この話は中盤からエロ描写が多分に含まれます！
あと作者の病気が発症しています！
十分に気をつけてお読みください！

第120話 紅蒼

「箒！」

凱旋のように、悠々とバッキンガム宮殿へ戻った箒を出迎えたのは、白に蒼と紅をあしらったドレスを身に纏ったセシリアだった。身を投げるようにして箒に抱きついたセシリアをしっかりと抱きとめ、箒は小さく笑みをもらす。

「ただいま、セシリア」

「おかえりなさい、箒」

言葉を交わすのもそこそこに、二人はどちらからともなく互いの唇を奪う。

それこそ、メディアの前でやっていればフラッシュの嵐が巻き起こることが目に見えているほどに、それは熱いものだった。

一通り互いの感触を確かめ合った箒とセシリアは、互いの手を握ったままでイギリス国王、ウィリアム五世の前に立つ。

「初めまして、陛下」

「篠ノ之箒君、だね。まずは国民を代表して感謝を。我々の国を救ってくれて、ありがとう」

「勘違いなさらぬよう願います。私はセシリアの祖国であるから、そしてファントムがアレしか残っていなかったから結果的に助けた形になったのであって、決してあなた方にこうして感謝されるために行ったわけではありません」

「それでもだ。助けてくれた恩人に礼もしないのでは、イギリス紳士の名が廃ると言うものだよ」

ありがとう、と。

五世はもう一度言って、それから玉座から立ち上がると、綺麗にお辞儀をして見せた。

箒たちに焦りはない。セシリアは少しばかり驚いたようだったが、それよりも焦ったのは周囲にいた政治家のほうだった。

「陛下、頭を上げてくださいませ。それほどのことではありませんわ」

「お前が言うのか？」

「貴女はもう少し社交的になつてはいかがですの？」

「お前がいるからな。必要ないだろう」

「まあ……」

うふふ、あはは、と気味の悪い笑い声を上げ始めたセシリアを傍目に、箒は改めて口を開く。

セシリアは放置である。こうなると、しばらく戻ってこないことを箒は知っていた。

「セシリアはイギリス所属、私は今のところこの所属にも収まっています。他国に頭を下げたわけではない分、不利にはなりませんでしょう」

その箒の言葉を聞いて、周囲の政治家たちが一斉に息を吐き出す。彼らからすれば、一国の象徴が助けてくれた恩人とはいえ一人の少女に頭を下げたのだから、内心の動揺を隠し切れなくても仕方ないだろう。

これがもし政治の駆け引きの場なら、相手が頭を下げたことをどう曲解されるか分かったものではない。

そういった点では、箒の言葉は安堵に足るものであった。

「それで、陛下。一つ私たちからお願いがあります」

「可能である限りは叶えよう。なにかな？」

「私たちは姉さん、東博士の元に合流するつもりです。ついては、合流後の東博士の一行への援助をお願いしたく」

「ああ、それぐらいならば容易いものだ。必ず叶えよう。他には何かないかね？」

「そうですね……では。今晚の宿を用意していただけますか？」

一体どんな要求が飛んでくるかと構えていたところにきたのは、
たったそれだけだった。

本当にそれだけでいいのかと聞いても、

「私が欲張るのは彼女だけです」

とだけ。無論、それを聞いたセシリアが頬を染めて簾にしな垂れ
かかったことは言うまでもない。

その様子を見ながら、朗らかに笑った五世は大きく頷いたのだっ
た。

「いい部屋だな」

あれから数時間が過ぎ、バッキンガム宮殿から秘密裏に移動した
私とセシリアは、ロンドンにある大きなホテルのスイートルームへ

案内されていた。

必要な道具は全てISの拡張領域に放り込んであるから、大して心配する必要もない。

一切サービスはいらないから、食事だけ知らせてくれと頼んでおいたから、邪魔が入ることもないだろう。

「ロンドンでも有名なホテルですし、当然でしょう。というか、貯金を使えばわざわざコネを使わなくてもよかったのでは？」

「どうせこれからコネは作れるさ。こんな世の中だ」

「まあ、そうですね。んっ……」

呆れ半分に言ったセシリアの唇を、半ば強引に奪う。

閉じていた唇を舌で割って開き、ぴちゃぴちゃと水音を立てながら。

目は閉じている。きっとセシリア、セシルもまた同じように。貪るように唇を奪い合う中で、私は片手をセシルの後頭部へ、もう片方の手を彼女の腰へと回していく。

同じように、セシルも片手で私の肩を、もう片方の手で腰を支える。

甘い、とても甘い味がする。息は次第に荒くなって、立つ音もどんどん大きく響く。

「第……」

「セシル……」

名前を呼び合う。それだけで、まるでのぼせた時のような感覚に襲われる。

唇を離し、大きく息を吸い込みながらセシルをベッドへと押し倒す。

彼女に馬乗りになった状態で服を脱ぐと、一糸纏わぬ姿でセシリ

アの首筋に口付けた。

少しだけ汗ばんだセシルの皮膚は、甘い中にも汗の塩気が含まれているように感じる。

「んんっ……、ほ、箒……！」

「ああ、わかつている」

耳元で囁いてやると、セシルの息がさらに荒くなる。それと共に、顔が紅潮して恥ずかしがっているのが良く分かった。

けれど、やめない。

セシルがこうなっているとき、本当に嫌なら身を擦って抵抗する。意地悪くにい、と笑ってやると、セシルは爆発しそうなくらい顔を赤らめる。

「どうして欲しい？」

「……意地悪ですわ」

「お前のせいだぞ、こんなにいやらしい体をしているから」

「箒だつて、胸が大きいじゃありませんか……」

「ふふ、顔でも挟んでやろうか？」

「……それもいいですわね……」

普段なら「嫌ですわ」だとか何とか言っただけで拒否するだろう言葉を、今日のセシルは受け入れた。

気分が高揚しているのか、それともファントムを落とした私へのささやかな褒美のつもりなのか。

まあ、どちらでも構わない。どちらかと言えばきわめてアブノーマルな方に傾いている私たちなのだし、どうあろうと関係ないだろう。

ちゅく、と下の泉に指を這わせると、そんな音がした。

「もうこんなになっっているじゃないか」

「あんっ、そ、それは、ひうつ！ ほ、箸がいやらっ、し、しいから、えすわぁっ」

双丘に片手を這わせながら、比較的過激に指を沈み込ませると、セシルの声は簡単にぶれる。

半年か、あるいはそれ以上の付き合いの私から見れば、彼女は酷く感じやすいのだ。

なんてことのない言葉でもあらぬ方向へと思考が飛ぶし、割と普段から、その、なんだ。危ない方へ思考が行っているときが多い。

「私がいやらしいか。なら、お前はそれ以上だな？」

「ッ！」

水音を立てて泉を掻き混ぜながら双丘を弄ってやると、足をぎゅっ、とちぢこませる。

一拍を置いて、セシルの荒い息が私の顔にかかる。潤んだ目が私を見つめていた。

「イツたのか？」

「はぁ……はぁ……、わ、悪いのですの？」

「いや？」

何か言おうとしたセシルの唇を自分の唇で塞ぎ、舌を入れて中を舐め回す。

温かくぬめるセシルの舌と私の舌が絡む。今度は、互いに目を瞑らずに。

「ぶはっ……」

離れた舌と舌を、銀色の橋が繋いでいる。

切れ掛かるそれを手で受け止めると、ついでに自分の唾液を手に垂らして、セシルの頬にぐい、と押し付けた。

「きゃっ！？ ほ、箒！？」

「乱暴にされるのも好きだろう？ 変態め」

「そ、そんな言い方 ！」

セシルの言葉が途切れる。

代わりに痙攣する体が、セシルがまた達したことを伝えてくれた。喋っている最中に掻き回しただけでも達するのは、今まででも初めてだ。随分と敏感になっているらしい。

「箒の、匂い……」

頬を染めてこちらを見るセシルが、すんすんと鼻を鳴らす。

すぐ近くに私の手を持っていくと、セシルは力なく舌を伸ばしてくる。

「なんだ、もっとして欲しいか？」

「……」

コクツ、と小さく頷くセシル。

その様子に、ごくりと私は生唾を飲み込んで笑う。

「いいぞ……、かわいいな、セシルは……」

セシルの顔を隅々まで舌で舐めつけながら、両手でセシルの双丘と泉を攻め立てる。

結局、その日は日が沈んでから三時間以上、累計にして六時間以上で、ようやく行為を終えた。

第120話 紅蒼（後書き）

セシリア匂いフェチになるの巻。

まともに書こうとしたらノクターン直行間違いなしですぜ。

セシリアの略称ってセシルでいいんかなあ？ まあ、この作品では
そういうことにしておいてくださいまし。

次回はまともに物語が進みます！

エロ、書きたかったんや……！

第121話 戦力増強

「箒！ セシリア！」

「久しぶりだな、一夏」

「お久しぶりです、一夏さん」

ファントムの前期撃破から数日。五月半ばのある日、束たちに合流した箒とセシリアを出迎えたのは一夏たちだった。

まだ二人がそんな中であると知らない面々だったが、その中でナターシャは目ざとく二人が手をつないでいるところに目をつける。

なぜ二人が、と思ったナターシャだったが、その繋ぎ方を見て末端ににんまりと笑みを浮かべた。

「へえー……、へえー、へえー！ あ、ふーん！ そっか、そーっかー！」

「な、なんですか……」

「……お幸せに？」

「ありがとうございます」

「……セシリアちゃん、お幸せに！」

「はい、ありがとうございますわ」

「なによ、弄りがいいがない！」

ぶんすかと怒るような仕草を見せたナターシャを見て、箒とセシリアは小さく笑みを浮かべる。

それを見て、出迎えに来ていた束もまたそれに気づいたのか、ずいっと前に進み出た。

「……箒ちゃん、この手は何かな？」

「何、と言つと？」

「なんで金髪と箒ちゃんが恋人繋ぎしてるのー！？　ずるいずるいずるい、束さんもするうーっ！」

「まったく……。姉さんは変わらないな。ほら」

小さな子供を見るような温かい目で束を見ながら、箒は空いている片手を束へと差し出す。

すかさずその手をとった束は、心底嬉しそうに指を絡めて手を繋ぐ。その様子を、セシリアもまた微笑ましそうに見ていた。

「そういえば、箒。お父様にはご挨拶しましたけれど、束博士……いえ、束お姉さまとお母様にはご挨拶していませんわよね」

「そうだな。姉さん、セシリアと結婚を前提に付き合うことになった」

凍りつく空気。集まる視線。

特に驚いているのは一夏とシャルロットだった。そりゃあ、いきなり「私たち結婚を前提に付き合ってるの」とか言われれば驚く。しかも女性同士である。驚かないわけがなかった。

一方で妙にテンションが上がっているのは『黒ウサギ隊』の隊長を除く面々。「百合？　百合なのねー！」とか「ふ、副隊長！　このばあいどうすれば！？」とか「う、うろたえるんじゃないッ！　ドイツ軍人はうろたえないッ！」など等の言葉が飛び交っている。特に一番最後は事実ドイツ軍人であるためあながち間違っていない辺りたちが悪い。方向性としてはだいぶん捻じ曲がっているわけだが。

「……ちーちゃんに続いて箒ちゃんまで……。！　私は何を糧に生きればいいのかー！？」

「別に私は家を出るわけじゃないぞ」

「……え？」

「私が第の元へ嫁ぐのです。オルコットの遺産や爵位を全部持つて」
「って、ことは？」

「姉さんに妹が増えるってことだな。良かったな、姉さん」

「……せっしー、君はせっしーだ！ よし、歓迎するよせっしー！」

「はい、よろしく願います、お姉さま」

うまく丸め込まれたような感じがしなくてもないが、とりあえず束の心の平穏は保たれることとなった。

「え、えーと……、お、おめでとう、でいいのか？」

「ああ。ありがとう、一夏」

「ありがとうございます、一夏さん」

「……なんか、なんかこれってどうなのー……」

うなだれるシャルロット。

恋敵だと思っていた二人がいつの間にかくつついて、現状その相手を狙っているのは自分だけになったことには、素直に喜べるだろう。

喜べる、はずなのだが、「いき遅れ」という単語が脳裏を掠める。慎重に、かつ迅速に一夏をものにして拳を握るシャルロットであった。

「よし、それじゃあ今日はパーティーだー！ もうファントムも潰したことだしね！」

「じゃあ、僕と鈴ちゃんと簪ちゃんて和と中を担当しますね」

「俺も手伝うぜ。シャル、洋食作れたよな？」

「うん。今から準備なら十分作れるね」

「束様、私は……」

ちよこ、と束の青いエプロンドレスの裾を引っ張る空。

その身に似合わず片腕で空を抱き上げた束は、ニコニコと笑って言った。

「空ちゃんたちは外の警戒よろしく！ ハルにも伝えておくから」

「はい、わかりました。……お帰りなさい、箒様」

「姉さん、この子は？」

「パーティーのときに紹介するよん。さ、皆やるぞー！」

「……おーっ！」「……」

青い海に、少年少女たちの元気な声が響き渡る。

ほんのつかの間の平和が訪れていた。

ちなみに、そのパーティーのときに香織が男だと知らされた箒とセシリアは、思わず口をあぐりと開けていたという。無理もないが。

「こんばんは、箒ちゃん」

夜を徹して行われたパーティーも終わり、興奮と喜びで火照っていた体を夜風に当てて冷ましていた箒の元に、その声は届く。

振り向いた箒は、小さく微笑む彼女を見て目を細めながら口を開いた。

「……一之瀬葵、お噂はかねがね」

「誰からかしら。私を知る者はそう多くはないけれど」

「私の父、篠ノ之柳韻。知っているでしょう」

「ええ。何度か剣を交えた覚えがあるわ」

その場から動かずに、ただ言の葉を漂わせる葵。

穏やかなれど物々しいその佇まいに触発され、箒は拡張領域から一振りの刀を抜き出した。

「『あけよい緋宵』……、いえ、違うわね。それよりもさらに長く、鋭い」
「父の持っていた『ひのもと燈源』と『緋宵』の刀身を溶かし、混ぜ、父が打った刀です。銘は付けていませんが」

『緋宵』も『燈源』も篠ノ之神社に奉納されている刀剣であり、そのうち『緋宵』は箒が継いだ刀である。

通常の刀よりも細く長く作られ、なによりも抜刀術に特化した作りとなっているそれとは別に、神社に収められていたもう一振りである『燈源』もまた、同じ者が打った刀である。

しかし、語られているように受け流し、密着して放つ刃としては向いていない。それは、その刃が『女性のために作られた刃』ではないからだった。

そも、『緋宵』よりも『燈源』の方が歴史は少々古く、あかるぎよう明動陽という刀鍛冶は元々『刀』というそれ自体の元々、言葉のもつ意味のようなものを目指して刀を打っていた職人だった。

彼が女剣士と契るまではそういった刀を作り続けていたのだが、契った後はただ女が振るうための刀を作り続けた。

その彼の、今までの『刀』を捨てる間際に打った最高傑作が『燈源』なのである。

全てが『刀』そのものを表す、まさしく至高の一振り。それを継いでいたのが柳韻だった。

「いい刀ね。……打ち合いませんか」

「ええ。お話を聞いてから、ぜひ打ち合いたいと思っていました」

頷き、互いに笑みを交わしてから甲板へと場所を移す。

その間に箒はもう一振りの刃を、葵も《ブレード》を手にしていた。

「二刀流、それが貴女本来のスタイルってわけ？」

「元よりこの形で鍛錬していましたから。合図は？」

「いないでしょ。 私たち人斬りには、ね」

ぞわり、と。

箒の肌を夜にしても冷たすぎる冷気が襲う。

それが葵の闘気だと判断したのは、鳥肌の立つような金音を上げて《ブレード》と左の小刀が鏝迫り合っているのに気づいたときだった。

「くう　　ッ！」

バキヤツ、音が鳴る。それも、刃を受け止めた小刀を手にしていた左腕から。

強烈過ぎる打ち込みに耐え切れなかったのか。自問して、そら恐ろしさを感じる。

驕っていたわけではない。だが、少なくともこれほど強大な相手だと自覚していたか？ 否、否。

「　　オ、オオ　　！」

空気が振動する。

今更になって闘気が噴出し、肌を舐める冷気を押し返して行く。

手加減してもらえんでも思っていたか、たわけめ。
骨が折れている左腕を振るい、《ブレード》を弾き返す。その刹那、右に握られた無銘の刀が唸る。

「遅い」

受け止められた。

だが、それでは止まらない。止まらない　　っ！

「オオオオオおおおおお！！」

咆哮と共に左の小太刀、『朧月』^{もうげつ}を真っ直ぐに突き穿つ。
喉元目掛け放たれた一撃を、葵はあろうことか指を添えるだけで逸らしていた。

刃に、指をである。いい加減人間名乗るのをやめて欲しくなるレベルだったが、真剣勝負の二人には関係ない。

刃の向きを変え、逸らされた『朧月』で再び切りかかる筈だったが、

「まだまだね」

「ガッ、あ　　！」

パパン！　と高い打撃音が二度響き、口から血を吐き出して筈が吹き飛ぶ。

あまりのスピードに目が追いつかなかったが、顔面に二発、腹部に三発打ち込んでいた。音がまったく同時に聞こえる速度での複数個所への打撃である。

少し飛ばされてから崩れ落ちた筈は、必死に肺に酸素を取り入れていた。

「はあっ、はあっ……！」

「大丈夫？」

「え、ええ……。しかし、まだまだ私では足元にも及びませんか」
「筋はいいわよ。鍛錬あるのみね」

軽口のように言葉を交わす二人だったが、先の一連の流れは三秒未満で行われたものである。

箒もいい加減人間をやめてきているようだった。

第121話 戦力増強（後書き）

『朧月』はまた後で解説はあります。

これでも筈は強い方。本当の強者と、勝てないまでも互角に戦えるレベル。

ちなみに負傷はナノマシンで治しました。

次回はまた動くことになりそう、かな？

第122話 穏やかな一日

パーティーから少し日が経って、アタシたちはつかの間の平穏を噛み締めていた。

……まあ、ちょっとばつかし悔しいって気もするけど。
アタシだけが二次移行してないし、戦力も増強してない。ナターシャだって同じだろうって思うけど、けど元の体力だったり技能だったりが違う。

「……アタシ、一番最後だなあ」

わしゃわしゃと髪をかき乱して、小さく溜め息を吐く。

手首のブレスレット状態になっている『甲龍』を撫でながら、どうすれば二次移行できるのかと考える。

でも、考えたところでその答えが出るはずなんてなくて。
そこでふと思いついた。

「なら、二次移行してる連中に聞けばいいじゃない！」

どんな風な感じなのか、少なくとも意見は聞けるはずだ。

えっと、今二次移行を終えてるのは香織、一夏、ラウラ、セシリアの四人よね。他の連中はいろんな所で私とは違うけど。うん。

さて、決まったなら早速行動ね。

まず向かったのはセシリアのところ。彼女が一番早く二次移行したわけだし。

「セシリア、いるー……う……？」

言葉が途中で途切れる。

そりゃそうだ。中で箒がセシリアに跨って唇を奪ってたんだから。

「んっ、ほ、箒、鈴が」

「すまんな鈴、先約だ。急ぎでないなら」

「し、失礼しまひひゃっ!？」

慌てて扉を閉めて後ずさる。……扉を閉めても声が響いてくる。

ドンだけ激しくやってるのよ。

っていうか噛んじやったし。真昼間からあ、あ、あんなことするんじゃないわよ、もうっ！

「……虚しい」

アタシだつて、香織とあんなことやこんなことしたいけどさあ。

今の香織の体的に無理だし。無理させたくないし。

はあー……。

「……いいや、一夏なら暇でしょ」

溜め息を吐きながら一夏の部屋へ移動する。

アレ見ちゃうと、さすがにもう一回聞きに行くのもなんだかねえ。

……恥ずかしいし。

っていつかあの二人、この一年半で何があったのよ……。いや、聞いたら藪蛇そうだからやめとくけどさ。

「一夏ー、いるー?」

っつーかいなかったらぶん殴るけどね。

なんてアタシのうさ晴らし案も虚しく、中から「おーっ」と声が返ってくる。……さすがに昨日の今日で一夏まで誰かとくっついて

たりしたら処刑モノね。うん。

「おう、なんだー、って鈴か」

「なに、悪いの？」

「そうじゃねえけど。なんか用か？」

「用があるから来たんじゃない。ほら、お茶でも淹れなさいよ」

「はいはい。緑茶でいいよな？」

「うん」

手際よく緑茶を入れる一夏を見ながら、近くにあった椅子に腰掛ける。

「ほれ、熱いぞ」

「ん、サンキュ」

幼馴染独特の付かず離れずな距離感。こいつは鈍感なくせに妙に気が利くし、女からすれば有料物件間違いなしだろう。家事は一通り出来ることだし。

香織がいなかったら、一夏にでも惚れてたのかな、アタシ。……うーん、あんまり想像できないかも。

一夏からは栄養が補給できなさそうだし。ほら、カロリーニウムみたいな栄養が。イチカリウムとか？

……カリウムの仲間みたいになってるわね。ニカリウムとかもあるのかしら。

まあ、それはともかくとして。

「一夏。ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ」

「なんだ？」

「『白式』って二次移行してるのよね？ したときってどんな感じだったの？」

「なんだよ急に」

「いいから。答えなさいよ」

「んー……、なんつっーんだろぅな。ISのコアって人格みたいなものがあるって、習ってるだろ？」

「そうらしいわね」

「その人格と話したんだよ」

どこのSFファンタジーだそれは。あれか、聖剣を引き抜くためには聖剣の精霊を認めさせなければなりませんとかなんとかかにかか？

……いや、落ち着きなさい凰鈴音。そもそも一〇年ちよつと前だったらIS自体有り得なかつたんだし、有り得ないってことはないわ。

「……で、それだけ？」

「おう」

「……そう。ありがと、それじゃ！」

「は？ お、おい？ 鈴？」

少しだけお茶を飲んでから一夏の部屋を出る。うーん、やっぱりよくわからないわ。

よし、次はラウラのところに行ってみましょう。

ということでラウラの部屋に到着。三回ノックしてから声をかける。

「ラウラー？ いる？」

「鈴か。開いてるぞ」

「じゃ、お邪魔するわね」

中に入ると、そこにはナイフやらランタンやら時計やら、ドイツ

製の製品やそうでないものが棚に納めて陳列されていた。

ラウラの宝物、増えたわね……。うんうん、いい兆候じゃない。

「で、ラウラ。ちょっと聞きたいんだけど。二次移行したときってなにかあった？」

「なにかとは、どういうことだ？」

「一夏が、ISのコア人格と会話したーと言ってるんだけど」

「私もしたぞ。あれは、一種の通過儀礼らしいな」

「ってことはまじか……。いよいよもって機械じゃないわね、IS」

……。私もいつか、ISの声が聞こえる日が来るのかな。

あ、香織のところには行かないことにした。今日は簪とリハビリだっと思って出したから。

香織のリハビリのアシストには、アタシとラウラ、そして簪が交代で入っている。だから、邪魔したら悪い。

アタシたち三人は平等に戦うべきなのよね。香織は、争うことを望んでないから。

相手のことを考えずに愛するなんて、そんなの嫌だから。

「……だーっ！」

「な、なんだっ！？ どうした鈴！？」

「なんかもやもやしてきたから束社長のところ行ってくる！」

「お、おう……？」

困惑気味のラウラを置き去りに、またもや駆け出す。

束社長の部屋は随分下の方にあって、行くだけでも一苦労だ。

階段を三つ四つ下りて、その先。ちょっと重い扉を三回ノックする。

「はぁーい？ りんちゃんだね、入っておいでー」
「邪魔します」

中に入ると、無数の金属製のリスが辺りを駆け回っていた。ゴミと判断したものを食べて、元の資源にリサイクルする超優れもの。私も一台もらってる。

それを踏まないように避けながら、束社長のところへ。

「社長、今何してたの？」

「新しいISの設計だよん。あーちゃんにもそろそろ作ってあげないかねー」

あーちゃん、葵義姉さん。将来的にはアタシたちの家族。

あの人の強さはそこが知れない。生身でISに打ち勝つってどういう体してるのかしら。

っていうか、ファントムの外装の一番脆い部分をぶち抜いたと言っても、まともにやって傷一つ付かないあの外装に人間の腕力で穴空けるのよ？ 信じられる？

「……葵義姉さんにISっているの？」

「宇宙に出られたらさすがのあーちゃんも戦えないからねえ。あーちゃんに耐えられるISを作ってあげなきゃ」

「凄いのができそうね……」

「ま、いつ出来るかは不明だけどねー」

にしし、と笑う束社長。

……そう言えば。

「ねえ、社長。箒にくっついてなくていいの？ あんなに寂しがってたのに」

「……私はねえ、まだ箒ちゃんに酷いことしたお詫び、してないんだ」

「酷いこと？」

「私のせいで見ず知らずの人間が死のうが悲しもうがどうでもいいけどね、箒ちゃんの思いを踏みにじったことだけは、まだ謝れてないんだ」

その口ぶりからすると、どうやら社長が言っているのはISが出てきた当時の話らしい。

今東社長は二五前後、年齢的にはまだ中学生だ。人の気持ちが分からなくなつて、責められるような歳じゃない。

だけど、この人は半端に分かつてしまうから背負い込んでるんだ。……きつと、今の箒なら笑い飛ばすでしょうけど。

「……よし、じゃあ今から箒のとこ行つてきなさい！」

「え？ む、無茶振りは良くないよりんちゃん！？」

「無茶でもなんでもないわよ。どうせこれが片付いたらごり押しして一緒に住むんでしょし、パパツと懸念事項は片付けてきなさい！」

「でも、でもおー……！」

「いいから行きなさい、篠ノ之束！ うだうだ言つてると、言えなくなるんだつてあるんだからね！」

東社長の肩を掴んで、半ば叫ぶようにそう言った。

思い出していた。離婚して離れ離れになつてしまつた両親のこと。あんな辛い思い、もう誰にもして欲しくないから。東社長は知らないことだけだ。

「……うん、わかつた。明るく激しく元気よく、ウサギ印の束さんだもんね！ 行つてきまつす！」

笑みを浮かべて走り去っていった社長の背中を見ながら思う。
そのキャッチフレーズは初めて聞きました。

第122話 穏やかな一日（後書き）

朝からいちやつく筈とセシリア、もやもやする鈴。
そしてまた一歩前進する束さんでした。

第123話 開戦

その放送は、正午丁度に流れ出した。

『全世界の人間諸君、元氣かな。先日 của フアントムでの一斉攻撃は失敗に終わったが、元々あの程度を退けられないようなら君たちに価値などない。篠ノ之束の率いている者たちが、この世界では最も武力に優れているようだ。嬉しい限りだ』

パチパチと拍手の音が流れる。

艦内でその放送を見ていた者たちは、思い思いに苛立ちを露わにしていた。

『さて、何も私はこれを言うただけにこの放送を流しているわけではない。君たちと、一つゲームをしようと思ってね』
「ゲーム、だつて？」

巖隆の声に反応したのはK・K・だつた。

そして、それに応えるように岩隆の声が続く。

『内容は簡単だ。これから私の潜伏先を君たちだけに教える。君たちは私の元へ攻めてもいいし、攻めなくてもいい。ただし、君たちが攻めてきた場合はその時点で世界中に配備している残りのファントム、全五〇機を一斉起動させることになる』

その言葉に、幾人かは息を呑む。

五〇機、以前の襲撃でも一〇機余りだった数が、約四倍に膨れ上がっている。

攻撃すれば世界を吹き飛ばす、とでも言っているつもりだろうか。

否、事実そうなのだろう。

「ふざけたこと抜かしやがって……!」

「けど、やれるってところがやなとこよね。束ちゃん、どうするの？」

「もちろん突っ込むに決まってんじゃないん？ 残らずぶっこわーす！」

「さっすがクイーン、そこに痺れる憧れるウ！」

なぜかベルが異常にテンションが上がっていたが、全員スルーすることにした。いちいち気にしていたら精神が持たないのである。

『では、君たちとのゲームを楽しみにしているよ』

ぶつりと通信が切れる。

その直後、K・Kの前のモニターに座標データが送りつけられてきた。

「こいつが、その位置ってわけかい。クレイマン」

「立体データに移し変える」

キーボードを操り、即座に立体データを構築したクレイマンが、艦内にいる全員のもとへとそのデータを送る。

そして、一時間後。一行はISを身に着けてその場所へと移動していた。

エベレスト、ヒマラヤ山脈に属する地球で最も高い山。その山をがつつりとえぐって、その基地は山の内部に作られていた。

「こんなところに作るって、どういう考えしてるのよ……」

「まあ、人目には付かないよな。こんなとこ」

鈴のばやきに一夏が返す。その言葉に、幾人かは軽く頷いた。

基地攻略に赴いているのは香織、一夏、鈴、箒、セシリア、シャルロット、ラウラ、簪、ナターシャの九名である。

葵も行きたがってはいたのだが、フライト・ボードや飛行戦闘用に束が開発した『ジェットパック』では閉所での高速戦闘には対応できないため、出てくるであろうファントムの撃墜に回ることとなった。『黒ウサギ隊』はそのサポートである。

『巖隆を捕縛して、そこを吹き飛ばしてきて。それが最大の目的だよ』

「わかってるよ、束ちゃん。任せといて」

「負ける気しないわねー。全力でぶち当たりましょうか！ おねーさん頑張っちゃうわよー！」

「張り切りすぎないで……。ミスする……」

「喋るのもいいが、そろそろ行かないか？ これ見よがしに扉も開いているのだから」

刃を抜き、箒が好戦的な笑みを浮かべて巨大な扉、というかハッチを指し示す。

その箒を横から見つめていたセシリアが少し頬を紅潮させていたのを、ほとんどの者が見なかったことにした。

「それじゃ、行こうか！」

六枚の羽を広げ、先陣を切ったのは香織。

それに続き、続々とそれぞれが獲物を構えて突撃していく。

戦いが、始まった。

「ファントム出現！ 数は……、一〇機！？ こちらで確認できるだけで一〇機です！」

「候補生を後続に、代表を出撃させなさい！ 特殊砲弾はまだ出来ないの！？」

「急ぎ調整に当たっています！ もう少し時間があれば！」

「とにかく急ぎなさい！ 時間がない！」

「りよ、了解！」

中国の前線基地。最終防衛ラインとなるそこで、楊麗々とその部下の声が響く。

ファントムの出現を確認した彼女たちは、上からの指示を待たずに攻撃を行うことを決定した。

前回のファントム出現の際には上層部が揉めた上にIS委員会の介入のせいでまともに戦えなかったのだ。せいぜいがファントムの外装のサンプルを手に入れた程度。

楊本人の伝を利用してそのサンプルは分割され、各国に流された。そうでもしなければ、IS委員会の介入でまともに身動きが取れないせいだ。

「委員会は一切何を考えている……！ ISの没収に全指揮系統の剥奪など、認めるものか」

ぎり、奥歯を食い縛る。

幸い、外装のサンプルを取得できたのは中国だけではなかったため、流通はそこまで大規模にならず、気づかれずに済んだ。

各国の軍部から続々と秘匿回線でファントム出現の報せが舞い込んでいる。楊たちは知らないことだが、それは、香織たちが基地へ突入した直後だった。

「鳳鈴音……、貴女も今戦っているのでしょうか……」

一時期とはいえ、かつての教え子が命を賭して戦っている。そして、今も自分の部下、同僚、上官、その全てが自らの命を賭けて戦っている。

自分だけが弱音を吐くことだけは決してあつてはならないと、楊はそう自戒した。

現在、軍では各国が共同で秘密裏にファントムの外装を破壊できる兵装を開発している。既に使用のための調整段階に入っているため、使用できるのは時間の問題だろう。

手元の端末を操作して、あるところへ通信を繋げた。

「聞こえるか、ボリス」

『おう、ばつちりだぜ。長らく使ってなかったおんぼろ端末でも、やれば出来るもんだな』

通信回線の向こうから聞こえてきたのは男の声。

ドイツ軍での楊との相互協力関係にあるボリス・ダーヴィット中尉。

「不調があつても気にするな。今のハイテクではそいつの電波は拾えん」

『化石もんだぜ、こんな。で、指令は？』

「もつじき特殊砲弾が完成する。準備を」

『了解だ。つつか、その特殊砲弾って名前何とかなんねーのか？
ダサすぎんぞ』

「ならそっちで名前でも付けろ。いつでも飛べるようにしておいてくれ、搬送にはこちらのISを使用する」

『ミサイル搬送にISかよ……。いつからISは戦争の道具になったんだ？』

「このご時勢だ、みな覚悟しているさ。分かっているのは上の連中だけだ」

途端に、向こうからけらけらと笑う声。

『そりゃそうだ。んで、確認事項はなにかあるか？』

「そちらに現れたファントムは何機か、確認できるか？」

『こつちもそれで揉めてたときさ。無論、上の連中がな。確認できているだけで八機、まともにやりあって勝てる相手じゃあない。こつちから手を出さなきゃ余計なことはされないだろうが、厳戒態勢真っ只中だ』

「わかった。また調整が終わったら連絡をいれる」

『あいよ。生き残ろうぜ』

「ああ」

通信が切れ、また喧騒が戻ってくる。

「……生き残る、か」

ISが出てきたときから、いつかこうなるような気はしていた。ただ、考えなかっただけで。

だが、それがどうした。いまさら何を言っただってもう遅い。後は自分が出れることをするだけだ。

「……よし」

頬を張り、立ち上がる。

戦いは、まだ始まったばかり。

「……そうか、あのミサイルの完成が間近か」

「はい。あれが完成したとなれば、戦局は変わります」

「だろうな。……そして、戦争もまた始まる、か」

アメリカ、ホワイトハウス。合衆国大統領、エドワード・パーソン。二〇四一年一月二〇日に第六四代目アメリカ大統領に就任し、二度目の大統領として今尚健在である。

そのエドワードは、大統領になる前は空軍に所属していた。

若い頃の夢であった戦闘機乗りになったのも束の間、ISの登場によって幕を下ろされた戦闘機乗りや軍の人間の圧倒的な支持を受けて大統領へと上り詰め、その後も国民の生活を第一に考えた政治で民衆の大半の支持を得ている珍しい政治家だった。

しかし。

「……私も、空へ上がるか」

「大統領、何を？」

「ようやくまた私たち戦闘機乗りの舞台の幕が上がるのだ、じっとしているというのは酷ではないかな？」

「……あなたは、そういう人でしたね」

最初からずっとエドワードを支えてきた女性秘書、アリエルはそう呟いて小さくかぶりを振る。人の目がないからこそ出来る、ちょっとした戯れ。

しかし、エドワードの目は本気だった。

「ミサイルが届き次第全軍に通達。狼煙を上げるぞ」
「了解」

世界中で起こる変化の波。

その波に乗るのは、果たして誰か。

第123話 開戦（後書き）

また捏造される偉い人たち。アメリカの人ドイツの人モデルなんていけません。

さて、次回からはゲームの始まりです。お楽しみに！

そして皆さん、良いお年を！

第124話 眠りの神（前書き）

皆さん、明けましておめでとぅございます！
今年もよろしく！

第124話 眠りの神

「はあああああつ！」

「うおらああああ！！！」

「チエストオオオ！」

「斬り捨て御免ッ！」

「はあ　　ッ！」

香織と一夏、鈴、箒、簪の音が響き、黒の群れを薙ぎ払う。

その残骸を踏み越えてやってくる者たちを、後方からの支援砲撃の嵐が襲った。

「Silver Wing Bell
《銀の翼の奏でる鐘》！」

「《ウン・ハイル・ドルン》！」

「《ブルー・ティアーズ》、散りなさいっ！」

「全弾、もって逝けえええ！」

銀と蒼の嵐、エネルギーブレードと実弾の一斉掃射。

吹き荒れる暴風によって粉みじんに吹き飛んだ第二波の向こう側から、さらに第三陣が襲い来る。

今までの比ではないその圧倒的な物量に辟易としながらも、おのおのが広範囲に効果の及ぶ武装か、或いは強力な近接武装でもってそれを蹴散らしていく。

「この縦穴、一体どこまで続くんだろう？」

「さーね。けど、少なくとも楽には進ませてもらえなさそうよ……」

「！」

鳴り止まぬ轟音と金音。

それに混じって香織の個人秘密匿通信にそう返した鈴の目線の先。そこには、散ったはずの姿があった。

「ローウェン……!」

「やはり来たか。止まれ!」

鳴り響いた声に引き戻され、ガクン、と全ての無人機の動きが止まる。

ローウェン、自爆して散ったはずの彼が、そこに敢然と立ちはだかつていた。

「話は聞いているだろう。ゲームにはルールがなくてはならない。二人残れ、そして私と戦え」

「ここでアンタをぶっ潰せば、それで済むわよね」

「そうした場合、ファントムが一斉に主砲を発射することになる」

「……選択の余地なしってことだね」

彼の言葉に、シャルロットが歯噛みする。

その言葉通りならば、もしここで全員がローウェンを倒したとしても、世界は滅茶苦茶にされるということだ。

なにも世界のために戦っているわけではないが、かと言ってせつかく守ったものをまた破壊されるのは御免こうむる。

特に正義感の強い一夏やシャルロットは、その事態を決して見過ごすことは出来ないだろう。

そのとき、しばし目を閉じていたセシリアが口を開いた。

「 第」

「ああ。私とセシリアが残ろう。他の者は通すのだろう?」

「無論だ。……強くなったようだな、セシリア・オルコット」

「ええ。貴方に負けてから、ずっと強くなりたいと願い、鍛え続け

ました。もう、負けるつもりはございませんことよ?」

「よかるう。ならば通れ。しかし気をつけろ、この先にもまだ壁は残されている」

その言葉の真意を読み取り、ナターシャは軽く眉を顰める。

壁とは、おそらく彼自身のことだろう。そして、死んだはずの彼が生きていると言うことは。

「グリムに、アルファ。あの二人もいるってことね」

「そう言う事だ。さあ行け、あまり時間はないぞ」

「オーケー、タイムアップ前に親玉とっ捕まえるわよ、皆!」

先を指し示したローウェンに背を向け、いの一番にナターシャが飛び去る。

皆がそれを追っていく中、一夏だけが振り返る。

「箒、セシリア! ……必ず追ってこいよ!」

「……ああ、無論だ」

「お任せください」

笑みを浮かべて言い放った二人を、尚も心配そうに見ながらも、一夏は後ろを振り向かずに飛び去る。

といっても、そんなことをせずともハイパーセンサーによって三六〇度、あらゆる視界を獲得できているため、それは雰囲気の問題だったのだろう。

全員が先へ進んだことを見届けた三人は、即座に闘気を噴出させる。

空間すら軋ませるほど濃厚な闘気の中、それぞれが戦いの構えを取った。

「行くぞ、『紅椿』」

「行きますわよ、『ブレイブ・ティアーズ』」

「永久の眠りを……。『ヒュプノス』！」

紅と蒼、そして黒の影だけ残り、その姿が掻き消える。

近接戦闘に特化するように進化した『紅椿』と、その僚機足るべく成長した『ブレイブ・ティアーズ』は、調整を施され一二〇%以上の性能を引き出されている『ヒュプノス』の速度にも対応出来ていた。

繰り出される四肢の猛攻を刃でいなし続ける筈を、蒼の光弾を操るセシリアがサポートしていく。

筈はもちろんのこと、『ヒュプノス』と直接戦った経験のあるセシリアですら、相手の性能がどれほどなのかは理解できていない。それほどまでに圧倒的な力を見せ付けられたのだから。

しかし、今は違う。その証拠に、『ヒュプノス』を操るローウェン相手に、二人は互角以上の戦いを見せていた。

「ふうっ……！ はああああああ！」

「その程度 ツ！」

「甘いすわよ！」

反撃に打って出た筈の一撃を完全に受け止めたローウェンへ、花開くように散った無数の光弾が殺到する。

幾分かを叩き落しはしたものの、防御の状態から即座に反撃に移れずに大きく装甲を削られてしまったローウェンは、面白そうに頬を吊り上げた。

「やれるようになったな。それでこそこの力を解くに相応しい……。見届けろ、そしてその目に焼き付けろ！」

「何を ！？」

セシリアの言葉は最後まで続くことはなかった。

『ヒュプノス』から黒いエネルギー光が稲光のように走り、それに続いて流れ出る流体のような黒いエネルギー。

「セシリア、下がれ！」

「え？ が、あああああ！？ あ、あ、かはっ、う、ぐう

……！」

実体はない。けれど、それから肌の粟立つような感覚を感じ取った。箒は咄嗟に声を上げた。

しかし、それよりも早くセシリアの足元に辿り着いたそれは、まるで自らが搾り出したようにセシリアに痛々しい悲鳴を上げさせる。

「私のコア、『ヒュプノス』の単一技能^{ワンオフ・アビリティ}、『ソムヌス』。痛覚神経を数百倍から数千倍に強めるエネルギーを放出するものだ。私を殺せば痛みは終わる、殺さぬ限り、死ぬまで続く痛みだ。尤も、最後には脳が痛覚神経を遮断し、痛みのないまま死に至るが」

「そ、そういう、ことでしたの……」

「……驚いたな。喋れるのか。息をするだけでも激痛が走っているだろうに」

「痛いのに、は、なれて、いますから……っ」

「セシリア、無理をするな。ここは私が片付ける」

「ほう、き……」

闘気、というよりも最早怒気を溢れ出させて箒がセシリアをかばうように前に立つ。

箒にも押し寄せてきた《ソムヌス》のエネルギーは、その箒と『紅椿』から発せられる紅のIS起動用エネルギーによって押し戻されている。

それを見て、ローウェンは興味深そうに頷いた。

「なるほど、そこまでISと一体になれるか。では、いざ！」

「斬り捨て、御免ッ！」

直後、黒と紅の閃光が交差した。

「……来たか」

基地の最深部、小さな書斎のような場所で、巖隆は呟く。
その傍らには、一人の少女が立っていた。

「我が主、創造主。我々の出番はいつでしょうか」

「急くな。じき来る」

「ハッ」

家臣のように片膝をついて礼をすると、少女、ツヴァイは嗜虐的な笑みを漏らす。

「ふ、ふふ、ふふふふふ、あははははははは！」

「うるせえよチビ」

「あら、こんにちはグリム様。ご機嫌いかが？」

「テメエの笑い声が聞こえなけりや最高だったな」

どこからか現れたグリムは、近くにあった椅子に身を預けると、拡張領域からワインを取り出してラッパ飲みしだした。

普通の人間なら酔いが回りそうなものだが、作られた人間である彼らは内蔵機能のある程度自分で制御できるため、酔ったまま戦闘になる事はないだろう。

それを眺めながら、ツヴァイは踵を返して部屋を出て行く。

残されたグリムは、軽く笑みを零しながら口を開いた。

「親父殿、今回は一之瀬葵は来てないみてえだな」

「ああ」

「残念じゃねーのか？ 娘だろ？」

「葵は、舞台が整ったときに招待するとも。お前は気にすることはない」

「くくつ、はいよ。さて、楽しむぜエ……」

空になったワインボトルを握り潰したグリムは、その残骸を拡張領域へ放り込むと姿を消す。

後には、巖隆だけが残された。

第125話 死神

基地の中には、飛行音だけが響いていた。

七機のISが進むそこは、伽藍堂という言葉が似合いそうなほどに何もない。

ロボットアニメで機動兵器が納まっているコンテナから、機動兵器だけを消し去ったら、丁度同じ光景が見られるかもしれない。そんなさびしい場所。

《戦闘特化型》コンバットタイプも《守護特化型》ガーディアンタイプも、《獣型》ビーストタイプすらいらないそこを進む者たちは、皆一様に緊張した面持ちだった。

「……大丈夫、だよな」

呟きは、一夏のものだった。

残してきた筈とセシリアの身を案じてのことだろう。しかし、一夏以外の全員が勝利を疑っていなかった。

否、一夏とて疑っているわけではない。ただ、彼女たちが傷つけられることが嫌なだけなのだ。

「大丈夫よ。あの子達も強いもの」

だから、ナターシャは努めて軽い調子でそう返す。

明るく楽しく、そうなるように言葉を選んで、そう言った。

その言葉が終わった直後か。

「おおーっと、ここから先は交通規制だよ？」

明るい声が響く。それと共に現れた影。

声の調子はさっきのナターシャとよく似ている。

しかし、そこに含まれているのは他者を安心させようという気遣いではなく、ただの嘲り。

その言葉を放った少年、アルファは漆黒のIS『タナトス』を纏い、《デスサイズ》を構えた状態で佇んでいた。

「アルファ……！」

「随分頭数を揃えてきたねえ？ まあ、どうでもいいんだけどさ。ここにも二人置いてってもらうよ」

「アタシが残るわ。ぶっ潰してやる……！」

「僕も残るよ。幸い、高機動タイプじゃなさそうだから」

ルールを提示したアルファの言葉に答えたのは、鈴とシャルロット。

近距離戦を得意とする鈴に対して、シャルロットは全距離対応型。接近すれば《デュノア・オルグイユ》による捕縛及び一撃が、離れば各種重火器による集中砲火が襲い掛かる。

なかなかハードな組み合わせだったが、相手が相手なために油断などできるわけもない。

他の者も異論はなく、ただラウラだけが声を上げた。

「……待ってくれ。私が残りたい」

「アンタは香織たちと先に行きなさい。ここに残ってる中で、箒とセシリアほど圧倒的な戦力を持つてる奴はいない。なら二次移行してない中で一番弱い奴から残って、大将に出来る限り強い手をぶつけるべきよ」

「……なら、速く追いついて来い」

「当たり前でしょ。行きなさい！」

鈴に促され、五人は先へと進む。

それを見送ったアルファは、途端に笑みを浮かべて戦闘体勢へと

移行する。

「さて、それじゃ始めようか？　ぶつ殺すッ！」

「やれるもんなら！」

「やってみなよ！」

赤と黒の鬨気を渦巻かせ、《三爪龍神》さんそうりゅうじんと《龍眼》を発動させた鈴と、《デュノア・オルグイユ》を構えたシャルロットがアルファに迫る。

それよりも前に、鈴の『後ろ』を取ったアルファが、その大鎌の切っ先を鈴の後頭部めがけ振り下ろす。

「見えてんのよ！」

しかし、それは座標を書き換えた鈴の《龍砲》によって弾き飛ばされる結果に終わった。

そこへ追い討ちをかけるようにして、シャルロットの放った《デザート・フォックス》の弾丸が『タナトス』の装甲へと突き刺さる。

「へえ、少しはできるようになったんだ？」

「一年前とは、違うのよっ！」

「……けどさあ。こんなもんで僕を倒せるとか、思ってたんじゃないよ！」

刹那、轟ッ！　と風を裂いて刃が繰り出される。

頭上から、そして足元から。二人を狙って次々と繰り出される《デスサイズ》の刃を受け止めながら、鈴はひそやかに歯噛みする。

一瞬でも気を抜けば、刃は装甲を貫いて絶対防御を発動させるだろう。そして、それを貫通して直接痛みだけを与えてくる。

学園に襲撃してきた一年前はリミッターでもかかっていたのか、

今の動きは一年前のそれよりも数段速く、そして正確だった。
千日手、アルファは二人を相手にそう呼べる状態にまで持ち込んでいる。

しかし、それだけでは終わらない。鈴とシャルロットにとって、アルファを打倒してこそ意味があるのだ。

だからだろうか。アルファは、イラついた表情で口を開く。

「僕もあんまり遊んでると怒られちゃうんだよね。だから」

言葉を切り、ひときわ強く《デスサイズ》を振るって鈴とシャルロットを遠ざけ、弾丸を全て切り伏せる。耳障りな金属音が、ISの飛行音に混じって響く。

「そろそろ死ねよ、ポンコツ共」

次の瞬間、大気が死んだ。

「ッ……！？」

「は、こ、れは……！」

息を詰まらせた二人は、咄嗟にISを無酸素条件化での活動に切り替える。

それを見て、アルファは小さく笑った。

「へえー、凄い凄い。酸素を殺したこと、よく気づいたね」

「酸素を、殺すですって……？」

ワンオフ・アビリティ

「そう。『タナトス』の単一技能、《デス》は僕の触れている原子を殺すことが出来るのさ。死神の名の通りにね」

ガシャン、と《デスサイズ》を構え、アルファは再び笑う。

嘲りを含んだ哄笑を響かせながら、彼は寧猛な笑みを浮かべた。

「《デス》の効果範囲は《デスサイズ》が切り裂いたものも入るのさ！ 触れれば最後、お陀仏だよ！」

「なら、触れずに倒せばいいだけの話よ！ 行くわよ、シャルロット！」

「うん！」

死神に相對するは、人のつくりし龍。そして、それを守護するもの。

果たして、両者は一瞬の後、裂帛れっぱくの気合と共に交差した。

「はあああああ！！！」

「よい、しょおおお！」

その声と共に、コアが破壊される。

頭上の穴から一気に離脱した葉桜と早百合の後方で、強烈な爆発と轟音が響き渡った。

「これで二機ですね」

「けどまだまだいるみたい。頑張りましょう」
「ええ」

中空に留まってそう言葉を交わす二人の視線の先には、ぽつぽつとところどころに点在するファントム。

既に『桜嵐』^{おうらん}を自らの手足のように動かせるようになった葉桜は、早百合のことを大切な友人としてみていた。

歳の差はややあるものの、二人は確かに友人として、戦友として十分すぎる戦果を上げていた。

政府はこの期に及んで勲章だのなんだのと話し合っているようだったが、二人はそんなことはお構いなしに戦い続けている。ただ、それぞれが信じる信念の為だけに。

幸い金だけはあるのだから、日本の中くらいは自由に動き回れる。そんな二人もまた、ファントムの破壊に勤しんでいた。

葉桜の言葉通り、二人の破壊したファントムは、出現から今までの短時間で二機。決定力のない政府だからこそ、二人はここまで強引に動けたのだ。尤も、それに感謝などしてはいないが。

「頑張っているのね、更識簪……」

呟いてから、葉桜はその手に握った《枝垂》^{しだれ}を見つめる。

簪に勝ちたい、その思いだけでここまでやってきた。身を鍛え、己のISを作り出し、そしてそれに乗って戦った。

けれど、それでもまだ追いついてはいない。ただ追っているだけだ、走っているだけだ。

だから、葉桜は思う。

勝ちたいと。切に願う。

「私たちも、まだまだやれます。頑張りましょう、葉桜ちゃん」

「ええ」

両の手に《一・渦》^{ひとつめうず}と《二・蛇》^{ふたつめへび}を携えた早百合に、葉桜は小さく頷いてみせ。

それから、体を次の標的へと向ける。

脳内は既に次の戦いに備え、そのための回路として組み変わる。

恐怖も、畏れも、戦いには必要ない。ただ必要となるのは、相手を倒す必殺の思い。

それだけを刃に込めるように握り締め、大きく一度息を吸う。ひんやりと、まだ冷たい風が喉を通り、肺を冷やす。

時刻はまだ昼前、日が昇れば暖かいこの時期でも、この時間帯はやはり冷える。

ISを纏っているのだから、その身が寒さに凍え、震えることはない。

冷やしたのは心だ、熱く打ち震えんとする心を、魂を、大気によって冷却する。

心のない相手に心をもって尽くす必要はない。その震えは、来るべき時に。

その思いを胸に秘め、葉桜は再度息を吸い込み、

「では、参りましょう」

場を押し潰すような、圧倒的な存在感を放ちながら、そう言い放った。

第125話 死神（後書き）

皆頑張ってます。

あ、ポメラ買っちゃいました。
好きなときに書けるぜ、へへ。

第126話 夜の神（前書き）

やっちまったぜ。

ちなみにこれ、一回停電でおじさんになりました。
ありえないぜ……orz

第126話 夜の神

五人に減った香織たちは、背後を気にしながらも黙々と先へ進んでいた。

センサー類に敵機の姿は見られないことから、次も先の二人と同じように出てくるであろうことはなんとなく分かる。

それだけに気を張りながら、五人はただ進んでいく。

と。一瞬で辺りの空気の質が変わる。触れただけで壊れそうな、ガラス張りの大気。

「よう、生きてるか？」

響く声は、ガラスを叩くようにびりびりと。

聞いただけで、全員が臨戦態勢を取る。無論、そこに攻撃が来ることはないと分かっていながらも。

闇を溶かすようにしてそこから現れたグリムは、今までと同じように黒い衣を纏っていた。

「グリム……！」

「五人、ね。オーライオーライ、ならルール説明といこうじゃねーの。つつつても、ルールは一つ。ここに三人残れ、指名は俺がする」

「なんですって……？」

「今までとルールが違うようだが？」

「決めるのは俺たちだったの。福音、鎧武者、織斑一夏。お前ら残れ」

ナターシャとラウラの声を一蹴して、三人を指差したグリム。

指名されなかったラウラと香織は、顔を強張らせながらも戦闘体勢を解く。今までのことから察するに、戦う相手だけになるまで戦

闘は行わないようだった。

「……三人とも、頑張つて」

「すぐに追いかけて来い。いいな」

「おねーさんに任せときなさいな」

「うん……」

「応、任せとけ」

意識をグリムからそらさずに三人が答え、香織とラウラはグリムの横を通り抜けて行く。

グリムはそこへまったく意識を向けない。攻撃されないことが分かりきっているような様子で。

「さて、そんじゃ」

香織とラウラの姿が見えなくなったところで、グリムが口を開く。暴力的な闘気が大気を掻き乱し、緊張感が辺りを包む。

「殺し合いと逝こうかア！」

その直後、四人は一斉に空を蹴る。

既に《ブラッド・カーテン》を発動させていたグリムの手には、それによって構成された刃が握られており、それでも尚は多くが宙に浮いている。
ブラッド・カーテン

一年前と刃の形はさして変わらないことから、兵装に使われているビットの量が増えていると判断し、即座にビットを撃ち落すべくナターシャが頭部の《銀の鐘》シルバー・ベルから無数の光弾を撃ち放つ。

その間を掻い潜りながら、《雪片式型》を構えた一夏と、《朱鉄》を携えた簪がグリムへと向かっていく。

「ぬるい、ぬるいんだよオ！　シャオラア！！」

「やらせるかよ！」

「ここで、倒す……！」

グリムのブレードにあわせるように叩きつけられた《雪片式型》を押し返し、刃を持ち替えて上から押し迫る《朱鉄》の重厚な刃を受け止める。

その至近距離から、簪は即座に《銀鉄^{しろがね}》を呼び出し^{コール}、装甲へ向けて弾丸を乱射する。

「チツ、なっちゃいねエぞ、くそつたれエ！　そんなもんで俺を殺せるってかア！？」

しかし。しかし。

グリムはその超至近距離からの弾丸を全て《ブラッド・カーテン》で叩き落すと、簪の首を全力で蹴り抜いた。

一瞬、酸素が途切れたせいで眩暈が襲うと共に蹴り飛ばされた痛みで意識が飛びかける。

拳のように面積の狭いもので穿たれていたら、最悪首が千切れていただろう。ISの絶対防御は装甲同士の接触や、四肢を使った攻撃ではそう発動しない。

簪が意識を戻すと、一夏が吹き飛ばされ、《銀の鐘》の弾丸は全て《ブラッド・カーテン》によって薙ぎ払われていた。

「はっ、こんなもんかよ？」

「冗談、言わないでよね！」

イグニッション・ブースト

瞬時加速の収束と共に振り抜かれる銀色の剣。

束がナターシャの声に応えて作り出したその特注品は、なによりも強靱な硬度と柔軟性を誇っている。

「届かねエツつてんだろっ、がア！」

その刃をブレードによって受け止めたグリム。その頬に浮かんでいるのは、間違いなく笑みだった。

ぞわり、と。簪の背筋を悪寒が駆け巡る。

「ナターシャさん、離れてっ！」

「え？」

「おせエ！ 《カオス》！」

悪寒は現実となった。

『ニユクス』から放たれた『ナニカ』は計器類を狂わせ、ハイパーセンサーの機能を停止させる。

それどころか、息をすることすらままならない状態に陥り、三人は混乱の中に落とされる。

それを眺めながら、グリムは哄笑して言った。

「これが『ニユクス』の単一技能、ワンオフ・アビリティこいつの影響範囲内にある計器を全て狂わせ、機能をダウンさせ、人間のまともな生命活動をかき乱す。テメエラの視界はもう無くなった」

グリムの言葉に歯噛みしたのはナターシャだった。

射撃系は特にハイパーセンサーの恩恵が強い。そのハイパーセンサーが機能しなくなったと言うことは、自前の目視だけで射撃を行い、刃を振るわなければならないのだ。

刃ならば、危なげながらも接近する分当たる確率は上がる。だが、射撃系は接近してから撃つたのではその意味が無い。

幸い刀剣武装はあるにしろ、かなり不利には違いなかった。

「さて、掛かってくるかア？」

「やって、やろうじゃねえか！」

「潰す……ッ！」

「おねーさん、ちょっと切れたかな……！」

しかし、意気に曇りなく。

三人は刃を手に、再び戦陣に突入した。

一方その頃、ホワイトハウス。

エドワードの元に一本の緊急通信が舞い込んだ。

それは、外装破壊用のミサイルの準備が整ったという一報だった。

「そうか。わかった、全回線にここの回線を繋いでくれ」

「はい」

エドワードの言葉に頷いた秘書が端末を操作し、指示通りに回線を繋ぐ。

繋がった先は、全てのアメリカの通信機器。

映像通信となっているそれに自らを流すべく、エドワードはカメラに向けて口を開いた。

「アメリカ国民の諸君、こんにちは。

アメリカ合衆国大統領、エドワード・パーソンだ。

今我が国が、そして世界がどのような状況に陥っているのか、分からない者はいないだろう。

巨大空中要塞型IS、ファントム。

あの脅威は計り知れないものだ。

主砲の発射までどれだけの時間があるのかも分からない。

だが、我々アメリカ国民は、いや！ 我々人類は、そんなものに屈するほど軟弱ではない！

その証拠に、世界各国の軍が共同で、あの強固な外装を破壊する武器を作り出したのだ。

ISだけに頼らずに、我々の手であの忌まわしき悪夢を打ち倒そうではないか！

この放送を聞いている男性諸君。

君たちは、さぞや悔しい思いをしたらろう。

辛い思いをしたらろう。

新しく生み出された機械に拒否されただけで、劣等種の印を押されるその屈辱、その恥辱！

どれほどのものだっただろう！

この私もその一人だ。

だが！

今日この日を持って、その悔しさ、辛さに、怨恨に別れを告げようではないか！

私は諸君らに問いたい。

諸君は人として！ かの悪夢の名を冠した兵器を許せるだろうか！

諸君は人として！ か弱き者を踏みにじるあれを許せるだろうか！

！？

私は許せない！

人の命を土くれよりもあっけなく散らすあの兵器だけは、断じて許しては、許容してはならないのだ！

これより、我々人類は、あの悪夢に人の力を見せ付けることになる。

この空を！ 再び鉄の翼が舞うときが来たのだ！

あの悪夢を打ち破り、世界の朝を再び呼び起こそうではないか！
長い夜は終わる！ この悪夢を、我らと共に打ち破らんとする者は声を上げよ！」

いつの間にか、ホワイトハウスの前には大勢の人が詰め掛けている。

その誰しもが、雄叫びを上げて腕を振り上げている。

まるで、祭か何かのように激しく、強く。

本来それを制止すべき警備員までもが一緒となつて。

その様子を、一度席を立てて見やったエドワードは、小さく微笑んでから息を吸い込んだ。

「諸君らの意思、確かに受け取った！

ならばこの戦いの先陣は、我らアメリカ合衆国が努めさせていた
だこう！

アメリカ国民よ！ これは戦争ではない！

我ら人類が世界の夜明けを見るための、この暗く辛い夜の部隊に
幕を引くための戦いである！」

そこで、また言葉を切る。

最後の一言は、大統領としてではない。

一人の人間としての言葉。

「人類に、栄光あれ！」

そういつた直後。

割れんばかりの歓声と咆哮が、アメリカ全土に響き渡った。

第126話 夜の神（後書き）

うまく書けているかどうか不安な演説。
ちよっと早い気もしますが。

第127話 鉄の翼 目覚める紅

鉄の翼が大気を切り裂き、空を飛ぶ。

かつてそれを夢見た少年たちは大人になり、そして挫折を知った。Infinite・Stratos、全ての兵器をあらゆる面で凌駕し尽くした宇宙開発用パワードスーツ。

その出現によって全ての兵器はお蔵入りとなり、女性の権利は必要以上に拡大した。

しかし今、扉の奥にしまいこまれていた鉄の翼が、また新たにその羽を広げる空を得たのだ。

「ハッハアー！ こいつぁご機嫌だ！」

『はしやぎすぎるなよ、ボリス！』

「わかつちやいるが、なあ？」

『つたく……』

ISの技術を解析したその一端が織り込まれた、新たな翼は、今までのものとは一味違った。

全ての性能が一回りも二回りも高められたそれを操り、戦闘機乗りたちはファントムの元へと飛ぶ。

翼の下部には一対の特殊弾頭が取り付けられていた。

世界各国で一斉に始まったそれは、息を潜めて機会をつかがっていたIS委員会と『亡国機業』ファントムタスクのどちらの奇をも穿ったことだろう。

「標的確認！ 総員、攻撃準備！」

その一声で、攻勢を認識した戦闘機の補助システムがミサイルを発射準備に移行させる。

眼前に広がる巨大な『悪夢』。その堅牢な盾目掛け、世界中で次

々とその弾頭がはじき出されていく。

「発射あ！」

その流れにのって、ボリスたちもまたトリガーを引く。

夜の帳を下ろしているであろうその悪夢に狙いを定め、確実に。白い煙を上げて一目散に飛んでいく無数の弾頭。

その一撃は確かに外装を砕き、破裂させていく。丁度、癩癩玉をコンクリートに叩きつけたときのように、地味ではあれど苛烈に。

「ハッハアー！　どんなもんだいくそつたれ！」

『ボリス、一度戻るぞ！　弾頭の補給だ！』

「あいよう！　サイツコーだぜまったく！　世の中捨てたもんじゃあねえな！」

『ッ、ボリス！　後ろだ！』

「あ？」

焦った同僚の声で、ボリスは後部を映したモニターに目をやる。

ボリスの機体のすぐ後ろで、ブレードを振り上げた《コンバットタイプ戦闘特化型

》がそのモノアイを輝かせていた。

まずい、と思う間もなくそのブレードは振り下ろされ、

ガキン、と甲高い音に阻まれた。

「あい、えす？」

『パイロット、異常はないか！？』

「え、あ、ああ！　すまん、助かった！　アンタは！？」

『織斑千冬だ！』

「は、はあ！？　ブリュンヒルデえ！？」

無人機を切り払って名を明かした千冬に、ボリスは操縦しながらも間抜けな声で返してしまう。

いまだ千冬の名は世界中に知れ渡っており、最強の名が消えることはない。

そんな彼の様子を肩をすくめて見やりながらも、千冬は厳しい顔つきで声を上げた。

『このあたりの無人機はこちらで片付ける！ そちらはファントムを！』

「お、おう！ わかった！ 任せとけ！」

『協力、感謝する』

軽く会釈し、無人機の破壊に向かう千冬をモニターに収めながら、ボリスは小さく笑う。

「これだよこれ、この空気」

ISと戦闘機が共に空を飛ぶ世界。
なるほど、悪くない。

「フッ……！」
「くう……！」

紅いエネルギーを纏った刃が、ローウエンの拳とぶつかり合う。たくみに攻撃をそらしているローウエンに対して、箒の表情は優れない。

『ヒプノス』の単一技能、ワンオフ・アビリティ《ソムヌス》。

その能力は、流体状のエネルギーに触れた生命体の痛覚神経を数百倍から数千倍に活性化させ、死に至らしめるもの。

セシリアがその犠牲となり、箒は単身セシリアを救うために戦っていた。

「一つ、聞いていいか」

「なんだ？」

《空裂》からわれと《雨月》あまづきを振るい、ローウエンとぶつかり合う箒がふと口にする。

既に真つ当な戦略兵器級のスーパーコンピュータですら処理しきれない膨大な情報を脳内で処理しながら、ローウエンは同じように思い出したようにして返す。

「なぜ、お前は《ソムヌス》の影響を受けない。それは使用者の身だけは避けて通る、なんて甘いものじゃないだろう」

「ふむ。そうだな、その通り」

一撃を交差させるまでに、約〇・〇二秒の余白があり、その間に互いの位置、視線の向き、攻撃の種類、威力、その他もろもろの情報を読み取って打ち合うローウエン。

そして、それとは正反対に全ての情報を『感覚』で読み取って、修行と元来のポテンシャルから引き出される『勘』をもってして打ち合う箒。

完全に正反対の戦いを行う二人だったが、その実力自体は拮抗していた。

「私には痛覚神経がないのだ。だから、『ソムヌス』の影響は受けない」

「出鱈目だな、人造人間」

「ああ、自分でもそう思うよ」

痛覚神経がない、つまりは痛みを感じない。それは、人として生きていけると言えるのか。

そんな問いかけも、きつと彼ならば「人ではないのだから構わないだろう」と返すだろう。

箒は、けれど揺るがない。揺らがない。

背には愛する人がいる。たった一人を守って刃を振るえること、なんと幸福なことか。

起動用エネルギーの嵐によって箒に『ソムヌス』が触れることはない。全力で戦える。

「セシリア、もう少し粘れ。すぐ終わらせる」

「ええ……！」

単語での応答。それだけでも喉を振るわせることで過敏になった痛覚神経が揺れる。

しかし、首を縦に振るような動作をすれば、より激痛が走るだろうことは分かっていた。セシリアの、最も簡単で痛みの少ない意思表示。

刃を握り締め、箒はさらに思考を加速させる。意思を、体を、とにかく速く。

一刻も早くローウェンを打破し、セシリアをあのかの苦痛の檻から救い出すために。

やるぞ、紅椿。

心の中で呟いた言葉。

けれど、その声に応える者が、確かにいた。

うむ、ようやくと出番か。

響く声。それは、箒の頭の中へと染み渡るようにして。それがなんなのか、分かる。

長く連れ添った半身の声が、やっと。やっと聞こえた。

ぼんやりと、起動用エネルギーですらない紅い光が、装甲から放たれる。

温度も、質量もない、けれど確かにそこにある光。

「なんだ？」

今まで、ずっとそこに至ってはいた。だが、引き金がなかったのだ。

箒の呼びかけが、その最後のトリガーとなって呼び起こしたのだ。紅椿の中を、本当の『紅』を。

二次移行ではない。そも、『紅椿』に段階は無い。設定されているのは無段階移行なのだから、そういった現象は起こり得ない。

ならば、これはなんだ。ローウェンは当惑しながらも、尚姿勢を崩さない。崩せないのだ、その威圧感が強すぎるせいで。

「来い」

かちり、かちり。音がする。

頭の中で音がする。

「来い……！」

《空裂》と《雨月》が、怯えるように振動を始める。
かちやかちやと鳴る音を掻き消すように、再度箒が吼えた。

「来いッッ！」

刹那、爆発でも起きたかのような強烈な光と共に、『紅椿』は本当の産声を上げる。

両腕肩脚部と背部の展開装甲、その全てから真紅に染まったエネルギーが絶えず放出され、箒の周りをくると包み込む。

そして、《空裂》と《雨月》の刀身からも同じようにエネルギーが放出されていた。

今までと形は変わらない。ただ、本当の全力が出せるよう、『紅椿』の方がリミッターを外しただけの話。

しかし、それを行うためにはコアとの深い同調が必要なはずだった。

「……なるほど、共鳴と相互理解の賜物と言う奴か。織斑千冬と肩を並べ、それ以上の化け物になったということか」

ローウェンの言葉に、箒はただ嗤う。

彼女の姉と同じ嗤い方を、セシリアはその背から感じ取り、興奮に心を振るわせる。

篠ノ之箒は、真に目覚めたのだ。ようやく、愛機が待ち焦がれていた目覚めを果たし、そこにいる。

「まあ、なんでもいいさ。行くぞ」

「勝ち目は、無い、か」

諦めたような言葉は、箒の振りかざした刃によって両断される。

蹂躪が、始まった。

第127話 鉄の翼 目覚める紅（後書き）

篤さんさらに覚醒。

ちなみにこのイベント、原作で言う《穿》の入手イベントみたいなもんです。

千冬さんが出来ていたISコア人格との継続的会話が条件。

紅い粒子はガンダム00の赤いGN粒子を想像してもらえればオッケイです。

第128話 作られた者たち

戦いが激化する中、香織とラウラはさらに奥へとやってきていた。巨大なパイプ状だった内部は徐々に変化し、今では巨大ながらも形状事態は通常の通路と変わらないものに变化している。

「随分奥まできたね……」

「ああ。油断するなよ」

「もちろん」

警戒を切らさずに慎重に歩を進める香織とラウラ。

そのとき、突然通路一杯に明かりが灯る。

前方から迫ってくる光の波に気圧されながらも、二人は咄嗟に臨戦態勢へと移行した。

「こんにちは、我が敵、怨敵、宿敵の御二方」

聞き覚えのある声、そのフレーズに、二人は臨戦態勢から確実な戦闘体勢へと姿勢を変える。

射抜くような鋭い視線の先にいるのは、以前の海戦のときと同じような姿をした少女、ツヴァイだった。

「そう言えば名乗っていませんでしたね、我が名はツヴァイ。そしてこれらはそれに連なる者たち。以後お見知りおきを」

彼女の声に反応し、その両脇から現れたのは一人の同じ顔、同じ姿の少女たち。

全てがラウラとまったく同じ姿だった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、貴女はここに残っていただきます。香織様は我が主の元へどうぞ」

「……ラウラ」

「案ずるな、この程度たいしたことはないさ。すぐに追いつく」

両腕のプラズマブレードを展開し、両目の《越界の瞳》ヴォーダン・オージェを輝かせて、ラウラが言った。

その顔には笑みが浮かんでいる。凶暴で、獰猛で、勇壮な笑み。それを見て取って、香織は小さく微笑んだ。

「ん、わかった。それじゃ、後で」

「ああ」

一度だけ視線を合わせ、それから香織はツヴァイのすぐ横を突っ切って飛び去る。

後には、まったく同じ顔の一三人が残される。

「さて、と」

四〇本の《シュヴァルツ・ドライト》、二門のレールカノン、両腕のプラズマブレード。

その全てを即座に使用できる状態に移行させる。

息遣いすら聞こえそうなほどに静まり返ったその場で、しかし音は機械の駆動音だけしか響かない。

文字通り張り詰めた大気を裂いたのは、再び口を開いたラウラの声だった。

「無様に這い蹲る準備は出来たか？」

「は、ははは、アッハハハハハ！ この数を相手に大層なことを言いますね！ 貴女に勝ち目などないというのに！」

「ふん、吼える雑魚が。そら、行くぞ！」

鋼鉄の地を踏み砕き、一瞬を越えて加速したラウラの刃が、尤も近くにいたノイン目掛け繰り出される。

速く、速く。その刃は確実にラウラの知覚を越えていた。

《越界の瞳》を用いても尚届かぬ速度で繰り出されたその刃を、しかしノインは同じだけの速度をもつてして防ぎ切る。

無表情、無感情、無感動。

伽藍堂の眼にラウラを映し込み、ノインはその標的へ両腕に携えた二振りの刃を振るった。

そして、それを皮切りにツヴァイ以外の全ての彼女たちが一斉に刃を構え空を蹴る。

「舐め、るなあああ！」

その全ての動作を、ラウラは全力起動した《A I C》によって縫い止める。

たったそれだけの動作で、ラウラの頭には激痛が走る。溢れそうになる涙を必死で食い止めて、《シュヴァルツ・ドライト》を操り一人の胸を貫く。

「《ウン・ハイル・ドルン》！」

「」

耳障りな金属音を響かせることも無く、一人がコアを破壊される。ほんのわずかに激痛が削れはすれど、いまだそれは消えることは無い。

それも当然だろう。

偽者とはいえ同等か、それ以上の一二機の《シュヴァルツェア・レーゲン》。その全てが機体性能の限界をもつてして発動させた《

AIIC』を、ラウラはたった一人のそれで抑え、凌駕しているのだから。

機体性能の限界を遥かに超えた機能の酷使は、ラウラに想像以上の過負荷をかけている。それこそ、血の涙を流すほどの思い。

カタカタと体が震え、視界がぶれる。しかし、それでも動けるのはラウラだけだ。

「オ、オおおおおオオ!!」

残りは一一機。うち向かってきている状態で残っているのは一〇機。

《シュヴァルツ・ドライト》を巧みに操り、その切っ先を次々に少女たちの胸、コア部分へ突き立てていく。

罪悪感を感じる余裕など無い。そも、ラウラにとって彼女たちは障害でしかないのだ。

生きている限り、真っ当な生など望めない。

生き写しの少女たちを、せめて自分の手で葬ってやるのが、彼女たちへの自分からの手向けだと。ラウラはおぼろげに思う。

そして、そこに重なるようにして灯る、怒り。

アドヴァンスト

彼女たちは、ラウラを作りだした遺伝子強化素体の技術と擬似コアを核とした人造人間の技術を掛け合わせて創りだされたのだろう。ラウラと同じ姿で、けれど半歩だけそこからずれた少女たち。

その小さな体躯を鈍く輝く切っ先が貫いていく度に、頭の痛みは薄れていく。

その事実が、なぜかラウラの胸を痛めつける。

「アッハハハハハ！ さすがですね殺戮人形！ キングドール 躊躇い無く殺すとは思いませんでした！」

時間にして、わずか一五秒あまり。

たったそれだけの時間で、ラウラは精神も体力も多大に消耗していた。

けれど。

けれど、ラウラは声を発する。

汗を垂らし、かすかに全身を震わせながら。

視界を歪ませ、わずかに震えるその口で。

「次は、お前だ」

「ふゆか、いです。ええ、不愉快です。貴女のような存在は認められない、貴女は、要らない　！」

小さく告げた言葉に、ツヴァイは激昂と言う言葉ですら生ぬるい憤怒を見せる。

それは、格下と見ているラウラからの挑発を受けてのものか。それとも、そのラウラの見せた短い戦いを見てのものなのか。どちらにせよ、ツヴァイは怒る。怒り、そして動き出す。

「ツァア！」

「ぐ、うグ　っ！」

武装は、見る限り《シュヴァルツェア・レーゲン》とまったく同じ。

両腕のプラスマブレードを、同じそれで受け止めたラウラの口から苦悶が漏れる。

たった一五秒とはいえ、スペックを遥かに超えた機能を引き出した代償として、一部の演算を代行したラウラの脳は酷く消耗していた。

だから。

「し、ね　！　死んじゃえ、オリジナル！」

懐深く、ツヴァイの放った膝蹴りが突き刺さる。

頭から全身に響く痛みにつけ加えられたそれによって、ラウラはナニカに放り投げられるように宙へと吹き飛ばされ、そして冷たい鉄の地面へと落ちた。

鉄と装甲のぶつかる音と、肉体が落ちるぐしゃ、という音。それが、絵空事のようにラウラの耳に届く。

「ア、ツハツハハハハ！　ばか、ばあーか！　死ね！　死んじゃえ！」

「ガッ、カハッ……！」

子供染みた、いつそ悲鳴のような声で喚きたてるツヴァイが、ラウラの体を踏みつけ、蹴りあげる。

その度に意識と無意識の狭間で混濁したラウラの自意識が悲鳴を上げた。

ISの絶対防御は、強化されたものでない限りに四肢での攻撃には反応しない。

強烈に突き刺さった先の一撃も絶対防御に阻まれずに、そのままラウラの体に突き刺さっていた。

そのせいだろうか。

すでにラウラの意識はまともに残ってはいない。

「ッ！　　ッ、ッ！」

ドン、ドンッ。

ツヴァイが足を動かすたび、ラウラは光を失った瞳に地面を映しながら、胃の内容物を口から吐き出す。

体は動かない。意識も、既に。

指先一つ、かすかにさえ。

無数のキーボードとディスプレイが乱舞する。

その中で、束は一人黙々と作業を続けていた。

鬼気迫る速度でキーボードを叩き、ディスプレイに表示される情報を読み取り、統合し、分割し、総合していく。

葵だけの、葵のためだけの機体。けれど、葵の動きを阻害しないようにするのですら、相当の努力を要する。

それを作り出すことは、ある意味で『機動だけで人を殺せる機体を作る』ということだった。

「ふ、ふふ、ふふふふふ」

けれど、束は止まらない。

速度はさらに速くなる。

まだ、止まらない。

第129話 絶望

「こんのおお！」

「当たらない当たらない！ どこ狙ってるのさ！」

次々に放たれる衝撃砲の全てを回避し、時には大気的主要構成成分である窒素を殺しながら、アルファは飛び続けていた。

自身に触れているものしか殺せないという制限はあれど、全ての原子を破壊できるその特性は厄介極まりないものである。

現に、鈴もシャルロットも、一向にアルファに対して有効なダメージをいれることができないでいた。

「だああああ！ なんつなのよこいつっ！」

「焦っちゃだめだよ、鈴！」

「わかってるわよ！ けどじれったいっ！」

遠距離からの衝撃砲は先の通り回避され、他の攻撃も悉く《デス》によって阻まれる。

うかつに近接攻撃を行えば被害を食うのは鈴たちのため、まともに戦うことすら出来ていない。

「はあ、なんか飽きてきちゃったよ。　　ってことで、死ね」

「　　ッ！」

アルファの声が聞こえるかどうかと言うほどの刹那、振り被られた大鎌の切っ先が鈴に迫る。

咄嗟に避けたものの、胸部の装甲が若干削り取られ、その瞬間に発動された《デス》によって胸部装甲は全て分解される。

「なつ……！ あんた、アタシのこと剥くつもりじゃないでしょうね！？」

「は？ そんな貧相な体して何いってんの？」

あっけらかんとそう言い放ったアルファだったが。

彼は気づいていない。それが彼女の地雷を盛大に踏み抜く行為だということ。

「……アンタ、言っちゃいけないことを言ったわね……」
「り、鈴……？」

眉間に青筋を浮き出させながら、鈴は静かにそこに佇んでいた。まるで、嵐の前の静けさを物語るように。

「ぶつ 潰す……！ アンタは無事じゃ済まさねえ……ッ！」

「鈴、落ち着いてってば！」

「ちっこいくせに粹がるなよ」

「……オオラオオラオオラオオラオオラオオラアア！」

ぶつり、と確かに音が響き、鈴の咆哮と共に無数の衝撃砲が撃ち出される。

怒りによってブーストしているのか、その数は今までの数倍に上っていた。もちろん、普通ならそんなことは出来ないはずなのだが、鈴は、今まで色々と抱え込み、悩んだりしていたのだ。ある意味ではもつともまともな人間であるが故に、その悩みの数は多い。

両親との確執に香織が眠っていたときのストレス、船の中での窮屈な生活も確かにストレスになっていただろう。

人間関係にも気を使い、しかしその全てを決して表には出さず自分の中にしまい込む。

粗雑なようであり、その実鈴は相当なお人よしなのである。尤も、

香織や一夏はそのことに気づいていたようだったが、肝心の鈴はそのことに気づいていなかった。

そんな彼女だったから、ここで爆発したことで意識は酷く鮮明になっただけだ。

今まで付けていた重りを全て外したことで、思考も肉体もかなり身軽になっている。その証拠が、確実な制御で放たれた倍数以上の衝撃砲に現れている。

「だからあ、ムダだったってんじゃない、よっ！」

「があっ……！？」

「鈴！？ このっ……！」

一瞬で接近されて斬りつけられた鈴の腕部装甲が分解する。

それとともに通った痛みが、鈴の意識を明滅させた。

シャルロットの反撃も意に介さず、アルファはまた距離をとって静止する。完全に戦いは相手の流れになっていた。

「ぐっ……！ んなろおお……！」

「よし、本当にそろそろ殺しとこっ。どうせ勝てないでしょ」

「は？」

軽口を叩くようにそう言って、直後。

まるで当たり前のように、鈴の胸から赤く濡れた刃が迫り出してきた。

「あ……、り、鈴っ！」

「あ、たし、え？ なに、こ」

言葉は、続かない。

続く前に、喉が震えるその前に。

鈴の姿は先の装甲と同じように分解され、消え去ってしまったから。

「り、ん……？」

「あのチビはもういないよ。原子ごと分解してやったからね！ ギヤハハハハハ！」

耳障りな声が響く。

笑い声。

笑い声。

ぎりり、と、シャルロットは自分の齒噛みした音がやけに頭に響いているように感じた。

初めてだった。

これほど、これほどに。

「……ねえ」

「あ？」

これほど、までに。

濃厚な、殺意というものを己のうちに感じたのは。

「君、殺すね」

宣言するようにシャルロットの声が響く。

暗く、重く、鈍く。

あまりにもあっけらかんと発せられたその言葉に、アルファは眉を潜めながらも小さく笑みを漏らした。

「殺す？ 僕を？ ク、アッハハハハハハ！ 少しは面白い冗談が」

「うるさい」

まとわりつくようなアルファの声を、たった一言で潰す。
たった一言、二言の言葉で、シャルロットはその場の空気を塗り変えていた。

目に灯っていたはずの光はどんよりと曇り、雰囲気もまるで違う。
今までの彼女を知らない人が見れば、否、知っている者が見たとしても、決して信じられないだろうと言うほどに。

「
」

声がした。

暗く、重い。声がした。

そう、アルファが認識するよりも速く、その一撃はアルファの胴体を吹き飛ばしていた。

硝煙を上げるのは、大口径の連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》の銃口。

否、銃口からだけではない。射撃の際に負荷がかかる部分すべてから、白い煙を噴き上げていた。

「な……に……っ!？」

「まだ」

困惑するアルファへ向け。

当惑するその少年へ向け。

シャルロットは、一切の慈悲を見せずに次の行動を起こす。

ラビット・スイッチ

『高速切替』、彼女の技量と大容量の拡張領域が可能にした、I

S乗りでも使える者は少ない技術。

その技術を戦術に組み込んだ彼女のそれは、冷静さを失っている
であろう今の状態であっても、なお彼女に力を授けていた。

冷静さはない。しかし、脳は冴えている。

どこまでも冷徹に相手を見極め、隙を見いだし、そこを何倍にも拡大したように的確に攻撃を仕掛けていく。

その攻撃は、確実にアルファの知覚を超えた速度で迫っていた。

「この……、調子に乗るなあッ！」

「……ッ！」

押され始めていたシャルロットが、咄嗟に《レイン・オブ・サタデイ》を手放す。

直後、そこを《デスサイズ》の刃が通過し、《レイン・オブ・サタデイ》は拡張領域に戻されることなく原子レベルで分解された。

一瞬前に自らを襲っていただろう死を見てとって、しかしシャルロットはなおも揺らがない。

目の前で、大切な友を失った。そのことが、シャルロットの脳のリミッターを落とす原因になっていた。

「もういいや、死ねよオ！」

《デスサイズ》を振りかざし、アルファが最速で迫る。

そのアルファへ向けて、シャルロットは呼び出した《ブレッド・スライサー》を投げつけた。

一瞬だけ遮られた視界も、《デス》によってそれを消し去ることで回復する。

次の瞬間、アルファの視界一杯に様々な形の弾丸が広がっていた。

「なっ ！？」

色も、形も、重量も、すべて違うそれらに共通していること。

その一つは、それが破壊と殺戮と流血に誘うものだということ。

もう一つは、それらすべてがアルファへ向けて弾頭を向け迫っていることだった。

咄嗟に使用した《デス》で消しされたのはわずか。直後、アルファのいた場所を爆音と粉塵が包み込む。

「……終わった」

呟いて、一つだけ息を漏らす。

終わったのだ。あれだけの弾丸を受けて、絶対防御のない相手が耐えきれはるはずもない。

そう思っていたから。

思いこんでいたから。

「誰が、終わったって？」

「え　！？」

世間話でもするかのような、明るいい口調で。
不気味なほどに不釣り合いな、その呟きは。

ぞぶり。

そんな音とともに自分の腹部からせり出してきた、赤く濡れた漆黒の刃とともに、シャルロットの耳を打った。

「か、はっ」

「お前は簡単には殺さない……。なぶって、犯して、殺してくれって頼んでくるまでいたぶってやる……」

暗く、憎悪と怨念に濡れた声。

シャルロットのすぐ後ろから聞こえたその声で、シャルロットは

気づく。

アルファの戦闘方法は、視覚をだまし、聴覚を騙して位置を悟られないようにする技術。

騙されていた。

「いつ、から……？」

「お前が剣を投げたとき。あそこで仕込みは終わってた。あとは弾幕の爆風に紛れてお前の後ろをとっただけ、簡単だったよ」

「そう……」

負けた。かんぷなきまでに。

自分は殺されるんだろうか。いや、さっきの言葉通り、簡単には殺さないだろう。

しかし、助かる見込みはほとんどない。

もとより生きる希望など人に頼ってしか見つけられなかったこの体、今更惜しむのか。

自嘲するように、シャルロットは笑う。

その笑みを見てアルファは裂けるような、粘つくような笑みを見せる。

「なに、笑ってんの？　もしかしてお前マゾってやつ？　そりゃいいや、さいっこうに悦ばせてやるよ」

感謝して死ねよな、と。

アルファは晒う。

そんな無様な姿を、シャルロットは出来れば誰にも見られたくはなかったけれど。

（お願い……、助けて　　）

仲間、友達をみすみす失って、勝手に暴走して、挙げ句こつして負けて、捕まって。

そんな無様をさらした自分が、そんな愚かな事をした自分が、言えることではないけれど。

（ 助けて、一夏 ）

シャルロット
愚かな娘は、そう願った。
己と。

友の誇りの救済を。

けれど、一夏は来ない。
ヒロー

来ないのだ。

第129話 絶望（後書き）

もちろんこれじゃあ終わりませんが。
後をお楽しみに。

第130話 生きる意志（前書き）

展開早いかなー？

第130話 生きる意志

ぼんやりと、視界が歪んでいる。

その中で、死んだような目をした金髪の少女が、まるで諦めたように体を地面に投げ出していた。

何がどうなっているのか分からない。

アタシは、確かにあの時全身を分解されて死んだはずだ。けれど、意識はここにある。

「一体、どうなってるのよ……？」

鈴の娘よ。

「だ、だれっ!？」

声が聞こえた。

低く、深く響く、咆哮のような声。

周囲を見渡しても誰もいない。いるのは、アルファとシャルロットだけ。

今のアタシに体はない。だから、助けられない。見ることができても、それ止まりなんだ。

……ちくしょう。

目を閉じ、深きを見よ。

また聞こえた。さっきと同じ声。

コア、って言っていたから、ISにかかわる何かなんだろう。

言葉の通りに目を閉じて、とりあえず集中してみる。深きを見よって、どういう意味かはわからないから、とりあえず。

すると、突然視界が開けた。

目を閉じているはずなのに、開いている。奇妙な矛盾。

ようやく出会えたな、鈴の娘。

「だから、どこにいるのよっ！」

そうか、人型とならねば見えんな。すまぬ。

そんな声が聞こえたすぐあとに、視界の中央に煙が集まってくる。何事かと見ていると、それはゆっくりと人の形を取り始めた。長く伸ばした黒髪に鈴のついたリボンを絡ませ、黒と赤で彩られた、どちらかというと暗めのチャイナドレスを纏った女性。その女性が、ずっと閉じていた目を開く。金色の双眸が、あるはずのないアタシの体を貫いているのを感じた。

「ほれ、これで見えるであろう」

「あんた……、誰？」

「我が名は甲龍^{シエンロン}。お前の意識が拡散する前に、我がお前をここへ退避させたのだ」

さっきまでの重厚な声ではなく、鈴の音を鳴らすような軽やかな声で彼女が言う。

甲龍、アタシのISと同じ名前。

もし本当にアタシのISと同じなら、彼女が甲龍のコアにいる人格なのかしら。

「うむ、我がそうだ。随分とかかったな」

「そんなこと言っても、しょうがないじゃない。それで、アタシはどうすればいいの？ アタシの体は？」

「ない。分解されたからな」

あっさりとした回答に、一瞬で反論する気力さえ削がれる。でも、アタシはここにいるんだ。体がなくても、ここにいる。

あれ。でも、脳がなかったらアタシがこうして思考しているのは
いったいどうしてなんだろうか。

「脳は意識と同調している。今のお前は量子変換され、物質とデー
タ、両方の性質を持つている状態だ。まあ、肉体はないがな」

「体がないことを強調しなくてもいいわよ、わかってるから。じゃ
あなに、アタシは元に戻れないの？」

「そうではない。戻れるが、人ではなくなる。人の括りを超え、人
の数倍の時を生きることになる」

ゆつたりとどこかに腰掛けているような甲龍が、またもやあつさ
りとそう告げた。

なぜだろう、彼女は機械のはずなのに、自分よりもずっと位の高
い人と話しているような錯覚を覚える。

「それは、我が龍の意識として形作られたからに他あるまい」

「……考えていることがわかるの？」

ブライベート・チャネル

「個人間秘匿通信の強制介入、ちよつとした荒業だが、この空間で
は我は神のようなものだ。お前が自覚して防ごうとしない限り、大
体わかる」

「嫌な特技ね」

「それで、お前は どうする？ 人ではなく、機械でもなく、半端者
として蘇るか。それとも、このままこの夢も現もない世界に留まる
か」

甲龍は、アタシを労わるようにそう声をかけてくる。

確かに、ここならアタシは傷つくことも、ストレスを感じることも
ないだろう。

そう考えれば、ここはとてもいいところだと思う。辛いことなん
て何もない、ぬるま湯みたいな世界。

「……留まるのも、悪くないかもね」

「我としても、主であるお前がここにずっといてくれるのは嬉しい。我と会話できるのは、母様とお前だけなのだから」

「そう……」

ほんのわずかに、金色の瞳に寂しさを滲ませて。

甲龍はそう言った。

いつの間にか、アタシの体はその空間に作り出されて、意識がそこに移っていた。

纏う物はないけど、別に見られたって恥ずかしいわけじゃないから、生まれたままの姿で甲龍の元まで歩いていく。

地面　地面とも呼べない何かだけれど　は決して冷たくな　く、暖かくもなく。ただそこにあるという現実感だけをアタシに伝えてくる。

まだ体が馴染んでいないのか、おぼつかない足取りながらも甲龍の元へと歩いていく。

「あつ」

一歩前まで来たところで、たたらを踏んだ足にもう片方の足を引っ掛けてしまう。

ぐらり、と体が揺れる。

ぶれた視界はゆっくりと下へ下がっていく。それとともに、前へ。

「おつと」

ぼすつ、という音とともに、アタシの体は何かを支えられていた。柔らかな感触と、衣擦れの音。

「大丈夫か、主」

「……ええ。うん、大丈夫」

そういうと、甲龍は私の顔を覗き込んだままでにつこりと微笑む。
ああ、本当に。邪気のない、思いやりと優しさに溢れた笑みに、
勘違いしそうになってしまう。

アタシが、休^レんでいていい^レだ^レなんて。

「……甲龍」

「なんだ、主」

「アタシが人をやめても、地獄の底までアタシと共にいてくれる？」
「無論だ」

即答される。

どうやら、彼女の中ではすでにアタシが出す答えは決まっていた
ようだ。

なら、ぬるい夢はもう終わり。夢とも言えない、短い時間だった
けど。

でも、まあ。

「悪くない」

眩きと共に、アタシの胸から光があふれ出す。

アタシは誓ったんだ、香織を守るって。

だってのに、友達一人も守れないで、なに偉そうに逃げようとし
てんだか。

情けない。

情けなくて、情けなくて。

反吐が出る、クソツタレめ。

ぎりぎりところぶしを握りこむ。皮膚を爪が食い破って、映像化された血が流れ出す。

それでも、痛むのは手のひらじゃない。

胸が、痛くてたまらなくて。

それは自分が逃げようとしていたことへの悔恨の証。

「いくわよ、半身」
バンシエン

「承知した、我が友、我が王よ」

アタシから溢れた光は、奔流となってその場を飲み込んでいく。
バケモノだって、何だって構わない。アタシは、香織の傍である
子を守り通すんだ。

「あ……」

ぼきり、と。腕が折れた。

感触でわかる。シャルロットの内臓はボロボロ、肋骨もほとんど
イカれている。

そして、右足と左腕が折れていた。そこに、もう一度響いた音。

「あ、また壊しちゃった。まあいいよね、別に」

嗜虐的な笑みを貼り付け、アルファは死に体の少女をなおも蹴る。そこに大した意味はない。しいて言うなら、暇潰し程度のものである。

いつまでも続くかわからないようなそれを受けて、シャルロットは生きる意志すら放棄していた。

人形のようになったシャルロットを、アルファはつまらなそうに蹴飛ばす。

その直後。

光が、溢れる。

何度も何度も蹴られ、ボロボロになったシャルロットと、いまだ飽きずに彼女を痛めつけるアルファの前から。

「なんだ……！？」

「あたた、かい……」

ゆつくりと、シャルロットの目に生気が、光が戻っていく。まるで、その光から分け与えられるように。

広いその空間をくまなく光で満たし、そうして彼女は帰還するのだ。

消え去ったその場所から。

消し去られたその場所へ。

強く拳を握り締め、新たな力をその身に宿し。

彼女は吼える。

「アタシのダチを随分可愛がってくれたみたいじゃない、クソガキ」
「な……っ！？ ば、かな……！ ありえない！」

聞こえるはずのないその声が。
聞こえてはいけないその声が。

響く。まるで、英雄譚に語られる勇者のように。
響く。まるで、武勇伝に語られる戦士のように。

高らかに、鮮烈に。
強く、硬く。
響くのだ。

「今度は、アタシがあんたをボッコボコにしてやる番よねえ？」
「生き、てた……？」

聞こえて欲しいと願ったその声が。
聞こえてくれと祈った、その声が。
響く。

広い空間の中でただ一つ、何よりも強靱な意志を持ち。
どす黒い悪意に晒され尚、誰よりも自由な夢^{ユメ}想を持ち。

「^{ファンリンイン}鳳鈴音と新生『^{シェンロン}神龍』！ その初陣をアンタの血で彩られること
に感謝しなさい！」

一対となった《^{そうつんがけつ}双天牙月》に、九つにまで増えた《龍砲》。
そして鋭利ながらも流線型のフォルムとなり、逆に刺々しさを増
した機体。

それらを引っさげて。

鳳鈴音は、再誕した。
。

第130話 生きる意志（後書き）

はい、二次移行しました！。
次回は本格的な戦闘かな？

第131話 進化

四つの刃と、九つの球形砲台。

鈴の操る一三の脅威は、アルファにとって予想だにしていなかったものだった。

信じられない。あり得ない。理解不能な代物。

けれど、彼女は現にそこにいる。

強い瞳に光を宿し、揺らぐことのない視線でアルファを貫いている。

「なら……、もう一回バラバラにしてやるよ！」

「やってみなさい、ガキンチョ！」

胸の内をかき乱される感覚がアルファを襲う。

しかし、それを気にする余裕はアルファにはなかった。

本来あり得ない存在が、目の前にいることで、アルファは完全に冷静さを失っていた。

「ハアッ！」

一声し、鈴が大気を蹴りつける。

そうアルファが認識した直後、上下左右から四つの刃が押し迫る。

「っ！？ チイツ！」

咄嗟に後方へ飛び退いたアルファへ向けて、更に九つに増えた《龍砲》、《九龍^{クワロン}》の砲弾の嵐が向けられた。

途切れることのない圧縮弾を《デスサイズ》で切り裂いたアルファは、そこであることに気づく。

「《デス》が、効いてない!？」

「《九龍》の砲弾は存在しない原子の集合体、相手にぶつかるときだけ量子変換されて物質に、それ以外はデータとして物体に影響を及ぼさない」

つまり、それは完全なステルス砲弾。

目に見えず、レーダーにも反応せず、前身であった《龍砲》の発射原理『空間の圧縮』を更に上の次元へと発展させた結果、一時的に砲身と砲弾を量子変換し、圧縮、対象物に接触したときに再度量子変換され、物質として攻撃することを可能としている。

しかもその砲弾は変換されてデータとなったときに内部を改ざんされ、本来あり得ない原子として撃ち出される。

そのため、地球上に存在する原子しか知らないアルファの操る《デス》では消滅させられない。

アルファは苦々しげに舌打ちすると、再度を構え直す。
その目には、先ほどまでの油断も激昂もない。

「やっとマジってことね。いいわ、ぶちのめしてあげる」

「お前は、殺す。確実にッ！」

刃を繰り出したのはアルファだった。

正確に、しかしその勢いを殺すことなく振り下ろされた刃を、鈴は一对に増えた《双天牙月》で受け止める。

響き渡る重い音。

本来なら《デスサイズ》の刃に触れた時点で分解されるはずの刃が、しっかりと競り合っている。

「悪いけど、もうアンタのワンオフは通用しないわよ」

「なら、直接ぶったぎればいいだけだっつーの！」

何度も響く音。

しかし、鈴の手数は以前とは比べ者にならないほどに増えている。
変則的とは言え二次移行セカンドシフトを果たした『神龍』の武装は、『龍砲』
から進化した『九龍』の他に、もう一種類ある。

『双天牙月』そうてんがげつを元に進化した、四本の刃、『四天・！双牙連月』しってん そうがれんげつ。
柄の部分から鎖が伸び、二本で一組となっているそれが二組。

一本一本が互いに連結する機構を持つため、十字に組み合わせる
ことも、『双天牙月』と同じように二本一組で一对の刃として使用
することも出来るそれは、鈴の手によって次々にその形を変えてい
く。

「うっざいんだよ、ちょこまかと！」

次々に繰り返される『デスサイズ』の攻撃を、一対となった刃で
受け流し、互い違いに連なる鎖を手繰り寄せ、四つの刃の連撃を打
ち込む。

回避しようと離れたところめがけて、四本を十字に連結させたそ
れを投げつけ、手元の一本に統合された長い鎖でそれを操作しなが
ら『九龍』を撃ち放つ。

「ぐうっ……！」

「そらそらそらあ！ 大口叩いてた割には、大したことないじゃな
い！」

「この、おおおおお！」

冷静に戦えば避けられるはずの攻撃。しかし、アルファがそれが
悉く当たることにはいらだちを隠せない。

あり得ない位置からあり得ない攻撃が降り注ぐそれは、確実にア
ルフアの思考の柔軟性を殺いでいた。

いつしか、優勢に立っていたはずのアルファは劣勢へ立たされ始める。

「さて、そろそろ終わりにしてやりましょうか」

「終わりだと？ ふざっけんな、殺す、殺してやる！」

「起こると血圧上がるわよ、ぼーや」

「ッ……！ 死、ネエエエエ！」

周囲の原子を殺し尽くしながら、アルファは激昂して刃を振りかざし、^{イグニッション・ブースト}瞬時加速で鈴へ寄っていく。

確実に今までのどの刃よりも速いと確信できる一振りが、大気を切り裂いて迫る。

間違いなく避けられないであろうと思われたそれは、確かに鈴には避けられなかった。

今までの鈴であつたならば。

「見えてんのよ、タコ」

凄まじい速度で飛翔していたアルファが、ばらける。

赤い液体をまき散らしながらバラバラに吹き飛んだアルファの四肢を、そしてコアを破壊したのは、見間違いようもなく鈴の刃だった。

「な……！？」

「じゃーね、クソガキ」

直後、吹き飛んだアルファの体めかけ、無数の衝撃が放たれる。胴体めかけ放たれたそれは装甲を押し潰し、皮と肉を引きちぎり、骨をひしゃげさせる。

それが、終幕の合図だった。

「ハアアアアアア！！」

「オラアアアアア！！」

がりがりと鐔迫り合いを繰り返しながら、振り下ろされる《朱鉄^{あかがね}》を避け、突き出される銀色のブレードをいなすグリム。その顔には、狂気とも取れる笑みが張り付いていた。

「楽しいなア、おい！　そう思わねえか、織斑一夏ア！」

「知らねえ、よッ！」

音高く刃を弾くと、左腕の荷電粒子砲の砲口をグリムへ突きつける。

それと同時に、《朱鉄》を拡張領域に引き戻した簪が、《銀鉄^{しろがね}》を呼び出して、同じように銃口を突きつけた。

「おいおい、物騒じゃねーか」

「それを貴方が言うのかしらね」

カノンタイプの《銀の鐘^{シルバー・ベル}》を突きつけながら微笑むナターシャ。直後、嵐のような光弾がグリム目掛け至近距離から放たれる。

だが、いかに至近距離と言っても射撃補正は行われ、感覚的にそれに頼っている部分はある。それがなくなった今、グリムにとってその嵐は大したものでもなかった。

「この、当たれっの！」

「あんまりテンションあげると、すぐぶっ倒れるぜ？」

「うるせえよ、その前にお前がぶっ倒れれば済む話だ！」

「確かに、なア！」

次々と繰り出されるグリムの刃を回避し、時には打ち合いながら、一夏は簪とナターシャと共に攻勢をかけようと空を飛ぶ。

グリムの方が惜しむべきことがあるとすれば、接近戦がほとんどだった一夏に、候補生として訓練を受けた簪、軍人として訓練を受けたナターシャの三人がいずれも大して機体の補正に頼った戦いは行っていないということか。

逆にシャルロットやセシリアなどの純射撃タイプは補正を含めた戦闘方法を確立しているため、そこを乱されればかなり厳しい。

キワモノの機体を駆ってきた一夏だったからこそ、この上級者二人に付いていけると言っても過言ではないだろう。

尤も、三人とも一年間訓練を続けてきたため、ちよつとやそつとでは負けることはなくなってきたているが。

「にしても元気だな、お前ら？」

「お褒めの言葉ありがとう、ついでに倒れてくれると嬉しいんだけどなあ？」

「そりゃ無理だぜ、福音のネエチャン」

にい、と頬を吊り上げた笑いを見せながら、グリムはなおも刃を振るう。

グリム自身は《カオス》の効果を受けていないにも関わらず三人

が打ち合えているのは、それだけ三人のレベルの高さと、グリムの強さを表している。

しかし、と。簪は思う。

このまま打ち合っていては敗北するのは自分たち。何しろ、移動一つとっても体力の消耗が激しい。

《カオス》で体力を削られている上にこれでは、いくら三対一だとしても不利だった。

「よし。二人とも、何とかあの動きを止めて。《朱鉄》で落とす」

「わかった。どうすればいい？」

「とにかくあいつが回避行動を取れないようにして」

「りょーかい、いくわよー夏君！」

素早く用件を伝えると、一夏とナターシャは更にスピードを上げて打ち込んでいく。

何か思惑があることに気づいたグリムは、やってみせるとばかりに嗤ってそれを迎え撃った。

「上等……」

がちやり。

音が鳴る。

簪は、そのときをただ待ち、《朱鉄》の柄を握り込んだ。

第131話 進化（後書き）

まだまだ戦いは終わりそうにありません。

熱量を発生させる。なるほど、無限機関ともなればそのレベルにも達するだろう。

かろうじて退避したものの、既に《ブラック・カーテン》はブレードに使用している分しか残っていない。

「カツ、やるじゃねえか」

「防がれた……」

「けど、あいつの武装はもうほとんどないわ。一気に畳むわよ！」
「おう！」

口を歪めて嗤うグリム目掛け、一夏とナターシャが一気に刃を振りぬく。

が、それをブレードで弾き返すと、あろうことかその二人へ向けて蹴りを放ってきた。

「んなつ！？」

「武装が一個しかない状態で、それがぶっ壊されたときのこと考えねえのはバカだろ？」

四肢での攻撃を受けるたびに、シールドエネルギーはゆっくりと減少している。

本来認識されないその攻撃が認識されているということはつまり、その部位が武装として認識されているということ。

「名前はねえが、まだ戦えるってことはわかるだろオ、ガア！」

「なら、俺がぶった切って終わらせる！」

「ハッ、掛かって来い織斑一夏ア！ ボッコボコにしてやらア！」

「私たちのことも……」

「忘れないでよねっ！」

次の瞬間、三つの刃と、双腕双脚がぶつかり合った。

一行が戦っている中、僕は一人最深部へと到着していた。

緑色の液体で満たされた、人一人が丸々入れるような培養ポッドが左右の壁にずらりと並び、強烈な圧迫感と威圧感をかもし出している。

「ようやく来たか、香織」

そのフロアの一番奥、多くのモニターを見つめていた男が、重厚な声でその声を発した。

一之瀬^{いちのせ}巖隆^{いわたか}、僕を作り出した、親と呼べる人。

……そして、世界をめちやくちやにした張本人。

「貴方は、一体何がしたいんですか」

「名乗りもせず、いきなりか。いや、知っているのだから互いの紹介はいるまい。それで、なにが、とは？」

「世界をめちやくちやにして、貴方は一体何が目的でこんなことを！」

「……今現在、人という種族は滅びへ向かっている。増え続ける人口、止まぬ争い、止まるところを知らない環境破壊。全て、人という種族が生まれたゆえの悲劇だ」

重い。言葉が、重い。

一言一言が、重石を乗せられたように落ちてくる。
想いという重石が。その言葉には乗っている。

「人はどこかで転換期を迎えなければならない。しかし、自ら気づいたときにはもう遅いのだ」

「まさか、貴方は人という種族の上に立とうとも言つつもりですか！」

「それこそあり得ない。私は、人が嫌いなのだ。己の欲にまみれ、何も考えずに世界を破壊していく。ならば、そうなる前に」

ぞわりと、怖気が走る。

冷たかった。彼の目は、どこまでも暗く、冷たい。

それで、わかってしまう。彼は。

「消し去るべきだ」

「ッ！」

人という種の、消滅。

彼は、それを願っている。そして、自らそうなるよう動いている。確かに、それは可能だ。そして人が死ねば、この星はまた命を育みだすだろう。正常な活動として。

理屈はわかる。世界にとって、人間は害悪として認識されてもおかしくない存在で。

「……だからって、簡単に殺したら、それは……！」

「そのためにお前を生み出した。たった一度だけ完成した、完全な人造人間。争わず、欲を持たず、平和を生きる種として」

自分の生まれはもう分かっていたし、受け入れている。

僕は僕で、ほかの誰でもない。ちょっと生まれが違っただけだ。

「それでも、僕は貴方の操り人形じゃない。そんな風に生きるのは、死んでいるのと同じだ」

「……やはり、人は人である限り、欲に囚われるのだな」

悲しそうに、彼が言う。

でも、どうして。貴方だって人間だったはずなのに。

どうしてそんなに、人を憎むんだ。

「私は、自然を愛している。世界を、この宇宙の全てを愛しいと思う。だからこそ、私は人を許せないのだ」

「それは貴方の勝手な感情だ！ 人間全てが貴方の思うとおりになんてならない！」

「人は消えるべき存在だ。篠ノ之束のフラグメントマップ代替理論を核にした人造人間たちが世界を動かし、この星を平和なものとする。その下地として、人を滅ぼし、私も消えよう」

確かに、星にとってはいいことかもしれない。だって、自分を壊す相手がいなくなるから。

だけど。それじゃ意味がないじゃないか。

彼の表情は見えない。ずっと、こちらを向かないから。

僕の事を見ないから。

そんなとき、声が聞こえた。

「随分と、勝手な言い草ですわね」

天井が吹き飛ぶ。

その爆風と共に現れたのは、灰色の塗装を施された機体。
鋭い視線が、ここからでも感じられる。

「お前を招待した覚えはないが」

「パーティーにジーンズで乱入するのが趣味なんですの」

ケラケラと嗤った乱入者、キティはそう言つて武装を構える。
その目は、敵意で溢れていた。

「お久しぶりですわね、お父様？」

「何が目的だ？」

「別にどうというわけではありませんわ。お兄様とお会いしたかったからですから」

「なら早々に失せるといい。ここにお前のベッドはない」
ボッド

「お兄様用のはあるのですか？」

「さてな」

一見丁寧な、けれどその実殺意と敵意と害意に溢れた言葉の応酬。
決して手は出さず、汚い言葉も使わない。だけど、そこには確かに言葉で言い表すことすら難しい憎悪のようなものが浮かび上がっていた。

「キ、ティ……」

「あ、ああ、申し訳ありませんお兄様！　こんな老いばれに構っている余裕などありませんでしたわね」

小さく呼びかけた僕に、キティが笑いかけてくる。
キティ、僕の妹。

血は繋がってないけれど、それでも僕の妹に変わりはない。

「こうして元気なお兄様のお顔が拝見できただけで、十分ですわ。
私は、またの機会にお邪魔致します。それでは」

「あ、ちよつ!？」

止める間もなくまくし立てたキティは、そう言って天井の大穴から去っていった。

一体何の用事だったんだろうと思っても、問う相手はもういない。と、突然彼が口を開いた。

「そろそろ、ここも終わる」

「え？」

「忌々しくも、やはり彼の天才の作り出した存在と同調する者たち相手に、人造では打ち勝てなかったか」

「なに、を」

言葉は、そこで詰まる。

突然鳴り出したレッドアラームが、僕の言葉を詰まらせる。

「今、自爆装置の電源を入れた。後一〇分、カウントダウン終了と共にこの基地は爆発する」

「なっ　!？」

「足掻け。私の娘。私の敵よ」

言い終えると共に彼の姿は消えた。

もともとホログラムだったんだろう、いた形跡がない。

って、今はそんなことよりも。

すぐにコンソールに駆け寄って、モニターを見る。確かにカウントダウンが開始されていた。

「みんな、今すぐ逃げて！　後一〇分経たずにここは爆発する！」

基地内全体に放送をかけて、携帯端末にできるだけデータを転送

する。

加速に専念すればこの基地はかんたんに抜けだせるから、そのぎりぎりまで。

でも、気がかりなのは。

モニターの一部に見えている、倒れたままのラウラだった。

第132話 対面（後書き）

キティはただ香織の顔が見たかっただけという。
さて、また自爆だよ！ 変わらないな！

第133話 根性（前書き）

ここに来て目を疑うサブタイトルだと、自分でも思った。

第133話 根性

意識の薄れかかったラウラの耳に届いたのは、けたたましく鳴り響くアラームの音だった。

時折体を襲う衝撃と耳を打つ金属音をかき消さんとばかりに響くそれが、ラウラの意識をほんの少し揺り起こす。

「自爆コマンド……、もう終わりですね」

小さく呟いたツヴァイの声が、ひどく遠くに聞こえた。

そう認識した直後に、また腹部に強烈な衝撃。蹴られたとわかったのは、鋼鉄よりも頑丈なその床に体をしたたかに打ちつけた後。

「ぐあ……！」

「あ、まだ生きてたんですか？」

呻き声を聞き取って、ツヴァイが嘲るように口走る。

ちかちかと明滅する視界は大きく歪み、すでに力を入れることすらままならない。

けれど、その意識は辛うじて自分を認識できるくらいには無意識の水面下より浮上していた。

「げほ、かはっ……！ やって、くれたな……！」

ISの補助機能をフル稼働させて、辛うじて立ち上がる。

たったそれだけの動作で、全身が痛みで悲鳴を上げていた。

いつそのことで倒れれば、どれほど楽なことか。けれど、それは出来ないのだ。

「すごいすごい、まだ立てるんですね」

「貴様をぶちのめすまでは、死なないさ……！」

「そうですか。じゃあ」

直後、ツヴァイの機体が加速する。

ただそれだけの、なんてことはない高速接近。通常の状態なら簡単に止められているであろうそれから繰り出された量産型ブレードの斬撃を、けれどラウラは止められない。

装甲の上から叩き込まれる衝撃に、ラウラはその端正な顔を歪め血反吐を吐き出す。

ぐらりと世界が揺れ、しかし。ラウラは倒れない。

必死の思いで床に踏ん張り、衝撃を受け流すことに専念する。

一年間、葵という常識の範疇に収まらない相手との組み手を繰り返していたラウラにとって、それ自体はさして難しいことではない。しかし、それを行っている今の状況を考えると、それはとんでもなく難しいことに変わっていた。

「ぐ、うう」

「あらら」

間接が悲鳴を上げ、動きを制限する。

それを無理矢理動かし、体が壊れるのも構わずに衝撃を受け流してきた。

まともにそれを受ければ、その瞬間体は壊れ、意識は今度こそ水底へとたたき落とされるだろう。

だからこそ、ラウラはいかな激痛があつたとしても、受けるわけには行かなかった。

目の前のふざけた相手の顔面に、その拳を叩き込んでやるまでは、決して。

「よく持ちますねえ……」

「悪いが、ここで倒れるつもりはないぞ」

「死に体が何を」

ツヴァイが言葉を詰まらせる。

その威圧感に。プレッシャーその重圧に。

単純に、冷静に、至極当たり前に考えて、ツヴァイはラウラに勝つだろう。

常識的に、それは当たり前のことだ。ぼろぼろのラウラに対して、全くと言っていいほど傷を負っていないツヴァイ。

二人の間に戦闘レベルの差はないのだから、結果は見えている。見えている、はずなのに。

（　なん、ですか、こいつ。こんな、なんで……！）

体がふるえる。

彼女は強く、それ故に無知だった。

『窮鼠猫を噛む』という言葉がある。文字の通り、追いつめられた者は死に物狂いで、たとえ天敵だとしてもその相手に喰らいついていくという言葉。

強すぎる故に、その状況に陥るまで相手が生きていたことがない。そして、実戦経験も実は大してないのだ。

なにせ、彼女が生み出されたのは一年前。アインが死んだ後にすぐ生み出された彼女は、初めから強すぎる力と状況ばかり与えられ、戦いをしなかった。

だから、知らない。

人は、追いつめられたそのときに最も強烈な力を発揮することがあることを。

否、否、知っている。知っているのだ、知識では。

しかし、知っているだけ。それだけでは、彼女はラウラとは相対

することはできない。

動けないはずだった。

ただ棒立ちになって、自分の攻撃を受け続けるだけだった。

その彼女が、変わっていた。

姿形は同じなれど、その気配はまるで別物。

「ふがない」

「なにを……！」

ぼつりとラウラの呟いた言葉に、ツヴァイは混乱する。

一度重圧に飲まれた彼女にとって、ラウラは未知数の『敵』だった。

「私は、まだ。こんなにも弱い」

唾が喉を通る音が、はっきりとツヴァイの耳に届く。

カタカタと、ブレードを持つ手と装甲が小刻みにぶつかり合う。

恐怖。それが、確かに彼女を蝕んでいた。

その感情は、その感覚は、決して彼女が感じることのなかったもの。あり得ざるもの。

「だから、お前を倒して」

「ひっ……！」

頼りない、かすれた声が漏れる。

それとは真逆の強い眼差しが、ツヴァイを貫く。

「とりあえず、一步目を踏み出させてもらおうぞ……！」

「この、死にぞこない！　ぐだぐだ言ったところで、も、もうあなたは私を倒すだけの力はない！」

死に体のラウラを前にして、ツヴァイは声を震わせて叫ぶ。
罵倒の色で取り繕った悲痛な声に、ラウラはただ目を細めて身構える。

気を抜けば意識が落ちるほどの激痛がラウラを襲う中で、それでも彼女は構えを解かない。

「なら、掛かって来い」

「ッ！　っああああああああああ！！」

もはや悲鳴といってもいい声を撒き散らして、ツヴァイは刃を手に加速する。

まるで子供が駄々をこねるようなその声を、ラウラは黄金の双眸と共にただ受け止める。

その、直後。

両手のプラズマブレードの出力が最大にまで跳ね上げられ、ブレードが振り下ろされるよりも早くツヴァイの胸を貫いていた。

「、わた、しは……！」

「……眠れ。もう、苦しむな」

一対の黄金瞳に悲しみの色を滲ませながら、ラウラが呟く。
その直後コアが壊れたのか、彼女の体がゆっくりと溶解していった。

「……私は、お前たちを背負って前に進むよ」

アドヴァンスド

遺伝子強化素体の成功体としての、ではない。
ラウラ・ボーデヴィツヒの覚悟の言葉だった。

「チツ、時間切れか！」

「なんだ、このアラーム！？」

「自爆だよ、自爆！ とつとと脱出しねーとおっちゃんじまうぞ？」

アラームを耳にしたグリムは、戦闘を中断して声を上げた。
その様子を見たナターシャがいぶかしげに言葉をかける。

「貴方は逃げるのね？」

「あたりめーだ。見逃してやる、とつとと逃げな」

虫でも追い払うように手を払って言ったグリムは、そのままどこかへと飛び去っていく。

あまりにも突然のことだったが、ファントム攻略戦でも似たような状況はあったため、とにかく外に出ることが先決だと考えた。

「でも、先に進んだラウラと香織は……？」

「香織が引つ張ってくるわよ。あの子、もう私たち束になっても勝てないでしょ」

「……それがマジだからなあ……」

一夏がぜはあー、と溜息を吐く中で、簪は少しだけ頬を染めていた。

香織が強いということが、彼女にとっては嬉しいことなのだろう。

一夏は首をかしげていたが、ナターシャはニヤニヤしながら簪のことをじーつと見つめていた。

「……な、なに？」

「んー？ べつつにー？」

「じゃ、じゃあじろじろ、みないで」

「うふふー、どーしよっかなー？」

「な、ナターシャ！」

「あはは、ごめんなさい簪」

「……ぶうー」

頬を膨らませてうなる簪の頭をなでるナターシャ。

その光景を見ながら、一夏は「急がなくていいんだろっか」という思いが募っていた。

第134話 脱出中（前書き）

戯言シリーズ成分&若干エロ要素あります。

第134話 脱出中

「ラウラ！」

かろうじて残っていた希薄な意識に、その声が響く。
ツヴァイを打破したラウラは、それで全ての力を使い果たしてしまっただけのようにその場に倒れていた。

「香織、か……？」

香織に抱きあげられ、ラウラは小さく笑みを浮かべる。
体が触れるだけで心が温かくなる自分に、現金だな、と心中でまた笑みを浮かべて。

「こんなにボロボロになるまで……。ごめん、僕がもう少し早く来れてれば」

「いや……。いい、さ。それよりも、脱出しなければ……。っ！」

自分で起き上がろうとしたとき、全身に恐ろしくなるほどの激痛が走り、思わず顔を顰めて呻く。

香織は無理しないで、と声をかけてラウラを横抱きに抱きあげた。

「こ、これは、俗に言うお姫様だつことという奴か？」

「まあ、そうだね。痛くない？」

「ああ。……いいものだな、うむ」

にへらあ、とだらしない笑いを零して、ラウラは腕の感触を楽しむことにした。

装甲がこすれ合ってしまうのがやや難点だが、細腕ながら鍛えら

れ筋肉の付いた腕に抱きかかえられ、ほんの少し役得なラウラだった。

部下から「お姫様だっこ」なるものの存在は聞いていたものの、今はまだ自分の方が強いだろうと考えていたラウラだったが、ぼろぼろになって心身ともにやや弱っていた今されたことで、すっかりその虜になっていた。

「それじゃあ、はやく脱出しよう。データも取ったし」
「そうだな」

ラウラと顔を見合わせて頷くと、香織は一気に加速を始める。しかし、一つ一つのブロックがかなり広いため、ともに進んでいるはとても爆破までに逃げ切ることはできないだろう。

「ラウラ、加速するけど、大丈夫？」
「ああ、PICはきちんと機能している。大丈夫だ」
「じゃ、いくよ！」

その掛け声の直後、『梟』のスラスターが全開になる。同時に、構成が変換され展開装甲になった背部装甲を開き、速度を上昇させる。

まだそれでも全開ではないというのに、時速三〇〇〇キロを突破した。

「なんて速度だ……」
「まだ上がるよ？」
「ま、まあ、それはまたあとで、な」
「ん」

いくら訓練したと言っても、マッハ五以上の世界には慣れていな

いだろう。

むろん、ラウラもそこまで出るとは考えていないのだが。

所々が崩壊しかけている基地の中を飛び続けていくと、やがてやんやんやと言葉を交わす一夏、簪、ナターシャの姿が見えてきた。

「みんな！」

「香織！ それに、ラウ、ラ？ 大丈夫か？」

「ラウラ……ずるい……」

「あらあらあー、嫉妬されるくらい愛されてるのねー」

まともにラウラのことを見ているのは一夏だけで、簪はラウラのことを嫉妬なのか羨望なのかわからない視線で見ているし、ナターシャはそれを見てにやにやといやらしい笑みを浮かべている。

そんな三人をざっと見て、そこまで深刻なダメージはなさそうだと判断すると、香織は小さく溜め息をついた。

考えてみれば、この戦いは壮大な親子喧嘩とも言えなくもない。

一応巖隆は香織を生みだした、云わば父親だ。その親と兄弟姉妹が揃って戦っているのだから。

しかし、息子であっても自分が彼の操り人形でないことは確かなのだから、それも悪くはないだろう。

「香織、そろそろ急がなければ」

「あ、そうだね。行こう皆」

「応」

「うん」

「はいはい」

ラウラの声に意識を戻して、香織は先陣を切って再び飛行を始める。

香織が抱きかかえているラウラはいいとして、三人はついてこれ

ているかと背後に意識を向けると、とりあえず当面落ちることはなさそうなので安堵のため息をついた。

幸いにして、目立った怪我をしているのはラウラだけらしい。これで三人も被害を受けていたらどうなっていたかわからなかったが、とにかく。

そのラウラも、船の医務室で治療を施して一晩もすれば全快するだろう。

ナターシャと葵、ベルに束。この四人が開発に携わった新型の治療用ナノマシンを投与すれば、全身がどれだけ傷ついても治せるのだ。

特にそれに貢献したのはベルだろう。

ベル・ル・ベルは元多重スパイで、しかもその多重スパイすら自分の楽しみである『破壊』を行うための隠れ蓑にすぎない。

スパイを引退した後は、スパイ時代に得た資金でクラッキングを悠々自適に楽しんでいたが、K・Kからの誘いがあつて『蜘蛛の巣^{エナ}』に入ったのだ。

彼女は、『破壊』に特化している。あらゆる存在を破壊できると自負しているが、その彼女も《奴ら》の一員である《害悪細菌^{グリーン・グリーン・グリーン}》には及ばない。

及ばないにしろ、それでも彼女はそれに次いでいるほどの『破壊』特化だ。ゆえに、壊せば壊れる場所を全て知り尽くしている。そして、知っているならその逆、補修や回復も行える。

彼女の破壊の知識とナターシャの軍用ナノマシンの使用経験、葵の超直感を纏め上げて束が作り上げたナノマシンは、それはそれは効力がぶっ飛んだものなのだ。

「しかし、あれは束の悪戯した外れに当たるとなあ……」

「あつはつは、私も一回当たったわよね。……その、そういうことになっちゃうわけで」

「……何の話？」

「さあ。僕も分からない」

「あー、俺もだ。何の話だ？」

「い、いや、なんでもない！ なっ！ ナターシャ！」

「そ、そーね！ ええ、なんでもないわよ少女！」

はあ……、と疲れた息を漏らしていたラウラとナターシャは、そんな三人の言葉に慌てて言葉を取り繕う。

そんな二人をいぶかしげに見ていた三人だったが、やがてそれもなくなる。

なんとか追求されずに済んだラウラとナターシャの二人は、互いの目に視線を合わせて、プライベート・チャネル個人間秘匿通信で言葉を交わす。

『……発情状態にさせるナノマシンを引き当てたなんて、言えるわけないだろうが』

『最初に当たったのが私でよかったわよ。もし他の子だったら慰めてあげるの大変だっただろうし』

『さらっとそういうことを言ってくれるな……。……はあ』

顔には出さずに溜息を吐いて見せたラウラに、ナターシャは柔らかな笑みを見せる。

束のお遊びでそう言ったナノマシンが混ぜられていた事があるのだが、もちろん間違いが起こらないようにしっかり束の管理下におかれているし、投与の時には葵か束、あるいはナターシャが傍にいたため危険はない。

ないのだが、引き当てた方はたまったものではない。

葵の時には苦しみごとくゆつくりと、柔らかな快感で気づかぬうちに鎮めてくれるし、ナターシャも女性と関係を持ったことは少なくないため、悦ばせる術を知っているから、そこまで問題ではない。

問題は、束に当たったときだ。

暇つぶしに開発した大人の玩具をしこたまつぎ込んでくる上に、そのどれもこれもが片っ端から性能がいい。

束が傍にいるときに引き当ててしまったナターシャは、生まれてから初めて、自分が死んでしまうかもしれないという恐怖すら抱くほどの快感を身に受けたほどだ。

無論、元に戻ったナターシャは束に拳骨を落としてから全ての道具を没収したのだが。

『……ところで、ナターシャ。以前お前の部屋を掃除したときに、箆笥の下の方に』

『ラウラあ……？』

『……わかった、わかったからそのぞつとするような猫撫で声を止めてくれ……』

ぞくぞくと体を震わせると、ラウラはそつと目を逸らす。そこには、ほんの僅かな恐れが混じっていた。

というのも、ラウラが引き当てたときに彼女を慰めたのはナターシャ自身である。そのときの情事を思い出してしまったのか、ラウラの頬は僅かに高潮していた。

『……ナターシャ、私も香織にもつと積極的に行った方がいいんだろっか』

『その辺は、自分のペースでやりなさい。おねーさんが口出すことじゃないわよ』

『……意地悪だ、ナターシャ』

『ふふん、おねーさんは厳しいのよ』

そんな会話が繰り返される中、一向は更に脱出を目指して飛んでいく。

既に、脱出を決定してから三分が経っていた。

「おい、見る！」

場所は変わり、各国上空。

そこでは、最新鋭の戦闘機たちが縦横無尽に飛び回り、ISと共にファントムの撃破に当たっていた。

その中で、一人のパイロットが声をあげる。
その視線の先には。

「ファントムが、崩れていく……！」

「これって、要するに……、俺たちの勝ちってことだよな！」

「あ、ああ……！　ああ、俺たちの勝ちだ！」

通信に割り込むさまざまな国の空の男たち。

そこからもたらされるいずれもが、ファントム崩壊と勝利を祝う言葉だった。

視界に収まっているのは、次々に爆発して崩壊していくファントム。それを祝うのは、男たちだけではない。

『やった、やったわっ！』

『今日はパーティーだな！　アタシが奢ってやる！』

「まじか！　太っ腹め！」

「俺たちも飲むぞーっ！」

「『『『『』』』』おーっ！』』』』」

次々に飛び込んでいる無線と開放通信オープンチャネルの混線に、無数の刃を自身の周囲に展開していた千冬は小さくはにかむ。

「まったく、二言目には酒か」

「いいんじゃないですか？ 彼らしくて」

苦笑して言った恋華が千冬の腕をとって抱きつく。
その恋華の髪を優しく撫で、千冬はまた軽く目を瞑って微笑んだ。

「さて、帰るか」

「……はいっ」

第134話 脱出中（後書き）

色情魔エロウサギの名を欲しいままにする束さん。
なんとなく作っただけで、他意はないそうです。

グリーン・グリーン・グリーン
《害悪細菌》は戯言シリーズに出てくる二つ名の二つ。
詳しくはwikiでどうぞ。

第135話 脱出！

侵入経路を逆走して飛び続ける香織一行は、ようやくアルファの待ち構えていた第二区画まで到達する。

ちなみに、グリムが待ち受けていたのは第三区画、ラウラが戦っていたのは第四区画である。

第二区画で待っていたのは、ボロボロになったシャルロットを介抱する鈴だった。

「香織、みんな！ 無事だっ……、ラウラずるい！」

「二言目にはそれかっ！ 少しは心配しっ、っぐう……！」

「だ、大丈夫ラウラ！？ 叫んだりしちゃだめだよ」

「いや、しかしだな……」

痛みに顔を顰めながら言ったラウラだったが、折れた骨が痛むのか、それ以上は言わずに口を嚙む。

そんな二人を置いて、一夏は慌ててシャルロットの元に近寄っていた。

「シャル！」

「大丈夫よ、眠っているだけ。随分ダメージを受けたから……」

「そ、そうか……。よかった、生きてて……」

大きく溜息を吐きだすと、鈴がシャルロットを抱き上げて一夏の腕に預ける。

そつとシャルロットを受け取った一夏は、眠っているシャルロットの姿を見てほっと息を吐いた。

「とりあえず応急処置はしたわ。後は船に戻ってからになるけど」

「ありがとう、鈴。シャルを助けてくれて……」
「仲間を助けるのは当然でしょ」

そう言った直後、鈴の姿が消える。

何事かと慌てふためいた一行だったが、その疑問は香織を背中から抱きしめた鈴の言葉によって明かされることになる。

「ふ、ふーちゃん！？　なんでそこに!？」

「んー……、やっぱりもう少しカオリニウムの補充がいるわね。うん」

「ふーちゃんってば!？」

「はいはい、説明するわよ。私、一回死んだの」

そうして鈴から語られたことを簡略するならば、「私、人間やめました」で合っているだろう。

語った鈴はあっけらかんとしているが、語られた方はたまったものではない。

香織はラウラをナターシャに預けると、厳しい目つきのまま無言で鈴の体を調べ始める。

「きゃっ、ちょ、かお、りい!？」

「ちよっとじつとしてて、怪我してたら大変」

「いや、だ、大丈夫だって、ばあっ……!」

香織としては本当に鈴のことが心配で心配でたまらないのだが、やられている鈴はと言えば顔を真っ赤にして、けれど嫌がっている風ではなかった。

誰か止める、と鈴が無言の威圧感を醸し出しながらも、それを止める者はおらずに、やっぱり愛した弱みには勝てないのかと鈴が諦めかけたその時、その声が響く。

『カオリ、落ち着いてください。鈴は傷一つ負っていません』

「い、イヴ……！」

「あ、う、うん。ごめんね、ふーちゃん」

突然響いたイヴの声に促され、香織はやや慌てたようにして小さく頭を下げる。

一度死んだと聞いて動揺していたのだろう、香織自身どうしてあんな行動に出たのか理解できていない様子だった。

鈴としては、咄嗟にそういった行動に出てくれたことが嬉しくないわけがない。頬を染め恥ずかしがりながらも口を開く。

「別にいいわよ。……嬉しかったし」

「え？」

「な、なんでもないっ！」

詰まりつつもそうごまかした鈴は、まだ紅潮している頬を、装甲を量子変換した素手で抑える。その手のひらから、はっきりと熱が伝わってきた。

「……さ、さつてと！ それじゃあとつとと脱出しましょうか！ 箒とセシリアも待ってるでしょ！」

「そうね。一夏君、シャルロットちゃんを離さないようにね」

「は、はいっ」

「それと香織君、ラウラちゃんは私が運ぶわ。一番戦力になるのは多分香織君でしょ」

「はい、わかりました」

キリツと顔を引き締めたナターシャが努めて明るく声を張り上げると、ラウラを両の腕でしっかりと支える。

自身を抱く相手が想い人ではなくなってしまったラウラは、やや残念そうな顔を見せながらも仕方ないかと意識を切り替えた。

鈴も同じように火照った意識を無理やり醒ますと、呼吸を整えて加速の体勢に入る。

直後、全員が全く同じ速度で大気を裂く。

脳内に保管した残り時間を示す時計が四分を切っているのを『見て』、香織は小さく舌打ちを響かせる。

急がなければ爆発に巻き込まれる。自分たちは大丈夫だろうが、ダメージの著しく大きいラウラやシャルロットは無事では済まないだろう。

最悪の場合は《バードエイクとりのさえずり》のフル稼働も視野に入れて動くべきか。

香織は頭の中で次々に浮かぶ選択肢を取捨選択しながら進んでいくと、一行の動きが止まる。

そこにいたのは、血に濡れた箒と息も絶え絶えになっているセシリアだった。

「箒、セシリア！ 二人とも大丈夫！？ 」

「ん？ ああ、香織か。安心しろ、これは返り血だ。セシリアも体力を削られただけで大事無い」

「そつ、ですわ……。ふう……」

冷静に答えた箒は、疲れきっているセシリアの装甲だけを量子変換させてからそつと抱き上げる。

その動作には全くと言っていいほど躊躇いがなく、この二人が真に愛し合っていることを窺わせた。

まあ、その後に熱い口付けまで交わされれば、誰だってわかることだが。

「……二人とも、そういうのはアタシたちのいないところでやんな

「さいよ」

「何か問題があるか？」

「そうですね。わたくしも頑張りましたの、ごく褒美くらい欲しいです」

「……あー、もういいわ」

「はあ、と溜息を吐いて、きょんとしている二人から意識をはずす鈴。

他の面々もそれぞれ思い思いのリアクションをしているが、二人は大して気にも留めずに皆の元へとやってきた。

「さて、それでは脱出するか」

「これで全員、早くしよう」

やや焦るように香織が告げる。

と言うのも、すでに今のやり取りの間に残り時間が三分を切ったのだ。もたもたしてはいられない。

そのことを聞いた一行は、全速力で退避ルートを飛び去っていった。

その、二分五〇秒後。

噂に名高い世界最高峰の山、エベレストが、木っ端微塵に吹き飛んだ。

ぎりぎりで脱出が間に合った面々は、崩壊していくエベレストをハイパーセンサーで捉えながらも、半ば信じられないと言う風にそれを見つめている。

「……山一つ、丸々吹っ飛んだわね」

「あそこにいたら……、私たちも同じ目に遭った……」

「一応データは回収したし、……まあ、あの人には逃げられたけど」

頬を引きつらせながら崩壊するエベレストを眺めている中、香織が少し悔しそうに呟いた。

と、その香織の背中を鈴がパンパン、とはたく。

「データが手に入っただけで十分よ！ どうせこうなったらもう何もできやしないわ」

「鈴ちゃん、軽視と油断はミスの元よ。世界をこれだけめちゃくちやにした相手なんだから尚更」

「分かってるわ。けど事実そうじゃない？」

「確かに、基地も吹っ飛ばしたしな。……まあ、ここが本当の基地じゃないって可能性もあるけど」

一夏の言葉に、鈴はうんざりしたような顔を見せる。

確かに、散々苦勞させられた拳句に人間辞めてまで踏破した場所が本拠点ではありませんでした、なんてことはあつて欲しくはないが、あの相手では十分あり得るだろう。

そんな言葉を交わしていると、一行の仮想ディスプレイが開き、そこに嬉しそうなベルと微笑んだ束の姿があつた。

『すごいすごいすごい、すっごーい！ 最高よ皆、あのエベレストを吹き飛ばすなんて！ 私思わずイッ』

『黙りなさい』

「ごしゃ、と言う音で、目を輝かせて涎すら垂らしていたベルの顔が消える。

上から振り下ろされた、鮭を喰えた木彫りの熊が彼女の頭を襲ったのだと気づくのに、数秒。

おそらくやったのは空だろうな、とナターシャ辺りが思いをはせていると、束が変わらぬ微笑みで口を開く。

『皆、お疲れ様』

「束ちゃん。ごめん、あの人は逃しちゃった……」

『いいよ、皆が無事なだけで！ 早いとこ戻ってきてね、パーチーの準備しとくから！』

「あ、一応手に入れたデータを送っとくから、解析よろしくね」

はい！ と嬉しそうな声を最後に通信が途切れる。

香織は手元の仮想ディスプレイを操作して手に入れたデータをハルへ送信し終わると、もう一度エベレストに視線を投げかける。

入り口は中腹辺りにあったものの、爆発はエベレストのほぼ全てを消し飛ばしており、もはや登頂も何も考えられない程度にぶっ壊されていた。

「……僕らのせいじゃないよね」

「違うでしょ。たぶん」

「……違う、と思う……」

鈴と簪が自信なさげに言った言葉は、少し肌寒い風に乗せられていずこかへと飛んでいく。

まだ脅威が完全になくなったわけではないが、それでもあのファントムへの対抗手段ができたことで、世界も幾分か平穏を取り戻すだろう。

そんなことを考えながら、香織はそつと微笑んだ。

とりあえず今は、帰ってパーティーを楽しむとして。

難しいことはその後でいい。

第135話 脱出！（後書き）

エベレスト爆 散！

第136話 ふたたびのんびり開始します！

エベレスト爆散事件から早三日。

僕らはいまだ湧いて出てくる無人機と闘いながら、大海原を突き進んでいた。

事件が完全に終結したなら家に帰ることも考えたいけど、生憎とまだ事件は終わっていない。

終わってはいないけれど、そう気を張ることもない。空が自分で開発した艦載兵器がつい先日マスターアップしたから、それを使ってベルが乱舞している。

「おはよー……」

「おはようございます、ナターシャさん。ご飯はもうちょっと後ですよ」

「んー……、まだ眠いわぁ……」

「何時に寝たんですか？」

「五時半……」

目をこすりながら言ったナターシャさんはYシャツしか身に着けていない。

女がほとんどのこの船の中で、ナターシャさんやお姉ちゃん、束ちゃんと言った大人勢はめちゃくちゃガードが緩い。

K・Kとかクレイマンとかマックとか一夏とか、あと僕とか。

男もいるって言うのにな。

一番テンションあがってるのはK・K。なわけですが。僕と一夏はお互い姉で慣れちゃってるしさ。

「もうちょっと睡眠時間とらないといけませんよ。三時間も寝てないじゃないですか」

「んー、がんばるわー」

「ご飯になったら呼びますから、もう少し寝たらどうです?」

「……そうするわね」

あったまいてー、なんて呟きながら歩いていったナターシャさんの背中を見送りながら考える。あの様子から言って、昨日はずっと飲んでいたんだらう。まったく。

今日の予定は、お昼過ぎにギリシャの港に入って千冬さんたちと合流するくらい。のほほんさんたちも一緒にいるらしくて、お迎えには僕と簪ちゃん、そしてナターシャさんが向かう。他の人は船の警護と買い出しなんだそうだ。

といっても、今の時刻は八時を少し回ったくらい。お昼過ぎにはまだまだ時間がある。

朝食は九時と決まっていて、昼食は一二時半くらい。今日のお昼は各自で取ることになるだらう。

「香織様」

甲板で少しボーっとしていると、BCの制服の裾を引っ張られる感触とともに、そんな声が聞こえた。

視線を下に向ける。見えるのは、黒く長い髪と、小さなBCの制服。

「どうしたの、空?」

「やることはありません」

「……ようするに暇なんだね」

はい、と答えた空は、じーっとこちらを見続けている。

穴が開きそうなほどの視線に耐えきれず、僕は仕方なくしゃがみ込んで空と視線を合わせた。

「それで、何かやりたいことでもあるの？」
「……ん」

両手をこちらに差し出してくる空。

このポーズは、まあそういうことなんだろう。

両脇に両手を差し込むようにしてぐっと持ち上げると、肩に顔を預けるようにして彼女を抱える。

「これでいい？」

「はい」

小さく笑って、空は僕の胸元へ額をこすりつけてくる。

嬉しそうなその様子に、なんだか猫みたいだなと笑って、小さく頭を撫でておく。

元々この船に乗っていた面々の中で、空だけはハルとイヴから素性を聞かされている。

なんでも束ちゃんが気まぐれに拾った孤児らしくて、束ちゃんの技術を叩き込まれた後に『蜘蛛の巣スパイダーウェブの巣』に放り込まれたんだとか。

命の恩人の束ちゃん以外には懐かないしあまり喋らないって言うてたんだけど、なぜか懐かれました。

僕が寝てるとき、暇な時には僕のことを見ていたみたいだし。

しばらくの間、空を抱き上げたまま甲板でボーっとしていたけど、そのうちに食事を支度する時間になっていることに気づいて、空を肩に上げて中へと入っていくことにした。

食事を終えてしばらく。

「よし、準備完了ね！」

「香織、これは初めて……」

「まあ大丈夫だと思うけどね」

ギリシャの港町パトラの棧橋の上で、巨大な戦艦を見上げながら、僕と簪ちゃん、そしてナターシャさんは一足先に町中へ向かうことになっていた。

それにしても、この綺麗な港町に戦艦って似合わないなあ……。

「それじゃ、皆。行ってきます」

「はい、行つてらっしゃーい！」

満面の笑みで手を振る束ちゃんの声を背中に受けながら、僕らはBCの制服に身を包んでパトラの町を歩いていく。

潮風のいい匂いがする、んだけど。正直言つて飽きた。

そりゃあずーっと海にいたしねえ。

「そう言えば、香織君が目覚ましてから、町に来るのは初めてね」「リハビリは……いいの……？」

「もう大分戻ってきたって言うか、お姉ちゃんに付き合わされたせいで前よりも少しだけ強くなってるかな」

お姉ちゃん、嬉しいのは分かるけど模擬戦の相手に僕を指名しないで欲しかったなあ……。

ま、翌日は筋肉痛だったけど、体の調子は戻ったし。元々僕、回

復早いからね。

そういえば、僕が作られた人間だっていうことは何人が知ってるんだろ。後でお姉ちゃんに聞いておこう。

「相変わらず葵ちゃんはお鰯目ねえ」

「あの人はもう、人の枠に収まってたらいけない気がする」

辛口なコメントありがとうございます、簪ちゃん。

なんてことを話しながら歩くこと三〇分。辿り着いたのは、小綺麗な小さいホテル。

そのホテルの前に立っている人たちを見て、思わずほっと息を吐いた。ここでまた厄介ごとがあったりしなくてよかったな、みたいな意味で。

「千冬さん！」

「一之瀬……、無事だったようだ。ナターシャも簪も」

「久しぶりです、千冬さん。皆も久しぶり」

「お久しぶり、です……」

ぺこりと頭を下げ、それから千冬さんの横に並んでいる面々を見る。

山田先生に恋華さん、フォルテ先輩にダリル先輩にサラ先輩、虚先輩に。

「のほほんさん……」

「かおりん……」

「よかった、また会えた……！」

のほほんさん、布仏本音。

涙を堪え、彼女をぎゅっと抱きしめる。一年前と変わらない感触

に、僕はやつと戻ってきたんだと実感する。

「本音……よかった、無事で……」

「かんちゃんも、よかったよぉー……！」

少し隙間を空けて、簪ちゃんものほほんさんを抱きしめる。

ぐすぐすと鼻をすするのはほんさんを、簪ちゃんは何度も何度もその頭を撫でて微笑んでいた。

「感動の再会って奴ね。落ち着いたら船に戻りましょ」

「束の奴が迷惑をかけているだろう。すまん」

「うっん、そうでもないわ。楽しくやってるから」

「うう、涙があ……」

「真耶先生、鼻水鼻水」

「うう、ず、ずびばせん……」

……最後の方がカオスだったんだけどね。

二〇分ほどして船に戻った僕らは、お姉ちゃん用のISを開発している束ちゃんの元へと訪れていた。

ダリル先輩、サラ先輩、フォルテ先輩、虚先輩にのほほんさんのことをじじーつと見つめながら、ふと束ちゃんが口を開く。

「うん、合格！ 私は篠ノ之束、敬意と愛嬌とエッチな気持ちを持つて束ちゃんとお呼びなさい！」

「……束ちゃん、最後の一個はいらないと思うよ」

「えー？ 初対面はインパクトが大事なんだよ！」

「束ちゃんにこれ以上インパクトをつけたらサードインパクトじゃ済まないよ！」

あまりにぶっ飛んだ自己紹介にぽかんとしている皆を置き去りに、

僕と束ちゃんがあーでもないこーでもないと言い争う。
と、そこに千冬さんの声が響いた。

「束、こんなにまともにも自己紹介ができるようになったんだな……」

「……え？」

まとも、まとも？　これが？

いや、たぶん千冬さんは散々束ちゃんに引つ張りまわされたせいで、感覚が麻痺してるんだろう。

「千冬さん千冬さん、これはまともじゃないと思います」

「はっ……！　……すまん香織、少し混乱していた」

「いえいえ。ところで、何で名前呼びなんですか？」

「学校ではないからな」

ああ、そういうことですか。

つと、話を戻そう。

「束ちゃん、本題本題」

「あ、そーだった。束さんともあろうものが雰囲気に乗せられていたぜ……！」

「いや、そういうのいいんで」

「あ、そう？　えっとねー、とりあえず皆バインド・カンパニーに入ってもらいます！　そうした方が他からの介入されなくていいしね！　根回しはネット経由で終わってるから心配なくていいよん！」

にまあ、といやーな笑みを浮かべた束ちゃん。

しかし事実である。ただでさえ暗部である恋華さんを個人的な味

方につけた千冬さんは、単独の戦闘力も尋常じゃない。

その千冬さん一行を、このどさくさで自分の手元に引っ張っておこうという束ちゃんの独占欲の表れだとは誰も思わないだろうけど。もう所属がどうか言っていられない状態だしね。

「で、だっちゃんにふおるちんにおっぱい魔人のISは改造して、さっちんとうっちゃんとのほほんちゃんのは私が直々に作ってあげよう！ 戦闘用じゃない奴！」

「束博士、私のその愛称すっごく影薄くなりそうなんだけど」

「え？」

「え？」

「なにそれこわい」

サラ先輩がわりと冗談じゃないよ、見たいな顔で凄んでいるけど、束ちゃんはこのと決めたら変えないからなあ。

ちなみに、だっちゃんがダリル先輩、ふおるちんがフォルテ先輩、おっぱい魔人は山田先生、さっちんがサラ先輩、うっちゃんが虚先輩、のほほんちゃんは、いつもどおりのほほんさんです。

「滅茶苦茶っスねー……もう慣れたっスけど」

「慣れたら駄目じゃねーの」

「おっぱい魔人はやめてくださいーい！？」

「……本音、これは現実よね」

「お姉ちゃん、気確かにー」

聞こえない。疲れきった若人たちの言葉なんて聞こえないんです。

第136話 ふたたびのんびり開始します！（後書き）

さて、のほほんさんのラブコメとかカミングアウトとか、いろいろ書くか。

第137話 平穩（前書き）

停電で一回吹っ飛んだ。

我が家のブレーカーは貧弱さんです。

第137話 平穩

香織たちが船で再会を喜んでいる頃から少し経ち、鈴たちは買出しへと向かっていた。

買出しのメンバーは一夏、鈴、シャルロット、ラウラ、そして一行の保護者として葵が付いている。

と言っても、買い物はほとんど済ませてしまっているため、一夏はシャルロットに手を引かれて別行動をとっていた。

三人ともその意味するところは理解しているため、シャルロットに口々に声援を送って、シャルロットがさらに燃えたのは余談である。

「はい、二人とも」

「え？ あ、ありがとうございます、義姉さん」

「ありがとうございます、義姉上」

買い物をして回って、疲れた足を休めようとベンチに座った二人に、葵が炭酸の缶を手渡す。

ひんやりとした感触に少し驚いたものの、二人は笑ってそれを受け取った。

かしゅっ、という缶独特の音を立てて開けると、中身を喉に流し込んでいく。疲れて火照った体が冷やされるのを感じて、鈴はゆっくりと目を細めた。

「随分……、遠くまで来たわね」

「……そう、ね。最初はここまで大事だなんて考えても見なかった」

「だが、もうすぐ終わる。きっと」

「そうね。うん、きつとそう」

。

ベンチの後ろから鈴とラウラの頭をぎゅっと抱きしめた葵は、そう言って微笑む。

暖かなその感触に頬を緩めかけた鈴だったが、同時に頬に押し付けられるそのたわわに実った豊満な果実に気が付いて、少しだけ手に力を込める。

そつとベンチの端に缶を置くと、その胸へ手を埋もれさせる。

「ひゃんっ！？　ちょ、鈴ちゃん！？」

「……ずるいわ、どうして一切しか変わらないのに、こんなに差があるのよ！」

「あつ、ちょ、鈴ちゃん！　やつ、そこよわっ……！」

ぐいぐいと指を沈めていると、だんだん鈴の頬が赤く染まってくる。

感触がよすぎるのか、それとも必死に声を抑えている葵の様子に興味しているのかは知らないが、少なくとも普通ではない。

「……香織とはこんな、ちょっと危ないおふざけもできないのよね」「香織としたいの？」

「ぶふう！？　い、いや、そういうことじゃなくて！？」

「いいわいいわ、べつに隠さなくても。そういうことに興味のあるお年頃でしょ？」

「そういうことというのは、つまり性交渉のことか？　義姉上」

男子中学生の夜中のテンションのようになっていた鈴と葵の会話に、至極冷静に割って入ってきたラウラに、葵は微笑みを浮かべながらうなづいた。

「姉が許すわ、食べちゃいなさい」

「ちょ、義姉さん何言ってるのよ！？　アタシたちにはまだ早いっ

て言うか、まだきちんと答えてもらってないって言うか……」

「そんなん、三人まとめて世話になればいいだけじゃない」

「でもでも、アタシはもう人間じゃないし……」

「うちにまともな人間はいないから安心しなさい。むしろ鈴ちゃんだけ普通でも困るわよ、いろいろ」

でもあ……、と鈴が珍しく弱気になっていると、そのうちにふと気づいた。

鈴の体はISと一体化している。ゆえに量子化も自由自在、データで弄くることも可能である。

ならば、と。

「……義姉さん、ちよつと消えるね」

「え？」

疑問を口にする間もなく、鈴の姿が消える。量子化して周囲から観測できない状態へと変化したのだ。

なにごとかといぶかしんでいると、数秒たってから鈴が再び姿を現す。

「どつっ!？」

「……いや、どう、と言われてもな」

何かが大して変わったようにも見えない鈴を見て、ラウラは苦笑いしながら答える。

ところが、葵は何かに気づいたように目を見開くと、がしつ、と目に見えないほどの速度で鈴の胸部を鷲掴んだ。

「……やっぱり。鈴ちゃん、胸大きくしたわね!」

「は？」

「ふっふっふ、大正解！ 量子化して胸のデータを変更、これなら香織のあらゆる要求に応えられるわ！」

「素晴らしい、素晴らしいわ鈴ちゃん！ 子供ができるのも時間の問題ねー！」

「あ、義姉上、こんな往来の場でそのようなことを言っな！？」

ラウラがこれ以上ないほどに顔を赤らめているが、そこはそれ。真っ赤になったラウラを抱き上げて頬ずりしながら、葵は鈴を肩車して肩に乗せる。

「さて、それじゃあ家族サービスと行きましようか。一夏君たちは別行動で船に戻るみたいだし、私たちもこのまま船に戻りましよう」
「あ、義姉上、降ろしてくれ！」

「んー？ なんでよ？」

「それは、その！ ……は、恥ずかしい、ではないか」

言葉尻をすばませて言ったラウラへ向け、葵は優しい柔らかな笑みを浮かべる。

「恥ずかしがることはないわ。私たちは家族じゃない」

「だ、が、そのだな……」

「鈴ちゃんを見てみなさいな。こんなになって」

そう言って自らの頭上を指し示す葵。

言葉通りにラウラが視線を向けると、そこにはべちゃあ、とても言いそうなほどにリラックスした鈴が乗っかっていた。

その様子に苦笑いしていると、ぎゅっとラウラの頭が葵の胸へ押し付けられた。

「たんと甘えなさい。妹は姉に思う存分甘える権利があるのよ」

「……ん」

今まで感じたことのない、暖かさ。
香織といるときとはまた違う温もりに、ラウラは静かに目を閉じる。

そんなラウラを見ながら、葵は静かに微笑んだ。

「さあ、帰りましょうか」

一之瀬家長女、一之瀬葵。

彼女に妹ができるのは、そう遠い日ではないかもしれない。
しかも、複数。

「それで、かおりん。お話ってなーに？」

夜。

皆が帰ってきた少し後に、僕はのほほんさんを、本音ちゃんを自室へ呼んでいた。

他の人へは、お姉ちゃんと千冬さんが今頃僕のことを話してくれているはずだ。それと、僕が作られた人間だってことも。

千冬さんには束ちゃんから伝わっていたらしくて、僕もそのとき初めて、束ちゃんが僕の出自を知っていることを知った。

お姉ちゃんは少し難しい顔をしていたけれど、それでも、僕が決

めたのならそれでいいと言ってくれたから。

この結果僕が拒絶されても、それは甘んじて受け止める。守りたい気持ちは、それでも変わらないだろうから。

「えっと。とりあえず、座ってもらえる？」

「はい」

備え付けの小さな椅子に腰掛けてもらって、それからテーブルに置いてあるお茶を勧める。

それを飲み込んで落ち着いたところで、僕のほうから声をあげることにした。

「まず、最初の話から。僕は、男だ」

「……はええ？」

いきなりの話で全く混乱しないはずがない。

というか、この少女はむしろ全く混乱しかしていなかった。

そりゃあそうだ、半年以上一緒に生活してきた相手の性別が逆だったんだから。

そして、それは一つの異常事態がもう一人当てはまっていることも意味する。

男性のIS操縦者。一夏と同じ、全くのイレギュラー。

「落ち着いて理解して。だましていてごめん」

「……ん、んー、ん。わかった、かおりんがそという風に真面目なときは、嘔吐かないときだから」

本当に理解したかどうかは分からないけれど、本音ちゃんはその言ってにっこりと微笑む。

暖かなその微笑みに、僕の知らずに強張っていた心が、ゆつくりと解けていく。

やはり、秘密を暴露するのは緊張する。その証拠だった。

「それでえ、最初って事は次もあるのお？」

「うん。僕は、普通の人間じゃない。人に作られた、言ってみれば人造人間みたいなものなんだ」

これ話すのは、本当はいらないかもしれない。

だけど、半年間一緒に過ごしてきた彼女には。

今別の場所で、これから一緒に戦う仲間たちには、友達には。知っておいて欲しかった。

別に、それがなんだって話じゃないけれど。

「ふーん。……それで、それだけえ？」

「え？」

思わず声が出た。

いや、それだけ、って。それだけだけど、そうじゃないだろ。

違う反応を期待して、否。恐れていた僕は、思わずその言葉を上げて。

それからそうか、と納得した。

布仏本音という少女は、人よりずっとおっとりしていて、ちょっとズレていて、人間として出来ているような女の子だ。

そんな子が、僕の秘密一つ握ったくらいで、右往左往するようなことは、ない。

少なくとも、僕の知っている本音ちゃんは、のほほんさんと呼ばれていたこの子は、そうじゃないから。

「……えっと、ごめん。隠してて」

「……ていつ」

ぺしっ、と。彼女の細い指で額を叩かれた。
デコピンをかました彼女は、にしし、と笑うように頬を吊り上げている。

「これで、おしまい。かおりんが誰だって、かおりんがなんだって、私には関係ないよー？」

「本音ちゃん……」

おしまい、ということとは、この話はこれで終わりってことだろう。まったく、この子は。

いや、僕の周りの女の子は、女性は、ことごとく僕よりも強いんだ。少しくらい、僕にも男を意地を晴らせて欲しいものだ。

と。本音ちゃんがすっと立ち上がった。

「んっ」

本音ちゃんは少しだけ頬を赤らめると、突然僕の唇に、一瞬のキスをする。

何が起きたのか、というか何をされたのか。
理解はしているけど、なんだかびっくりしてしまった。

ああ、そういえば目を覚ましてからのファーストキスだったりするな、これ。

「でも、少しだけ良かったって思う。かおりんのこと、私好きだから」

「え？」

意味を理解しているだけに、こんな反応しか出来ない自分が恨め

しい。

好き、うめぼれじゃないならたぶん、愛しているという意味。
そんな言葉を、僕はまた向けられてしまった。

「愛してる、かおりん。ううん、香織君」

ぎゅっ、と。僕の顔を胸に抱いて。彼女が言う。

それからぱつと放して、本音ちゃんはトコトコと僕の部屋から逃げように去っていった。

……えーと、その。

どうやら僕に、四人目の許嫁が出来そうな予感です。

第137話 平穩（後書き）

心理描写もっと増やしたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252s/>

願いの空へ

2012年1月14日20時49分発行